

楊家将物語の研究

田淵欣也

楊家将物語の研究

目次

序	…	1
第一部 小説と史実	…	8
第一章 『楊家府世代忠勇通俗演義傳』について—虚構と史実の間で—	…	9
一、楊家将物語の発生と発展	…	9
二、史実との関わり—楊令公を中心として—	…	17
三、楊家の周辺人物	…	24
四、豪傑達の活躍	…	30
五、巾幗英雄	…	36
六、楊家将と戯曲	…	44
おわりに	…	53
第二章 北漢時代の楊業とその周辺	…	62
はじめに	…	62
一、劉繼業時代	…	62
二、楊業の一族	…	70
（一）楊業の息子について	…	70
（二）楊業の父について	…	71
（三）楊業の弟について	…	72
おわりに	…	73
第二部 楊家将雑劇	…	81
第一章 「謝金吾」雑劇について	…	82
はじめに	…	82
一、「謝金吾」概略	…	82
二、「謝金吾」における女性の活躍—佘太君と長国姑—	…	86
三、裁判と改扮の関わり	…	92
おわりに	…	93
第二章 楊家将における“私下三関”のモチーフについて	…	98

はじめに …	98
一、「謝金吾」の“私下三関”について …	98
二、「黄眉翁」について …	101
三、薛仁貴物語におけるケース …	105
おわりに …	109
第三章 楊家将雑劇から見る習俗と時代背景 …	116
はじめに …	116
一、「昊天塔」の作者について …	116
二、「昊天塔」より見る習俗 …	118
三、「開詔救忠」より見る習俗 …	123
おわりに …	126
第四章 楊家将物語と『水滸傳』 …	131
はじめに …	131
一、先行研究について …	131
二、楊家将雑劇と水滸戯の比較 …	134
(一)「破天陣」 …	134
(二)「九宮八卦陣」 …	137
おわりに …	142
結び …	147
資料：楊家将雑劇訳注 …	149
八大王開詔救忠臣 …	150
昊天塔孟良盜骨 …	227
焦光贊活拿蕭天佑 …	265
謝金吾詐拆清風府 …	302
黄眉翁賜福上延年 …	345
楊六郎調兵破天陣 …	380

序

楊家将の物語¹とは、北宋時代に活躍した楊業らをモデルに、楊繼業（令公）や楊延昭（六郎）ら楊家が代々北宋に忠義を尽くし、親が死ねば子が戦い、夫が死ねば妻が戦うという、一族の絆の物語である。そして、遼や金という強大な異民族国家からの脅威にさらされていた宋代の現実が生み出した、民族主義的な愛国物語でもある。日本では『三國志演義』や『水滸傳』などと比べてあまり知られてはいないが、中国ではこれらと同様、あるいはそれ以上の知名度を誇っている²。

楊氏一族の活躍が小説にまとめられたり、雑劇などの演劇に取り上げられたりしてきたことについてはこれから本論で述べていく通りであるが、こうした流れは、決して過去の出来事だけにとどまるものではない。特に演劇の世界においては豊富な素材を提供し続けてきたのであり、京劇を始めとして今日上演されている演劇の中でも、楊家将に関する演目が占める比重は大きく、楊門女将と呼ばれる巾幗英雄³の活躍を描くものはとりわけ人気が高い。

ここで、楊家将物語が古くから人口に膾炙してきたことを示す幾つかの傍証を見てみよう。まず無名氏による「漢鍾離度脱藍采和」雑劇（古名家本）の第一折に、藍采和と鍾離權による次のようなやり取りがある。

（正末云）我數幾段師父聽咱。（唱）【油葫蘆】甚雜劇請恩官望着心愛的選。（鍾云）你這句話敢忒自專麼。（正末唱）俺路歧每怎敢自專。這的是才人書會剗新編。（鍾云）既是才人編的、你說我聽。（正末唱）我做一段于祐之金水題紅怨、張忠澤玉女琵琶怨。（鍾云）你做幾段脱剥雜劇。（正末云）我試數幾段脱剥雜劇。（唱）做一段老令公刀對刀、小尉遲鞭對鞭。或是三王定政臨虎殿。（鍾云）不要、別做一段。（正末唱）都不如詩酒麗春園。【天下樂】或是做雪擁藍關馬不前⁴。

藍采和 幾つか道士様にお聞かせしよう。（唱う）

【油葫蘆】

“どの雑劇でもあなたが見て気に入ったものを選んで下され”

鍾離權 随分自信たっぶりな口ぶりだな。

藍采和（唱う）

“我ら芸人がどうして自信たっぶりでしょうか”

これは確かに才人書会の最新作”

鍾離權 才人が作ったものならば、聞かせてみよ。

藍采和（唱う）

“私は「干祐之金水題紅怨」や

「張忠澤玉女琵琶怨」をしよう”

鍾離權 幾つか武劇をしてくれ。

藍采和 幾つか武劇をしてみましよう。（唱う）

“「老令公刀對刀」や、「小尉遲鞭對鞭」をしようか

はたまた「三王定政臨虎殿」か”

鍾離權 だめだ、他のものをしろ。

藍采和（唱う）

“「詩酒麗春園」が良い”

【天下樂】

“それとも「雪擁藍關馬不前」をしようか”

「藍采和」雑劇は、鍾離權が芸人の藍采和を仙界へ導いて解脱させるという筋書きを持つ、いわゆる度脱劇の一つであり、正末が藍采和に扮する。引用した部分は、天から下界へやって来た鍾離權が藍采和のいる芝居小屋を訪れて、何か演じて見せるように言う場面である。ここで藍采和によって挙げられている一連の雑劇は、ほぼ全て、元代の劇作家の経歴や作品を記した『録鬼簿』において関連する題名を見出すことができるか、そうでなくとも当時の人々によく知られていた故事を背景としている。

その内で注目したいのは、「老令公刀對刀」である。老令公とは楊繼業のことで、元・明代の楊家将ものの雑劇においては金刀や金刀教手などと綽名されている。現存する楊家将雑劇の中にはこの「老令公刀對刀」は含まれていないが、その題名から、楊繼業が刀を振るい、恐らくは同様に刀の使い手である相手と渡り合うという内容であったことと想像できる。そして、鍾離權から武劇⁵を見たいと求められた藍采和が真っ先に挙げるのが「老令公刀對刀」であるということは、この雑劇ならば観衆を満足させられるという目算があったはずであり、その背景としては、当時の人々に老令公、ひいては楊氏一族の物語が広く知られて受け入れられていたという状況があったと見るべきである。

続いて、關漢卿による「狀元堂陳母教子」雑劇（内府本）第三折には、次のようなやり

取りが見える。

(大末做吃酒科、云) 問將來。(三末云) 吃酒的是誰。(大末云) 是狀元郎。我問你、把盞的是誰。(三末云) 把盞的我是楊六郎。

陳良資 (酒を飲むしぐさをする) 尋ねてみよ。

陳良佐 酒を飲んでいるのはどなたでしょうか。

陳良資 狀元郎だ。酒をついでいるのは誰か。

陳良佐 酒をついでいるのは楊六郎です。

この場面の背景として、正旦が扮する馮氏は三人の息子を毎年順番に科挙受験させ、長男の陳良資と次男の陳良叟は状元となったが、三男の陳良佐は第三位止まりであった。陳良佐は二人の兄が状元となった時、自分の方が優れていると言って拝礼をしなかったのに、いざ受験すると状元を逃してしまったので、馮氏の誕生日祝いの席で兄に酒をついで拝礼をするという辱めを受けることとなったのである。

楊六郎といえば、楊繼業の六男で武勇に優れた人物である。「狀元郎」と「楊六郎」という語尾の「郎」に掛けた言葉遊びだが、まがりなりにも科挙の受験勉強に励んだ陳良佐が楊六郎を名乗るとするのは、この上ない自虐とたわむれであり、勇猛な武将である楊六郎と、科挙の首席である状元との対比が面白みを生んでいる。これも、武将としての楊六郎のイメージを誰もが即座に思い浮かべることができるのでなければ、陳良佐の答えはたわむれとして成立しないであろう。

また元の周文質による散曲【時新樂】に、次のようにある。

千里獨行關大王。私下三關楊六郎。張飛忒煞強、諸葛軍師賽張良。暗想、這場、張飛莽撞、大鬧臥龍岡。大鬧臥龍岡⁶。

千里を一人行く關大王。三関を密かに離れる楊六郎。それよりも張飛はとりわけ強く、軍師の諸葛亮は張良にも勝る。密かに思うに、この場面、張飛は荒くれ者で、ひどく臥龍岡を騒がせる。ひどく臥龍岡を騒がせる。

この作品で主眼として描かれているのは、劉備主従が臥龍岡に諸葛亮を訪ねるものなかなか会うことができず、とうとう張飛が怒り出すという、いわゆる三顧の礼にまつわる

場面である。その張飛の引き合いとして、關羽と共に楊六郎が挙げられており、しかも關羽が曹操のもとを脱出してはるばる劉備を尋ねて行く千里独行の場面と、楊六郎が母の身を案じて密かに任地を離れるという私下三関の場面とが対比されている。

実際に『三國志演義』などにおいてしばしば諸葛亮の引き合いに出される張良を除外すると、三国志物語の名だたる英雄に混じって、別系統の物語から一人だけ楊六郎の名があるために、非常に目を引かれるものがある。しかしこのことから、当時における楊六郎の知名度が、張飛・關羽・諸葛亮にも劣らぬものであったことがわかるし、つまりは母体となる楊家将の物語が広く受け入れられていたことが窺われる。

この散曲の作者である周文質は、『録鬼簿』曹棟亭本では「方今已亡名公才人余相知者(方今の已に亡き名公才人にして余の相い知る者)」に入れられており、『録鬼簿』の著者である鍾嗣成とは二十年余り親交があったという。また周文質は『録鬼簿』に載る劇作家としては珍しく没年が明記されており、元統二年(一三三四)十一月五日に病没したとされる。すなわち、どんなに遅くともこの頃より以前には、楊六郎が三国志物語の英雄と並び称されるほどの知名度を誇るという状況ができあがっていたことになる。

これらは、楊家将物語が人々に広く親しまれていたことを示す例としては瑣末に過ぎるかもしれない。しかし、人々に広く親しまれていたからこそ、こうした事例が生まれていると見ることもできよう。無論、より明確な例として、楊家将物語そのものを題材とした雑劇や小説がきちんと存在しており、ひいては初めに触れた京劇の状況にも繋がっていくのである。

楊家将物語の魅力とは何か。楊家将物語の何が人々の心を引きつけたのか。そして、人々が楊家将物語に引きつけられざるを得なかった要因や時代背景とは何であったのか。それらを探っていくことが本論文の目指すところとなる。

本論文は二部構成となっている。第一部は「小説と史実」と銘打ち、歴史資料と小説を中心に扱い、楊家将物語の概略をまとめ、それがどのようにして現在伝えられる形になっていったのかを見ていく。第二部は「楊家将雑劇」と銘打ち、楊家将を題材とした雑劇を中心に扱い、各作品の内容を分析し、それらの特徴について考察を加える。

第一部で歴史資料と小説をテーマとし、第二部でことさらに雑劇のみをテーマとするのには理由がある。史書を読むのは士大夫であり、小説にしても識字層に属する者でなければ読むことはできない。しかし雑劇は、視覚と聴覚を通して非識字層にも訴えることのできる演劇であり、その分影響力も大きかったはずである。また、舞台上での動作やメロデ

ィに乗せた歌唱は、文字化することのできない表現の幅を持っている。それだけに、雑劇のみで別にテーマを立てることに意味があると考え。もとより、歴史資料と小説と雑劇の三者は厳然と区別されるべきものではなく、それぞれ関連し合っている。それは本論文においても同様である。各章の分類は、いずれを主として書かれたかによるものであることをお断りしておく。

以下、各章の概要を簡単に提示しておく。

第一部第一章『楊家府世代忠勇通俗演義傳』について「一虚構と史実の間で」では、楊家将物語が史実とどのように関わってきたのかを考察する。また、楊家将物語を描く小説『楊家府世代忠勇通俗演義傳』について、豪傑や巾幗英雄などの観点から分析する。

第一部第二章「北漢時代の楊業とその周辺」では、楊業が北漢に仕えていた時期についてまとめ、その期間の出来事が楊業の生涯においてどのような意味を持ち、どのような影響を及ぼしたかを考察する。また、その時期における楊業の親族についても整理を行う。

第二部第一章「謝金吾」雑劇について」では、現存する楊家将雑劇の中でも女性の果たす役割が比較的大きい「謝金吾」を取り上げ、小説との関わりや劇の構成について考察すると共に、楊門女将のルーツを見出すことを試みる。

第二部第二章「楊家将における“私下三関”のモチーフについて」では、「謝金吾」において重要な要素となっている“私下三関”に注目し、同じモチーフを用いている「黄眉翁」と比較することで、それが楊家将物語においてどのように変容したかを考察する。また、薛仁貴の物語を取り上げて比較を行い、楊家将物語との関わりを探る。

第二部第三章「楊家将雑劇から見る習俗と時代背景」では、「昊天塔」や「開詔救忠」といった楊家将雑劇に見える遼の習俗について、実際の習俗との関わりや、それが作品中でどのような効果を発揮しているかについて考察する。

第二部第四章「楊家将物語と『水滸傳』」では、楊家将物語と『水滸傳』の関わりについて述べた先行研究についてまとめた上で、楊家将ものの雑劇「破天陣」と『水滸傳』ものの雑劇「九宮八卦陣」という、対遼戦争と特殊な陣という同じモチーフを用いた作品について比較検討を行う。

資料として、楊家将を題材とする元・明代の雑劇の内現存する六種全ての訳註を付す。

楊家将物語についての先行研究は少なくないが、これらの研究は、『宋史』などの史書における記述との異同を解説するといった、歴史的な角度からのものがまず目に付く。文学作品としての楊家将物語そのものについて論じたものは、近年になり増加しつつあるものの、

必ずしも多くはないように思える。本論文において楊家将物語の内容を考察すると共に、この中国において非常にポピュラーな存在である楊家将を取り上げることによって、中国の文学的バックグラウンドを理解する一助になればと思う。

注

- 1 楊家将の物語についての代表的な先行研究として、中国においては、衛聚賢「楊家将考証」(『小説考証集』、説文社、一九四四年所収)、余嘉錫「楊家将故事考信録」(『余嘉錫論学雑著』、中華書局、一九七七年所収)、鄭騫「楊家将故事考史證俗」(『景午叢編』下編、臺灣中華書局、一九七二年所収)などがある。また、中国で発表された論文を取めた蔡向昇・杜雪梅主編『楊家将研究・歴史卷(楊家将研究叢書)』(人民出版社、二〇〇七年)がある。

日本においては、上田望「講史小説と歴史書(3) — 『北宋志傳』、『楊家將演義』の成書過程と構造 —」(『金沢大学中国語中国文学教室紀要』第三輯、金沢大学文学部中国語学・中国文学講座、一九九九年)、木田知生「楊業と楊家将をめぐる諸問題」(『龍谷史壇』第百十四号、龍谷大学史学会、二〇〇〇年)、小松謙「『楊家府世代忠勇通俗演義傳』『北宋志傳』— 武人のための文学 —」(『中国歴史小説研究』、汲古書院、二〇〇一年所収)などがある。

- 2 魯迅は『中國小説史略』第十五篇「元明傳來之講史(下)」において次のように述べる(原文は『魯迅全集』第八卷、人民文学出版社、一九五七年による)。

其于武勇、則有叙唐之薛家(征東征西全傳)、宋之楊家(楊家將全傳)及狄青輩(五虎平西平南傳)者、文意并拙、然盛行于里巷間。

武勇においては、唐代の薛家(『征東征西全傳』)、宋の楊家(『楊家將全傳』)及び狄青ら(『五虎平西平南傳』)について述べたものがあり、文章も内容も拙劣であるが、巷間では広く普及している。

- 3 合山究『明清時代の女性と文学』(汲古書院、二〇〇六年)第四篇第一章「明清時代における巾幗鬚眉の系譜— 女將軍・従軍女性・女武芸者・女豪傑とその文化」で論じられているように、明清時代には巾幗鬚眉、すなわち勇敢で雄々しく、外向的で強靱な性格を持つ女性が数多く存在し、社会に影響を与えていた。合山氏は明清時代の勇武女性に関する膨大な資料を整理しており、その中で特に女將軍・娘子軍総帥・女性革命家などを巾幗英雄として分類している。穆桂英(木桂英)に代表されるように、楊家に属する女性の多くは戦場で武勇を振るう女將軍であるので、本論文でもこの呼称を用いることとする。

-
- 4 雑劇のテキストは、特に断らない限り王季思主編『全元戯曲』（人民文学出版社、一九九〇・一九九九年）による。ただし、こちらで文字や句読点を改めた部分もある。
- 5 原文では「脱剥雑劇」と呼ばれている。「藍采和」雑劇におけるこの言葉については、青木正兒「元人雑劇序説」（『青木正兒全集』第四巻、春秋社、一九七三年所収）第二章「雑劇の組織・雑劇の分類」において解説がなされている。すなわち明の朱權『大和正音譜』「雑劇十二科」の一つに「鑿刀趕棒」とあり、その下に「即脱膊雑劇」と注されていることと関連して、「脱膊」とは袖をまくり上げて二の腕を露わすこと、劇においては腕まくりで敵と戦うことであり、「脱剥」はこの「脱膊」の訛りであるとする。
- 6 隋樹森『全元散曲』（中華書局、一九六四年）による。

第一部 小説と史実

第一章 『楊家府世代忠勇通俗演義傳』について

—虚構と史実の間で—

一、楊家将物語の発生と発展

楊家将物語において、楊家将の始祖と呼ぶべきは楊繼業である。その楊繼業のモデルとなった楊業（?～九八六）は実在の武将であり、北漢から北宋へ帰順して以降、遼に対する国境防衛に活躍したが、奸臣に陥れられた結果、遼の捕虜となって命を落とした。

その名将としての地位は北宋時代から既に揺るぎないものとなっていたようである。包拯は『包孝肅奏議集¹』巻九「議邊・論邊將・第一章」の中で、太宗朝の驍將として楊業を次のように評価している。

臣近者累曾上言、以河北沿邊將帥未甚得人、特乞精選、其代州尤不可輕授。緣代州與雲應等州相去至近、路又垣平、古今最是難控扼之所。太宗朝以驍將楊業守之、業歿、繼以給事中張齊賢守之、其慎重用人如此。

私が先頃重ねて申し上げましたように、河北の国境を守る将軍は未だ良き人材を得ておりませんので、厳密にお選びになり、代州（山西省代県）においては特に軽々しく任じにられないようお願い致します。代州は雲州（山西省大同市）や應州（山西省応県）などと互いに近く、道も平坦でありますので、古今を問わず最も守るのが難しい地であります。太宗の世では驍將の楊業にこれを守らせ、業の没後は、続いて給事中の張齊賢にこれを守らせ、このように慎重に人を用いられました。

また、歐陽脩による「供備庫副使楊君墓誌銘²」がある。これは楊業の族孫に当たる楊暉の父、楊琪の墓誌銘であり、楊琪の曾祖父に当たる楊弘信が楊業の父に当たる。この中では、楊業とその息子の楊延昭について次のように記す。

父子皆爲名將、其智勇號稱無敵、至今天下之士至於里兒野豎、皆能道之。

彼ら父子（楊業と楊延昭）は共に名将であり、その智勇から無敵と称され、今なお天下の優れた人物から田舎の子供に至るまで、皆彼らの優れた点について物語ることができる。

この記述からは、楊業父子に関する話が民間にも広まっており、人気が高かったことが窺われる。更に『續資治通鑑長編³』（以下、『長編』と略す）卷二三七、熙寧五年（一〇七二）八月庚子の条において、王安石が楊業に同情的な見解を示している。

楊業亦爲姦人所陷、不得其死。將帥盡力者乃如此、則誰肯爲朝廷盡力。

楊業も悪人に陥れられ、非業の死を遂げた。將軍で力を尽くした者がこのようであったのに、誰が朝廷のために力を尽くそうとするだろうか。

これらの楊業に対する名将としての評価と、悲劇的な最期を迎えたことへの同情が、楊家將物語が生まれる素地となっていたことは想像に難くない。

宋は開封（河南省開封市）を都とした北宋時代と、杭州の臨安（浙江省杭州市）に遷都した南宋時代に分けられるが、いずれにおいても北方異民族の脅威に悩まされた。北宋時代は、燕雲十六州（河北・山西の北部）の領属問題で契丹族の遼と国境紛争が続き、また西方で独立を宣言したタングート族の西夏とも交戦していた。しかし結局のところ、北宋は遼や西夏の侵入に対抗できず、毎年銀や絹を送ることで平和を保っていた。やがて北宋は、新興勢力の女真族国家である金と同盟を結び、遼を駆逐して燕雲十六州の主要部分を回復するものの、戦略違反や戦後の領土割譲などをめぐって金の不審を買うこととなる。靖康元年（一一二六年）、金は北宋の対応を背信行為であるとし、軍を南下させて開封へ迫り、陥落させた。皇帝の欽宗とその父である徽宗、そして后妃以下の皇族や官僚など数千人が捕虜として北へ連行された。いわゆる靖康の変（難）である。この時、欽宗の弟が杭州へ脱出し、高宗となって南宋を興した。

異民族によって祖国を失った上に皇帝を捕虜にされるという屈辱を味わった南宋の民は、失地回復を願うと共に、漢民族としての自負心を慰めるものを求めた。その結果として、対異民族戦において活躍した古今の將軍達に注目が集まることとなる。北宋時代に遼と戦った楊業父子が講談に登場するようになるまで、それほど時間はかからなかった。

楊家將物語の形成は早くも南宋頃に始まっていた。宋末元初の羅燁が著した、南宋の状況を伝えるとされる講談の種本集『醉翁談録』甲集卷一に、「小説開闢」という講談目録がある。そこには当時の「小説」（読み切り講釈）の名が列挙されており、「朴刀」の条に「楊令公」、「捍棒」の条に「五郎爲僧」といった名が見られる⁴。「楊令公」は楊家將初代の楊繼業にまつわる話、「五郎爲僧」は楊繼業の五男である楊五郎が出家する話と考えられる。

やや変則的なものとして、同じく「捍棒」の条に「攔路虎」の名がある。これは明代中期の『清平山堂話本』に含まれる「楊温攔路虎傳」と同内容の話と考えられており、「楊温攔路虎傳」において主人公の楊温は、楊令公の子孫である楊重立の息子という設定になっている。ただし、史実においても、現在一般に知られている楊家将物語においても、楊温や楊重立といった名を見出すことはできない。本来の楊家将物語から派生したものとするべきであろう。

また元末明初の陶宗儀による『南村輟耕録』には、金の院本に「打王樞密爨」という演目があったことが見える。王樞密とは、楊氏一族と対立する奸臣の一人、王欽（王欽若）のことと思われる。

その後、雑劇においても楊家将は題材として好んで用いられた。元代のテキストは現存していないものの、『録鬼簿』に見える「孟良盜骨殖」と「私下三關」は、明の臧懋循による『元曲選』に収められている「昊天塔孟良盜骨」と「謝金吾詐拆清風府」にそれぞれ関連があると見なされている。またやはり明代のテキストとして、趙琦美による『脈望館鈔校本古今雜劇』に「楊六郎調兵破天陣」、「焦光贊活拿蕭天佑」、「八大王開詔救忠臣」、「黃眉翁賜福上延年」が収められている⁵。

こうした講談や演劇の世界においては、楊家将物語は大きくふくらみ続け、現代の京劇に至るまで、小説とはまた異なる、壮大にして独自の世界を確立している。

それでは、楊家将を題材とした小説としてはどのようなものがあるか。通常知られているものとして『楊家府世代忠勇通俗演義志傳』（以下、『楊家府』と略す）と『北宋志傳』の二種類がある。『楊家府』は全八巻五十八則から成る。明の万曆三十四年（一六〇六）の刊本があり、「秦淮墨客校閱、煙波釣叟參訂」と題され、序にも「万曆丙午長至日秦淮墨客書」と署名されている。秦淮墨客とは江寧の紀振倫のこととされているが、生卒年などの詳細は不明である。『北宋志傳』は明の嘉靖年間に福建建陽書坊の書商であった熊大木の撰とされる『南北兩宋志傳』の後半部に当たり、全十巻五十回本である。清代に『南北兩宋志傳』が『南宋志傳』と『北宋志傳』に分割されて販売され、『北宋志傳』は『北宋金鎗全傳』と名前を変えた。『南宋志傳』が清代以降改編されていくのに対し、『北宋志傳』は内容が虚構性に富み、史実に負うところが少ない通俗的な作品であったため、ほとんど手を入れられることはなかった。普及度の点では『北宋志傳』の方が上であり、上述のように名称を変えながらも、内容はほとんど変わらずに流布本として長く読み継がれた。一方、『楊家府』は『北宋志傳』ほどは版を重ねなかった⁶。

両者の内容は、楊六郎が死ぬまでの主要部分に関してはほぼ同様である。ただし、『楊家府』が全体を通じて楊氏一族の物語のみを描いているのに対し、『北宋志傳』には、前半部に当たる『南宋志傳』と形態をそろえるために多くの史書の記述が挿入されており、また序盤部において、楊業と同じく北宋の名将である呼延贊の物語が加えられている。

この『楊家府』と『北宋志傳』とを比較する際に問題となるのは、どちらがより古い楊家将物語を反映しているのかという点である。この点について、まずは『北宋志傳』の冒頭の按語が参考になる⁷。

今續後集一十卷、起宋太祖再下河東、至仁宗止、収集楊家府等傳、總成二十卷、取其揭始要終之意。並依原成本參入史鑑年月編定。四方君子覽者、幸垂藻鑑。

今から続集十巻を、宋の太祖が再び河東を攻めるところより始め、仁宗にて終わるが、楊家府などの伝を集め、計二十巻としたのは、始めたならば終わらなければならないという思いによるものである。全て原本に基づき史鑑の年次を入れて編集した。ご覧下さる天下の皆様方、どうぞ品定めをなさられますよう。

ここで述べられている「楊家府等傳」とは、『楊家府』もしくはその元となった楊家将物語であると考えられており、つまり『北宋志傳』は「楊家府などの伝」を集めて取り込み、「史鑑」すなわち通鑑系の史書の年次に合わせて作られたということになる。そうすると『楊家府』の方がより古い形態を留めていることになるであろう。

また趙景深『『楊家府』與『宋傳統集』⁸』が指摘するところでは、『北宋志傳』巻頭に掲げられた「古風長篇」と題する詩に次のようにある。

楊府俊英文廣出、旌旗直指咸歸命。更有姨娘法術奇、炎月瑞雪降龍池。…〔中略〕…惟有令婆恩典、直待文廣征服南方、而後受封。

楊家府の俊英である文廣が現れ、軍旗で指せば皆帰順する。更に姨（宣）娘の法術は素晴らしく、真夏に雪を龍池に降らせる。…〔中略〕…令婆には天子の慈しみがあ
り、直待文廣は南方を征服し、後に封爵を受ける。

ここで述べられる楊文廣の南征物語は、『楊家府』には確かに存在しているが、『北宋志傳』には存在せず、巻末でほのめかされているに過ぎない。また「姨（宣）娘」とは、楊

文廣の姉にして、『楊家府』において法術を使って大活躍する楊宣娘⁹のことであるが、彼女もまた『北宋志傳』には登場しない。つまり「古風長篇」の内容は、『北宋志傳』よりもむしろ『楊家府』に近いと見なすことができる。これらのことから考えると、やはり『楊家府』の方が『北宋志傳』よりも古い形態を留めていると思われる。

ただし『楊家府』は、『北宋志傳』をも参考にしているようである。『楊家府』第五卷第二則に、遼が敷いた天門陣を破るべく各地の軍が集結する場面があり、その軍中に王貴と金刀馬氏という人物が含まれているのであるが、彼らは何者であるのかについて『楊家府』は一切説明していない。王貴は史実でも楊業と共に対遼戦で活躍した武将であり、『北宋志傳』においてはこの天門陣の場面に至るまでに度々登場している。金刀馬氏は呼延贊の妻であり、やはり『北宋志傳』において夫と共に戦場で活躍する。呼延贊の物語は『北宋志傳』の序盤に置かれており、『楊家府』もそれを部分的に取り入れたものの、前後のつじつまを合わせることを怠った結果、唐突な登場となってしまったのであろう。

『楊家府』と『北宋志傳』について小松謙氏は、元々存在していたであろう原『楊家將』とも呼ぶべき楊氏一族についてのまとまった物語を仮定し、それを基に『北宋志傳』は呼延贊の物語を付加した上で史書を利用して歴史書らしい体裁をつくらせたもの、『楊家府』はほぼ原本に則りながら省略と追加を行ったもので、更にお互いに影響を与え合って現在の形になったと推定している¹⁰。出自を同じくするものであるだけに、分化した後でも互いの間での取捨選択はしやすかったはずである。その際に生じた整合性の欠如についても、恐らくは当時の読者はどちらか一方しか知らないということではなく、両系統の物語をおおよその形で理解していたために、大きく問題視されることはなかったのであろう。

本論文では、小説については主として、楊家將の物語のみを収めて単独の作品として成立している『楊家府』に基づいて話を進めていく。以下に『楊家府』のあらすじを示す¹¹。

宋の太宗は北漢を滅ぼした後、度々宋軍を苦しめた北漢の将である劉繼業（令公）の才を惜しんで熱心に説得し、遂に帰順させた。この時令公は楊の姓を賜る。太宗が五臺山に詣でた際に遼の攻撃を受けると、楊令公父子は帝を守って包囲を突破したが、七人の息子の内、長男の淵平、次男の延廣、三男の延慶が戦死、四男の四郎延朗は遼の捕虜となり、五男の五郎延徳は消息不明となる。

遼が南進すると楊令公はこれを迎え撃つが、元帥の潘仁美は北漢攻めの際に楊令公から受けた屈辱を晴らそうと考えており、作戦を無視して楊令公を陳家谷に孤立させる。潘仁

美に救援を求めた楊家の七男の楊延嗣は弓矢によって射殺され、楊令公は李陵碑に頭を打ちつけて自決する。

包囲を突破して都に一人戻った六男の六郎延昭は、朝廷の有力者である八王こと趙德崇と寇准の助けを得て潘仁美の罪を明らかにし、一族の名誉を回復する。眞宗が即位すると楊六郎は北方の国境防衛を任され、大刀の使い手である岳勝や、盗賊をしていた孟良や焦贊らが配下に加わる。この後、遼と何度も激しい戦いを繰り広げる一方で、遼から宋朝内に潜り込んだ王欽や、朝廷の寵臣である謝金吾といった内憂とも戦うこととなる。この間は孟良と焦贊を始め、楊六郎の妹である淇八娘と瑛九妹、五臺山で僧となっていた楊五郎、楊六郎の息子である楊宗保とその妻の木桂英らが活躍する。そして遼で蕭太后の娘婿となっていた楊四郎の内応により、遂に遼の都を打ち破り屈服させたのであった。

仁宗の時に儂智高が反乱を起こし、狄青の率いる軍を破ったため、包拯は楊宗保とその息子の楊文廣に軍を率いさせるよう推薦する。楊文廣の姉である楊宣娘の活躍もあり、反乱は鎮圧される。この辺りから、戦闘において仙術や法術が使われることが目立つようになる。後に楊文廣は嫉妬した狄青の讒言を受け、鶴に変身して身を隠す。

神宗の時代、新羅国の李王が西夏の八臂鬼王・張奉國に軍を率いさせて宋に侵入する。楊文廣は四人の息子を連れて朝廷に出向き、四男の楊懷玉が先鋒となる。八臂鬼王は井戸水を毒化させて宋軍を苦しめるが、楊家の寡婦十二人が出陣し、楊宣娘が術を使って八臂鬼王を破った。しかし、この戦いの最中に対立した張茂から讒言を受けた楊懷玉は、これまで一族が朝廷の奸臣から受けた仕打ちを思い、張茂を殺した上、病床に臥す父を含め、家を挙げて太行山へ逃げ込む。以後、楊氏一族は歴史の表舞台から姿を消した。

宋代の社会と文化は、後の小説に繋がる素材を豊富に提供した。楊家将だけでなく、岳飛や韓世忠など、現在の中国人にもよく知られる英雄達と、彼らが活躍する世界観の素地が整えられたのである。また宋代は、頻発する内乱という内憂と、異民族国家による侵攻という外患に悩まされた時代でもある。楊家将物語には元盗賊の孟良や焦贊という豪傑が登場するが、楊家将に限らず、中国の歴史小説には必ずといって良いほどこの種のアウトローが登場する。このアウトローにまつわる背景について、岡崎由美氏や伊原弘氏の説¹²に基づきながら述べておきたい。

中国では元々、軍隊は食い詰めた流亡の徒や無頼の徒が流れ込む集団であった。兵士が不足した際には、無頼の徒を徴兵して戦地に送り込んだり、囚人を軍隊に編入して辺境守

備に就かせたりした。『史記』卷一二三「大宛列傳」に、太初元年（前一〇四）のこととして次のようにある。

拜李廣利爲貳師將軍、發屬國六千騎、及郡國惡少年數萬人、以往伐宛。

李廣利を貳師將軍に任じ、属国の六千騎、及び郡国の不良少年数万人を徴發し、大宛を討伐させた。

赦囚徒材官、益發惡少年及邊騎、歲餘而出敦煌者六萬人。

（同年の夏）囚人を赦免して官軍に充て、更に不良少年及び辺境の騎兵を徴發したので、一年余りして敦煌を出発する兵は六万人となった。

また、このような無頼の徒を義勇兵や傭兵として募ることや、豪族が私兵として抱えることもあった。罪を犯しても兵の身分になれば罪を問われないことから、軍に逃げ込む者は少なくなかった。

こうしたアウトサイダーを国家権力に組み込む最たるものが招安である。この対象となるのはただの無頼の徒ではなく、宗教集団や少数民族から、大規模な反乱起義にまで至る。招安とは彼らを朝廷に帰順させ、田畑を与えて民に戻したり、官位を与えて朝廷のために働かせたりすることで、反乱をなくすと同時に国力や軍事力の増強が計れる一挙両得の策であった。

招安という言葉をもとに解釈すると、招き安んずるということになるが、朝廷の側から見ればそのような文字通りの意味ではない。武力を用いて相手を畏服せしめ、その上で救いの手を差し伸べるのが招安なのである。そうすれば、降伏した相手を意のままに従わせることができる。招安とは、あくまで討伐の一環であり、その過程で激しい戦闘が繰り広げられることも珍しくはなかった。

しかし、反乱の頻発した宋代においては、招安が安易に行われるようになった。『宋史』卷四一〇「曹彦約傳」に曹彦約の発言として、「今不行討捕、曲徇招安、失朝廷威重（今討伐をせず、理を曲げて招安を行ったならば、朝廷の威厳を失う）」と見える。また宋の莊綽『雞肋編¹³』巻中「建炎後俚語」によれば、建炎年間（一一二七～三〇）以後のことわざとして、「仕途捷徑無過賊、上將奇謀只是招（仕官の早道は賊に勝るものはなく、將軍は奇策なくただ招くのみ）」、「欲得官、殺人放火受招安（官位が欲しければ、人を殺し火を放

って招安を受けよ)」などとある他、巻下「招安」には次のようにある。

紹興之後、巨盜多命官招安、率以宣贊舍人寵之。時以此官爲恥。

紹興年間（一一三一～六一）以後、巨盜の多くが官職を拝命して招安され、宣贊舍人（宋代の武官職）として遇せられた。そのため当時この官職は恥とされた。

官民に関わらず、既に招安は弱腰の政策と見なされていたのである。

宋代の軍は、政府直属の軍である禁軍、州や府に配備されて労働力を提供する廂軍、そして召募や徴兵による地元の民兵に大別される。武科挙で選抜された者を禁軍に入れると行ったこともあったが、実際の戦闘時に頼りになるのは、自分達の家や家族を守るという意識が強い民兵であった。南宋の羅大經『鶴林玉露¹⁴』甲編卷一「民兵」に次のようにある。

本朝靖康之禍、勤王之師、至者絶少。縦有之、率皆望風奔潰、不敢向賊發一矢蓋。…〔中略〕…丙寅虜大舉南牧、圍安・襄以撼荆・鄂。宣司檄召諸處兵、與湖北義勇俱往救。諸郡兵不待見敵而潰、所過鈔略、甚於戎寇。獨義勇隨其師進退、不敢有秋毫犯。蓋顧其室家門戶故也。

本朝の靖康の変では、官軍でありながら、やって来たものは極めて少なかった。たとえいたとしても、皆戦況を見て潰走し、賊に向かって一矢も放たなかった。…〔中略〕…丙寅の年（一二〇六）に蛮族（金を指す）が大挙して南下し、安陽（河南省安陽市）、襄陽（湖北省襄陽市）を囲んで荊州（湖北省荊州市）、鄂州（湖北省武漢市）に脅威を与えた。そこで各地の兵を召集し、湖北の義勇軍と共に救援に向かわせた。しかし諸郡の兵は敵に出会わないうちに潰え、道々で略奪を働くことは、盗賊よりもひどかった。ただ義勇軍だけは将帥に従って進退し、少しも略奪をしようとしなかった。思うに自分達の家族を顧みたからであろう。

軍中においては、元盗賊という出自など珍しくなかった。しかも、一旦招安されながらもまた賊に戻ることもあった。『三國志平話』巻中において、曹操軍に敗れて劉備とはぐれた張飛は、盗賊の支配する山を奪って自分が頭領となる。『水滸傳』の李逵は、招安された後も、官軍に対する不満を抱く度に梁山泊へ戻ろうと主張する。小説で描かれるような簡

単に落草を繰り返す豪傑達の姿は、物語として多少の誇張はあるにしても、根拠のないイメージではなかったのである。

二、史実との関わり—楊令公を中心として—

『楊家府』は楊令公の代において、史書の記述に基づいた描写がかなり見られる。特に第一巻第七則から第八則にかけて、楊令公が戦死する場面でそれが顕著である。

遼の南進に備え、宋は潘仁美を元帥として十万の兵を代州へ出撃させ、楊令公はその先鋒として六郎延昭、七郎延嗣と共に従軍する。楊令公は慎重に戦うよう進言するが、彼に対して含むところのある潘仁美からは拒否され、また王侁からもその態度を咎められたため、陳家谷に陣を布いて遼軍を待ち受けるよう請い、やむなく自らは出陣する。潘仁美は一旦は陳家谷に陣を布くが、遼軍が敗走したと誤認し、手柄を立てようとその場を離れてしまう。しばらくして楊令公が敗れたとの報告が入ると、潘仁美は諸軍を率いて撤退する。楊令公は奮戦しながら陳家谷まで退いたものの、既に自軍の姿はなく、楊七郎が救援を請いに潘仁美の陣へ向かうが、逆に弓矢によって射殺されてしまう。楊令公は傷を負い、馬も疲れ果ててしまったため、その地にあった李陵廟に入り、三日間食を絶った後、自ら李陵碑に頭を打ちつけて死ぬ。

楊令公のモデルとなった楊業は『宋史』巻二七二に伝が立てられている。楊業が戦死に至る発端については、次のように記す。

雍熙三年（九八六）、大軍で北へ攻め込み、忠武軍節度使の潘美を雲・應路行營都部署とし、楊業にその副官となるよう命じた。西上閣門使・蔚州刺史の王侁と、軍器庫使・順州團練使の劉文裕にその軍を守らせた。各軍は雲・應・寰・朔の四州を攻め落とし、桑乾河に駐屯したが、その時曹彬の軍が不利になったので、それぞれの路で軍を返し、美らは代州へ戻った¹⁵。

楊業はこの時、勢い盛んな遼軍と正面からぶつかることを避け、潘美（『楊家府』の潘仁美に相当）に対し、四州の人民を安全に内地へ移すことを優先して戦うべきであると進言する。その意見を遮る王侁の言葉が、『宋史』では、「君侯素號無敵、今見敵逗撓不戰、得非有他志乎（貴公は平素から無敵と渾名されているのに、今敵を見て恐れ留まり戦おうとしないとは、まさか異心を抱いているのではなかろうな）」とあるのに対し、『楊家府』で

は第一卷第七則に、「將軍素號無敵、今見敵推託不戰、得非有他志乎」とあって対応している。

続いて『宋史』は、楊業が反論しながらも、自ら危険な出陣をしなければならなくなり、潘美に作戦を託す悲痛な姿を描く。

楊業が言った。「私は死を畏れているのではありませんが、状況が不利で、徒らに兵卒の命を損なえば戦功を立てることはできません。今貴公が私を死を畏れていると責めるのであれば、皆様のために先駆けとなりましょう。」進軍しようとする時、泣きながら潘美に言った。「この進軍はきっと不利です。私は太原の降将で、死ぬべき運命でした。しかし皇帝は私を殺さず、目をかけて太守とし、兵権を授けられました。私は敵の勝手にさせて討たないわけではなく、好機を伺い、わずかな戦功を立てて帝の御恩に報いるつもりです。今皆様は私が敵を畏れていると責めなされる。私は敵中で真っ先に死にましょう。」そこで陳家谷の入り口を指して言った「皆様は歩兵と強弩で陣を張り、援軍として左右両翼となり、私が転戦してここに至るのを待ち、歩兵で挟撃してお助け下さい。さもなくば皆殺しとなりましょう¹⁶。」

『楊家府』では、多少の省略や前後の入れ替えを行いながら『宋史』の記述を適宜取り入れて、楊令公に次のように発言させている。

私は死を畏れているのではございませんが、時に利がなく、徒らに命を損なえば、功績を立てることはできません。私は太原の投降兵で、死ぬべき運命でしたが、帝の御恩を蒙って殺されず、兵権を授けられましたのに、今敵に遇って、勝手にさせて討たないわけにはいきません。好機を伺い、わずかな戦功を立てて、帝の御恩に報いるのみです。皆様は私が異心を抱き、奮戦しようとしないと責めておられるが、自らを可愛いがろうとは思いません。皆様のために先駆けとなりましょう。ただし陳家谷にて、皆様は外側に歩兵と強弩で陣を張り、お助け下さい。さもなくば皆殺しとなりましょう¹⁷。〈第一卷第七則〉

そして『楊家府』は、楊令公の死について、続く第一卷第八則「令公狼牙谷死節」において次のように描写している。

さて潘仁美は心中で令公を亡き者にしようと考えていたが、去る時に伏兵となるように言われたので、ひとまず王佐らと共に陳家谷に陣を布いた。寅の刻から午の刻になっても、楊業の消息が得られなかったため、人に托邏臺へ登って眺めさせたが、それでも何も見えなかった。皆は遼の兵が敗走したと思い、手柄を立てようと、一斉に谷の入り口を離れ、交河に沿って南進した。二十里進み、楊業が敗戦したことを聞くと、潘仁美は密かに喜び、諸軍を率いて鴉嶺へ退いた。楊令公は蕭撻懶と戦っては退き、陳家谷に着いたが、一人の兵も見えなかったので、胸を叩いて慟哭し、「潘仁美の悪党めが、わしを陥れたか」と罵った。

…〔中略〕…

しばらくすると、兵卒が、村人が言うにはここは狼牙谷であると報告した。楊令公は非常に驚き、羊（＝楊）が狼の牙に遭えば、どうして生きることができよう、と心に思った。そこで人々を率いて勇み立って攻めかかり、遼の兵を百人余り斬り殺した。さらに馬に鞭打って前進したが、馬は疲れ、駆け回ることができなくなったので、楊令公は深い林の中に隠れた。耶律奚底が林の中に上着の姿を見てこれを射たところ、楊令公の左の二の腕に当たった。

…〔中略〕…

さて令公は遼の兵が戦いをしかけて来ないので、絶食したが、三日経っても死ななかった。人々に言った。「帝が手厚く私を用いて下さったので、国境を守り賊を討ってこれに報いようとした。しかし図らずも奸臣に追い詰められ、皇帝の軍を大敗させるに至り、私は何の面目があって生きることが求めようか。」この時配下にはまだ百人余りがいたので、彼らにも言った。「お前達は皆父母や妻子がいるであろうから、私と共に死ぬのは無益なことであり、逃げ戻って私に代わり帝に状況をお知らせすべきである。」人々は皆感激し、「將軍と共に命を尽くしたく思います」と言った。楊令公は考えた。「外からの救援はなく、遼の兵に幾重にも囲まれており、結局この災いは逃れ難いであろう。それに私は平素から無敵と称していたので、もし遼の者に生け捕られれば、彼らから辱めを受けるだろうから、今のうちにさっさと死ぬ方がまだ。」考えが決まると、南に向かって拝礼し、「太宗様はくれぐれもお体を大事になさって下さい。私はもはや生きて朝廷に戻り再びお顔を拝見することはできません」と言い終えると、赤銅の兜を脱ぎ、李陵の碑に頭を打ちつけて死んだ。年は五十九歳であった。

兵士達は楊令公が死んだのを見ると、奮い立って谷を出て攻めかかったが、尽く遼の兵に斬り殺され、二、三人が逃れただけであった¹⁸。

この記述も、多少複雑ではあるが、やはり史書の記述を適宜取り入れている。基礎となっているのは『宋史』「楊業傳」における以下の記述である。

潘美は王侁と共に配下の兵を率いて谷の入り口に陣を布いた。寅の刻から巳の刻になり、王侁は人に托邏臺に登らせて眺めさせると、契丹が敗走したと思い、功を争おうとして、兵を率いて谷の入り口を離れてしまった。潘美は留めることができず、そのまま灰河に沿って西南に二十里進んだ。しばらくして楊業が敗れたと聞くと、兵を率いて戻り逃げてしまった。楊業は力を尽くして戦い、正午から夕方になり、思った通り谷の入り口に着いた。しかし誰の姿も見えないので、憤って激しく身を震わせて泣き、再び配下の兵を率いて力を尽くして戦った。身体には数十の傷を負い、兵士も殆ど全滅していたが、それでも自ら数十人から百人を討ち取った。馬が重傷を負って進めなくなったため、遂に契丹に捕らえられ、息子の楊延玉も戦死した。楊業はため息をつき、「帝が手厚く私を用いて下さったので、賊を討ち国境を守って報いようとしたのに、却って奸臣に追い詰められて、帝の軍を大敗させるに至るとは、何の面目があって生きることを求めようか」と言った。そこで絶食し、三日後に死んだ¹⁹。

ただし、『楊家府』では上記の死亡記事に続いて記されている楊業の逸話も挿入されており、その死をより悲劇的に演出している。

朔州（山西省朔州市）で敗れた時、配下にはまだ百余人がおり、楊業は、「お前達にはそれぞれ父母や妻子がおろう。私と共に死ぬのは無益なことであり、逃げ戻って帝にお知らせすべきである」と言った。配下の者は皆感極まって泣きその場を離れようとしなかった。淄州（山東省淄博市）刺史の王貴は数十人を討ち取ったが、矢が尽きて遂に戦死した。その他の者も死に、一人も生きて帰る者はいなかった。この話を聞く者は皆涙を流した²⁰。

楊業が死ぬ前後の状況については、敵国側である『遼史』の記述からも窺うことができ

る。まず『遼史』卷十一「聖宗本紀」の統和四年（九八六）秋七月丙子に、以下の記述がある。

宋の將軍の楊繼業は元々勇猛さを自負し、楊無敵と号し、北方の雲・朔など数州を占拠していた。この時、兵を率いて南方の朔州へ三十里進み、狼牙村へ着いたが、その名を嫌って進まなかった。傍仕えの者が強いて求めたため、進むことにした。しかし耶律斜軫に出会い、伏兵が四方に現れ、流れ矢に当たり、落馬して捕らえられた。傷が悪化して絶食し、三日後に死んだ²¹。

また卷八十三「耶律斜軫傳」には、楊業が捕縛された際の具体的な状況が記されている。

伏兵が現れ、耶律斜軫が進攻すると、楊繼業は敗走し、狼牙村に着いたが、衆軍は総崩れとなっていた。楊繼業は流れ矢に当たり、捕らえられた。耶律斜軫が責めて、「お前は我が国と勝敗を争うこと三十余年になるのに、今日何の面目があって相まみえるのだ」と言った。楊繼業はただ「申し訳ない」と言うだけであった。元々、楊繼業は宋において勇猛さで知られ、人々から楊無敵と号され、国境を守る策を申し立てた。狼牙村に着くと、心中でこれを嫌い、避けようとしたができなかった。捕らえられ、三日後に死んだ²²。

同じく卷八十三にある「耶律奚低傳」には、「繼業敗于朔州之南、匿深林中。奚低望袍影而射、繼業墮馬（楊繼業は朔州の南で敗れ、奥深い林の中へ隠れた。耶律奚低が上着の姿を見て射ると、楊繼業は落馬した）」とある。この記述により、楊業を射たのが耶律奚低であったことがわかる。以上の、楊業が狼牙村に陥りその名を不吉に思ったことや、耶律奚低（耶律奚底）に射られたことは、先述したように『楊家府』に取り入れられている。

無論、史実からはみ出してアレンジを加えられている部分は存在する。例えば潘美が悪人とされている点である。『楊家府』では潘美が楊業を陥れた張本人のようにされているが、『宋史』の記述を見る限り、宋軍が敗れた原因は王侁の独断専行にある。王侁の行動を制御できなかったという点で上官としての責任は免れ難いとはいえ、潘美が直接的に楊業を陥れたとは読み取れない。楊七郎が潘仁美に殺されることになったのは、楊業と共に息子の楊延玉も戦死したという『宋史』の記述に基づき、潘美を悪人にしようという意識も相

まって、大幅にアレンジが加えられた結果であろう。楊業の言動も敷衍や変更が行われ、より劇的なものとなっている。ただしこれらのアレンジは、当時の楊業への同情を端的に表すと共に、それをより一層煽り立てようとする演出と見る事が可能であり、そもそもの発想自体は史実から出発しているのである。

以上のように、『楊家府』における楊令公の代は、多少のアレンジはあるものの、基本的に史実を基礎として物語が進行していることは確かである。しかし、次代の六郎延昭以降は様相が異なってくる。史実はほとんど無視され、豪傑や女将、時には仙人が活躍するようになり、戦闘の場面は白兵戦から仙術合戦となるのである。しかもそれらは話が進むにつれて一層甚だしくなっていく。楊令公の代では演出の範囲であったものが、楊六郎の代以降は創造や捏造の域にまで達しているのである。

これまで楊業について見てきたが、『楊家府』に登場する楊氏一族の内、楊延昭（九五八～一〇一四）と楊文廣（？～一〇七四）も『宋史』卷二七二に伝を見ることができる。それによると、楊延昭には咸平二年（九九九）の冬に遂城（河北省徐水県）で遼軍に包囲された際、城の上から水を注ぎ、寒さで凍りつかせることで敵の侵入を阻んだという話がある。

咸平二年の冬、契丹が国境を乱した時、楊延昭は遂城にいた。城は小さくて備えもなく、契丹はとても激しくこれを攻め、何日も包囲した。契丹の皇太后である蕭氏は自ら戦闘を監督しており、人々は心中恐れていたが、楊延昭は城内の血気盛んな男子を全て集めてひめ垣に登り、武器と鎧を与えて城を守らせた。その頃ちょうど大寒であったので、水を汲んで城の上から注ぐと、明け方には全て氷となり、硬く滑らかで登ることができなかつた。契丹は総崩れとなって逃げ去ったので、多くの鎧と武器を手に入れた²³。

また楊文廣には、城を築く際にわざと違う地に城を築くと噂を流し、敵の注意をそらした上で一挙に築き上げ、迎撃に来た敵軍をも打ち破ったという話がある。

韓琦が筆策城を築かせた時、楊文廣は噴珠に城を築くと噂を流し、大勢を率いて急いで筆策へ向かい、暮れ頃にそこへ到着すると、一部は既にできていた。夜明けに敵騎が大勢でやって来たが、攻め込めないと知ると去り、「国主に報告して、数万の優れ

た騎兵でお前を追い払おう」と書いた手紙を送った。楊文廣は將校を送ってこれを襲撃させ、多くの者を斬ったり生け捕ったりした²⁴。

これらのエピソードも『楊家府』の物語中に取り入れることはできたと思われるのだが、そのようにはなっていない²⁵。『楊家府』において、楊延昭は遼を滅ぼし、楊文廣は西夏を打ち破ることになっており、その過程で元盗賊の孟良と焦贊のような豪傑や、木桂英を始めとする巾幗英雄が活躍する。戦闘の場面はより非現実的な描写へと傾き、楊文廣の姉である楊宣娘に至っては法術を使って敵將を討ち取るのである。物語が史実から乖離していくに従い、『宋史』にある楊延昭や楊文廣のエピソードを取り入れる必要性がなくなったか、もしくはそれらのエピソードが入り込む余地自体が既になくなっていったのであろう。

史実となる出来事がこの世に発生し、それが人々の間に流布し、認知されて史書のような文献に記されると、その史実の内容は史実自体から離れ、伝承として歩みを始めて発展していく。そして伝承は、例えば元代や明代における民族矛盾といった、各時代の時代精神の変化に従って次第に様相を改めていく。これは同時に各時代の嗜好や流行とも関わり、やはりその変化に従って伝承は様相を改めていくのである。明代に宋代の出来事を元とする通俗小説が盛んに書かれたのは、モンゴル族国家の元朝を倒して漢民族の復権を成し遂げたことで、民族文化のアイデンティティを一代前の漢民族国家である宋に求めたからである。そうした状況で脚色を経た『楊家府』からは、内憂外患に悩まされていた当時の民衆の英雄待望論や、国家に尽くそうとしながら奸臣のためにその場を得られなかった楊氏一族、特に楊業に対する同情を感じ取ることができる。

ただしそれと同時に、楊延昭の代以降は、特にエンターテインメントとしての性格が強くなっていく。例えば『三國志演義』は「七実三虚」といわれるように、民衆の蜀漢びいきを反映して、劉備を人徳者に、曹操を狡猾な敵役に描いているが、基本的には王朝興亡の歴史を描くことを主眼としている。しかし『楊家府』は、英雄達の活躍や個性を描くことを主眼としているため、史実よりも個々人の超人的な武勇や神仙術を重視し、英雄達をより印象深く、民衆の受けを良くしようとするアレンジを優先するようになっていく。つまりは話をふくらませていくに従って虚構化が進んでいくのであるが、このような状況で史実にこだわることは、自由な発想を生み出す足かせとなる。物語が性格を変えたことにより、史実を切り捨てることは当然の流れだったのである。

三、楊家の周辺人物

楊家の者は皆武術に優れてはいるが、元々北漢から帰順したという経歴を持つことから宋朝内での立場は弱く、度重なる戦闘の中で危機を迎えることも少なくなかった。しかし『楊家府』では、彼らの後ろ盾となって危機を救ってくれる者達が存在している。

朝廷において最も心強い後ろ盾となっているのが八王（八大王）である。この八王は、楊家将を題材とする物語にしばしば現れ、密接な関係にある存在なのだが、その正体は物語によってそれぞれ差異がある。『北宋志傳』では八王は太祖の子の趙德昭とされている。趙德昭は史実では太祖の次男であるが、若くして自殺している。「開詔救忠」雑劇では、八王の名は趙德芳とされており、楊家将物語とは直接関わらないものの、八王が登場する「金水橋陳琳抱妝盒」雑劇（元曲選本）においても、やはり趙德芳とされている。史実における趙德芳は趙德昭の弟であるが、やはり若くして病死している。このように『北宋志傳』及び雑劇の世界では、八王は太祖の子であるとの認識で一致する。しかし史実において八王と呼ばれた人物は、太宗の八男に当たる趙元儼なのであり、『北宋志傳』及び雑劇の設定は史実と異なっている。

それでは『楊家府』ではどうなっているのであろうか。第一巻第一則、太祖が即位して一族の者を封じる場面において、「封兄子德崇爲燕王、乳名大哥、人遂稱爲八大王、最有才能、人皆敬服（兄の子の趙德崇を封じて燕王にしたが、彼は幼名を大哥といい、人々から八大王と称され、最も才能があったため、皆敬服していた）」と語られる。つまり太祖の兄の子という設定になっている。しかもこの太祖の兄の子という趙德崇なる人物の名は、史書には見えないのである。

なぜ『楊家府』は『北宋志傳』や雑劇と異なる設定にしたのであろうか。恐らく、八王を太祖の子とする設定が史実と異なることは明らかであるものの、八王の存在なくしては物語が成り立たないため、血統的に皇族に繋がり、また実際に存在していたとしてもおかしくないような立場にある架空のキャラクターを創造し、それを八王としたと思われる。なお、趙德昭や趙德芳、或いは趙元儼にしても、史実において特に楊家と親しかったというわけではない。『北宋志傳』及び雑劇の八王についても、実在の人物から名前を借りただけであり、やはり基本的には架空のキャラクターと考えるべきである。

八王は楊家が奸臣に陥れられようとする度に救いの手を差し伸べようとする。例えば『楊家府』第三巻第六則において、部下の焦贊が奸臣の謝金吾を殺したことに連座して流罪となった楊六郎が、更に讒言に遭って斬首されそうになる。そこで八王は周囲と相談し、囚

人の中から楊六郎によく似た者を選んで身代わりとし、楊六郎には身を隠れさせる。

八王が、「先生はどのような計略をお持ちでしょうか」と言うと、寇準は傍仕えの者を遠ざけて言った。「聖旨を受けたのは、幸いに呼延贊です。彼に言い含め、汝州（河南省汝州市）太守に会って密かに相談させ、獄中の罪人で顔が郡馬（皇族の娘婿。楊六郎を指す）に似ている者を選び、首を斬って聖上に献上させるのです。楊六郎を他の地へ逃がしましたら、後日国難があった時、我らが上奏をして出征させ、戦功で罪を償わせることにします。この計略はいかがでしょうか²⁶。」

このような楊家を守ろうとする八王の行為が必ずしも全面的に成功するわけではないのであるが、楊家が何度も危機を迎えながらも滅びることがなかったのは、やはり八王の力添えによるところが大きい。

八王は、時には自らの手で奸臣に鉄槌を下すこともある。第二卷第三則、眞宗がまだ即位する前で七王と呼ばれていた頃の話である。奸臣の王欽が七王をそそのかし、帝位を巡るライバルを抹殺するべく、八王に毒入りの酒を飲ませようとしたことがあった。この策略は失敗に終わるが、後にこのことを知った八王は、王欽の顔を金簡（角柱状をした鉄製の打撃武器）で打って制裁を加える。王欽は激しく泣き、悔しがることしかできなかった²⁷。

実は八王が佞臣を金簡で打つことについては、帝のお墨付きがあった。『北宋志傳』第五回において、太祖が死ぬ間際に八王に金簡を授け、朝廷に不逞の輩があれば打ち殺すようにと言う場面がある。

君主たることはたやすくなく、今は皇位をそなたの叔父に伝え、そなたに代わり労を引き受けてもらう。今そなたに一振りの金簡を授けるが、朝廷に不正な臣下がいたならば、思うままに誅殺せよ²⁸。

また「開詔救忠」雑劇の第四折における八大王の登場詩にも、「手提勅賜黄金簡、專打奸臣佞子頭（手には帝より賜った黄金の簡を持ち、もっぱら奸臣佞臣の頭を打つ）」とあり、やはり佞臣を簡で打つことを帝から認められていたことがわかる。『楊家府』ではこうしたお墨付きに関する描写はないが、恐らくこちらでも自明の設定として読者に受け入れられていたのであろう。

このようなお墨付きとして代表的なものに、「勢劍金牌」というものがある。これは物語中のある特定の人物に、天子の決済を仰がずとも独断で斬り捨てることを許された劍と、その権限を象徴するメダルが与えられているという設定である²⁹。この設定はしばしば見受けられ、『三國志演義』第三十九回において、劉備の幕下に加わって間もない諸葛亮が、張飛らを自分の軍令に従わせるために劉備から劍を授かる場面もその一例である。無論、八王の金簡もこの流れを汲むものであるが、勢劍が単に権限の象徴に留まることも少なくないのに対し、八王の金簡は実際に奸臣を打つために使われている。これにより、読者にその権限をより直接的に知らしめると共に、彼らの溜飲を下げる役割を果たしている。劍で斬殺するのに比べると、金簡で打ち据えるというのはやや手ぬるく感じられるかも知れないが、強大な力を持っていながら使わないよりは、きちんと悪に鉄槌を下してくれる八王の方が、読者が親しみや憧れを抱きやすかったに違いない。

八王の他に重要な人物として、楊五郎と楊四郎がいる。名前を見てわかる通り、彼らは本来は楊家の人間であったが、事情により楊家本体から離れた形で行動することになる。『楊家府』第一巻第六則で、楊家は遼軍の攻撃から太宗を守り抜いたが、楊令公の息子の内、長男の淵平、次男の延広、三男の延慶が戦死し、四男の四郎延朗は太宗の身代わりとなって遼に捕らえられ、五男の五郎延徳は消息不明となる。

その後、第二巻第一則において、潘仁美に陥れられて父と弟を失った楊六郎は、陳家谷から落ちのびる途中で遼の將軍の黒塔に出くわす。両者が戦っていると、突然山の後ろから一騎が駆け付け、手に持った斧で黒塔を斬り殺し、遼の兵士達を追い散らした。楊六郎がその者を見ると、なんと行方不明になっていた兄の五郎延徳であった。楊五郎は次のように語る。

あの時は遼兵と激しく戦ったが、形勢は甚だ逼迫し、逃れることは難しいと考え、剃髪して僧となり、五臺山にやって来たのだ。先日人々が遼と宋が交戦すると言っており、また陳家谷では殺気が立ち昇っていたので、心中とても驚き、わざわざ山を下りて来てみると、そなたが敵と戦っているのに出くわしたのだ³⁰。

つまり楊五郎は父や弟とはぐれた後、遼兵から逃れるために五臺山に登り、剃髪して僧となっていたのである。彼はこれ以降、普段は五臺山に身を置きながらも、雙龍谷で遼軍に包囲された楊六郎の救援、天門陣破り、飛虎谷に閉じこめられた宋の十大朝臣の救援な

ど、重要な局面になると請われて戦闘に加わることになる。彼の心には五臺山で静かに暮らしていたという思いがあり、初めは要請を断ろうともするのだが、楊家の存亡に関わり、また朝廷の恩も疎かにはできぬということで、結局は出陣することになってしまうのである。ただし五臺山は凶悪な罪人や無頼の徒が逃げ込んで出家する場所でもあり、いざ戦闘となると楊五郎は彼ら僧兵を率いて活躍する。

楊五郎の人物像については、『水滸傳』の魯智深との類似がかねてより指摘されている³¹。魯智深も肉屋の鄭を殺した罪から逃れるために五臺山で出家した破戒坊主である。ただし魯智深以外にも、『平妖傳』における喧嘩っ早くいたずら好きな蛋子和尚や、『西廂記』において、普救寺を取り巻く賊軍の囲みを破って救援軍を呼び寄せる恵明（『董解元西廂記諸宮調』では法聰）など、我が国の武蔵坊弁慶のような荒法師は中国においてポピュラーな存在であり、楊五郎もその類型である。このような荒法師キャラクターは、旧来の規律に縛られることを嫌うが、自分が守るべき存在や使命のためには労を惜しまないことから、その天衣無縫な豪快さが民衆に親しまれていたのであろう。

続いては楊四郎である。彼は第一巻第六則において遼の捕虜となったが、蕭後の前に引き出されても膝を屈せず、怒った蕭后が斬ろうとしても全く恐れる色を見せなかった。そのため却って蕭后に気に入られ、蕭後の娘である瓊娥公主の婿にされることになる。楊四郎は初めは固辞したが、ただ死ぬよりは遼国で隙を窺う方が良いと思い、縁談を受け入れる。ただし自分の本名は隠しておき、「楊」の字を分解した「木易」と名乗った。

蕭天左が結婚の話が承諾されたことを太后に上奏すると、太后は楊延朗を釈放するように命じ、「そなたは名を何という」と尋ねた。楊延朗は心中で、本当の名を言えばきっと許されないだろうと考え、そこで楊の字を分け、「私は姓を木、名を易と申します」と偽って答えた³²。

楊四郎が遼国の婿となり命を長らえていることは、後に楊家の方でも情報を得ていたが、互いに連絡を密に取り合うということはできずにいたようである。

時は過ぎ、第四巻第七則において、宋軍が遼の天門陣を攻めあぐねている最中に楊六郎が病に倒れ、その病を治すために龍髪、すなわち蕭后の頭髪が必要となる。そこで楊家は孟良を遼へ潜入させ、楊四郎を頼ることにする。屋敷に忍び込んで来た孟良から話を聞いた楊四郎は一計を案じ、夜中に突然胸が痛いと呼び、これを治すためには蕭后の頭髪を灰

にして飲まなければならないと妻の瓊娥公主に告げ、頭髪を手に入れることに成功する。
このおかげで、楊六郎は無事に回復した。

駙馬（楊四郎）「以前龍髪を灰にして服用したことがあり、数年は順調だったのだが、
今にわかになら再発したのだ。」

瓊娥公主「龍髪はどちらで得られましたか。すぐに人を遣わして求めさせ、治療しま
しょう。」

駙馬「中国にだけあり、この地では得ることはできぬ。ただ太后様の龍髪は、代わり
とすることができるかもしれぬ。」

瓊娥公主「それならば容易いことです³³。」

また第五卷第八則で、天門陣を破られた遼が降伏文書を取り交わしたいと申し入れて来たため、宋では八王や寇准ら十大朝臣を向かわせる。しかしこれは遼の間者である王欽の策略であり、十大朝臣は飛虎谷で遼軍に包囲されてしまう。遼の陣中に加わっていた楊四郎は、まずは十大朝臣が餓死するのを防ごうと、谷の中に矢文を放って遼軍の糧秣輸送部隊が通る場所と日時を知らせ、孟良らにそれを奪わせる。

木易は陣中で、「朝臣は包囲されて既に久しく、援軍も来ないから、もし糧秣が絶えれば、皆は谷の中で餓死してしまう」と考えた。そこで一計を案じ、一通の手紙を書き、鏑矢に結び、密かに宋臣の陣営の辺りに行くと、真っ直ぐに矢を射て、密かに人を山の裏に出撃させて食糧を奪うように取り決めた³⁴。

また孟良が救援を求めるために谷を抜けようとして捕らわれた時も、密かに彼を逃してやった。この後孟良から知らせを受けた楊六郎が包囲を破る。そのまま幽州（北京市）を攻めることになるが、楊四郎が内応したことによって城は落ち、遼は平定される。

楊五郎が直接楊家の軍に加わって助力するのに対し、楊四郎は遼の内部から楊家をサポートする存在といえよう。敵の中にこちらの内通者がいるということは、この上なく有利な状況である。情報を得て先手を取ることも可能であるし、内部から反乱を起こさせれば敵は総崩れにもなり得る。当然ながら、内通者が敵の中核に近い位置にいるほど効果は大きい。その点では、楊四郎が蕭後の婿に迎えられたことは、ただ楊四郎にとって命を長ら

えることができただけでなく、後の楊家の命運を左右する重要な転機であった。

この『楊家府』における征遼戦争の場面は、『水滸傳』と共通するものがある³⁵。既に述べたように、雙龍谷や飛虎谷などで宋軍は何度か遼軍に包囲されるが、『水滸傳』第八十六回でも盧俊義らの軍が四方を切り立った崖に囲まれた谷に閉じ込められる。宋江は老人から地理を聞くなどして、谷の入り口を固めていた遼軍を打ち破り、仲間を救い出す。ただし『楊家府』では、謀略を予測しての八王の準備、遼国内に入り込んでいた楊四郎の密かな食糧援助、孟良が包囲を突破して救援を求めに行く過程などが詳しく描かれているのに対し、『水滸傳』では趣向のみを安易に借りたためか、簡単に包囲が破られてしまい、やや緊迫感が薄れている。また、別の場面で宋江が遼国の混天象の陣を破ることができずにいた時、夢で九天玄女から陣を破る術を教わって勝利を収めるが、『楊家府』では遼の天門陣を攻略するに際し、楊宗保の活躍や楊五郎の協力に加え、八仙の一人である漢鐘離の助力を得て勝利する。更に、楊四郎が遼の婿になって内応するというのは、『水滸傳』の方臘征伐において、柴進が方臘の王宮に潜入して婿となり、決戦時に内応するのと同じ構図である。これらの類似性については、どちらがどちらに影響を与えたというものではなく、それぞれの小説の元となった語り物が盛り場で競合し、講談からまとめられて小説の形を成していく中で、互いに影響を与えあった結果と見るべきであろう。

これまで見てきた八王、楊五郎、楊四郎といった、楊家の後ろ盾や協力者となるような人物の活躍が目立つのは楊六郎の代までであり、次代以降はほとんど見受けられない。彼らのような楊家の協力者に当たるキャラクターの存在が希薄になっていくのである。確かに神宗の弟である周王などは後ろ盾と見なすことができようが、彼にしてもほぼ同じ役割を果たしていた八王に比べると影が薄い。なぜ楊家の協力者が姿を消すようになったのであろうか。それは、楊家自身が強大な力を持つようになったからと考えられる。

楊氏一族中の楊宗保、楊文廣、楊宣娘は超人的な法術を身に着けており、特に楊宣娘の力は飛び抜けている。儂智高を捕らえ、八臂鬼王を調伏するなど、彼女が戦闘に加わればほぼ負けることはない。また楊宗保の代から、木桂英に代表される巾幗英雄を継続的に家中へ取り入れることによって楊家の軍事力を増強させており、それは後の十二寡婦征西へと繋がっていく。西夏討伐において、楊文廣父子が八臂鬼王の迷昏陣に陥れられて援軍を求めると、楊宣娘を始めとする十二人の寡婦が出陣して陣を破る。

つまり楊家は、戦闘において外部からの助けを必要とするような危機に陥ることがなくなり、仮にそのような危機があっても、楊家の力のみで十分に状況を切り開くことができ

るまでになっていくのである。楊家自体がそこまでの力を持つに至っては、別働隊的な動きで危機を救う楊五郎や、敵の内部から呼応する楊四郎のような存在はもはや不要となる。それに伴い楊家の立場も変化する。数多くの戦功を積むことで朝廷に実力を認めさせた楊家は、農智高や西夏との戦いの頃には、戦時において朝廷から頼られる存在となっている。そうなる则それほど強い後盾がなくとも、もはやその立場は簡単には揺るがないのである。

四、豪傑達の活躍

既に述べたように、楊家将の二代目に当たる楊延昭は楊令公の六男であり、父や兄弟の戦死を受けて楊家を背負って立つこととなる。幽州において遼の軍から太宗を救った功によって金花柴郡主を降嫁されており、またその時に、楊延昭の名が太祖の次男である武功郡王趙德昭の諱を犯していることから、楊景という名を賜っている。ただし『楊家府』では専ら楊六郎と呼ばれており、楊景という呼び方は雑劇で多く見られる。この時点で母の余氏（令婆）は健在であり、妹に洪八娘と瑛九妹がいる。

『楊家府』第二卷第四則で、楊六郎は遼への備えとして幽州に近い佳山寨へ赴くことを志願する。この時に岳勝という軍人が配下に加わる。岳勝は濟州（山東省鉅野県）の人にして、大刀を振るっては万夫不当であり、花刀岳勝と呼ばれていた。元々楊六郎の配下には、遼の間者である王欽の差し金により、老人や病人ばかりが従うことになっていたのであるが、岳勝は楊六郎に従って功を立てようと思い、病人のふりをして兵卒の中に潜り込むことに成功する。そして楊六郎と力比べをして実力を認められ、配下に加えられた。

岳勝は楊六郎がこの軍は役に立たないと言っているのを見ると、陣頭に進み出て、「あなたは武門に生まれ、自ら人並み外れていると称されているが、私が今からあなたと力比べをするのはいかがか」と叫んだ。楊六郎は、「よかろう」と言った³⁶。

佳山寨に着いた楊六郎は、向かいの山麓にある可樂洞を根城とする、数百人の盜賊が略奪を働いていることを聞かされる。盜賊の首領は孟良という名で、鄧州（河南省鄧県）の人にして、誰もかなわないほどの剛力の者という。そこでまず岳勝が様子を窺いに行くと、たまたま孟良はいなかったため、岳勝は盜賊を何人か斬った後、血で洞窟の壁に楊六郎の名を記した詩を書き付け、佳山寨に孟良をおびき出すことにする。詩を読んだ孟良は仇を

討とうと楊六郎に挑むものの、一度目は楊六郎に馬を射られて落馬し、二度目は谷に誘い込まれた上、樵夫に扮した楊六郎の兵士に騙されて宙吊りにされ、三度目は落とし穴に落ちてしまう。孟良は楊六郎が智勇に優れた将であることを痛感し、彼に心服する。この際、孟良の部下である劉超や張蓋ら、十六名の頭目達もまとめて配下に加わっている。

樵夫達は、「大王様がこの縄を腰にきつく結べば、我らが引き上げましょう」と言った。孟良は「お前達、注意深く用心して引き上げろよ」と言い、縄できつく腰を縛った。人々は崖の半分まで引いたところで引くのを止めた。孟良が「どうしてもっと引き上げないのだ」と言うと、人々が言うには、「大王様の体がとても重くて、我らは力が尽きてしまいました。もう何人か呼んで来て一緒に引かなければ、引き上げられません」とのこと³⁷。〈第二巻第五則〉

さて孟良の話によると、佳山寨から六十里離れた芭蕉山に、焦贄という凶悪な者が数百人の手下を率いて立て籠もっているという。そこで楊六郎は、普段から親しくしているという孟良を遣わして、焦贄を配下に招くことにする。しかし、孟良から官軍に投降したと聞かされた焦贄は激怒し、その様子に孟良も逃げ戻るしかなかった。結局、楊六郎が焦贄と戦っている間に、岳勝と孟良が芭蕉山の砦を焼き討ちするという作戦を行う。焦贄は山中に逃げ込むものの、苔に足を取られて山の中腹から滑り落ち、そのまま捕らえられてしまう。陣中で楊六郎が自ら縄を解いてやり、共に遼を討ってくれるように語りかけたので、焦贄も楊六郎に心服することとなる。

楊六郎の歩兵は焦贄が山腹に上るのを見ると、一斉に山腹へ追い掛けた。焦贄は慌てていたので、中腹までよじ上ったが、苔で滑って転げ落ちた。兵士達は彼を捕らえると、縛り上げて佳山寨へ戻った³⁸。〈第二巻第五則〉

このようにして楊六郎の配下となった豪傑達であるが、彼らの内まず岳勝は、今後も登場するものの、やや影が薄い。当初こそ岳勝、孟良、焦贄の三人組で登場していたが、孟良や焦贄の活躍の場が増えるに反比例するような形で出番が少なくなっていく。軍人の出身であるためか、孟良や焦贄に比べると豪快な暴れ振りを見せることもできず、小さくまとまってしまった観がある。孟良の元部下の十六名に至っては更に出番がなく、まれに数

合わせのような形で一部の者の名前だけが見える程度で、具体的に彼らの行動を描いている場面はほとんどない。一方で、楊六郎に対してひたすらに忠義を尽くし、彼以外にはたとえ朝廷であっても束縛されることなく、縦横無尽に暴れ回るのが孟良と焦贛である。

焦贛が配下に加わった後、第二巻第六則において、楊六郎は諸将と共に八月中秋の月を見ながら酒を飲み、楊六郎だけに留まらず、岳勝、孟良、焦贛も意外な才能を発揮して詩を詠んで楽しんでいた。その最中に楊六郎は、父の遺骨が遼国にあり、取り戻して一族の墓に埋葬したいと願いながらも、未だにそれを遂げられずにいるのが無念であるとの心情を思わず吐露する。宴が終わると、楊六郎に三度許された恩に報いるために楊令公の遺骨を取り戻そうと考えた孟良は、夜の内に陣中を抜け出す。

楊令公の遺骨が紅羊洞にあるとの情報を得た孟良は、蕭太后の誕生日祝いに魚を献上しに行くという漁夫にたまたま出会う。そこで彼を短刀で殺し、衣服を奪い漁夫になりすまして城中に入り込む。紅羊洞に着いた孟良は、石の箱に入れられた楊令公の遺骨を見付け出し、風呂敷に包んで持ち出そうとするが、洞の入り口で番人に見つかってしまう。そこで孟良はとっさに、父が急死したのでここで火葬したと言って激しく泣いたので、番人はそれを信じて孟良を釈放する。西涼国から宋に送られる途中に遼が奪ったという良馬を盗み出すと、孟良はそれに乗って佳山寨へ逃げる。事態に気付いた遼では、蕭天右が兵を率いて孟良を追い、佳山寨に迫るが、岳勝と焦贛によって阻まれる。事情を聞いた楊六郎は孟良をねぎらい、楊令公の遺骨を埋葬し、良馬を朝廷に献上した。

見ると楊令公の遺骨は、石の箱に入れられていた。孟良は風呂敷を取り出し、遺骨を包み、洞の入り口に行ったが、番人に捕らえられ、「お前は何者だ。きっと間者であろう」と怒鳴りつけられた。孟良は、「私は黄河の漁父の子で、先日魚を献上し、太后様のお誕生日をお祝いし、父子共に酒と食事を賜りました。しかし我が父は酒に酔って死んでしまい、亡骸を持ち帰ろうとしたのですが、旅路は遠く、亡骸をここで火葬し、遺骨を包んで帰って埋葬するしかありません」と言うと激しく泣いた³⁹。

主君の憂いを除こうと一人で奮起する姿は胸を打つものさえあるが、目的を果たすためには無関係の漁夫をもためらいなく殺す残虐さや、番人から言い逃れたり良馬を盗み出したりする狡猾さは、元盗賊の孟良の面目躍如たるものがある。この孟良が楊令公の遺骨を遼から取り戻すという話は、「昊天塔孟良盜骨」雑劇でも取り上げられている⁴⁰。

また第三卷第二則「孟良計賺萬里雲」において、遼軍によって雙龍谷の中に包囲された楊六郎を救うため、孟良は谷を脱出して五臺山の楊五郎を頼る。しかし巨漢の楊五郎が出陣するには並の馬では役に立たず、八王の乗馬である千里風か萬里雲でなければならないと言われる。そこで八王のもとへ行き、馬を借りようとするのであるが、この時八王はまだ孟良と面識がなかったために疑われ、断られてしまう。すると孟良は夜中に八王の屋敷に忍び込んで火を放ち、その混乱に乗じて千里風を盗み出す。八王は千里風を盗まれたことに気付くと萬里雲に乗って追い掛け、またたく間に追い付く。そこで孟良は、ぬかるみの中に千里風を残して自らは林の中に隠れ、八王が萬里雲から降りて千里風に近付いたところを、素早く萬里雲に飛び乗って逃げ去る。こうして孟良は、見事に楊五郎のための乗馬を借りることに成功した。

八大王は追い付き、馬がぬかるみに陥っているのを見ると、笑いながら言った。「あの賊は色々と目論んでいたが、馬が進まなかったので、ぬかるみに突き落とし、私があやつを追い掛けぬようにしたのだ。ひとまず將校が馬を引き上げに来るのを待とう。」しかし心中は馬が傷ついていないか心配であったので、萬里雲から飛び下り、進み出てその様子を見た。孟良は八王が馬を下りたのを見ると、急いで林から走り出て、萬里雲に飛び乗ると、「殿下にはお咎めになられませぬよう。この馬をお借りし、遼の兵を退けましたら、すぐにお返しします」と叫んだ⁴¹。

この場面においても、孟良の機智がクローズアップされている。また彼の行動の根底にあるのは、危機にある楊六郎を何としてでも救いたいという実直さである。このような要素が、孟良をただ腕力にのみ頼る豪傑という範疇には留まらせず、彼の人物形成に深みを与えている。

続いて焦贊である。彼が最も大暴れをするのは、第三卷第三則の後半から始まる謝金吾殺しの場面であろう。王欽は楊家の失脚を目論み、朝廷で権勢を振るっていた謝金吾をけしかけさせる。楊家の屋敷である無佞府の滴水天波楼が往来の妨げになっているとして、取り壊しを命じたのである。令婆や柴郡主が抗議をしても謝金吾は聞き入れず、そこで瑛九妹が三関を守備している楊六郎のもとへ事態を知らせに向かう。妹から話を聞いた楊六郎は、三関の守備を岳勝らにまかせ、密かに汴京（河南省開封市）へと向かう。すると途中で焦贊が行く手を遮り、汴京のにぎわい振りが見たいので連れて行くように求める。楊

六郎は、焦贊の性格から汴京で必ず騒動を起こすに違いないと思って承知しなかったが、焦贊が食い下がるので、決して騒ぎを起こさぬように言い聞かせ、結局彼の同行を認める。

楊六郎「本当に腹立たしい。私はこの道中で他人に気付かれることを恐れているし、しかもそなたは性格がとて凶暴だから、都へ行けば、結局は禍を引き起こすであらう。そなたは私の言うことを聞き、三関へ帰るのだ。私が戻ってからそなたには手厚く褒美をとらせよう。」

焦贊「私は褒美などほしくはなく、景色を見に行きたいだけです。行くのを許さないのであれば、私は先に都へ行って将軍が密かに三関を離れたことを言いふらしましょう⁴²。」

〈第三卷第四則「楊六郎私下三関」〉

汴京に着いた焦贊は、見張りの兵を付けられて大人しくしていたが、二日ほど経つと退屈でたまらなくなり、見張りの兵に頼み込んで、監視付きという条件で楊六郎に黙って外出する。都の賑やかさに驚いたり酒を飲んだりしていた焦贊は、ある大きな屋敷の前にたどり着く。実はそれが謝金吾の屋敷であった。憎き謝金吾の名を聞いた焦贊は激しく怒り、見張りの兵の制止を振り切って屋敷に入り込む。そして厨房にいた小間使いを手始めに、謝金吾を含めて屋敷にいた十三人を皆殺しにする。焦贊は楊六郎に累が及ばぬようにと、血で自分の名を記した詩を壁に書き付けておいたのだが、結局二人とも捕縛される。八王の助命嘆願により、楊六郎と焦贊は別々の地に流罪となるが、楊六郎は流刑地で更に讒言に遭い、処刑されかけたところを脱出して身を隠す。この謝金吾殺しの場面も雑劇の題材とされており、「謝金吾詐拆清風府」雑劇が現存している⁴³。

先の孟良が果敢さと智恵の両方を備えているように思えるのに比べ、焦贊は感情のままに行動し、迷うことなく人を殺す。謝金吾一家に対する殺戮は、『水滸傳』の武松が張都監の一家を鴛鴦楼で皆殺しにした場面に劣らない。焦贊の天真爛漫な行動は周囲を巻き込み、物語全体を動かしていく役割を果たしている。

楊六郎が身を隠して再起を図っている間に、岳勝ら豪傑達は、楊六郎が死んだと思い込み、もう官軍にいる義理はないとばかりに太行山へ落草する。皇帝を自称し、昔と同じく手下を従えて略奪を行う生活に逆戻りしていた。彼らは後に冤罪の晴れた楊六郎によって再び招集されるが、共に遼を討って帝を救うのだと言う楊六郎に対し、岳勝はこう言う。

帝は將軍のことを考えず、讒言を信じ、死地に陥れたのですから、その恩は極めて薄いものです。將軍は平素から忠義を抱き、力を尽くして王家を助けられたので、天は愚かではなく、禍が遠のいて身が保たれたのです。私が思いますに、帝を救いに行く必要などなく、この地において天子と称し、多少の快樂を享受されれば良いではありませんか⁴⁴。〈第四卷第二則〉

官軍に身を置いていたとはいえ、彼らは朝廷に仕えているつもりなど毛頭なかった。あくまで直接の主君である楊六郎に惚れ込み、忠義を尽くしているだけなのである。それ故に、楊六郎が死んだと思ひ込むと勝手気ままに行動し、彼があくまで帝をお救いすると言えば結局それに従うのである。

救国の英雄に命を預け、忠実かつ勇敢に戦う彼ら豪傑の姿は、民衆の期待や憧れを反映したものである。元山賊であろうとも、現実の軍中においてそういう者は珍しくなかったのであるから、何ら不都合はない。むしろ彼らは英雄と民衆を繋ぐ存在となっている。奸臣や貪官汚吏が豪傑に打ちのめされる場面にこそ、民衆は最も拍手喝采を送ったのではなかろうか。

最後に孟良と焦贊のその後を見てみよう。『楊家府』第六卷第四則において、宋軍が遼を平定し、都に凱旋した後のある夜、楊六郎の前に楊令公の霊が現れる。霊が言うには、十数年前に孟良が盗み出した楊令公の遺骨は偽物であるとのこと。本物の遺骨が幽州の望郷臺にあると知った楊六郎は、再び孟良に頼んで取り戻しに行かせる。すると焦贊は、今度は自分が孟良より先に遺骨を持ち帰って手柄を立てようと思い、孟良の後を追う。孟良は遼の人々の目をごまかし、日暮れ時になると望郷臺に登り、遺骨が納められた木箱を探し出す。孟良が木箱を背負って立ち上がると、隠れていた焦贊が後ろから声をかける。孟良は驚き、捕り手かと思って斧を振り回し、焦贊を殺してしまう。相手が焦贊であったことを知った孟良は、責任を感じ、たまたま出会った宋出身の者に遺骨を託した後、自ら剣で首をはねてしまった。

一更になり、こっそりと臺に上ると、果たして香木の箱があり、遺骨が入っていた。孟良は風呂敷を解き、木箱を包んだ。背負って立ち上がると、なんと背後に隠れていた焦贊が、包みを引っぱり、声を励まして、「臺の上で悪さをしているのは誰だ」と言

った。孟良は慌て、捕り手だと思い、鋭い斧を抜いてむやみやたらに斬りかかると、焦贊の額に命中し、何も言わずに絶命した。孟良は包みを背負い、臺を下りたが、少しも物音がしないので、「捕り手が一人だけであるはずはない。先程聞いた声は焦贊に似ていた」と考えた。そこで再び臺に上り、亡骸を裏返して見ると、非常に驚き、「やはり焦贊であったか」と言った⁴⁵。

勘違いによる同士討ちという、どことなく喜劇的でありながらも、この上なく悲劇的な二人の最期である。二人の死を知った楊六郎も病にかかり、そのまま回復せずに死んでしまい、そして楊六郎が死んだ悲しみから八王も死んでしまう。実はその直前に、八王の夢の中で楊六郎が白虎となって朝廷に入り、その首を八王が射たことから楊六郎の命が尽きることになってしまうのであり、こちらも同士討ちのようなものである。こうしてこれまで物語中で活躍してきた英雄と豪傑は、立て続けに舞台から姿を消す。

次代の楊宗保以降の物語中において、孟良や焦贊のような豪傑の姿を見ることはできず、いささか寂しいものがある。一応は、楊文廣に常に付き従う魏化などの人物がいるが、孟良や焦贊のような奔放さや豪快さは持ち合わせておらず、彼らに比べてかなり見劣りがする。豪傑に代わって頭角を現すようになるのは、巾幗英雄である。それ以前から登場していた木桂英以外にも、楊宣娘、杜月英、寶錦姑らが次々と登場する。こうした現象は、物語がその性格を変えたことによるところが大きい。リアリティよりもエンターテインメント性を要求し、むくつけき豪傑よりも麗しい女将を描くことに重点を置くようになったのである。

五、巾幗英雄

楊家将の大きな特徴は、一家全体が軍団を形成しているということであり、親子代々が武将であるのみならず、その妻や娘も武将である。そのため楊家将の物語では、楊門女将と呼ばれる巾幗英雄の活躍が多く見られる。しかも彼女達は往々にして、その父や夫をも凌ぐ実力を備えているのである。

既に述べたように、楊業父子についての史実は南宋の頃から民間で伝承されるようになり、講談や芝居を通じて様々なエピソードを蓄積してきた。ただし、虚構の女將軍団が楊家将物語の中に定着するのは、どうやら明代以降のようである。明の范濂『雲間據目抄』巻二「記風俗」によると、万曆庚寅（十八年、一五九〇）に松江の村祭りでは三、四十人の

妓女が「寡婦征西」に扮したとあり、同じく明の王穉登『呉社編』「捨會」には、蘇州府の村祭りで行われた仮装行列の一つとして「征西寡婦」の名が見える。これらは楊家の寡婦十二名が西夏討伐に出陣するエピソードを演じたものと思われ、つまり楊門女将は、遅くとも明末には村祭りでも演じられるほど人気があったことがわかる。しかし、先述した『酔翁談録』「小説開闢」に「楊令公」や「五郎爲僧」といった名が見え、また雑劇に孟良や焦贊を主人公にしたものがあるように、宋から元にかけての楊家将物語は主に英雄や豪傑の活躍を描いており、楊門女将の物語は後発のものと考えられる。

楊門女将の元祖ともいべき巾幗英雄は、楊業の妻にして、後に楊氏一族の長老となる佘氏（令婆、佘太君）である。彼女は夫や息子に次々と先立たれながらも気丈に一族を束ね、年老いてからも、軍令が下されれば陣頭に立つことさえいとわない。

令婆は『楊家府』第一卷第二則において、白い令字旗を立てて夫や息子達と共に出陣し、宋の將軍二人を同時に相手にしても全く後れを取らず、太祖を驚かせる。また第一卷第四則では、病により出陣できない夫に代わり漢主を守っている。

令婆はやって来ると、すぐに、「太原城はいかがでしたか」と尋ねた。漢主は、「太原城は宋の兵に包囲されており、私は入ろうとしなかったのだ」と言った。令婆が、「太原が陥落していないのでしたら、私が血路を開き、帝をお守りして入城し、遼の援軍を待つことにしましょう」と言うと、漢主は承知した。令婆が白い令字旗を立て、先駆けて突撃すると、宋の兵はそれを望み見て、散り散りに逃げた⁴⁶。

太宗の世となり、北漢が宋に降伏した後も楊令公は抵抗を続けようとするが、令婆は宋の使者を殺そうとする夫を押し留め、宋へ帰順するように説く。令婆は武芸に秀でているのみならず、大局を見通す目も備えていた。その後しばらくは屋敷に留まって家のことを取り仕切る日々が続くが、遼が布く天門陣を破るべく久々に出陣要請を受けると、第五卷第四則において、孫の楊宗保の指揮で、天門陣の一角を成す通明殿陣を攻めている。

楊令公夫妻には子供が九人いたが、遼との戦いの中で長男、次男、三男が戦死。四男は遼の捕虜となり、素性を隠して蕭后の娘と結婚する。五男は出家し、七男は潘仁美の手によって惨殺される。そして残った六男の楊延昭が二代目となる。この息子七人の下に、洪八娘と瑛九妹という二人の娘がおり、彼女らも母親譲りの武芸で活躍する。

洪八娘と瑛九妹の初陣は『楊家府』第二卷第四則である。晉陽（山西省太原市）におい

て宋と遼の武芸比べが行われ、宋の側が危うくなったところへ、楊六郎と共に颯爽と駆け付ける。後には母と同様に天門陣破りにも参加する。なお、淇八娘と瑛九妹の姉妹は紅錦套索という鉤付きの投げ縄を用いて敵将を捕らえるが、これは『水滸傳』の一丈青・扈三娘が用いる戦術と同じである。麗しき女将によって屈強な武将が絡め取られるという構図の妙から取り入れられたのであろう。

麻里招吉が陣に突撃して来ると、宋軍の中からにわかには葦毛の馬が一騎馳せて来たかと思うや、一人の女将が風のように走り出て、三度交戦したが、女将に紅錦套索を投げつけられると、麻里招吉は絡め取られて落馬し、生け捕られた。寇準は非常に喜び、「名は何と申される」と言うと、淇八娘は、「私は楊令公の長女の八娘でございます」と答えた。寇準は、「武門の娘はやはりお強い」と言うと、その名と戦功を記録するように命じた⁴⁷。

瑛九妹は、男装して単身で遼国に侵入するという大胆さも見せる。発端は楊六郎が雙龍谷で遼軍に包囲され、孟良が囲みを抜け出して楊五郎、令婆、八王らに協力を求めたことによる。遼軍が彼らに兵を退かせようとして、楊六郎は既に死んだという噂を流したため、瑛九妹が獵師の身なりをして様子を探りに行く。しかし山中で遼の兵に出会い、たまたま見付けた小さな庵へ逃げ込む。庵の主は瑛九妹に道服を着せ、自分の弟子ということにしてかくまってくれる。それでも遼の兵は疑いを解かなかったので、瑛九妹は彼らと腕比べをすることになるが、遼の兵は誰も彼女に敵わずに引き返す。遼の丞相である張華は、武芸に優れた者がいるとの話を聞き、使者を送って瑛九妹を幽州に招いたところ、風采が立派であることからとても気に入り、娘の婿にしようとする。しかし瑛九妹の顔を知っている者が遼の陣営にいたことから、瑛九妹は獄に入れられる。幸いなことに獄卒の章奴という者は瑛九妹に協力的であったため、楊五郎が幽州を攻めるのに合わせて脱出することができ、楊五郎と合流し、そのまま楊六郎を救い出すことに成功した。

謁見すると、張華が、「そなたは名を何という。生まれはどこか」と尋ねた。瑛九妹は、「私は姓を胡、名を元といい、原籍は太原でございます。幼くして文を習い、しばしば受験したものの及第できず、後にまた武芸を習いましたが、これもまた成就しませんでした。そこで家を捨て、修行の行脚をしておりました。昨日お召しを受けまし

たので、従わぬわけにもいかず、謁見しに参りました」と言った。張華は瑛九妹の声が澄んでおり、言葉が力強く、風采が美しいのを見ると、喜びに堪えなかった。そこで瑛九妹に書斎にいるように命じると、瑛九妹は礼を言った⁴⁸。〈第三卷第三則〉

『楊家府』では男装するのは瑛九妹であるが、京劇では淇八娘も男装をすることがある。木蘭に代表される男装の麗人という手法は、中国の戯曲や小説の中でしばしば使用され、瑛九妹や淇八娘がこの流れの中にあることは明白である。合山究氏は、「変装（男装女装）は意外性とスリルと諧謔に満ちた手法として抜群の効果を発揮し得る」が、「これを多用しすぎたならば、観客や読者はその陳腐さにうんざりし、リアリティを欠いた空疎な技法と感じる」と述べられる⁴⁹。確かに、女性が男装をすることも、実際には声や容姿といったことが問題となる。そうすると、『楊家府』における巾幗英雄達が、瑛九妹を除き、基本的に女性としての姿のまま武勇を振るうことになっているのは、むしろ潔いとすら感じられる。また、男装という手法を瑛九妹のみに用いることにより、その手法の新鮮さを保ちつつ、彼女を個性的で印象深いキャラクターとすることに成功している。

楊家女将の中で一番の知名度を誇る者といえば、木桂英（穆桂英）を置いて他にない。彼女は木閣寨の主である定天王・沐羽を父とし、勇気があって力が強く、弓と飛刀は百発百中という腕前。『楊家府』第五卷第一則において、孟良は楊五郎から、遼の天門陣に対抗するためには木閣寨にある降龍木で斧の柄を作らなければならないと聞かされ、木閣寨に向かう。しかし孟良は木桂英と争いを起こし、通行料と称して金の兜を奪われる始末。次に楊宗保が木桂英に戦いを挑むが、弓で馬を射られて捕らえられてしまう。木桂英は楊宗保が眉目秀麗で、態度も立派であることから、彼に結婚を迫る。降龍木を得る必要から結婚の約束をしてしまった楊宗保であるが、屋敷に戻ると楊六郎に反対され、獄中に拘禁されてしまう。孟良から話を聞かされた木桂英は、楊六郎と一騎打ちをして打ち負かし、堂々と楊家の嫁としての地位を認めさせる。

楊宗保は、「そなたの砦の後ろには二本の降龍木があるそうだが、一本を私に与えて斧の柄を作らせて頂ければ、陣を破った後、感謝の印に贈り物をしよう」と言った。木桂英は笑いながら、「あなたは木をお望みですが、私の手中の宝刀を勝ち取ることができれば、一本と言わず、二本でも差し上げましょう」と言った。楊宗保は孟良に、「あはずれがあのように不遜なことを言っているが、私があやつを捕らえ、自ら木を伐り

に行けば、あやつに頼む必要はない」と言った。そして槍を突き出して真っ直ぐ木桂英に向かうと、木桂英は刀を舞わせて迎え討った。交戦すること十数回ほどで、木桂英がわざと隙を見せ、馬に鞭打って負けた振りをし、山のふもとへ逃げて行くと、楊宗保は勢いに乗じて追い掛けた。木桂英は体の向きを変え、弓を取って密かに一矢を放ち、彼の馬に当てた。楊宗保が落馬すると、木桂英は近付いて生け捕って行った⁵⁰。

息子と木桂英の結婚に反対していた楊六郎であるが、彼にも女将の妻がいる。正妻は皇室の姫である柴郡主という。彼女は天門陣攻めの際、臨月の身でありながら夫と共に戦場を駆け巡り、戦いの最中に出産する。

正午になろうとする頃、柴郡主は長い間奮戦したために、産気付き、突然腹が痛くなり、だんだんと耐えられなくなり、遂に大声で「苦しい」と叫んだ。部下の兵士達は皆色を失った。柴郡主はたちまち落馬し、一人の赤ん坊を産むと、意識が朦朧として地に倒れた。…〔中略〕…木桂英は馬を降り、柴郡主を助け起こし、生まれた赤子を包み、自分の懐に入れ、再び柴太郡を助けて馬に乗せ、その後自ら馬に飛び乗って出撃し、青龍陣を破った⁵¹。〈第五卷第三則〉

更に楊六郎は、遼との戦いの最中に二人の妻を得る。一人は西夏国王女の黄瓊女である。当初、彼女は遼軍に加勢して宋軍を悩ませていたが、実は楊六郎の元婚約者であり、仲人の死によって婚約が立ち消えになってしまったという経緯があった。黄瓊女は宋軍を阻むために、裸体をさらして呪術を操っていたが、女将ゆえに術に惑わされない金頭馬氏から「恥知らず」と叱りつけられると、恥ずかしさに打ちひしがれて悩んだ末、遼を捨てて宋に帰順する。

さて黄瓊女は帳の中に戻り、考えた。「私は遼を助けに来たのに、裸になるように命じられ、本当に恥ずかしいこと限りない。思えば昔鄧令公が仲人となり、我が父は私を山後（河北・山西地方）の楊繼業の六男と婚約させたが、鄧令公が亡くなったために、この縁談は無くなってしまった。聞けば宋の大軍を率いているのは、私の昔の許婚であった六郎様であるとのことなので、部下を率いて宋に投降し、良き連れ合いとの縁談を続ける方が良く、夷狄を破るのをお助けして、このような恥辱に報復すれば、

なんと溜飲が下がることか。」考えが決まると、翌日密かに部下を遣わし、金頭馬氏の陣営に書状を送らせた。金頭馬氏は書状を得ると、令婆に知らせた⁵²。〈第五卷第三則〉

もう一人は、遼国討伐の終盤で登場する重陽女である。彼女は北漢に仕えた莊令公の孫娘で、やはり楊六郎の元婚約者であった。彼女は宋に敵対するふりをして遼を欺き、楊四郎と協力して討伐を成功に導く。

楊六郎が、「そなたはいかなる策で、私に代わって功を立てようというのか」と言うと、重陽女は、「私はこの機に乗じ、蕭后のもとに身を寄せ、内応しましたら、あなた様に外から呼応して頂こうと思いますが、この策はいかがでしょうか」と言った。楊六郎は、「そなたがそのようにするのであれば、素晴らしいことだ。幽州を攻め破れないはずがあるまい」と言った。重陽女は喜んで別れ、本陣に戻り、部下を率いて南の陣を突き破ると、岳勝や孟良らは負けた振りをして退却した⁵³。〈第六卷第二則〉

楊宗保の息子である楊文廣には、女将の妻が三人もいる。三人とも元は盗賊の娘であり、そのうちの二人、寶錦姑と杜月英は姉妹の契りを結んだ間柄である。第七卷第四則において、楊文廣は杜月英によって盗まれた東岳参りのための宝物を取り戻すよう命じられる。宜都山で寶錦姑の率いる軍に道を阻まれ、彼女と戦うが、生け捕られてしまう。寶錦姑は楊文廣の立派な風采を見て喜び、強引に結婚の約束をさせる。そこへ嫉妬した杜月英が乗り込んで来る。杜月英はかねてから楊文廣の噂を聞いており、彼を婿にしたいと常々思っていたのである。楊文廣は杜月英とも戦うが決着は着かず、話し合いの結果、彼女とも婚約する。楊文廣はひとまず二人に別れを告げ、取り戻した宝物を携えて東岳参りへ出発する。燕家荘を通りかかると、そこの主である鮑大登や、その息子の鮑世卿が宝物を奪いに来るが、楊文廣に打ち負かされる。すると鮑大登の娘である鮑飛雲が出陣し、彼女は楊文廣を谷底に誘い落として捕らえてしまった。そしてまたも楊文廣は鮑飛雲に見初められ、婚約することとなる。

杜月英は、「あなたはもしや文廣將軍でございますか」と言うと、楊文廣は、「その通りだ」と言った。杜月英は、「あなたは私の夫ですから、戦いませぬゆえ、早くあのあばずれを呼び出して来て私と戦わせて下さい」と言った。楊文廣はそれを聞くと、

それ以上話をせず、馬に鞭打って真っ直ぐ杜月英に向かって行った。杜月英は迎え撃ち、馬を交えること数十回になったが、勝敗は着かなかった⁵⁴。〈第七巻第五則〉

その後、軍人としての多忙な職務に戻った楊文廣は、儂智高討伐などもあったため、三人を迎えに行くことができずにいた。そこで業を煮やした三人は、連れ立って楊家の屋敷に押し掛ける。これにはさしもの木桂英も驚くしかなかった。

そして寶錦姑ら三人は、階の下で一斉に拝礼をし、「お義母さま御機嫌いかがですか。私達は長い間お世話をいたしませんでしたが、どうかお許し下さい」と言った。木夫人は驚き、「ご婦人方はなぜそのような呼ばれるのでしょうか」と言った。寶錦姑がまさにその事情を訴えようとする、たちまち外から大きな声で、「忠烈侯が戻られました」と聞こえた。楊文廣が入って来ると、寶錦姑らは彼を迎え、拝礼をして、「あなた様はお別れしてからつつがなくお過ごしでしたか」と言った。楊文廣は、「おかげで無事であった」と言うと、三人の娘に関することを全て木夫人に知らせた⁵⁵。〈第七巻第七則〉

木桂英や寶錦姑らとの結婚は、「臨陣招親」や「比武招親」と呼ばれる定番の趣向であり、決闘による略奪婚である⁵⁶。大抵は勝利を収めるのは女将の方で、英雄であるはずの男性は手も足も出ずに略奪されてしまう。楊家は女将との血縁関係を構築することによって新たな人材を獲得し、戦力を拡大していく。そして、その新たな戦力が苦境を打開する作用を果たすことになるのである。事実、新たに加わった女将やその子孫達の力がなければ、遼、儂智高、西夏との戦闘で次々と訪れる難局を乗り越えることは不可能であった。つまり『楊家府』において結婚は、その先に展開されている女将の活躍を導き出す機能を果たしていることになる。

楊文廣の姉に当たる楊宣娘は、武勇に秀でているのみならず、法術までも身に付けている。彼女は第七巻第二則において、儂智高によって柳州城で包囲された楊宗保と楊文廣を救うために初陣を飾る。そして儂智高と一騎打ちをし、馬の首を斬り落として儂智高を落馬させ、見事に捕らえた。

夷狄の兵は谷から逃げ出そうとしたが、前軍の報告では、谷の入り口に軍がいて道を阻んでいるとのことであった。儂王天子は知らせを聞くと、勇み立って先駆けて出

撃した。楊宣娘は旗印が儂王のものであるのを見ると、馬を出して交戦した。ただ一回で、楊宣娘の振るう刀によって馬の頭を斬り落とされ、儂王が地に落ちたので、宋兵は儂王を縛った⁵⁷。

また西夏討伐においては、蟹の精の化身にして妖術を操る八臂鬼王を相手にして、術比べを繰り広げ、最終的に八臂鬼王を調伏してしまった。

楊宣娘は袖の中から真火を取り出し、四方を焼き、呪文を念じた。すると四方の石は、焼けて火炎が燃え上がった。続けて九日焼くと、ようやく鬼王の口から一つの粒が出てきた。宣娘はすぐに老君の鉄鉗で掴み出した。さらに五十四日焼くと、ようやく六粒の丹が出てきた。…〔中略〕…焼き終わると、宣娘は、「皆の者よ石を運んでおくれ。今や七粒の丹を掴み出したから、こやつは変化できない。お前達は引っ立ててさらし首にするのだ」と言った。兵士達は砦の外に引き出し、李王と共に斬った。鬼王の亡骸を見るとただの大蟹であった⁵⁸。〈第八卷第八則〉

楊宣娘が術を使いさえすれば向かうところ敵はなく、『水滸傳』における公孫勝のような存在となっている。なお、彼女は『楊家府』における十二寡婦征西のリーダーも務める。

『楊家府』には登場しないが、京劇では楊家の小間使いである楊排風がよく演じられている。彼女はかわいらしい少女でありながら、実は優れた武芸を身に着けている。出陣を願い出ても焦贊などは取り合おうとはしないが、そこを逆に持ち前の武芸で叩きのめし、実力を認めさせるという趣向である。

楊門女将の一番の見せ場ともいえるのは、十二寡婦征西のエピソードである。これは『楊家府』第八卷第六則から第七則にかけて描かれる、西夏の八臂鬼王・張奉國が布く迷昏陣により白馬関の中に包囲された楊文廣父子を救出するための出征である。十二寡婦の顔触れは、楊宣娘を筆頭として、滿堂春、鄒夫人、孟四嫂、董夫人、周氏女、楊秋菊、耿氏女、馬夫人、白夫人、劉八姐、殷九娘という十二名である。戦端が開かれると、まず滿堂春が八臂鬼王の妻である管三娘を、分身の術を用いて斬る。次いで楊宣娘がそれぞれの寡婦を指揮し、四方から迷昏陣を攻め破り、楊文廣らを救出する。更に楊宣娘は八臂鬼王との術比べの末にこれを捕らえ、西夏国王の李高材も楊懷玉により捕らえられる。

時に木夫人は既に亡くなっていたが、魏老夫人はまだ健在であり、楊宣娘は魏太太を呼び出して言った。「今朝廷は讒言を信じ、我が家を憐れもうとせず、ややもすれば一家全てを斬ろうとしておりますので、朝廷の兵を率いるには及びません。私はこの度郎党を集め、満堂春、鄒夫人、孟四嫂、董夫人、周氏女、楊秋菊、耿氏女、馬夫人、白夫人、劉八姐、殷九娘、そして魏化や劉青らと共に、弟を救いに行きます。」これら十二名の婦人は全て寡婦であった。魏太太は、「それは極めてよいことです」と言った。そこで郎党を点呼したところ、二千余りであった。楊宣娘は諸軍に号令し、大砲を放ち、白馬関に向かって出発した⁵⁹。(第八卷第六則)

『楊家府』では、十二寡婦征西の時には令婆と木桂英は既に故人となっており、十二寡婦の中に含まれていない。しかし、十二寡婦征西にアレンジを加えて、一九六〇年に新作として上演された京劇「楊門女將」では、百歳の高齢でありながらも女将として現役である佘太君が、穆桂英と共に寡婦軍団を率いて出征する。現在の一般的な認識としては、楊門女將の筆頭格といえは佘太君と穆桂英ということになる。『楊家府』に登場する十二寡婦から楊宣娘を除いた十一名の内、満堂春は楊文廣と杜月英との間の娘であることが明言されているが、それ以外の者達はここで唐突に名が現れ、血縁関係も不明である。ここでは個々のキャラクターを云々するよりも、物語のクライマックスを飾る楊門女將の存在感が優先されたと思われる。従って、現在では十二寡婦を率いるのが知名度の高い佘太君と穆桂英という設定にされ、一般に享受されているのは、当然のことといえよう。

これまで見てきたように、『楊家府』では数多くの巾幗英雄が登場し、活躍を見せる。合山究氏は、明清時代の女子武侠文学について、当時の女子尚武の気風を背景にして生まれた、かなり現実性のある文学であるとしている⁶⁰。武勇に優れた女性が活躍するような状況はやはり特殊なものであり、小説がそのまま現実を反映しているとまでは考えにくいと思われるのだが、小説の世界が全くあり得ないことではない、と読者に思わせる程度のリアリティを持っていた可能性はあろう。その上で『楊家府』については、或いはリアリティを度外視した境地に立ち、エンターテインメントを追求した部分があったのではないかと考えられるのである。

六、楊家將と戯曲

『楊家府』は小説としては甚だ荒削りな作品である。これは三国志の物語でいうならば、

『三國志演義』の前身である『三國志平話』段階に当たると考えることができ、もしそこから『三國志演義』段階に当たる小説が作られていたならば、楊家将物語は更に洗練されたものになっていた可能性がある。しかし、楊家将物語では『三國志演義』段階に当たる小説が作られることはなかった。

それでは現在、中国の人々がどのようにして楊家将に触れているのかということ、それは演劇である。楊家将物語は、小説の枠組みを離れて演劇の世界に移ってから、更に独自の発展を遂げていく。ごくおおまかにではあるが、演劇の世界における楊家将物語について述べることにしたい。

先述したように楊家将物語は南宋頃から講談に取り入れられてきたが、テキストが現存するものとしては元・明代の雑劇まで下ることになる。現存する楊家将ものの雑劇としては、『元曲選』に収められる「昊天塔孟良盜骨」、「謝金吾詐拆清風府」と、『脈望館鈔校本古今雜劇』に収められる「楊六郎調兵破天陣」、「焦光贊活拿蕭天佑」、「八大王開詔救忠臣」、「黃眉翁賜福上延年」の計六種があり、これらは小説の元になった、或いは小説と同時並行的に発展していったものである。以下、これら六種を、楊家将物語のおおよその流れに沿った順序で見たい。

「八大王開詔救忠臣」は、『楊家府』の第一巻第七則から第二巻第三則に相当する。潘仁美は以前楊令公が劉薛王に仕えていた時、彼によって一矢を射られた恨みがあり、遼との戦いにおいて腹心の賀懷簡、劉君期と共に楊令公を死地へ追いやる。楊令公父子は狼山虎口交牙峪で遼の軍に包囲される。楊七郎は潘仁美に救援を求めに行くが、柱に縛り付けられて弓で射殺され、楊令公は李陵碑に頭を打ちつけて死ぬ。戦場から脱出した六郎楊景は八大王趙德芳に事情を訴え、黨彦進が潘仁美らを取り調べて捕らえる。八大王は楊景に仇を討たせてやるために、あらかじめ恩赦の確約を得ておき、楊景が潘仁美ら三人を討った後に無罪放免とする。

全体の展開としては『楊家府』とほぼ同様である。しかし、潘仁美が楊七郎を殺す場面で、楊七郎が柱に縛り付けられながらも矢を何度もかわすなど、『楊家府』よりも詳細な描写がなされている部分が見られる。

楊令公 六郎は出撃して行った。凶らずも蕃将に馬の脚を叩き折られてしまい、誰かに殺されるよりは自ら死ぬ方がましだ。ここは李陵碑であり、私は石碑に頭を打ちつけて死ぬとしよう。帝も顕彰して下さるであろう⁶¹。〈楔子〉

「昊天塔孟良盜骨」は、『楊家府』第二卷第六則からの、孟良による楊令公の遺骨奪還のエピソードを描く。ある夜、楊景の夢に楊令公と楊七郎が現れて訴えるには、遼では楊令公の遺骨を幽州にある昊天寺の塔に吊し、毎日百人の兵に三回ずつ射させて百箭会と称しており、痛くてたまらないとのこと。そこで楊景は孟良と共に昊天寺へ向かう。孟良は和尚を殺して楊令公の遺骨を取り戻し、寺に火を放つ。孟良が追っ手を防いでいる間に、楊景は五臺山の興國寺へとたどり着き、宿を取る。すると寺の裏山で毎日虎を打っているという荒法師が、実は楊景の兄の楊五郎であるとわかる。遼の韓延壽が兵を率いて興國寺に押し寄せるが、楊五郎は韓延壽一人を寺の中に誘い入れ、閉じ込めてから打ち殺す。楊景と楊五郎は父と弟のために七昼夜の法要を行う。

楊景が孟良と共に遼へ赴いたり、楊五郎が追っ手の韓延壽を撃退したりするなど、『楊家府』における話とはかなり差異があり、小説と雑劇とでそれぞれ別系統の説話に基づいた可能性を思わせる。『楊家府』ではこの話に楊五郎が関わっていない分、孟良にまつわるエピソードという印象がより強められているといえよう。ただし、「昊天塔」では楊五郎と功を分け合う形となった孟良であるが、和尚を斧で殺して寺に火を放つなど、ここでも変わらぬ豪快さを発揮している。

孟良（門に入って和尚を捕らえるしぐさをする）和尚よ、楊令公様の遺骨はどこだ。

和尚 私は知りません。

孟良 知らないはずがあるか。言うのか言わないのか。斧でお前のその首を斬ってやろうか。

和尚（瓢箪を見るしぐさをする）ああ、あなたは何かというと首を斬ろうとするのでしょうね。背中にどこかの和尚の首が掛けてあるのが見えますから。

孟良 早く言え。少しでもぐずぐずすれば斬るからな⁶²。〈第三折〉

「焦光贊活拿蕭天佑」は、『楊家府』第三卷第一則から三則にかけて描かれる蕭天右（雑劇では蕭天佑）との戦いを背景にしているが、かなり簡略化されている。雑劇では、遼の韓延壽から武芸比べを申し入れられた八大王が、三関を鎮守する楊景に出陣を命じ、楊景は孟良や焦贊らを率いて遼軍を撃退するという内容である。『楊家府』に見られた、蕭天右が龍の精であるという設定や、楊五郎の助力といった要素は排除されており、楊景配下の

諸将が次々と登場して口上を述べた後、戦闘が始まると宋軍が遼軍をあっけなく破ってしまうので、それほど特筆すべき部分は見当たらない。全体の構成としては、後述する「破天陣」から天陣破りの要素を取り去ったような、単純なものとなっている。

楊景 この野郎め我が槍を喰らえ。(槍で耶律灰を刺すしぐさをする)

耶律灰 やられた。(退場)

蕭天佑 楊景の槍で、耶律灰が刺し殺されてしまったが、一体どうしたものか。

耶律馬 見る間にわしに向かって来るわい。

楊景 賊軍を逃がすな。

孟良 御意。全軍で取り囲め⁶³。〈第三折〉

「謝金吾詐拆清風府」は、『楊家府』第三卷第三則から始まる、焦贊による謝金吾殺しの場面を描いている。ここでの謝金吾は王樞密の婿という設定であり、やはり無佞府を壊そうとし、阻止しようとした余太君を突き飛ばして重傷を負わせる。知らせを聞いた楊六郎は、三関の守備を岳勝と孟良に任せ、都へ向かう。楊六郎に無理矢理に付き従っていった焦贊は、独断で謝金吾の屋敷に入り込み、一家十七人を皆殺しにする。楊六郎と焦贊は処刑されそうになるが、楊六郎の姑である長國姑が処刑場に駆け付け、王樞密と激しく言い争う。孟良が遼の間者を捕らえたことから、王樞密が遼と通じていることが明らかになり、楊六郎と焦贊は許される。

「謝金吾」で最も聴衆の注目を集めたのは、やはり焦贊が謝金吾一家を皆殺しにする場面であろう。『楊家府』との差異はあるものの、短気で粗暴な焦贊はここでも本領を發揮していたに違いない。また「謝金吾」では、一つの作品中で話を完結させるために長國姑というオリジナルの人物を登場させており、彼女が処刑の執行を阻止し、王樞密の正体を見抜くことになっている。

王樞密 私は東庁樞密使で、国家の大臣だというのに、お前は私をどうしようというのか。

長國姑 (唱う)

【聖薬王】

“たとえお前に権勢があり

地位があっても
所詮は我が朝廷に仕える召し使いではないか
私は決してお前を恐れはしない
恐れはしないぞ
私が皇族の子孫であることは疑いない
さあさあさあ、お前と戦ってやろう⁶⁴ 〈第三折〉

「黄眉翁賜福上延年」は、「謝金吾」と同様に、楊景が密かに三関を離れるという私下三関の場面を含んでいる。しかしその発端となるのは、奸臣の策略ではなく、母親の誕生日を祝ってやりたいという思いである。その楊景の行いに感心した仙人の黄眉翁は、佘太君の誕生日祝いの席に現れて彼女の寿命を延ばしてやる。

本劇は楊家将雑劇の形を取っているものの、むしろ皇族の誕生日祝いの席などで演じられた慶壽劇としての色合いが強い。無論、他の雑劇のように豪傑が腕前を振るう場面や、戦場の描写などは一切見られない。

楊景（張蓋、陳林、柴敢、楊清と共に登場）

“母上のための孝行心から国境を離れ
はるばる東京へ行くことも辞さない”
私は楊景でございます。四将を連れて、三関を離れ、この東京へやって来た。皆の者私と共に屋敷へ行くぞ⁶⁵。〈第三折〉

「楊六郎調兵破天陣」は『楊家府』の第三卷第六則から第五卷第五則に相当するが、やはり異同がある。寇準が遼軍によって銅臺城で包囲される。この頃、楊景は謝金吾殺しの一件で汝州に流された後、王欽若の讒言により斬首されたと思われていた。しかし実は汝州太守の胡祥が楊景の才を惜しみ、彼によく似た囚人を身代わりとしたため、楊景本人は身を隠していたのである。遼の軍師である顔洞賓は、一百四十二の陣を組み合わせた天陣を布くが、軍に復帰した楊景が孟良や焦贊ら諸将に命じてそれぞれの陣を攻めさせ、天陣を打ち破る。

『楊家府』では死んだと思われていた楊六郎が軍に復帰して呂洞賓の布く天門陣を破るまでに、楊宗保が擎天聖母から天書を授かる場面や、楊六郎の病を治すために楊四郎が蕭

後の頭髪を手に入れる場面、また木桂英や黄瓊女にまつわるエピソードが挿入される。一方、「破天陣」ではそれらについて全く触れられておらず、天陣破りへと直接繋がっていく。楊宗保は「破天陣」にも登場するものの、あくまで楊景の率いる諸将の一人という扱いであり、楊四郎、木桂英、黄瓊女らは全く登場しない。また『楊家府』では、楊六郎が天門陣を破るために漢鍾離が協力しているが、「破天陣」では全て楊景の力によって勝利を収めることになっている。

顔洞賓 凶らずもあやつに我が陣を破られてしまった。だめだ、逃げよう、退け退け退け。(韓延壽らと共に慌てて敗走して退場)

楊景 我らがこの度あやつを破ったので、大敗して逃げているわ。これでは済まされぬ。岳勝、焦贊、孟良、楊宗保の四名は、必ずや蕃兵を追撃し、顔洞賓を捕らえて、丞相府へ功を献上するのだ。

岳勝 承知しました。我らは蕃兵を追撃しよう⁶⁶。(第三折)

続いて、京劇を始めとする現代の演劇における楊家将ものの作品を見ていく。こちらは『楊家府』に基づくものもあれば、ほぼオリジナルの世界を作り上げているものもあり、多種多様である。以下、代表的な作品とそのあらすじを挙げていく⁶⁷。

○余塘關…楊繼業と余氏との結婚物語で、初めは楊繼業が負けるが、だまして七星廟に逃げ、余氏を虜にして結婚を迫るといったもの。『楊家府』に該当する物語はないが、『北宋志傳』第三回に、同じように呼延贊が金頭馬氏と腕比べをして結婚する物語がある。先述した木桂英や寶錦姑らのエピソードにあった「比武招親」の要素を、楊繼業と余氏の関係に当てはめたものと思われる。

○雙龍會…遼の天慶王は宋の潘仁美と通じ、太宗を金沙灘に誘い出して一網打尽にしようとする。楊繼業はこの奸計を看破し、長男の楊延平を太宗の影武者とし、二郎以下八郎までの七人を保護役に付ける。楊延平が天慶王を射殺するが、楊延平、二郎、三郎は戦死し、四郎と八郎は生け捕られ、五郎、六郎、七郎だけが生きて帰る。三人に官位が与えられるが楊五郎だけは受けず、五臺山に入って出家する。『楊家府』の第一巻第六則とほぼ同内容であるが、楊五郎が行方不明にはならず、官途を断った後に出家するとい

う点が異なる。

○李陵碑…潘仁美は楊繼業を先鋒に命じて遼と戦うが、武芸の試合において息子の潘豹を楊七郎に殺された恨みから、執拗に楊繼業を難局へ陥れる。兩狼山で遼の軍に包囲された楊令公は、楊七郎を使者として潘仁美に救援を求めるが、潘仁美は聞く耳を持たず、楊七郎を矢で射殺す。救援が来ないため、楊令公は蘇武廟の中にある李陵碑に頭を打ちつけて死ぬ。『楊家府』第一卷第八則とほぼ同内容と見なすことができる。

○永平安…楊令公の死後、呼必顯は潘洪（『楊家府』における潘仁美）を罪に問うために都へ護送するよう命ぜられる。呼必顯は言葉巧みに潘洪から元帥の印を取り上げ、護送車に入れて連れ帰る。呼必顯は『楊家府』では呼延贊の息子の呼延顯として登場し、戦場で活躍している。

○夜審潘洪…朝廷は寇準に命じ、潘洪の取り調べを行わせる。潘妃は賄賂を送って寇準を誘惑しようとするが、寇準はこれに目もくれず、自らの良心に従って取り調べを行い、潘洪を有罪とする。

この作品は、楊家将物語というよりも、寇準の清廉で剛直な裁判官ぶりが強調されている。物語が包公説話的な方向へややシフトしたものである。

○三岔口…楊延昭の配下の焦贊は、奸臣の謝金吾を殺したために沙門島へ流罪となる。楊延昭は焦贊が途中で悪人に命を狙われることを恐れ、部下の任堂恵に命じて密かに焦贊と護送役人の後を追わせる。焦贊らが泊まったのは客を殺して金品を奪ういかさま旅籠屋で、主人の劉利華は焦贊を殺そうとする。そこへ任堂恵が追い付き、深夜に暗闇となった宿の一室で劉利華と激しく戦い、遂に討ち取る。

『楊家府』では謝金吾殺しの後にこのような話はなく、任堂恵や劉利華も登場しない。立ち回りの緊迫感が主眼であり、敢えて楊家将を題材にする必然性もないように思われる。なお一九五一年に中国京劇団により改変され、劉利華は焦贊を助けようとしていたが、任堂恵を刺客と勘違いし、戦いの後に互いの正体を知って和解するという展開となり、緊張からの緩和という要素も附加された。

○燄火棍…三関から急を告げる知らせが入り、楊家の小間使いである楊排風は救援に行くことを願い出、孟良と共に三関へ向かう。焦贇は楊排風を見下していたが、孟良にそのかされ、楊排風と手合わせをすることになる。実は楊排風は並外れた武芸を習得しており、打ち負かされた焦贇は甘んじて楊排風の後塵を拝する。

楊排風は『楊家府』に登場しない人物であるが、木桂英らの流れを汲む才色兼備の中囂英雄である。このような、一見かわいらしい少女に屈強な豪傑が武術で翻弄されるといふ構図は、『楊家府』でも見られたものではあるが、やはり面白い見せ場となっていたに違いない。

○穆柯寨…孟良と焦贇は楊延昭の命を受けて穆柯寨へ降龍木を取りに向かう。二人は穆柯寨の頭領の娘である穆桂英と交渉するが、拒絶され追い返される。楊延昭の長男である楊宗保も穆桂英にかなわず捕らえられてしまう。孟良らは山に火を放ち火攻めにしようとするが、逆に穆桂英の火攻めに遭い撃退される。

○轅門斬子…楊宗保は穆柯寨の穆桂英に捕らえられ、強制的に結婚させられてしまう。楊宗保が戻ると、楊延昭は激しく怒り、息子を斬ろうとする。孟良や焦贇、果ては佘太君や八賢王趙德芳までもが取りなそうとするが、楊延昭は聞き入れない。夫の身を案じてやって来た穆桂英が事情を知り、楊延昭を説得したため、やむなく楊延昭は息子を斬ることを思いとどまる。

○破洪州…穆桂英が元帥、楊宗保が先鋒となって洪州を攻めるが、楊宗保は独断で戦った結果、敗れてしまう。穆桂英は軍紀を正すために、楊宗保を棍で四十回打つことで許し、自ら出陣して洪州を破る。

○穆桂英掛帥…遼東で反乱が起こり、宋王は元帥を選ぶために武芸試合を開く。結果、楊文廣が勝ち抜いて元帥の印を持ち帰る。宋王は楊文廣が楊家の末裔であることを知ると、印を賜り、母親の穆桂英に元帥として出征するよう命じる。穆桂英は、長年戦場から離れていたこともあり、元帥の印を受け取ろうとしなかったが、佘太君の説得により出征し、乱を平定する。

上記四作は穆桂英が話の中心となるものであるが、京劇における彼女の活躍には目覚ましいものがある。「轅門斬子」や「破洪州」からわかるように、彼女の前では楊延昭も楊宗保も脇役とならざるを得ない。また、『楊家府』では楊文廣の身を案じながらも戦場へ送り出すという、母親としての姿も見せているが、「穆桂英掛帥」では楊文廣を差し置き、元帥となるに最もふさわしい者として朝廷からも認知されている。戦場に身を置いてこそ、穆桂英の本領は発揮されるのである。

○四郎探母…四郎楊延輝は金沙灘で遼の捕虜となり、姓名を変えて正体を隠し、鐵鏡公主と結婚する。十五年後、楊四郎は弟の楊六郎が元帥となり、佘太君と共に飛虎谷にいると聞き、母親に会いたいと思ひ鐵鏡公主に自分の正体を打ち明ける。鐵鏡公主は、理由を伏せたまま母親の蕭太后から通行証となる令箭を借り受ける。それによって楊四郎は宋の陣営を訪ね、一族と再会を果たす。

『楊家府』にはない話であり、『楊家府』では楊家の側から楊四郎のいる遼へ潜入する場面がしばしば見られるが、この作品では楊四郎が楊家を訪れることになっている点がユニークといえよう。楊八郎と碧蓮公主を主役にした「八郎探母」も趣向を同じくする。

○洪羊洞…楊延昭は孟良に、遼の洪羊洞へ潜入し、楊繼業の遺骨を奪還するよう命ずる。焦贊は隠れて孟良の後を追う。しかし暗い洞窟の中で、孟良は焦贊を敵将と間違え、斧で斬り殺してしまう。孟良は自分の過ちに気付いて嘆き悲しみ、楊繼業の遺骨を老兵の程宣に託して自殺する。この悲報を聞いた楊延昭は、悲しみの余り病床に就く。楊延昭が夢の中で朝廷へ行き、八賢王趙德芳に会うが、八賢王には楊延昭の姿が白虎に見え、これを矢で射てしまう。このため楊延昭の命は窮まり、佘太君や妻子らに見守られながら死を迎える。この作品は、『楊家府』の第六卷第四則から第五則にかけてとほぼ同内容である。

○牧虎關…楊家の武将であった高旺は、潘仁美の専横に憤り、妻子を捨てて身を隠す。北方の天堂六国が宋に背くと、佘太君は楊八姐を男装させて高旺のもとへ送り、彼を連れ帰らせる。二人が牧虎関に着くと、守将の張保とその妻が戦いを挑んで来るが、高旺に敗れる。戦いを見ていた張保の母親である張蘭英は、高旺が自分の夫であると気づき、城中に迎え入れる。高旺は息子と嫁を相手にしていたことを知り、一家は再会を果たす。

○擋馬…楊八姐は遼の情勢を探るよう命じられ、男装して遼へ忍び込もうとする。彼女はある宿に泊まるが、宿の主人である焦光普は焦贄の弟であり、楊八姐の正体を見抜く。楊八姐は関を越えることができずに悩んでいたが、焦光普の協力を得て関を越えることに成功する。

上記二作も『楊家府』にはない物語であり、高旺、張蘭英、焦光普らもこれらの作品にしか登場しない。『楊家府』の第三卷第二則において、瑛九妹が遼に潜入するために男装する場面があるが、これらの作品では男装するのは楊八姐（『楊家府』における淇八娘）である。余太君の娘二人は、キャラクターとしてどれほど明確な区別がなされていなかった可能性があるろう。

○太君辭朝…仁宗の時、余太君は黄花国を平定して凱旋する。しかしこの時、楊家三代はほとんどの者が国のために命を落とし、今や曾孫の楊藩を残すのみであるため、余太君朝廷に辞表を提出する。仁宗は餞別の宴を設け、余太君を見送る。

『楊家府』では朝廷との決別を行うのは楊家の五代目、楊懷玉であり、この頃には令婆は亡くなっている。余太君は太祖の時代から活躍してきたはずであり、仁宗の時代まで存命しているとするのは、年齢を考えると現実的ではない。しかし、楊家を最初から見守り続けてきた余太君であるからこそ、楊家が表舞台から退場するのを見届けるのにふさわしいという思いが、この作品に込められているのかもしれない。

京劇については、本来ならば『楊家府』系統のもの、『北宋志傳』系統のもの、どちらにも属さないものなどに類別し、より詳細な分析をするべきであったが、本論文では浅い段階に留まることとなってしまった。今後の研究課題の一つとしたい。

おわりに

楊家は当初、楊令公やその息子達といった強大な軍事力を抱えていながら、北漢から北宋に帰順したという経歴から、朝廷での立場は非常に危ういものであった。そして楊令公の息子達が次々に戦死または離脱し、楊令公自身も奸臣に陥れられて自ら死を選び、残された男子は楊六郎ただ一人という状況になった頃には、楊家は立場的にも勢力的にも弱体

化の極みを迎える。しかも朝廷には、楊家を陥れようとする奸臣が常に存在していた。そのような状況下で楊家が命脈を保つことができたのは、矛盾するようであるが朝廷との繋がりがあったからこそである。楊家は朝廷の奸臣から攻撃を受けていたが、また一方で朝廷には、太宗や八王のような楊家に好意的な人物も存在しており、彼らの庇護なくしては楊家の存続はあり得なかった。つまり楊家は、朝廷との関係において、奸臣による攻撃に苦しめられながらも、立場上その保護下にいなければならないというジレンマを抱えていたのである。

しかし楊家は以後、楊五郎や楊四郎のような外部からの協力者を得、孟良や焦贊のような豪傑を配下とし、木桂英のような巾幗英雄を娶り、果ては楊宣娘のような法術使いを加えて、自らの力を揺るぎないものとしていった。朝廷との関係も、元々は楊家が朝廷の保護下にいながら、有事の際には朝廷からその軍事力を要求されるという、相互協力のものであった。それが、楊家が戦功を積み重ねてきたことにより、いつしか朝廷が楊家を頼るという状況が目立つようになる。楊家はもはや朝廷から庇護を受けるような存在ではなくなり、むしろ実質的には、楊家が朝廷を外憂から守るようになっていた。

楊家が度々国を救ったにも関わらず、朝廷には奸臣が絶えることがなく、楊家を陥れようと常に画策を続けていた。『楊家府』最終話に当たる第八卷第九則において、楊家の五代目である楊懷玉は度重なる讒言に堪えかね、奸臣の張茂の屋敷に押し入って彼を殺し、その後すぐに一家を挙げて太行山へ向かう。神宗を説得して楊懷玉らの罪を許す詔勅を得た周王は、楊家を汴京に戻らせるために太行山を訪れるが、楊懷玉は次のように言い放ち、決別を宣言する。

理によって申しますなら、我々が朝廷に負いたのではなく、朝廷が我々に負いたのです。始祖の楊繼業は、王侁により狼牙谷に陥れられ、李陵碑に頭を打ちつけて死にました。楊七郎は潘仁美により多くの矢を身に受けて亡くなりました。楊六郎は王欽や謝金吾の害を受け、流罪となりました。狄青や張茂の頃になると、我が祖父と我が父は官職を削られました。聖主はご聡明であられず、文官は身近で信任されているのに、武官は遠くで疎んじられ、自らの意見を伝えることができません。一度讒言されたならば、我らの命はたちまち刀に掛けられます。その時聖主はわずかなりとも我らの悪戦苦闘の苦しみを思い、憐れみをかけられることもありません⁶⁸。

楊家が朝廷との決別を宣言して小説の終わりを迎えたことは、同時に歴史との決別も意味していた。楊家将物語は、歴史小説という枠組みから放たれて民衆の手に渡り、演劇の世界で自由な発想によって様々に手を加えられ、独自に発展していった。それは、現在中国の多くの人々にとって、楊家将といえば京劇で見えるものであることから窺うことができよう。

-
- 1 『四庫全書』（上海古籍出版社、一九八七年）卷四二七所収のものによる。
 - 2 『歐陽脩全集』（中華書局、二〇〇一年）卷二十九による。
 - 3 以下、『長編』の引用は『續資治通鑑長編』（中華書局、一九九三年）による。
 - 4 「小説開闢」における「小説」のジャンル分けに関して、小松謙『「四大奇書」の研究』（汲古書院、二〇一〇年）第三部第一章『「水滸傳」成立考—内容面からのアプローチ—』では、「朴刀」は甲冑を着けて馬に乗って戦うような武人の物語、「捍棒」は平時に好漢が試合や決闘を行う物語と推測している。
 - 5 現存する楊家将雜劇六種の内、「昊天塔」が一説に元の朱凱の作とされているのを除き、他は全て無名氏の作品とされている。
 - 6 『楊家府』及び『南北兩宋志傳』の出版事情に関しては、前掲の上田望「講史小説と歴史書（3）—『北宋志傳』、『楊家将演義』の成書過程と構造—」、同「講史小説と歴史書（2）—『殘唐五代史演義』、『南宋志傳』の構造と変容—」（『東洋文化研究所紀要』第百三十七号、東京大学東洋文化研究所、一九九九年）によるところが多い。
 - 7 以下、『北宋志傳』及び『南宋志傳』の引用は『明代小説輯刊』第二輯（巴蜀書社、一九九五年）所収の『南北兩宋志傳』による。
 - 8 趙景深『中国小説叢考』（齊魯書社、一九八〇年）所収。また前掲『楊家将研究・歴史卷（楊家将研究叢書）』にも収録。
 - 9 「娘」や「宣娘」という表記の揺れも含め、楊宣娘については松浦智子「楊門女将「宣娘」考—楊家将故事と播州楊氏—」（『東方学』第百二十一輯、二〇一一年）が詳細に論じている。それによると楊宣娘の原型は、儂智高征伐に出征したと伝承される播州楊氏の女将の楊儀娘であるという。
 - 10 小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一年）第六章『「楊家府世代忠勇通俗演義傳」』『北宋志傳』—武人のための文学—参照。
 - 11 『楊家府』のテキストとしては、『楊家府演義』（上海古籍出版社、一九八〇年）を用いた。以下、原文の引用もこれによる。

-
- 12 岡崎由美『漂泊のヒーロー—中国武俠小説への道』（大修館書店、二〇〇二年）「3 江湖の豪傑たち—アウトサイダー世界の形成」、伊原弘『「水滸伝」を読む—梁山泊の好漢たち』（講談社、一九九四年）第六章『「水滸伝」と『南総里見八犬伝』』による。
- 13 『雞肋編』（中華書局、一九八三年）による。
- 14 『鶴林玉露』（中華書局、一九八三年）による。
- 15 原文は「雍熙三年、大兵北征、以忠武軍節度使潘美爲雲・應路行營都部署、命業副之。以西上閣門使・蔚州刺史王侁、軍器庫使・順州團練使劉文裕護其軍。諸軍連拔雲・應・寰・朔四州、師次桑乾河、會曹彬之師不利、諸路班師、美等歸代州。」
- 16 原文は「業曰、業非避死、蓋時有未利、徒令殺傷士卒而功不立。今君責業以不死、當爲諸公先。將行、泣謂美曰、此行必不利。業、太原降將、分當死。上不殺、寵以連帥、授之兵柄。非縱敵不擊、蓋伺其便、將立尺寸功以報國恩。今諸君責業以避敵、業當先死於敵。因指陳家谷口曰、諸君於此張步兵強弩、爲左右翼以援、俟業轉戰至此、即以步兵夾擊救之。不然、無遺類矣。」
- 17 原文は「業非畏死、時有未利、徒傷其生、不能立功。業乃太原降卒、其分當死、荷蒙聖上不殺之恩、授以兵柄、今遇敵、豈敢縱之不擊。蓋欲伺其便、以立尺寸之功、以報聖上之恩耳。然諸君責業有異志、不肯死戰、尚敢以自愛乎。當爲諸君先行。但陳家谷、諸君幸於此處張設步兵強弩、以相救也。不然無遺類矣。」
- 18 原文は「却説仁美心欲害令公、因其臨去埋伏之言、亦假意與王侁等列陣陳家谷。自寅至午、不得業之消息、使人登托邏臺望之、又無所見。皆以爲遼兵敗走、欲爭其功、即一齊離谷口、沿交河南進。行二十里、聞業戰敗、仁美暗喜、引諸軍退回鴉嶺去了。令公與蕭撻懶且戰且走、走至陳家谷、見無一卒、撫胸大慟、罵曰、仁美老賊、生陷我也。…〔中略〕…須臾、小卒回報、鄉民說是狼牙谷。令公大驚、暗忖羊遭狼牙、安得復活。遂引衆奮勇殺出、砍死遼兵百餘人。再策馬前進、其馬疲瘠、不能馳驟、令公遂匿深林之中。耶律奚底望林中袍影射之、遂射中令公左臂。…〔中略〕…却説令公見遼兵不來索戰、遂絕食、三日不死、乃與衆人言曰、聖上遇我甚厚、實期捍邊討賊以仰答之。不意爲奸臣所逼、而致王師敗績、我尚有何而目求活。時麾下尚有百餘人、又謂之曰、汝等俱有父母妻子、與我俱死無益、可走歸報天子、代我達情。衆皆感激言曰、願與將軍同盡。令公付道、外無救援、遼兵重圍、畢竟難脫此厄。且我素稱無敵、若被遼人生擒、受他恥辱。不如趁今早死之爲愈也。主意已定、乃望南拜曰、太宗主人善保龍體、老臣今生不能還朝再面龍顏矣。言訖、取下紫金盔、撞李陵之碑而死。年凡五十九歲。衆軍士見令公既死、遂奮激殺出谷來、盡被遼兵砍死、止逃走二三人而已。」
- 19 原文は「美即與侁領麾下兵陣于谷口。自寅至巳、侁使人登托邏臺望之、以爲契丹敗走、欲爭其功、即

領兵離谷口。美不能制、乃緣灰河西南行二十里。俄聞業敗、即麾兵却走。業力戰、自午至暮、果至谷口。望見無人、即拊膺大慟、再率帳下士力戰、身被數十創、士卒殆盡、業猶手刃數十百人。馬重傷不能進、遂爲契丹所擒、其子延玉亦沒焉。業因太息曰、上遇我厚、期討賊捍邊以報、而反爲姦臣所迫、致王師敗績、何面目求活耶。乃不食、三日死。」

- 20 原文は「朔州之敗、麾下尚百餘人、業謂曰、汝等各有父母妻子、與我俱死無益也、可走還報天子。衆皆感泣不肯去。淄州刺史王貴殺數十人、矢盡遂死。餘亦死、無一生還者。聞者皆流涕。」
- 21 原文は「宋將楊繼業初以驍勇自負、號揚無敵、北據雲・朔數州。至是、引兵南出朔州三十里、至狼牙村、惡其名、不進。左右固請、乃行。遇斜軫、伏四起、中流矢、墮馬被擒。瘡發不食、三日死。」
- 22 原文は「伏兵發、斜軫進攻、繼業敗走、至狼牙村、衆軍皆潰。繼業爲流矢所中、被擒。斜軫責曰、汝與我國角勝三十餘年、今日何面目相見。繼業但稱死罪而已。初、繼業在宋以驍勇聞、人號揚無敵、首建梗邊之策。至狼牙村、心惡之、欲避不可得。既擒、三日死。」
- 23 原文は「咸平二年冬、契丹擾邊、延昭時在遂城。城小無備、契丹攻之甚急、長圍數日。契丹母督戰、衆心危懼、延昭悉集城中丁壯登陴、賦器甲護守。會大寒、汲水灌城上、且悉爲冰、堅滑不可上。契丹遂潰去、獲其鎧仗甚衆。」
- 24 原文は「韓琦使築筆架城、文廣聲言城噴珠、率衆急趣筆架、比暮至其所、部分已定。遲明、敵騎大至、知不可犯而去、遺書曰、當白國主、以數萬精騎逐汝。文廣遣將襲之、斬獲甚衆。」
- 25 ただし、楊家將物語において楊六郎が鎮守することになっている三関の一つが梁州（易州の誤りか）の遂城関とされているのは、『宋史』に見える楊延昭のエピソードの舞台が遂城であったことに基づく可能性があろう。第二部第二章の注3も参照。
- 26 原文は「八王曰、先生有何計策。寇準遂屏左右隨從之人、言曰、領聖旨者、幸是呼延贊。可囑付他、見汝州太守密與計議、揀選獄中罪人貌似郡馬者、梟取首級來獻聖上。着六郎逃走他處、日後遇有國難、我等保奏出征、將功贖罪、此計可否。」
- 27 このエピソードについては、第二部第一章「謝金吾」雑劇について」においてより詳しく説明する。
- 28 原文は「爲君不易、今傳位與叔、正以代汝之勞也。今賜爾金簡一把、在朝如有不正之臣、得專誅戮。」
- 29 「勢劍金牌」については、金海南『水戸黄門「漫遊」考』（新人物往来社、一九九九年）第一章「中国の名裁判官一物語と現実」において詳細な解説がなされている。
- 30 原文は「當時鏖戰遼兵、勢甚危迫、料難脱身、遂削髮爲僧、直至五臺山來。日前人道遼宋交兵、又望見陳家谷口殺氣騰騰、心下十分驚跳、特下山來、只見吾弟受敵。」
- 31 小川環樹「魯智深とその類例」（『小川環樹著作集』第四卷、筑摩書房、一九九七年所収）など。林雅

-
- 清「魯智深像の再検討」(『中国近世通俗文学研究』、汲古書院、二〇一一年所収)は、魯智深を始めとした、文学作品や史書に見える荒法師について、先行研究を踏まえた上で詳細に検討している。
- 32 原文は「天左以允情奏太后、太后命釋之、乃問曰、汝姓甚名誰。延朗心下思忖、若說實名必不相容、遂以楊字拆開、妄對曰、臣姓木、名易。」
- 33 原文は「駙馬曰、先日曾得龍髮燒灰調服、好了數年、今不覺陡然又發。公主曰、龍髮何處得之。快使人去求來治療。駙馬曰、中國才有、此地那裏去討。但得娘娘龍髮、或者可代。公主曰、此則不難。」
- 34 原文は「木易在帳中付道、朝臣被困已久、救兵又不到來、糧草若絕、豈不盡皆餓死谷中。遂生一計、修書一封、縛於響箭之上、悄地步到宋臣營邊、直射入去、約其密遣人出山後搶糧。」
- 35 楊家將物語と『水滸傳』に類似点があることについては、中鉢雅量『中国小説史研究一水滸伝を中心として一』(汲古書院、一九九六年)Ⅱの第三章「楊家將演義と水滸伝」においても指摘されている。
- 36 原文は「岳勝見六郎說此軍無用、遂出軍前叫曰、汝生將門、自謂無倫、我今願與汝比試一番何如。六郎曰、可。」
- 37 原文は「衆樵夫曰、大王可把此繩緊繫腰間、待我衆人扯拽上來。孟良曰、你等須仔細用心扯上去。言罷、將繩緊緊縛於腰間。衆人乃扯拽至半崖停止不扯。良曰、何故又不扯上去。衆人曰、大王身軀甚重、吾等力盡、待再叫幾個人來同扯、才得上來。」
- 38 原文は「六郎步軍見焦贊走上山坡、一齊趕上山坡。焦贊趕得慌、爬到半坡、被苔蘚滑跌下來。衆軍捉倒、捆縛回佳山寨中。」
- 39 原文は「只見令公骸骨、將一石匣盛著在內。孟良取包袱出來、將骸內裹了、走到洞口、被番人捉倒、喝曰、汝何人也。想必是個奸細。孟良曰、小人是黃河漁父之子、目前獻魚、上娘娘之壽、蒙賞父子酒食。吾父被酒醉死、欲帶血屍回去、路途又遙、只得將屍來此焚化、包取骸骨歸葬。言罷大哭。」
- 40 「昊天塔」雜劇については、第二部第三章「楊家將雜劇から見る習俗と時代背景」参照。
- 41 原文は「八大王趕到、見馬陷於泥澤、乃笑曰、此賊計較千般、不得馬去、又推落澤中、以阻拒我趕殺他也。且待軍校來擡他起來。心下又怕陷壞了馬、乃跳下萬里雲、徑向前視之。孟良覷八王下馬、忙跑出林來、跳上萬里雲、叫聲、殿下休怪。借此馬去、退了遼兵、即送來還。」
- 42 原文は「六郎曰、真好惱也。我此來怕人知覺、且汝之性甚不良善、若到京師、畢竟生禍。汝聽吾言、可歸三關。我回當獨加重賞。焦贊曰、小將不要賞、只要去看景致。若不許去、小將先往京中傳揚將軍私離三關。」
- 43 「謝金吾」雜劇については、第二部第一章「謝金吾」雜劇について」参照。
- 44 原文は「皇上不念將軍、聽信佞言、致於死地、寡恩極矣。將軍素懷忠義、出力匡扶王家、此所以蒼蒼

-
- 不昧、致使禍遠身全。但依小將之見、不必去救聖駕、惟據此地、稱爲天子、受多少快樂、有何不可。」
- 45 原文は「及至一更、悄悄上臺、果見一香木匣、盛著一副骸骨。孟良遂解下包袱、將木匣裹了。正背起來、不想焦贊躲在背後、一手拖往包袱、厲聲曰、誰在臺上勾當。孟良慌張、只道是捕緝之人、抽出利斧望空劈去、正中焦贊腦門、嘿然氣絕。孟良背了包袱、走下臺來、並未見些動靜、自思捕緝豈止一人。才聞聲音却似焦贊一般。遂復上臺、撥轉屍看、大驚曰、果是焦贊。」
- 46 原文は「令婆既到、即問曰、太原城何如。漢主曰、太原城被宋兵圍住、孤不敢入。令婆曰、既太原未失、妾當殺條血路、保駕入城、以待遼之救兵。漢主允之。於是令婆打白令字旗、當先衝殺、宋兵望見、紛紛逃竄。」
- 47 原文は「招吉衝過陣來、宋軍中忽一騎青驄騎來、一女將如風驟出、接戰三合、被女將將紅綿套索一拋、招吉遂被絆落馬下、活擒而來。寇準大喜曰、汝姓甚名誰。八娘答曰、妾乃楊令公長女八娘也。准曰、將門女子亦勁敵也。遂命記其名、錄其功。」
- 48 原文は「參見畢、張畢問曰、汝姓甚名何。生於某處。九妹曰、小人姓胡、名元、祖籍太原。幼年習文、屢試不第。後又習武、亦不能就。遂棄家筵、修行雲遊。昨承命召、不敢違迂、特來拜見。張華見九妹聲音清亮、言語激烈、豐神俊秀、喜不自勝。乃命九妹居於書房、九妹稱謝。」
- 49 前掲『明清時代の女性と文学』第六篇第二章「明清時代の戯曲小説における男装と女装」参照。
- 50 原文は「宗保曰、聞汝寨後有降龍木二根、乞求一根與我爲斧柄、待破陣之後、遣禮相謝。桂英笑曰、汝要求木、勝得手中寶刀、莫說一根、兩根俱奉。宗保與孟良言曰、狗婦出言如此不遜、待我捉之、自往砍伐、何必懇求於彼。乃挺槍直取桂英、桂英舞刀相迎。交戰十數餘合、桂英賣個破綻、拍馬佯敗、走過山隅、宗保乘勢追之。桂英抽身轉回、拈弓暗放一箭、射中其馬。宗保落馬、桂英近前活擒而去。」
- 51 原文は「將及半午、郡主用力戰久、動了胎氣、忽覺肚腹疼痛、漸漸難忍、郡主遂大叫一聲好苦。部下軍士無不失色。須臾墜下馬來、產一英孩、昏悶倒地。…〔中略〕…桂英下馬、扶起郡主、將所生之孩包裹了、放在己之懷內、復扶太郡上馬、然後自跳上馬殺出、遂破了青龍陣。」
- 52 原文は「卻說黃瓊女回到帳中、自思、我來助他、令我赤身露體、真個羞辱無限。曾記當年鄧令公爲媒、吾父將我許配山後繼業六郎、只因鄧令公喪去、遂停止此姻事。今聞統宋大軍乃六郎也、是我舊日姻配、不如引部下投降於宋、續此佳偶、扶助破番、報復此等恥辱、豈不妙哉。計議已定、次日密遣部軍、送書入馬氏營去。馬氏得書、報知令婆。」
- 53 原文は「六郎曰、卿卿何策、代我立功。重陽女曰、我今乘此機會、暗投於蕭后處、做個裡應、郎君外合、此策好否。六郎曰、卿卿若肯如此行事、妙哉、妙哉。豈幽州攻之不破耶。重陽女欣然辭別、回到本營、率部下衝開南陣、岳勝、孟良等佯敗退走。」

-
- 54 原文は「月英曰、汝莫非文廣將軍乎。文廣曰、然也。月英曰、汝乃妾之良人、不與交戰、快叫那潑婦出來比敵。文廣聽罷、更不打話、拍馬直取月英。月英迎敵、交馬數十合、不分勝負。」
- 55 原文は「然後錦姑三個齊拜於塔下、言曰、婆婆萬福、媳婦久失奉候、總冀恕罪。木夫人驚曰、列位娘子緣何這等稱呼。錦姑正欲訴其衷曲、忽門外揚聲喝道、忠烈侯回府。文廣一入、錦姑等接見、相拜言曰、郎君別來無恙。文廣曰、托庇平安。言罷、遂一一將三女之情告知木夫人。」
- 56 「臨陣招親」もしくは「比武招親」については、前掲の岡崎由美『漂泊のヒーロー—中国武俠小説への道』「6 戦う女たち—中華美少女戦士の系譜」、松浦智子「楊家將演義」における比武招親について—その祖型と伝承の一端をめぐって—（『中国文学研究』第三十一期、早稲田大学、二〇〇五年）を参照。
- 57 原文は「蠻兵將走出谷、前軍回報、谷口有軍攔路。儂王天子聞報、奮勇當先殺出。宣娘見旗幟是儂王的、遂出馬交戰。只一合、被宣娘揮刀砍落馬頭、儂王跌落於地、宋兵將儂王綁了。」
- 58 原文は「宣娘向袖中取出眞火、四圍燒之、口念咒語。只見四圍石頭、燒得火焰騰騰。一連熬了九日、才見鬼王口角溜出一顆、宣娘即用老君鐵鉗鉗出。後又着了五十四日、才熬出六顆丹來。…〔中略〕…煉畢、宣娘曰、衆軍士將石搬了、今既鉗出七顆丹來、彼不能變化矣。汝等拿出來梟首。衆軍士擁出寨外、與李王一齊斬了。只見鬼王屍首是只大蟹。」
- 59 原文は「時木夫人已死、魏老夫人還在、宣娘遂請出魏太太來、言曰、今朝廷聽信讒言、不肯矜恤我家、動輒全家抄斬、亦不須領朝廷兵。我今聚集家兵、與滿堂春・鄒夫人・孟四嫂・董夫人・周氏女・楊秋菊・耿氏女・馬夫人・白夫人・劉八姐・殷九娘及魏化・劉青等、去救兄弟而來。此十二女俱寡婦也。魏太太曰、這等極好。於是查點家兵、二千有餘。宣娘乃號令諸軍、放炮一聲、徑望白馬關進發。」
- 60 前掲『明清時代の女性と文学』第四編第一章「明清時代における巾幗鬚眉の系譜—女將軍・從軍女性・女武芸者・女豪傑とその文化」参照。ただし『楊家府』については、余氏らの実在性に疑問があるとのことで除外されている。
- 61 原文は「（令公云）六郎殺出去也。不想被番將打折了我馬腿、他殺不如自殺。此處乃是李陵碑、不如我撞碑而死。皇天可表。」
- 62 原文は「（正末入門做揪住和尚科、云）和尚、楊令公的骨殖在那裏。（和尚云）小僧不知道。（正末云）你怎生不知道。你說也不說。我則一斧砍下你這頭來。（和尚做看葫蘆科、云）哦、可知你動不動的就要砍頭。眼見的背上掛着那一個和尚的頭哩。（正末云）你快說來。略遲些我砍下來也。」
- 63 原文は「（楊景云）着這野奴喫吾一槍。（做槍刺耶律灰科）（耶律灰云）我死也。（下）（蕭天佑云）被楊景一槍、刺死耶律灰也、可怎了。（耶律馬云）眼見的尋着我也。（楊景云）休教走了番賊也。（孟良云）

得令。大小三軍圍住者。」

- 64 原文は「(王樞密云) 我是東廳樞密使、國家大臣、你怎的我。(正旦唱)【聖藥王】 遮莫你有勢力、有職位、到底是我天朝部下潑奴婢。我可也不怕你、不懼你。我須是天潢支派沒猜疑。來來來、我敢和你做頭抵。」
- 65 原文は「(楊景同張蓋・陳林・柴敢・楊清上)(楊景云) 孝心爲母離邊界、不辭迢遞到東京。某乃楊景是也。領着四將、離了三關、來到這東京也。衆將跟着某往私宅中去。」
- 66 原文は「(顏洞賓云) 不想被他打破了我這陣也。不中、逃命、走走走。(同韓延壽等慌敗下)(正末云) 俺今日破了他陣勢、大敗而走。更待干罷。便差四將岳勝、焦贊、孟良、楊宗保、您衆將務要趕殺番兵、將顏洞賓執縛定、丞相府中獻功去來。(岳勝云) 得令。俺趕殺番兵去來。」
- 67 各作品の内容は基本的に『中国劇目辞典』(河北教育出版社、一九九七年)の記述に基づき、一部、『楊家將演義』(宝文堂書店、一九八〇年)附録の「楊家將劇目簡介」を参考にした。
- 68 原文は「若以理論、非臣等負朝廷、乃朝廷負臣家也。始祖繼業、王侁排陷狼牙、撞李陵之碑而死。七郎遭逢仁美萬箭攢身而亡。六郎被王・謝之害、充軍遠徒。迨及狄青・張茂、吾祖吾父貶職削官。聖主不明、詞章之臣密邇親信、枕戈之士遼隔情疏、不得自達。讒言一入、臣等性命須與懸於刀頭。此時聖主何曾少思臣等交兵爭鬪之苦、而加矜恤。」

第二章 北漢時代の楊業とその周辺

はじめに

前章で見てきたように、楊家将の物語は、北宋に仕えた楊業（楊繼業¹・令公）及びその一族の、対遼戦争における活躍を中心としている。特に、楊家将の始祖と言うべき楊業は、遼への降伏を拒み北宋への忠義に殉ずるという最期により、忠節の士と称えられており、その悲劇的な死については正史などにも記されているところである。しかし、そもそも楊業には北漢から北宋へ降ったという経歴があり、これを遼への降伏を拒んで死を選ぶという行為と比較した場合、かなり大きな隔たりがあるように感じざるを得ない。楊業が北漢から北宋へ降伏することを受け入れ、遼への降伏を拒むに至った要因は何であったのか。この点について考えるには、楊業の生涯において、北宋に仕えてから死に至るまでの期間に比べてあまり注目されることのなかった、北漢に仕えていた期間に目を向ける必要がある。

本章では、北漢時代の楊業及びその周辺の状況について整理し、その期間の出来事が楊業の生涯においてどのような意味を持ち、どのような影響を及ぼしたかについて考察を試みる。

一、劉繼業時代

楊業が北宋以前に仕えていた北漢とは、五代十国時代に建てられた十国の一つであり、東漢とも呼ばれる。今の山西省太原市以北及び河北省と陝西省の一部を領有し、建国者である劉旻（崇）より以降、劉承鈞（鈞）、劉繼恩、劉繼元という四代二十九年（九五―九七九）の間存続した。しばしば遼に援助を請いながら後周及び北宋に対抗したものの²、北宋の太宗の侵攻を受け、十国の内で最後に北宋に滅ぼされた国となった。楊業が北漢に仕えていたのは、国が終焉へ向かいつつある時期であった。

楊家将を題材とした雑劇は六種現存しているが、その内の「開詔救忠³」において、楊業が北漢に仕えていた頃について以下のように語られている。

楊令公

“武威は辺境の関を震わせ氣勢は雄々しく

忠義の心を明らかにして元帥を務める

箱の中にある三尺の銀鍔の剣は
永久に国土を守り大功を立てる”

私は楊繼業と申し、火山の楊滾の子であります。兵法の書を広く知り、軍を並べる方法に精通している。以前は劉薛王の配下の将であり、平、定、光、輝、昭、朗、嗣という、私の七人の息子と、共に君主の劉氏をお助けしていた。私は金刀大將軍、智勇無敵都総管、兵法教授楊令公の官を与えられた。潘仁美が三度河東を攻めた時、私の矢によって左腕を射られ、宋将に救い出されたということがあった。後に宋朝が勇猛な大軍を率いて、河東を包囲し、水攻めにして我が劉薛王を破った。大宋の帝は、我ら父子八人を招安して朝廷に入れ、共に国家を支えるよう、私を鎮国大將軍の職に任ぜられた。宋に降って以来、大功を重ねてきた⁴。〈第一折〉

「開詔救忠」は現存する楊家将ものの雑劇の中で唯一、生前の楊繼業が登場する雑劇であり、また楊繼業が北漢に仕えていた頃の状況に言及されているという点でも、唯一のものである。「開詔救忠」の展開としては、ここに見えるように楊繼業が潘仁美を矢で負傷させたことがあったために、潘仁美は楊繼業を恨んで窮地へと追い込んで行くことになるのであるが、その記述を除けば、楊繼業は元々北漢に仕えていて北宋が北漢を滅ぼした際に北宋へ降った、という概略程度しか記されていない。

それでは、楊家将を題材とした小説ではどのようになっているのであろうか。『楊家府』の方から見ていくと、全八巻五十八則の内、楊繼業が北漢に仕えていた時期は第一巻の第一則から第五則に当たる。まず、第一巻第一則で以下のように語られている。

さて北漢の君主は姓を劉、名を鈞といい、妹は薛釗に嫁いでいた。薛釗はある日ひどく酔い、その妻を殺そうとしたが、妻は衣を揮って逃げた。薛釗は翌日になり、酔いが醒めると、漢王に辱められることを恐れ、自刎して死んだ。薛釗は一子を生み、名を繼恩といったが、劉鈞には子がなかったため、繼恩を養って自分の子とした。妹は何元業に再嫁し、二人の息子を生んだ。長男は繼元、次男は繼業といった。劉鈞は彼らも養って自分の子とした。漢王の劉鈞が亡くなると、劉繼恩は漢王の位に就き、周と敵対し、遼に対しては子と称し、遼に援軍を乞い、周を侵した。遼は耶律于越に兵三十万を率いさせ、嶺南から出撃した。漢の君主は劉繼元に元帥、劉繼業に先鋒になるように命じた。劉繼業は余氏を娶り、七人の子、淵平、延広、延慶、延朗、延徳、

延昭、延嗣を生み、さらに二人の娘、淇八娘、瑛九妹を生んだ。彼らは共に騎射が得意で、韜略に精通していた⁵。

ここでは、北漢の王である劉鈞の甥にして、その養子という設定になっており、北宋の前王朝である後周との戦いにおいては先鋒を務めたとある。

第二則以降の主立った行動を追っていくと、建隆元年（九六〇）の戦いで、投槍を潘仁美の馬に当て、潘仁美を落馬させ、また計略により北宋の兵士を同士討ちさせた（以上第二則）。更に北宋軍を攻めて数万人の被害を与えた。開宝九年（九七六）秋八月には、五方向から攻め寄せる北宋軍を打ち破った（以上第三則）。改元後の太平興国元年（九七六）の戦いでは、劉繼業は病のために出陣できずにいたが、妻の令婆に命じて君主の危機を救わせた。なお、この時に令婆は潘仁美の左股に矢を当てて落馬させている（以上第四則）。君主が北宋に降伏した後も、劉繼業は太行山で軍備を整えており、太宗が投降を呼びかけても応じずにいた。しかし君主からも投降を求められ、遂に投降し、太宗から楊の姓を賜った（以上第五則）。

次に『北宋志傳』を見ていくが、正確にはその前編に当たる『南宋志傳⁶』において既に、楊繼業とその一族が登場している。『南宋志傳』は宋の太祖・趙匡胤が帝位に就くまでの武勇伝を主に描いているが、その途中の第三十三回から第三十五回にかけて、顕徳元年（九五四）の高平（山西省高平市）の戦いで、後周に苦戦する北漢の劉崇が應州（山西省応県）の楊繼業に救援を求め、楊繼業が後周軍を打ち破るという話が挟み込まれている。

『南宋志傳』第三十三回では、楊繼業とその一族について以下のように語られている。

さて楊令公は名を繼業といい、太原（山西省太原市）の人であり、顔は熟したナツメのように赤く、ひげを五筋に分け、一本の大桿刀を使い、楊無敵と呼ばれていた。長男の淵平、次男の延定、三男の延輝、四男の延朗、五男の延徳、六男の延昭、七男の延嗣という七人の息子と、養子の懐亮がおり、この八人はそれぞれ弓や馬に熟練し、武芸に精通していた。当時の武勇を讃える者は、山後（河北・山西地方）の兵を最も優れているとしていた⁷。

ここに見える養子の懐亮は本名を高懐亮といい、後周軍の高懐徳の弟であるが、一時的に楊家に身を寄せていただけであり、この後すぐに後周軍へ寝返ってしまうので、楊繼業

との関わりはほぼ皆無である。それを除けば、楊繼業とその七人の息子という構成自体は共通している。

その後、楊繼業は伏兵を用いて後周軍に多くの損害を与えた〈以上第三十三回〉。続いて夜襲にやって来た趙匡胤らを撃退した。後周軍が汾水原に布陣しているのを見ると、長雨で水量が増していた汾水をせき止めて溢れさせ、後周軍を水攻めにした⁸。この時、楊繼業は趙匡胤を斬る寸前まで追い詰めるものの、趙匡胤の頭上に八つの爪を持つ金色の龍が現れたのを見て、真の天子であると思い、見逃してやった。後周軍は退却〈以上第三十四回〉。劉崇に戦勝報告をした楊繼業は五臺山に立ち寄り、未来を知ることができるという智聰禪師に息子達を占ってもらうが、六郎以外の者達は良い最期を迎えられないとのことであった。翌日、楊繼業一行は智聰禪師と別れて應州へ帰って行った〈以上第三十五回〉。

物語に登場したばかりでありながら、後周軍を手玉に取り、計略を用いて完膚無きまでに打ちのめす楊繼業の勇姿は、読者の印象に強く残るものである。その一方、趙匡胤に天子の相を見て殺すことを止めたり、息子達に不吉な予言が与えられたりと、この時点で後の『北宋志傳』で起こることがほのめかされており⁹、しかもそれが必ずしも明るい内容ではないので、読者に楊繼業やその一族に対して一抹の不安を抱かせることにもなるのである。

『北宋志傳』に入ると、第三回で楊繼業は再登場する。開宝九年（九七六）三月、宋の太祖から攻撃を受けている北漢の劉鈞が楊繼業に救いを求めたので、楊繼業は精兵を率いて澤州（山西省晋城市）に陣を築いた。続いて第四回で、楊繼業は二人の敵将を斬るなど宋軍に莫大な損害を与えた。その後間もなく和議が成立する。

そして少し飛んで第九回において、改元後の太平興国元年（九七六）に宋の太宗が出兵したことから、劉鈞は再び使者を派遣して楊繼業に救援の兵を要請した。楊繼業は精兵三万を率いて救援に向かい、潘仁美や呼延贊らと戦う。しかし第十回で北宋軍は反間の計を用い、楊繼業が宋国の財物を得て反乱を図っているとの噂を流す。一旦兵を應州へ引き上げたものの、劉鈞からは疑いの目で見られ、北宋からは帰順を勧める使者が遣わされ、楊繼業は思い悩んでいた。息子達からは帰順する方が良いという意見が強く、また妻の余氏の勧めもあったので、遂に楊繼業は北宋に対し帰順することを申し入れた。第十一回で劉鈞が北宋に降伏する。

これまで挙げた『楊家府』と『北宋志傳』の内容を比べると、個々の戦闘場面の描写などを除いて、最も大きな違いは楊繼業が北宋に降る場面である。つまり、『楊家府』では君

主が降伏した後のことであるのに対し、『北宋志傳』では君主に先立って降っている。順序の違いだけであるが、読者の受ける印象にはかなりの差がある。『楊家府』の記述によるならば、君主が降伏した後にも抵抗を続けた硬骨漢にして、自分が仕えていた北漢への義理を通す人物である。一方『北宋志傳』の記述によるならば、救援を請われて共に北宋を迎え撃ったものの、北漢への強い忠誠心を抱いていたようには見えない。

それでは『楊家府』と『北宋志傳』のどちらが実在の楊業の姿に近いのであろうか。楊業が北漢に仕えていた時期について、まず『宋史』では以下のように記している。

楊業、并州太原の人。父の楊信は、漢の麟州（陝西省神木県）刺史であった。楊業は幼い頃から人より優れていて男気があり、騎射を得意とし、狩りを好み、人より多くの獲物を獲っていた。従者に、「私はいつか將軍となり、鷹や犬を使って雉や兎を追い駆けるように兵を使うのだ」と言ったことがあった。二十歳で劉崇に仕え、保衛指揮使となり、勇猛なことで知られた。建雄軍（山西省代県）節度使まで官位が進み、しばしば戦功を立てた。向かうところ勝ち戦で、国の人々は「無敵」と呼んだ。

太宗が太原を攻めた時、日頃からその名を聞いていたので、賞金をかけて捜し求めたことがあった。やがてただ一つ残った城が甚だ危うくなったので、楊業はその君主の劉繼元に降伏するように勧め、人民を守った。劉繼元が降伏すると、帝は使者を送って楊業を呼び寄せて対面し、非常に喜んで、右領軍衛大將軍とした。軍が引き上げてから、鄭州（河南省鄭州市）刺史の官を授けた¹⁰。（『宋史』卷二七二「楊業傳」）

『宋史』ではこれ以降、楊業が対遼戦争において活躍し、雍熙三年（九八六）に北宋が遼を攻めた際に、共に出陣した潘美や王侁らの戦略的失敗により陳家谷で遼軍に捕らえられ、食を絶って死ぬまでが詳細に記されているのであるが、それに比べると、楊業が北漢に仕えていた期間についての記述は非常に簡略なものである。それでも、若い頃から北漢に仕えて武勇に優れていたとされており、北漢の滅亡間際には、君主の劉繼元に対して北宋へ降伏するように勧め、無駄に人民を傷付けさせることのないようにさせたという記述が見える。ただし楊業自身が降伏した時の状況ははっきりしない。

『十國春秋』では、楊業は劉繼業として伝が立てられている。

劉繼業は、本姓は楊氏で、太原の人。父の楊信は高祖（劉知遠）に仕え、麟州刺史

となった。劉繼業は弱冠にして、世祖（劉崇）に仕えたが、勇猛なことで知られ、しばしば戦功を立て、国の人々は「楊無敵」と呼んだ。睿宗（劉鈞）は劉の姓を与え、他の息子と同等に扱った。官は建雄軍節度使に進んだ。

広運（九七四～九七九）の時、劉繼業は太原城の東南方向を守っており、宋軍を数え切れないほど殺傷した。英武帝（劉繼元）が宋に降伏しても、劉繼業はなおも城に立てこもって激しく戦ったが、宋の太宗は日頃からその勇猛さを聞いており、生かしたまま招きたいと思い、英武帝に劉繼業を招くように命じ、自ら行かせて、禍福について意見を述べさせたので、劉繼業は北面して何度も拝礼し、激しく身を震わせて泣いて鎧を脱ぎ、汴京に入った。太宗は長い間慰勞し、姓を元に戻し、名を業とし、左領軍衛大將軍の位を授けた¹¹。『十國春秋』卷一百六「北漢三・劉繼業傳」

ここからは、楊業が劉鈞から劉の姓を与えられて養子扱いを受けていたこと¹²、そして劉繼元が降伏した後も北宋に対して抵抗を続けていたことがわかる。

『長編』からは、北漢時代の楊業に関して、更に多くの記述を見ることができる。『長編』において初めて楊業が登場するのは、卷九、開宝元年（九六八）九月の条である。

劉繼元は即位したばかりであったが、宋軍が国境を侵したため、急いで使者を遣わして契丹へ文書を送り、更に援軍を求め、また侍衛都虞候の劉繼業と馮進珂に命じて兵を率いて団栢谷を押さえさせ、将作監の馬峯を枢密使とし、軍を監督させた。馬峯は、太原の人である。劉繼元の妻は、馬峯の娘である。劉繼業は本名を重貴といい、姓は楊氏で、楊重勳の兄である。若い頃に北漢の世祖（劉崇）に仕え、姓名を賜った。馬峯が洞過河へ行くと、李繼勳らに出くわし、何繼筠は先鋒となって馬峯の軍を撃破し、二千人以上の首を斬り、五百匹の馬を手に入れ、張環や石斌といった将を捕らえ、そして汾河橋を奪い、太原城下に迫り、延夏門を焼いた。劉繼元は殿直都知の郭守斌に命じて近衛軍を率いて出撃させたが、やはり敗れた。郭守斌は流れ矢に当たり、城内へ引き返した¹³。

この記述から、劉繼業は元々の名前を楊重貴といい、楊重勳という弟がいたことがわかる。劉繼業が初めて仕えたのが劉崇であることは『宋史』及び『十國春秋』と共通しているが、その時に劉崇から劉の姓を与えられたように読め、『十國春秋』の記述とは異なる。

ただし劉繼業の「繼」の字は劉繼恩や劉繼元と共通することから、扱いとしては彼らと同世代とされていたと見るべきであろう。これ以降、劉繼業はしばしば北宋軍と交戦している。

北漢の侍衛都虞候の劉繼業と馮進珂は団栢谷に駐屯していたが、牙隊指揮使の陳廷山に数百騎を率いて偵察へ行かせた。その時李繼勳らの先鋒軍が到着しており、陳廷山は率いている兵と共に降伏した。劉繼業と馮進珂は衆寡敵せずと知り、兵を率いて晉陽（山西省太原市）へ引き返したので、北漢の君主は怒り、兵権を取り上げた。李繼勳は城を包囲した¹⁴。（『長編』卷十、開宝二年〔九六九〕二月）

李建勳を城の南に、趙贊を西に、曹彬を北に、黨進を東に布陣させ、四つの砦で城に迫った。…〔中略〕…劉繼業は何度も数百騎で突撃して東の砦を攻めたが、黨進が率先して劉繼業を追い、配下の数人もそれに従うと、劉繼業は塹壕の中へ逃げ、北漢の兵が救援に出たので、劉繼業はそれによって城に入り、捕らえられずに済んだ¹⁵。（同三月丁未）

太原の包囲が厳しくなると、郭無爲は出奔を図り、自ら兵を率いて宋軍を夜襲することを求めた。北漢の君主はそれを信じ、精鋭千人を選び、劉繼業と郭守斌を副将に命じ、自らは延夏門に登って彼らを見送り、また反乱を起こさないか窺っていた。その夜、初めは快晴であったが、やがて風雨が起こって暗くなり、郭無爲は北橋に着き、馬を留めて諸将を呼ぶと、劉繼業は馬が足に傷を負ったために、先に配下の兵を率いて城に入っており、郭守斌は道に迷い、呼んでも来なかったので、郭無爲は一人で進むことができず、配下の数十人と共に戻った¹⁶。（同五月）

この時契丹は將軍の南大王を救援に遣わし、太原城下に駐屯していたが、劉繼業は北漢の君主に、「契丹は利益を貪り信義を顧みませんから、後日きっと我が国を破ることでしょう。ただ今救援の兵は驕り高ぶって備えをしていませんから、どうかこれを襲って、数万の馬を奪い、河東の地を中国に帰順させることによって、晋の人々を塗炭の苦しみから逃れさせ、陛下は長らく高位をお受けになれば、よろしいでしょう」と言った。北漢の君主は従わなかった。南大王が数日して北へ帰ると、手厚く贈り物

をした¹⁷。(同六月)

この月、北漢主は劉繼業と馬峯に命じて晉州を攻めさせたが、武守琦はこれを洪洞にて敗った¹⁸。(『長編』卷十六、開宝八年〔九七五〕正月)

初め、劉繼業は劉繼元のために太原城を守っており、とても勇猛であった。劉繼元が降伏しても、劉繼業はなお城に籠もり激しく戦った。帝は元々その武勇を知っていたので、生かしたまま劉繼業を招きたいと思い、使者を送って劉繼元に劉繼業を呼び出すように命じた。劉繼元が信任する者に行かせると、劉繼業は北面して何度も拝礼し、激しく身を震わせて泣き、鎧を脱いで会いに来た。帝は喜び、劉繼業を手厚く慰勞し、姓を楊氏に戻し、名を(繼業から「繼」の字を)減らして業とし、左領軍衛大將軍の位を授けた。丁巳、楊業を鄭州防御使とした¹⁹。(『長編』卷二十、太平興国四年〔九七九〕八月)

これらの記述によると、劉繼業は北漢軍の主力を担っていたことがわかる。あまり戦果を挙げることができずに敗戦が多かったように記されているのは、『長編』が北宋の歴史を記すものであることから、やむを得ないところであろう。開宝二年二月では敗戦の責を負って兵権を剥奪されたものの、後には再び軍を率いており、むしろ北漢軍において欠くことのできない存在であったことが窺われる。そして劉繼業が北宋に降ったのは、劉繼元が降伏した後のことであった。

注目すべきは、北漢の降伏に先立つ『長編』卷十、開宝二年六月の条において、劉繼元に対して遼と結ぶことの危うさを説き、「中国」すなわち北宋に帰順することを勧めていたことである。各国の力量や状況を冷静に分析し、判断を下すことができる人物であったとわかる。このように早くから北漢の不利を認識しながらも、劉繼業は決して見放そうとはせず、君主が降伏した後にも抵抗を続けた。その背景には、自分を厚遇してくれた北漢への義理があったのではないか。

劉繼業は君主が降伏した後にも北宋に抵抗し続け、説得を受けてようやく降った、というのが本来の順序であったことがわかった。それでは、どうして『北宋志傳』はこれを改変したのであろうか。そもそも『北宋志傳』における楊繼業は、普段は應州にいて、救援を求められた場合にのみ太原へ出向いて行くのであり、北漢の君主との間に強い主従関係

があったようには見えない。楊繼業が北宋へ降った原因も、北宋軍の計略によって劉鈞が楊繼業を疑うようになったからであり、もはや君主に最期まで忠誠を尽くすことなど困難な状況であった。つまり『北宋志傳』は、楊繼業と北漢とのつながりを薄くすることで、楊繼業が北漢から北宋へ降ることへの批判が起きないようにしたのではないか。これにより、後に遼への降伏を拒んで死を選ぶ楊業が、北漢からの降将という経歴を持っていることへの違和感を軽減させようとしたとも考えられるのである。

二、楊業の一族

(一) 楊業の息子について

ここからは、楊業の一族について触れることにしたい。まずは楊業の息子達である。楊業には武勇に優れた七人の息子がいたものの大半が戦死し、楊六郎が跡を継いだ、というのがよく知られているところであるが、これまでに挙げた史料や作品も含めて、楊業の息子達の名前がどのように記されているかをまとめたものが下の表である。

出典	息子の名	補足
『宋史』「楊業傳」	延玉、延朗（延昭）、延浦、延訓、 延瓌、延貴、延彬	
『楊家府』	淵平、延廣、延慶、延朗、 延德、延昭（景）、延嗣	
『南宋志傳』	淵平、延定、延輝、延朗、 延德、延昭、延嗣	
「謝金吾」	平、定、光、昭、朗、景、嗣	楊延景、字彥明
「昊天塔」	平、定、光、昭、朗、景、嗣	楊延景（第四折）
「開詔救忠」	平、定、光、輝、昭、朗、嗣	
「活拿蕭天佑」	平、定、光、輝、昭、朗、嗣	楊景、字彥朗
「黃眉翁」	平、定、光、輝、昭、朗、嗣	楊景、字彥朗

「破天陣」では息子達の名前が列挙されていないが、第一折での楊景（六郎）の白に、「想俺父子八人都陣亡了、則剩下楊景一人（思うに我ら父子八人は皆戦死し、この楊景一

人だけが残された)」とあることから、基本的な家族構成に変わりはないはずである。

まず『宋史』「楊業傳」であるが、表に挙げたのは文中で名前が記されている順番であり、延浦が次子とされている以外は、確かな兄弟順は不明である。小説や雑劇では六郎と呼ばれる楊延昭も、楊業の跡を継いでいることからすると、長男であった可能性もあろう。なお、楊延昭は「楊業傳」では楊延朗と記されているが、続く「楊延昭傳」に、延朗から延昭に改めたとある。これは北宋の聖祖・趙玄朗の諱を避けたものとされている。ともかく、これにより実在の楊業にも息子が七人おり、それが後の小説や雑劇に受け継がれたことがわかる。

『楊家府』と『南宋志傳』は、次男と三男を除き共通の名前となっている。他の兄弟が皆「延」の字を共有しているにも関わらず、長男の楊淵平のみが「淵」の字を用いているのは不自然であり、恐らく本来は長男も「延」の字を用い、楊延平という表記であったと思われる。また、『楊家府』では第一巻第七則において、楊延昭が趙匡胤の次男である趙德昭の諱を避けて楊景と改名しており、むしろ雑劇では専らこの名前と呼ばれているのであるが、『南宋志傳』及び『北宋志傳』では改名したことは見えない。

雑劇は、『元曲選』所収作品と『脈望館鈔校本古今雜劇』所収作品とで息子達の名前が分かれている。全て一字ずつで記されているが、表の補足に示したように、「謝金吾」に楊延景、字は彦明とあることからすれば、「延平、延定、延光、延昭、延朗、延景、延嗣」と、前に「延」を加えたものが正式な名前になると考えられる。しかし、「活拿蕭天佑」や「黄眉翁」に楊景、字は彦朗とあるのに従えば、「彦平、彦定、彦光、彦輝、彦昭、彦朗、彦嗣」と前に「彦」が付き、しかもそれは諱ではなく字を表しているということになってしまう。いずれにせよ、息子達の名前は統一されておらず、それぞれの系統、場合によっては個々の作品毎の設定に従うしかない。

(二) 楊業の父について

楊業の父は、『宋史』などに従えば名を楊信といい、麟州刺史であった。ただし歐陽脩「供備庫副使楊君墓誌銘」では名を楊弘信としている。楊信については、『資治通鑑²⁰』卷二九一、広順二年（九五二）十二月の条にも記述がある。

初め、麟州の豪族であった楊信は自ら刺史となり、周の命に従っていた。楊信が死に、子の楊重訓が跡を継ぐと、州を挙げて北漢に降った。今では、異民族に包囲され、

再び周とよしみを通じ、夏州（陝西省靖辺県）と府州（陝西省府谷県）の二州に救援を求めた²¹。

楊信がどの勢力に属していたかについて、『資治通鑑』では「周」となっている。しかし『宋史』では「漢」とし、また『十國春秋』では劉知遠に仕えたとしている。恐らくは、後漢、後周、北漢と興亡の目まぐるしかった時期において、楊信も情勢に応じて属する相手を変えていたのであろう。

『楊家府』において楊業の父とされている何元業なる人物については、史書などに名が見えず、創造上の人物として良い。しかし雑劇になると、先に挙げた「開詔救忠」第一折では楊業は火山の楊滾の子とされており、「黄眉翁」第一折の楊景の白にも「祖公公火山令公楊滾（祖父は火山令公の楊滾）」とある。この楊滾なる人物についても詳しいことはわからないのであるが、北漢と後周との戦いに参加した実在の武将として、遼の楊衮という者がいたことが『資治通鑑』に見える。

顯徳元年正月、北漢の劉崇が後周の太祖・郭威の死を聞いて喜び、遼に後周を攻める援軍を求めたのを受けて、翌二月に遼より出陣したのが楊衮であった。しかし楊衮は北漢軍と連携を取ることができず、北漢軍が敗れると、それを救おうともせずに最後は遼へ引き上げたため、遼の穆宗の怒りを買って捕らえられた²²。

この楊衮が楊滾になったというわけではない。そもそも楊業の仇とも言うべき遼に属していた人物を、その父親に当てようとは通常ならば考えないであろう。しかし想像をたくましくするならば、楊衮は恐らく楊業よりも一世代上の人物であり、一時的ではあるが北漢と共闘したこと、そして言うまでもなく楊の姓を持つ共通点から、楊業と結びつける発想が生まれたとも考えられるのである²³。なお、火山に関してであるが、北宋の時代には麟州の東に火山軍または火山県（山西省河曲県）が置かれていた²⁴。楊信が麟州刺史であったこととの繋がりから、周辺の地名が用いられたと思われる。

（三）楊業の弟について

既に言及したように、楊業には楊重勳という弟がいた。この人物は、歐陽脩が墓誌銘を書いた楊珙の祖父に当たる。楊信の跡を継いだのは、楊業ではなくこの楊重勳なのである。『長編』巻二、建隆二年（九六一）三月の条によれば、楊重勳の元の名は楊重訓であったが、周の恭帝の諱（宗訓）を避けて改めたという²⁵。

先に挙げた『資治通鑑』卷二九一、広順二年十二月の条には、楊重勳は楊信の跡を継ぐと後周から北漢に降ったが、その後再び後周に属したとあった。しかし『資治通鑑』卷二九三、顕徳四年（九五七）十月癸亥の条には、「北漢の麟州刺史である楊重勳が城を挙げて降伏したので、麟州防御使とした²⁶」とあることから、これ以前には再び北漢に属していた時期があり、そこからまた後周に降ったことがわかる。『長編』にある楊重勳に関する記述を見る限りでは、これ以降は後周、そして北宋に仕え続けたようである。

北漢が麟州を攻めたが、防御使の楊重勳がこれを撃退した²⁷。（『長編』卷二、建隆二年三月）

建寧軍を麟州に置いた。庚午、防御使の楊重勳を留後とした²⁸。（『長編』卷八、乾徳五年〔九六七〕十二月己巳）

権知府州の折御勳を永安軍（河北省冀州市）留後とした。この時折御勳と建寧軍留後の楊重勳は詔を待たずして帝（趙匡胤）の行幸先へやって来ており、帝はその心がけを良く思ったので、この命を下したのであり、また共に厚く恩賞を与えて帰した²⁹。（『長編』卷十、開宝二年五月癸卯）

建寧軍留後の楊重勳を保静軍（安徽省宿州市）留後に移した³⁰。（『長編』卷十三、開宝五年〔九七二〕九月戊寅）

兄である楊業が北漢に仕えていたのであるから、楊重勳も北漢に仕えるのが一見自然なように思われる。しかし、そうではなく叛服を繰り返していたのは、家名を絶やさないために、情勢に応じて有利な方へ身を置こうとしたからであると思われる。或いは楊業には劉の姓が与えられていたからこそ、楊の姓を継いだ自分が家名を絶やしてはならないとの思いが強かったのではないか。最終的に北宋に仕え続けたのは、北漢よりも北宋の方が有利であると確信を得たからであろう。「供備庫副使楊君墓誌銘」にあるように、楊重勳の家系は、子の光辰、孫の琪、曾孫の暉と続いた。

おわりに

最後に、楊業が北漢から北宋へ降ることを受け入れたのに対し、遼へ降ることを拒むに至った要因について、改めて考えてみたい。

楊業が北宋へ降ったのは、北宋の太宗が劉繼元に命じて、抵抗を続ける楊業を説得させたからである。その後は、降将であるにも関わらず兵権を授けて信任してくれる北宋に対して、忠義を抱くようになったであろう。しかし北漢が降伏した時点では、やはり本来は城を枕に討ち死にする覚悟を決めていたはずである。その背景としては、弟の楊重勳が家名を継いでいたことがある。

父親である楊信の跡は楊重勳が継いだ。楊重勳は家を滅ぼさないために、時流を見ながら北宋と北漢の間で叛服を繰り返さなければならなかった。それは楊信の代においても変わらなかったはずである。その一方で楊業は、父の跡を継がなかったからこそ、自らの命を顧みず忠義に殉ずるという決意をすることが可能になっていた。楊業が父の跡を継いでいたならば、家名を残すために北漢から北宋へ進んで降伏し、遼軍に捕らえられた際にも、遼へ降伏するという選択をしたかもしれない。しかし実際には弟が父の跡を継いでいたために、楊業は家名を残すことに拘泥せず、宋への忠義に殉じて死を選ぶことができたのである。

注

1 本文中でも述べるように、楊業という名は北宋へ降った後のものであり、北漢に仕えていた頃の名は劉繼業であった。小説や雑劇では楊繼業と呼ばれることが多いが、北漢に仕えていた時期であるのに楊業と表記されている場合もあれば、北宋へ降った後であるのに楊繼業と表記されている場合もある。本章では楊業と呼ぶことを基本としたが、引用文における表記をそのまま用いた部分も多い。

楊業やその一族についてまとめられている主な先行研究としては、翦伯贊著・波多野太郎訳「楊家將物語と楊業親子」（『横浜大学論叢』第六卷第三・四合併号、横浜市立大学学術研究会編、一九五五年）、木田知生「楊業と楊家將をめぐる諸問題」（『龍谷史壇』第百十四号、龍谷大学史学会、二〇〇〇年）、飯山知保「楊業から元好問へ——一〇～一三世紀晋北における科擧の浸透とその歴史的意義について——」（『東方学』第百十一輯、二〇〇六年）、松浦智子「楊家將の系譜と石碑—楊家將故事發展との関わりから—」（『日本中国学会報』第六十三集、二〇一二年）などがあり、本稿もこれらに負うところが少なくないが、一々注記することは控えさせて頂く。

2 田中整治「遼と北漢との関係」（『史流』第七号、北海道学芸大学史学会、一九六六年）参照。

-
- 3 題目「楊六郎報讐雪冤恨」、正名「八大王開詔救忠臣」。主な登場人物は、楊景（正末）、楊令公、楊七郎、八大王、潘仁美、韓延壽（沖末）など。無名氏の作品で、テキストは『脈望館鈔校本古今雜劇』のみ。以下にあらすじを示す。

遼の韓延壽が兵を率いて代州城を包囲したので、帝の命により潘仁美が元帥に、賀懷簡と劉君期が副元帥に、楊令公と息子の楊景、楊七郎が先鋒に任じられる。八大王は潘仁美が楊令公に私怨を抱いていることを警戒し、呼延贊を監軍に付ける。潘仁美は楊令公らが遅参したとして彼らを処刑しようとするが、呼延贊によって阻止されたので、翌日出陣して功で罪を補うように命じる。楊令公は翌日が悪日であるとして潘仁美に日を改めるように求めるが、聞き入れられない。（第一折）

楊令公らは韓延壽の配下の土金宿と戦う。敗走する土金宿を追う内に両狼山の虎口交牙峪へ誘い込まれ、閉じ込められる。（第二折）

楊七郎が包囲を突破し、潘仁美らの陣へ援軍を求めに行くと、潘仁美は聞き入れず、楊七郎が恨み言を述べると木に縛り付けて矢で射殺し、陳林と柴敢に死体を桑乾河へ放り込むように命じる。楊七郎の靈魂が楊景の夢に現れ、自分が潘仁美によって惨殺されたことを告げる。楊令公と楊景は韓延壽と戦い、楊景は東京へ落ち延びるが、力尽きた楊令公は李陵碑に頭を打ち付けて死ぬ。（楔子）

楊景の訴えを受け、太尉の黨彦進が潘仁美の陣へやって来る。黨彦進は潘仁美を騙して元帥の印を奪い、潘仁美、賀懷簡、劉君期を捕らえる。更に寇萊公が皈依寺へ護送された潘仁美らを訪ね、楊令公をわざと窮地に追いやったという自白を引き出す。また陳林と柴敢も証人となったので、潘仁美らは東京へ護送される。（第三折）

その頃、天下に大赦が下されることになる。潘仁美ら三人が許されることを恐れた八大王は、夜の中に楊景を牢の中へ行かせ、潘仁美らを殺させる。楊景は翌朝に自首するが、大赦が下されたことにより、潘仁美らを殺した罪は許される。（第四折）

- 4 原文は「(令公云) 威震邊關氣勢雄、丹心耿耿作元戎。匣中三尺錐鋸劍、永保皇圖建大功。老夫楊繼業是也、乃火山楊滾之子。廣知兵甲之書、精曉排軍之法。先佐於劉薛王麾下爲將、某所生七子、乃是平、定、光、輝、昭、朗、嗣、同扶劉主。加某爲金刀大將軍、智勇無敵都總管、兵法教授楊令公。昔日有潘仁美三下河東、被某箭射了左臂、宋將救回。後來宋朝率大勢雄兵、困了河東、水淹了俺劉薛王。大宋聖人、招安某父子八人入朝、同扶社稷、加某爲鎮國大將軍之職。自降宋以來、累建大功。」

- 5 原文は「卻說北漢主姓劉名鈞、一妹配薛釗。釗一日醉甚、欲誅其妻、其妻奮衣得脫。釗至次日酒醒、恐漢王辱之、遂自刎而死。釗生一子、名繼恩、鈞無子、乃養繼恩爲己子。其妹復適何元業、生二子、長繼元、次繼業。鈞又養爲己子。至是漢王鈞殂、繼恩即漢王位、與周甚仇、稱子於遼、乞遼助兵侵周。遼

乃遣耶律于越領兵三十萬、由嶺南而出。漢主命繼元爲元帥、繼業爲先鋒。繼業娶余氏、生七子、淵平、延廣、延慶、延朗、延德、延昭、延嗣、又生二女、琪八娘、瑛九妹、俱善騎射、精通韜略。」

- 6 『南宋志傳』については、前掲の上田望「講史小説と歴史書(2) — 『殘唐五代史演義』、『南宋志傳』の構造と変容—」、氏岡真士「南宋王の神話」(『信州大学人文科学論集文化コミュニケーション学科編』第三十四号、二〇〇〇年)を参照。また、氏岡真士「『五代史平話』のゆくえ—講史の運命—」(『中国文学報』第五十六冊、京都大学文学部中国語学中国文学研究室、一九九八年)は、『南宋志傳』が『五代史平話』に基づき、後に『飛龍全傳』の種本になったという流れについて、詳細に論じている。

なお、『南宋志傳』には江戸時代の翻訳『通俗宋史軍談』(尾陽舎松下氏序、享保四年〔一七一九〕刊)があり、『通俗二十一史』第十卷(早稲田大学出版部、一九一二年)にも収められている。

- 7 原文は「卻説楊令公名繼業、太原人、生得面如重棗、鬚分五髯、使一柄大桿刀、號爲楊無敵。生下七子、長曰淵平、次日延定、三日延輝、四日延朗、五日延德、六日延昭、七日延嗣、義子懷亮、此八人俱各弓馬嫻熟、武藝精通。當時稱雄勇者、以上山後之兵爲最。」

なお、「面如重棗」という描写は、三国志物語における關羽と共通している。『三國志演義』第一回に「身長九尺、髯長二尺、面如重棗、唇若塗脂(身の丈は九尺、ひげの長さは二尺、顔は熟したナツメのように赤く、唇は紅を塗ったかのよう)」とある。楊業が小説のキャラクターとなるに際し、英雄としての關羽のイメージが取り入れられたものと思われる。

- 8 この汾水を利用した水攻めというのは、本来は後周軍が北漢軍に対して行ったものである。『長編』卷十の開宝二年三月から閏五月にかけて、汾水の水をせき止めて太原城に注いだことが見える。また、先に引いた「開詔救忠」第一折でも言及されている。『南宋志傳』第三十四回において、楊繼業が汾水の水をせき止めて後周軍を水攻めにするのは、これの意趣返しなのである。

- 9 『北宋志傳』の内容が『南宋志傳』で既に予言されていることは、前掲の氏岡真士「南宋王の神話」も指摘している。また、松浦智子「『南北宋志傳』「五郎爲僧」故事と「建文帝出亡」伝説」(『中国古典小説研究』第十五号、中国古典小説研究会、二〇一〇年)は、『南宋志傳』第三十五回において楊五郎が智聰禪師から小箱を受け取ることが、『北宋志傳』第十七回において楊五郎が出家することの巧妙な布石となっていることに注目し、『南宋志傳』が『北宋志傳』の前編として機能を果たしていると指摘している。

- 10 原文は「楊業、并州太原人。父信、爲漢麟州刺史。業幼倜儻任俠、善騎射、好畋獵、所獲倍於人。嘗謂其徒曰、我他日爲將用兵、亦猶用鷹犬逐雉兔爾。弱冠事劉崇、爲保衛指揮使、以驍勇聞。累遷至建雄軍節度使、屢立戰功。所向克捷、國人號爲無敵。太宗征太原、素聞其名、嘗購求之。既而孤壘甚危、業

勸其主繼元降、以保生聚。繼元既降、帝遣中使召見業、大喜、以爲右領軍衛大將軍。師還、授鄭州刺史。」

11 原文は「劉繼業、本姓楊氏、太原人。父信、事高祖、爲麟州刺史。繼業弱冠、事世祖、以驍勇聞、屢立戰功、國人號爲楊無敵。睿宗賜劉姓、比於諸子。累官建雄軍節度使。廣運時、繼業捍太原城東南面、殺傷宋師無算。及英武帝降宋、繼業猶據城苦戰、宋太宗素聞其勇、欲生致之、諭英武帝令招繼業、隨遣親往、爲開陳禍福、繼業乃北面再拜、大慟釋甲、入汴京。太宗撫慰良久、復其姓、止名業、授左領軍衛大將軍。」

12 楊業が劉の姓を与えられていたという事実から考えると、後世の雑劇や小説において、楊業の官名や綽名にしばしば「金刀」の字が用いられていることは示唆的であろう。『後漢書』卷一上「光武帝紀上」の建武元年六月己未に、当時の予言として「劉秀發兵捕不道、卯金修德爲天子（劉秀兵を發して不道を捕らえ、卯金徳を修めて天子と爲る）」といい、李賢注に「卯金刀、名爲劉（卯金刀を名づけて劉と爲す）」とあるように、卯・金・刀の字によって劉の字を暗示するという方法が古くから見られるためである。以下に、雑劇・小説中における楊業の官名・綽名を示す。

- ・山後應州郝山王金刀楊令公（『南宋志傳』第三十三回、丁貴の白において）
- ・金刀教手無敵大總管楊令公（「謝金吾」第二折）
- ・金刀無敵大總管楊令公（「昊天塔」第一折）
- ・金刀大將軍、智勇無敵都總管、兵法教授楊令公（「開詔救忠」第一折）
- ・金刀教手楊令公（「活拿蕭天佑」第二折）
- ・金刀楊繼業（「黃眉翁」第一折）

本文中で引用した『南宋志傳』第三十三回に見られるように、実際に武器として刀を使う場合もあるが、やはり「金刀」は劉の姓に由来すると考えるべきである。

13 原文は「繼元始立、王師已入其境、乃急遣使上表契丹、且請兵爲援、又遣侍衛都虞候劉繼業・馮進珂領軍扼團栢谷、以將作監馬峯爲樞密使、監其軍。峯、太原人。繼元妻、峯女也。繼業本名重貴、姓楊氏、重勳之兄。幼事北漢世祖、遂更賜以姓名。馬峯至洞過河、與李繼勳等遇、何繼筠以先鋒擊破之、斬首二千餘級、獲馬五百疋、擒其將張環・石斌、遂奪汾河橋、薄太原城下、焚延夏門。繼元遣殿直都知郭守斌領內直兵出戰、又敗。守斌中流矢、退入城中。」

14 原文は「北漢侍衛都虞候劉繼業・馮進珂屯於團栢谷、遣牙隊指揮使陳廷山領數百騎來偵邏。會李繼勳等前軍至、廷山即以所部降。繼業・進珂知衆寡不敵、亦領兵奔還晉陽、北漢主怒、罷其兵柄。繼勳等遂圍城。」

15 原文は「命李建勳軍於城南、趙贊軍於西、曹彬軍於北、黨進軍於東、爲四寨以逼之。…〔中略〕…劉

繼業復以突騎數百犯東寨、黨進挺身逐繼業、麾下數人隨之、繼業走匿壕中、北漢兵出援之、繼業緣繩入城、獲免。」

16 原文は「太原圍急、郭無爲謀出奔、因請自將兵夜擊王師。北漢主信之、選精甲千人、命劉繼業・郭守斌爲之副、北漢主登延夏門自送之、且伺其反。是夕、初甚晴霽、已而風雨晦冥、無爲行至北橋、因駐馬召諸將、而劉繼業以馬傷足、先收所部兵入城矣、守斌迷失道、呼之不獲、無爲不能獨前、乃與麾下數十人亦還。」

17 原文は「時契丹遣其將南大王來援、屯於太原城下、劉繼業言於北漢主曰、契丹貪利棄信、他日必破吾國。今救兵驕而無備、願襲取之、獲馬數萬、因籍河東之地以歸中國、使晉人免於塗炭、陛下長享貴寵、不亦可乎。北漢主不從。南大王數日北還、贈遺甚厚。」

18 原文は「是月、北漢主命劉繼業・馬峯攻晉州、武守琦敗之洪洞。」

19 原文は「初、劉繼業爲繼元捍太原城、甚驍勇。及繼元降、繼業猶據城苦戰。上素知其勇、欲生致之、令中使諭繼元俾招繼業。繼元遣所親信往、繼業乃北面再拜、大慟、釋甲來見。上喜、慰撫之甚厚、復姓楊氏、止名業、尋授左領軍衛大將軍。丁巳、以業爲鄭州防禦使。」

20 以下、『資治通鑑』の引用は『資治通鑑』（中華書局、一九五六年）による。

21 原文は「初、麟州土豪楊信自爲刺史、受命於于周。信卒、子重訓嗣、以州降北漢。至是、爲羣羌所圍、復歸款、求救於夏・府二州。」

22 該当部分は以下の通りである。

・北漢主聞太祖晏駕、甚喜、謀大舉入寇、遣使請兵于契丹。二月、契丹遣其武定節度使・政事令楊衮將萬餘騎如晉陽。

北漢の君主は太祖（郭威）が崩御したことを聞くと、非常に喜び、大軍を起こして攻め入ることを計画し、援軍を要請する使者を契丹へ遣わした。二月、契丹は武定節度使・政事令の楊衮に一万騎以上を率いて晉陽へ向かうように命じた。（卷二九一、顯徳元年正月及び二月）

・癸巳、前鋒與北漢軍遇、擊之、北漢兵卻。帝慮其遁去、趣諸軍亟進。北漢主以中軍陳於巴公原、張元徽軍其東、楊衮軍其西、衆頗嚴整。

癸巳、先陣の軍が北漢の軍と出くわし、これを攻撃したので、北漢の軍は退いた。帝（柴榮）は逃がすことを恐れ、諸軍を速やかに進軍させた。北漢の君主は中軍を巴公原に並べ、張元徽はその東に、楊衮はその西に布陣し、兵達はとても整然とした様子であった。（同三月）

・楊衮策馬前望周軍、退謂北漢主曰、勍敵也。未可輕進。北漢主奮髯、曰、時不可失、請公勿言、試觀我戰。衮默然不悅。

楊袞は馬に鞭打って進んで周軍を望み見、退いて北漢の君主に、「強敵である。軽々しく進むべきではない」と言った。北漢の君主はひげを振るい、「時機を失うべきではなく、そなたは何も言わず、私の戦いぶりを見られよ」と言った。楊袞はじっと黙って不愉快になった。(同上)

・楊袞畏周兵之強、不敢救、且恨北漢主之語、全軍而退。

楊袞は周の兵が強いのを恐れ、北漢を救おうとはせず、また北漢主の言葉を恨んでいたため、軍を整えて退却した。(同上)

・北漢主收散卒、繕甲兵、完城塹以備周。楊袞將其衆北屯代州、北漢王遣王得中送袞、因求救於契丹。契丹主遣得中還報、許發兵救晉陽。

北漢の君主は散らばった兵士を集め、鎧を修繕し、城の塹壕を補修して周に備えた。楊袞は配下の者達を率いて北へ向かい代州（山西省代県）に駐屯し、北漢の君主は王得中を遣わして楊袞を送らせ、契丹に救援を求めた。契丹の君主は王得中を帰し、出兵して晉陽を救うことを聞き入れた旨を報告させた。(同三月庚子)

・帝至晉陽城下、旗幟環城四十里。楊袞疑北漢代州防禦使鄭處謙貳于周、召與計事、欲圖之。處謙知之、不往。袞使胡騎數十守其城門、處謙殺之、因閉門拒袞。袞奔歸契丹。契丹主怒其無功、囚之。處謙舉城來降。

帝（柴榮）は晉陽城下に至り、旗印が城の周り四十里を囲んだ。楊袞は北漢の防禦使である鄭處謙が周に内応していると疑い、呼び寄せて軍事を相談し、陥れようとした。しかし鄭處謙はこれに気付き、行かなかった。楊袞は北方異民族の騎馬隊に城門を守らせていたが、鄭處謙はそれらを殺し、門を閉じて楊袞を入れなかった。楊袞は契丹へ逃げ帰った。契丹の君主は楊袞が何の戦功も挙げていないことを怒り、捕らえてしまった。鄭處謙は城を挙げて投降した。(卷二九二、顯徳元年五月丙子)

23 楊袞に関しては、『殘唐五代史演義傳』にも興味深い記述がある（テキストは『明代小説輯刊』第三輯、巴蜀書社、一九九九年所収のものによる）。第五十九回において、北漢が周を攻めるための援軍を契丹に求め、契丹から遣わされた大将が楊袞であった。

契丹主遂遣大将楊袞、率領萬騎、前來助戰。

契丹の君主はそこで大将の楊袞を遣わし、一万騎を率いて、加勢に行かせた。

この部分の内容は、『長編』の記述とも合致するものである。しかし、続く第六十回にやや不可解な記述がある。

兩陣對圓、周將出馬、北漢將楊袞挺鎗來迎。

両軍が対峙し、周の将が出陣すると、北漢の将の楊衮が槍を突き出して迎え撃った。

これまで見てきたように楊衮は契丹に仕える将であり、「北漢將」という表現は適切ではない。無論、ここで「北漢將」としているのは、楊衮が北漢の軍に身を置いていることを指しているだけなのかもしれない。そもそも、『殘唐五代史演義傳』に楊衮が登場するのは第五十九回から六十回のわずかな部分でしかないため、楊衮がどのような人物として設定されていたのかも不明である。しかしこの記述こそが、楊衮の所属について混乱が生じていたことを示す証左と見なすこともできるのではないかと。なお、楊業は『殘唐五代史演義傳』に全く登場しない。

24 『宋史』卷八十六「地理志二・河東路・火山軍」によると、太平興国七年（九八二）に火山軍、治平四年（一〇六七）に火山県を置いたが、熙寧四年（一〇七一）に廢した。

25 原文は「重勳、即重訓也、避周恭帝諱改焉。」

26 原文は「北漢麟州刺史楊重訓舉城降、以爲麟州防禦使。」

27 原文は「北漢寇麟州、防禦使楊重勳擊走之。」また『長編』卷三の建隆三年（九六二）四月にも同じ文がある。

28 原文は「置建寧軍於麟州。庚午、以防禦使楊重勳爲留後。」

29 原文は「以權知府州折御勳爲永安留後。時御勳與建寧留後楊重勳皆不媿詔來詣行在、上善其意、故有是命、仍並加厚賜遣還。」

30 原文は「徙建寧留後楊重勳爲保靜留後。」

第二部 楊家將雜劇

第一章 「謝金吾」 雑劇について

はじめに

第一部において、京劇を始めとする現在の演劇の中でも、楊家将に関する演目が占める比重は大きく、特に楊門女将の活躍を描くものの人気が高いことに触れた。ただし、今でこそ楊家将といえば女将というイメージが強いが、雑劇においては必ずしもそうではなかった。

楊家将を題材とする雑劇としては、六種が現存している。これらの雑劇において話の中心となっているのは、大抵が楊六郎のような英雄、もしくは孟良や焦贇のような豪傑なのである。本章では、その中でも女性の果たす役割が比較的大きい「謝金吾」雑劇に焦点を当て、小説との関わりや、雑劇としての構成方法について考察すると共に、楊門女将のルーツについても探してみたい。

一、「謝金吾」概略

「謝金吾」は『元曲選』に無名氏の作品として収められており、題目を「楊六使私下瓦橋關」、正名を「謝金吾詐拆清風府」という¹。略称を「謝金吾」、「清風府」、また別称を「私下三關」という。『録鬼簿』によると、今は佚した雑劇の一つとして元の王仲元による「楊六郎私下三關」があり、これは「謝金吾」と題材を同じくする劇であったと推測されている²。

この話は『楊家府』においても、異なる部分は存在するもののほぼ同じ趣向で収められている。以下に、『楊家府』より「謝金吾」に相当する部分の内容を記す。

遼のスパイである王欽は楊家の失脚を目論み、朝廷で権勢を振るっていた謝金吾をけしにかけて、楊家の屋敷である無佞府の滴水天波楼が往来の妨げになっているとして取り壊しを命じる。令婆（「謝金吾」における佘太君）や、楊六郎の妻の柴郡主が抗議をしても謝金吾は聞き入れず、瑛九妹が三関にいる楊六郎に事態を知らせる。楊六郎は三関の守備を岳勝らにまかせ、密かに汴京へ向かう。すると途中で焦贇が現れ、自分も連れて行って欲しいとせがむ。楊六郎は初めの内は承知しなかったが、焦贇に食い下がられて同行を認める。汴京に着いた焦贇は二日ほどで退屈になり、見張りの兵に頼み込み、楊六郎に黙って外出する。たまたまある大きな屋敷の前にたどり着き、実はそれが謝金吾の屋敷であると知る

と、焦贇は頭に血が上り、見張りの兵の制止を振り切って屋敷に入り込む。そして厨房にいた小間使いを手始めに、謝金吾を含めた十三人を皆殺しにする。焦贇は楊六郎に累が及ばぬように、血で自分の名を記した詩を壁に書き付けておいたが、結局二人とも捕縛される。八王の助命嘆願により、楊六郎と焦贇は別々の地に流罪となるが、楊六郎は流刑地で更に讒言に遭い、処刑されかけたところを脱出して身を隠す。(第三卷第三則から第五則にかけて)

「謝金吾」の構想については、宋代に開封城内で実際に起こった出来事に由来があることが明らかになっている³⁾。『長編』巻五十一、咸平五年(一〇〇二)二月戊辰に次のようにある。

京城衢巷狹隘、詔右侍禁・閣門祇候謝德權廣之。德權既受詔、則先撤貴要邸舍、群議紛然。有詔止之、德權面請曰、今沮事者皆權豪輩、各屋室僦資耳、非有它也。臣死不敢奉詔。上不得已、從之。…〔中略〕…乃詔開封府街司約遠近置籍立表、令民自今無復侵占。

都の道路が狭いので、帝は右侍禁・閣門祇候の謝德權に詔を下して広げさせることにした。謝德權は詔を受け、まず身分が高い者の屋敷を撤去しようとしたので、人々の議論が紛然となった。詔を下して止めようとしたが、謝德權は帝に会い、「今私を妨げようとしているのは全て権力がある者で、屋敷を惜しんでいるだけなのです。私は死んでも詔を受けません」と言った。帝はやむを得ず、これに従った。…〔中略〕…そこで開封府街司に詔を下して各地で戸籍を調べて目印を立て、人々に以後二度と侵犯行為をさせなかった。

この記述から、謝德權という人物によって京師開封の街巷の侵占行為が厳しく取り締まられていたことがわかる。文中の「街司」とは、宋初に京師の巡邏などを管掌した「(左右)金吾街司」の略称であり、「謝德權」と「金吾街司」から「謝金吾」というキャラクターが生み出されたと考えられている。

その謝金吾を殺す焦贇は、ただ感情の赴くままに行動し、破壊の限りを尽くすキャラクターである。しかも彼は楊六郎を巻き添えにし、楊家全体、更には朝廷をも巻き込む騒動にまで発展してしまう。中国の小説では、『三國志演義』における張飛、『西遊記』におけ

る猪八戒、『水滸傳』における李逵といった、秩序に束縛されずに物語を混乱に陥れるトリックスターの存在が欠かせないが、焦贇はまさしく楊家将物語におけるトリックスターであるといえよう。

三国志の物語においては、平話から雑劇、そして演義へという流れで発展し、整理されていったことが高橋繁樹氏による一連の論文で指摘されている⁴が、それは楊家将の物語においても同様であっただろう。「謝金吾」は元刊本には収められておらず、現存するテキストは『元曲選』のみである。『元曲選』に関しては臧懋循の改編がまず問題にされるが、「謝金吾」については、王仲元による同題材に基づくと思われる雑劇があり、元代において既に話自体はある程度成立していたと見なし得ることから、やはり大筋には雑劇から小説へという流れであったと考えられる。

それでは、焦贇が謝金吾を殺す場面を、雑劇と小説とで比較してみよう。まずは「謝金吾」から引用する。

焦贇（登場）…〔中略〕…王樞密と謝金吾の無礼は許し難く、私はこの屋敷がまさしく謝金吾の屋敷だと聞いたので、まず謝金吾の一家全員を殺し、その後王樞密を殺しに行こう。役所の時を告げる太鼓を聞くに、三更頃だ。この塀を跳び越えよう。裏庭にやってきたぞ。耳を澄ましてみよう。

梅香 この時分でも衙内様はあちらで酒を飲んでいらっしゃるが、そろそろお休みになるだろう。身の回りのお世話をしに行こう。（猫を呼ぶしぐさをする）猫や、猫や。

焦贇（梅香を殺すしぐさをする）このあま逃げるな、我が刀を食らえ。

（梅香が死ぬしぐさをして、退場）

焦贇 これこそ謝金吾の寢室、蹴り開けてくれよう。

（謝金吾を殺すしぐさをする）

焦贇 謝金吾と家族十七人を殺したぞ⁵。〈第三折〉

続いて、『楊家府』における謝金吾殺害の場面を見てみよう。

こっそりと厨房に入ると、下僕は皆母屋にいて酒の世話をしており、厨房では一人の小間使いが、酒と肴を用意しているだけであった。焦贇は短刀を引き抜くと、進み

出て殺してしまった。首を掲げて母屋へ出ると、謝金吾が真ん中に座り、楽士や歌うたいの子供が両脇に並んでいた。焦贄はその首を謝金吾の顔に投げつけた。謝金吾は大いに驚き、首をぶつけられて顔中を血だらけにし、「賊だ。皆の者早く捕らえよ」と大声で叫んだ。焦贄は進み出て、「腹黒い悪党め、焦様を知っているか」と罵るや、謝金吾のえり首に一太刀浴びせ、その首を斬り落とした。人々はそれを見ると、それぞれ逃げた。焦贄は怒りが収まらず、一門の老若を問わず皆殺しにし、一人も逃がさなかった⁶。〈第三巻第五則「焦贄夜殺謝金吾」〉

両者を比較してみると、梅香すなわち小間使いを焦贄が殺す部分については、『楊家府』ではただ殺したという事実のみが記されているのに対し、「謝金吾」では様々な白やしぐさを入れて詳しい描写がなされている。一方で謝金吾を殺す部分は、却って雑劇の方が簡潔な描写になっているようだが、これは最も聴衆の注目を集めて主眼となる部分であるが故に、役者の技量や演出によって異なる演技がなされていたことを示すと考えることもできよう。『楊家府』では順を追った客観的な描き方である。このような、一人の豪傑が悪党一家を虐殺するという構図は、『水滸傳』第三十一回において自分を陥れた張都監の一家を鴛鴦楼で皆殺しにした武松や、『三國志平話』巻上において督郵を鞭打ちにする直前に太守一家を皆殺しにした張飛など、中国ではしばしば用いられており、盛り場での語り物であった時代に人々の鬱憤を晴らしていたなごりなのである。

舞台上で行われた動作をそのまま文章に書き出しても面白さがきちんと伝わるとは限らず、かえってわかりにくくなる恐れもある。そもそも雑劇では、ト書きを除けば白の中で状況を説明しなければならない。それは劇場で聴く場合にはそれほど気にならずとも、レーゼドラマとして読む場合には、時として冗長で煩わしいものとなりかねない。

「謝金吾」の中で小間使いが猫を呼ぶ場面があるが、原文を読む限りでは唐突で不自然な印象を受ける。恐らく実際の舞台上では、小間使いが何者かの気配を感じ、焦贄が咄嗟に猫のふりをしてごまかす、というようなやりとりがあったのではないか。それは張り詰めた雰囲気の中でのやりとりであったかもしれないし、現代のコントでもよく見られるようにコミカルに演じられていた可能性もある。しかしそのようなやりとりは文字として読む場合には冗長で不要であるとして、『元曲選』もしくはそれ以前の段階において削除されたのであろう。

雑劇から小説へという流れの中においても、やはり読み物として自然なものとするべく

考慮されていたであろうし、むしろそれはレーゼドラマの場合以上に強く働いていたはずである。『楊家府』は「謝金吾」にあった焦贊や小間使いの説明的な白を削る一方で、謝金吾を殺す場面をややふくらませ、読んでスムーズに状況が理解できるような、より整理された描写となっている。

二、「謝金吾」における女性の活躍—余太君と長國姑—

焦贊はその豪快さや奔放さから人気が高かったであろうと思われるが、「謝金吾」においては正末の演じる役とはなっていない。それどころか、「謝金吾」は旦本として書かれているのである。正旦は最初の楔子には登場せず、第二折までは余太君、第三折以降は改扮して長國姑を演じている⁷。

『元曲選』には「謝金吾」の他にもう一つ、「昊天塔孟良盜骨⁸」という楊家将ものの劇が収められている。こちらは末本であるが、やはり正末に演じさせるのにふさわしいと思える楊景をさしおいて、正末は第一折では楊令公の魂、第二折と第三折では孟良、第四折では楊五郎を演じる。「昊天塔」の作者は、武将として非の打ち所のない楊景よりも、『三國志演義』の張飛や『水滸傳』の李逵のような荒々しさを持った孟良や楊五郎を描くことに重点を置いていたと考えられる。なお、『脈望館鈔校本古今雜劇』に収められている四種の楊家将雜劇も全て末本である。

仮に「昊天塔」の図式を当てはめるならば、「謝金吾」においても正末に楊景ではなく焦贊を演じさせるということになったはずである。しかし「謝金吾」はそうしなかったのみならず、従来であれば男性を中心として展開されてきた物語を一転して旦本として書き、正旦に余太君と長國姑という二人の女性を演じさせているのである。

楊家将物語の特徴として、楊門女将と呼ばれる巾幗英雄の活躍が多く見られる点を挙げる事ができる。特に京劇ではそれが顕著に現れており、余太君、穆桂英、楊八姐、楊排風などといった女性が活躍する多くの演目がある。しかし、楊家の始祖たる楊業や楊六郎に関する史実が南宋には既に民間で伝承されるようになっていたことに比べれば、楊門女将の活躍はやや遅れて生まれたものである。現在は名のみ伝わる南宋の講談「楊令公」、「五郎爲僧」や、金の院本「打王樞密爨」からは女性の活躍は窺われないし、現存する雜劇においても英雄や豪傑の活躍が目立つ。そのような中で「謝金吾」は早くも楊家の女性の活躍を描いており、楊門女将の萌芽が見られるという点で注目させられる。

まず余太君について見るとしよう。「謝金吾」第一折において、彼女は楼の取り壊しに訪

れた謝金吾と激しく言い争い、遂には突き飛ばされるが、奸臣を相手に一步も退こうとはしない。

謝金吾 聖旨の話はさておき、この私謝衙内は現に朝廷の大臣であるから、お前は私に盾突くべきではないぞ。

佘太君（唱う）

【村里迂鼓】

“あやつは朝廷の大臣と言うが

我ら楊家も民間の一族ではない”

謝金吾 お前はまだ私がわからぬか。私は王樞密の婿で、お前のような白髪頭など眼中にないわ。

佘太君（唱う）

“なんとお前は舅の権勢を笠に着て

私のような年寄りを虐げるつもりなのだ”

謝金吾 この老いぼれは本当に身の程を知らぬ。私が少し話をさせてやったら、ひたすら年寄り風を吹かせ、くどくどと話すのを止めようとせぬ。お前がたとえひげを生やしても、私はお前など相手にせぬ。失せろ。（佘太君を突き飛ばすしぐさをする）

佘太君（唱う）

“思いがけずこやつに転ばされ

腰をくじき、膝を擦りむき

もう少しで頭を割るところであった

ああ、お前は白髪頭のこの婆さんをいたわるべし⁹”

しかし『楊家府』では、謝金吾と親しい者を通じて賄賂を送り、楼の取り壊しを遅らせようとするという、消極的な行動をするに留まっている。

令婆「この楼を守れば、限りない誉れです。家財を使い果たしても構いません。しかし謝金吾は買収されないでしょう。」

柴郡主「聞るところによると謝金吾と劉憲は最も気心が通じているとのことですから、

使いを出して礼物を送らせ、劉憲から渡してもらえば、謝金吾はきっと受け取るでしょう。」

令婆はすぐ密かに劉憲のもとへ使いを出し、謝金吾に玉をはめた帯一本と、黄金百両を送らせた。劉憲は礼物を受け取ると、謝金吾の屋敷に送った¹⁰。〈第三巻第四則〉

この場面における余太君は、「謝金吾」に比べると随分大人しく、物わकारの良い女性となっている。『楊家府』には余太君が女将として楊令公と共に出陣している場面¹¹もあるのだが、それと比べても勇ましが全く感じられない。日常と戦場とで人格が分裂しているのである。これは或いは、屋敷をあずかる余太君と、戦場で武勇を振るう余太君とは、それぞれ別系統の話に由来するものであることを示しているのかもしれない。一方、『楊家府』に比べると、「謝金吾」での余太君は、年老いても楊家の誇りを保ち続け、息子が不在の屋敷を守るという強い気概を持っており、その描写は生き活きとしている。

次に長國姑について見てみよう。彼女は自らについて、杜太后の娘で太祖の妹、太宗の姉であるなどと語っている¹²が、もちろん実在の人物ではない。「謝金吾」では、一つの演劇の中で話を完結させるためにこの長國姑を登場させ、彼女に王樞密の正体を見抜かせるなどの設定がされている。そして、彼女も謝金吾に対して臆することなく立ち向かっているのである。

「謝金吾」第三折において、楊六郎と焦贊が処刑されようとするところへやって来た長國姑は、王樞密と激しく言い争い、更には彼を殴りつけ、処刑を阻止する。

長國姑 罵ろうぞ、罵ろうぞ。(唱う)

【調笑令】

“お前が言うには、樞密を罵ってはならないとのことだが
私はお前のことを姓を改め名を変えたごろつきと罵ろう
蕭太后はお前を問者として
何年間帝を堂々とだましていたのか”

私がお前のことを知らないと思うのか。(唱う)

“あの賀驢兒という幼名であったのがお前であろう”

王樞密 どこに賀驢兒などいます。私は王欽若だ。

長國姑 黙れ。あちらでは賀を姓とし、こちらでは王を姓としておろう。(唱う)

“山河を変えるのは容易くても

本当の姓は変え難いというではないか”

この悪党め我が家が聖旨を奉じていることを知らぬか。少しでも見れば眼をえぐり、少しでも指させば手首を切ってくれよう。(唱う)

【雪里梅】

“眼をえぐって咎め立て

手足を切ってこらしめる”

我が屋敷の従者はどこにいる。(唱う)

“そなたは長い首枷をねじ開け、六郎を助け起こすのだ

急ぎ傍仕えの者を呼べ”

(楊景と焦贊を放ち、王樞密が捕らえようとするが、長國姑が打つしぐさをする¹³)

なお、元末明初の陶宗儀『南村輟耕録』によると、金の院本に「打王樞密爨」という演目があった。そして「謝金吾」の中で長國姑が王樞密を打つ場面があることから、「打王樞密爨」こそが「謝金吾」の原型であるとみなす説もある。「打王樞密爨」の内容は現在では佚して伝わらないが、「打王樞密爨」の王樞密とはすなわち各種の楊家将物語に登場する王欽若(王欽)のことであろうと考えられているのである¹⁴。

実は『楊家府』における謝金吾殺しの場面では、王欽が長國姑に打たれるということはない。長國姑は『楊家府』に登場せず、従って王欽が彼女に打たれることもないのであり、また他の誰からも妨害を受けることなく裁判は終わってしまう。しかし、これとは別の場面で王欽が打たれるということがあった。それは第二卷第三則においてのことである。眞宗がまだ即位する前に七王と呼ばれていた頃、七王は太宗がなかなか皇太子を立てないのを不安に思っていた。そこへ王欽が、太宗は八王に帝位を譲るつもりであると吹き込み、八王を宴席に誘い出して毒酒で殺すようにそそのかす。しかし風が吹いて毒酒入りの杯を倒したため、計略は失敗に終わる。結局、眞宗が即位したことで帝位を巡る問題はなくなるが、後にこのような計略があったことを知った八王は、眞宗と王欽を厳しく問い質し、言い逃れようとする王欽の顔を金簡(角柱状をした鉄製の打撃武器)で打つのである¹⁵。

八王は激しく怒り、金簡を抜くと王欽の顔を打ち、鼻に当たって鮮血が流れ出た。王欽が柱を巡って逃げると、八王も柱を巡って追い掛けた。眞宗は急いで王欽を助け、

「私に免じて、兄上、この度はお許し下さい」と言った。八王は足を止め、王欽を指さして、「もし再びよこしまなことをして、我が国を損なえば、貴様のような畜生は無残に打ち殺すぞ」と罵ると、怒りながら申し上げるには、「陛下は私をお咎めなさいませぬよう。私は先帝から言い付けを受けており、この度公正さを明らかにするために奸臣を排除したのは、まことに陛下や国家のためを思っていることであり、私情によるものではございません」とのこと。眞宗はねんごろになだめた¹⁶。

「打王樞密爨」がこちらの話と同じ設定であったとも考えられるし、仮にそうであったならば、帝位を巡る宮中での争いというデリケートなテーマを扱っているが故に、恐らくは言論統制の厳しい明朝までには佚してしまったのであろうとも想像される。無論、院本の「打王樞密爨」が雑劇の「謝欽吾」に発展した、もしくは部分的に取り入れられたという可能性もある。いずれにせよ「打王樞密爨」の内容が伝わらない今となつては判断を下す術はないのであるが、更に想像をたくましくするならば、王樞密という人物は、誰かに打たれるべき存在として観衆に広く認知され、受け入れられていたのではないだろうか。

「謝金吾」の王樞密を打つ場面は、具体的な描写はなくト書きで書かれているのみであるが、これは言い換えれば、役者の裁量によって自由に演じることが可能であったということを示している。実際の舞台上では、二人の役者の間で滑稽なやりとりが交わされたはずである。女性が男性を打つという構図も、その滑稽さに拍車をかけていたと思われ、大いに観衆を楽しませたことであろう¹⁷。

橋本堯氏は、元代の小説や雑劇から女性を尊重する記述が見られるようになるのは、女性尊重の原理が見られるモンゴル文化的精神と関わりがあると推論している。そして「趙盼兒風月救風塵」、「望江亭中秋切鱸」、「桃花女破法嫁周公」といった雑劇の正旦について、「彼女らが成功する理由、評価される理由は、比類なき“情報通”であることだ。相手についての正確な情報を握り、相手の弱点をついて、自分の側を優位な立場に置く、というのは、戦闘生活をこととする遊牧民族にとっては絶対的になくてはならない能力」であるとしている¹⁸。その点では、「謝金吾」の正旦が後半で扮する長國姑も、まさしく情報通であるといえる。

長國姑は、楊景と焦贊が捕らえられ、王樞密によって処刑されようとしていると知り、急いで刑場へと駆け付けて処刑を阻止しようとする。更に、王樞密は遼が送り込んだ間者であり、証拠となる刺青が左の足の裏にあると暴露する。長國姑がどうして王樞密の素性

について知っていたのかについては特に理由は示されておらず、話の展開としては強引な点は否めないものの、王樞密は反論をすることもできず、長國姑はひとまず眼前に迫っていた処刑を中止させることに成功している。

また前半の正旦である余太君は、主に被害者としての役割を負わされているものの、王樞密が楊家を挑発しようとしていることを見抜き、また母親思いである楊景が独断で三関を離れることを危惧し、院公に事情を記した手紙を持たせて楊景へ届けさせている。これもやはり情報の重要性を認識しているが故の行動と見ることができよう。開封と三関とは遠く離れているため、余太君が謝金吾によって重傷を負わされたという情報が断片的に、または誤って伝わる恐れがあり、そうなれば王樞密の目論見通りに、楊景が独断で三関を離れてしまうという状況も起こり得る。それを防ぐために、当事者である余太君が自ら正確な情報を伝えようとしたのである。

第一部第一章で述べたように、『楊家府』では、楊宗保に対する木桂英、また楊文廣に対する寶錦姑、杜月英、鮑飛雲のように、結婚を通して楊氏一族に組み込まれた女将が多く登場する。楊家はこうした女将との血縁関係を構築することにより、一族の戦力を拡大していったのである。

余太君は、『楊家府』では楊令公と共に戦場を駆け巡って活躍し、その後戦場に出る機会がなくなってからも、長らく一族の要として存在し続ける。「謝金吾」の段階ではこのような設定はまだ完成していなかったと思われるが、余太君が余家から楊家に嫁いだ女性であることは確かである。また、長國姑は「謝金吾」にしか登場しない人物であるが、周世宗の息子と結婚し、その娘を楊景に嫁がせているとの設定がなされている。長國姑自身が楊家に嫁いだわけではないものの、やはり結婚を通して楊氏一族に組み込まれた存在と見なすことができる。

「謝金吾」においても、楊家存亡の危機に際して奔走するのはこうした女性達である。本来その役目を負うべき楊景は、「謝金吾」では脇役に過ぎず、それどころか管轄地の三関を勝手に離れて捕らえられ、更に事態を悪化させるなど、精彩を欠いている。あたかも『水滸傳』の宋江や『西遊記』の三蔵法師らが、自分以外のキャラクターが活躍する場面が増えるのと反比例するように非力な存在になっていったのを思わせる。

以上のような余太君や長國姑の活躍を、楊門女将の萌芽と見ることは可能であろう。ただし、「謝金吾」における余太君や長國姑の活躍は、現在の楊門女将の活躍とは別種のものであり、つまり戦場で武勇を振るうといった活躍の仕方ではないのである。

余太君は『楊家府』の序盤でこそ女将としての活躍を見せるが、楊業の死後はもっぱら家のことを取り仕切るようになり、却って性格の不統一を生み出している。そもそも「謝金吾」では、余太君が戦場に出ることすらない。長國姑の存在はさらに特異なものである。長國姑は楊家の協力者として活躍するが、同様の性格を持つキャラクターとしては八王がいる。八王は「謝金吾」以外の雑劇や小説において、楊家の協力者として登場している。それに対し、長國姑は「謝金吾」にのみ登場し、無論『楊家府』にも姿を見せない。むしろ「謝金吾」における長國姑の存在は、八王の代理という印象を受ける。或いは、「謝金吾」が旦本として書かれたために生み出されたキャラクターであった可能性もあろう。いずれにせよ、楊家将の物語が整理されていくに従い、朝廷における楊家の後ろ盾という存在は八王に一本化されていったと考えられる。

「穆柯寨」や「轅門斬子」などに登場する穆桂英に代表されるように、京劇における楊門女将は、まず戦場で武勇を振るう武人として設定されている。「謝金吾」で見られる女性の活躍は、そうした楊門女将に先立つものではあるが、楊門女将の活躍が形成され完成していく過程における発展途上のものなのである。

三、裁判と改扮の関わり

最後に、「謝金吾」の中に裁判の場面があることに注目してみたい。村上公一氏の一連の論文によると、冤罪事件を題材とする元曲公案劇には、物語の展開や配役などにある程度のパターンが見られるという。すなわち、旦本であれば正旦は冤罪に陥れられる者を演じる場合が多く、末本であれば正末は初めに被害者を演じて殺されるなどして退場し、後に改扮して事件を解決する明察な役人を演じるという場合が多い¹⁹。

それでは「謝金吾」の場合はどうなのであろうか。「謝金吾」の正旦はまず余太君を演じ、謝金吾に突き飛ばされて重傷を負う。余太君は死んでこそいないものの、寝たきりとなり、第二折で退場して以降は二度と姿を見せない。そして第三折以降は長國姑を演じ、楊景と焦贊が今にも処刑されようとしているところにやって来て、王樞密を罵り、彼が遼の間者であることを暴露して追い詰める。最終的な事件解決の決め手となったのは、孟良がもう一人の遼の間者を捕らえたことであつたが、楊家の危機を救うために長國姑の働きが大きかったことは明白である。以上のことから「謝金吾」は、正末が被害者を演じて退場した後、明察な役人に改扮して事件を解決するという、末本の公案劇に近いようであるが、それを女性が演じることによって更に大きな効果をもたらそうとしていると思われる。

「謝金吾」は単純に末本の公案劇を女性に演じさせたというものではない。先述のように、旦本の公案劇であれば正旦は冤罪に陥れられる者を演じ、冤罪の苦しみを唱う。余太君は冤罪に陥るわけではないが、清風無佞楼が通りの往来を妨げているという、いわれのない言いがかりを突然受け、清風無佞楼を壊された上に自らも重傷を負い、その悲しみや苦しみを嘆いて唱うという形になっている。「謝金吾」で冤罪に陥るのに近い状態になるのは楊景である。彼は母親を思う心を利用され、いわばおびき出されたような形で、管轄地を勝手に離れた罪によって捕らえられる。これには重傷で動けない余太君の代理という役割もあるのであろうが、それでも楊景が自身の苦しみを唱うということはない。これは正旦が余太君であるから楊景が唱うことはできないということではなく、冤罪の苦しみを唱うのは女性が演じてこそ絵になるものであり、男性が演じるのにはそぐわないと基本的に考えられていたのであろう。そして末本であれば、正末には冤罪を嘆き唱うという弱々しい男性よりも、事件を解決する明察な役人を演じさせるのが好ましいと考えられていたようである。

そもそも正末が初めに被害者を演じて後に明察な役人に改扮するというのは、唱って感情を表現することができるのは正末か正旦の一人であるという雑劇の約束を守ろうとした結果として、合理的かつ必然的に生まれたものである。しかし途中でキャラクターが変わっても、それを同じ役者が演じることによって、被害者への同情や加害者への憤りなどを観衆の中で保ち続けさせることとなる。だからこそ、事件を解決するのが被害者と同一人物という、虚実錯綜する中でのカタルシスを生み出すことが可能となっているのである。それを「謝金吾」では更に、まず正旦に余太君を演じさせて、いわれなき屈辱を受けた嘆きを唱わせた後に、長國姑に改扮して王樞密を言い負かせた上に殴りつけるということにして、より大きな効果を生み出すことに成功しているのである。

おわりに

「謝金吾」は現存する楊家将ものの雑劇中で唯一の旦本であり、正旦は第二折までは余太君を演じ、第三折以降は改扮して長國姑を演じる。余太君は謝金吾に抵抗して負傷し、観衆の同情を集め、長國姑が王樞密を完膚無きまでに言い負かせてその鬱憤を晴らす。焦贊による謝金吾殺しの場面も、もちろん観衆の鬱憤を晴らす見せ場の一つとなっていたであろうが、本劇において作者がより描きたいと思っていたのはこれら二人の女性なのである。ただし「謝金吾」に見られる女性の活躍は、楊門女将の存在が確立する以前の、いわ

ば試行錯誤の段階のものである。本章では雑劇から小説にかけての段階までを考察したが、『楊家府』から京劇に至るまでの楊門女将の発達については別の機会に改めて検討することとしたい。

注

- 1 主な登場人物は余太君（第一折・第二折の正旦）、長國姑（第三折・第四折の正旦）、楊六郎＝楊景（沖末）、焦贊（外）、孟良（外）、岳勝（外）、王樞密（淨）、謝金吾（丑）など。以下にあらすじを示す。

王樞密は謝金吾に楊家の清風無佞府を壊すよう命じ、楊六郎が勅書を得ずに三関を離れるように仕向ける。（楔子）

謝金吾は清風無佞府が壊されるのを止めに入った余太君を突き飛ばして重傷を負わせる。（第一折）

母からの手紙で事情を知った楊六郎は怒り、岳勝と孟良に三関の守備を任せ、密かに都に向かう。途中で焦贊が現われ、無理矢理について来るが、焦贊は都に入ると姿を消す。余太君と再会した楊六郎は、焦贊が騒ぎを起こすのを恐れてすぐに三関へ戻ろうとするが、見回りの者に捕らえられる。（第二折）

焦贊は謝金吾の屋敷に入り込み、謝金吾一家十七人を皆殺しにするが、すぐに捕らえられる。その頃三関では、孟良が王樞密宛ての密書を持った遼の間者を捕らえる。王樞密が楊六郎と焦贊を処刑しようとする、長國姑が駆け付ける。彼女は王樞密と言い争いをして殴りつけ、強引に楊六郎と焦贊を釈放させる。（第三折）

孟良が遼の間者を連行して現れる。密書が証拠となって王樞密は死刑となり、楊六郎と焦贊は許される。（第四折）

- 2 前掲『中国劇目辞典』「楊六郎私下三関」の項を参照。
- 3 木田知生「金元代以後の開封城—その史実と伝承—」（礪波護主編『中国歴代王朝の都市管理に関する総合的研究』、（科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書・平成八年度—平成十年度、一九九九年）による。
- 4 高橋繁樹「三国雑劇と三国平話（1）—虎牢關三戰呂布—」（『中国古典研究』第十九号、早稲田大学中国古典研究会、一九七三年）、『連環計』の虚構—三国平話と三国雑劇（2）—（『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』、龍溪書舎、一九七四年）、『諸葛亮博望燒屯』の考察—三国平話と三国雑劇（3）—（『大野実之助博士古稀記念中国文学論文集』、早稲田大学中国古典研究会、一九七五年）、『劉玄德醉走黃鶴樓』の考察—三国平話と三国雑劇（4）—（『佐賀大学教養部研究紀要』第八卷、一九七六年）、『莽張飛大鬧石榴園』の考察—三国平話と三国雑劇（5）—（『佐賀大学教養部研究紀要』第九卷、一

九七七年)。

- 5 原文は「(焦贊上) … [中略] … 匡奈王樞密・謝金吾無禮、我打聽得這個宅子便是謝金吾住宅、我先殺了謝金吾滿門良賤、然後殺王樞密去。我聽上衙更鼓咱、三更前後也。我跳過這牆來。我來到這後花園中。我試聽咱。(梅香云) 這早晚衙內還在那裏味酒、如今也該睡了。我前後執料去咱。(做叫貓科、云) 貓兒、貓兒。(焦贊做見殺梅香科、云) 兀那妮子休走、喫我一刀。(梅香做死科、下)(焦贊云) 則這個便是謝金吾的臥房、我踏開門來。(做殺謝金吾科)(焦贊云) 我殺了謝金吾並家眷一十七口也。」
- 6 原文は「悄悄地進到廚房、家人俱在堂上服侍飲酒、只有一個丫頭在廚房、整備酒肴。焦贊抽出短刀、向前殺了。提頭走出堂中、只見金吾居中坐着、樂工歌童、列於兩傍。焦贊將那顆頭照金吾臉上打去。金吾大驚、撲得滿面是血、大叫、有賊。衆人快拿。焦贊走向前、罵曰、奸佞賊、你認得焦爺麼。言罷、望金吾項下一刀、砍落其頭。衆人見了、各自逃生。焦贊恨怒不息、一門不分老幼、盡皆殺之、並未走脫一人。」
- 7 雜劇における改扮については、中鉢雅量「元雜劇の構成—「薛仁貴」と「酷寒亭」を中心に—」(『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』、筑摩書房、一九七四年)の中で、正末・正旦は技術的に不可能な場合を除き、必ず作者が最も重要視する人物に扮する、と論じられている。
- 8 「昊天塔」については、第二部第三章「楊家將雜劇から見る習俗と時代背景」も参照。
- 9 原文は「(謝金吾云) 且莫要說起聖旨、便是我謝衙內現做的朝中臣宰、你也不該挺撞我。(正旦唱)【村里趂鼓】那廝道朝中臣宰、則俺楊家也不是民間宗派。(謝金吾云) 你還不認的我哩。我是王樞密的女婿、那裏看的你個白頭疊雪的在眼兒裏。(正旦唱) 原來你倚着丈人行氣的概、就待欺負咱年華高邁。(謝金吾云) 你這個老人家好不知高低。我儘讓你說幾句便罷、則管裏倚老賣老、口裏嘮嘮叨叨的說個不了。你便就長出些個鬍子來、我也不理你。你去。(謝金吾推正旦倒科)(正旦唱) 不提防被他來這一摔、錯閃了腰肢、擦傷了膝蓋、爭些兒磕破了腦袋。哎、你也可憐俺個白頭的這奶奶。」
- 10 原文は「令婆曰、若保全此樓、無限榮耀。須罄家藏亦甘心焉耳。只愁金吾不受買囑。郡主曰、聞得金吾與劉憲最心腹、遣人送禮、挽他通進、彼必然接受。令婆即密遣人挽劉憲、送謝金吾玉帶一條、黃金百兩。劉憲領物、送入謝府。」
- 11 『楊家府』第一卷第四則など。
- 12 「謝金吾」第三折において、長國姑が王樞密に向かい「我是太祖皇帝的妹妹、太宗皇帝的姐姐、眞宗皇帝的姑姑、柴駙馬的渾家、杜太后的閨女、柴世宗皇帝的媳婦」と言っている。
- 13 原文は「(正旦云) 是我罵來、是我罵來。(唱)【調笑令】你道是樞密、罵不的、是我罵你這改姓更名漏面賊。蕭太后使你爲奸細、幾年間將帝主明欺。(帶云) 你道我不知道你哩。(唱) 則那賀驢兒小名須是你。(王樞密云) 那裏是甚麼賀驢兒。我是王欽若。(正旦云) 噤聲。那壁姓賀、這壁姓王。(唱) 可不的

山河易改、本姓難移。(云) 你這賊可知道我家奉的聖旨麼。覷一覷剗了眼睛、指一指剗了手腕。(唱)【雪裏梅】剗眼睛便挑剔、剗手足自收拾。(云) 俺府裏的親隨那裏。(唱) 你與我扭開了長枷、將六郎扶起。喚左右快疾。(做放楊景・焦贊、王樞密奪、正旦打科)

- 14 翦伯贊著・波多野太郎訳「楊家將物語と楊業親子」(『横浜大学論叢』第六卷第三・四合併号、横浜市立大学学術研究会編、一九五五年)、前掲『中国劇目辞典』、『全元曲』などが「打王樞密鬘」を「謝金吾」の原型とみなしている。なお「打王樞密鬘」については楊芷華「金院本《打王樞密鬘》考」(『山西大学学报』哲学社会科学版、一九八〇年第四期。また前掲『楊家將研究・歴史卷(楊家將研究叢書)』にも収録)があるが、こちらでは「謝金吾」との関わりについては言及されていない。
- 15 この八王が王欽を金簡で打つ場面については、上田望「講史小説と歴史書(2) —『殘唐五代史演義』、『南宋志傳』の構造と変容—」(『東洋文化研究所紀要』第百三十七号、東京大学東洋文化研究所、一九九九年)において、『南宋志傳』第二十二回で史弘肇が蘇逢吉を簡で打つ場面との類似性が指摘されている。それは劉承祐の御前での論功行賞が行われていた時に、蘇逢吉が趙匡胤の戦功を認めようとしなかったために引き起こされた事態であった。

漢主充奏、正待頒下聖旨、蘇逢吉奏曰、臣監兵在外、親訪得征勦劇寇、非趙匡胤一人之功。彼得曠君之罪、陛下赦其不誅之罪幸矣。陞擢用之、則不可也。史弘肇聽罷、含忍不過、怒曰、獻讒之賊。先帝被汝欺罔、今又來侮新君耶。抽出鐵鋼望蘇逢吉劈頭打來。逢吉躲之不迭、額角致傷、血流滿面。帝急令衆臣勸解、馮道當中攔住。逢吉憤怒奏曰、先帝有言、不許廷臣帶寸鐵上殿。今弘肇以鐵鋼臨陛下之面辱臣、當得何罪。弘肇奏曰、先帝許我專打佞臣。

漢主が上奏に従い、聖旨を下そうとすると、蘇逢吉が、「私は監軍として出陣し、自ら賊を滅ぼしたのであり、趙匡胤一人の功ではありません。あの者には君主をないがしろにした罪があり、陛下がその罪をお許しになるだけで幸いなことです。抜擢して用いるなど、いけません」と申し上げた。史弘肇はそれを聞き、我慢ならず、怒って、「讒言を弄する賊め。先帝を欺いてないがしろにし、今また新君を侮るつもりか」と言うと、鉄簡を抜いて蘇逢吉に向かって真っ先に打ちかかった。蘇逢吉は避け切れず、額の角に傷を負い、顔中血まみれになった。帝は急いで家臣達に止めさせるように命じ、馮道が中に入って遮った。蘇逢吉は憤り怒って、「先帝は、朝廷の臣下が寸鉄を帯びて上殿することを許さぬと言われました。この度史弘肇は鉄簡を用いて陛下の面前で私を辱めましたのは、いかなる罪を受けることでしょうか」と申し上げると、史弘肇は「先帝は私に佞臣を打つことをお許し下さいました」と申し上げた。

ここでは、史弘肇が先帝すなわち劉知遠により佞臣を打つことを許されているとされる。八大王にも

佞臣を簡で打つことについて帝のお墨付きがあったことについては、第一部で言及した。どちらがどちらに影響を与えたかは判断し難いが、両者の設定に通じるものがあるのは確かである。

16 原文は「八王大怒、抽出金簡、望王欽臉上一打、打著鼻准、鮮血長流。欽繞柱而走、八王亦繞柱趕之。眞宗急救、言曰、看朕情分、兄王饒他這次。八王止歩、指王欽罵曰、若再爲姦先、壞我國家、活活打死你這畜生。言罷、憤怒奏曰、陛下休罪微臣。臣荷先帝囑付、今秉公除奸、實爲陛下社稷計、非私情也。眞宗深寬慰之。」

17 「打」という行為とそれがもたらす効果については、阿保聖子「滑稽表現としての「打」について—院本・元雜劇を中心に—」(『中国俗文学研究』第十六号、中国俗文学研究会、二〇〇〇年)に詳細な分析がある。

18 橋本堯「中国文学に現れた“女性原理”—『元朝秘史』と『元曲』—」(『和光大学表現学部紀要』第三号、二〇〇三年)参照。

19 村上公一「元曲公案劇の構成—事件・人物関係・配役—」(『福井大学国語国文学』第三十号、福井大学国語国文学会、一九九一年)、「元曲公案劇の構成—冤罪への手続き—」(『福井大学教育学部紀要人文科学(国語学・国文学・中国学編)』第四十号、一九九一年)、「元曲公案劇の構成—積冤への手続き—」(『名古屋大学中国語学文学論集』第十輯、名古屋大学中国文学研究室、一九九七年)による。特に「元曲公案劇の構成—事件・人物関係・配役—」において、且本の配役を以下のように整理している。

- 一、且・末等の扮する人物が殺され、
- 二、正且扮する人物(或いはその近親者)が無実の罪で訴えられ、
- 三、浄・丑扮する悪徳役人の裁判で罪を自白させられ、
- 四、冲末扮する明察な役人の裁判で積冤される。

そして、末本の配役を以下のように整理している。

- 一、正末扮する人物が浄・搥且扮する人物に殺され、
- 二、且・末扮する無実の人物が訴えられ、
- 三、浄・丑扮する悪徳役人の裁判で罪を自白させられ、
- 四、正末扮する明察な役人の裁判で積冤される。

第二章 楊家将における“私下三関”のモチーフについて

はじめに

前章では「謝金吾」雑劇について考察をし、楊門女将の活躍が形成されていく萌芽を見出した。本章では、「謝金吾」において重要な要素となっている“私下三関”のモチーフに注目し、同じモチーフを用いている「黄眉翁」雑劇と比較することで、それが楊家将物語においてどのように変容したかを考察する。また、楊家将以外の物語として薛仁貴の物語を取り上げて比較し、両者の関わりを探ってみたい。

一、「謝金吾」の“私下三関”について

前章でも述べたように、「謝金吾」は題目を「楊六使私下瓦橋関」、正名を「謝金吾詐拆清風府」という¹。『録鬼簿』曹棟亭本の王仲元の項に「私下三関²」とあり、天一閣本には無名氏の作品として「王樞密知流二國、楊六郎私下三関」とあることから、趣向を同じくする雑劇が元代において作られていたことがわかる。

楊家将物語では、楊六郎は宋と遼との国境地帯にある三つの関、すなわち梁州の遂城関（河北省徐水県）、霸州の益津関（河北省霸州市）、雄州の瓦橋関（河北省雄県）を鎮守しているとされている³。そしてその管轄地を勝手に離れることを、「謝金吾」では“私下三関”と言っている。

王樞密（唱う）

【仙呂・賞花時】

“私がなぜ清風無佞楼を取り壊そうとするのか

ただ私と楊家の気が合わないから”

楊景のやつは、あやつの家の門楼が取り壊されたと知れば、必ず急いで家へ戻って来て、そのことについて私を問い詰める上奏をするであろう。その時私は予め人を遣わしてあやつを捕らえ、天子に上奏して、管轄の地をみだりに離れ、勝手に三関を離れた罪に問うことにしよう⁴。（楔子）

楊六郎 私は今から密かに三関を離れ、母上に会いに行きたいが、どうして管轄地を勝手に離れることができようか。この恨みは骨髓に徹し、報いずにはおれない。じ

っくり策を考えるとしよう⁵。〈第二折〉

王樞密（登場）「小さきを恨むは君子に非ず、毒なきは丈夫ならず。」楊景の無礼は許せぬ。あやつは勝手に三関を離れ、管轄の地をみだりに離れ、深夜に謝金吾主従十七人を皆殺しにした。私は既に楊景と焦贛の二人を捕らえさせてある。まさしく飛んで火に入る夏の虫、きっとあやつらは私の手の内で死ぬであろう⁶。〈第三折〉

王樞密も楊六郎も、この“私下三関”という行為が重罪であることを十分に認識していたのは明らかである。王樞密は言いがかりをつけて清風無佞府を破壊し、楊六郎が許可なく三関を離れるように仕向けており、言うなれば楊六郎を陥れる罠の一種として用いている。一方楊六郎は、自らの行動が罪に触れるとわかっていながらも、母親を思う気持ちと、王樞密や謝金吾への怒りから、三関を離れずにはいられないのである。

それではこの“私下三関”に相当する行為は、実際にはどの程度の罪とされるものであったのか。そこで同時代の刑法類を見てみることにしたい。まずは史実で楊家の一族が活躍した宋代についてである。

歳斷死刑幾二千人、比前代殊多。如強劫盜並有死法、其間情狀輕重、有絶相遠者、使皆抵死、良亦可哀。若爲從情輕之人別立刑、如前代斬右趾之比、足以止惡而除害。禁軍非在邊防屯戍而逃者、亦可更寬首限、以收其勇力之効。（『宋史』卷二百一「刑法志」）

毎年死刑を言い渡される者は二千人近くおり、前代に比べてとりわけ多い。強盗や追いはぎはいずれも死刑とされているが、それぞれの犯行状況の軽重に、甚だしい隔たりがあっても、全て死罪とするのは、まことに痛ましいことである。前代では右足を切ったように、犯行状況の軽い者のために別に刑罰を設ければ、悪事を止めさせ害を除くのに十分であろう。禁軍で辺境の駐屯地から逃亡する者でなければ、これも自首の期限を緩和し、その武勇の効力を取り入れるべきである。

初、韓絳嘗請用肉刑、曾布復上議曰。…〔中略〕…若軍士亡去應斬、賊盜賊滿應絞、則刑其足。（同上）

韓絳は肉刑を用いるよう願い出たことがあり、曾布もまた以下のような建議を行った。…〔中略〕…逃亡した兵士で斬罪とすべき者や、強盗をして盗んだ額が絞首刑に

相当する者は、その足を切るようにすれば良い。

引用した『宋史』の記述は、むやみに死刑を行うよりは肉刑を用いるべきであることを申し入れたものであるが、その対象として駐屯地から逃亡した兵士も含まれている。すなわち宋代においては、駐屯地から逃亡した兵士の罪は死刑に相当するものであったということが窺われる。多くの雑劇が作られた元代においては、そのことがよりはっきりと示されている。

諸軍官離職、屯軍離營、行軍離其部伍者、皆有罪。（『元史』卷一百三「刑法志・軍律」）

軍官で職を放棄する者、駐屯軍で砦を離れる者、行軍中にその隊を離れる者は、全て有罪である。

諸防戍軍人於屯所逃者、杖一百七、再犯者處死。若科定出征、逃匿者、斬以徇。（同上）

国境防衛の軍人で駐屯地から逃げる者は、杖で百七回打ち、再犯すれば死刑に処す。出征することが決まった上で、逃亡する者は、斬って見せしめとする。

以上の『元史』の記述については、『元典章』においても同内容の文がある。

今後逃走軍人、仰根捉正身、依理取問、犯、杖一百七下、再犯、處死、若差定出征逃走、但犯處死、就軍前對衆施行。（『元典章』卷三十四「兵部一・軍役・逃亡・處斷逃軍等例」）

今後逃亡した軍人が、捕らえられたならば、条理により取り調べ、有罪であれば杖で百七回打ち、再犯すれば死刑に処し、出征が決まった上で逃走した者は、死刑に処し、軍前にて人々に公開して執行する。

其軍人在逃根獲、初犯一百七下、再犯處死、其罪非輕。（同「逃軍窩主罪名」）

軍人が逃亡して捕らえられたならば、初犯であれば杖で百七回打ち、再犯であれば死刑に処し、その罪は軽くない。

以上のことから、「謝金吾」が作られ、上演されていた時代において、軍人が駐屯地を勝

手に離れるという行為は、初犯で百七回の杖刑、再犯で死刑という、極めて重い罪であったことがわかる。なお、楊六郎は初犯であるにも関わらず斬首されそうになっているが、三関を鎮守する元帥としての職務を放棄したことや、部下が殺人事件を起こしたことの監督責任なども考慮すれば、王樞密が何としてでも楊六郎を葬り去ろうとしていたことを除外したとしても、当然の措置と言える。

楊六郎は一刻も早く母親の見舞いに行きたいという思いを抱きながらも、管轄地の三関を勝手に離れることは重罪であるために、その心は激しく揺さぶられ、思い悩むこととなる。意を決して密かに三関を離れ、母親に会うことができたものの、結局は捕らえられて、楊景は窮地に追い込まれてしまう。こうした一連の行動に至る楊景の心の動きに、観衆は大いに共感を覚えたはずである。恐らく観衆は、人間的な心情の前に立ちふさがり法理の不尽さを感じ、楊景に深く感情移入しながら舞台を見ていたことであろう。「謝金吾」における“私下三関”は、物語を展開させる要素であると共に、観衆を物語に引き込ませるという点でも重要な要素となっていたと思われる。

ところが同じ楊家将雑劇である「黄眉翁」において、“私下三関”はかなり大きな変容を遂げているのである。

二、「黄眉翁」について

「黄眉翁」は『録鬼簿』や『太和正音譜』には見えず、『也是園蔵書目』の「教坊編演」に正名が記されている。明代には、皇族の慶祝行事に際して宮中で上演するための劇が宦官達によって作られていたが、「黄眉翁」もそうした劇の一つであったと思われる。テキストは『脈望館鈔校本古今雑劇』の内府本のみで、無名氏の作品として収められている。楊家将雑劇の形を取っているが、内容から言えばむしろ神仙が登場する神仙道化劇、その中でも皇族の誕生祝いの席などで演じられたと思われる慶壽劇としての色合いが強い。

「黄眉翁」雑劇において、黄眉翁は第三折で登場し、楊景の忠孝ある行いに感心し、余太君の誕生日を祝いに訪れて寿命を延ばしてやるという役どころである。

(正末が黄眉翁に扮し登場)

黄眉翁 私は黄眉翁でございます。この度地上では余太君の誕生日であり、その息子の楊景は忠孝の両方を備え、三関を離れ、母親のために誕生日祝いをした。私は天宮を離れ、余太君の福を増やし寿命を延ばすために、一つ行くとしよう。臣下たる者

は、忠孝を行えば、必ず神のご加護があるのだ⁸。

それでは楊景は一体どのようにして、三関を離れて母親の誕生日祝いに駆けつけることができたのであろうか。楊景は三関を離れるに当たり、障害となっている事柄を解決し、きちんとした続きを踏まえるようにしている。

まずは楊家の天敵といえる王樞密の存在である。これに関しては、楊家が八大王を主君としていることが幸いした。八大王は奸臣を見れば手にした金簡で打つという人物であり、八大王を主君としている楊家は、危機が迫れば彼を頼ることができる。王樞密は楊家に対してうかつに手が出せないのである。

楊景 弟よ、もし我が宋朝に、金簡を持ってよこしまな心を打ち砕き、忠義を持って帝をお助けする八大王様がいなかったならば、我ら楊家やお前達は、全く頼れる方がいないところであった。

孟良（唱う）

【寄生草】

“我が大王様は威厳に満ち、忠臣を力を尽くして守る
あの黄金の簡に抗うことはできず
奸臣は見れば慌て
打たれた瞬間に首が飛ぶ
我が元帥は力を尽くして孝を行い朝廷に報いるが
禍に遭った時にはあの方を頼るのだ⁹” 〈第一折〉

「謝金吾」では朝廷における楊家の協力者として長國姑が登場するが、楊家将物語において本来その役割は八大王が担当するものであり、長國姑は八大王の代理として生み出された人物と思われる¹⁰。長國姑は王樞密を殴りつけることしかできなかったが、八大王ならば金簡で打つのであり、王樞密にとってより大きな脅威となっている。このように王樞密に関しては、始めから大きな問題にはならなかった。

続いて楊景は、勝手に管轄地を離れるという罪を犯すことのないように、孟良らを寇萊公の下へ遣わし、自分が母親の誕生日に孝行をしたいという思いを訴えて、帝に取り次いで上奏してもらうようにする。

孟良

【採茶歌】

“閣下には朝廷へ行き
帝にお目通りして
自ら心からのお言葉を上奏して頂けますよう
この思いは天を仰ぐのと同じく
ご恩は老いても忘れません”

寇萊公 孟將軍よ、そなた達四名はこれ以上ここに留まる必要はない。夜を徹して三関へ向かい、楊郡馬に、私が帝に上奏し、すぐに三関から離れさせてやると伝えよ。何かあれば私が請け合おう¹¹。〈第二折〉

使命を果たして帰還した孟良の報告を受けて、ようやく楊景は安心し、三関を出発して母親の誕生日祝いに向かうことにするのである。

これらのことから明らかなように、「謝金吾」において楊景を激しく思い悩ませ、遂には窮地へと追い込ませる“私下三関”の要素は、「黄眉翁」においてはリスクが極力排除され、ただ三関を離れるだけという展開となっている。そのため「黄眉翁」は、「謝金吾」に比べて全体的に起伏に乏しい作品となっていることは否定できないところである。それではなぜこのような変貌を遂げるに至ったのであろうか。

「謝金吾」と「黄眉翁」の違いの一つとして、「黄眉翁」は忠と孝をより強調している点が挙げられる。「黄眉翁」では白、歌唱を問わず、忠と孝についてしばしば言及されている。

寇萊公 孟將軍よ、なんと楊郡馬は三関を離れ、母君の誕生日祝いをしたいので、私に帝へ上奏させ、孝子の情を尽くそうとしており、また王樞密が彼を陥れることを警戒している。このように、楊郡馬は忠孝二つ備えておることよ¹²。〈第二折〉

【醉春風】

“孝を行う者は歴史に芳名を刻み、忠義を尽くす者は麒麟閣に図像が飾られる
このような君主への忠や父母への孝の常理を、誰が賛美しないことがあろうか
忠は天地を貫き、孝は天下に伝わり、功は永久に残る¹³” 〈第三折〉

楊景 臣たる者はその忠を尽くし、子たる者はその孝を尽くさなければならないのだ。

孟良（唱う）

【得勝令】

“ああ、忠を尽くすとは国に報いて功を立て

孝を尽くすとは朝晩お仕えすること

今上の帝は忠孝を理解しており、天が富貴を下さるので

あなた方の子孫は代々恨みを生ずることもない

一族は栄え

あなた方が忠臣である証を明らかにする¹⁴” 〈第四折〉

これらを見ると、忠と孝それぞれに述べるのみならず、忠孝をセットにして、その両方を備えていることを評価するという認識が窺われる。引用した部分以外においても、「於家爲國（家のため、国のため）」や「忠孝兩全」といった表現が散見される。すなわち「黄眉翁」の狙いは忠と孝を両立させることにあったのではないかと想像されるのである。

「謝金吾」においても、第四折の終盤、殿頭官の詞において、「楊六郎合門忠孝、焦光贊俠氣超羣（楊六郎の一門は忠孝を尽くし、焦光贊の俠気はぬきんでている）」とされているのであるが、国境防衛の職務を放棄して勝手に三関を離れるという行為は、やはり忠であるとは言い難いであろう。「謝金吾」における“私下三関”は、楊景が母を思う気持ちから行ったことであり、孝とされるべきであろうが、それに比べると帝への忠がやや軽んじられている嫌いがある。無論、「謝金吾」の作者に当たる人物が、ことさらに忠を軽視する考えを抱いていたはずはない。忠と孝とのジレンマに陥りながらも孝を果たしたという事実そのものに焦点があり、その際切り捨てられた形となった忠については、深くは意識されていなかった。しかし「黄眉翁」の版本は宮廷で上演されることを前提とした内府本であり、恐らくは皇族の誕生祝いの席などで演じられた慶壽劇である。孝との比較の上とはいえ、忠を軽んじるような設定をそのままにしておくことなどあってはならないはずである。

加えて明代では、俳優が帝に扮することが法で禁じられており、帝を冒瀆するような内容に敏感になっていた¹⁵。元代と明代の両方のテキストが現存している雑劇で、元本では帝が登場するのに、明本では設定が変更されているというものも見られる。だからこそ楊景は、孝と同時に忠も守るため、八大王を頼ることで王樞密の動きを牽制し、寇萊公に帝

への取り次ぎを願い出て了承を得た上で三関を出発したのである。

「黄眉翁」の最後で、楊景が三関からはるばる母親の誕生日祝いに訪れた行為を、帝が大いに喜び、楊景及び三関の諸将に官位と恩賞を贈ることになる。これも楊景が帝への忠を損なわなかったということが前提としてあるからであり、忠と孝を両立させている点により楊景の行為は評価に値する。“私下三関”の改変は、母への孝と帝への忠を両立させようという意図により行われたものである。

なお中鉢雅量氏は、現在伝わる南宋や金の慶壽劇に「～爨」「～院爨」と呼ばれるものが多くあることについて、「爨」は「踏爨」とも言い、普通の雑劇や院本とは異なり必ず舞踏を伴ったものであって、慶壽劇に「～爨」と呼ばれるものが多いのは、それが「凶悪な霊の類を退散せしめる」踏歌と一体だったことに由来すると説かれている¹⁶。この説に基づくならば、一説に「謝金吾」の原型であるとされる「打王樞密爨」において、退散せしめられるものに相当するのは王樞密であろう。本来は悪霊を退散させる行為であった「爨」が、奸臣の王樞密を罰する場面に転用されたと推測できるのである。

「打王樞密爨」から発展した「謝金吾」は、楊六郎や焦贊が登場する英雄劇と化し、また余太君や長國姑という女性の活躍を描くことに力を注いでおり、慶壽劇という色合いはほとんど感じられなくなっている。その一方、明らかに「謝金吾」を参考にして作られた「黄眉翁」が、正末の扮する黄眉翁に余太君の誕生日祝いの言葉を唱わせるなど、慶壽劇の姿に立ち戻っていることは、結果論ではあるが非常に興味深い現象であると思われる。しかし当然ながら、院本の慶壽劇と明雑劇の慶壽劇とは同等のものではない。元・明にかけて神仙道化劇が数多く作られるようになった背景には、全真教などの道教の影響があった¹⁷。時の為政者が道教を信奉したことも追い風となり、民間だけでなく宮中においても慶壽劇が作られて上演されていた。「謝金吾」から「黄眉翁」への改変も、こうした時流の中で行われたものであり、慶壽劇としては「打王樞密爨」よりも遙かに大規模なものとなっている。

三、薛仁貴物語におけるケース

続いて“私下三関”のモチーフについて、やや違った角度から考察をしてみたい。実は唐代の將軍である薛仁貴¹⁸に関する雑劇にも、類似した場面が存在するのである。

今から取り上げる「薛仁貴」雑劇は、以下のような流れで物語が展開する。

薛仁貴は百姓暮らしを嫌って武芸に励み、両親と別れて、遼征伐のための義軍に身を投じる。上官である張士貴は薛仁貴の功を奪おうとするが、薛仁貴は張士貴と弓比べをして勝利することで実力を示し、官に封じられる。薛仁貴の両親は息子の身を案じていたが、そこに薛仁貴が帰郷し、団円となる。

作者は『録鬼簿』天一閣本によれば張國賓である¹⁹。元刊本と元曲選本の二種類のテキストがあるが、周知の通り元刊本は専ら歌唱部分を収録しており、白の部分は不完全であり、簡単なト書きが記されているに過ぎない。本章では主に、白も含めて収録されており、話の筋が追いやすい元曲選本²⁰を見ていくこととする。

高麗国の軍を撃退した薛仁貴は、その功を奪おうとする張士貴と弓比べをして勝利し、その実力を周囲に認めさせる。薛仁貴は帝より酒を賜り、酔って眠り込んでしまい、夢の中で両親を思って密かに会いに行く。

薛仁貴（夢を見るしぐさをする）ああ薛仁貴よ、私在家を離れて十年、両親は年老いて養ってくれる者もない。私は今から密かに辺境を離れて、軽装で、駿馬に乗った腹心を数十騎連れて、家に戻って両親に会いにひとつ行くとしよう²¹。〈第一折〉

そうして親子は再会をするのだが、それもつかの間に張士貴が突如現れ、軍務を放棄して勝手に故郷へ戻った罪人として薛仁貴を捕らえた、というところで夢は覚める。目覚めた薛仁貴は、両親に会いたいという思いをますますつのらせることとなる。

張士貴（兵士を連れて突然登場）薛仁貴だな。帝の命を聞け、お前は軍務を執ることなく、勝手に家へ戻ったために、帝は私にお前を捕らえさせて朝廷に戻り処罰させようとしている。お前達、薛仁貴をしっかりと縛れ。

薛仁貴（あわてて哭くしぐさをする）どうしたものか。父上、誰が私を救ってくれるのでしょうか。

薛大伯（唱う）

【幺篇】

“見ればあの者は厳めしく聖旨を開く

私は早くも驚いて顔色は真っ青”

張士貴 お前達、両側に並び、その老いぼれを前に出させるな。

(薛仁貴の母が哭くしぐさをする)

薛大伯 息子よ。(唱う)

“見れば恐ろしい役人が両側に並ぶ
南海救苦難観自在に頼る他はない”

張士貴 その老いぼれをどかせて、こやつを奪われないようにせよ。

薛大伯 (唱う)

“驚いて私は叩頭したり拝礼したり”
お役人様。(唱う)

“息子の命をお許し下されば一万人の僧に齋をするよりも勝ります”

張士貴 これお前早く引立てよ。

薛仁貴 父上母上、私はあなた方のお世話をすることができなくなりました。

薛大伯 (泣くしぐさをする) (唱う)

【浪裏來煞】

“息子をぐいと門から押し出す”

張士貴 引立てて殺してしまえ。

薛大伯 (唱う)

“見る間に殺されようとしており
私の心は乱れて落ち着かずどうすれば良いのか”

張士貴 しっかりと縛り、こやつを逃がすな。

薛大伯 (唱う)

“見れば麻縄で後ろ手に縛られてもがくこともできず
誰が息子をかばってくれるのか
ああ息子よ、我らが会うためには帝が赦免状を下さる他にない”
(薛仁貴の母と共に退場)

張士貴 (薛仁貴を押ししぐさをする) 寝ぼけたふりをするな。(退場)

薛仁貴 (目覚めるしぐさをする) よく眠ったわい。ああ、なんと南柯の一夢であったか、本当に驚いた。私は先程酒を三杯飲んで酔っ払って、ふと眠り、夢の中で故郷に行き、両親にまみえたが、貧しさに苦しんでおられた。天よ、私はいつになれば両親に会うことができるのであろう。(悲しむしぐさをする²²) (第二折)

この場面は、両親に会いたいという思いから軍務を放棄して勝手に管轄地を離れ、その罪で捕らわれることになるという点で、“私下三関”と構図を同じくする。そして「薛仁貴征遼事略」平話（『永樂大典』卷五二四四）や、「摩利支飛刀對箭」雜劇（内府本）、「賢達婦龍門隱秀」雜劇（内府本）には見られないものである²³。

薛仁貴の帰郷そのものは、薛仁貴物語の雜劇系統において不可欠の要素とされていたようであり、「飛刀對箭」と「龍門隱秀」の二つの雜劇でも取り入れられて、両親や妻との再会が描かれている。その中で「薛仁貴」のみが、許可無く管轄地を離れてその罪で捕らえられるという、言わば“私下三関”型の場面を内包しているのであり、同じ雜劇系統にありながら異彩を放つ存在と言えるのである。

薛仁貴の帰郷について、金文京氏は劉知遠にも同じような話が見えることを指摘し、薛仁貴と劉知遠は共に太原を中心とする山西地方の出身であり、彼らの物語はこの地方で生まれ、山西商人などによって他の地方に広まったであろうと推定されている。そして楊家将についても、「山西地方にゆかりを持ち、かつ對遼戦争の英雄であるという前記二人（筆者注：薛仁貴と劉知遠）の特質と基本的に一致するものである」と説いておられる²⁴。そうすると、“私下三関”型の場面をめぐって、薛仁貴物語と楊家将物語の影響関係を考えなければならない。

この場合、薛仁貴の方が前時代の人物であるから、薛仁貴物語にあったモチーフが楊家将物語に取り入れられたのだ、と単純に判断することはできないであろう。薛仁貴物語に元々存在していた再会譚をより盛り上げるものとするべく、後から“私下三関”型のモチーフが加えられたと考えることもできるからである。現存する元刊本の中に楊家将に関する作品が残されていないという恨みはあるものの、これまで述べたように、元代において既に薛仁貴物語と楊家将物語のそれぞれが“私下三関”型のモチーフを持つに至っていたらしいのであるから、どちらがどちらに影響を与えたかを判断することは差し控えざるを得ないであろう。或いはより原初的な“私下三関”型のモチーフを想定し、薛仁貴と楊家将のそれぞれにおいてそれが翻案されたと考えるべきであるのかもしれない²⁵。

ただし「謝金吾」を発展させる形で恐らく明代に作られたと思われる「黄眉翁」については、よりはっきりと、「薛仁貴」をも意識していると考えられることは可能であると思われる。「薛仁貴」において徐茂功が薛仁貴のために帝に上奏することを請け合う場面は、既に見たように、「黄眉翁」において寇萊公に帝への取り次ぎを願い出て上奏してもらうという場

面を思い起こさせる。

徐茂功 そうであったか。私が帝に上奏し、元帥に故郷に錦を飾らせるので、我が娘をそなたの妻として、共にご両親に会いに行かれよ。夫婦が栄え、共に帝のご恩を受ければ、まことに素晴らしいことである²⁶。〈第二折〉

更には「黄眉翁」第二折の最後で寇萊公が、「須教他拜壽誕衣錦還郷（きっと彼に誕生日祝いをさせて故郷に錦を飾らせてやろう）」と、「衣錦還郷」のフレーズを持ち出して言っているのである。「衣錦還郷」は薛仁貴以外に漢高祖や蘇秦などとも関わり、古くから様々な物語に組み込まれていたものではあるが、楊家将と薛仁貴の共通項を考慮し、特に元代以降それが広く認識されていたとするならば、ここではやはり薛仁貴が意識されていると見るのが自然ではなかろうか。

おわりに

以上のように、「謝金吾」の物語展開において重要な要素となっている“私下三閔”は、忠と孝をはかりにかけた上で孝を優先させた行動となっているが、「黄眉翁」ではそれを忠と孝を両立させた形とするべく手が加えられている。前野直彬氏は南戯について、文人の手による戯曲の体制化や儒教的倫理性が見えることを指摘し、元雑劇には倫理的な訓誡よりも筋そのものに対する興味を窺うことができるのに対し、明代になると訓誡の方が次第に正面へと押し出されるようになると説かれている²⁷が、「謝金吾」から「黄眉翁」への変遷においても同様の傾向を見ることができよう。また“私下三閔”型のモチーフは、出身地や武人としての経歴などに楊家将と共通項がある薛仁貴を題材とした雑劇中においても用いられている。

今後は、楊家将と薛仁貴以外の英雄物語においても“私下三閔”型のモチーフが見られるかどうかの問題点の一つとなる。また楊家将における“私下三閔”そのものについても、明代以降の小説や戯曲類まで視野を広げ、更なる変化が見られるかどうかを追究する必要がある。

¹ 「謝金吾」のあらすじは第二部第一章の注1を参照。

-
- 2 曹棟亭本では王仲元作の雑劇として「東海郡于公高門」、「袁盎却座」、「私下三關」が挙げられているが、天一閣本では挙げられているのは「于公高門」と「袁盎却座」のみであり、「私下三關」は無名氏の作とされている。
- 3 「謝金吾」第二折の楊六郎の白に「是梁州遂城關、霸州益津關、雄州瓦橋關、此乃三關」とあり、「昊天塔」第一折にも同様の記述がある。ただしこの内、「梁州遂城關」は正しくは「易州遂城關」とするべきであろう。残る二箇所に関しては、『資治通鑑』卷二九四、顯徳六年（九五九）五月己酉に「以瓦橋關爲雄州、割容城・歸義二縣隸之。以益津關爲霸州、割文安・大城二縣隸之（瓦橋關を雄州とし、容城と歸義の二県を割讓してこれに属させる。益津關を霸州とし、文安と大城の二県を割讓してこれに属させる）」とある。
- 4 原文は「(王樞密唱)【仙呂賞花時】“我可甚的要拆倒清風無佞樓。也只爲咱與楊家話不投。”(云)我料得楊景那厮聞知拆倒了他家門樓、必然趕回家來、與我詰奏其事。那時節、我預先差人拿住他、奏過聖人、責他擅離信地、私下三關之罪。」
- 5 原文は「(六郎云)我如今要私下三關、看母親去、爭奈不敢擅離信地。此恨痛入骨髓、不可不報。待我慢慢尋思一個計策來。」
- 6 原文は「(王樞密上云)恨小非君子、無毒不丈夫。叵奈楊景無禮。他私下三關、擅離信地、夤夜將謝金吾良賤一十七口盡行殺壞。我已曾着人拿住楊景、焦贊兩個。正是飛蛾投火、不怕他不死在手裏。」
- 7 題目「楊郡馬赤心行忠孝」、正名「黃眉翁賜福上延年」。主な登場人物は孟良（第一折・第二折・楔子・第四折の正末）、黃眉翁（第三折の正末）、楊六郎＝楊景（沖末）、寇萊公（外）、余太君など。以下にあらすじを示す。

三關を鎮守している楊景は、東京にいる母親の余太君の誕生日が近付いたので会いに行きたく思う。しかし宰相を務める王樞密は楊家と敵対しており、勝手に任地を離ればそこに付け込まれて陥れられる恐れがある。そこで配下の二十四指揮使と相談した結果、まず孟良らを東京の寇萊公のもとへ送り、三關を離れる許可を得られるように取り次いでもらおうとする。(第一折(原文では「頭折」とする))

孟良は寇萊公に会い、楊景が母親の誕生日祝いをしたく思っていることを伝える。寇萊公は楊景がいかに母親のことを思っているかを聞いて感心し、楊景が三關を離れて母親の誕生日祝いをできるよう、帝に上奏することを約束する。(第二折)

孟良らが三關へ戻り、寇萊公から約束を得たことを報告すると、楊景は三關の守備を孟良らに任せ、数名の將軍を連れて東京へ出発する。(楔子)

余太君は楊景がやって来ると聞き、使用人に命じて宴席の手配をさせる。母子が再会を果たして皆で

酒を飲んでいると、楊景が忠孝を備えていることに心を打たれた黄眉翁がやって来て、寿命を延ばすという仙酒と仙桃を余太君に贈る。宴席が終わると、楊景は母との別れを惜しみつつ三関へと戻って行く。

〈第三折〉

楊景が三関へ戻ると寇萊公がやって来る。寇萊公から話を聞いた帝は、楊景が忠孝を備えていることを非常に喜び、官位と恩賞を贈るために寇萊公を遣わしたのであった。楊景と配下の諸将は昇進し、多額の恩賞を贈られる。〈第四折〉

「黄眉翁」のテキストは『孤本元明雜劇』（中國戲劇出版社、一九五七年）を用い、原文の引用もこれによる。

黄眉翁とは伝説中の仙人であり、『太平廣記』卷六「東方朔」に以下の話が見え、非常に長命な人物とされていたようである。

朔以元封中、遊鴻濛之澤、忽遇母採桑於日海之濱。俄而有黄眉翁、指母以語朔曰、昔爲我妻、託形爲太白之精、今汝亦此星之精也。吾却食吞氣、已九十餘年。目中童子、皆有青光、能見幽隱之物。三千年一返骨洗髓、二千年一剥皮伐毛。吾生來已三洗髓五伐毛矣。（出洞冥記及朔別傳）

東方朔は元封中（前一一〇～前一〇五）に、鴻濛澤に遊び、たまたま日海の濱で桑を採っている老女に出会った。すると眉毛の白い翁が突然現れ、老女を指さして東方朔に言った。「あれは昔の我が妻で、太白的の精が形を変えたものであり、お前もその星の精なのだ。私は食事を取らずに気を呑むようにして、既に九十年以上になる。眼の中の瞳には、青い光があり、隠れている物を見ることが出来る。三千年に一度骨を裏返して髓を洗い、二千年に一度皮を剥いで毛を切っている。私は生まれてから既に三度髓を洗い五度毛を切った」と。

- 8 原文は「(正末扮黄眉翁上) (云) 貧道黄眉翁是也。今因下方余太君生辰之日、其子楊景忠孝兩全、離了三関、與他母親祝延上壽。貧道離卻紫府天宮、與余太君增福延壽、走一遭去。但爲臣子、要行忠孝、必有神天加佑也呵。」
- 9 原文は「(楊景云) 兄弟也、俺宋朝若無八大王、持金簡擊破奸心、仗忠義輔立主上、俺楊家與同衆將、可倚靠何人也。(正末唱)【寄生草】“俺大王威儀大、把忠臣盡力保。則他那黄金簡上應難料、奸臣見了心焦躁、時間打的天靈落。俺元帥孝當竭力報皇朝、因此上逢災遇難將他靠。”」
- 10 第二部第一章を参照。
- 11 原文は「(正末唱)【採茶歌】“大人你到朝綱、見王君、親身啓奏表衷腸。此意如同天樣仰、恩情至老不相忘。”(寇萊公云) 孟將軍、你四人不必在此久住。星夜便上三関、說與楊郡馬、道老夫奏知了聖人、着他便下三関來。如有事老夫一面承當也。」

-
- 12 原文は「(寇萊公云) 孟將軍、原來楊郡馬要下三關、來與他母親上壽、着老夫奏知聖人、盡他孝子之情、猶恐王樞樞密與他爲害。似這等、楊郡馬眞乃忠孝雙全也。」
- 13 原文は「【醉春風】“行孝人青史姓名香、盡忠心向麒麟圖像儀。似這等忠君孝父理之常、那箇不贊美、美。忠貫乾坤、孝傳四海、功垂萬世。”」
- 14 原文は「(楊景云) 爲臣者當盡其忠、爲子者當盡其孝也。(正末唱)【得勝令】“呀、盡忠呵報國建功勳、盡孝呵當可奉晨昏。今日箇聖主知忠孝、天加福祿臻、則您兒孫一輩輩無生忿。榮顯家門、方表您忠臣得證本。”」
- 15 金文京『元刊雜劇三十種』序説(『未名』第三号、中文研究会、一九八三年)参照。ただし『金史』卷九「章宗紀」の明昌二年十一月甲寅に「禁伶人不得以歷代帝王爲戲、及稱萬歲、犯者以不應爲事重法科(俳優が歴代の帝をからかいの対象としたり、万歳を唱えたりすることを禁じ、これを犯した者は重罪とする)」とあり、卷三十九「樂志・散樂」にも同内容の文を収めることから、統制がより厳しくなったのが明代からであったにせよ、それ以前から俳優が帝に扮することは好ましくないとする認識は存在したであろう。
- 16 中鉢雅量「神仙道化劇の成立」(『中国の祭祀と文学』、創文社、一九八九年所収)参照。
- 17 楊家将を題材とした雑劇でも、「楊六郎調兵破天陣」では呂洞賓の化身と思われる顔洞賓が遼の軍師として登場し、全真教の指導者である王重陽や馬丹陽について唱われるなど、道教的色合いが濃い。第二部第四章を参照。
- 18 薛仁貴を題材とした雑劇・物語については、橋本堯「薛仁貴—新しい物語タイプの誕生—」(『和光大学人文学部紀要』第二十一号、一九八七年)、金文京「新発見の元代「薛仁貴征東故事」平話残葉について」(『東方』第八十四号、一九八八年)、高橋文治「元刊本「薛仁貴衣錦還郷」劇をめぐって」(『東方学』第七十六輯、一九八八年)、千田大介「薛仁貴故事変遷考」(『中国文学研究』第十七期、早稲田大学中国文学会、一九九一年)を参照。
- 19 『録鬼簿』曹棟亭本は張國寶とする。
- 20 題目「徐茂公比射轅門」、正名「薛仁貴榮歸故里」。主な登場人物は薛仁貴の父・薛大伯(楔子・第二折・第四折の正末)、杜如晦(第一折の正末)、農夫(第三折の正末)、薛仁貴の母(卜兒)、薛仁貴(冲末)、張士貴(浄)、徐茂功(外)など。
- 21 原文は「(薛仁貴打夢科、云) 薛仁貴也、我離家十年光景、一雙父母年高無人侍養。我則今日私離了邊庭、帶領數十騎輕弓短箭、善馬熟人、回家探望父母走一遭去。」
- 22 原文は「(張士貴領卒子衝上、云) 兀的不是薛仁貴。聽聖人的命、因爲你不理軍事、私自還家、聖人

着我拿你回朝定罪。左右、與我將薛仁貴執縛定者。(薛仁貴慌哭科、云)似此怎了。父親、着誰人救我也。【幺篇】“則見他恹恹開聖旨。早諛的來黃甘甘改了面色。”(張士貴云)令人、兩邊擺着、休着那老的上前來。(卜兒哭科)(正末云)兒也。(唱)“則見他惡眼眼的公吏兩邊排。則除是南海救苦難觀自在。”(張士貴云)打開那老的、休着他劫奪了。(正末唱)“諛的我磕頭也那禮拜、”(帶云)大人、(唱)“你饒過俺孩兒一命、不強似把萬僧齋。”(張士貴云)令人、快與我拿了去者。(薛仁貴云)父親母親、您孩兒顧不的你了也。(正末哭科)(唱)【浪裏來煞】“把孩兒撲碌碌推出門。”(張士貴云)搶出去、殺壞了罷。(正末唱)“眼睜睜的要殺壞。空教我心勞意攘怎支劃。”(張士貴云)執縛定着。休走這厮也。(正末唱)“我只見麻繩背綁教他難掙扎、着誰來把孩兒耽待。哎喲兒也、咱要相逢則除是九重天將一紙赦書來。”(正末同卜兒下)(張士貴做推薛仁貴科、云)你休推睡裏夢裏。(下)(薛仁貴醒科、云)一覺好睡也。嗨、原來是南柯一夢、誑殺我也。我恰纔飲了三杯酒醉了、偶然睡着、一夢中直到家鄉、見我一雙父母、如此貧窮苦楚。天那、我何日能够相見也。(做悲科)

- 23 「薛仁貴」には元刊本も残されている。元刊本は題目「白袍將朝中隱福、黒心賊雪上加霜」、正名「唐太宗招賢納士、薛仁貴衣錦還郷」。主な登場人物は薛仁貴の父・薛大伯(楔子・第二折・第四折の正末)、杜如晦(第一折の正末)、農夫(第三折の正末)、薛仁貴(外末)、張士貴(浄)など。元刊本における該当場面は以下の通りである。なお、原文の校訂は高橋繁樹他「新校訂元刊雜劇三十種(二)」(『佐賀大学教養部研究紀要』第二十卷、一九八八年)所収のものによる。

(浄上拿外末了)【幺】“見他傷敵敵的開聖旨、諛的我黃甘甘改了面色。見幾個惡暗暗的公吏人兩邊排。告你個南海南救苦觀自在。我與你磕頭禮拜。你放了我孩兒勝如做萬僧齋。”(拿外末下了)【浪裏來煞】“把孩兒捕魯魯推出宅門、殄可可待殺壞。眼見的苦厭厭血泊裏躺着屍骸、着麻繩子背綁怎掙揣。欲要你殘生得在。兒呵子除是九重天滴溜溜飛下一紙赦書來。”(下)(浄推外末下了)

(張士貴が登場して薛仁貴を捕らえる)

【幺】

“見ればあの者は厳めしく聖旨を開き

驚いて私の顔色は真っ青

見れば恐ろしい役人が両側に並んでいる

あなたを南海南救苦難觀自在のように思いお頼みする

私はあなたに叩頭したり拝礼したり

息子を見逃して下されば一万人の僧に齋をするよりも勝ります”

(張士貴が薛仁貴を捕らえる)

【浪裏來煞】

“息子をぐいと門から押し出し

無残に殺すつもり

見る間に血を流して死体が転がるが

麻縄で後ろ手に縛られてもがくこともできない

お前の命を助けたいが

息子よ、帝が赦免状を下さなければどうしようもない”（退場）

（張士貴が薛仁貴を押して退場）（第二折）

前述の通り、元刊本は白を欠いているために話の筋を正確に把握することは困難であるものの、その不完全な記述の中に、張士貴が薛仁貴を捕らえ、それを見て薛仁貴の父が慌てる姿を読み取ることができる。張士貴が薛仁貴を捕らえる理由が明確でないが、やはり元曲選本と同様、薛仁貴が管轄地を勝手に離れた罪によるものと見るべきであろう。元刊本では先の引用部分に続き、第三折の冒頭で「駕上、開了。宣外未還郷了」というト書きがあり、ここで帝から薛仁貴に対して正式に帰郷する許可が与えられると思われる。以上のことから、薛仁貴が管轄地を勝手に離れてその罪で捕らえられるという場面は、元刊本の時点で既に存在していたと判断できるのである。

24 金文京「劉知遠の物語」『東方学』第六十二輯、一九八一年）による。

なお、劉知遠物語における帰郷とは、義兄夫婦による迫害から逃れるため、妻の李三娘と別れて軍隊に身を投じた劉知遠が、十数年後に九州安撫使となり、故郷に錦を飾って妻とも再会を果たすというものであるが、これも“私下三関”型の場面と通ずるものがある。劉知遠が十数年間も李三娘と別れたままであったのは、辺境の最前線に立ち続けていたからであり、軍務を放棄して妻に会いに行くことなどできなかったのである。欠落のある『劉知遠諸宮調』や、成化本『白兔記』などでは、劉知遠が軍務と妻との板挟みに思い悩むといった描写は見られないが、浙江省舟山市定海区の侯家班によって二〇〇四年に上演された人形芝居「李三娘」には、任地を離れられない劉知遠が部下に命じて妻に生活費を届けさせる場面や、故郷へ向かおうとした矢先に皇帝から出陣の命を受けて断念する場面があったという（馬場英子「舟山の人形芝居—侯家班上演の「李三娘（白兔記）」」、田中一成・小南一郎・斯波義信編『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ』、東洋文、二〇〇九年）。劉知遠物語における帰郷も、容易に“私下三関”型の場面に転じ得るのである。

25 『録鬼簿』天一閣本においては、「薛仁貴」雑劇の作者である張國賓は「前輩才人有所編傳奇行於世者（前輩の才人にして編する所の傳奇の世に行わるる有る者）」に含まれ、「私下三関」雑劇の作者であ

る王仲元は「方今知名才人（方今の名を知れる才人）」に含まれている。

- 26 原文は「(徐茂功云) 原來是這般。我與你奏知聖人、着元帥衣錦還鄉、就將俺女孩兒賜你爲妻、一同見你父母去。夫榮妻貴、共享天恩、可不好也。」
- 27 前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会、一九七五年）第六章「戯曲の体制化」参照。例として、宋代南戯の「趙貞女と蔡二郎」において故郷の妻を棄てる蔡二郎が、元末明初の高明による「琵琶記」においては忠と孝を全うする人物となっていることを提示している。なお、田仲一成氏は宗族の祭祀の場で好まれた戯曲について、「忠孝節義」と「福祿寿喜」それぞれの面から分析をされている。また、「趙貞女と蔡二郎」から「琵琶記」への変遷に関して、宗族が演劇を選択する場合に、節義奨励の演目を尊重する方向に演劇を誘導、或いは統制する傾向があったことを指摘している（『明清の戯曲—江南宗族社会の表象—』（創文社、二〇〇〇年）第五章「清代江南宗族による宗祠演劇の拡大」）。

第三章 楊家将雑劇から見る習俗と時代背景

はじめに

近年、正史を始めとした従来の公的史料に加えて、小説などの資料を歴史史料として活用する必要性が指摘されている。一般的には、小説は虚構のものと認識されるであろう。しかし虚構の中にも、当時の人々の生活や社会制度が描かれていることは十分にあり得るのであり、虚構とそれが基づく史実とを見極めたならば、歴史史料として大きな役割を果たすことになるであろう¹。

この点は、雑劇を対象としても当てはまると考える。雑劇、つまり芝居には荒唐無稽な部分も多いであろうが、現実の社会制度から全く乖離してしまったならば、それは芝居になるまい。芝居の中にも現実の社会を反映した部分は存在するはずである。

雑劇において、異民族に関する習俗を記しているものが幾つかある。そしてその中には、時に甚だ奇妙に思われる習俗も含まれている。そのような習俗を、所詮は作り話として見過ごすことは簡単であろうが、果たしてそれで良いものか。やはり作品が基づく時代の習俗、或いは何らかの時代背景が反映されていると見るべきであろう。

本章では、楊家将ものの雑劇である「昊天塔」や「開詔救忠」において描かれる遼の習俗について、実際の習俗との関わりや、それが作品中でどのような効果を発揮しているかを考察してみたい。

一、「昊天塔」の作者について

「昊天塔」は『元曲選』に収められる作品であり、題目を「瓦橋關令公顯神」、正名を「昊天塔孟良盜骨」という²。

「昊天塔」の作者として、可能性があるのは朱凱である。『録鬼簿』曹棟亭本では朱凱の項に「孟良盜骨殖」とある。ただし、『録鬼簿』天一閣本では「殺人和尚退敵兵、放火孟良盜骨殖」が無名氏の作品中に入れられており、『太和正音譜』も「孟良盜骨殖」を無名氏の作品としている³。また『永樂大典』目録によると、卷二万七百四十一、雑劇五にも「孟良盜骨殖」とある。

この朱凱は、『録鬼簿』曹棟亭本において「方今才人相知者(方今の才人の相い知れる者)」に含まれている。すなわち『録鬼簿』の著者である鍾嗣成と同世代の人物と思われる。朱凱本人についての記述は以下の通りである。

朱士凱、名凱。自幼子立不俗、與人寡合。小曲極多。所編昇平樂府及隱語包羅天地、謎韻、皆余作序⁴。

朱士凱、名は凱。幼い頃より孤立して俗気が無く、人と交わることが少なかった。小曲を数多く作った。『昇平樂府』と隱語集の『包羅天地』、『謎韻』を編纂し、全て私（鍾嗣成）が序を書いた。

彼の著作と思われるものについて詳細はわからないが、『包羅天地』に関しては『録鬼簿』天一閣本の徐景祥の項に「有詩謎一卷、曰包羅天地、傳於世（『包羅天地』という詩謎一卷があり、世の中に広まっていた）」と見える。「隱語」と「詩謎⁵」という違いはあるものの、或いは『包羅天地』は朱凱と徐景祥との共著であった可能性があるだろう。それらの著作には全て鍾嗣成による序が書かれていたという。『録鬼簿』天一閣本には至順元年（一三三〇）九月吉日との日付を持つ朱凱による序があり、やはり両者の交友関係を裏付けるものとなっている⁶。

また、『録鬼簿』天一閣本においては各人物に明の賈仲明による「弔詞」が付されているが、朱凱については次のようにある。

梨園樂府永昇平、沈默敦篤念信誠。包羅天地曹娥鏡、詩禪隱語精、振江淮獨歩杭城。王彥中弓身侍、陳元贊拱手聽、包賢持拜先生。

劇場の樂府は永遠に太平で、寡黙ながら人情に厚く嘘偽りないよう心掛けていた。『包羅天地』は曹娥も手本とすべきものであり、詩や禪や隱語に精通し、長江や淮河を震わせ杭州の街で並ぶ者はいなかった。王彥中は身をかがめて付き従い、陳元贊は手をこまねいて聞き入り、包賢持は彼に拜礼した。

「弔詞」の中で名が挙げられている人物の内、王彥中は『録鬼簿』天一閣本にも名が見えており、詩詞に優れていたとされ、朱凱とは同業者として交友があったとして不思議はない。陳元贊と包賢持についてはよくわからないが、恐らくは同様に作家仲間であったと思われる。「弔詞」からは、朱凱がその仲間内でも特に優れた才を持ち、一目置かれた存在であったことが窺われる。

朱凱が書いた雑劇として、『録鬼簿』曹棟亭本では「孟良盜骨殖」の他にもう一つ、「黄

鶴樓」が挙げられているが、これは『脈望館鈔校本古今雜劇』に収められて現存している「黄鶴樓」雑劇とは異なるものであるとされている⁷。またこれら以外に、王暉との共作による「雙漸小卿問答」がある。王暉は『録鬼簿』において朱凱の次に項を立てられており、「有與朱士凱題雙漸小卿問答、人多稱賞（朱士凱と共に「雙漸小卿問答」を作り、多くの人々に賞賛された）」と記されている。この作品は現存しており、宋元代に広く民間に伝えられた書生の雙漸と妓女の蘇小卿の故事を題材とし、問答形式になぞらえた小令十六首より構成されている⁸。

二、「昊天塔」より見る習俗

「昊天塔」第一折の冒頭において、北方の国境警備のために三関を鎮守している楊景の夢に、先に戦死した父親の楊令公と弟の楊延嗣（七郎）が現れる。楊令公は、遼の手に落ちた自分の遺骨は幽州の昊天寺にあり、遼の兵士達が塔から吊した遺骨に矢を射かけて辱めていると訴える。

（正末が楊令公に扮し外が扮する楊七郎の魂と共に登場）

楊令公 私は楊令公でございます。北蕃の韓延壽と戦ったが、あやつに虎口交牙峪にて包囲され、内に糧秣なく、外に援軍なしとなった。これは我が七男の楊延嗣。私を救おうとしたものの、潘仁美により矢を集中させて射殺された。私は逃れることができず、李陵碑に頭を打ちつけて死んだ。蕃兵は私の遺体を焼き、遺骨を幽州にある昊天寺の塔の先に吊し、毎日百人の兵に、それぞれ三回ずつ射させ、百箭会と名付けている。私は痛くてたまらない。⁹〈第一折〉

楊景 父上、あなたのご遺骨は、本当に幽州にある昊天寺の塔の先に掛けられているのですか。

楊令公

【青哥兒】

“ああ、あやつは我が遺体をあのように弄び
故に息子に嘆きながら全てを訴える¹⁰”〈第一折〉

まず、舞台の一つとなっている昊天寺について簡単に述べておこう。遼の道宗朝におい

て、僧の志智によって燕京（北京市）に創建されたのが昊天寺である¹¹。志智は遼の皇室耶律氏と通婚する国舅族の蕭氏の出身であり、寺の建立に際しては皇帝や皇后から莫大な寄進が行われた。遼代のみならず、金、元と王朝が交代しても寺の経営は維持され、盛大な仏事が何度も催された。そこに塔があったことについては、金の大定二十年（一一八〇）に立てられた「金中都大昊天寺妙行大師碑¹²」によると、遼の大安九年（一〇九三）に六層八角形で高さ二百尺の宝塔が建立されたことが見える。燕京周辺の仏教界において重要な地位を占めつつ繁栄を続けた昊天寺は、雑劇の舞台として取り上げられるに十分な知名度を備えていたのである。

その昊天寺の塔から遺骨を吊して次々と矢を射るとは、死者に鞭打ち辱めるのに十分な仕打ちであり、実際にそれを受けている楊令公の苦しみは想像に堪えない。また、父親の遺骨に対してこのようなことが行われていると知った楊景は、心が引き裂かれんばかりであったに違いない。ただしこの設定自体について考えてみると、単なる物語展開のための一要素にしては、かなり手の込んだものとなっている。この設定は作者による完全な独創ではなく、何か基づくところがあったはずである。

遼を建国した契丹人は武を尊ぶ気質があり、特に弓射の技量を磨くことに余念がなかった。遊牧騎馬民族である契丹人にとって、弓は狩猟生活に欠かすことのできない道具であり、また最も身近な武器でもあった。故に弓射の鍛錬を行うことは生活手段として不可欠であり、それは極めて現実的な目的に根ざすものといえる。しかし同時に、契丹人にとって弓射は楽しみでもあった。彼らは娯楽の一つとして、射柳という、柳の枝葉を標的として弓の腕前を披露し合う競技をししばしば行った。この射柳は、瑟瑟儀という儀式と深い関係を持つ。

瑟瑟儀に関しては、今井秀周氏による、先人の研究をも踏まえた詳細な論証がある¹³。それに基づいて大まかにまとめると、瑟瑟儀とは天神や太陽神を祭って雨乞いをする儀式である。それはシャーマニズムによる祭天儀式の形式を持っており、二日かけて行われた。その両日共に射柳の儀があり、一日目は祭天の儀を行う前の清めとして、二日目は祭りの後の娯楽競技として行われた。しかし契丹人は極めて弓射を好んだことから、瑟瑟儀の射柳は次第に盛んになり、一日目の射柳は、儀式の中心かと思われるほどになってしまったという。そのため、『遼史』は瑟瑟儀のことを指して「射柳祈雨」とも記している。

瑟瑟儀に伴うものに限らず、射柳はしばしば行われた。例えば『遼史』巻十五「聖宗本紀」の開泰元年（一〇一二）三月乙酉に次のようにある。

詔ト日行拜山・大射柳之禮、命北宰相・駙馬・蘭陵郡王蕭寧、樞密使・司空邢抱質督有司具儀物。

日を占って拜山と大射柳の礼を行うよう詔を下し、北宰相・駙馬・蘭陵郡王の蕭寧と、樞密使・司空の邢抱質に命じて祭祀に用いる器物や供物の監督をさせた。

ここに見える拜山とは、通常は祭山儀と呼ばれる、シャーマニズムに基づき天地を祭る伝統的宗教儀式のこととされる¹⁴。この重要な儀式の後に行われた射柳は、「大射柳」とされることからすると、より盛大なものであったと思われる。

また、『遼史』卷三「太宗本紀」の天顯五年（九三一）六月己亥に「射柳于行在」とあるように、ただ「射柳」とだけ記されている箇所も多い。この場合の射柳は、純粹に娯楽競技としてのものであったろう。射柳が行われたことは『金史』にも記録があるが、それによると射柳は遼から受け継いだものとされている。

皇帝回輦至幄次、更衣、行射柳擊毬之戲、亦遼俗也、金因尚之。（『金史』卷三十五「禮志八・拜天」）

帝は車をとばりへ戻し、着替えをして、射柳やポロの遊びをしたが、これも遼の習俗であり、金はそれを受け継いで好んだのである。

ここに「戲」とあることから、金代に遼の習俗を受け継ぐ形で行われた射柳は、その頃には完全に娯楽と化していたことがわかる。

更に史書以外へ目を向けると、『董解元西廂記諸宮調』卷八【急曲子】に「也不愛耽花戀酒。也不愛打桃射柳（花や酒に迷うことなく、ポロや射柳も好まず）」とあるし、「麗春堂」雑劇の第一折では完顔女真の人々による射柳が行われている。遼の射柳は、後世になると語り物や芝居の中で言及されても自然に受け入れられる程度には人々に知られていたということになる。

そもそも弓で柳を射るといって、養由基にまつわるエピソードが思い出されよう。楚の人である養由基は弓射の名人で、百歩離れた場所から柳の葉に矢を放って百発百中であったとされる。『漢書』卷五十一の枚乗伝と『史記』卷四の周本紀に見えるこのエピソード自体は伝説であるものの、弓で柳を射るといってのは弓の腕を競う方法として一種伝統的なも

のといえる。だからこそ契丹人も、弓射の腕前を競い、誇示する方法として射柳を行ったのである。

このように見ていくと、遼の兵士達が楊令公の遺骨を塔から吊して矢を射かけるという「昊天塔」の設定は、契丹人の弓射を好む気質、特に射柳の競技に基づくものであることがわかる。更に想像をたくましくするならば、そこには楊令公の「楊」と射柳の「柳」からの連想が働いていたと見ることができるのではないか。一般に「楊」がかわやなぎ、「柳」がしだれやなぎのこととされるが、また「柳」はやなぎの総称でもあるし、「楊柳」の形でも同様にやなぎの総称となるなど、必ずしも明確な区別がなされているわけではない¹⁵。「楊」と「柳」の共通項から楊令公と射柳を結び付けた、そこにある種の作者の遊び心を見出すことは決して牽強附会ではあるまい。

ところで、遺骨に矢を射るという行為は実際に可能なのであろうか。一日に百人の兵士が三回ずつ矢を射るというから、都合三百の矢を受けることになり、しかもそれが連日繰り返されるのである。そのようなことをすれば、遺骨は見る間に崩れて粉々になってしまうのではないかという、素朴かつ根本的な疑問を抱かずにはいられない。この疑問を解き得るものとして、『元典章』の中に次のような一文がある。

燒了取骨殖呵、休似人模樣包裹者。(『元典章』卷三十「禮部三・禮制三・喪禮・畏吾兒喪事體例」)

焼いて遺骨を収めたら、人のような形に包んではならない。

この文言はウイグル人に対してのものであるが、遼の支配下では、仏教を信仰する者の間で火葬した遺骨を人の形をした木偶に入れて埋葬することが実際に流行していたのであり、そのことを示す文物も出土している¹⁶。仮に楊令公の遺骨にも同様の処理が施されていたとするならば、そこに次々と矢を射たとしても、遺骨が粉々になることは防げるように思える。

無論、劇中において楊令公の遺骨にそのような処理を施したとの設定があるわけではない。ただ、夜になって遺骨を収める際に、小さな箱に入れるという記述はある。

和尚 斬らないで下さい、話しますから。楊令公様の遺骨は昼間は塔の先に掛けられ、百人の兵にそれぞれ三本ずつ矢を射させます。夜になったら下ろして来て小さな箱

に入れて、方丈の中に収め、賊が盗み去って牌やサイコロにして遊ばないようにしています。ほらあの方丈の机の上にある小さな箱が、楊令公様の遺骨でしょう¹⁷。〈第三折〉

この直後、偽物の遺骨ではないかと疑う楊景と孟良に対して、正真正銘の楊令公の遺骨であることを説明しようとして和尚が唱うという展開になる。本来ならば雑劇において歌唱を担当するのは正末と正旦であるが、ここで和尚に扮しているのは丑であり、それが唱うという点で珍しい場面といえる。

和尚 始めに遺骨は全てそろっていると言いましたのに、一つずつ数えますから聞きなされ。

【滾繡毬】

“あなたは どうして怒鳴りつけるのか
楊令公様の遺骨は全てそろっている
私が頭から言うのを聞きなされ
これぞ頭蓋骨で頭のかかけら
これぞ胸骨で胃腸はなく
これぞ肩胛骨で皮膚もあり
これぞ膝蓋骨で足も全てあり
これぞ背骨であばらと繋がる
私のはっきり全て数え、あなた方が一つ一つ受け取れば
受領書を下さっても無駄ではない¹⁸”

こうした記述からすると、劇中のイメージとしてはあくまで骨格標本のような楊令公の遺骨があって、それを吊して矢を射たり、骨を一つずつ数えたりするというものだったと思われる。「昊天塔」では具体的に楊令公の遺骨に当たる砌末（劇中の小道具）があるわけではないので、観衆の想像力を喚起してあたかも実際に遺骨が存在するかのようには思わせるのは、役者の力量にかかっていたはずである。特に和尚が唱いながら遺骨を一つずつ数える場面は、絶好の腕の見せどころとなっていたに違いない¹⁹。

三、「開詔救忠」より見る習俗

先に述べた瑟瑟儀や射柳と並び、遼と弓射との深い関係を示すものに射鬼箭²⁰がある。射鬼箭について端的に述べられているのは、次の『遼史』の記述である。

出師以死囚、還師以一諜者、植柱縛其上、于所向之方亂射之。矢集如蝟、謂之射鬼箭。
(『遼史』卷五十一「禮志三・軍儀」)

出陣する時には死刑囚を、軍を引き上げる時には敵の間諜を、地面に立てた柱に縛り、進行方向に向かって矢を乱射する。矢が集中する様子ははりねずみのようで、これを射鬼箭という。

出陣または引き上げの際に、死刑囚や敵の間諜を柱に縛り付け、矢を乱射してこれを殺す。これから進行する方向に向かって矢を放つというのは、弓矢の力によって邪気を祓ったのであり、この清祓法は刑法にも転化された。

以養子涅里思附諸弟叛、以射鬼箭殺之。(『遼史』卷一「太祖本紀上」の太祖七年〔九一三〕六月庚子)

養子の耶律涅里思が弟達と共に背いたので、射鬼箭によって殺した。

このように、射鬼箭とは軍事儀式や処刑法として用いられた独特の習俗であり、まるではりねずみのように矢を全身に突き立てて死に至る凄惨な様子から、見る者に畏怖の念を抱かせたことは疑いない。

「昊天塔」と同じく楊家将ものの雑劇である「開詔救忠²¹」に、あたかもこの射鬼箭を連想させる場面がある。「開詔救忠」楔子において、遼の軍に包囲された楊令公は、援軍を要請するために息子の楊七郎を太師の潘仁美のもとへ向かわせる。しかし潘仁美は部下の賀懷簡や劉君期らと共に酒宴に明け暮れて出兵しようとせず、それを見た楊七郎は恨みの言葉を吐く。潘仁美は怒り、楊七郎を柱に縛り付け、矢を次々と射て殺してしまう。

潘太師　こやつめ、お前達父子は兵を率い、蕃兵と戦いに行きながら、我が軍を損ない、蕃将によって谷の中へ閉じ込められたばかりか、お前は私を罵りおったな。ただでは済まさぬ。陳林よ、こやつを陣營の外へ連れて行き、はりつけ柱に縛り付けよ。

陳林 かしこまりました。(七郎を縛るしぐさをする)

賀懐簡 よしよしよし、この憂さ晴らしの酒を飲んだら、矢を射て遊ぶとしよう。

劉君期 縛れ縛れ、弓矢をもて、私が腕前を披露してやろう。

潘太師 副帥達よ、私と陣營の外へ行こう。

(共に陣營を出るしぐさをする)

… (中略) …

(射るが当たらないしぐさをする)

潘太師 一体どうしてあやつに当たらないのだ。

楊七郎 ああ、事ここに至っては。こやつめ、私には矢を見切る術があるのに、お前にどうして当てることができようか。

潘太師 こやつめ黙れ、私が知るわけないだろう。陳林よ、あやつの額の皮を、切つて垂れ下がらせて、あやつの視界を遮るのだ。

陳林 かしこまりました。(切るしぐさをする) 視界を遮りました。

潘太師 (再び射るが当たらないしぐさをする) 副帥達よ、何と不思議な、一体どうして当たらないのだ。

楊七郎 この老いぼれめ、私は目が見えなくとも、我が耳は聞こえているぞ。

潘太師 こやつはそんなことまでできるのか。陳林よ、綿花でこやつの耳をふさげ。

陳林 (耳をふさぐしぐさをする) ふさぎました。

(太師が命中させるしぐさをする) (鬨の声を上げるしぐさをする)

潘太師 陳林、柴敢よ、酒をもて。

陳林 かしこまりました。

(三人で酒を飲むしぐさをする) (また射るしぐさをする)

潘太師 思えば昔河東へ出兵した時、あの老いぼれは私に矢を射た。この恨みはまだ晴れていない。今から一本の矢を十本にして仕返しし、一人がやって来たら一人を殺し、二人がやって来たら両方とも殺そう。副帥達よ、こやつを射殺せ。

賀懐簡 弓矢をもて、私が射るとしよう。

陳林 かしこまりました。(弓矢を渡すしぐさをする)

劉君期 私の弓矢をもて、私もあやつを射るとしよう。

柴敢 かしこまりました。(弓矢を渡すしぐさをする)

(三人で射るしぐさをする) (七郎が死ぬしぐさをする)

潘太師 我らは長い間射たので、両腕がしびれてしまった。陳林、柴敢よ、あやつが死んだかどうか見てみよ。

陳林 かしこまりました。(見るしぐさをする) 死んでおります。

潘太師 死んだのならば、お前達二人であやつの体に当たった矢を数えて、どれだけの矢を射たか見てみよ。

陳林・柴敢 (矢を数えるしぐさをする) 元帥、百三本の矢を射て、七十二本が命中しました²²。

花標樹、すなわちはりつけ柱に楊七郎を縛り付け、次々と矢を放って殺すという手法が生み出された背景には、恐らく射鬼箭があったはずである。楊七郎に七十二本もの矢が命中していたというのは、まるではりねずみのようであったという射鬼箭の描写と何ら変わるところがない。ただしこの場面における射鬼箭まがいの手法は、純粹に処刑法として描かれている。

注目すべきは、この処刑法を用いるのが潘仁美という点である。潘仁美は楊一族と敵対し、彼らを陥れようとする悪役ではあるが、あくまでも宋に仕える臣下であって、遼に仕えているわけではない。通常ならば、遼の習俗に基づいたかのような処刑法を彼が用いるはずがないのであり、部下の賀懷簡や劉君期らについても同様である。

恐らく「開詔救忠」の作者には、遼の軍と潘仁美とを同列に描こうという狙いがあったのではないか。楊家将物語のテーマの一つとして内憂外患との戦いがある。楊一族は国境地帯を守って遼の軍と激しく戦いながら、彼らの働きを妬む奸臣からも苦しめられてきた。「開詔救忠」もこのテーマを踏まえているが、その上で悪役としての潘仁美をより強調しようとした。すなわち、潘仁美に野蛮な遼の処刑法を用いさせることによって、同じ宋朝に仕えながら楊一族を陥れようとする潘仁美を、本来の敵である遼と同等か、それ以上にひどい悪逆無道な存在として描いているのである。

柱に縛り付けられながらも必死の抵抗を続ける楊七郎が、視界を遮られ、耳を塞がれ、遂に矢を全身に受けて死ぬ描写も、観衆に楊七郎への同情と共に、潘仁美への憤りを抱かせる働きを果たしたはずである。そこから観衆の心情は、仇討ちへと行動を移す楊景の心情と同調し、感情移入して劇の展開を見守ることとなる。射鬼箭まがいの場面は、こうした心の動きを起こさせる引き金として、潘仁美がこの上なく残酷な悪人であると決定付ける目的で取り入れられたと見て良い。

おわりに

以上、楊家将ものの雑劇中に描かれる遼の習俗について見てきた。

ところで、現在二百種以上の作品が残されている雑劇の中には、漢民族以外の異民族出身である人物に、彼らが外国人である標識として、「答刺孫（酒という意味）」「抹鄰（馬という意味）」などの蒙古語を話させる場面を含むものが少なからずある。名作として名高い「漢宮秋」の第三折においても、「把都兒（勇士という意味）」「哈喇（殺すという意味）」といった言葉が見える。こうした雑劇中に見える蒙古語に関しては、蒙古人を揶揄するものであるが、それは明代の流行であり、元代からそのような演出があったとは限らないとの指摘がある²³。

それでは、本章で見てきた遼の習俗はどうであろう。『元曲選』にせよ『脈望館鈔校本古今雜劇』にせよ、最終的に基づいているのは明代の台本である。一般に「元曲」や「元雑劇」という呼び方をされるとはいえ、やはり必ずしも元代の習俗がそのまま反映されているわけではない。ましてや史実における楊家の一族が生存していた宋代、または遼代については言うまでもないであろう。

観衆が直接的に享受したのは習俗の奇抜さである。それに対して作者にとっては、物語の基礎設定を踏まえた上でそれにふさわしい時代の習俗を律儀に取り入れるという、一種の知的な遊びがあったのではないか。或いは観衆の中にも、この遊びに気付く者がいたかもしれない。そうなれば作者にとっては本懐であったろう。遼の習俗を取り入れた場面からは、作品の質を向上させることに妥協を許さず、考えを巡らせ趣向を凝らした作者の矜持が垣間見えるのである。

注

- ¹ この点に関しては、塩卓悟「歴史史料としての『夷堅志』—その虚構と史実—」（『筆記小説研究』第六号、二〇〇二年）の「一、はじめに」及び注で、特に唐宋史研究において実際に小説資料を駆使した諸氏の研究が整理されている。
- ² 主な登場人物は、楊令公（第一折の正末）、孟良（第二折・第三折の正末）、楊和尚＝五郎（第四折の正末）、楊景＝六郎（沖末）、楊延嗣＝七郎（外）、岳勝（外）、韓延壽（浄）など。以下にあらすじを示す。

三関を鎮守している楊景の夢枕に、父親の楊令公と弟の楊七郎が現れる。楊令公は、遼の韓延壽が楊令公の遺骨を幽州にある昊天寺の塔の先に吊るし、毎日兵に命じて矢を射させているので、苦しくてたまらないと訴える。〈第一折〉

楊景が夢の真偽を疑っていると、母親の余太君から、全く同じ夢を見たという手紙が届く。そこで楊景は、三関を岳勝に守らせ、孟良と共に父の遺骨を取り戻しに向かう。〈第二折〉

昊天寺の和尚が楊令公の遺骨を塔から下ろし、箱に入れて見張りをしていると、楊景と孟良が寺に押し入って和尚を捕らえる。孟良は斧で和尚を殺し、寺に火を放つ。追手の兵が迫るのを孟良が食い止め、楊景は遺骨を背負って三関へ向かう。〈第三折〉

日が暮れたので、楊景は五臺山の興国寺に一夜の宿を求める。寺の長老は身分を隠そうとする楊景を怪しんで一人の荒法師に問い詰めさせるが、その荒法師こそ生き別れになっていた兄の楊五郎であった。楊五郎は楊景を追って来た韓延壽を騙して寺に誘い込み、殴り殺す。楊景と楊五郎が父と弟のために法要を行おうとするところへ、寇萊公がやって来て顕彰する。〈第四折〉

この元曲選本「昊天塔」以外に、明の李玉『北詞廣正譜』には關漢卿による「孟良盜骨」の残曲が収められている（『善本戯曲叢刊』第六輯、臺灣學生書局、一九八七年所収のものによる）。

【青歌兒】箒着我今年合盡、來日個衆軍衆軍傳令。

【青歌兒】私は今年死ぬことになっており、明日は兵士達が命令を伝える。

この下の割り注に「關漢卿孟良盜骨劇」とある。元曲選本「昊天塔」の中にこの二句は見えないので、題材を同じくする別の雑劇が關漢卿によって作られていたことがわかる。ただし、『録鬼簿』では關漢卿の項に「孟良盜骨」という作品名は見えない。なお王季思主編『全元戯曲』第一卷（人民文学出版社、一九九〇年）では、「衆軍衆軍」の部分の特に校記を付さずに「衆軍衆將」と改めているが、表現としては「衆軍衆將」の方が勝るか。

「昊天塔」を扱った先行研究としては、楊五郎に言及するものが目に付く。小川環樹「魯智深とその類例」（『小川環樹著作集』第四卷、筑摩書房、一九九七年所収）では、『水滸傳』の魯智深や『董解元西廂記諸宮調』の法聰と並ぶ荒法師の類型として楊五郎が挙げられている。松浦智子「『南北宋志傳』「五郎為僧」故事と「建文帝出亡」伝説」（『中国古典小説研究』第十五号、二〇一〇年）、同「楊家將「五郎為僧」故事に関する一考察」（『日本アジア研究』第八号、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要、二〇一一年）ではより広く、明の建文帝にまつわる伝説や、宋代における五臺山の僧兵の活動などに注目し、楊五郎の故事が出現した要因について考察がなされている。一方、田仲一成『中国祭祀演劇研究』（東京大学出版会、一九八一年）第一篇第五章第一節「英靈鎮魂劇の成立」では、最初

に英霊が恨みを訴え最後に祭祀が行われる鎮魂劇の内、亡霊を救済するために登場人物の努力が介在している例として「昊天塔」が取り上げられている。

- 3 青木正兒『元人雜劇序説』（『青木正兒全集第四巻』、春秋社、一九七三年所収）第七章「元人雜劇現存書目」は、「昊天塔」について、『太和正音譜』と『元曲選』では無名氏の作、『録鬼簿』では朱凱の作とされていることを指摘した上で、「朱凱は録鬼簿の後序を書いて居るほど編者と交りの有った人であるから、此の記録を尊重して好かろう」としている。
- 4 『録鬼簿』天一閣本では以下のように記す。「自幼意不俗、與人寡合。小曲極多、所編昇平樂府甚工。類集羣公隱語、標曰包羅天地、又有謎韻一集。」
- 5 詩謎とは詩の形をとった謎かけのこと。南宋の洪邁『夷堅甲志』巻二「詩謎」により、具体的にどういうものであったかを窺うことができる。
- 6 吉川幸次郎『元雜劇研究』（『吉川幸次郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年所収）上篇第三章「元雜劇の作者（下）後期の作者」では、両者の関係について、朱凱が『録鬼簿』の序において鍾嗣成を「大梁鍾君」と呼んでいることから、朱凱は鍾嗣成の先輩であったと推測している。
- 7 高橋繁樹「『劉玄德醉走黃鶴樓』の考察—三国平話と三国雜劇（4）—」（『佐賀大学教養部研究紀要』第八巻、一九七六年）による。
- 8 この作品については、舟部淑子「元代散曲の「双漸蘇卿故事」作品についての一考察」（『文教大学文学部紀要』第二十五（一）号、二〇一一年）において詳細な解説がなされている。
- 9 原文は「（正末扮楊令公同外扮楊七郎魂子上云）老夫楊令公是也。因與北番韓延壽交戰、被他圍在虎口交牙峪、裏無糧草、外無救軍。這個是我第七個孩兒楊延嗣。他爲搭救我來、被潘仁美攢箭射死。老夫不能得脱、撞李陵碑而亡。被番兵將我屍首焚燒了、把骨殖吊在幽州昊天寺塔尖上、每日輪一百個小軍、每人射我三箭、名曰百箭會。老夫疼痛不止。」
- 10 原文は「（楊景云）父親、你的骨殖、委實在幽州昊天寺塔尖上掛着麼。（正末唱）【青哥兒】哎、他將我這屍骸恁般摩弄、因此上向兒行一星星悲控。」
- 11 昊天寺と志智の関係については、古松崇志「考古・石刻資料よりみた契丹（遼）の仏教」（『日本史研究』第五二二号、二〇〇六年）参照。
- 12 東アジア人文情報研究センターのデータベース中にある、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料による。
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_a/html/sou0401b.html
- 13 今井秀周「契丹瑟瑟儀の一解釈」（『東海女子大学紀要』第二十三号、二〇〇三年）。

-
- 14 今井秀周「遼祭山儀考」(『東海女子短期大学紀要』第二十六号、二〇〇〇年)による。
- 15 先述した養由基のエピソードについて、『漢書』では「去楊葉百歩、百發百中」、『史記』では「去柳葉百歩而射之、百發而百中之」としている。また、「麗春堂」の第一折【勝葫蘆】は、射柳の様子を描写して「勝的那一縷垂楊落曉風(勝てばあの一枚のしだれやなぎが明け方の風に舞い落ちる)」という(古名家本による。元曲選本も【幺篇】にほぼ同じ一節がある)。これらも「柳」と「楊」とが明確に区別されているわけではないことを示す傍証となろう。
- 16 唐彩蘭『遼上京文物摺英』(遠方出版社、二〇〇五年)一六一頁によると、林東鎮北山の墓から出土した木製の偶像には、死者の生前の容貌を再現したであろう彫刻が施され、袈裟と靴を身に着けていた。手足は間接で動くようになっており、頭部と胸部に死者の遺骨を収めていた。
- 17 原文は「(和尚云) 你休欣我、等我説罷。楊令公骨殖日間掛在塔尖上。教一百個小軍兒每人射他三箭。到晚間取將下來裝在一個小小匣兒、收藏方丈裏面、專怕有賊來偷了去做牌兒骰子兒耍子。兀那方丈中桌上的小匣兒、這不是楊令公的骨殖。」
- 18 原文は「(和尚云) 我原説這骨殖是有件數的、我一件件數與你聽者。(唱)【滾繡球】你爲甚的來便么呼、只那楊令公骨殖兒有件數數。試聽俺從頭兒説與。這便是太陽骨八片頭顱、這便是胸膛骨無腸肚、這便是肩膀骨有皮膚、這便是膝蓋骨帶腿挺全付、這便是脊梁骨和脇肋連屬。俺這裏明明白白都交點、您那裏件件椿椿親接取、便可也留下紙領狀無虛。」
- 19 正末・正旦以外の脚色が歌を唱うケースに関する論考として、岡晴夫「元曲における“コミック・リリーフ”について」(『芸文研究』第二十七号、慶應義塾大学芸文学会、一九六九年)がある。それによると、特に第三折において浄や丑といった道化役により唱われるケースが多いとされており、劇の緊張を弛めると同時に来たるべき緊張を一層劇的にするコントラストの効果を持つことや、滑稽役者の芸を見せる場としても機能していたことが指摘されている。「昊天塔」第三折において丑の扮する和尚が唱う場面も、これらの指摘に合致するものである。
- 20 射鬼箭については島田正郎『遼史』(明德出版社、一九七五年)参照。
- 21 「開詔救忠」のあらすじは第一部第二章の注3を参照。
- 22 原文は「(太師云) 兀那小匹夫、你父子每領出人馬、去與番兵交戰、又折了我的軍馬、又被番將困在峪中、你倒罵我。更待干罷。陳林、將這小賊拿出帳外去、綁在花標樹上者。(陳林云) 理會的。(做拿七郎綁科)(賀懷簡云) 好好好、喫了這會悶酒、正要射箭耍子哩。(劉君期云) 綁着綁着、將弓箭來、我正要演手段耍子兒哩。(太師云) 兩個副帥、跟着我出帳外去來。(同出帳科) … (中略) … (做射不中科)(太師云) 可怎生射不中這小匹夫那。(七郎云) 罷罷、事到今日也、兀那匹夫、我有噫箭法、你如何射

的中我也。(太師云)這小匹夫不說、我怎生知道。陳林、便與我將那小匹夫額顛蓋上的皮、割將下來、遮了他眼睛者。(陳林云)理會的。(做割科、云)遮了眼也。(太師再射不中科、云)兩個副帥、好是奇怪也、可怎生又射不中。(七郎云)兀那老賊、我雖眼裏看不見、我耳朵裏可聽着哩。(太師云)這小匹夫倒會這等手段。陳林、將綿花塞住小賊的耳朵者。(陳林做塞耳科、云)塞住了也。(太師射中科)(吶喊科)(太師云)陳林・柴敢、將酒來某飲。(陳林云)理會的。(做遞酒科)(三人飲酒科)(又射科)(太師云)想當日下河東之時、那老匹夫射了我一箭。此讐未曾報得。今日一箭還十箭、一個來一個死、兩個來一雙亡。二位副帥、務要射死這匹夫。(賀懷簡云)將弓箭來、我射幾箭。(陳林云)理會的。(做遞弓箭科)(劉君期云)將我的弓箭來、我也射他幾箭。(柴敢云)理會的。(做遞弓箭科)(三人做射科)(七郎做死科)(太師云)俺射了一日、我這兩臂酸麻了也。陳林・柴敢、看他死了也不曾。(陳林云)理會的。(做看科、云)死了也。(太師云)既然死了也、你兩個打下那廝身上的箭數一數、看射了多少箭。(陳林・柴敢數箭科、云)元帥、射了一百單三箭、七十二箭透腔。」

²³ 高橋文治『モンゴル時代道教文書の研究』(汲古書院、二〇一一年)「あとがき」による。

第四章 楊家将物語と『水滸傳』

はじめに

中国の古典小説は、その構成や人物形成などにおいて、しばしば影響関係が見られる。それらは宋代の盛り場で競い合って語られ、発展してきた語り物を起源としているため、互いに影響関係があるのも当然といえる。

このことは、楊家将物語も例外ではない。例えば金文京氏は、「秦淮墨客、紀振倫編の『楊家府演義志伝』(万暦三十四年刊)で、太行山にたてこもった楊家の当主、楊繼業が、宋の太祖に降伏するに際し三つの条件を出したのは、關羽が曹操に降るにあたり三つ条件をのませた話を借用したものであろう」として、『楊家府』と『三國志演義』の関わりを指摘している¹⁾。しかし、楊家将物語と対比して語られることの多い作品としては、『水滸傳』が挙げられよう。

本章では、まず楊家将物語と『水滸傳』の関わりについて述べた先行研究についてまとめ、それから楊家将ものの雑劇と『水滸傳』ものの雑劇の中で、対遼戦争と特殊な陣という同じモチーフを用いた作品を取り上げて比較検討を行う。

一、先行研究について

管見の限りでは、楊家将物語と『水滸傳』の関わりについて最も詳細かつ多岐に渡り述べられているものは、中鉢雅量「楊家將演義と水滸傳」(『中国小説史研究—水滸傳を中心として—』〔汲古書院、一九九六年〕Ⅱの第三章)である。まず中鉢氏は、『楊家將²⁾』と『水滸傳』に見える類似点について、第一に君側の奸臣と戦わねばならなかった点、第二に緑林英雄や地方の勢力家を味方に引き入れるよう努めた点、第三に北方の遼と対峙する北宋時代を背景とする点、第四に主として山西、河北、河南を活躍の舞台とする点を挙げる。

中鉢氏は続いて、『水滸傳』の征遼の段が楊家将物語の影響を受けて成立したことを論じる。一つ目は、遼軍が宋軍を谷地に誘い込む場面についてである。『水滸傳』第八十六回において、遼の賀重寶は盧俊義の一隊を青石峪に誘い込むが、『楊家將』にも、第十八回において楊業が陳家谷で孤立する場面、第二十五回において楊六郎が雙龍谷に誘い込まれる場面、第四十回において八王と宋の十大朝官が九龍飛虎谷で包囲される場面がある。そして、『楊家將』第十八回の場面は元代には成立しており、明代以降に附加された『水滸傳』の征遼の段より前であることは明らかであるとし、第二十五回と第四十回の場面についても、

『水滸傳』の征遼の段より先に案出された可能性は大きいとする。

二つ目は、『水滸傳』の混天陣と『楊家將』の天門陣の相似についてである。混天陣は『水滸傳』第八十八回で遼の兀顔光が、天門陣は『楊家將』第三十三回で遼の呂軍師がそれぞれ布く陣であり、軍士達の持つ何種類かの兵器が天の四神の各部を象徴的に表現する点で同一であると述べる。また、これらの陣を破るに際しては、『水滸傳』では宋江が夢の中で九天玄女から陣を破る方法を授かり、『楊家將』では楊宗保が擎天聖母から兵書を与えられ、更に鍾離権の化身である鍾道士から策を授かっている。そして両書共にこの戦いによって両軍の勝敗は決し、遼は急速に滅亡へと向かう。このように、両書は布陣の類似のみならず、陣を破る方法の授かり方や、その後の事態の推移などにも共通する点が少なくないとする。

そしてこの場合でも、『楊家將』のこの段が先に成立し、『水滸傳』はそれを下敷きにしたと推定する。「謝金吾」第三折の【幺篇】に「你道是楊和尚破天陣吃了些虧、卻不道救銅臺是靠着伊誰（お前は楊和尚が天陣を破る時にしくじったと言うが、銅臺を救ったのはそもそも誰のおかげかを言わぬ）」とあることから、元代の楊家將説話・話本に天門陣を破る一段があったとし、また『楊家府』や「破天陣」雑劇にもこの一段が描かれていることから、その定着度の高さを推測している。そして、『楊家將』のこの段が、倉卒に書かれた感のある『水滸傳』の征遼の段を下敷きにしたとは考え難く、実際にはその逆であったであろうとする。

以上、遼軍が相手の兵を谷の中に誘い込む計略及び、『水滸傳』の混天陣と『楊家將』の天門陣の類似という二点に基づき、『水滸傳』の征遼の段全体がほぼ『楊家將』もしくはその前身たる楊家將説話・話本を下敷きにして作られたと推定している。この後、補足として、『水滸傳』の征遼戦で呼延灼が活躍するのは、『楊家將』における呼延贊の活躍に影響された結果であると述べる。

中鉢氏の説は、筋が通っていると思われる。楊家將の物語が成立する過程にあっては、そもそもモデルとなった楊業や楊延昭が遼との国境防衛に活躍した人物であり、対遼戦争は切り離すことのできないものであった。一方、『水滸傳』の場合は、好漢達の最期を描く方臘討伐が不可分とされていたのに対し、征遼故事は前後から隔絶した話のように捉えられており、田虎討伐や王慶討伐と同様に挿増されたものだとする説まで唱えられていた³。現在のところ、梁山泊軍が征遼故事で勝利することと、方臘討伐で崩壊することをセットとする宮崎市定氏の説⁴に最も道理があると思われるが、その二つの戦争をセットとする構

想は、恐らく『水滸傳』成立のほぼ最終段階で生まれたはずである。だとすれば、『水滸傳』の征遼故事が作られる際に、それ以前から広く知られていた楊家将の物語を下敷きとすることは十分にあり得ることである。

次に、佐竹靖彦『梁山泊一水滸傳・108人の豪傑たち』（中央公論社、一九九二年）第七章中の「対契丹戦の英雄楊業と楊家将故事」で説かれていることを見ていこう。佐竹氏は楊家将故事を、「水滸伝における遼国遠征という荒唐無稽の物語のいわば火種」と見ている。そしてまず、『水滸傳』の青面獸・楊志が楊令公の子孫と称していることに触れ、それと関連付けて、北宋末の金軍の華北侵入に抗した山東の盗賊である白氈笠・劉忠という者が、自らその額に刺青をしていたために花面獸とも呼ばれていたと述べる。青面獸の「青」は顔の痣と説明されているが、「青」は一般に刺青を指すことから、青面獸と花面獸は同義であったとし、顔に刺青するのは罪人の印であり、名誉ある楊家将の子孫とされた青面獸・楊志にはふさわしくないため、本来の刺青を痣にすり替えて説明したと推測している⁵。

続いて佐竹氏は、『清平山堂話本』に見える「楊温攔路虎傳」について、主人公の楊温が楊令公の子孫である楊重立の息子とされていることを紹介する。そして、「攔路虎」の楊温が東岳泰山に奉納する棒の試合で李貴を倒す場面と、『水滸傳』第七十四回の燕青が東岳泰山に奉納する相撲の試合で任原を倒す場面の類似を始めとして、「攔路虎」の多くの箇所が『水滸傳』と一致するとしている。

先に「攔路虎」について述べるならば、確かに楊温は楊令公の後裔という設定にされているが、楊温や楊重立という名は現在知られている楊家将の物語には見えない。従って、「攔路虎」を楊家将ものの話として扱うことにはためらいを禁じ得ない。「攔路虎」と『水滸傳』の筋書きによく似た部分があることは間違いないものの、これによって楊家将故事が『水滸傳』に与えた影響であると主張するのはふさわしくないであろう。

楊志と劉忠に関する論も、楊家将物語との直接の関わりはないように思える。ただし、敢えて附言するならば、楊六郎の配下の一人である岳勝の綽名も花面獸というのである⁶。岳勝を始めとして、孟良や焦贊など、楊六郎の配下に加わる豪傑たちはいずれも架空のキャラクターであるが、その人物造形には当時実在した民間武装集団の姿が投影されていたと思われる⁷。楊志と岳勝が共に劉忠をモデルとしている可能性は十分にある。

最後に、間接的な言及ではあるが、西川芳樹「元代の歴史劇に於ける忠臣と奸臣の対立関係―「趙氏孤兒」劇、「伍員吹簫」劇を手がかりとして―」（『関西大学中国文学会紀要』第三十三号、二〇一二年）で述べられていることについて見てみたい。

西川氏は、まず「趙氏孤兒」と「伍員吹簫」を例として、本来は君臣の対立を描いていた話が、元代に為政者を悪く描くことが取り締まられるようになると、主君の悪事に関わる部分を削除し、奸臣を新たに敵役に配置して主君の代わりとするようになったことを論ずる。そして、この「主君を利用した、忠正賢良と奸邪の対立」は明以降の歴史を題材とした多数の白話文学作品に採用されているとし、例として、『楊家府』の楊六郎・王欽若・太宗の関係、『説岳全傳』の岳飛・秦檜・高宗の関係、『水滸傳』の好漢・高俅たち奸臣・徽宗の関係を挙げる。また、これらの作品の主人公は、その大半が外征をして異民族と戦う軍官であり、内は奸臣、外は外敵と戦う内憂外患の状況に置かれ、外敵という新たな要素が加わると指摘している。

この指摘は、中鉢氏が最初に挙げた『楊家將』と『水滸傳』に見える四つの類似点とも重なるものである。私見を述べるならば、上述されるような明以降の作品における主君はもはや悪役とはなり得ず、むしろ忠臣たる主人公に対して好意的であったり協力的であったりする。しかし、それは何ら実行力を伴わないものであり、また主君も結局は奸臣の意のままであるため、主人公は主君から守られることなどなく、奸臣の攻撃を受け続けることとなる。戦闘の場面になると主君の存在感は更に希薄になり、主人公は奸臣と異民族国家を相手に苦闘する。明以降の作品においては、物語が進行する軸はやはり内憂外患へと移っているのである。

二、楊家將雜劇と水滸戲の比較

(一)「破天陣」

先の中鉢氏は、主に小説に基づいて『水滸傳』の混天陣と『楊家將』の天門陣の相似を指摘されたが、それ以外に雜劇においても、楊家將ものの雜劇と水滸戲とでそれぞれ特殊な陣を布くというモチーフを用いた作品がある。ここでは両者を対比し、どのような相似または相違が存在するのかを見ていきたい。

まずは楊家將雜劇からである。「破天陣⁸」劇は、『脈望館鈔校本古今雜劇』に内府本として収められている無名氏の作品である。寇準のいる銅臺城が遼軍に包囲されたため、謝金吾殺しの一件で身を隠していた楊景が召し出され、遼軍を破って危機を救う。この際、遼の軍師である顔洞賓が、一百四十二の陣を組み合わせたという特殊な陣を布くのである。この作品においては、呂洞賓の化身と思われる顔洞賓⁹の存在や、全真教の指導者や八仙に言及されるなど、道教的色合いが濃く見られる¹⁰。

“話を終えて天に昇ろうと
私は青雲に乗って帰る
そなたは私の仙郷がどこか尋ねるが
話せば驚いて魂も飛び去る
花を植えるのはわずかの間
韓湘子と私は親戚関係
王祖師は私の叔父
馬丹陽は私のお隣さん
張四郎は釣った魚を私に食わせ
張果老は私の祖父
私は藍采和の体につくノミ
漢鍾離の足に止まるヌカガ¹¹”〈第一折、顔洞賓の退場詩〉

このような道教的要素は顔洞賓が布く陣にも深く反映されており、その陣を楊景らが打ち破る場面が「破天陣」の主眼となっている。第一折において、顔洞賓は布陣について次のように説明する。

この天陣の中には一つの天陣だけでなく、東西南北になぞらえ、前に朱雀、後ろに玄武、左に青龍、右に白虎があります。この四つの陣の外に、乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌の八卦陣を布きます。この八卦陣は、休・生・傷・度・景・死・驚・開の八門陣になぞらえます。この八門陣の外に、また二十八陣があり、角・亢・氐・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・畢・奎・婁・胃・昴・壁・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・軫の二十八宿になぞらえます。…〔中略〕…正名を周天二十八宿陣といい、集まれば一つになり、散開すればその数は、全部で百四十二陣となります¹²。

この部分の顔洞賓の白は非常に長尺であり、実際に舞台上で演じられた際には、顔洞賓に扮する役者にとって腕の見せどころとなっていたと思われる。「破天陣」で顔洞賓に扮するのは浄であるが、もし彼がこの長尺の白をよどみなく一息で言い切ったならば、観衆は拍手喝采を贈ったことであろう。

ここで挙げられている陣の名称を、煩を厭わず書き出してみると、朱雀陣、玄武陣、青龍陣、白虎陣、八卦陣（乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌）、八門陣（休・生・傷・度・景・死・驚・開）、二十八宿陣（角・亢・氏・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・畢・奎・婁・胃・昴・壁・觜・参・井・鬼・柳・星・張・翼・軫）、参辰陣、十二宮辰陣（宝瓶宮・人馬宮・磨羯宮・天蝎宮・天秤宮・双女宮・獅子宮・巨蟹宮・金牛宮・白羊宮・双鱼宮・陰陽宮）、十二時陣（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）、九曜陣（羅睺・土星・金星・水星・太陽・火星・計都・太陰・木星）、四斗陣（東斗十三星・西斗十四星・南斗六星・北斗七星）、金・木・水・火・土の五陣、天河陣、黄河九曲陣、二暗陣（羅睺・計都）、北斗玄武七星陣、天関地軸陣、太陽朝闕陣、太陰元鉄陣となる。ただし、いずれが正式名称か別名かを判断し難いものがあり、またそれぞれの陣の対応関係がはっきりとしない部分もある。ともあれ、顔洞賓が布く周天二十八宿陣とは、多種多様な陣が複雑に組み合わさって構成されていることがわかる。

ところが、第二折になるとこの陣は周天八卦陣という名で呼ばれ、第三折で顔洞賓が定めた諸将の配置は次のようなものであった。

青龍陣…都骨林
白虎陣…土金宿
朱雀陣…蕭天佐
玄武陣…蕭天佑
天門陣…忽里歹
九曲黄河陣…耶律灰
日精月華陣…蕭虎・蕭彪
二十八宿陣…韓延壽・顔洞賓

まず目に付くのは、多くの陣が抹消され、布陣が簡略化されていることであろう。また実際に配置された陣についても、日精月華陣などはここで初めて名が見えるものである。このような簡略化や名称の違い、すなわち前後の記述の不一致は、どのような理由から生じたのであろうか。

恐らくこれは、実際に上演されたものが設定と異なっていたことを示唆するものではなからうか。先述したように「破天陣」は『脈望館鈔校本古今雜劇』の内府本に属するもの

であり、つまり明代の宮廷で行われていた演劇の上演用台本に基づいている。そもそも、「破天陣」のように多くの役者が登場して舞台上で入り乱れる作品は、民間の劇団程度の規模ではとても上演できるものではなく、宮廷劇団の規模をして初めて上演が可能となるのである。しかしながら、第一折で顔洞賓が語るような多種多様な陣の全てを再現することは宮廷劇団であろうとも不可能であったため、あくまで設定としてはそのまま残しておく、実際に上演する際には布陣を簡略化したのであろう。或いは、何か非常に喜ばしい出来事や行事に関連して上演された場合には、顔洞賓が語る陣を全て再現した特別公演が行われたということがあったのかもしれない。いずれにせよ、「破天陣」にとって陣を布く場面は、必ず演じられなければならない不可欠の要素であることは確かであろう。

ついでながらここで、同じく楊家将雑劇である「活拿蕭天佑¹³」劇について述べておきたい。「活拿蕭天佑」も、やはり『脈望館鈔校本古今雜劇』に無名氏の作品として収められている。内容としては、遼の韓延壽から武芸比べを申し入れられた八大王が、三関を鎮守する楊景に出陣を命じ、楊景は孟良や焦贊らを率いて遼軍を撃退するという単純なものであるが、話の構造としては「破天陣」と重なるものがある。すなわち、「破天陣」から布陣という要素を取り去ったならば、「活拿蕭天佑」のような話になると思われるのである。

実際に「破天陣」を簡略化、ないしはもう一つのバリエーションとして作られたものが「活拿蕭天佑」であったのか、逆に「活拿蕭天佑」という単純な話を発展させて「破天陣」が作られたのかを確かめる術はない。一方で、両陣営の人物が自己紹介をした後に戦闘を行うという構成を組み込んだ雑劇は、「薛仁貴」や「三戦呂布」など、少なからず存在しており、そのような構成がある種テンプレート化していたことを窺わせる。むしろ「破天陣」と「活拿蕭天佑」も、同様の構成を用いつつ、それぞれ独自に作られたものと考えるのが自然かもしれない。

当時実際に演ずる劇団側の立場で想像するに、テンプレートとなる作品を一つ用意しておき、上演する際には観衆側の要望に合わせてそれに手を加えるようにしていたならば、都合が良かったのではないだろうか。

(二)「九宮八卦陣」

続いて、水滸戯の一つである「九宮八卦陣¹⁴」劇について見ていきたい。「九宮八卦陣」の内容は、『水滸傳』第八十七回で描かれている、遼の兀顔延壽、太眞胥慶、李集が幽州にいる宋江らに戦いを挑むのを、宋江が九宮八卦陣を布いて打ち破る場面と同じである。

ただし、「九宮八卦陣」には南宋の龔聖與「宋江三十六人贊」以来の伝統を持つ天罡星三十六人に含まれる好漢以外に、地煞星七十二人に含まれる好漢が多数登場していることから、明らかに『水滸傳』成書後に完成した作品である。従って、「九宮八卦陣」は『水滸傳』第八十七回を参考にして作られた作品と思われる。

この「九宮八卦陣」にも特殊な陣を布くというモチーフが見られる。第二折において、遼の兀顔受、李金吾、戴眞慶と戦うことになった宋江らは、公孫勝の師である羅眞人を訪ね、遼の軍に勝つために策を求める。そこで羅眞人は、宋江には九宮八卦陣という陣を伝授し、公孫勝にはその陣を変化させる秘法を伝授する。

羅眞人 宋將軍よ、李逵は行ってしまいました。あなたにお話ししますが、明日は兀顔受がきつとやって来ますので、私があなたに一つの陣を伝授しましょう。この陣はあなたが知るべきものですのに、私が伝授しないままになっていました。その名は九宮八卦陣。九宮の上に九人の大将を置き、八卦の上に八人の英雄を置くのです。公孫勝よ、私には他に秘法があり、お前達にこの陣を変化させる法を伝授しよう。將軍、こちらへ来られよ。(耳元でささやくしぐさをする¹⁵)

また第三折では、九宮八卦陣について次のように語られる。

宋江 朱武軍師、これから將軍達を集め、一つの陣を布いて、遼の兵を打ち破るぞ。

軍師よ、そなたに尋ねるが、九宮八卦陣の布陣はどのようになっているのか。

朱武 兄者この陣は素晴らしく、九宮は九九八十一宮に分かれ、八卦は八八六十四卦に分かれています。

公孫勝 軍師の言う通りです。この陣には変化の法もあり、天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇といい、遼の兵を破ることができます¹⁶。

この後、諸将が呼び集められてそれぞれの配置を言い渡される。最終的に定められた諸将の配置は次の通りである（なお、名前の表記が『水滸傳』と異なる者がいるが、「九宮八卦陣」における表記のままにしておく）。

坎…韓滔

艮…彭起
震…朱仝
巽…索超
離…雷横
坤…秦明
乾…李逵
兌…楊志（以上、八卦陣）
天蠍宮・天秤宮…杜千・宋萬
巨獬宮・獅子宮…解珍・解寶
白羊宮・人馬宮…薛永・施恩
双魚宮・双女宮…鄭天壽・王矮虎
宝瓶宮…陳達（以上、九宮陣）

九宮については、陳達の宝瓶宮を除き、二人の者が同時に呼ばれて二つの宮を守るように命じられるという描写になっているので、どちらがどちらの宮を守っているのかははっきりしない。

この九宮八卦陣が『水滸傳』第八十七回で用いられていることは既に述べたが、実は第七十六回における童貫との戦いでも用いられており、ここで詳しい布陣が語られている。

南方丙丁…秦明
東方甲乙…關勝
西方庚辛…林冲
北方壬癸…呼延灼
巽…董平
坤…索超
艮…史進
乾…楊志
中央戊己…朱仝・雷横

「九宮八卦陣」と『水滸傳』の布陣を比較すると、「九宮八卦陣」では『水滸傳』にない

九宮の要素が加えられているものの、八卦の方位に各将を配置するという考えは共通のものである¹⁷。しかし、「破天陣」と「九宮八卦陣」の布陣を比較した場合、共通性はそれほど感じられない。「破天陣」第一折で顔洞賓が語る中には八卦や十二宮辰が含まれているが、それらは第二折での布陣には見えないのである。「破天陣」と「九宮八卦陣」は、共に対遼戦争と特殊な陣という取り合わせを採用している。これは恐らく、宋対遼という一大決戦をより見応えのあるものとするために、特殊な陣を布くという演出が取り入れられたのであろう。ただし、具体的な布陣に関しては互いに干渉をしなかったということになる。

更に注目したいのは、特殊な陣を布くのが自軍であるか、敵軍であるかという違いである。すなわち、「破天陣」では敵の遼軍が周天八卦陣を布いているのに対し、「九宮八卦陣」は梁山泊軍が自ら陣を布いている点である。特に「九宮八卦陣」については、先の中鉢氏の指摘にもあったように、『水滸傳』では遼軍も混天陣という陣を用いているにも関わらず、それを削った上で梁山泊軍にのみ陣を布かせている。これは一体どのような理由によるものなのであろうか。

まず「破天陣」では、遼軍の陣を梁山泊軍が打ち破るのであるから、強大な力を持つ敵軍を自軍が倒すという形になる。それに対して「九宮八卦陣」では、梁山泊軍が陣を布いて遼軍を打ち破るのであるから、自軍が持つ強大な力で敵軍を完膚無きまでに叩きのめすという形になっている。両者を比較した場合、観衆に向けて自軍の強さをよりアピールすることができるのは、「九宮八卦陣」の方であろう。確かに「破天陣」の形でも、強大な力を持つ敵を倒すことで、結果として自軍はそれを上回る力を備えていることの証明となるのであるが、その理屈を舞台上で表現することは難しく、観衆の頭の中で理解してもらえない。「九宮八卦陣」のように自軍が強大な力を持つという設定にしておいて、一気呵成に敵軍を倒してしまえば、自軍の強さは誰の目にも明らかとなる。

両者における戦闘の場面を見てみよう。「破天陣」では、遼の諸将が布く様々な陣をそれぞれ個別に撃破していくという戦略が用いられている。最初に楊宗保が天門陣を破る様子は次の通りである。

顔洞賓 忽里歹よ、しっかりと陣を布き、あやつに我が陣を攻めてみさせるのだ。

忽里歹 承知しました。(陣を布くしぐさをする)

楊景 (唱う)

【快活三】

“猛々しく門の旗の前で話をし
がやがやと陣中で鬨の声を上げる
ドンドンと天に響き耳にやかましい戦いの銅鑼が響き
ガラガラと殺気をかき立てて出撃の合図の砲を撃つ”
楊宗保よあの天門陣を攻めよ。

楊宗保 承知しました。(陣を攻めるしぐさをする) 天門陣を破ったぞ。

韓延壽 軍師よ、天門陣が破られてしまったぞ。

顔洞賓 大丈夫、まだ二十八宿陣がありますから。青龍白虎陣を布け¹⁸。(第三折)

以下、岳勝と孟良が青龍陣と白虎陣を、李瑜と焦贊が朱雀陣と玄武陣を、張蓋と呼延必顯が黄河九曲陣と日精月華陣を破り、最後に楊景を含め全員で二十八宿陣を破るという流れになっているが、いずれも描写は似通っており、同じ事の繰り返しに過ぎない。陣を攻めている最中の動きについては、ト書きで簡単に記されているだけなので、具体的なことはわからない。しかし、いかに派手な大立ち回りを演じて見せたところで、それが何度も繰り返されるのでは新鮮味が薄れ、観衆も食傷気味とならざるを得まい。

一方、「九宮八卦陣」における戦闘の場面は、次のようになっている。

兀顔受 お前達二人は左右から攻め、私が先陣となろう。

李金吾 元帥、突撃しましょう。

(兀顔受・李金吾・戴眞慶が陣に入るしぐさをする)

(公孫勝が旗を揺らすしぐさをする)

(李逵が大勢と共に三人を取り囲むしぐさをする)

兀顔受 一体どうして方角がわからなくなったのだ。どこへ出れば良いのだろう。

李逵 兄弟達よ、あやつらを逃がすな。(唱う)

【仙呂・賞花時】

“今や出会い頭にひたすら戦い
見ればあやつらはあちこち慌てふためいて行き場もない
お前は我らの勇猛な兵に敵わず
今日この地で死に
この陣は多くの者を驚かせる”

兀顔受 これはまずい、隙間を目がけて逃げろや逃げろ。(退場)

(大勢が賊の戴眞慶・李金吾を捕らえるしぐさをする¹⁹⁾〈楔子〉)

こちらでは一度の戦闘で勝敗が決するため、この記述を読むだけでは、却って物足りないと思われ恐れる恐れもあろう。しかし、この場面は「九宮八卦陣」のクライマックスとなるものであり、立ち回りには特に力が注がれていたはずである。梁山泊軍が遼軍を取り囲む様子や、戴眞慶と李金吾を捕らえる様子などを、立ち回りを挟みながら丹念に演じ、クライマックスの一段として提示したならば、観衆を十分に満足させることは可能であったと考える。むしろ、冗漫に繰り返すことをせず、一段の流れで演じ切ることによって、より印象に残るものとなったのではないか。

既に述べたように、対遼戦争の要素は、楊家将物語が作られ始めた当初から不可分のものであったのに対し、『水滸傳』ではかなり後の段階で取り入れられた。そして、「九宮八卦陣」は明らかに『水滸傳』成書後に作られた作品である。これらを踏まえると、先後関係としては先に「破天陣」が作られ、その後に「九宮八卦陣」が作られたことになる。 「九宮八卦陣」が実際に「破天陣」を参照しながら作られたと断定することはできないが、「九宮八卦陣」がマンネリズムに陥ることを避けつつ、より合理的に観衆にアピールできる形となっていることは確かである。

おわりに

本章では、まず楊家将物語と『水滸傳』との関わりについて述べられた先行研究を挙げ、分析とくばくかの補足を試みた。続いて、対遼戦争において特殊な陣が布かれるという要素を持つ「破天陣」と「九宮八卦陣」を比較し、類似する部分と異なる部分について考察した。「九宮八卦陣」の成立がやや遅れるためか、異なる部分の方が目立つような印象となったが、それはそれで意味のあることと考える。物語間の影響関係を考えようとすると、とかく似通っている部分にばかり意識が向かいがちになるが、類似点を踏まえた上でどのような違いがあり、どのように差別化が図られているかを見出すことが重要だからである。物語間の影響関係を論ずることは容易ではないが、今後は『水滸傳』のみならず他の作品へも視野を広げ、楊家将物語との関わりについて考えていきたい。

注

- 1 金文京『三國志演義の世界（増補版）』（東方書店、二〇一〇年）一五一頁より。なお、楊繼業のエピソードは『楊家府』第一巻第五則、關羽のエピソードは『三國志演義』第二十五回に当たる。
- 2 中鉢氏は楊家將の小説のテキストとしては『北宋志傳』を用い、『楊家將』と略称している。本章でも便宜上この略称を用いることとする。
- 3 高島俊男『水滸傳の世界』（大修館書店、一九八七年）「十二 遼国征討」参照。
- 4 宮崎市定『水滸傳—虚構のなかの史実—』（中央公論新社、一九九三年）第三章「妖賊方臘」参照。
- 5 劉忠については、『建炎以來繫年要録』卷十九の建炎三年（一一二九）正月丁亥に次のようにある。

山東盜劉忠號白氈笠、引衆據懷仁縣。…〔中略〕…忠自黥其額、時號花面獸。

山東の盜賊である劉忠は白氈笠と呼ばれ、多くの者を率いて懷仁県（山西省朔州市）を根拠としていた。…〔中略〕…劉忠は自ら額に刺青していたので、時に花面獸とも呼ばれた。

また、澤田瑞穂「彫青史談—中国における文身の種々相—」（『中国史談集』〔早稲田大学出版部、二〇〇〇年〕所収）も、楊志の青面獸という綽名が花面獸からヒントを得た可能性を指摘している。
- 6 「昊天塔」と「破天陣」において、岳勝の綽名が花面獸となっている。「謝金吾」での綽名は雙刀。『楊家府』での綽名は花刀といい、手柄を立てるために楊六郎の軍に加わりたと思っていたが、王欽（雜劇における王欽若に当たる）の策略により楊六郎の指揮下には病人や老人ばかりが送られていたので、姜黄の汁を顔に塗って黄色くして軍に入り込んだという設定になっている。
- 7 相田洋『中国中世の民衆文化—呪術・規範・反乱』（中国書店、一九九四年）Ⅲの第二章「紅巾考—中国に於ける民間武装集団の伝統—」の中で、『水滸傳』の英雄好漢のモデルとなったと思われる民間武装集団についてまとめられている。
- 8 題目「韓延壽索戰賭三籌」、正名「楊六郎調兵破天陣」。主な登場人物は苗士安（楔子の正末）、楊景（第一折の正末）、岳勝、寇萊公（冲末）、呼延必顯、顔洞賓（浄）、胡祥、焦贊、孟良など。以下にあらすじを示す。

寇萊公は銅臺城において韓延壽の率いる軍によって包圍されていたが、ある夜に帝が不思議な夢を見る。陰陽臺官の苗士安に夢占いをさせたところ、汝州にいる楊景が危機を救ってくれるとのことであった。楊景は勝手に三関を離れた罪によって首を斬られたはずであったのだが、寇萊公は占いを確かめるために、呼延贊の子である呼延必顯を汝州へ向かわせ、楊景の罪を許して韓延壽を破らせようとする。

（楔子）

韓延壽の軍師である顔洞賓は、宋の都を奪うために強力な天陣を布く準備をする。汝州では太守の胡

祥が楊景をかくまっていたが、呼延必顯が楊景のことを尋ねても隠し通す。怪しく思った呼延必顯はとうとう楊景を見付け出し、銅臺城の危機を救うように命じる。楊景は以前配下にいた將軍達を集めることにする。〈第一折〉

楊景は岳勝、焦贊、孟良らと共に銅臺城の包囲を破り、城に入って寇萊公にまみえる。顔洞賓の布く天陣を見た楊景は、それを打ち破るべく諸將に命じて軍勢の手配をする。〈第二折〉

諸將の働きによって天陣が破られる。韓延壽は討ち取られ、顔洞賓は生け捕られる。〈第三折〉

楊景らは勝利を収めて凱旋する。寇萊公が酒宴を開き、楊景と諸將はそれぞれ官位を授けられる。〈第四折〉

9 『楊家府』では、第四卷第四則において呂洞賓と漢鍾離が仲違いをし、その後、呂洞賓は呂客と名乗って遼の軍師となり、漢鍾離は鍾漢と名乗って宋に協力する。「破天陣」においてもこの設定が意識されていると見るべきであろう。

10 有澤晶子「元明雜劇に見る道情の演劇表現について」（『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』第三十四号、一九九九年）は「破天陣」について、神仙道化劇に見られるような現実への厭世観と道教への傾斜といった心情的な要素は置き去りにされ、形骸化されていると指摘する。事実、「破天陣」は道教的要素を取り入れているとはいえ、中心となっているのは顔洞賓が布く陣を楊景が打ち破るという戦闘の場面である。

11 原文は「説罷也欲待騰空、我歸去駕起青雲。你問我仙鄉何處、說起來唬了三魂。栽花時則在頃刻、韓湘子和我關親。王祖師是我舅舅、馬丹陽與我緊鄰。張四郎釣魚我喫、張果老是我阿公。我則是藍采和身上的跳蚤、我則是漢鍾離脚上的蠅蟲。」

この中で詠まれる人物の内、王祖師とは全真教の開祖である王重陽のこと。馬丹陽は全真教の第二代教主。それ以外は八仙のメンバーとされる者達であるが、張四郎は八仙に含まれない場合もある。張四郎についての詳細は、川野明正「天翔る犬—大理漢族・白族の治病儀礼「送天狗」と「張仙射天狗図」にみる産育信仰」（『饕餮』第八号、中国語学会、二〇〇〇年）を参照。

12 原文は「這天陣裏則不一個天陣、按着東南西北、前有朱雀、後有玄武、左有青龍、右有白虎。這四陣外、又擺八卦陣、乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌。這八卦陣、又按八門陣、是休・生・傷・度・景・死・驚・開。這八門陣外、又有二十八陣、按着二十八宿、角・亢・氐・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虛・危・室・畢・奎・婁・胃・昂・壁・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・軫…〔中略〕…正名曰是周天二十八宿陣、聚而爲一、散則計數、總一百四十二陣。」

13 題目「楊六郎槍刺耶律灰」、正名「焦光贊活拿蕭天佑」。主な登場人物は黨彥進（第一折の正末）、焦

贊（第二折・第三折・第四折の正末）、楊景（外）、孟良（外）、八大王（外）、寇萊公（外）、王樞密（浄）、韓延壽（沖末）、蕭天佑（外）など。以下にあらすじを示す。

宋朝に対し、契丹の韓延壽から挑戦状が送られて来る。八大王が王樞密、黨彦進、寇萊公らと共に相談した結果、三関を鎮守している楊景を出陣させることに決まり、寇萊公が使者として三関へ向かう。

〈第一折〉

寇萊公は楊景に元帥の印を授ける。楊景は配下の李瑜、張蓋、孟良、焦贊らと共に兵を率いて出陣する。〈第二折〉

楊景らが韓延壽の配下の将と戦う。楊景は耶律灰を槍で刺し殺し、焦贊は蕭天佑を生け捕り、李瑜と張蓋は耶律馬を生け捕る。〈第三折〉

楊景らが勝利を収めて三関へ戻ると、帝の命を奉じた寇萊公がやって来て、官位と恩賞を贈る。〈第四折〉

なお、「活拿蕭天佑」は『脈望館鈔校本古今雜劇』においてその出自を明記されていないが、前掲の小松謙「『楊家府世代忠勇通俗演義傳』『北宋志傳』—武人のための文学—」では、やはり内府本ではないかとしている。

- 14 題目「公孫勝展三略六韜書」、正名「宋公明排九宮八卦陣」。主な登場人物は李逵（正末）、宋江（外）、盧俊義、呉用、公孫勝、羅真人（外）、兀顔統軍（沖末）、兀顔受（外）、李金吾（浄）、戴眞慶（浄）など。以下にあらすじを示す。

遼の兀顔統軍の息子である兀顔受が配下の李金吾、戴眞慶と共に、宋に帰順したばかりである宋江らに戦いを挑む。宋の宿元景は、宋江を元帥に、呉用以下をそれぞれの役職に任じて遼を征伐するよう命じる。先鋒を決めようとする、李逵が名乗り出て引き受ける。〈第一折〉

宋江らは公孫勝の師である羅真人を訪ね、兀顔受に勝つ策を求める。羅真人は九宮八卦陣を伝授する。

〈第二折〉

宋江らは羅真人の教えに従い、諸将の配置を決める。〈第三折〉

宋江らは九宮八卦陣を布き、陣に突撃した遼の軍は取り囲まれる。李金吾と戴眞慶は捕らえられ、兀顔受は敗走する。〈楔子〉

兀顔受は討ち取られ、李金吾と戴眞慶は首を斬られる。戦勝の宴が開かれているところへ宿元景がやって来て、宋江ら全員に官位と恩賞を与える。〈第四折〉

- 15 原文は「（羅真人云）宋將軍、李逵去了也。我與你說、明日兀顔受統軍必來、我傳與你一陣。此陣你須得知、未及貧道之傳授。名喚做九宮八卦陣。你九宮上安九個大將、八卦上安八個英雄。公孫勝、貧道

另有秘法、傳與您此陣變法。將軍、你近前來。(做打耳暗科了)」

- 16 原文は「(宋江云) 朱武軍師、今日聚將、要排一陣、大破遼兵。軍師、某與你計議、擺一個九宮八卦陣如何。(朱武云) 哥哥此陣最高、九宮分九九八十一宮、八卦分八八六十四卦。(公孫勝云) 軍師說的是。此陣又有變法、是天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇、堪可破遼兵也。」
- 17 澤田瑞穂「八卦教源流」(『國學院雜誌』第五十五卷第一号、一九五四年) は、清代における邪教の一種である八卦教が、教徒中の有力幹部を地区に配し、震・離・坎などの八卦の名目を用いて管理させる八卦分掌法という方法を用いていたことについて考察しているが、その中で、『水滸傳』第七十六回や「九宮八卦陣」劇に見える布陣の描写が、八卦分掌法に対して間接的に影響を与えたのではないかと指摘している。
- 18 原文は「(顔洞賓云) 忽里歹、擺布的嚴整者、着他打俺這陣者。(忽里歹云) 得令。(擺陣科) (正末唱) 【快活三】“惡眼眼門旗前答話了、鬧垓垓陣勢裏喊聲高 響璫璫喧天聒耳戰鑼敲 忽刺刺助殺氣催軍砲 ” (云) 楊宗保打那天門陣去。(楊宗保云) 得令。(打陣科、云) 打了天門陣也。(韓延壽云) 軍師、打了天門陣也。(顔洞賓云) 不妨事、還有二十八宿陣哩。擺開青龍白虎陣者。」
- 19 原文は「(兀顔受云) 您二將左右下攻、某當先去。(李金吾云) 元帥、俺殺將去來。(兀顔受・李金吾・戴真慶做入陣科) (公孫勝搖旗科) (正末同衆圍住三人科) (兀顔受云) 可怎生東南西北不知了、往那廂出去的是。(正末云) 兄弟每、休着走了這廝也。(唱) 【賞花時】“今日個難比交逢單戰爭、則見他來往慌張無處行。你可也難敵俺衆雄兵、你今日身亡在這地境、這一陣衆人驚。”(兀顔受云) 這事不中、我往空便處走走走。(下) (衆做拏賊戴真慶・李金吾科)」

結び

最後に、各章の内容について再度まとめておきたい。

第一部第一章では、北宋に仕えた楊業らをモデルとする楊家将物語が、どのように発生し、広く受け入れられるようになったかを概観し、その過程で史実とどのように関わってきたのか考察を行った。また、小説『楊家府世代忠勇通俗演義傳』に見える様々な要素や、現在にまで伝わる演劇の世界での発展についても分析した。これらを通して見ることで、本来は史実を基礎として生まれた楊家将物語が次第に史実から乖離し、歴史小説という枠組みから放たれて民衆の手に渡り、演劇の世界において独自に発展してきたことが確かめられた。

第一部第二章では、楊業が北宋に仕えていた時期に比べてこれまで注目されることの少なかった、楊業が北漢に仕えていた時期について考察し、それと共に楊業の親族についても整理を行った。そこから、弟が父の跡を継いでいたために、楊業は家名を残すことに拘泥せず、宋への忠義に殉じて死を選ぶことができた結論付けた。

第二部第一章では、英雄・豪傑を話の中心とする楊家将雑劇の中でも、女性の果たす役割が比較的大きい「謝金吾」について考察した。そして、佘太君と長国姑という二人の女性の行動が、戦場で武勇を振るう現在の楊門女将とは別種であることを見出し、彼女らの活躍は楊門女将に先立つものではあるが、楊家将の物語が整理され、楊門女将の活躍が形成されていく過程における発展途上のものであると結論付けた。

第二部第二章では、「謝金吾」において重要な要素となっている“私下三関”に注目し、「謝金吾」における“私下三関”は忠と孝をはかりにかけた上で孝を優先させた行動となっているが、「黄眉翁」ではそれを忠と孝を両立させた形とするべく手が加えられていることを指摘した。また、“私下三関”型のモチーフが薛仁貴を題材とした雑劇中においても用いられていることから、楊家将の物語と薛仁貴の物語の関わりについても考察した。

第二部第三章では、楊家将雑劇である「昊天塔」や「開詔救忠」に描かれている、時に甚だ奇妙に思われる習俗が、実際の遼の習俗に基づくものであることを指摘した。そしてそこから、物語の設定に適した時代の習俗を取り入れた作者の遊び心を窺うと共に、観衆を引き付けるために趣向を凝らした作者の矜持を見出した。

第二部第四章では、まず楊家将物語と『水滸傳』との関わりについて述べられた先行研究について分析と補足を試みた。続いて、共に対遼戦争において特殊な陣が布かれるとい

う要素を持つ、楊家将雑劇の「破天陣」と水滸戯の「九宮八卦陣」を比較し、「九宮八卦陣」の方が冗漫な繰り返しを避け、より合理的に観衆にアピールできる形となっていることを指摘した。

これまで述べてきたことを振り返ると、楊家将物語と一言でまとめてきたものの、それが実に様々な要素を持つことに驚かされる。特に雑劇では、作品毎に独自の特徴を備えており、時に「楊家将」という要素そのものをすら霞ませてしまうこともある。しかし、やはり発端となる楊家将にまつわる物語に魅力があったからこそ、それを題材として新たな要素が加えられるということが行われてきたのだと思うのである。

一方で、頭の片隅で気掛かりとなっていたり、興味を引かれたりしながらも、本文の中で触れることができずに終わってしまった要素も少なからずある。小説に関しては主に『楊家府世代忠勇通俗演義傳』に基づいたが、本来ならば『北宋志傳』にも意識を向けるべきであった。演劇の分野では、現存する楊家将雑劇については一通り言及したものの、京劇などにはほとんど触れることができなかった。また、『水滸傳』や薛仁貴のみならず、他の作品との関わりについても更に視野を広げなければなるまい。これらについては、今後の課題として研究を続けていきたい。

資料：楊家将雑劇訳注

凡例

- 一、ここに訳注を示す一連の作品は、楊家将を題材とする元・明代の雑劇の中で現存するもの六種全てである。
- 二、テキストは、「黄眉翁」のみ『孤本元明雑劇』（中國戲劇出版社、一九五七年）を用い、他は全て王季思主編『全元戯曲』（人民文学出版社、一九九〇・一九九九年）を用いた。ただし、こちらで文字や句読点を改めた部分もある。
- 三、作品の配列は、おおよそ『楊家府世代忠勇通俗演義傳』における展開に従うこととした。小説に見えない内容を含むものについては、作中の設定を考慮した上で適当と思われる位置に置いた。

八大王開詔救忠臣

第一折

〔訳〕

(沖末が韓延壽に扮し蕃兵を連れて登場)

韓延壽

“北方の辺境では兵は強く雄々しさを誇示し
毎日山の下で威風をほしいままにする
黒い旗ははためいて雲に届くほど高く
むながいは丸く烈火のように赤い”

私は六蕃都教首大元帥の韓延壽でございます。祖先は北方の辺境雲州（山西省大同市）の者。私は辺境にこもり、長らく蕃地の奥深くにいたが、地は果てしない深山と連なり、黒河は波を起し水がうねる。馬は肥え弓は強く、将は勇敢で兵は屈強。誰もが上着を左前に着て、それぞれ髪を二つに束ねて垂らし、青い毛織物の笠は、千の池にある蓮の葉がそよ風に揺れるよう。雪のように白い皮衣は、一万の梨の花が明け方の日に映えるよう。我が配下には十万の兵士と、千人の将軍が駐屯している。昔大宋の軍が北の辺境を征伐しに来たので、我らが宋朝の将軍達を、幽州（河北省北京市）城内に包囲したことがあった。凶らずも楊令公の長男の楊大郎が、宋の帝に変装し、我ら諸将を騙して北門から出て、我らと戦った。我が軍は大勢おり、楊大郎は長槍で刺し殺され、楊二郎は短剣で殺され、楊三郎は馬に踏まれて泥と化し、楊四郎は行方知れずとなった。南門を開いて、あやつら将軍達は宋の帝を守って飛び出し、我らの大軍を突破した。それが我が心中において気掛かりな、忘れ去ることのできない恨みとなっている。私が再び大軍を率い、宋朝と戦えば、私の日頃の願いもかなう。そうではあるが、やはり我が配下の大将の土金宿を呼んで相談しよう。早朝に人を遣わして彼を呼びに行かせたが、まだやって来ない。これお前見張りをして、土金宿がやって来たら、私に知らせよ。

蕃兵 かしこまりました。

土金宿（浄が土金宿に扮して登場）

“髪を束ね二筋に垂らして嘘をつき
つやのある皮紐を腰に結ぶ

生臭く汚いので誰もが避けるが

汚い皮の上着を着て人を叩き殺す”

私は土金宿でございます。私めの人となりについて申せば、走るのが好きではないので、馬に乗る。することがなければ、山をぶらぶらと行く。馬は怒り、うずくまって、私をつまづかせたので、額をぶつけて割ってしまった。必死に起き上がれば、全身血まみれ。穴が空いたが、頭は痛くない。私が裏の山中で駱駝が木に登ってふざけているのを見て、韓元帥の遣いの者に呼ばれたので、何の相談かは知らぬが、一つ行かなくては。早くも着いたわい。これお前、おじさんがやって来たと知らせてくれ。

蕃兵 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) 元帥にお知らせします、土金宿どのが門前に来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

土金宿 元帥、参上致しました。どちらへ狩りに行かれるにしても、私を連れて行って下さい。

韓延壽 私は何事もなければお前を呼びはせぬ。大宋が軍を率いて我ら北蕃を攻めたので、私はあやつら將軍達を幽州城内に包囲したが、楊大郎が変装して我ら北蕃の将をあざむき、南朝の帝は救い出されてしまった。楊家の四人の將軍を除いたとはいえ、我ら北蕃の軍も多くが損なわれ、我が心中は安まることができない。私がこの度お前を呼んで相談するのは、大軍を率いて、宋朝の辺境を侵そうと思い、良い計略を考えたのだが、用兵がどのようになっているかと思ってな。

土金宿 元帥、私の思うところを申し上げます。あやつら父子はまことに英雄ですが、元帥はどのようにお考えですか。

韓延壽 思うに楊令公の父子は、勇猛さは人並み外れ、交戦するのは難しいので、智恵で戦うべきである。お前に三千の兵を授け、進軍して楊家の父子と野戦をさせる。両軍の間で、勝敗が着かなければ、お前はわざと負けて、勝ってはならぬ。武器や鎧を投げ出し、負けた振りをすれば、あやつはきっと兵を率いて追ってくるので、あやつら父子を騙して両狼山の虎口交牙峪に入れ、進退窮まらせ、私その後蕃將達と共に、百万の勇敢な兵を率いて、交牙峪を、鉄の桶のようにしっかりと包囲するのだ。あやつを内に兵糧無く、外に援軍無き状況にしてやれば、孤立して力は衰え、刃向かうこともできず、

羽が生えたとしても北蕃から逃げることはできない。この計略はどうだ。

土金宿 その計略は素晴らしく、きっとあやつらを始末できましょう。

韓延壽 土金宿よ、お前に三千の兵を授けるゆえ、両狼山の左右で待ち伏せし、楊令公を戦いに誘い込むように、気を付けて、計略通りに戦え。

土金宿 せがれよ、わかった、私が元帥となろう。

韓延壽 こやつめ、元帥は私で、お前は後ろにおり、成功して戻って来たら、私がその後お前と呼応して戦うのだ。

土金宿 韓元帥は理由も無く、私を後ろになさった。それでは、私は一つ行くとしよう。

“私が日頃だらしがないので
理由も無く私に戦わせる
南朝に捕まったなら
きっと私は殺される”（退場）

韓延壽 土金宿が楊令公を戦いに誘い込みに行ったので、必ずや私の計略に掛かるであろう。私は蕃将を率いて、土金宿と呼応しに、一つ行くとしよう。

“私は蕃兵を率いて鞍に跨り
金の矛と鉄の鎧はカチャカチャ鳴る
負けた振りをして計略を仕掛け
楊家の父子を蕃族の中に陥れる
あやつが深追いして交牙峪に入れば
私が兵を率いて両狼山を包囲する
猛将を捕らえる智謀は素晴らしく
名は天下に広まる
箱の中の宝剣は鋭い切れ味で
ひどく大宋の兵を恐れさせる”（退場）

殿頭官（外が殿頭官に扮して登場）

“忠実清廉にして宋の国境を守り
節操を持ち賢良さを明らかにする
朝廷に出入りして盛んに出世し
心から天に報いる”

私は殿頭官にして、宋朝を補佐しております。ただ今は優れた帝が位におられて、八方

は穏やか、四海は安らか、民は楽しく仕事をし、五穀は豊作、天下は太平である。潘仁美の要請に従って帝が幽州に入られると、蕃将の韓延壽が率いる百万の蕃兵により、幽州にて包囲された。しかし楊令公が四人の息子を犠牲にして、帝をお救いして東京へ戻った。この度代州（山西省代県）節度使が上表書により、帝に申し上げることには、この度北蕃の韓延壽が、蕃兵を率いて、代州の城を包囲しているという。私は帝の命を奉じ、太師の潘仁美を元帥に、賀懷簡と劉君期を副元帥にし、楊家の父子三人を先鋒に命じたので、北蕃の賊を討つことなど、何の難しいことがあろうか。私は今朝、潘仁美、賀懷簡、劉君期に、心して賊軍を討つように申し付けた。この度は、潘仁美と、楊家の父子三人の武勇により、必ずや蕃兵を撃退するであろう。勝利を収めて戻ったならば、彼らに厚く恩賞を与えて官位に封じるべきである。私はぐずぐずせず、帝にご報告に戻りに、一つ行かなければ。

“賊将や蕃兵が戦争を起こしているが
宋国に英雄がいることを知らないのか
楊家の父子は非常に勇ましく
永久に朝廷を守り太平を享受する”（退場）

八大王（兵士を率いて登場）

“鑾輿と静鞭がないだけで
王の車駕と変わりはない
御書と金簡を上着の袖に隠し
奸臣をひどく驚かせる奏事官”

私は八大王の趙德芳でございます。ただ今は大宋の優れた帝が位におられ、八方は無事、四海は安らか、五穀は豊作、万民は楽しく仕事をし、帝は聡明で臣下は賢い。思えばかつて三度河東へ出兵し、劉薛王を攻めた時、潘仁美が楊令公に矢を射られたことがあったが、後に楊家の父子八人は、我ら宋朝に投降し、国家を支え、功を重ねた。なんと潘仁美のやつめは無礼にも、矢で射られた恨みを忘れることなく、ひたすら楊家の父子を陥れようとしている。古くから「千人の兵を得ることは容易いが、一人の良将を得ることは難しい」という。あやつの要請で帝が幽州に入ったために、楊家の兄弟四人を失うこととなったが、帝は楊令公父子に兵を率いて、瓦橋三関を鎮守するように命じられた。この度代州節度使が、上表書により朝廷に申し上げることには、北蕃の蕭太后の部下である六蕃都教首の韓延壽が、軍を起こし、代州城を包囲しているという。今朝、帝の命

を奉じ、潘太師に印を授けて元帥に、賀懐簡と劉君期を副元帥にして、北蕃へ出陣させることにした。また一方で瓦橋三関へ使者を送り、楊令公ら父子三人を先鋒として、共に蕃兵を征伐するよう命じた。私はぐずぐずせず、帝にご報告しに、一つ行かなければ。

“勅令を奉じて伝えることは休みなく

楊家父子は全軍を統率せよ

蕃兵を捕らえたならば必ず殺し

勝利を収めて凱旋すれば天下は安らか”（退場）

（潘太師が浄の扮する賀懐簡・劉君期と共に陳林・柴敢・兵士を連れて登場）

潘太師

“狡猾な悪智恵を腹の中に秘め

一心に忠良を損なおうとする

ご恩を蒙って爵位を賜り高位に就き

笠に着てずるい讒言を用いて強い志を明らかにする”

私は姓を潘、名を仁美といい、太師の職を受けております。この二人は国舅の賀懐簡と、劉君期である。ここには誰もいない。私は日頃から賢く、忠良の士など認めない。楊家の父子は、まことに恨めしい。思えばかつて河東に出兵した時、楊令公のやつめが、私を矢で射たが、この矢の恨みは、まだ晴らしていない。私は天に誓おう。私が軍権を手にしたならば、あの楊家の父子を、根絶やしにしてこそ、私の日頃の願いもかなうというもの。私が奸計を用いて、帝に幽州へ入って頂くと、蕃将の韓延壽が、百万の大軍を率いて、幽州を水も漏らさぬ程に包囲したことがあったが、楊令公は四人の息子を犠牲にし、帝を救って東京へ戻った。この度代州から知らせがあり、韓延壽には幽州を捨てないという様子があり、兵を率いて代州の城を包囲しているとのこと。帝の命を奉じ、私は印を授けられて元帥となり、二人の国舅は副元帥となり、私は八大王に対し楊令公を先鋒とするよう求めたが、私はあの老いぼれを殺して、河東での矢の恨みを晴らすことを考えているのだ。しかし凶らずも八大王は呼延贊を監軍とし、楊家の父子を守らせている。私は自ら兵を率いてここに到着し、蕃兵と三度戦ったが、ほとんど功績を挙げることもできず、却って三度敗れてしまった。楊家の父子はまことに無礼で、先鋒に命じたのに、今になってもやって来ず、もしやって来たならば、決して許しはせぬ。この機に乗じ、あやつら父子三人を、皆殺しにすることが、私の日頃の願いだ。お前達二人の副元帥は、どのように考えるか。

賀懐簡 元帥の仰る通り、あの老いぼれなど、何程のものでしょうか。あやつの遅参は、軍令に照らし合わせれば斬首にするべきであり、あやつら父子を亡き者にすることは、何も難しくはありません。

劉君期 よしよしよし、それならば、きっとあやつら父子を殺してしまおう。元帥がこのように良きお心をお持ちであるので、天もあなたに良い思いをさせてくれましょう。

潘太師 それならば、これお前門前で見張りをし、もし軍事情況に関わるのであれば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

呼延贊（登場）

“意気盛んな英雄は世に並ぶ者無く
箱の中の宝剣は冷たい光をほとぼしらせる
手中の鉄鞭を軽々と振り回し
佞臣をたちまち亡き者にする”

私は総管の呼延贊でございます。八大王様の命を奉じ、監軍趨運糧草使を務めており、道中の糧秣は、全て私が調達する。八大王様のお考えは楊家の父子が、潘仁美から恨みを買っているの、私に楊家の父子を守らせようというのであろう。この度潘仁美は蕃兵と戦ったが、立て続けに三度敗れ、楊家の父子がまだ到着していないことから、恐らく潘仁美は彼ら父子を問い詰め、忠臣を亡き者にするつもりであろう。私が今から潘仁美と会えば、後から楊家の父子が到着しても、私がここにいるのであるから、心配はない。早くも着いたわい。これお前、呼延贊がやって来たと知らせてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、呼延贊どのが来られました。

潘太師 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

（まみえるしぐさをする）

潘太師 総管よ、そなたの道中での、糧秣の調達はいかがであったか。

呼延贊 道中の糧秣は、全て大本営へ運びました。

潘太師 よしよしよし、総管は座られよ。これお前門前で見張りをし、誰かがやって来たならば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

（楊令公が正末の扮する楊景・七郎と共に登場）

楊令公

“武威は辺境の関を震わせ氣勢は雄々しく
忠義の心を明らかにして元帥を務める
箱の中にある三尺の鋌鍔の劍は
永久に国土を守り大功を立てる”

私は楊繼業と申し、火山（山西省河曲県）の楊滾の子であります。兵法の書を広く知り、軍を並べる方法に精通している。以前は劉薛王の配下の将であり、平、定、光、輝、昭、朗、嗣という、私の七人の息子と、共に君主の劉氏をお助けしていた。私は金刀大將軍、智勇無敵都総管、兵法教授楊令公の官を与えられた。潘仁美が三度河東を攻めた時、私の矢によって左腕を射られ、宋将に救い出されたということがあった。後に宋朝が勇猛な大軍を率いて、河東を包囲し、水攻めにして我が劉薛王を破った。大宋の帝は、我ら父子八人を招安して朝廷に入れ、共に国家を支えるよう、私を鎮国大將軍の職に任ぜられた。宋に降って以来、大功を重ねてきた。幽州の大戦で帝をお救いした後、我ら父子は半分を失った。詔により我らに清風無佞楼が贈られ、上には三代の帝の御書が掛けられており、官吏達は、楼の前にやってくると馬から下りる。我が名は天下に広まり、王朝の綱紀は大いに盛んになる。潘仁美はまことに無礼で、常に矢の恨みを覚えていて、今になっても捨てずにいるのが困ったことである。この度帝の命を奉じ、北蕃が韓延壽を元帥とし、百万の蕃兵を統率し、国境を侵して戦乱を起こしているの、帝は将を選んで出陣させたが、潘仁美に印を授けて元帥とし、私を先鋒とされた。私はこの度は潘仁美の配下で命令に従うのであるが、息子達よ、どうすれば良いであろうか。

楊七郎 父上兄上、あの老いぼれは常に矢の恨みを覚えていて、今になっても捨てずにいます。しかし我ら父子の功績を考えれば、また八大王様の令旨により、呼延贊どのが我ら父子を守って下さるので、父上はご心配には及びません。

楊景 父上、弟の言う通りです。全軍を点呼し、陣營を引き払って出発し、真っ直ぐ代州へ向かい、蕃兵を討ち取りに、一つ行くとしまししょう。思えば我ら父子は東西に掃討し、南北に征伐し、度々国家のために力を尽くしてきた。（唱う）

【仙呂・點絳脣】

“我らはしかと皇朝を補佐し
宗廟を守り
我ら一家は忠孝を行い

まことに功績を立てた”

楊令公 息子よ、思うに将たる者は、四海に名を広め、後世に伝えられるものである。

楊景（唱う）

“永久に人々から称えられる”

楊令公 思えば我ら父子がひたむきに激しく戦い、首級を掲げて投げつけ、生き血を口に含んで吹き付けて、宋の国土を守り、盤石に勝利を取めてきたのは、一日の働きではない。

楊景（唱う）

【混江龍】

“我らはこの度ぎっしりと兵士を並べ
昼夜を問わず苦勞も辞さない”

楊令公 臣たる者は必ずその忠義を尽くし、子たる者は必ずその孝行を尽くすものだ。

楊景（唱う）

“我らはこの度一門を挙げて忠節を尽くし、広く青史に名を記す”

楊令公 我ら父子は力の限り忠義を尽くし、蕃兵を殺して鎧の欠片すら帰しはしない。

楊景（唱う）

“我ら父子は忠心を持って国家を助け、蕃兵を恐れず槍や刀を振るう
的を倒すことを口にするだけでも、我らはまことに気が高ぶる”

楊令公 我が軍の兵は強く将は勇敢であるから、蕃兵など何程のものか。

楊景（唱う）

“我が軍の兵は勇敢であり、道程の遠さもいとわない”

楊七郎 兄上、我ら父子の勇名をもってすれば、蕃兵など赤子同然です。

楊景 弟よ、蕃兵など、何程のものであろうか。（唱う）

【油葫蘆】

“無礼な蕃兵などちっぼけな草同然
我らはあやつらと戦おう”

楊令公 いかんせん私は年老いてしまった。

楊景（唱う）

“父上あなたは年老いてもなおよく戦況を見通される”

楊令公 六郎よ、我ら父子は勇気を奮って先頭に立ち、必ずや蕃兵を破って捕らえてくれ

よう。

楊景（唱う）

“我ら兄弟のように勇敢な英雄は天下に少なく
あやつら蕃兵の肝っ玉の大きさなど話にならない
隊列を組んで、将校を走らせる”

楊令公 楊景よ、この父が出陣し、蕃兵を殺して進退窮まらせてやろう。

楊景（唱う）

“我ら楊家の父子が策略を用いるのをご覧あれ
あやつらをたちまち荒野にて命を失わせてやろう”

楊令公 我が軍は勇敢であり、我ら父子が先頭に立てば、あやつらを殺して鎧の欠片すら
帰さないことであろう。

楊景（唱う）

【天下樂】

“我らはこの度蕃兵を大いに殺し
どうして軽々しく見逃したりしようか
私が考えるに
今から両軍がぶつかれば”

楊令公 我らの刀や馬や武芸にかかれば、あやつらは散り散りになり、子を呼び父を尋ね
ることになろう。

楊景（唱う）

“乱れ飛ぶ土煙が旗を揺らし、じわじわと陣羽織は血に染まり
あやつらを呻かせて逃げ場の無いようにさせてやろう”

楊令公 楊景、七郎よ、命令を伝えて、軍をまとめ、代州へ、潘太師に会いに、一つ行く
としよう。（一回りするしぐさをする）

楊七郎 兄上、代州までもう遠くありません。全軍急げ。

楊景 父上にお知らせします、代州に到着しました。日当たりの良い場所で、軍を留め、
我ら父子三人は、元帥に会いに行きましょう。

楊令公 お前の言う通りだ。帥府の門前に着いたわい。これお前、先鋒の楊令公が、兵を
率いて元帥に会いに来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、先鋒の楊令公が、兵を率いて元

帥にお会いしに来ました。

潘太師 話も終わらない内に、あやつら父子がやって来おった。これお前、処刑人を用意してから、あやつらを通せ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(楊令公が正末の六郎・七郎と共にまみえるしぐさをする)

楊令公 元帥、先鋒の楊繼業父子三人が参りました。

楊景 元帥、我らは剣と鎧を身に着けているので、礼をすることができません。

賀懷簡 元帥、こやつらは、我らに会っても礼をせず、まことに無礼です。

潘太師 この老いぼれめが、お前は自分の罪がわかっているのか。

楊令公 私に何の罪が。

潘太師 黙れ。老いぼれめが、何の罪かわからないならば、おまえに尋ねよう。私とお前どちらが偉いのだ。

楊令公 元帥の方がお偉く、先鋒の私の地位は低うございます。元帥はどうしてそのようなことを言うのですか。

潘太師 私は大元帥であり、先に兵を率いてここにやって来て、蕃兵と何度も戦った。しかしお前は一介の先鋒でありながら、今頃やって来た。そこな軍政司よ、先鋒が会合の日に遅れ、戦いを避けたならば、何の罪になるのだ。

兵士 元帥、先鋒が命令に背き、会合の日に遅れたならば、斬罪に処されます。

潘太師 それならば、これお前こやつら父子三人を、轅門へ引っ立てて、斬首したら知らせよ。

兵士 かしこまりました。(兵士が三人を捕らえるしぐさをする)

楊景 (令公と共に叫ぶしぐさをする) 濡れ衣でございます。

劉君期 楊さんよ、やたらと訴えているが、訴えているのはお前達三人だけじゃないのか。昔から「死んでしまえばそれよりひどい災難は無い」という。おとなしく刀を喰らい、首級をその辺に放り出せば、飯を食う手間も省けるだろう。

楊令公 我らは本当に濡れ衣なのです。

潘太師 これお前、その老いぼれを引っ立てて来い。

兵士 かしこまりました。(兵士が令公を引っ立てて目通りさせるしぐさをする)

潘太師 こやつめ、何か言いたいことがあるのか。

楊令公 我ら父子三人は会合の日に遅れたわけではありませんので、元帥にはどうかお情

けを。

劉君期 元帥、あやつと話などせずに、引っ立てて殺してしましましょう。

楊令公 呼閣下、取り成して、我ら父子をお救い下され。

呼延贊 待たれよ。元帥、楊家の父子は、会合に遅れたわけではないので、ひとまずこの度は許しておくことにして、何がいけないのでしょうか。

潘太師 総管、このことは許すことはできぬ。これお前斬首したら知らせよ。

呼延贊 (怒るしぐさをする) 元帥、私は八大王様の命を奉じ、楊家の父子を守っているが、そなたが今から彼らを殺そうとするならば、私は許しはしない。私は真っ直ぐに東京へ戻り、八大王様にお知らせしよう。あの方の金簡が、そなたを許すかどうかわかっておろうな。

潘太師 わかったわかった、総管の面子を考え、ひとまずお前達を許すでしょう。再び軍令に背いたならば、必ず首を斬るからな。

楊令公 元帥がお許し下さったご恩に感謝致します。

楊景 (唱う)

【那吒令】

“あやつは威張り散らして意気盛ん

我らは何とか言い逃れ平伏して縮こまる”

楊令公 まことに腹立たしいことだ。

楊景 (唱う)

“見れば我が老父は怒りに倒れんばかり

期限を誤ったこともなく、背いたこともないのに

どうして法を犯したことになるのか”

潘太師 この老いぼれめ、許すことは許すが、はっきりと言っておくぞ。私は元帥で、お前達父子三人は、先鋒であり、「先鋒は、どこでも先行する」というではないか。私は軍を率いて、先にここへやって来て、蕃兵と何度も戦ったのに、お前達父子は今頃やって来て、刀を恐れ矢を避けており、もし私が総管の面子を考えなければ、とっくにお前達を斬首していたぞ。

劉君期 もし呼どのの面子を考えなければ、今頃は死んで葬る地もない身になっていたぞ。

楊さんよ、どうして早く元帥に会いに来なかったのか、本当のことを話せ。お前の言うことが正しければ、私は一瓶の酒を買って、お前を慰めてやろう。話してみろ。

楊令公 元帥は東京より出陣しましたが、我ら父子三人は、瓦橋三関より出陣し、元帥と約束したわけでもなく、軍令もなかったのに、どうして我らが遅参したことになるのでしょうか。我ら三人を冤罪で殺すことになりませんか。

潘太師 この老いぼれめが、不忠不敬にも、このように言葉巧みに言い逃れおって、本来ならば斬首にするところだが、しばらく罪を見逃してやる。再び罪を犯したならば、決してお前達父子三人を許しはしないぞ。

賀懐簡 元帥の言う通り。今後ゴマ一粒ほどの罪でも犯したならば、皆殺しだ。

楊景 (唱う)

【鶴踏枝】

“我が怒りは天を突き

自ら推し量れば

まことに怒りで胸が張り裂けそうで、憤りは消し難い

いわれもなく悩まされ

どうしてこのようなごろつきを許すことができようか”

潘太師 これ楊繼業よ、お前達父子はどのような武芸があり、どのような兵書を読んで、我が軍令に背いたのだ。

呼延贊 楊令公よ、お前達父子がどのように兵を率いて陣を布くのか、元帥に、一つ話してみよ。

楊景 (唱う)

【寄生草】

“戦場に臨み、戦上手であることについて申せば

兵を率い陣を布いて将校を走らせることでも

旗を奪い太鼓を破って計略を用いることでも

更には互いに対峙することでも何でもござれ”

潘太師 大將軍であるこの私には周囲を圧する威風があり、お前達父子三人など、何程のものか。

楊景 (唱う)

“將軍に周囲を圧する虎狼のような威風があることはさて置き、我ら楊家の父子が忠孝を備えていることをお知りになるべきである”

潘太師 これ楊繼業よ、我が軍令を聞け。お前に三千の軍を授けるゆえ、明日蕃兵と戦い、

勝ったならば、功で罪を補わせよう。負けたならば、遅参と敗戦の両方の罪を罰する。

楊令公 元帥に申し上げますが、明日は十悪大敗の日で、また悪日でもあり、出陣するべきではありません。兵を起こしたならば、必ずや敗れるでしょう。どうか元帥には吉日を選び直して頂き、ご判断を誤ることのなきよう。

潘太師 この老いぼれめが、「朝廷では帝の命に従い、門を出れば將軍の命に従う」というのに、お前は自分勝手にするのか。出陣するなら良いが、出陣しないのならば、お前のような老いぼれは、轅門にて斬首にしてくれよう。

劉君期 楊のじいさんよ、お前はただ元帥の命に従えば良いのであり、たとえ敗れたとしても、蕃族の軍がお前達三人を捕らえて行ってしまふから、まさしく太鼓を叩いて疫病を追い払うように、仇が目の前からいなくなるだけだ。

楊令公 六郎、七郎よ、この出陣はきっと不利であるぞ。

楊景 父上、元帥が聞き入れて下さらないからには、いずれにせよ明日蕃兵と対陣しに行きしょう。(唱う)

【尾聲】

“我らはこの度力を尽くして朝廷に報い
大将となって辺境へ向かう”

楊令公 私の考えでは、十悪大敗ならば、出兵するべきではない。

楊景 (唱う)

“兵馬を率いて悪日に出発し
字も知らぬこの元帥は性根が悪く、我ら父子を根絶やしにしようとする”

楊令公 息子よ、あやつが軍権を握っているからには、命令に従って行くしかあるまい。

楊景 (唱う)

“我らは英雄豪傑を頼みとし
いつの日か青空の下で志を得よう”

楊令公 わざと我らを悪日に出陣させ、我ら父子を殺そうという考えであらう。

楊景 (唱う)

“あやつは腹いっぱい恨みを晴らすつもり”

楊令公 今辺境の関にいるのは、皆こやつら奸臣の賊であり、戦乱を平定して危機を除くことなどでできず、却って我が国に侵入される事態を引き起こすであらう。

楊景 (唱う)

“ただ今の辺境の関は騒がしく
敵の情勢が伝えられている”

楊令公 私はあやつらを打ち破り拱手して降伏させよう。

楊景（唱う）

“私はあの蕃兵どもに我が朝廷に向かって礼儀正しく拱手させよう”（退場）

楊令公 我ら父子三人は、元帥の軍令を奉じ、兵を統率して韓延壽と戦いに、一つ行くとしよう。

“威風雄々しく武器を操り
両軍相対して千回戦う
今私が英雄たる手を少し広げたならば
死体は千里に横たわり血の河が流れる”（退場）

潘太師 あやつら父子三人は行ってしまったわい。呼將軍よ、今大勢の兵馬がここにいるが、後から運んでいる糧秣がまだ届かないので、ご苦勞だが総管に一つ運搬を催促してもらおうと思うが、いかがであろう。

呼延贊 それならば、私は糧秣の運搬を催促しに、一つ行くとしよう。

“楊六郎父子は忠義を尽くし
宋国のために力を尽くして功を立てる
潘仁美は心に恨みを抱いているので
大王様にまみえ奸雄について申し上げよう”（退場）

潘太師 呼延贊は行ってしまったわい。二人の国舅よ、明日は確かに悪日であるが、あの楊家の父子は強い。私があやつらを出陣させ、狙い通り蕃兵があやつらを包囲したならば、きっとあやつらの息子らは陣を突破して援軍を求めに来るであろうから、一人がやって来たならば、一人を殺し、二人がやって来たならば、二人とも殺して、父子三人を、皆殺しにすれば、私の日頃の願いもかなうというもの。何事も無いので、二人の国舅よ、奥の陣幕へ酒を飲みに行くとしよう。

“楊令公は槍と矛を持った兵を率い
出陣すればとどまることを知らない
命令に背いたならば必ず首を斬り
河東での矢の恨みを晴らしてやろう”（共に退場）

〔注〕

- 顯耀…才を示すこと。「貶夜郎」(元刊本) 第四折【後庭花】「翰林才顯耀徹、酒家錢還報徹(翰林の才を存分に示し、酒代も払い切った)」。
- 逐朝…毎日。「逐」は毎・各の意。宋方壺【一枝花】套「妓女」【梁州】「逐朝價密約幽期、毎日價弄盞傳杯(日ごとに忍び逢い、杯を酌み交わす)」。
- 招颺…旗やのぼりがはためく様。「梧桐雨」(古名家本) 第三折【新水令】「五方旗招颺日邊霞、冷清清半張鑾駕(軍旗が帝の傍にてはためき、お車は寂しき様子)」。また『劉知遠諸宮調』卷一【六幺令】後の【尾】に「飄飄招颺任風吹、布望高懸長三尺(ひらひらと風に吹かれてはためく、高く掲げられた三尺の酒屋ののぼり)」とある。
- 六蕃…「六蕃」に同じ。六種の蕃族ということであるが、特に唐代において北方の異民族の総称とされていた。『新五代史』卷三十六「李存信傳」「存信少善騎射、能四夷語、通六蕃書(李存信は若くして騎射に優れ、四夷の言語を解し、六蕃の書に通じていた)」。
- 黒河…同名の河は幾つかあるが、ここでは檀州(河北省密雲縣)の北を流れる河か。
- 懸懸…気掛かり、心配する様。「望江亭」(息機子本) 第二折、白士中の白に「我也恐怕他害我、毎日懸懸在心(私はあやつに殺されるのではないかと、毎日心配している)」とある。
- 刺場…汚い、だらしが無い。校記は現代語の表記である「邈邈」に改めるが、「撮撮」「刺搭」という表記もあり、改める必要はないであろう。曾瑞【哨遍】套「羊訴冤」【尾】に「我如今刺搭着兩個薦耳朵(今やだらりとなったこの両耳)」、また『白兔記』(成化本) 第三出【降黄龍】に「落腮鬚、撮撮鬚(濃いあごひげ、ひしゃげた口(?)をしておられる)」とある。
- 在下…自称の謙讓語。「盆兒鬼」(元曲選本) 第一折、店小二の白に「在下店小二的便是(私めは店のおやじでございます)」とある。
- 抹鄰…蒙古語 *mori(n)* の音写。漢訳は「馬」。「秣驪」「抹倫」「母麟」「母隣」「秣隣」にも作る。「哭存孝」(内府本) 第一折、李存信の登場詩に「米罕整斤吞、抹鄰不會騎(肉を一斤食べて、馬にも乗れず)」とあり、「黒旋風」(脈望館本) 楔子、白衙内の退場詩に「火爐店上等着你、跳上抹鄰一道煙(宿屋でお前を待ち、馬に飛び乗り一目散)」とある。
- 可罕…蒙古語 *qahan* の音写。元々は北アジア遊牧国家における君主の称号であり、元代には「皇帝」と漢訳された。「可汗」「可干」「可寒」「合汗」「哈罕」「匣罕」「蛤安」にも作る。「漢宮秋」(元曲選本) 楔子、呼韓耶單于の白に「獯鬻玃狁、逐代易名、單于可汗、

隨時稱號（獯鬻・玃狁、代々名を変え、単于・可汗、時に従い名乗る）」とある。

- 天朝…朝廷の尊称。「謝金吾」（元曲選本）第三折【聖藥王】「遮莫你有勢力、有職位、到底是我天朝部下潑奴婢（たとえお前に権勢があり、地位があっても、所詮は我が朝廷に仕える召使いではないか）」。
- 長兵野戰…長い道程を進軍して野戦をする。「灑池會」（内府本）第三折【滾繡毬】「則俺那廉將軍有勇氣善野戰長驅（我が方の廉將軍は勇氣があり長征して野戦をするのが得意）」のように、「野戰長驅」という表現も見られる。
- 佯輸詐敗…わざと負けた振りをすること。「馬陵道」（脈望館本）第四折、袁達の白に「軍師用計馬陵山下、減竈添兵、詐敗佯輸（軍師は馬陵山で計略を用い、かまどを減らして兵士を増やしつつ、負けた振りをさせた）」とある。
- 進退無門…進退窮まること。「去住無門」にも作る。「介子推」（元刊本）第四折【禿廝兒】「您這火林外前後有軍、深山里進退無門（あなた方がこの火の海の前後に軍を置いたので、山の奥深くで進退窮まった）」。
- 鐵桶…包囲が堅固な様を喩える。『三國志平話』卷上に「見呂布鐵桶相似、張飛着力殺上血湖洞入去、到於城中（呂布の包囲が鉄の桶のように堅いを見て、張飛は力の限り血路を開き、城内へ入った）」とあるなど、用例多数。
- 合後…後備え、後詰め。「小尉遲」（内府本）第一折、劉無敵の白に「我如今做着前部先鋒、俺父親合後接應我（私が今から先鋒となり、我が父は後から合流する）」とある。『水滸傳』（容與堂本）第七十六回では呼延灼が「合後大將（後詰めの大將）」と呼ばれている。ただし、この場面では土金宿はおとりになるのであるから、別働隊のような意味合いで用いられているか。
- 接應…呼応して支援すること。「薛仁貴」（元曲選本）第一折、高麗王の白に「孤家不免點起傾國人馬、隨後接應（私は国中の軍を挙げて、後から援軍に駆け付けよう）」とある。
- 好沒生…いわれなく。理由も無しに。「岳陽樓」（古名家本）第三折、郭馬兒の白に「好沒生與我一口劍、教我殺了俺媳婦兒（いわれもなく私に一振りの劍を与え、私に妻を殺させようとする）」とある。
- 哈喇…蒙古語 **ala** の音写。漢訳は「殺」。「哈刺」「阿刺」にも作る。「勘頭巾」（古名家本）第四折、王知觀の白に「饒便饒、不饒把俺兩口兒都哈喇了罷（許すなら許し、許さないなら我ら二人を殺せ）」とある。
- 響珊珊…身に着けた玉や鈴などが鳴る音の形容。「梧桐雨」（古名家本）第二折【紅芍藥】

- 「玉佩丁東響珊珊（おびだまはカチカチと鳴り響く）」。
- 機謀…戦略、計略のこと。「單刀會」（元刊本）第一折【賺煞尾】の入れぜりふに「施窮智力、費盡機謀（智力を振るい、計略の限りを尽くす）」とある。
- 宇宙…世界、天下の意。「氣英布」（元刊本）第三折【柳青娘】「楚項籍天喪宇宙、漢中王合霸軍州（楚の項籍は天がその国を滅ぼし、漢中王は軍州に覇を唱えるであろう）」。
- 吹毛…刀劍の鋭さを形容して、吹き付けた毛でさえ切れるという表現が多く見られる。「氣英布」（元刊本）第一折【金盞兒】「料應把那口吹毛過的劍先磨（きっとあの鋭い劍を前もって研いでいたのでであろう）」。また『水滸傳』（容與堂本）第十二回、楊志の白に「第一件砍銅剝鉄刀口不捲、第二件吹毛得過、第三件殺人刀上沒血（第一に銅や鉄を切っても刃が痛まず、第二に毛を吹き付ければ通り過ぎ、第三に人を殺しても刀に血が付かない）」とある。
- 殿頭官…宮廷の侍従の官。『水滸傳』（容與堂本）第一回到「當有殿頭官喝道、有事出班早奏（その時殿頭官が呼びかけるには、「何事かあるならば列を離れて早く申し上げよ）」とある。
- 金門…漢代、未央宮にあった金馬門のこと。転じて広く朝廷のことを指す。「望江亭」（元曲選本）第一折、白士中の登場詩に「昨日金門去上書、今朝墨綬已懸魚（昨日は朝廷に行って上書をし、今朝は黒い印綬に魚袋を掛ける）」とある。
- 樂業…楽しんで仕事をする。仕事に安心して従事する。「七里灘」（元刊本）第三折【四煞】「爲民的樂業在家内居、爲農的欣然在壟上耕（庶民は家の中で楽しく仕事をし、農民は喜んで丘の上を耕す）」。
- 賊寇…賊軍。また侵入して来た敵。『三國志演義』二十六回、關羽の白に「關某願施犬馬之勞、破汝南賊寇（私は犬馬の勞を致して、汝南の賊を平らげたく思います）」とある。
- 鑾輿…皇帝の車。また皇帝自身。「楚昭王」（元刊本）第三折【紅繡鞋】「那裡問不分世事指斥鑾輿（どうして世間知らずにも皇帝たる私を退けるのか）」。
- 靜鞭…朝会の際に静肅の合図として地を叩いて鳴らす鞭。「淨鞭」にも作る。「單刀會」（元刊本）第三折【醉春風】「一個短劍一身亡、一個淨鞭三下響（一人は短劍の下に身を滅ぼし、一人は鞭を三度響かせる身となった）」。
- 趙德芳…八大王について、『北宋志傳』では名を德昭として太祖の子であるとし、『楊家府』では名を德崇として太祖の兄の子であるとする。また「抱妝盒」（元曲選本）では本劇と同じく名を德芳とするが、時代設定が眞宗の代であるためか、眞宗の弟とされてい

る。

○三下河東…河東は山西の黄河より東の地、また特に太原を指す。北漢の版図。『楊家府』では建隆元年（九六〇）、開宝九年（九七六）、そして改元した太平興国元年（九七六）の三度に渡り北漢征伐が行われている。

○劉薛王…北漢の第三代皇帝、劉繼恩（？～九六八）のことか。父である薛釗は一介の兵士であったが、第二代皇帝の劉鈞（九二六～九六八）の妹を娶って繼恩が生まれ、後に繼恩は子が無かった劉鈞の養子となった。「劉薛王」という呼び名は以上の経歴に由来する可能性がある。しかし『南宋志傳』においては初代皇帝の劉崇（八九五～九五四）が薛王を名乗っており、本劇でも劉崇を指すとも考えられる。なお史実では、北漢が宋に降伏した時点での皇帝は第四代の劉繼元（？～九九二）であるが、『楊家府』では一度目の征伐時に劉繼恩が皇位にいることが記されているものの、宋に降伏した時点で皇位が劉繼元に移っているかどうかは明言されていない。また『楊家府』では、薛釗の死後に劉氏は何元業に嫁いで繼元と繼業を生み、二人とも劉鈞の養子となっており、すなわち楊繼業は劉繼元の弟であるとされているが、『宋史』卷二七二「楊業傳」によれば楊業の父は楊信である。

○千軍易得、一將難求…多くの兵を得ることは容易いが、一人の良い将軍を得ることは難しい。「謝金吾」（元曲選本）第三折にも見える他、「楚昭公」（元曲選本）第一折【寄生草】では「要得千軍易、偏求一將難」という形で見える。

○一壁廂…一方、向こうの意。「一壁」ともいう。「鐵拐李」（元刊本）第三折【梅花酒】「一壁廂官司將門擊、一壁廂衣食催逼（一方ではお役所の者が門を叩き、また一方では衣食が差し迫る）」。また「博望燒屯」（元刊本）第二折、諸葛亮の白に「一壁去、不用你（あっちへ行け、お前を用いはしないぞ）」とある。

○瓦橋三関…三関については、「昊天塔」（元曲選本）第一折や「謝金吾」（元曲選本）第二折に、梁州の遂城関（河北省徐水縣）、霸州の益律関（河北省霸州市）、雄州の瓦橋関（河北省雄縣）とある。

○班師…凱旋すること。『大宋宣和遺事』元集に「朝廷出師討方臘、至擒臘班師、凡四百五十日（朝廷が出兵して方臘を討ち、方臘を捕らえて凱旋するまで、およそ四百五十日であった）」とある。

○僥倖…文言とは異なり、ずるいことをいう。「僥幸」「狡幸」などにも作る。「三奪槩」（元刊本）第四折【鮑老兒】「那凶頑狠劣、奸滑狡幸、則待篡位奪權（あのまがまがしい悪辣

さ、ずる賢さで、帝位を奪おうとしていた)、「後庭花」(古名家本)第三折【新水令】「憑着我懶劣村沙、誰敢道僥倖奸猾(私が剛直であるので、誰もずる賢いことをしようとはしない)」など。

- 國舅…皇帝の外戚。『宋史』卷二四二「眞宗章懷潘皇后傳」によると潘美の八女が眞宗に嫁いでいるが、本劇において賀懷簡と劉君期が國舅と呼ばれている背景は不明。
- 跟前…「～跟前」で、～に対して、～に向かつての意。「根前」にも作る。蒙文直訳体における「～跟底」や「～行」と同じく格助詞の機能を持ち、異民族の言語から中国語に流入したものとされる。「氣英布」(元刊本)第一折、英布の白に「我根前下説詞那(私に向かつて弁舌を振るうつもりか)」とある。
- 半根兒折箭…功績の少ないことをいう。「氣英布」(元曲選本)第二折、隨何の白に「在漢王根前説你初來歸降、未有半根折箭功勞(漢王の御前にそなたは投降したばかりで、まだわずかな功績もない)」とある。
- 叵奈…「叵奈」「叵耐」に同じ。許せない。憎らしい。「連環計」(息機子本)第三折、呂布の白に「叵奈這老賊無禮、你強要了貂蟬、更待干罷(あの老いぼれは無礼にも、貂蟬を横取りするとは、ただでは済まさぬ)」とある。
- 天也與你半碗飯喫…良い心掛けによって天がわずかばかり良い思いをさせてくれる、という表現。「勘頭巾」(古名家本)楔子などにも用例がある他、「燕青博魚」(元曲選本)第三折、王臘梅の白では「憑着我這一片好心、天也與俺這條兒糖喫(私のこの良い心によって、天も飴を食べさせて下さった)」という表現も見られる。
- 慷慨…意気が激しく高ぶる様。「千里獨行」(脈望館本)第二折【梁州】「他端的忠直慷慨(彼はまことに忠義の者にして意気盛ん)」。
- 監軍攢運糧草使…糧秣の運送を司る官であろう。「攢運」は運搬、運送の意。『水滸傳』(容與堂本)第七十六回に「一應接續軍糧、並是高太尉差人攢運(あらゆる糧秣の継続輸送は、全て高太尉が人を遣わして運搬させる)」とある。
- 邊關…辺境の要所。国境の関。「霍光鬼諫」(元刊本)第四折【雁兒落】「邊關事明日提、早朝把君王諫(辺境のことを明日取り上げ、早朝に君主をお諫めしよう)」。
- 耿耿…明らかな様。「范張雞黍」(元刊本)第三折【上馬嬌】「人道你英魂耿耿將咱侯(人々はそなたの魂が明らかで私を待っていると言う))」。
- 元戎…司令官や元帥のこと。「三奪槩」(元刊本)第一折【油葫蘆】「比及武官砌壘個元戎將、文官掙揣個頭廳相(武官が壇を築いて総大将となり、文官が宰相の位をつかみ取る

までに)」。

- 鋌鋸劍…名刀、宝刀のこと。「鋌鋸」は「昆吾」にも作り、西方にある山の名で、そこで造った刀は非常に鋭く玉を断ち切ることができたという。「單刀會」(元刊本)第二折【煞尾】「怒拔鋌鋸壞文醜(怒って刀を抜き文醜を討ち取った)」。
- 皇圖…王朝の版図。「老君堂」(内府本)第四折【收江南】「保皇圖一統萬年興(国土を保ち統一して一万年栄えさせよう)」。
- 楊滾…『宋史』卷二七二「楊業傳」は楊業の父を楊信とする。
- 水淹…水攻めにすること。「博望燒屯」(元刊本)第二折【採茶歌】「一半火燒得沒、一半水淹得無(半分は火攻めにやられ、もう半分は水攻めにやられた)」。「楊家府」や『北宋志傳』では、北漢征伐の際に水攻めが行われたという記述は見られないが、『續資治通鑑長編』卷十、開寶二年三月から閏五月にかけて、汾水の水をせき止めて太原城に注いだことが見える。なお、『南宋志傳』第三十四回において、楊繼業が汾水の水をせき止めて後周軍を水攻めにするのは、これの意趣返しであろう。
- 寰海…天下、全世界。『水滸傳』(容與堂本)第十一回、朱貴の白に「既有柴大官人書緘相薦、亦是兄長名震寰海(柴の大旦那様から推薦状がある上に、あなたのお名前は天下に鳴り響いています)」とある。
- 在上…呼び掛けの言葉。「蝴蝶夢」(古名家本)第一折、王大の白に「父親母親在上、做農莊有甚好處(父上母上、農業をして何の良いことがあるのでしょうか)」とある。
- 點就…人を任命して派遣すること。『水滸傳』(容與堂本)第七十九回に「高太尉聽了大怒、隨即點就本部軍兵、出城迎敵(高太尉はそれを聞くと怒り、すぐに配下の兵士に命じ、城を出て立ち向かわせた)」とある。
- 拔寨起營…陣地から全軍で出撃すること。『水滸傳』(楊定見本)第九十六回に「傳令大兵拔寨起營、到昭徳城下(全軍で陣を出発し、昭徳城下へ向かうよう命じた)」とある。
- 落的…～という結果になる。「落得」にも作る。無名氏【耍孩兒】套「拘刷行院」【五】「落得些短吁長嘆、怎能夠交錯觥籌(溜め息つくのが落ちで、どうして酒杯のやりとりなどできようか)」。
- 濊人頭廝擗、噙熱血相噴…首級を掲げて投げ、生き血を口に含んで吹く。激しく戦う様。「協張狀元」第五十一出、浄の白に「人頭廝釘、熱血廝潑」という形で現れる他、「提人頭廝擗、噙熱血相噴」(「氣英布」(元刊本)第二折)、「濊人頭廝擗、噙熱血相噴」(「東窗事犯」(元刊本)第四折)、「濊人頭廝擗、含熱血廝噴」(「金線池」(元曲選本)第一折)、

- 「颯人頭似滾、噲熱血相噴」（「秋胡戲妻」（元曲選本）第一折）などの形がある。
- 披星戴月…昼夜不休の行動をいう。劉致【端正好】套「上高監司」其一【貨郎兒】「披星戴月熱中腸、濟與糶親臨發放（昼夜も問わぬ熱い心で、救い米の放出を自ら指示された）」。
- 片甲不回…鎧の切れ端さえも帰って来ない。軍が全滅すること。「氣英布」（元刊本）第一折、英布の白に「漢王不從、濰水大敗、折漢軍四十六萬片甲不回（漢王は言うことを聞かず、濰水にて大敗し、四十六万の漢軍は一人も生きて戻らなかった）」とある。
- 到的那裏…大したことがない、何ほどでもないという定型表現。「三戰呂布」（脈望館本）第一折、劉羽の白に「一同去攻戰呂布、量他到的那裏也（連合で呂布を攻めれば、あんなやつ何ほどのものか）」とある。
- 識陣雲高…「陣雲」は戦場に湧き起こる雲のこと。「單刀會」（元刊本）第一折【混江龍】「軍罷戰、馬添膘。殺氣散、陣雲消（軍は戦いを止め、馬は肥える。殺気は散り失せ、戦場の雲は消え去る）」。「識陣雲高」という表現は、「三戰呂布」（脈望館本）第一折、袁紹の登場詩にも「臨軍能識陣雲高（出陣して陣雲の高さを識る）」と見え、よく戦況を見通すといったニュアンスかと思われる。
- 務要…きっと、必ず。「四春園」（脈望館本）第二折、裴炎の白に「我今夜務要殺了他一家兒（私は今夜きっとあやつら一家を殺してやろう）」とある。
- 喪荒郊…荒れた野で命を失う。「魔合羅」（元刊本）第二折【神仗兒】に「眼見是喪荒郊（見る間に荒れ果てた塚にて命を失う）」とあり、「灑池會」（内府本）第一折、白起の退場詩に「略施小計難逃命、教你目前一命喪荒郊（小細工を弄しても逃れ難く、たちまち荒野であやつの命を失わせてやろう）」とある。また「氣英布」（元刊本）第三折【道和】「直殺的喪荒丘（荒野で命を失わせるまで戦おう）」のように、「喪荒丘」という例も見られる。
- 暗約…押し量る。「窳約」にも作る。「灰闌記」（元曲選本）第二折【幺篇】「哎兒也、則你那心兒裏自想度、自暗約（ねえお前、心の中でよくよく考えてみなさい）」。
- 七斷八續・覓子尋爺…この二語を組み合わせて用いた例として、『水滸傳』（容與堂本）第五十二回到「趕得林冲等軍馬星落雲散、七斷八續、呼兄喚弟、覓子尋爺（林冲らの軍は追われて星が落ち雲が散るように、散り散りばらばら、兄弟が呼び合い、父子が探し合う有様）」とある。
- 濕浸浸…湿っている様。王伯成【哨遍】套「項羽自刎」【尾】「礮可可濕浸浸鮮血早淋漓了戰袍領（無惨にもじわじわと鮮血が早くも陣羽織の襟に流れる）」。

- 苦淹淹…うんうんと呻く様。「柳毅傳書」(元曲選本) 第二折【拙魯速】「將他來苦淹淹厮葬送(あやつを呻かせ亡き者としてやろう)」。
- 帥府…「元帥府」ともいい、司令部に相当する。「哭存孝」(内府本) 第二折、周徳威の白に「今日小官直至帥府、問其詳細走一遭去(今から私は帥府に行き、詳細を尋ねるとしよう)」とある。
- 語未懸口…「語未絶口」ともいう。話の終わらない内に。「金線池」(古名家本) 第一折、石敏の白に「老夫語未懸口、兄弟到來(私の話が終わらぬ内に、弟がやって来た)」とある。
- 刀斧手…処刑人、首斬り役人。「氣英布」(元刊本) 第二折、英布の白に「如今那漢過來、持刀斧手便與我殺了者(あやつがやって来たら、首斬り役人を連れて来て殺してしまえ)」とある。
- 劍甲在身、不能施禮…劍や鎧を身に着けているために正式な礼を行うことができない、とは武人の言う常套句。襄陽會(内府本) 第一折の蔡瑁の白など。
- 軍政司…軍において行政事務を行う部局。
- 會合…集まる、集合する。「馬陵道」(脈望館本) 第四折、田辟疆の白に「會合這六國公子、與龐涓交鋒(六国の貴公子を集め、龐涓と戦った)」とある。
- 除死無大災…死よりも大きな災いは無い。「灰闌記」(元曲選本) 第四折、馬均卿の妻の白に「除死無大災。拚的殺了我兩個在黄泉下、做永遠夫妻、可不好那(死よりも大きな災いは無し。我ら二人をあの世に送り、永遠の夫婦とすれば、まことに結構なことではないか)」とあるように、処刑される者が、酷い目に遭うとしてもせいぜい死ぬ程度じゃないか、と開き直って言う場合もある。
- 刀下留人…死刑の執行をしばし待つように言う表現。「燕青博魚」(元曲選本) 楔子、「李逵負荊」(元曲選本) 第四折などにも見える。
- 金簡…簡は角柱状をした鉄製の打撃武器のこと。『楊家府』などでは八大王は、奸臣がいたならば金簡で打ち殺して良いという権限を帝から与えられている。
- 施逞…思う存分に発揮すること。「哭存孝」(内府本) 第二折【罵玉郎】「他將那英雄慷慨施逞盡(彼は英雄の意気を発揮し尽くした)」。「活拿蕭天佑」(脈望館本) 第二折【倘秀才】「我則待施逞些躁暴(猛々しさを存分に披露してやろう)」。
- 險些兒…もう少しのことで。ほとんど。「介子推」(元刊本) 第四折【紫花兒序】「慚愧呵險些兒有家難奔(かたじけなやもう少しで帰る家もなくなるところであった)」。

- 違拗…背く、逆らうこと。「周公攝政」(元刊本) 第二折【普天樂】「扶持着有德的君王誰敢違拗(有徳の君主をお助けして誰も背こうとはしない)」。
- 畏刀避箭…戦いの時に尻込みする様子。「漢宮秋」(古名家本) 第二折、漢元帝の白に「那一箇與我退的番兵、都是些畏刀避箭的(誰も私のために蕃兵を退けようとはせず、刀を恐れ矢を避けて尻込みする者ばかり)」とある。
- 渾注酒…未詳。濁り酒の一種か。
- 壓驚…恐ろしい目に遭った人をお見舞いする。ごちそうなどして慰める。「博望燒屯」(元刊本) 第三折のト書きに「與張飛把壓驚盞科」とあり、夏侯惇に逃げられた張飛に対して酒を与えている。
- 項上之罪…首を斬るべき罪。「燕青博魚」(内府本) 楔子、宋江の白に「看着衆兄弟毎的面皮、饒免他項上之罪(弟達の顔を立て、首を斬るのは勘弁してやろう)」とある。
- 氣夯胸脯…怒りで胸が張り裂けること。「氣英布」(元刊本) 第四折【収尾】「嗔忿忿氣夯破胸脯(プンプンと怒りに胸も張り裂けんばかり)」。
- 平白地…突然。いわれなく。『董解元西廂記諸宮調』卷八【文如錦】後の【尾】に「平白地昏頼他人婦(いわれなく他人の妻を横取りするとは)」とある。
- 無籍…無頼。『大宋宣和遺事』「亨集」の曹輔の上表文に「近聞有賊臣高俅、楊戩、乃市井無籍小人(聞くところによると賊臣の高俅や楊戩は、市井無頼の小人であります)」とある。
- 戰討…戦争。「單刀會」(元刊本) 第一折【天下樂】「你待使霸道、起戰討、欺負關雲長年紀老(そなたは霸道を行い、戦争を起こし、關雲長が年寄りであると侮っている)」。
- 遮莫…～であろうと。「後庭花」(古名家本) 第二折【賀新郎】「遮莫去大蟲口中奪脆骨、驪龍領下取明珠(虎のあごとから骨を抜き取るのだろうと、黒龍の口から玉を取って来るのだろうとやってやろう)」。
- 奪旗擗鼓…旗を奪い太鼓を破る。勇敢に戦う様。「擗鼓」は「扯鼓」にも作る。「東窗事犯」(元刊本) 第一折【元和令】「我與您奪旗扯鼓統兒郎(私はあなた方のために兵を率いて激しく戦う)」。また「五侯宴」(内府本) 第三折、石敬瑭の白に「親傳將令逞威風、擗鼓奪旗有誰同(自ら軍令を伝えて威風をほしいままにし、太鼓を破り旗を奪って並ぶ者はいない)」とある。
- 對壘…対戦、対峙すること。「三奪槊」(元刊本) 第二折【梁州】「這些時但做夢早和敵軍對壘(この頃は夢を見れば敵軍と対峙する)」。

- 十悪大敗…謀反や不孝などの十種の重罪を指して「十悪大罪」というが、それをもじったものか。必ず勝負事に敗れるような、十種の不吉な要因ということか。
- 黒道…厄日、悪日。「桃花女」(内府本) 第三折【鬪鶴鶉】「你揀了這黑道的時辰(そなたはこの悪日を選んだ)」。
- 台鑒…思し召し。また、相手に判断を乞う言葉。「單刀會」(脈望館本) 第四折、魯肅の白に「魯肅不敢自專、君侯台鑒不錯(私の一存では決められませんので、どうかご高配を賜りますよう)」とある。
- 在朝天子三宣、闕外將軍一令…「東窗事犯」(元刊本) 第一折【混江龍】に「想着俺掌師府將軍一令、倒不出的坐都堂約法三章(思うに我ら元帥府を司る將軍の一令は、尚書省の三章の法に等しい)」、「虎頭牌」(元曲選本) 第二折【石竹子】に「赤緊的元帥令更狠似帝王宣(まことに元帥の命令は帝王の宣旨のように厳しい)」という表現が見られる。
- 由了你…「由」は従う、自由にすること。「汗衫記」(内府本) 第一折、張義の白に「我家私早則由了你那(私の財産が早くもお前の自由になるのか)」とある。
- 鈞旨…宰相による命令のことをいう。皇帝(ハーン)の勅令を「聖旨」といい、以下、后妃の場合は「懿旨」、諸王の場合は「令旨」、宰相の場合は「鈞旨」、帝師の場合は「法旨」という。
- 好歹…いづれにしても。良かれ悪しかれ。「單刀會」(脈望館本) 第四折、魯肅の白に「他若不與呵、我大勢軍馬好歹奪了荊州(あやつがもし渡さなければ、我が大軍がいづれにせよ荊州を奪うことであろう)」とある。
- 見如今…「現今」に同じ。今。姚燧【新水令】套「冬怨」【太平令】「見如今天寒地凍、知他共何人陪奉(今や天地も凍るこの寒さ、あの人は誰と一緒にいるのやら)」。
- 賊情…敵の情勢。「四春園」(脈望館本) 第三折【調笑令】「你可便悄聲、察賊情(静かにして、賊の様子を探りなさい)」。
- 赳赳…勇ましい様。強い様。「老君堂」(内府本) 第一折、程咬金の退場詩に「雄名點就出金墉、威風赳赳鎮邊庭(勇猛な兵を点呼して金墉を出発し、勇ましい威風で辺境を鎮める)」とある。

第二折

[訳]

(浄が土金宿に扮し馬に跨り蕃兵を連れて登場)

土金宿

“私は將軍としてまことに有能
諸般の武芸は学んだことがない
駱駝に乗って出陣し
驢馬から落ちて腰を折る”

私は六蕃都教首である韓延壽配下の大將の土金宿でございます。私は文においては三略に精通し、武においては六韜を理解しているが、兵書や戦術は、どれも学んだことがない。「かかれ」という声を聞けば、驚いて身を隠し、羊に飛び乗り、駿馬の代わりとし、槍や刀を持たず、拳骨で殴る。これら腕前であれば、本当にうまい。元帥の軍令を奉じ、私は楊六めを戦いに誘い出すことになった。思うに賊の楊六めらはまこと英雄であり、因らずも私とあやつが戦えば、我が命を失うことになるのではないか。あの方の命に従い、刀を恐れ矢を避ける蕃兵を率いて、楊六めを戦いに誘い出しに行こう。私は負けなくてはならず、勝ってはならない。あの方が蕃兵を、虎口交牙峪の近くで待ち伏せさせている。皆の者、陣を布け。あそこで土煙が起こっているのは、きっと楊六めがやって来たのだ。私は今胸がどきどきしておる。

(正末が楊景に扮し令公・七郎と共に馬に跨り兵士を連れて登場)

楊令公 私は楊令公でございます。潘仁美はまことに無礼で、本日は悪日であるのに、あやつは我ら父子に兵を率いて出陣させたが、我ら父子の命を奪おうとたくらんでいるのであろう。

楊景 父上、代州までもうすぐです、全軍、しっかりと布陣せよ。

楊七郎 兄上、我ら父子三人が勇敢に先頭に立ち、激しく戦い、必ずや蕃族を撃退しなければなりません。

楊景 弟よ、ここまで来て、何を恐れることがあろう。我が軍の兵や將は勇猛であるので、あやつらなど何程のものか。(唱う)

【中呂・粉蝶兒】

“対峙して戦うことについて申せば
我らは朝廷のために力を尽くしてきた
鞭・鏑・搥・鎚を用い
敵兵に出くわし、賊軍に出遭えば、私は子供の遊びのように

雄々しい武威を発揮する

私はあやつらを死んで野晒しの身にしてやろう”

楊令公 息子よ、我ら父子の英雄ぶりを思えば、蕃兵など、話にならぬ。しかしいかんせん悪日であるので、私の心は憂鬱だ。

楊景（唱う）

【醉春風】

“思えばかつては恨みを抱いて幽州を出発し、今また兵を率いて北方の辺境に出向く

あやつは我らを悪日に出陣させ、凶星を犯させた

潘美よどうしてこのような道理があるのか

我らは大宋の帝の威光を頼みとし

我ら楊家は勇猛であり、蕃兵をただでは済まさぬ”

土金宿 全軍、旗を立てよ。

楊令公 息子よ、しばし待て。見えるか。蕃兵の旗に、一匹の狼と、三匹の羊が描かれていて、羊の一匹は蹴り倒され、一匹はのしかかれ、一匹は口にくわえられている。息子よ、あやつらが狼で、我らが羊ということで、まことに不吉である。

楊七郎 父上、思うに蕃兵にはそのような策略は無く、勢いに乗って追い払うべきです。

楊景 あの蕃兵はまことに無礼である。父上と、弟は後ろに下がって、私にあの蕃族の相手をさせて下さい。この蕃将め、我らは幽州での恨みを抱いており、兵を起し、お前達蕃族を除くのは、まことに道理にかなっている。お前は どうしてまた兵を率いて、代州城を包囲するのだ。速やかに兵を引き上げるならば、大目に見てやるが、一言でも嫌と言うならば、私はお前を殺して鎧の切れ端すら帰さぬぞ。

土金宿 私を殺して鎧の切れ端も帰さんと。お前の言う通りだ。我らの敗残兵を見るに、お前が皆殺しにしてくれれば、却ってすっきりする。おじさんよ、お前は私だけを残して、報告に戻れば良い。一日中怒鳴っていたが、お前の名前は何だっけ。

楊景 この蕃族め、こちらの將軍は金刀教授にして無敵大將軍の楊令公である。

土金宿 お前は何者だ。

楊景 我こそは楊六郎である。お前は誰だ。

土金宿 しまった、何とついてない。本当に楊六めが来おった。我こそは大將軍の土金宿である。お前は私と戦うつもりか。

楊景 こやつめ無礼な。これお前太鼓を鳴らせ。（戦うしぐさをする）（唱う）

【紅繡鞋】

“見ればずらりと手に武器を持ち

ドンドンと太鼓を春雷のように響かせる

我が乗馬はパカパカと獅子のように駆ける”

この蕃将めが、さっさと降参すれば、命だけは見逃してやるぞ。(唱う)

“ああ、お前のような無名の将が、私の前で何ができる

私がお前を血まみれにしたら、後悔もできまい”

土金宿 楊六めは、まことに勇敢であり、私をこっぴどくやっつける。あの老いぼれを見るに、やっかいで、若い將軍も非常に勇猛だ。私がもう一度戦えば、きっとあやつらに殺されてしまう。わざと刀を空振りして、退け退け退け。(仮に退場)

楊令公 あやつめは逃げてしまったわい。あやつらの旗は乱れておらず、隊列も整っているから、我らは深追いせず、陣營を構えよう。これお前銅鑼を鳴らせ。

楊景 (唱う)

【石榴花】

“我が父は銅鑼を鳴らして戦いをしばし止め

あやつらが飛ぶように逃げて行くのを見る

我ら楊家が英雄であることをお前達は知っておろうに

我らと対峙するならば

雄々しい武威を發揮しよう”

楊令公 本日は悪日であるから、出兵するべきではないぞ。

楊景 (唱う)

“大敗する悪日に当たり

我ら大將軍をことさらに陥れようという戦法

われらは天を奉じ道を行うことを疑わず

我らの忠孝により名を明らかにしよう”

土金宿 (蕃兵を率いて登場) 私は土金宿でございます。私はあの賊の楊六めが、私を追って来ると思っていた。しかしあやつは私の武芸の腕前を見て、追って来ようとしません。私がもう一度あやつと戦わなければ、きっとあやつらの軍を谷の中へ誘い込むことはできないであろう。これ楊六め、さっき私がお前に遅れを取ったのは、お前をからかったのだ。お前が再び戦えば、私は必ずやお前を生け捕りにし、この土様の腕前を明らかに

しよう。

楊景 こやつめ何と無礼な（唱う）

【鬪鶴鶉】

“私は怒りで胸が張り裂けんばかり、心から怒りが湧き起こる”

土金宿 我が武芸十八般により、私は塵を見て敵の数を知り、土を嗅いで作戦を知ることができ、お前ごとき何程でもない。

楊景（唱う）

“あやつはあれやこれやと才覚を誇っておるが
あの無礼な蕃族は戦うつもりか”

土金宿 これ楊六め、お前は私の武芸や弓馬の腕前を知っておろうに、お前に私の臭い屁をかがせてやるぞ。

楊景 黙れ。（唱う）

“私の前で武芸をひけらかすならば
天地の果てまでお前を追い
お前を慌てさせてやろう”

楊七郎 兄上、思うにあやつは、大したことがないのに、却って何度もからかいに来ます。私が今度こそ必ずやあやつを捕らえましょう。

楊景（唱う）

【十二月】

“猛々しく北の果てへと進軍し
パカパカと軍馬は飛ぶように走る
お前のような野蛮な賊は、私から見ればちっぽけなもの
もうもうと戦場に塵を起こし
怒りをあらわに対峙して敵を迎え撃つ”
これ野蛮な賊め、さっさと降参しろ。

土金宿 楊六めは、まことに英雄だ。蕃兵達よ一斉に力を尽くして、もう一度あやつにまとわりつけ。私ではかなわない、一体どうしたものか。（再び戦うしぐさをする）

楊景（唱う）

【堯民歌】

“えい、やあ、野蛮なお前はなおも作戦を語るが

虚勢を張って対峙しているだけ

両軍が戦えば飛ぶように逃げ

私は全軍に一齐に凱歌を歌わせて帰ろう

お前のような野蛮な賊など、敵ではなく

私はお前を生け捕りにし、朝廷へ戻ろう”

土金宿 私はかなわないから、わざと刀を空振りしよう。將軍達よ、私と陣営の中で牛の骨をかじるとしよう、退け退け退け。(蕃兵と共に退場)

楊景 あやつはまた敗走しおったわい。父上、弟よ、全軍で一齐に出撃し、野蛮な賊を追い掛け、必ずや生け捕りにして朝廷へ功を献上しに戻りましょうぞ。(追い掛けて退場)

土金宿 (登場)

“荒馬に乗れず

弓矢も知らぬ

昨日は飯抜き

今日は腹ぺこ”

私は前部先鋒の土金宿でございます。私は兵を率いて楊令公と戦ったが、思うにあの賊の楊六めは、手中の槍はくるくると動き、あたかも一匹の大蛇のよう。もし私が急いで逃げなければ、私の背中へ、きっとあやつの槍を食らい、命を無くしていたであろう。

私はこの両狼山の虎口交牙峪へ逃げて来たが、我らに待ち伏せの計略があるとも知らずに、あやつら父子三人は、後から追い掛けて来た。我が元帥が四方に兵を伏せているので、必ずやあやつら父子三人をこの虎口交牙峪の中へ閉じ込めて、羽根があったとしても谷から飛び出せないようにしてやろう。何とあやつら父子三人は、我らの策にかかりおった。皆の者、谷の入り口をしっかりと包囲し、あの三人の賊を逃がしてはならぬ。

私は元帥へ報告しに一つ行くでしょう。(退場)

(正末が楊景に扮し七郎と共に再び登場)

楊景 蕃兵を追って、山中へ誘い込まれたが、どうしたものか。

楊七郎 兄上、もう日も暮れましたが、明日は必ずや敵将を討ち取りましょう。

楊景 (唱う)

【尾聲】

“この度は帝のために都を守り、蕃賊を追ってここまで来た

ここは両狼山の虎口交牙峪の中で

国や家のためにここまで来た”（共に退場）

〔注〕

- 躑馬兒…雑劇中で馬に跨る動作をいう。「馬兒」は「竹馬兒」と同じく、演劇で用いる張り子の馬のこと。「躑」は「跚」にも作り、履物などを履くという意。張り子の馬の中に入り、上半身を出した姿で騎馬の状態を表すことからこの動詞を用いる。「黒旋風」（脈望館本）楔子のト書きに「躑竹馬兒」とあり、本劇楔子や「活拿蕭天佑」（脈望館本）第三折のト書きに「跚馬兒」とある。
- 綿羊…メンヨウ。羊。
- 楊六兒…雑劇で女の召使いを「梅香」、男の召使いを「六兒」という（「虎頭牌」（元曲選本）第一折）。無論、ここでは楊六郎とかけて相手を下に見ている。
- 虎刺孩…蒙古語 *qulaqai* の音写。漢訳は「賊」「盗」。「忽刺孩」「忽刺海」「忽辣海」にも作る。「陳州糶米」（元曲選本）第一折、小衙内の白に「你這個虎刺孩作死也。你的銀子又少、怎敢罵我（この賊め死にたいのか。お前の銀子が足りないのに、どうして私を罵った）」とある。
- 官差…公務。官の仕事。「介子推」（元刊本）第二折【牧羊關】「那壁是聖旨難推怨、微臣這壁官差不自由（あちらは聖旨であるので恨み難く、私はお役目であるのでやむを得ない）」。
- 搥…柄の先に爪の付いた武器。「鎚」にも作る。
- 三隻羊…「羊」は「楊」に通じ、三匹の羊は楊令公、楊六郎、楊七郎を暗示している。
- 靠後…その場から離れること。「趙氏孤兒」（元曲選本）第一折、韓厥の白に「小校靠後、喚您便來、不喚您休來（お前達は下がり、呼ばれたら来て、呼ばれなければ来るでない）」とあり、「活拿蕭天佑」第一折、八大王の白に「王樞密靠後、勿得多言（王樞密は下がり、黙っておれ）」とある。
- 佛眼相看…大目に見ること。「博望燒屯」（内府本）第一折、張飛の白に「這村夫若下山去呵、我和他佛眼相看、若不下山去呵、我不道的饒了他哩（あの田舎者が山を下りるならば、大目に見てやるが、山を下りないのならば、許しはせんぞ）」とある。
- 若道半個不字…少しでも嫌と言え、ということ。「對玉梳」（古名家本）第三折、柳茂英の白に「道出一個不字來、我着刀子結果了他性命（少しでも嫌と言ったら、私は刀であやつの命を奪ってしまおう）」という表現が見られる。

- 乾嘯…「嘯」は「嘯叫（大声で叫ぶ）」や「嘯罵（大声で罵る）」という方向であろう。
「乾」はここではむなしい、いたずらに、の意か。
- 晦氣…不運である。運が悪い。『水滸傳』（容與堂本）第八回、董超の白に「却是老爺們晦氣、撞着你這箇魔頭（何とついてない、お前のような貧乏神に当たるとは）」とある。
- 齊臻臻…きちんと並んでいる様。「三奪槩」（元刊本）第一折【勝葫蘆】「過了些亂烘烘的荊棘、密稠稠榆柳、齊臻臻長成行（乱れ茂るイバラ、密に並ぶ榆や柳が、ずらりと列を作っているところを通り過ぎる）」。
- 坐下馬…乗っている馬のこと。「追韓信」（元刊本）第二折【新水令】「坐下馬枉踏遍山水雄（乗っている馬が見事な山川を巡り尽くすのも無駄なこと）」。「博望燒屯」（元刊本）第三折【步步嬌】「怎禁那一疋坐下馬似龍離浪（乗っている馬は波を離れた龍のよう）」。
- 不刺刺…馬が勢い良く駆ける様。「撲刺刺」にも作る。「三奪槩」（元刊本）第二折【梁州】「這些時但做夢早和敵軍對壘、才合眼早不刺刺地戰馬相交（この頃は夢を見れば敵軍と対峙し、目を閉じれば早くもパカパカと軍馬が駆け合う）」。
- 血模糊…血がべっとりという様子。姚守中【粉蝶兒】套「牛訴冤」【耍孩兒】「登時間滿地血模糊（たちまち一面血まみれ）」。
- 殺的我碎屁兒直流…よくわからないが、仮に手酷くやられることとしておく。「千里獨行」（脈望館本）第二折、張虎の白に「殺的我那碎屁兒支支的流、我可那裏近的他（何ともこっぴどくやられたものだ、あやつにかなうはずがない）」とあり、「伍員吹簫」（元曲選本）第一折、費得雄の白に「哎喲、你那鉢盂般大的拳頭、颯颯的打得我那碎屁兒支支的（ああ、あなたの鉢ほどの大きな拳は、びゅうびゅうと私をひどく打つ）」とある。
- 兜搭…煩わしい、厄介である。「兜答」とも。「東堂老」（元曲選本）第一折、揚州奴の白に「這老兒可有些兜搭難説話、慢慢的遠打週遭和他説（あの爺さんは少し厄介で話しにくい人なので、ゆっくりと遠まわしに話しをしよう）」とあり、息機子本は「兜答」に作る。
- 空房…旧時の占いの用語で、十干を十二支に配して余った二支をいう。また不吉な日のこと。「空亡」「空忘」とも。「陳搏高臥」（元刊本）第一折【金盞兒】「向日犯空亡爲將相、逢祿馬的作公卿（日が空亡を犯せば将軍や宰相となり、祿馬に会えば公卿となる）」。
- 望塵知敵數、嗅土識兵機…『北史』卷五十四「斛律金傳」に「金性敦直、善騎射、行兵用匈奴法、望塵知馬歩多少、嗅地知軍度遠近（斛律金は人情に厚く正直で、騎射を得意とし、匈奴の兵法を用い、塵を見れば馬や兵がどれだけいるのかわかり、地面を嗅げば軍

の遠近がわかった)」とあるのに基づくか。「破天陣」(内府本)第一折、顔洞賓の白にも同じ表現が見える他、「五侯宴」(内府本)第三折、李亞子の登場詩では「臨軍望塵知勝敗、對壘嗅土識兵機(出陣し塵を見れば勝敗を知り、対峙し土を嗅げば軍機を見分ける)」とある。

- 見識…考え、才覚のことであるが、時に悪知恵や策略といったニュアンスを帯びる。「介子推」(元刊本)第二折【罵玉郎】「是君王傳的聖旨、麗后定的見識、是賊子施的機穀(これは帝の詔ではあるが、麗後の策略にして、悪党がしかけた罠)」。
- 迤逗…からかう。「謝天香」(古名家本)第四折【石榴花】「莫不是把咱故意相迤逗、特故的把他來慚羞(わざと私をからかい、彼に恥をかかせようとするのではないか)」。
- 惡狠狠…猛々しい様、恐ろしい様、憎々しげな様などをいう。「惡眼眼」にも作る。ただしここでは兵士達の勇猛な様を形容している。「黒旋風」(脈望館本)第三折【落梅風】「做是麼惡眼眼怒從您那心上起(どうしてそんなに憎々しげに怒るのですか)」。「勘頭巾」(于小穀本)第三折【幺篇】「你見這惡眼眼公吏排(恐ろしい役人達が並んでいるのが見えるであろう)」。
- 小覷…軽視すること。「氣英布」(元刊本)第一折【油葫蘆】「這漢似三歳孩兒小覷我(こやつめ私を三歳の子供並みに見おって)」。
- 昏鄧鄧…暗くてはっきりしないこと。景色が暗く沈んでいる様子。「存孝打虎」(于小穀本)第三折【金蕉葉】「我則見黑黯黯雲遮日華、昏鄧鄧風吹塞沙(見れば黒い雲が日の光を遮り、暗い風が辺境の砂漠に吹く)」。「柳毅傳書」(元曲選本)第二折【小桃紅】「不覺的天邊黑雲重、昏鄧鄧敢包籠(知らぬ間に天に黒い雲が重なり、もうもうと覆わんばかり)」。
- 征塵…戦場に沸き起こる塵。また戦争そのものを指すこともある。「氣英布」(元刊本)第四折【水仙子】「騰騰騰馬蕩動征塵(ドドドッと馬が駆ければ戦塵が舞う)」。
- 嗔忿忿…ぷりぷり、プンブンと怒る様。「氣英布」(元刊本)第四折【収尾】「嗔忿忿氣奔破胸脯(プンブンと怒りに胸も張り裂けんばかり)」。
- 把都兒…蒙古語 *ba'atur* の音写。漢訳は「勇士」。「把秃兒」「把阿秃兒」「八都魯」「霸都魯」「拔都兒」にも作る。「漢宮秋」(元曲選本)第三折、呼韓耶單于の白に「把都兒、將毛延壽拿下、解送漢朝處治(將軍よ、毛延壽を捕らえ、漢朝へ護送して処分させよ)」とある。
- 後心頭…背中。心臓の後ろの部分。「頭」は接尾語。『三國志演義』第五回到「看看趕上、

布舉畫戟望瓚後心便刺（見る見る迫い着き、呂布は画戟を掲げて公孫瓚の背中から心臓を一突きしようとした）」とある。

○爲國於家…国のため、家のため。「介子推」（元刊本）第三折【幺篇】「孩兒今日救了儲君、替了親爺、它須是爲國於家（我が子がこの度太子様をお救いし、父の身替わりとなったのは、国と家のためであった）」。

楔子

〔訳〕

（楊令公が正末の扮する楊景・七郎と共に登場）

楊令公 息子よ、凶らずも我ら父子三人、蕃族によってこの山へ誘い込まれ、谷の出口は水も漏らさぬほど固められているが、どうしたものか。

楊景 父上ご心配なく、私と弟が軍を整え、出撃すれば、この囲みも解けるでしょう。

楊七郎 兄上それは違いますぞ、大勢の蕃兵が、谷の出口を囲んでいるので、我ら父子が強くても、衆寡敵せずで、勝つことはまことに難しいでしょう。

楊景 それではどうしたものか。

楊七郎 兄上ご安心を、兄上にはしばらく父上と共にしっかり軍を固めて頂き、私は今から単騎にて、出撃して囲みを出て、代州へ潘太師に援軍を要請しに行き、内外で呼応して、あやつらの陣を混乱させれば、この囲みも解けるでしょう。

楊景 弟よ、お前の言う通りであろう。しかし大勢の蕃兵の陣中で、お前にもしものことがあったとしても、我らは一体どのように知ることができるであろうか。

楊七郎 兄上、私に考えがあります。私が着ている肌着を脱ぎ、兄上にお預けしておき、三日後、狼煙を上げる音が聞こえ、合図の火が空に昇り叫び声がしたならば、私の呼んだ援軍が到着したということであり、兄上が外へ打って出れば、私は兵を率いて突入します。もし三日経っても知らせがなければ、私は蕃族の陣で死んだということです。兄上が私の肌着の重さを量ってから、陣営の門の外へ行き、私の魂を招いたならば、私の肌着は重くなります。私は大将ですから、邪鬼が私の肌着にやって来ることはありません。

楊景 お前の言う通りにしよう。

（七郎が肌着を脱ぐしぐさをする）（一同が悲しむしぐさをする）

楊七郎 兄上にはしっかり兵を固め、よく父上をお守りして頂き、私は出撃するとします。

楊令公 息子よ、よく気を付けて、早く行って早く戻って来るのだ。

楊七郎 父上ご安心を、何としても必ず援軍を呼んで来ます。ぐずぐずせずに、援軍を要請しに一つ行くとしよう。

“単騎にて志を明らかにし
命を懸けて功名を立てる
援軍を求めて辺境に臨み
蕃国をやっつけて賊軍を平定する”（退場）

楊令公 息子は行ってしまったわい。六郎よ、我らはひとまず山のほitoriへ行って休むとしよう。（共に退場）

（潘太師が賀懐簡・劉君期・陳林・柴敢と共に登場）

潘太師

“忠臣を損なう計略を算段し
日頃から邪悪な心を発揮する”

私は潘太師でございます。これら二人の副帥は賀懐簡と劉君期。前日に楊令公ら父子三人が遅刻して来たので、私はあの老いぼれを殺して、矢の恨みを晴らそうとしたが、凶らずも呼延贊めに止められたので、殺すことができなかった。あの日は悪日であったので、あやつに五百の軍馬を与えて、先発させ、蕃兵を迎え撃たせた。様子を探らせてみると、蕃将の土金宿によって両狼山の虎口交牙峪の中に誘い込まれたという。まさしく「人に願うところあれば、天は必ずこれに従う」というもの。私は一心にあの老いぼれを殺そうとしていたところ、凶らずもあやつは、蕃兵の計略にかかったが、蕃兵にあの老いぼれを殺させれば、私があやつを殺すよりもずっとましだ。今は何事もないので、帳の中で、酒と肴の用意をし、二人の副帥と共に喜び、酒を飲むとしよう。陳林、柴敢よ、宴席の支度をせよ。

陳林・柴敢 かしこまりました。（机を持ち運ぶしぐさをする）

劉君期 閣下、この劉めは、元々善人であり、誰かが他人を害するのを促したりはしませんので、拳を打ち、酒を飲んで騒ぎましょう。

賀懐簡 お前達酒をもて。太師どうぞなみなみと一杯。

潘太師（酒を飲むしぐさをする）我らはゆっくりと酒を飲むことにして、これ見張りの者よ、軍事情況に何かあれば、私に知らせよ。

陳林 かしこまりました。

楊七郎（登場）私は楊七郎でございます。父上や兄上と共に兵を率いて、蕃將の土金宿を追撃していたが、大勢の蕃兵によって、我ら父子三人は、両狼山の虎口交牙峪に閉じ込められ、内に糧秣なく、外に援軍のない有様。私は一人で陣から打って出て、潘太師に援軍を要請するつもりであるが、早くも轅門の前に着いたわい。これ見張りの者よ、辺境守備の楊七郎が、元帥にお会いしに来たと、太師にお知らせしてくれ。

陳林 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、辺境の楊七郎が目通りに来ました。

潘太師 あやつら父子は、蕃兵によって両狼山の虎口交牙峪に閉じ込められたという話なのに、あやつは一体どうして出て来られたのだ。陳林よ。

陳林 はっ。

潘太師 処刑人を用意して、あやつを通せ。

陳林 かしこまりました。お通り下され。

（七郎がまみえるしぐさをする）

潘太師 この若造め、どこから来た。

楊七郎 私は楊七郎でございます。我ら父子三人は、蕃將の土金宿を追撃していましたが、凶らずもあやつは負けた振りをし、我ら父子を両狼山の虎口交牙峪に誘い込み、閉じ込めて内に糧秣なく、外に援軍のない有り様としました。私は陣から打って出て、太師に援軍をお願いしに参ったのです。

潘太師 無礼な若造め。私はお前達父子が蕃兵を破ったのを見たのに、お前はどのようにして援軍を要請に来るのだ。お前達父子はきっと蕃兵に降伏し、私を騙しに来たのであろうが、ただでは済まさんぞ。処刑人よ、この若造を捕らえて、殺してしまえ。

陳林（捕らえるしぐさをする）かしこまりました。

楊七郎 濡れ衣でございます。

賀懐簡 こやつは、濡れ衣だと叫んで、我らの宴席をぶち壊しおる。

劉君期 閣下に申し上げます。我らが酒を飲んで楽しんでいるところに、突然やって来て、我らの宴席をぶち壊しました。あなたがあやつを殺すのならば、殺せばよろしいが、殺さないのであれば、轅門から出て行かせれば良いでしょう。

潘太師 この若造め、お前達父子は天下を覆う程の英雄と言いながら、どうして蕃兵に閉じ込められて、わざわざ全軍を惑わしに来るのだ。陳林よ、こやつを轅門から突き出せ。

陳林（七郎を押すしぐさをする）かしこまりました。

潘太師 柴敢よ、花をもて、私は二人の副帥と花を簪にして酒を飲もう。

柴敢 かしこまりました。（花と酒を運ぶしぐさをする）

楊七郎（轅門を見て悲しむしぐさをする）ああ、私の父と兄が蕃兵に閉じ込められている
というのに、太師は花を簪にして酒を飲んでおり、まさしく「歌うところあれば憂える
ところあり」だ。

劉君期 閣下、あなたはあの若造を無礼と言いましたが、我らが好意であやつを殺さない
でやったのに、却って轅門の外で我らを罵っておりますぞ。ニンクを和えた犬の肉を
食ってから、楊七郎を殺しましょう。自業自得ですから、小校に捕らえさせて、殺して
しまえば宜しいのです。

潘太師 これお前、あやつを捕らえて来るのだ。

陳林 かしこまりました。（七郎を捕らえるしぐさをする）

潘太師 こやつめ、お前達父子は兵を率い、蕃兵と戦いに行きながら、我が軍を損ない、
蕃将によって谷の中へ閉じ込められたばかりか、お前は私を罵りおったな。ただでは済
まさぬ。陳林よ、こやつを陣營の外へ連れて行き、はりつけ柱に縛り付けよ。

陳林 かしこまりました。（七郎を縛るしぐさをする）

賀懷簡 よしよしよし、この憂さ晴らしの酒を飲んだら、矢を射て遊ぶとしよう。

劉君期 縛れ縛れ、弓矢をもて、私が腕前を披露してやろう。

潘太師 副帥達よ、私と陣營の外へ行こう。

（共に陣營を出るしぐさをする）

潘太師 陳林よ、旗指物をあやつの左右両側に並べ、私の弓矢を持って来い。

柴敢 かしこまりました。（弓矢を渡すしぐさをする）

潘太師 陳林よ、机を運んで来て、私があやつに矢を一本当てたら、一杯酒を飲むことに
するぞ。旗を振り鬨の声を上げよ。

（陳林が机を運ぶしぐさをする）

潘太師 副帥達よ、こやつを射るのを手伝ってくれ。

賀懷簡 閣下、あなたが当てられなければ、矢一本につき罰として私の一壺の酒を飲みな
され。

潘太師 こやつめ、よく聞け。昔河東へ出兵した時、お前のところの老いぼれは、私に矢
を射たが、今こそ恨みを晴らしてやる。

劉君期 閣下の仰る通り。

(射るが当たらないしぐさをする)

潘太師 一体どうしてあやつに当たらないのだ。

楊七郎 ああ、事ここに至っては。こやつめ、私には矢を見切る術があるのに、お前にどうして当てることができようか。

潘太師 こやつめ黙れ、私を知るわけないだろう。陳林よ、あやつの額の皮を、切って垂れ下がらせて、あやつの視界を遮るのだ。

陳林 かしこまりました。(切るしぐさをする) 視界を遮りました。

潘太師 (再び射るが当たらないしぐさをする) 副帥達よ、何と不思議な、一体どうして当たらないのだ。

楊七郎 この老いぼれめ、私は目が見えなくとも、我が耳は聞こえているぞ。

潘太師 こやつはそんなことまでできるのか。陳林よ、綿花でこやつの耳をふさげ。

陳林 (耳をふさぐしぐさをする) ふさぎました。

(太師が命中させるしぐさをする) (鬨の声を上げるしぐさをする)

潘太師 陳林、柴敢よ、酒をもて。

陳林 かしこまりました。

(三人で酒を飲むしぐさをする) (また射るしぐさをする)

潘太師 思えば昔河東へ出兵した時、あの老いぼれは私に矢を射た。この恨みはまだ晴れていない。今から一本の矢を十本にして仕返しし、一人がやって来たら一人を殺し、二人がやって来たら両方とも殺そう。副帥達よ、こやつを射殺せ。

賀懐簡 弓矢をもて、私が射るとしよう。

陳林 かしこまりました。(弓矢を渡すしぐさをする)

劉君期 私の弓矢をもて、私もあやつを射るとしよう。

柴敢 かしこまりました。(弓矢を渡すしぐさをする)

(三人で射るしぐさをする) (七郎が死ぬしぐさをする)

潘太師 我らは長い間射たので、両腕がしびれてしまった。陳林、柴敢よ、あやつが死んだかどうか見てみよ。

陳林 かしこまりました。(見るしぐさをする) 死んでおります。

潘太師 死んだのならば、お前達二人であやつの体に当たった矢を数えて、どれだけの矢を射たか見てみよ。

陳林・柴敢（矢を数えるしぐさをする）元帥、百三本の矢を射て、七十二本が命中しました。

潘太師 百三本の矢を射て、七十二本が命中したので、これでようやく河東での矢の恨みが晴れた。酒をもて、私は副帥達と喜び、酒を飲むとしよう。

劉君期 七郎は、射殺されてしまったわい。我らはもう三壺飲み、凧を上げて遊ぶとしよう。

潘太師 それならば、陳林、柴敢よ、その矢は全てお前達に褒美として与える。お前達はこやつ死体を、桑乾河へ放り込め。放り込んで、報告に戻って来たら、更に厚く恩賞を与えよう。

陳林 かしこまりました。柴敢よ、我ら二人は七郎の死体を運び、桑乾河へ放り込みに行くぞ。（運ぶしぐさをする）（共に退場）

潘太師 副帥達よ、我らは帳の中で酒を飲もう。

“私は最初から悪人だったのではなく
あの老いぼれのせいで恨みが収まらなかった
この度楊七郎をあの人に送ったので
ようやく河東での矢の恨みが晴れた”（共に退場）

楊景（登場）私は楊景でございます。弟が援軍を要請しに行つて、もう数日経つが、何の音沙汰もなく、まことに悩ましいことである。いつになればこの危機から抜け出せるのかわからない。急に頭がぼんやりとしてきたので、しばらく眠るとしよう。（眠るしぐさをする）

楊七郎（靈魂に扮して登場）この楊七郎は陣から打つて出て、援軍を要請したが、凶らずも仇の潘太師が、私を矢で射殺したので、兄上の夢に現れて、私の恨みを晴らしてもらおう。（楊景を呼ぶしぐさをする）兄上、兄上。

楊景（身を起こすしぐさをする）お前は何者だ。

靈魂 あなたの弟の楊七郎です。

楊景 弟よ戻つたか。そなたが連れて来た援軍はどこだ。

靈魂 私が単騎で出陣すると、蕃兵は誰も戦おうとしなかつたので、私は真つ直ぐに代州へ行き、潘太師に助けを求めました。しかしあやつは花を簪にして酒を飲み、出陣しようとしませんでした。私は「歌うところあれば憂えるところあり」と言つてやりました。あの賊は無礼であり、あやつは以前の矢の恨みをまだ覚えていて、私をはりつけ柱に縛

り付け、賀懐簡や劉君期と共に私を射殺し、百三本の矢を射て、七十二本を命中させたので、兄上と共に国家を支え、山河を守ることができなくなりました。兄上には良く父上の面倒を見て、忠義に力を尽くして頂くことができましようが、私は不幸にも奸臣により陥れられ殺されてしまいました。兄上、まことに悲しゅうございます。

楊景（悲しむしぐさをする）弟よ安心しろ、私は明日兵を整え、打って出て、八大王様にお知らせして、きっとお前のために恨みを晴らしてやる。

霊魂 蕃兵を退けたならば、兄上は私のために恨みを晴らして下さい。思えば我ら兄弟七人、父子八人は、国家のために多くの功績を立てたのに、今になってだめになってしまった。一体何があったのかお話ししよう。

“国家のために激しく戦い
命を顧みず蕃兵を殺す
幽州にて帝をお救いした功は大きく
賊を滅ぼし危機を除いて太平にした
私の鎧はまだ土にまみれ
三尺の名剣は血生臭い
悪日に出兵して谷の入り口へ向かい
凶らずも父子は蕃兵に陥れられた
私は自ら単騎で救いを求めたが
潘の老いぼれめが私を亡き者にした
七魄は寄る辺なく地府へ行き
三魂は遥か遠く冥土へ赴く
敵将を捕らえて勇敢さを明らかにすることもなく
ばらばらの死体となった姿を現すこととなった
もし父子が再びまみえることがあるならば
南柯の夢の中以外にない”

兄上このことを夢とってはなりませんぞ。（退場）

楊景（目覚めるしぐさをする）ああ、弟よ、まことに悲しいことである。

楊令公（登場）息子よ、どうして悲しんでいるのだ。

楊景 父上はご存じないでしょうが、先程弟が夢に現れ、潘仁美のやつめにより矢を集中させて射殺されたと話していました。

楊令公 息子よ、夢の中でのことを、深く信じてはならぬ。

楊景 あの日弟はこう言っていました。身に着けていた肌着を残すから、もし弟が死んだ後に、肌着を陣營の門の外へ持って行き、魂を招くと、死んでいたならば、その肌着は重くなると。試しに魂を招いてみましょう。(魂を招くしぐさをする)(霊魂が一回りして退場)(肌着を持ち上げるしぐさをする) ややや、一陣の風が通り過ぎると、肌着が重くなったが、明らかに弟が死んだということだ。(悲しむしぐさをする) 弟よ、まことに悲しいことである。

楊令公 息子よ、まことに悲しいことである。潘仁美めの無礼は許せぬが、我ら父子二人は、どうしたものか。

楊景 父上ご安心を、私が今から兵を整え、父上と共に打って出て、東京へ行って帝に奏上し、八大王様にお知らせして、きっと弟の恨みを晴らします。父上は馬にお乗り下さい。

韓延壽(馬に跨って登場) 私は蕃兵都教首の韓延壽でございます。私は將軍に負けた振りをさせ、楊令公を誘い込んだ。何と楊家の父子は、私の計略にかかり、両狼山の虎口交牙峪に誘い込まれおった。あやつに七番目の息子がいるが、あの賊めはまことに英雄で、単騎で陣を突破してしまった。しかしあやつ一人、何程のこともあるまい。楊令公ら父子は羽が生えたとしても飛び出すことはできない。皆の者、兵を整え、しっかりと両狼山を包囲し、全ての弓や弩に弦を張り、刀剣を鞘から抜き、守りを固めて、賊の楊六めを逃がすでないぞ。

楊景(令公と共に戦うしぐさをする) 蕃兵め陣を解いて、我が軍を出せ。

韓延壽 この賊めが、どこへ行く。お前は勝手気ままにしておるが、見よ我が軍は山や谷に満ち、全て大勢の蕃兵であり、お前達父子が英雄で、天下に名が知れ渡っていようと、この谷からは逃げられないぞ。投降しないのならば、お前と九千回戦おう。

楊景 かかって来い。(戦うしぐさをする)

韓延壽 この賊は英雄であり、楊六めの槍は、大河をひっくり返して海を乱し、周囲を攻撃し陣に突進し、太刀打ちし難い。私は戟を空振りし、蕃兵は武器を倒し、退け退け退け。(敗れて退場)

楊景(追うしぐさをする) 全軍よ、一斉に力を尽くして、打って出るぞ。(退場)

韓延壽(再び登場) これ老將軍よ、お前が私を追わないのは、お前は我が軍を破ったとはいえ、お前の兵も全て損なわれ、わずかな敗残兵しか残っていないからであろう。私は

負けたとはいえ、大勢の蕃兵がまだ残っており、お前は衆寡敵せずであるから、早く我ら北蕃に投降すれば、お前に高官を授けてやるつもりだが、お前の考えはどうだ。

楊令公 六郎は出撃して行った。凶らずも蕃将に馬の脚を叩き折られてしまい、誰かに殺されるよりは自ら死ぬ方がましだ。ここは李陵碑であり、私は石碑に頭を打ちつけて死ぬとしよう。帝も顕彰して下さるであろう。

“父子八人で宋朝に降伏した時
潘仁美は矢の恨みを抱いていた
今から石碑に頭を打ちつけて死に
魂は一足先に閻魔にまみえよう”

韓延壽 ああ、惜しいことに楊令公は、李陵碑に頭を打ちつけて死んでしまった。楊六めが出陣して来たら、私の兵の大半をそちらに割いておき、小者には老將軍の死体を運ばせ、本陣に功を献上しに行こう。

楊景（突然登場） 私は楊景でございます。ようやく敵陣から抜け出たが、凶らずも父上が敵陣の中に陥れられてしまい、私は今から再び突入して父上を救いに行こう。前方で蕃兵が道をふさいでいるが、この野蛮な賊め道を開けろ。

韓延壽 何と楊六めではないか。お前のところの老將軍は、李陵碑に頭を打ちつけて死んでしまったぞ。お前のような賊は、我らに降伏するがよい。

楊景 凶らずも父上が李陵碑に頭を打ちつけて亡くなられたとは、ああ、父上、とても悲しゅうございます。この蕃兵め、私はお前とは戦わず、東京へ、お前を訴えに行く。

韓延壽 お前が投降せず、戦いもしないのならば、皆の者、陣へ戻り、功を献上するとしよう。

“惜しむべし金刀の楊令公
英雄はこの度石碑に頭を打ちつけて死んだ
私は多くの兵馬を失いはしたが
死体を運んで功を献上しに行こう”（退場）

楊景 私は夜を徹して、東京へ訴えに、一つ行くとしよう。（唱う）

【仙呂・賞花時】

“思わず我が両目から雨のように涙が流れる
父上が濡れ衣で死んだ恨みはいつ晴れるのか
かつて我らは忠孝を抱き、帝のはかりごとをお助けした

今からこの谷より出陣し、私は命も顧みず、恨みを晴らそう”（退場）

〔注〕

- 水泄不通…堅固な様。『三國志演義』第九十二回、姜維の白に「近聞諸葛亮殺敗夏侯楙、困於南安、水泄不通（近頃聞くところによると諸葛亮は夏侯楙を破り、南安を包囲し、水も漏らさぬほどとのこと）」とある。また「水泄不漏」「水洩不通」という形もある。「金錢記」（古名家本）第三折【醉春風】「即漸的病患將成、飲食少進、剗的似水泄般不漏（次第に病は篤くなり、食事が喉を通らないのは、水も漏らさぬよう）」。
- 整搦…整頓する。特に軍を整えることをいう。「存孝打虎」（于小穀本）第一折、李克用の白に「則今日整搦人馬、破黄巢去（今から人馬を整え、黄巢を破りに行こう）」とあり、「三戰呂布」（内府本）第一折、呂布の白に「即今整搦下大勢人馬（今から大軍を整えよ）」とある。
- 單人獨馬…単独で行うこと。「單鎗獨馬」「匹馬單鎗」とも。「單鞭奪槊」（脈望館本）第二折、尉遲恭の白に「我如今單人獨馬前行（私は今から単騎で先に行きましょう）」とある。
- 貼肉…身に着けること。『水滸傳』（容與堂本）第四十九回に「教顧大嫂貼肉藏了尖刀、扮做個送飯的婦人先去（顧大嫂にはヒ首を肌忍ばせ、差し入れに行く女に扮して先に行くようにさせた）」とある。
- 狼煙砲…恐らく「信砲」と同じく、合図を送るための大砲であろう。
- 消耗…消息、知らせ。「金鳳釵」（于小穀本）第二折【煞尾】「望九重宮裏無消耗、幹將我二百青蚨落空了（宮城を望めども知らせはなく、虚しく二百の錢を失う）」。
- 邪祟…邪鬼。もののけ。「後庭花」（古名家本）第四折【倘秀才】「他那里門定桃符辟邪祟、增福祿、畫着鍾馗（あやつの家門には桃のお札を貼って邪鬼を避け、福祿を増し、鍾馗を描いている）」。
- 忘生捨死…命を顧みず戦うことをいう。「薛仁貴」（元刊本）楔子【端正好】「拜辭了年老爺娘、你待忘生捨死在沙場上（年老いた両親に別れを告げ、お前は戦場で命懸けで戦うつもりか）」。
- 草寇…こそどろ。または反乱軍。「博望燒屯」（元刊本）第二折【梁州第七】「覩寰中草寇如無物（世の中の賊軍などなんでもない）」。
- 人有所願、天必從之…人願うところあれば、天必ず従う。願ったり叶ったり。「魔合羅」

- (元曲選本) 第二折、李文道の白にも見える。また「儂梅香」(息機子本) 第三折、白敏中の白には「人有善願、天必從之」とある。
- 果桌…宴会に使う机。また宴席そのものを指す。「望江亭」(息機子本) 第三折、楊衙内の白に「擡過果桌來。我和小娘子飲三盃。將酒來(机を持って来い。この娘と何杯か飲むとしよう。酒をもて)」とある。
- 猜三枚…「猜枚」と同義であろう。拳を打つこと。
- 更待干罷…どうしてただで済まされよう、という定型表現。「救孝子」(元曲選本) 楔子、賽盧医の白に「你就一刀殺了他、更待干罷(お前が一刀のもとにあの者を殺したならば、どうしてただで済まされようか)」とある。
- 打攪…だめにする。ぶち壊す。「單鞭奪槊」(脈望館本) 第二折、元吉の白に「自從把敬徳下在牢中、我則要暗算了他性命、則被這徐茂公左來右去打攪(敬徳が牢に下されてから、私は密かにあやつの命を奪おうとしているが、徐茂公があれこれと邪魔をする)」とある。
- 牙不…蒙古語 **yabu** の音写。漢訳は「行」。「牙歩」「迓歩」にも作る。「約兒赤」(**yorči**) の音写。漢訳は「去」と共に用いられることもある。「黒旋風」(脈望館本) 楔子、白衙内の白に「若見了你呵、跳上馬、牙不約兒赤便走(お前と合流したら、馬に飛び乗り、すぐに行こう)」とある。
- 幾處笙歌幾處愁…唐の章孝標「八月」詩に「長安夜夜家家月、幾處笙歌幾處愁(長安では毎夜どの家も月を楽しむが、笙に合わせた歌が聞こえる度に悲しくなる)」とあるのに基づく。「竹葉舟」(元刊本) 第二折【掛玉鉤】、「楚昭王」(元刊本) 第二折【紫花兒序】、「羅李郎」(古名家本) 第一折【一半兒】にも見える。また「竹葉舟」(元曲選本) 第二折【鴛鴦煞尾】では「幾處笙歌、幾家儂憊」に作る。
- 花標樹…処刑の際に相手を縛り付ける柱。「燕青博魚」(内府本) 第四折、宋江の白に「將這姦夫姦婦背挿繩纏、拏上山去、縛在花標樹上、殺壞了者(この間男と淫婦を後ろ手に縛り、山に引っ立て、花標樹に縛り付けて、殺してしまえ)」とある。
- 悶酒…やけ酒。憂さを晴らす酒。庾吉甫【定風波】套「思情」【鳳鸞吟】「飲幾盞悶酒、醉了時罷手、則怕酒醒了時還依舊(何杯もやけ酒を飲み、酔ってしまえばそれまでだが、恐れるのは醒めた後に元の木阿弥となること)」。
- 金鼓旗…旗指物の一種のようである。『元史』卷七十九「輿服志二・儀仗」に「金鼓旗、黃質、黃火焰脚、書金鼓字(金鼓旗は、黄色の布地で、黄色い炎の形、「金鼓」の文字が

- 書かれている)」とある。ただし「楚昭王」(元刊本) 第一折や「三戰呂布」(脈望館本) 第一折など、雑劇では「金鼓旗幡」という形も見られ、鐘・太鼓・旗指物それぞれを指す可能性も考えられる。
- 事到如今…こうなっては。事ここに至っては。「竇娥冤」(古名家本) 第一折、蔡婆婆の白に「孩兒也、事到如今、你也招了女婿罷(娘や、もうこうなっては、お前もお婿さんをもらってしまいなさい)」とある。
 - 酸麻…だるくしびれていること。「趙禮讓肥」(内府本) 第一折【混江龍】「壓的我這雙肩苦痛、走的我這兩腿酸麻(押さえられて私の両肩は痛くなり、歩けば私の両足はしびれてしまった)」。
 - 桑乾河…山西省北部と河北省西北部を流れる河。
 - 昏沈…朦朧としている。頭がぼんやりしている。『董解元西廂記諸宮調』卷一【萬金臺】後の【尾】に「坐地又昏沈睡不穩(座れば頭がぼんやりとして安らかに眠ることもできぬ)」とある。
 - 魂子…死後の男子の亡霊を指す。恨みを吞んで死んだ者の魂として登場し、またしばしば正末によって演じられ、志士の精神の強靱さを表す。公案小説、包公劇などにもよく見られる。
 - 兀的不…なんと～ではないか。「介子推」(元刊本) 第四折【調笑令】「兀的不辛苦殺凌煙閣上人(凌煙閣に掲げられるべき功臣をなんと苦しめたことよ)」。
 - 我說兀的做甚麼也…「說兀的做甚」は事情を説明する時の決まり文句。多くは続けて詩がうたわれる。「謝天香」(古名家本) 第四折など。
 - 龍泉…名劍のこと。『晉書』卷三十六「張華傳」に、張華が地中からそれぞれ龍泉と太阿の銘が入った二振りの劍を得た話がある。「單刀會」(元刊本) 第二折【煞尾】「他輕舉龍泉殺車胄(彼は軽々と劍を掲げて車胄を殺した)」。
 - 七魄悠悠…魂が寄る辺ない様。「范張雞黍」(元刊本) 第三折【高過浪來里】「魂魄悠悠、誰問誰揪(魂は寄る辺なく、誰も気に掛けない)」のように「魂魄悠悠」という用例もある。
 - 三魂杳杳…魂が遙か遠くへ行く様。「霍光鬼諫」(元刊本) 第三折【二煞】「子落的三魂杳杳、四體烘烘、七魄悠悠(そなたは三魂が遙か遠くへ行き、四体を焼かれ、七魄が寄る辺ないことになった)」。
 - 跚馬兒…「躡馬兒」と同じく、雑劇中で馬に跨る動作をいう。「跚」は『宋元語言詞典』

に「蹠、踏」とあり、また「躡」にも作るとする。「馬兒」は「竹馬兒」ともいい、演劇で用いる張り子の馬のこと。

○母刺赤…未詳。『華夷譯語』「人物門」に「馬夫」の音写で「兀刺赤 (ulāci)」とあり、『至元譯語』「軍官門」に「牧馬人」の音写で「木里赤 (muriči)」とある。それならばここでは「虎刺孩母刺赤」で馬飼いの野郎めと罵っていることになるか。

○自在性兒…勝手気ままなこと。「鐵拐李」(元曲選本) 第一折、張千の白に「你好自在性兒、我爲你在我哥哥面前、怎生樣勸解 (何と勝手なやつだ、私がお前のために旦那の前で、どれ程とりなしてやったことか)」とある。

○一靈兒…心や魂を指す。「三奪槩」(元刊本) 第四折【鮑老兒】「元吉那廝一靈兒正訴冤、敢論告他閻王殿 (元吉めの魂は恨みを訴え、あの世の閻魔殿へ申し立てるであろう)」。

○告御狀…「告狀」は告訴、告発することで、帝に対する訴えを「御狀」という。「黒旋風」(脈望館本) 第二折、店小二の白に「那一箇趕那廝去了、這一箇告狀去了 (あちらではあやつを追い掛けて行き、こちらでは訴えに行ってしまった)」とある。

○汪汪…涙を流す形容。「魔合羅」(元刊本) 第三折【金菊香】「被死囚枷壓的曲了脊樑、把咽喉剛舒、最傷心兩眼淚汪汪 (死刑囚の枷の重みで背筋をかがませ、首を伸ばし、痛ましいことに両目から涙を流している)」。

○皇猷…天子のはかりごと。正史などでよく用いられる他、唐の岑参「送顔平原」詩に「吾兄鎮河朔、拜命宣皇猷 (我が兄は河北を鎮守し、帝のはかりごとを拜命している)」とある。

第三折

[訳]

(潘太師が浄の扮する賀懷簡・劉君期と共に兵士を連れて登場)

潘太師

“朝廷の中で自分こそが頭となり

権勢をほしいままにして人さえ殺す”

私は潘太師でございます。この度楊令公父子三人は、目論見通り私の計略にかかり、楊七郎は矢を集中させて射殺してやったし、令公の老いぼれも、李陵碑に頭を打ちつけて死んだと聞く。ただ楊景のやつめは、敵陣を突破して、東京へ私を訴えに行ったという。

私は各地で行方を捜させており、もし捕らえたならば、一族根絶やしにして、芽も出ないようにしてこそ、ようやく私の日頃の願いが叶うのだ。これお前門の前で見張りをし、軍事情況に何かあれば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

黨彦進（登場）

“国を助け安らかにする支えとなり
勇猛に敵と戦い辺境を鎮守する
官は太尉となり身は栄え
心から忠義を尽くし帝に報いる”

私は黨彦進でございます。祖先は朔州馬邑縣の者で、子供の頃から魏の元帥の杜重威に仕え、慎み深いことを好んで頂き、壮年になると武勇は人並み外れたものとなったが、文字は知らぬ。太祖に従って四方を征討し、いつもまじめにしている。鎧を着れば、毛髪が全て逆立つ。李繼勳と共に北漢を攻めた時には、私は自ら数騎を率い、奮戦して進み、めざましい功績を重ねたので、天下の誰もが私を驍将と称えた。私は太尉の職に封じられている。賀懷簡と劉君期は潘仁美に従って副帥となったが、三人は無礼にも、辺境にて楊家の父子を陥れて殺した。楊景が敵陣を突破し、東京へやって来て訴え出たので、この度八大王様の命を奉じ、帝に奏上したところ、私に自ら辺境へ行き、こやつら三人を捕らえ、朝廷へ戻って罪を問うように命ぜられた。思うに潘仁美は辺境において、強い権力を持っているので、反乱を起こしてこのことを握りつぶす恐れがある。私がむこうに到着したら、良い考えがある。早くも着いたわい。これお前、黨彦進がやって来たのと知らせてくれ。

兵士 かしこまりました。（知らせるしぐさをする）はっ、元帥にお知らせします、黨彦進様が来られました。

潘太師 黨彦進だと、あやつは朝廷の太尉なのに、辺境まで何用で来たのか。

賀懷簡 元帥、あやつは達達人で、最もまじめな者です。私とあなたとで楊景が訴え出た一件についてあやつに尋ねれば、あやつはきっと話すでしょう。

潘太師 そなたの言う通りだ。お通ししろ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

黨彦進（まみえるしぐさをする）やあやあやあ、太師に、お二方の將軍よ、出陣ご苦勞である。

潘太師 いやいや、職分としての務めであります。お尋ねしますが太尉は、一体何用でこちらに來られたのでしょうか。

黨太尉 元帥よ、そなたは遼を征伐しているが、全軍が苦勞しているので、帝の命を奉じ、私が軍の慰勞に來たのだ。

劉君期 それならば、これ机を持って來て、太尉のために歡迎の宴を開くのだ。

潘太師 酒をもて。太尉この杯をお飲み下さい。

賀懷簡 太尉にお尋ねしますが、あなたが朝廷を出發なされた日に、楊景が何やら訴え出した一件は、ご存じでしょうか。

黨太尉 私は知らぬ。

劉君期 この老いぼれは、またとぼけておるが、話してくれば、私はお前に飴を買ってやろう。

黨太尉 あったあつたあつた、楊景が太師を訴えたのだ。河東へ劉薛王を攻めた時、楊令公が太師を射たことがあつたが、この旧怨から、そなたが彼ら父子を悪日に出陣させ、虎口交牙峪に閉じ込め、内に糧秣無く、外に援軍の無い情況にし、楊七郎が敵陣を突破し、そなたに救援を求めたのに、そなた達三人は楊七郎に矢を集中させて射殺したというのだ。このようなことがあつたのか。

潘太師 太尉、全くそのようなことはありません。

黨太尉 それなら構わないが、あの者はそなたが遼兵と結託し、元帥の官印を韓延壽に与えたとも言っていたぞ。

潘太師 あやつは何と無礼な。私は国家の大臣であり、異國に投降するはずもなく、あやつが出鱈目をでっち上げているのです。

黨太尉 太師よ、そなたの元帥印は本当にあるのか。

賀懷簡 元帥、官印をお持ちして、太尉にお見せしては。

潘太師 これお前官印を持って參れ。

兵士 かしこまりました。(官印を捧げ持つしぐさをする)

黨太尉 私に見せよ。太師よ、これはどういうものだ。

潘太師 これこそ官印でございます。

黨太尉 これこそ官印だ。楊景よ、「一つが眞実なら百も眞実、一つが嘘なら百も嘘」というではないか。お前には偽りを話して眞実を話さず、君主をあざむいた罪がある。この官印を韓延壽に与えるはずはないし、もし与えたところで、何も大したことにはならな

い。

潘太師 こやつはまことに達人で、印を手に入れば生殺与奪は、私の意のままであることを知らぬ。太尉、あなたは「軍は印に従って変わり、薬は引（副薬）に従って変わる」ということをご存知でしょう。

黨太尉 太師、どうして「軍は印に従って変わり、薬は引に従って変わる」と言うのか。

潘太師 元帥たる者、凡そ出陣する時には、官印が必要であり、この印があつてこそ、軍を整えることができるのです。

黨太尉 ほう、太師はこの印があつてこそ、軍を整えることができ、この印がなければ、軍を動かすことはできないのか。信じられないが、私がこの印を掛けたならば、これらの軍を動かすことができるのか。

劉君期 そうです。この場で、あなたに印を掛けてあげましょう。軍どころか、私劉めも、あなたの命に従います。

黨太尉 全軍、警備の者、猛将、戦い慣れた英雄達よ、私は今印を掛けられて元帥となった。我が軍令をよく聞き、命令に背く者は斬る。鬨の声を三度上げよ。

兵士 承知しました。（一同が鬨の声を上げるしぐさをする）

黨太尉 捕り手よ、潘太師、賀懐簡、劉君期を捕らえよ。

兵士 かしこまりました。（三人を捕らえるしぐさをする）

潘太師 太尉よ、どうして我らを捕らえるのですか。

黨太尉 この老いぼれめ、私は恩賞を送りに来たのではなく、帝の命を奉じ、お前が辺境にて、忠臣や良将を陥れ、国を誤らせ天下を欺く罪を犯したことについて、楊景が都にて、訴え出た件で来たのだ。いかんせんお前は強い兵権を持っているので、私は帝の命を奉じ、智恵で元帥の官印を取り上げ、お前達三人の逆賊を捕らえたのだ。

潘太師 あやつの計略にかかってしまったわい。

黨太尉 これお前この三人を縄で縛り、護送車の中に入れ、東京へ戻り帝にまみえに行くぞ。

“帝の聖なる徳は高く天下は清く
股肱の良将が聖明なる帝をお助けする
この度は計略を用いて元帥の印を取り上げ
さあ自らこの三人を都へ護送しよう”

（黨太尉が兵士と共に三人を捕らえて退場）

住職（登場）

“金色の仏像に参り一本の香を焚き
経を唱えて功德を積むこと数行
禅寺や古い上着を繕ってないことを恥じるが
ただこの心を蒼天に捧げている”

私は皈依寺の住職の雪冤でございます。私が戒律を守り仏道を修行すること厳しく、仏教に精通しているために、各地の施主は、仰ぎ慕わない者はいない。先頃太師の潘仁美が、賀懐簡、劉君期の二人の国舅と共に、黨太尉によって辺境で官印を取り上げられたということがあったが、この寺へ護送されて来て、ここで軟禁され、お裁きを待つことになっている。私はここで待ち、誰かやって来るか見てみるとしよう。

（潘太師が賀懐簡・劉君期と共に登場）

潘太師 「事前に考えておけば、後悔して苦勞することはない」というもの。私は潘太師でございます。楊礼公父子の二人を殺した後、囚らずも楊景がただちに東京へ訴え出たために、黨太尉が遣わされて来て、私の官印を取り上げ、我ら三人を、この太原府（山西省太原市）の皈依寺に閉じ込めた。帝はどのようなお裁きを下すことやら。

賀懐簡 楊景が帝に訴え出たと聞くが、一体どうして取り調べ官が来ないのだ。ここに軟禁されているのも、いつになれば終わるのか。

劉君期 下らん話だ、取り調べなどいるもんか。楊七郎を矢で射殺して援軍を出さなかったことを白状したならば、どうして命があろう。とりあえずここで軟禁されておき、一日中酒を飲んで遊んでいよう。

潘太師 これ住職よ、そなたは山門の見張りをせよ。役人がやって来て、私がここにいることを知っていたら、きっと様子を探りに来た者だ。やって来たら、私に知らせよ。

住職 かしこまりました。

寇萊公（正末が寇萊公に扮して登場） 私は姓を寇、名を準、字を平仲といい、官は萊公の職に奉じられている。この度帝の命と、八大王様の令旨を奉じ、潘仁美、賀懐簡、劉君期が辺境にて忠臣を損なおうとして、楊家の父子を悪日に出陣させ、楊七郎に矢を集中させて射殺し、老令公を李陵碑に頭を打ちつけて死ぬまで追い詰め、援軍を出さず、中軍に居座り、一日中酒を飲んで、軍事情況に対処しなかったために、黨彦進にあやつの官印を智慧によって取り上げさせ、皈依寺に護送して軟禁している。帝の命を奉じ、私を取り調べに行くのである。私は今取り調べ官の服装をしておらず、私が礼儀を欠いて

笏を落としたために、太原の知府に降格され、道中であやつら三人に会いに来たと言えば、あやつらはきっと酒宴を開いてもてなすであろうから、話をする中で、必ずやあやつらの真相を暴き出してやろう。その時は私に考えがある。(唱う)

【商調・集賢賓】

“私は詔勅を奉じ取り調べ官として帝の元を離れ
昼夜を問わず旅路を行く
憎むべきは忠臣を陥れた残忍な潘仁美が、帝をお守りする勇敢な兵を多く葬ったこと
あやつらはうきうきと酒宴を開き、にやにやと計略を巡らせる
あやつらは楊七郎をたちまちに殺し
まことに残忍で陰険な心
私を激しく怒らせ、思わず悲しみ痛んで珠のような涙を流させる”

【逍遙樂】

“あやつらの行いは許し難く
彼ら楊家の父子を陥れて殺した
彼ら楊家は濡れ衣を着せられたのであり
まことに私を嘆かせる
思わず怒りで胸が張り裂けんばかりになり
あやつらが忠臣を損なったことは一族根絶やしにすべき罪
私があやつらに供述書を書かせたならば
あやつらの罪は山ほど高く、性根は狼のように残忍で、心は虎のように凶悪”
早くも着いたわい。(住職にまみえるしぐさをする) これ和尚よ、私を知っているか。

住職 あなた様のことは存じません。

寇萊公 我こそは寇萊公である。

住職 お迎えも致しませんで、丞相様にはどうかお許し下さいますよう。

寇萊公 挨拶など必要ない。これ和尚よ、お前に話してやるが、私は私用で来たのではなく、帝の命を奉じ、潘仁美ら三人のことを自ら取り調べに来たのだ。あやつらが私に会えば、きっと酒宴を開いてもてなすであろう。お前は方丈の中に戻り、紙、墨、筆、硯を用意して様子を控えておれ。私が酒宴の席であやつらに問いかければ、あやつらは返答をするだろう。お前はあやつらの言葉通りに、はっきりと書き、間違えてはならぬ。もしこのことを漏らしたならば、決して許しはしないぞ。

住職 謹んでご命令をお受け致します。

寇萊公 寇萊公が会いに来たと、知らせに行け。

住職 かしこまりました。(知らせるしぐさをする)太師、寇萊公様がお見えになりました。

潘太師 お通ししろ。

住職 かしこまりました。お通り下さい。

(寇萊公がまみえるしぐさをする)

潘太師 丞相様、お迎えも致しませんで、お咎めなさいませぬよう。

寇萊公 恐縮です。

賀懐簡 丞相様はどちらへお出かけですか。

寇萊公 閣下は知るまいが、私が礼儀を欠いて笏を落としたために、帝は大層お怒りになられ、この度この太原府の知府に降格されることになり、ここを通りかかった。太師とお二方がおられると聞いたので、お訪ねしたのだ。(ひざまずくしぐさをする)太師よ、お三方を煩わせてしまうが、もし宮中に到着し、帝にお会いした時に、どうにかして私を抜擢するよう一言帝に推薦して頂ければ、私は必ずや恩返しをし、この大恩は決して忘れはせぬ。

潘太師 丞相様ご安心を、私が宮中に到着し、帝にお会いして、何事もなければ、私が帝の御前にてお話しし、あなたを朝廷へ呼び戻し、萊國公の職に復帰させましょう。

寇萊公 太師に感謝致す。

潘太師 これお前机を持って参れ。丞相様に三杯飲んで頂いても、構わないであろう。

劉君期 私に言わせれば寇閣下は、礼儀を欠いて笏を落としましたのですから、我慢なさいませ。知府に降格されただけでしょう。我ら三人のように、楊七郎に矢を集中させて射殺し、我らの策略によって、援軍を送らず、楊の老いぼれに碑に頭を打ちつけて死なせ、一人と言わず、十人も死なせても、大したことはありません。我ら三人は護送されて来て、この寺の中で軟禁されているのです。私はあの時良い心を持っていてあやつを憎んではいなかったのに、まさしく「せっかくの親切が仇になる」というもの。

寇萊公 (唱う)

【金菊香】

“太師そなたは兵を駆けさせ将を率いて軍を統率していたが

私は礼儀を欠いて笏を落とし礼法に疎い

この度官位を落とされ危機に遭うのはまことに冤罪である

太師そなたはよく考えよ

今の太平の世ではそなたのような老将は用いられない”

潘太師 丞相様の言われる通り。思えばかつて河東へ出兵した時、私は多くの辛苦を味わったが、今は太平であるので、彼らは楊令公のことを認めるだけで、どうして私を用いるだろうか。

寇萊公 これ和尚よ、我らはここで話をしておるから、お前は方丈の中へ戻って休め。

住職 かしこまりました。(退場)

潘太師 丞相様、一つお尋ねしたいことがあります。黨彦進が我ら三人を、この寺へ護送して数日経ちますが、まだ帝のお考えは明らかにならないのでしょうか。

寇萊公 太師よ、そなたは国の支えとなる重臣であり、またお二方も、心配には及ばぬ。私が思うに楊家の父子は、まことに無礼であり、太師の行ったことは間違っておらぬ。私が宮中にいたならば、太師と共謀して、帝に申し上げ、楊家の父子を根絶やしにし、芽も出ないようにしたものを。いかんせん私は降格されてしまったので策の施しようもない。お三方、我らは元は同じく朝廷に仕える臣下であり、幸いにもこんなところへやって来て、一心同体の仲となったのだから、話をする時は互いに騙すことはないようにしよう。そなたが以前帝に幽州へおいで願ったと楊景が言っている一件は、そなた達には一体どのような考えがあったのだ。

潘太師 丞相様、他の者であったならば、お話ししないところですよ。実は私はわざと帝に幽州へおいで頂き、密かに楊家の父子を狙っていたのです。果たして蕃兵が城を包囲し、楊令公が四人の息子を犠牲にして、ようやく帝をお救いして東京へ戻りましたが、実は私が引き起こしたことなのです。

寇萊公 またそなたは、彼ら父子三人を悪日に出陣させたとも楊景は言っているが、これは本当か。

潘太師 丞相様はご存知ないでしょう。先頃韓延壽が代州を包囲したため、帝は私を元帥とし、あやつら父子を先鋒としました。我らが兵を率いて先に代州へ到着し、蕃兵と戦っていたところ、あやつら父子は遅れて到着したので、私は本来は殺すつもりでしたが、呼延贊に諫められたので、殺さなかったのです。ちょうどあの日は悪日だったので、私はあやつらを出陣させたのであり、確かに私はあやつらを悪日に出陣させました。

寇萊公 またそなたは楊七郎を矢を集中させて射殺したとも楊景は言っているが、本当にその者を射たのか。

潘太師 あやつら父子三人は、軍を率いて蕃兵と戦いましたが、凶らずも土金宿によって
両狼山の虎口交牙峪に閉じ込められました。楊七郎が敵陣を突破して、私に援軍を要請
しに来ましたが、私が援軍を出さずにいると、あやつは私を罵りましたので、あやつを
捕らえ、はりつけ柱に縛り付け、射殺しました。

劉君期 私が賀の兄貴と一緒に矢を射るのを手伝ったのは、ただあやつをからかっただけ
ですが、本当に射殺すとは思いませんでした。私はあやつを射ましたが、射たことが間
違いだっただので、今あなたが手柄を立てることになったのです。

寇萊公 またそなたが援軍を出さなかったので、楊令公は李陵碑に頭を打ちつけて死んだ
とも楊景は言っているが、一体これらのことは、確かに本当のことなのか。

潘太師 帝に幽州へおいで頂き、あやつら兄弟四人を亡き者にし、悪日に出陣させて、楊
七郎を射殺し、援軍を出さず、令公を李陵碑に頭を打ちつけて死ぬように追い詰めたの
は、全て私が引き起こしたことで、どれも本当のことであり、決して嘘はありません。
丞相様、他の者であったならば、私は詳しく話しませんでしたぞ。

劉君期 寇様、我が元帥は犬のように正直な人であり、この劉めも嘘はつきませんし、少
しでも嘘があったならば、私は馬鹿者です。

寇萊公 これらのことはそれぞれ全て本当なのか。

劉君期 この老いぼれめ、私がこんなに大きな誓いを立てたばかりなのに。もし嘘があっ
たならば、もう一丁大きな誓いを立てて、私は大馬鹿者だ。

寇萊公（怒るしぐさをする）この愚か者どもが。私は私用で来たのではなく、帝の命を奉
じて自らこの事件を取り調べに来たのだ。お前達三人の供述を得たので、私と共に朝廷
へ戻り、帝にお会いしに行くとしようぞ。

劉君期 待て待て。お前と共に朝廷へ戻れば、命が危ういから、私は行かないぞ。

潘太師 これは、丞相様、私は先程あなたをからかっただけです。どうして我らの供述を
得たから、共に朝廷へ戻ろうなどと仰るのです。昔から「公的には文書に依り私的には
約束に依る」と言いますが、私が楊家の父子を殺したという、供述書が何かありますか。
一言半句もないのに、どのようにして私に供述させるのですか。

寇萊公 お前の供述は、はっきりとしたものであるのに、まだ認めないとは、どう言い逃
れるつもりだ。

潘太師 私がどこで供述しましたか。

寇萊公 お前の供述はここにあるぞ。これ和尚よ、あやつら三人の供述書を持って参れ。

住職 さあさあさあ、供述書はここだ。

潘太師 この和尚め、私の供述書などあるものか。

寇萊公 これ和尚よ、読み上げてあやつに聞かせてやれ。

住職 「供述人は潘仁美、賀懐簡、劉君期で、それぞれ年齢は異なる。帝に幽州へおいで頂き、四将を亡き者にしたのは、私がしたこと。楊令公ら父子三人を、悪日に出陣させたのも、私がしたこと。矢を集中させて楊七郎を射殺したのも、私がしたこと。援軍を出さなかったのも、私がしたこと。楊令公を追い詰めて李陵碑に頭を打ちつけて死なせたのも、私がしたこと。どれも本当のことで、決して嘘偽りなく、真実を供述しました。淳化五年十二月某日。」

劉君期 ほう、この和尚はまことに有能で、一言一言ははっきりと書いてあるが、元々この劉は何も良心に背くことは言っていない。太師、あなたはきっと楊家の父子のために命を償うことになるから、私があなただの野辺送りをしよう。

寇萊公 これお前達こやつら三人を東京へ護送し、しっかりと牢へ繋いでおけ。(唱う)

【梧葉兒】

“お前がはっきりと申し述べた供述書は、私が密かに細かく書き取らせ
どれも嘘偽りがあるはずがない
彼ら楊家の父子はむごい目に遭い、一家全員で苦しみを受けたのに
お前はなおも言い逃れる
早く彼らの命を償うがよい”

潘太師 丞相様、私が先程申したことは冗談です。「盗人を捕らえるには盗品が証拠、他人を殴った罪を問うには傷が証拠」といい、私が楊七郎を射殺していないことは言うまでもありませんが、もし私が彼を射殺したのならば、その七郎の遺体はどこにあるのですか。矢を数えた者はどこにいるのですか。誰が証人なのですか。

寇萊公 こうしている間にどうにか証人を得ることができれば、良いのだが。

陳林・柴敢(突然登場) はっ、我ら二人が証人です。

潘太師 一体どうしたことだ。

寇萊公 おお、そなた達が証人ならば、その時の状況を話してみよ。

陳林 丞相様にはひとまず雷のような怒りを静め、虎狼のような威風をお収め下さい。我ら二人の一方は陳林、もう一方は柴敢でございます。あの日潘太師が賀懐簡、劉君期と共に酒を飲んでいたところ、七郎将軍が、太師に援軍を要請しに来たというのに、太師

は援軍を出しませんでした。七郎は、「我が父は両狼山の虎口交牙峪に閉じ込められているというのに、お前達はここで楽しげに花を簪にして酒を飲んでいるとは、まさしく『歌うところあれば憂えるところあり』だ」と言いました。潘太師はそれを聞くと、心に怒りを生じ、七郎を捕らえ、はりつけ柱に縛り付け、七郎に矢を集中させて射殺そうとしました。賀懐簡と劉君期も手伝い、百三本の矢を射て、七十二本が当たり、七郎を射殺すと、我ら二人に遺体を川の中へ放り込むように命じたのですが、遺体は下流へ向かわず、上流へ戻って行きました。我らは遺体をあの七本目の柳の樹の下に埋めました。このような話をしてどうするのかと言いますと、丞相様に公正な処理をお願いするために、我ら二人は初めから詳細にお話したのです。目の前の我ら二人が証人であり、楊七郎は全くの濡れ衣でした。

寇萊公 それは本当か。

陳林 決して嘘は申しません。

劉君期 ああ、もう終わりだ。

寇萊公 お前は今やまぎれもない犯人であるが、何か言い分はあるか。

潘太師 丞相様にはどうかお情けを。私とあなたとの古い付き合いを思い、お許し下さい。

寇萊公（唱う）

【醋葫蘆】

“お前はざる賢く残忍な悪党なので

忠臣を謀殺し、帝を欺いた

この度法を犯しておきながら恨み言を言うな”

劉君期 丞相様、我らはこれから朝廷へ行って叱られるのでしょうか。

寇萊公（唱う）

“お前達は罪に照らして罰を与えるべきであり

この度危機に直面してお前達はどうするつもりなのだ”

賀懐簡 丞相様、我らがこの度行けば、帝はどのようになさるおつもりなのでしょうか。

劉君期 心配ない。東京に着いたら、きっとこの首をはねるだろうさ。首をはねるならばねれば良いが、体は外に放り出しておいてくれ。

賀懐簡 どうしてだ。

劉君期 六月になって大雨が降れば、また首が生えてきて、そしたらまた好漢になるのさ。

賀懐簡 生えてくるものか。

寇萊公 これお前、こやつら三人を、東京へ護送し、法に照らして極刑に処し、楊家の父子のために命を償わせよ。(唱う)

【浪來裏煞】

“かつては陣営の中で逆賊を捕らえ、この度は皈依寺にて真偽を問い質した

お前はあの忠臣良将に対して悪だくみをし

思うにお前が兵を留めて出陣させなかった心はまことに残忍”

劉君期 丞相様、どうか少し大目に見て頂き、我らに活路を示して下さい、今後二度とこのようなことは致しません。

寇萊公 (唱う)

“決して活路を求めようと思うな

お前が東京へ着けば錦の陣羽織は血に染まる”(共に退場)

〔注〕

○挨拿…搜索して捕らえる。手配する。『古今小説』卷二十一「臨安里錢婆留發跡」「做公的報知縣尉、訪着了這一夥姓名、尚未挨拿(捕り手は県尉に、その者の姓名は訪ね当てたが、まだ捕らえてはいないと報告した)」。

○黨彦進…黨進(九二八～九七八)に当たる人物。黨進は朔州馬邑(山西省朔州市)の人。文字を知らなかったが、趙匡胤の下で武功を立てて重用された。『宋史』卷二六〇に伝がある。史実では楊業が戦死した時点(九八六)では既に生存していないが、本劇以外に、楊業没後を舞台とする「活拿蕭天佑」(脈望館本)においてもやはり太尉の黨彦進として登場しており、雑劇においては朝臣の長老的存在として認知されていたようである。

○棟梁…大黒柱、屋台骨。転じて国家の柱石たる人物を指す。「三奪槩」(元刊本)第一折【油葫蘆】「却須是真棟梁、剗地廡廡隄防(国家の柱石となるべき者に対し、どうして警戒なさるのですか)」。

○太尉…武官の尊称。「陳搏高臥」(古名家本)では太祖の使臣として黨繼恩という人物が登場し、太尉の黨進の息子という設定になっている。「殺狗勸夫」(脈望館本)第二折【倘秀才】にも「休想那陶學士交酸寒如黨太尉(陶穀が太尉の黨進より貧しいと思うな)」とある。

○杜重威…朔州(山西省朔縣)の人。後晋の高祖・石敬瑭の妹婿に当たる。開運三年(九四六)、遼が後晋へ侵攻すると遼に降伏し、翌年に鄴(河北省邯鄲市臨漳県)へ遷された。

後に劉知遠に仕えたが、劉知遠が没すると殺された（?～九四八）。『舊五代史』卷一〇九、『新五代史』卷五十二に伝がある。

○恂恂…慎み深い様。また、まじめな様。「陳母教子」（内府本）第二折、陳良叟の白に「孔子居於郷堂、見長幼禮法恂恂（孔子は村里にいた時、長幼の礼法に慎み深く従っていた）」とある。

○擯甲…鎧をまとう。「擯甲」「貫甲」にも作る。『劉知遠諸宮調』卷十二【玉翼蟬】の白に「東西幕下、遣兒郎擯甲披衣、南北槽頭、催戰馬盤韁墜蹬（東西の陣中では、兵士に鎧と上着をまとわせ、南北の馬屋では、馬に手綱を付け鎧を下ろさせる）」とあり、「破天陣」（内府本）第三折【鮑老兒】に「有英雄虎將、開弓蹬弩、貫甲披袍（英雄たる勇猛な將軍は、弓や弩を引き、鎧や陣羽織を身に着ける）」とある。

○李繼勳…大名元城（河北省邯鄲市大名縣）の人。周、宋に仕え、北漢や遼との戦いで武勇を振るった（九一六～九七七）。『宋史』卷二五四に伝がある。

○激變…政変、暴動のこと。「趙氏孤兒」（元曲選本）第五折、魏絳の白に「奉主公的命、道屠岸賈兵權太重、誠恐一時激變（屠岸賈の兵権は強大であり、政変の恐れがある、との主君の命を奉じている）」とある。

○達達…蒙古人のこと。本来は宋代における北方のタタールを指す。明は天命を奉じて元に代わって中国を支配したとの立場から、元の北遷後にも王朝が継続していたことを認めず、モンゴルのことはもっぱら「達達（韃靼）」と呼び、「元」「蒙古」という呼び方はしなかった。「酷寒亭」（元曲選本）第三折、張保の白に「我道也不是回回人、也不是達達人、也不是漢兒人（私は回族でもなく、蒙古人でもなく、中国人でもない）」とある。黨彥進が「達達人」と呼ばれているのは、モデルとなった黨進が山西の出身であることから、北方の異民族のイメージがあったのであろう。

○接風…歓迎の宴席を設けること。「竹塢聽琴」（元曲選本）第一折、梁公弼の白に「便安排酒餚、與孩兒接風去來（酒と肴を用意し、この者を歓迎するのだ）」とある。

○歡喜團兒…飴。砂糖と炒り米で作る団子状の菓子。「鴛鴦被」（古名家本）第三折、劉彥明の白にも「我買歡喜團兒你吃（飴を買ってお前に食べさせてやろう）」という表現が見られる。

○牌印…地位や職権を保証するものとして、太師や元帥などに与えられた官印。「襄陽會」（内府本）第一折【鵲踏枝】「將牌印捧到尊席、多謙讓苦辭推（官印をお席にお持ちしたが、大いにへりくだってしきりに辞退なされる）」。また『三國志演義』第十二回、陶謙

の白に「萬望明公可憐漢家城池爲重、受取徐州牌印（あなたには漢室のことをよく思って頂き、この徐州の官印をお受け取り願いたい）」とある。

○椿…量詞。ものごとを数える。高安道【哨遍】套「皮匠説謊」【耍孩兒】に「一椿椿聽命休違（一々はいはいと良い返事）」とある。

○引…副薬。主薬の効果を引き出すための補助薬。「薬引子」ともいう。『西遊記』第七十八回、馱丞の白に「前者去十州三島、採將藥來、俱已完備。但只是藥引子利害、單用着一千一百一十個小兒心肝、煎湯服藥（先頃神仙の住む十州や三島へ行き、薬を取って来て、用意が整いました。しかしその副薬となるのがひどいもので、千百一十人の子供の心肝を用い、それを煎じて薬を飲むのです）」とある。

○七重圍子…幾重にも囲んだ警備の兵。「單鞭奪槊」（脈望館本）第一折【油葫蘆】「則他這七重圍子兩邊排（警備の兵は両脇に並ぶ）」。

○檻車…囚人を護送するのに用いる、囲いのある車。「西蜀夢」（元刊本）第三折【三】「除了劉封檻車里囚着三个（劉封を殺して護送車に三人を捕らえよう）」。

○巍巍…高大な様。人物の優れていることをいう用例としては、「連環計」（元曲選本）第一折、王允の白に「太師功德巍巍、當代漢而有天下也（太師の功績と仁徳は高大であり、漢に代わって天下を手にするでしょう）」とある。

○皇明…皇帝の聖明なること。「漁樵記」（元曲選本）第四折【鴛鴦煞尾】「方知是皇明日月光非遍、天恩雨露霑還淺（帝の聖明さに比べれば太陽や月の光も行き渡らず、帝の恩に比べれば雨露の潤いも少ないとようやく知った）」。

○金容…金色に輝く仏像の容姿。『西遊記』第一百回に「及乎晦影歸眞、遷移越世、金容掩色、不鏡三千之光（影暗く真に帰し、遷移して世に広まるに及びては、金色の仏像は色を掩うも、三千の光は輝かず）」とある。

○禪林…禅寺のこと。『水滸傳』（容與堂本）第五十七回に「自從落髮鬧禪林、萬里曾將壯士尋（落髪して寺を騒がせて以来、万里に壯士を尋ねる）」とある。

○皈依寺…「皈」は「帰」に同じ。

○戒行…戒律を守り修行すること。「竹塢聽琴」（元曲選本）第四折【甜水令】「爲甚麼也丢了星冠、脱了道服、解了環縵。直恁般戒行堅牢（どうして星の模様の冠を取り、道服を脱ぎ、腹帯を解くのか。かように堅く戒律を守り修行なされるとは）」。

○發落…処置する。裁きを付ける。「灰闌記」（元曲選本）第二折【逍遙樂】「你道是經官發落、怎的支吾這場棒拷（お前はお上に裁きを仰いだら、私が拷問に耐えられないと言う）」。

- 事要前思、免勞後悔…事前に考えておけば、後悔して苦勞することはない。「單鞭奪槩」(脈望館本) 第二折や「救風塵」(古名家本) 第一折などにも見える。
- 推官…刑獄を司る官。唐代は節度使や觀察使などの属官であったが、元明代には各府に推官が一人置かれた。俗に「刑庁」とも呼ばれた。
- 勘官…罪人を尋問する官吏。檢察官の一種。
- 失儀落簡…「金鳳釵」(于小穀本) 第一折、殿頭官の白に「今春有個頭名狀元、姓趙名鄂字天翼、早朝失儀落簡、奉聖人命、削了他靴笏襴袍、趕出去爲庶民百姓(今春に姓は趙、名は鄂、字は天翼という狀元が、朝議の際に礼儀を欠いて笏を落としたため、帝の命を奉じ、その者の靴や笏や上着を剥奪し、追い出して庶民にすることとなった)」とある。
- 送…命を失うこと。「斷送」ともいう。劉致【端正好】套「上高監司」其二【六】「少甚命不快遭逢賊寇、霎時間送了身軀(命運拙く賊に遭い、たちまち身を滅ぼすこともある)」。
- 喜孜孜…心から喜ぶ様。にこにこと笑う様。「喜姿姿」にも作る。「單刀會」(元刊本) 第一折【鵲踏枝】「他每都喜孜孜的笑裡藏刀(あやつらは皆笑顔の裏に刀を隠している)」。「灰闌記」(元曲選本) 第一折【混江龍】「毎日價喜孜孜一雙情意兩相投(毎日にこにこと二人の思いは通じ合っている)」。
- 笑吟吟…にこにことする様。楽しそうな様。「救風塵」(古名家本) 第四折【新水令】「笑吟吟案板似寫着休書(にこにこと型通りに離縁状を書く)」。また「單刀會」(脈望館本) 第三折、關興の白に「恁時節喜孜孜鞭敲金鐙響、笑吟吟齊和凱歌回(その時には喜びつつ鞭で金の鐙を打ち鳴らし、楽しげに凱歌を唱って帰ろう)」とある。
- 坐間…ただちに。たちまち。「留鞋記」(息機子本) 第一折【油葫蘆】「席前花影坐間移(座席の前の花影はたちまち移ろう)」。
- 怒氣冲牛斗…怒りの凄まじい様をいう。「牛斗」は二十八宿の牛宿と斗宿。「灑池會」(内府本) 第三折後の楔子、廉頗の白に「惱的我發乍冲冠、怒的我氣冲牛斗(私は怒りのあまり髪は冠を突き上げ、気は牛斗を突く)」とある。
- 感嘆長吁…長く溜め息をつく。「短嘆長吁」に作ることが多い。『董解元西廂記諸宮調』卷五【感皇恩】「有此兒閑氣、都做了短嘆長吁(いささかの憤りも、全て長短の溜め息となる)」。
- 招狀…自白書。供述書。「蝴蝶夢」(古名家本) 第四折【水仙子】「九重天飛下紙赦書來、您三下里休將招狀責(帝より赦免状が届いたので、そなた達三人は供述書のことを責めてはならぬ)」。

- 體勘…探る。調査する。「馮玉蘭」(元曲選本) 第四折、金御史の白に「那巡江官員人等、都在此處參見老夫、須索仔細體勘一個虛實(巡江の官員達は、皆こちらで私に目通りするから、詳しく真実を調査しよう)」とある。
- 結銜之報…恩返しをすること。春秋時代の晉の魏顆が父の妾の命を救ったところ、妾の亡父の霊が戦場の草を結んで秦の將の杜回を転ばせて魏顆に手柄を立てさせたという「結草」(『春秋左氏傳』宣公十五年)と、漢の楊寶が傷付いた雀を助けて白玉の環を贈られたという「銜環」(梁の呉均『續齊諧記』)の故事から。『古今小説』卷二十七「金玉奴棒打薄情郎」、莫稽の白に「此事全仗玉成、當效銜結之報(この話をまとめて下さったら、必ずご恩返しをします)」とある。
- 將就…我慢すること。「寶娥冤」(古名家本) 第一折、寶天章の白に「我是你親父、將就的你(私はお前の父親だから、我慢してやれるんだよ)」とある。
- 好心不得好報…せっかくの親切が仇になる。『水滸傳』(容與堂本) 第八回、薛霸の白に「好意叫他洗脚、顛倒嫌冷嫌熱、却不是好心不得好報(せっかく足を洗ってやったのに、湯加減に文句を付けて、親切を仇で返すとは)」とある。『祖堂集』卷十二「荷玉和尚」には「好心無好報」と見える。
- 躊躇…あれこれ考えること。「岳陽樓」(古名家本) 第四折【梅花酒】「俺爲甚不言語、悠心下自躊躇(私がなぜ言わないか、そなたは心の中でよく考えてみよ)」。
- 光景…過ぎ去って行く時間のこと。「燕青博魚」(内府本) 第三折、燕青の白に「自從來到哥哥家中、可早半年光景也(兄さんの家にやって来て、早くも半年)」とある。
- 一殿之臣…同じ朝廷に仕える臣下ということ。「灑池會」(内府本) 第四折【沈醉東風】「俺須是一殿臣、勝似那通家好、煞強如晏平仲善與人交(我らは同じ朝廷に仕える臣下、家ぐるみの付き合いよりも勝り、晏平仲の交際上手にも勝る)」。
- 一家一計…夫婦などの仲が良いことをいう。「寶娥冤」(古名家本) 第二折【鬪蝦蟆】「相守三朝五日。常好一家一計(夫婦が共に過ごしたのは三四日だったが、とても仲が良かった)」。
- 肯分的…ちょうど折良く。都合良く。「單刀會」(元刊本) 第一折【油葫蘆】「肯分的周瑜和蔣幹是布衣交(都合の良いことに周瑜と蔣幹は身分を越えた付き合い)」。
- 直人…正直な人。『水滸傳』(容與堂本) 第四回、趙員外の白に「小弟智深、乃是愚鹵直人(弟の智深は、馬鹿正直者)」とある。
- 鰲養的・癩頭龜養的…「鰲」はスッポン、「癩頭龜」はスッポンよりやや大きく頭皮がイ

ボ状になっている亀のことなので、いわゆる「王八蛋」に類する罵語と思われる。

- 片紙隻字…一言半句。わずかな言葉。『大宋宣和遺事』利集の譚稹の白、「宣撫司都無片文隻字、許糧之約、難以奉承（宣撫司へは何の書類も来ていないので、兵糧を送ることは、承諾しかねます）」のように、「片文隻字」という形もある。
- 年甲…年齢。『劉知遠諸宮調』卷十二【出隊子】の白に「年甲三十、凜凜身材七尺（年は三十、凜々しい身の丈は七尺）」とある。
- 淳化…北宋の太宗の治世に行われた年号。九九〇～九九四年。すなわち淳化五年は九九四年であるが、史実では楊業は雍熙三年（九八六）、潘美は淳化二年（九九一）に没している。
- 尚兀自…なお、まだ。『董解元西廂記諸宮調』卷五【梁州三臺】「鶯鶯色事、尚兀自不慣、羅衣向人羞脱（鶯鶯は色事に、まだ慣れておらず、薄絹の衣を人前で脱ぐのも恥ずかしい）」。
- 支吾…言い逃れる。弁解する。『董解元西廂記諸宮調』卷四【繡帶兒】「恰才據俺、對面不敢支吾（先程私は、面と向かって弁解しようとしなかった）」。
- 拿賊見賊、廝打見傷…盗人を捕らえるには盗品が証拠、他人を殴った罪を問うには傷が証拠。これらの他にも「捉姦見雙（密通を暴くには男女二人とも必要）」、「殺人見傷（殺人の罪を問うには傷が証拠）」など様々な形があり、二つ、もしくは三つが組み合わせて用いられる。ここと似た表現としては『朴通事諺解』下に「捉賊見賊、廝打驗傷」とある。
- 證見…証人。「三奪槩」（元刊本）第四折【呆古朶】「這的又打不得關節、立不得證見（今回は賄賂で片付けることも、証人を立てることもできない）」。
- 中間裏…何かをしているその間に、ということ。「羅李郎」（古名家本）第四折【水仙子】「中間裏干閃下老業人（そうしている間にも老いた人はむざむざと捨てられる）」。
- 詞因…言い分。「後庭花」（古名家本）第二折【牧羊關】「我可也無詞因上木驢（私は何の言い分もなく処刑用の木驢に乗ろう）」。
- 説兀的做甚…謎解きをする決まり文句。こんな話をしてどうするのかということ。
- 做主…公正な処理を行うこと。また、力になること、味方することをいう。「黒旋風」（脈望館本）第三折、孫榮の白に「望大人可憐見、與小人做主（閣下にはどうか憐れとお思ひになり、私のためにお力添えをお願い致します）」とある。
- 眞賊實犯…まぎれもない盗品とそれを盗んだ犯人。「眞賊正犯」とも。「留鞋記」（息機子

本) 第三折【石榴花】「見眞賊正犯難干罷。平白地揣與我禍根芽(まぎれもない盗品だとは納得できぬ。理由もなく私に禍根を与えようとする)」。

○少不的…欠くことができないということから転じて、～すべき、～しないわけがないの意。「汗衫記」(元刊本) 第二折【收尾】「元是箇臥牛城富豪民、少不得悲田院裏凍餓殺(元は汴梁の富豪であったのに、悲田院で餓え凍えて死んでしまう)」。

○明正典刑…法に照らして極刑に処する。「竇娥冤」(古名家本) 第四折、竇天章の白に「張驢兒謀殺親父、欺騙良人、市曹中明正典刑(張驢兒は父親を殺し、妻を欺いた罪により、刑場にて死罪に処す)」とある。

第四折

[訳]

(八大王が兵士を連れて登場)

八大王

“天下の四百州を鋭く見つめ
名声は雄々しく諸侯を鎮める
手には帝より賜った黄金の簡を持ち
もっぱら奸臣佞臣の頭を打つ”

私は八大王でございます。潘仁美の無礼は許し難く、あやつは賀懷簡、劉君期と共に辺境にて、密かに楊家の父子を殺そうとし、楊七郎を矢を集中させて射殺し、援軍を送らず、老令公を李陵碑に頭を打ちつけて死なせた。郡馬の楊景は敵陣を突破し、登聞鼓を打って帝に訴え出たところ、却って雷廷幹に陥れられたが、すんでのところ楊景を救い出した。我が金簡により雷廷幹は打ち殺された。私は黨彦進を辺境へ向かわせ、潘めの軍印を取り上げ、皈依寺に護送させた。その後寇萊公を自ら寺へ向かわせ、きちんと取り調べを行い、確かに供述を得た。あやつらは三人とも、刑部の牢の中にいる。しかし帝は夜中に不吉な夢を見て、苗士安に夢占いをさせた。すると、明日大赦を下すべきであると奏上しおった。もしあの三人の逆賊を釈放したならば、いずれ楊景はまたあやつらの罠にかかるであろう。私は今から楊景を呼び、相談するとしよう。今夜楊景を牢の中へ行かせ、あやつら三人を八つ裂きにし、明朝に自首するようにすれば、結構なことではないか。誰かおらぬか。楊景を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。楊景どのはどちらにおられる。

楊景（登場）私は楊景でございます。谷の囲みを突破し、都に着いて登聞鼓を打って帝に訴え出たところ、雷廷幹が私を陥れようとしたが、八大王様の金簡によって打ち殺された。八大王様のお力添えのおかげで、黨彦進様が辺境へ向かい、牌印を取り上げ、あやつら三人の逆賊を、皈依寺に護送した。その後寇萊公様が寺へ向かい、きちんと取り調べを行い、あやつら三人を刑部の牢へ下した。この度は大王様がお呼びであるので、一つ行かなければ。思えば我ら楊家の父子は、世を覆う程の功を立てたが、この度あの老いぼれの罠にかかったのは、まことに悲しいことである。（唱う）

【雙調・新水令】

“思えば我らは激しく戦って辺境を安らかにし
数十年將兵を率い
戦うこと数百回、対峙すること数千回
この度父子が亡くなり
冤罪を受けることになるとは思ひもしなかった”

早くも着いたわい。これお前、楊景がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。大王様にお知らせします、楊景どのが来られました。

八大王 お通り願え。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

楊景（まみえるしぐさをする）大王様、あなたのお陰で、潘仁美ら三人の賊めは、牢の中に捕らえられています、まだ決着はついておりません。どうか大王様にはこの楊景にお力をお貸し頂き、あやつら三人の逆賊を、八つ裂きにし、父子の恨みを晴らさせて下さいますようお願い致します。

八大王 楊景よ、そなたはまだ知るまい。この度大赦が下されることとなっており、苗士安が帝に、明日の早朝に大赦を下すように奏上したので、きっとあやつら三人も許されるであろう。

楊景 それではどうしたものか。（ひざまずくしぐさをする）大王様どうか私にお力をお貸し下さい。あの三人の逆賊が許されたならば、我ら父子の恨みは、いつになれば晴れるのでしょうか。

八大王 私に良い考えがある。私が屋敷に戻ろうとする頃になったら、そなたは私の馬を遮って訴え、私が許さなくても、そなたはひたすら哀願し、私がおも許さずにいると、

そなたは前に回って上着の袖を掴んで冤罪を訴えるというところで、私は怒って、「お前は どうして私の上着の袖を掴むのだ。『臣下が君主の衣服を掴んだら、死罪とするべきである』と聞いたことがないのか」と言うことにしよう。私は側仕えの者に、そなたを刑部の牢へ送らせてから、別に使者を遣わして獄卒に書状を送り、その者にそなたの手伝いをさせるので、そなたはあの三人の逆賊を、斬り殺してしまえ。明日の早朝に大赦が下された時に、そなたが三人の首級を掲げて自首するということにしたならば、いかがであろうか。

楊景（拝礼するしぐさをする）大王様に感謝致します。私は粉骨砕身しても、大王様のご恩に報いることはできません。（唱う）

【喬牌兒】

“大王様のお力添えを願い
法を明らかにして辺境の要塞を鎮め
逆賊を除いて奸臣を討ち
芳名を永久に盛んにする”（仮に退場）

八大王 お前達。

兵士 はっ。

八大王 先払いをせよ。私は南清宫へ戻るぞ。

兵士 かしこまりました。（歩くしぐさをする）

楊景（突然登場）（遮るしぐさをする）大王様御慈悲を、この楊景は、まことに無念であり、どうか大王様にお力添えを願います。

八大王 これ楊景よ、彼ら三人は権勢ある家の者で、私はお前の力になることはできないので、二度と私の邪魔をするな。

楊景 どうか大王様御慈悲を。我ら父子のことを思えば、あやつらは許し難く、どうかお力添えを願います。

八大王 これ楊景よ、私には関わりのないことだし、明日の早朝には大赦が下されるのであるから、もし再び邪魔をしたならば、決してお前を許しはせぬぞ。

楊景（唱う）

【甜水令】

“苦しみを述べることもできず、恨みを訴えることもできない
命は全て滅び

我ら楊家の父子二人は死んでしまった

思えば私は東西を一掃し、南北へ征討し、将兵を率いていたのに

伍子胥が丹陽で困窮したようになるとは”

(上着の袖を掴むしぐさをする) 大王様どうか私めにお力添えを。あの三人の逆賊が許されたならば、我ら父子の命は、誰に償わせるのですか。

八大王 (怒って言う) この楊景め、お前はまことに無礼であるぞ。どうして私の上着の袖を掴むのだ。『臣下が君主の衣服を掴んだら、死罪とするべきである』と聞いたことがないのか。これお前達楊景を捕らえ、刑部の牢へ連れて行け。

兵士 かしこまりました。(兵士が楊景を捕らえるしぐさをする)

楊景 (唱う)

【折桂令】

“私は今やしきりに悲しみながら声を上げることもできず

濡れ衣により、捕らえられ傷付けられた

あなたは私のことを目上の者に反抗し、行列の邪魔をし

罪は死に値すると言われるが

私は一つ一つ明白に言おう

大王様はどうして情け容赦なく判断を急ぎ

酔っぱらい狂ったかのように私を脅かし

慌てふためいておられるのか

この度我ら楊家の父子が死んだことを

どうか大王様にはよくお考え願う”

(兵士が楊景を捕らえて退場)

八大王 これお前劉達を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。劉達どのはどちらにおられる。

劉達 (登場)

“天下の戦乱は安らかとなり

庶民はやわらぎ楽しむ

願わくは太平の日々が来て

宋朝と蕃族が統一されんことを”

私は劉達でございます。思うに潘仁美は忠臣を陥れて殺したので、万民が恨みを抱いて

いる。この度は八大王様がお呼びであるので、一つ行かなければ。早くも着いたわい。

これお前、劉達がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、大王様にお知らせします、劉達どのが来られました。

八大王 お通り願え。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

劉達（まみえるしぐさをする）大王様が私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

八大王 劉達よ、そなたは私の書状を持って、刑部尚書の林迪へ届けに行け。

劉達 承知しました。私は門を出て、大王様の令旨を受け、書状を持って、林尚書に会いに一つ行くでしょう。

“潘美が密かに恨みを抱いていたために
楊景の無念はいつまでも晴らされない
速やかに大王様の命を受けて出発し
一通の書状によって事情を訴える”（退場）

八大王 劉達は行ってしまったわい。私は何事もないので、ひとまず南清宮へ戻るとしよう。（退場）

林迪（外が林迪に扮し胥吏を連れて登場）

“幼い頃から詩書を習い勉学に励み
文章は明らかにして勤勉である
一度科挙に及第して以来
国家を補佐して政治と刑罰を司る”

私は姓を林、名を迪、字を景明と申しまして、祖先は京兆府（陝西省西安市）の者です。私の文は綾錦のように美しく、草書の字は龍蛇のように優れ、蕭何と曹參のように法律を司り、顔回や孟子のような学問を学んだ。帝のご恩により、刑部尚書の職に任じられている。近頃潘太師、賀懷簡、劉君期が、忠臣を陥れたが、もう調べはついている。今は何事もないので、役所の門の中で座り、誰かやって来るか見ているとしよう。

劉達（登場）私は劉達でございます。大王様の命を奉じ、書状を持って、林尚書に会いに行くのだ。早くも着いたわい。これお前、八大王の屋敷からの使者が、閣下にお会いしに来たと知らせてくれ。

胥吏 かしこまりました。閣下にお知らせします。八大王様のお屋敷からの使者が来まし

た。

林迪 お通しせよ。

胥吏 かしこまりました。お通り下さい。

劉達（まみえるしぐさをする）閣下、私は八大王様の命を奉じ、閣下にお会いしに参りました。

林迪 そなたは何用で来たのだ。

劉達 私が参りましたのは他でもありません、楊景は、国の柱となる臣であり、忠義を尽くして国に報いましたが、不幸にも潘仁美によって陥れられましたので、どうか閣下には事情を察して処理を行って頂きたいのです。大王様の書状がこちらにあります。（渡すしぐさをする）

林迪（書状を読むしぐさをする）書状の内容は承知した。そなたは戻るがよい。

劉達 ご承知頂けましたのならば、私は閣下とお別れし、大王様へ報告しに戻ります。

“楊景が世を覆う程の功を立てたために

潘仁美は英雄を陥れた

奸臣めを退治して除けば

宋の国土は永久に盛んになる”（退場）

林迪 これお前江廉を呼んで潘仁美、賀懷簡、劉君期を連れて来させよ。

胥吏 かしこまりました。江廉どのはどちらにおられる。閣下がそなたに潘仁美、賀懷簡、劉君期を連れて来るよう仰せである。

（江廉が孟徳と共に登場）

江廉

“手に情け容赦ない棒を持ち

懐に手加減料を収める

朝は虎狼のように道を行き

夜は死体の側にて眠る”

私は江廉でございます。こちらは孟徳。この刑部にて、牢役人をしております。閣下の命を奉じ、潘仁美、賀懷簡、劉君期を、牢の中に捕らえ、毎日枷をかけている。尚書の林迪様が自らこの一件をお取り調べになっている。明日大赦が下されると聞いたが、もしこの三人の逆賊を許したならば、楊家の恨みはいつ晴れるのか。昨晚、私は弟分の孟徳と共に、あの三人の逆賊を、いましめの寝台に載せ、あやつらの髪をはりつけ柱にく

くり付け、縄で腹を縛り、刑罰を加えて、一晩中仕置きをしてやった。この度は閣下がお呼びである。潘太師、賀懐簡、劉君期よ、閣下がお前達をお呼びであるので、急ぐのだ。

(潘仁美・賀懐簡・劉君期が枷をかけられて登場)

潘仁美

“全身に枷と鎖をかけられて牢獄におり

どうして今朝目前にある禍から逃れられようか”

私は潘仁美でございます。この二人は賀懐簡と劉君期。我らと楊景は仇同士であり、私は楊七郎に矢を集中させて射殺した。今は楊景が我ら三人を訴えたので、牢の中に捕らえられている。この度は帝の詔により大赦が下される。林閣下が我らを呼んでいるので、会いに行かなければ。

孟徳 老いぼれのお三方、閣下がお前達をお呼びであるぞ。

(林迪にまみえるしぐさをする)

潘仁美 林閣下、我ら三人が参りましたが、何のお話でしょうか。

林迪 これ潘太師よ、お前はあの日どうして矢を集中させて楊七郎を射殺したのだ。お前はあの者に何の恨みがあったのか。

潘仁美 林閣下はご存知ないでしょうが、私が河東へ出陣した時、楊令公が私に矢を射たという、この恨みがあったので、心中それを根に持ち、あやつら父子を殺そうとしたのです。

林迪 この一件は、お前に非がある。既に帝の命がある。(顔を背けていう) それに八大王様の令旨もあるぞ。江廉、孟徳よ耳を貸せ。きっとこのようにせよ。

江廉 かしこまりました。

林迪 そなた達二人はよく用心して見張りをせよ。私は戻るとしよう。

“潘太師は賢良をしりぞけ

楊令公は濡れ衣によって死んだ

八大王様の令旨があるからには

明日になれば事の次第が明らかになる” (退場)

孟徳 江廉兄貴、閣下はお屋敷へ戻ってしまった。日も暮れたし、我らは今からこやつら三人を檻に入れ、仕置きをしてやりましょう。

江廉 お前の言う通りだ。お三方よ、日も暮れたので、もう収監するぞ。昔から「お上の

命が下されれば、何も思うようにならない」と言い、お前達が仕置きを受ける時は、いましめの寝台に上り、こやつらの髪を、はりつけ柱にくくり付け、縄で腹を縛り、済んだならば、我らは休むとしよう。

(正末が楊景に扮し劉達と共に登場)

劉達 將軍、これは八代王様の令旨であるから、そなたは心して行動せよ。私は牢の門番に呼びかけよう。(門に向かって叫ぶしぐさをする) 開門。

江廉 誰が門のところで叫んでいるのだろう。門を開けたぞ。(楊景・劉達にまみえるしぐさをする)

劉達 江廉よ騒ぐでないぞ、大王様の令旨がここにある。

江廉 かしこまりました。

劉達 門を閉じよ。將軍、あれが三人の逆賊であろう。今こそ恨みを晴らすのだ。

楊景 承知しております。

潘仁美 楊景、お前がどうしてここに。

楊景 (唱う)

【落梅風】

“こやつらは不当にも
密かに我ら父子を陥れた
こうなったからにはどうしてやすやすと許せるだろうか
奸臣を必ずや刀で切り刻んでやろう
この機に乗じなければ我が胸中は悲しみに満ちる”

劉達 二更一点になったのに、手を下さないで、何とする。私が手伝うぞ。

楊景 私はこやつらに、話すことなどありません。私がこの老いぼれどもを殺します。

潘仁美 楊將軍よ許してくれ。私はそなたに対して悪い心を抱いたことなどなかったのだ。

楊景 (殺すしぐさをする) 三人の逆賊を討ち取ったぞ。(三人が共に退場) (唱う)

【攪箏琶】

“今や心は晴れやかとなり
言うまでもなく自らの意志で
このずる賢い奸臣を斬った
私は蛇や狼のように
恨みを晴らし、思いをかなえた

蒼天を仰ぎ見て、悲しむ

どうしてあやつに元帥の金印を持たせ

我ら忠臣を損なわせたのか”

私は首級を持って、自首するでしょう。(共に退場)

劉達 五更一点となったので、私は牢の門を閉めてから、楊景を逃がし、自首させよう。

私は閣下へ報告しに戻るとしよう。(退場)

殿頭官 (胥吏を連れて登場)

“詔勅を奉じ君命を伝えて禁中を出て

宮中の香を払い朝服にまとわせる

わずかばかりの赤心と忠孝を抱き

中書省にて帝の側にお仕えする”

私は殿頭官でございます。潘仁美は賀懷簡、劉君期と共に、不届きにも辺境にて密かに楊家の父子を損なったが、楊景が敵陣を突破して、帝に訴え出た。今や潘仁美ら三人は、刑部の牢の中に捕らえられている。私は命を奉じ、彼ら三人を救うところである。手の打ちようがなかったので、帝の夢が不吉であると偽りを言い、司天監官の苗士安に夢占いをさせ、この夢は帝が大赦をお下しになれば解くことができると言わせたのだ。私がこの度わざわざ大赦を下したのは、彼ら三人を許そうと思つてのことである。本日早くに公布されたが、思うに彼ら三人は、既に許されたので、きっと私に会いに来るであろう。これお前見張りをし、自首する者がいたならば、邪魔をせず、速やかに通してやれ。

胥吏 かしこまりました。

八大王 私は八大王でございます。この度大赦が下されたので、私は閣下に会いに来た。

早くも着いたわい。これお前、私がやって来たことを知らせてくれ。

胥吏 かしこまりました。閣下にお知らせします、八大王様が来られました。

殿頭官 お通ししろ。

胥吏 かしこまりました。お通り下さい。

八大王 (まみえるしぐさをする) 閣下、この度大赦が下されたが、誰か会いに来たかね。

楊景 (三つの首級を掲げて登場) 私は楊景でございます。私は昨晚潘仁美ら三人の逆賊を殺し、この度自首しにやって来たのであるが、早くも着いたわい。これお前、自首しに来た者がいるとお知らせしてくれ。

胥吏 承知した。閣下にお知らせします、自首する者が閣下にお会いしに来ました。

殿頭官 通せ。

胥吏 かしこまりました。通るがよい。

(楊景がまみえるしぐさをする)

殿頭官 こやつめ、お前は誰を殺したのだ。自首するつもりなのか。

楊景 閣下、この楊景めは、潘仁美、賀懷簡、劉君期の三人の逆賊を殺し、出頭しに参りました。

殿頭官 ああ、私がこの度大赦を下したのは、彼ら三人のためにしたことであったのに、こやつによって先に殺されてしまうとは思わなかった。これお前楊景を斬首したら私に知らせよ。

胥吏 かしこまりました。

八大王 待て、楊景を捕らえてはならぬ。大赦であるぞ。(詔を開いていう)「天運を授けられし大宋の詔に曰く。近頃は辺境は静かに落ち着き、天下は清く安らかであり、天は瑞祥を降らせ、地は賢人や哲人を生み、しばらくここに上に感ずるまごころによって、下を憐れむ手本とするべきである。天下に属する民について、罪の大小を問わず、露見しているか否かに関わらず、流罪や斬罪以上、笞刑や杖刑以下、租税徴用など、全て免除する。ここに示し、広く知らしめる。」詔にはもう一条目あり、「生きている者だけを許し、死んだ者は許さぬ」とのこと。

楊景 (唱う)

【沽美酒】

“思えばかつては帝の兵を率い、戦場に臨み
蕃族を滅ぼし、辺境を安らかにした
あの潘仁美の邪悪な心は狼のようで
あやつは我ら一家を損ない
父子は、尽く禍に遭った”

【太平令】

“幸いにもこのように度量の大きな方に出会い
寇萊公の智略は並ぶ者なく
悪人をおびき出し
恨みを明らかにしたという有り様
私は急いで

大王様に

拝礼し

慈しみ深い帝に感謝致します”

八大王 楊景よ皇居に向かってひざまずき、私が裁きを下すのを聞け。

“宋朝の馬は勇ましく人は強いために

全軍を率いて領土を広げた

潘仁美は密かに恨みを抱き

悪日に兵を出陣させた

令公は交牙峪の出口を囲まれ

楊七郎は矢を集中して受けて殺された

老令公は碑に頭を打ちつけて死に

楊六郎は胸の思いを訴えた

朝廷が大赦を下そうとしていると聞き

寇萊公は心中で思案した

私がいささか計略を用いたおかげで

三人の首を斬って償わせることができた

犯人の楊景を許すこととし

宴席を催して玉の杯を掲げる

永久に帝の基業は確固となり

一斉に我らが帝に感謝せよ”（共に退場）

題目 楊六郎、讐に報いて冤恨を雪ぎ

正名 八大王、詔を開きて忠臣を救う

〔注〕

○虎視…鋭い視線で見ると。静かに情勢を窺う。『三國志平話』卷下「曹相十五萬軍、東下其寨、虎視張魯（曹操の十五萬の軍は、東側に陣を構え、張魯を狙う）」。

○郡馬…親王の娘婿。親王の娘を「郡主」といい、その婿を「郡馬」という。楊家將を題材とする小説においては、楊六郎は柴郡主を妻としている。

○怨鼓…登聞鼓のこと。庶民が君主に申し上げたり、宮城へ訴えたりする場合の一形式で

あり、宮城前に置かれた太鼓を意味する。西晋代に端を発し、宋代では登聞鼓院が設置され、制度的に整備されていた。「蝴蝶夢」(古名家本) 第二折【收尾】「告都堂訴省部、擲皇城打怨鼓(中央へ訴え出て、宮城へ行って登聞鼓を打とう)」。

○雷廷幹…『楊家府』には見られない展開であるが、『北宋志傳』第二十回では、潘仁美の妻の黄夫人が参知政事の傅鼎臣に賄賂を贈り、便宜を図ってもらおうとするものの、八王に気付かれて失敗に終わる。本劇の雷廷幹は恐らく『北宋志傳』の傅鼎臣と同じ役割を担っていたのであろう。ただし、傅鼎臣は庶民に降格されたが、本劇の雷廷幹は八大王の金簡により打ち殺されたようである。

○争些兒…危うく。もう少しで。「魯齋郎」(古名家本) 第四折【玉交枝】「踏雪的争些凍倒(雪の中を歩き危うく凍えて倒れるところであった)」。

○苗士安…「破天陣」(内府本)にも登場し、帝の夢を占って、死んだと思われていた楊景の居場所を言い当てる。

○郊天大赦…皇帝が天を祭った後に大赦を下すこと。また大赦の詔書を指す。「馬陵道」(脈望館本) 第四折【堯民歌】「則除半空中飛下一紙郊天赦(空から一枚の赦免状が飛んで来ることでもなければ助からない)」。

○穀中…矢の届く範囲。転じて畏のこと。「三戰呂布」(脈望館本) 第一折、趙莊の白に「元帥、衆將齊排陣勢、呂布必落在穀中也(元帥、多くの将が一斉に陣を布けば、呂布は必ず畏にかかるでしょう)」とある。

○剉屍萬段…死体を切り刻む。「楚昭公」(元曲選本) 第二折、伍子胥の白に「我今日不掣你這老匹夫剉屍萬段、誓不收軍(私はこの度あの老いぼれを捕らえて死体を切り刻むまでは、誓って軍を退きはしない)」とある。

○奸黨…狡猾な連中。『大宋宣和遺事』元集に「凡一百一十九人、籍做奸黨、御書刻石、立於端門(およそ百十九人に、奸党の名を与え、親筆によって石に刻み、宮城の正門に立てた)」とある。

○頭搭…高官が外出する時に先払いをする儀仗のこと。「頭答」「頭踏」にも作る。「薛仁貴」(元刊本) 第四折【殿前歡】「擺列着兩行頭答(二列に儀仗が並んでいる)」。

○南清宮…『宋史』などでは確認できないが、本劇の他に「抱粧盒」(元曲選本)や『三俠五義』においても、八大王の邸宅としてその名が見える。

○勢要…権勢があること。「黒旋風」(脈望館本) 楔子、白衙内の白に「我是那權豪勢要之家(私は権勢のある家の出)」とある。

- 伍子胥困在丹陽…伍子胥は楚の平王によって父と兄を殺されて呉へ亡命する途上で病にかかり、丹陽で乞食となったことがあった。『史記』卷六十六「伍子胥列傳」の集解に「子胥乞食處在丹陽溧陽縣（伍子胥が乞食となったところは丹陽溧陽県〔江蘇省常州市〕である）」とある。また「伍員吹簫」（元曲選本）第四折【駐馬聽】にも「只爲一時窮暴、却教俺丹陽市上學吹簫（しばらく困窮したため、丹陽の市場で簫を吹くことを学んだ）」とある。
- 犯上…目上の者に反抗すること。『論語』「学而」「其爲人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也（人柄が孝行かつ従順でありながら、好んで目上の者に逆らうということは滅多にない。目上の者に逆らうことを好まず、しかも反乱を起こすことを好むということなど、あり得ない）」。
- 煙塵…戦乱で兵馬が起こす煙と塵。ひいては戦争そのものを意味する。「三奪槩」（元刊本）第一折【金盞兒】「把六十四處煙塵蕩（六十四箇所の戦乱を掃討した）」。
- 將着…持って、連れ立って。「傷梅香」（息機子本）第一折、白敏中の白に「况兼小子見將着玉帶爲信物（しかも私は現に玉の帯を印として持って来ています）」とある。
- 祇候…下級の胥吏。
- 登虎榜…「虎榜」は「龍虎榜」ともいい、科挙の合格掲示のこと。特に優れた人材が集まった時の試験をいう。それに登るとは、即ち科挙に及第すること。「謝天香」（古名家本）第四折、錢大尹の白に「我則怕好花輪與富家郎、因此上三年培養牡丹花、專待你一舉首登龍虎榜（私は美しい花が金持ちに取られることを恐れ、三年間牡丹の花を養い、そなたが及第するのを待っていたのだ）」とある。
- 蕭曹法律…「蕭曹」とは漢の高祖に仕えた蕭何と曹參のこと。蕭何が相国として法を整備し、蕭何の死後に後任となった曹參は、蕭何の定めた法を遵守して改変をしなかった。「遇上皇」（元刊本）第三折【耍孩兒】「咱蕭曹律令不曾習、有當案分令吏支持（蕭曹の法律を学んだこともなく、案件があれば下役に任せる）」。
- 顔孟文學…「顔孟」は顔回と孟子か。通常は「孔孟」で孔子と孟子のことをいう。
- 問成…結審する。調べがつく。「金鳳釵」（于小穀本）第四折、楊衙内の白に「被我狀元店裏拿住、問成了也（〔趙鶚は〕狀元店で捕らえられ、調べがついている）」とある。
- 閒坐…何もせずに座っている。世間話をする。「四春園」（脈望館本）第三折、寶鑑の白に「我且在此茶房裡閒坐（私はひとまずこの茶店で座っていよう）」とある。
- 手搭無情棒…同じ趣向のものが、牢役人の登場詩として「村樂堂」（内府本）第三折、

- 「蝴蝶夢」(古名家本) 第三折などにも見える。
- 滴涙錢…拷問を手加減する引き替えに受け取る金銭。罪人やその家族を泣かせてせしめることから。「蝴蝶夢」(古名家本) 第三折などにも見える。
- 匣床…体を動かすことができないように縛り付ける寝台形の刑具。仕置き台。『水滸傳』(容與堂本) 第四十九回「樂和便把匣床與他兩個開了(樂和はいましめの寝台から二人を解き放ってやった)」。
- 滾肚索…罪人の腹部を縛る縄。「黒旋風」(脈望館本) 第三折、張千の白に「將軍柱上拴了頭髮、上了脚鐐手扭、擡上匣床、使上滾肚索、拽、拽、拽(はりつけ柱に髪をくくり、手かせ足かせをして、いましめの寝台に載せ、縄で腹を縛るぞ、ぐい、ぐい、ぐいと)」とある。
- 刑法…刑罰、仕置きのこと。「竇娥冤」(古名家本) 第三折【鮑老兒】「你去那受刑法尸骸上列些紙錢(仕置きを受けた亡きがらに紙錢を供えて下さい)」。
- 擺布…本来は処理や手配をすること。ここでは具体的には拷問、仕置きを行うことを指す。「傷梅香」(息機子本) 第二折、白敏中の白に「今夜小姐怎生擺布(今晚お嬢さんはどうなさるのですか)」とある。
- 恁的…このように。「趙氏孤兒」(元刊本) 第一折【煞尾】「恁的顯八面威風統軍衆(このように周囲に威風を示し大軍を統べる)」。
- 一了説…昔から～という。以下に決まり文句を導く。「博望燒屯」(内府本) 第三折、夏侯惇の白に「一了説做小做小、天下着了(昔から「下手に出れば、天下は安泰」という)」とある。「一了」は以前から、これまで、ずっとの意。「看錢奴」(息機子本) 第二折、陳德甫の白に「一了他家一貧如洗(あの方はかねてからずっと赤貧洗うが如し)」とある。
- 上命遣差、皆不由己…お上の命が下されれば自分勝手は通らないということ。「留鞋記」(元曲選本) 第四折の張千の白には「上命官差、事不由己」とある。
- 停當…物事がきちんと整っていること。劉致【端正好】套「上高監司」其一【滾繡毬】「借貸數補答得十分停當(貸し借りは辻褄を合わせて抜かりなし)」。
- 大驚小怪…騒ぐこと。「鐵拐李」(元刊本) 第四折【粉蝶兒】「聽得道岳孔目回來、這一場大驚小怪(岳孔目が帰ったと聞けば、この場は大騒ぎとなろう)」。
- 公當…公正で当を得ていること。『朱子語類』卷四十三「蓋君子之心、是大家只理會這一箇公當底道理、故常和而不可以苟同(思うに君子の心は、皆がこの一つの公正な道理を理解しているから、常に和しながらもみだりに同ずることがないのだ)」。

- 惆悵…嘆き悲しむ。がっかりする。「焚兒救母」(元刊本) 第一折【點絳脣】「母親病在膏肓、你孩兒仰天悲愴、添惆悵(母の病は篤くなり、私は天を仰いで悲しみ、嘆く)」。
- 等甚…～する以外に何がある、～するしかない、の意。「竇娥冤」(古名家本) 第一折、賽盧醫の白に「出的城來、東也無人、西也無人。這裡不下手、等甚麼(城を出れば、どこにも人はいない。ここで手を下さずに、どうする)」とある。
- 撮補…「撮哺」に同じ。手助けする。世話をする。「神奴兒」(元曲選本) 第二折【隔尾】「我將你懷兒中撮哺似心肝兒般敬(私はお前を懷に抱いて世話をして心臓のように大事にしてきた)」。
- 鳳池…宮中の庭園にあった鳳凰池のこと。傍に中書省があったことから、中書省、または宰相をいう。「破審記」(内府本) 第二折、呂蒙正の退場詩「布衣走上黃金殿、鳳池奪得狀元來(無官の私は黄金の宮殿に上り、鳳池にて状元を奪おう)」。
- 司天監官…司天監のことであろう。天文や暦のことを司る官。『宋史』卷一百六十五「職官志五・司天監」「掌察天文祥異、鍾鼓漏刻、寫造曆書(天文の兆し、鍾鼓や漏刻、暦の作成を司る)」。
- 開詔…そのまま「聖旨を開く」ともとれるが、続いて聖旨を読み上げることから、「開」は開読、すなわち聖旨などの命令文書を発令先で開封して宣読することであるようにも思える。「開」のみで開読を表すと思われる用例としては、少林寺聖旨碑中のモンケ聖旨に「癸丑十二月初七日開」とある(中村淳・松川節「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」、『内陸アジア言語の研究』第八号、一九九三年)。また「老君堂」(内府本) 第二折に、やはり大放を行おうとする場面での徐懋功の白に「領敕到衙、等他二人來時、同共開詔(勅命を受けて役所へ行き、彼ら二人が来たら、共に聖旨を開読しよう)」とある。
- 不合…するべきでない。不届きにも。「三奪槊」(元刊本) 第一折【賞花時】「元帥不合短箭輕弓觀它洛陽(元帥はあるまじきことに輕装で洛陽を見に行かれた)」。また元の王揮『烏臺筆補』の案件中に「彈順天路總管祖世傑不合支俸事狀(順天路總管の祖世傑が不届きにも俸禄を支給されたことを糾弾する意見書)」(『秋澗先生大全文集』卷八十七)とあるように、法律文書にもよく用いられる。
- 奉天承運～故茲詔示、咸使知聞…陶宗儀『南村輟耕錄』卷二十「漢兒字聖旨」に、「上天眷命、皇帝聖旨(上天より目をかけられ命を受けた、皇帝の聖旨)」で始まり「故茲詔示、想宜知悉(故にここに詔して示す、思うによく理解するべきである)」で終わる聖旨を、元末明初の北方において「漢兒字聖旨」と言った、とある。「上天眷命」は元代において

皇帝の詔書、すなわち雅文聖旨の冒頭に用いられる定型句であり、蒙文直訳体の場合には「長生天氣力裏、大福廕護助裏（とこしえなる天の力、大いなる威靈の輝きの加護において）」がほぼ定型の書き出しとなる。しかし後に朱元璋が、元から明への王朝交代を喧伝する狙いから、詔書の冒頭句を「上天眷命」から「奉天承運」へと変更した。

○禎祥…めでたいし。瑞祥。「裴度還帶」（脈望館本）第二折、李俊の白に「太平有象雲連麥、普濟禎祥救萬民（太平の世には麦が豊作になる兆しがあり、広がる瑞祥は万民を救う）」とある。

○則赦活的、不赦死的…この文言があることによって、復讐を果たした楊景は無罪となり、殺された潘仁美らの罪はそのままとなる。恩赦により悪人が許される直前に被害者が悪人を殺し、逆に無罪放免になるという展開は、「陳州糶米」（元曲選本）でも見られる。

○天兵…神のように優れた将兵。または官軍をいう。「老君堂」（内府本）第三折【醉花陰】「百萬天兵喊聲炒（百万の神の如き兵士の叫び声が轟く）」。

○寛洪海量…度量の大きいこと。「三奪槊」（元刊本）第一折【混江龍】に「不着些寛洪海量、剗地信讒言佞語損忠良（この大きな度量を用いず、なんと讒言やおべっかを信じて忠良を殺そうとする）」とある。

○奸回…よこしま。また、悪人。「襄陽會」（内府本）第一折【混江龍】「可又早曹公霸道驕奸回（早くも曹操は霸道によってよこしまさを現す）」。

○展土開疆…領土を広げること。「西蜀夢」（元刊本）第二折【梁州】「再靠誰挾人捉將、再靠誰展土開疆（誰を頼りに敵将を捕らえ、誰を頼りに領土を広げれば良いのか）」。

○兒郎…兵士のこと。「三奪槊」（元刊本）第一折【勝葫蘆】「藉不得衆兒郎、過澗沿坡尋路慌（兵士達を顧みることもできず、谷を越え坂に沿って道を探して慌てる）。『劉知遠諸宮調』卷十二【蘇幕遮】「五百兒郎、盡索遭摧折（五百の兵は、尽く打ち破られた）」。

○衷腸…胸の内。思い。「魔合羅」（元刊本）第三折【幺篇】「哭啼啼口内訴衷腸（泣きながらくどくどと胸の内を訴える）」。

○皇基…帝が国家を治める事業。国家の基礎。「周公攝政」（元刊本）第二折【上小樓】「殿下踐皇基、正是用天之道（殿下が国家の事業を踏み行うことは、まさしく天の道を用いておられる）」。

昊天塔孟良盜骨

第一折

〔訳〕

楊景（沖末が楊景に扮し兵士を率いて登場、詩をうたう）

“三関を鎮守して幾年になろうか
蕃兵は白溝を侵そうとはしない
父と兄は国のために忠孝を行い
天子より清風無佞楼を賜った”

私は姓を楊、名を景、字を彦明と申す。父は金刀無敵大総管の楊令公。母親は佘太君。生まれた我ら兄弟七人は、平、定、光、昭、朗、景、嗣といい、私は六番目。鎮守しているこの三関とは、梁州の遂城関、霸州の益津関、雄州の瓦橋関である。我が配下には二十四名の指揮使がいる。この度孟良を辺境の見回りに行かせた。日が暮れたのに、戻って来ない。これお前、灯りをともせ。

（兵士が灯りをともすしぐさをする）

楊景 呼んだらすぐに来て、呼ばなければ来るな。

兵士 かしこまりました。（退場）

楊景 今日頭がぼんやりとするが、どうしてだろうか。しばらく休むとしよう。（眠るしぐさをする）

楊令公（正末が楊令公に扮して外が扮する霊魂と共に登場）私は楊令公でございます。北蕃の韓延壽と戦ったが、あやつに虎口交牙峪にて包囲され、内に糧秣なく、外に援軍なしとなった。これは我が七男の楊延嗣。この者は私を救おうとしたものの、潘仁美により矢を集中させて射殺された。私は逃れることができず、李陵碑に頭を打ちつけて死んだ。蕃兵は私の遺体を焼き、遺骨を幽州（河北省北京市）にある昊天寺の塔の先に吊るし、毎日百人の兵に、それぞれ三回ずつ射させ、百箭会と名付けている。私は痛くてたまらない。この度は冥府に訴えて、枉死城から出させてもらい、この三関の地に着き、息子の六郎の夢に現れて言付けよう。

楊七郎 父上、思えば私の天下を覆うような功績は、たちまち消えてしまいました。我らは兄上の夢に現れて言付けましょう。（詩をうたう）

“我ら父子の忠義を全うするはこの上なきも
汗馬の労はたちまち消えてしまった
なんと幾たびも辺境で奮戦したのに
生きて万戸侯に封ぜられることがなかった
遺体は蕃国の手に落ちて矢の苦しみに遭い
靈魂は沙漠にて雲に愁える
今宵は夢の中で怨みを訴え
兄上が怨みを晴らしてくれるようひたすら願う”

楊令公 息子よ、我が身は蕃族の城で死に、またこのように痛めつけられ、魂は安らぐこととはなく、まことに苦しい。この世で英雄であったのも虚しいことよ。(唱う)

【仙呂・點絳脣】

“人形劇の小屋の中で
太鼓や笛の音が流れ
操られる
思うに俗世は全て空しく
あたかも南柯の夢のよう”

楊七郎 ただ恨めしいのはあの潘仁美の賊めが、我ら父子をもろともに異国の地にて葬ったこと。まことに悲しい。

楊令公 (唱う)

【混江龍】

“祖先の墓を見ることもできず
黄泉路に埋められたこの英雄”

楊七郎 父上、我らは史書に名を留めて、名声を長く伝えることもできず、いたずらに胸いっぱい怨みを抱いておりますが、いつになれば消えるのでしょうか。

楊令公 (唱う)

“いたずらに胸いっぱいの怨みを抱き、万丈の虹とすることもできない
麒麟閣に我らの顔を描かれることを願ったが、凶らずも李陵碑の下で早くも命を失い
どうしてあの両狼山をむごたらしく祁連の墓とすることができよう
我が無敵の半生や、辺境での十回の功績も虚しくなった”

楊七郎 父上は一世の猛将であられたのに、奸賊の手に落ちようとは誰が思うのでしょうか。

楊令公 想えば私は若い頃に南北を討伐し、東西の敵を除いたが、今や全て一場の春の夢
となってしまった。(唱う)

【油葫蘆】

“南山の虎は疲れ果て
爪と牙があっても役に立たず
全ては東の風に委ねる
思うに象眼を施した我が弓は千鈞の重さを引くことができ
一本の槍は三軍の多きを恐れぬ
かつて蛮国を攻め
敵陣を突き破った
たとえ相手が四方八方に武器を動かそうとも
誰も出馬して私と刃を交えようとしなかった”

楊七郎 父上の威名はこのようでありました。兵書に「一人が命懸けで掛かれば、一万人
でもかなわぬ」と言います。もしあの時に自害せず、命懸けで突撃をしたならば、或い
は運良く逃れられたかもしれません。

楊令公 (唱う)

【天下樂】

“ああ、勝敗は兵家の常とお前は言うが
兵書のことは、私がよく知っている”
我ら楊を姓とする者が、蕃兵によって虎口交牙峪へと陥った。これぞ羊（楊）が虎口に
落ちるといい、兵家の禁を犯しているのだから、どうして生きられよう。(唱う)
“奸臣は我らのことを羊を虎口に投じるように葬った
将とは智謀にあり
勇気にあらずと信じる
なんとこの姜子牙のような私を非命に死なせたものだ”

我らは三関にやって来たが、息子よ驚くでないぞ。

楊七郎 父上、六郎兄者の寝所に来ました。私がいまずこの銀の燭台の蠟燭を動かしましよ
う。(蠟燭を動かすしぐさをする)

楊景 灯影の下に一人の年老いた将軍と一人の若い将軍がいる。辺境に何か緊急事態があ
ったのならば、明日陣中にて相談しよう。日も暮れたから、お前達はひとまず下がれ。

楊令公 六郎よ、どうして我らがわからないのだ。(唱う)

【後庭花】

“お前の耳が聞こえるならば我が声を聴け

お前の目が見えるならば我が顔を見よ”

楊景 こちらの若い將軍はどなたですか。

楊令公 (唱う)

“これはあの余太君が特にいとおしんだ子”

楊景 老將軍よあなたは一体誰なのですか。

楊令公 (唱う)

“我こそはお前の父親の楊令公”

楊景 なんと父上と七郎であったとは。こちらに来られてお話し下っても、構いませんものを。

楊令公 息子よ、もっと後ろに下がっておれ。お前は生ける魂だが、私は死んだ魂。お前は私の話を聞くがよい。

楊景 父上のお話を、聞かせて頂きます。

楊令公 お前の父は蕃兵と戦い、両狼山の虎口交牙峪にて包圍され、内に糧秣なく、外に援軍なく、逃れることができずに、李陵碑に頭を打ちつけて死んだ。お前の弟の七郎は敵陣を突破して救援を求めたが、奸臣の潘仁美により、はりつけ柱に縛られ、多くの矢を集中させて射殺された。今韓延壽は私の遺骨を幽州にある昊天寺の塔の先に掛け、毎日百人の兵に、それぞれ三本ずつ矢を射させ、百箭会と名付けている。私は今痛くてたまらないので、お前の夢に現れて言付けに来たのだ。

楊景 (悲しむしぐさをする) 父上、このように苦しまれていたとは私は知りませんでした。

明日になったらさかのぼって四十九日の法要をして父上と弟を済度しましょう。

楊令公 (唱う)

“早くも双方が巡り会ったのに

紙銭を焼いて送り出そうとする

息子よ私が蕃族と激しく戦い

あやつらに鉄の桶のように囲まれたことを忘れたか

進もうとすれども食糧はなく

退こうとすれども道は断たれた

風に乗ることもできないので
幾重もの敵兵から逃れられなかった
思うに私は一世の英雄であるのに
投降してかりそめに命を長らえることなどできようか
荒れた碑に頭を打ちつけて命を断ち
今でも草は点々と血に赤く染まり
霊魂はなおも恐れる”

楊七郎 兄上、我らは蕃国にて無念の死を遂げ、ひどい苦しみを受けています。兄上が憐れとお思い下さるならば、急いで将兵を選び、我ら父子の遺体を救いに来て下さい。

楊景 父上、あなたのご遺骨は本当に幽州にある昊天寺の塔の先に掛けられているのですか。

楊令公（唱う）

【青哥兒】

“ああ、あやつは我が遺体をあのようになり
故に息子に嘆きながら全てを訴える”

楊景 父上、思いますに韓延壽の兵は強く馬は遅いので、智恵で取ることはできても、力で奪うのは難しいでしょう。三関にいる二十四人の指揮使の誰を私と共に行かせれば、うまくいくのでしょうか。

楊令公（唱う）

“お前にもし心があつて全身に矢傷を受けて風にも耐えられぬ私を憐れと思うなら
畏を仕掛ける必要はなく
元帥を選ぶにも及ばぬ
ただ軍中にいる
火徳の天蓬が
自ずから神通力を見せよう
遺骨の行方を探し
大暴れをして
我が骨壺を早く虎狼の群から奪い出せ
これこそお前が線香と花を供えてくれるに等しい”

楊景 父上ご安心下さい。私は明日すぐに配下の人馬を選び、自ら幽州へ行き、父上と弟

のために恨みを晴らしましょう。

楊令公 六郎よ、気を付けるのだぞ。(悲しむしぐさをして、唱う)

【寄生草】

“私がどうして涙をしきりにぬぐうのか、ただお前の心中で理解せよ
早くあの嘉山の盗賊を遣わして戦わせ
宣花巨斧を軽々と振り回し
私が昊天塔で長らく苦しむことを免れさせよ
お前がもし蕃族との不倶戴天の恨みを忘れたならば
私は望郷臺で家に戻る夢を虚しく見ることになる”

楊景 父上、私がどうしてこの怨みを忘れましょうか。

楊令公 (唱う)

【賺煞尾】

“息子よ、お前が朝廷に戻ったならば、私のこの怨みを訴えよ
私は昇進や寵愛を望まず
ただ望むのは常に君臣が一体となり
早く私をあの清風無佞楼に迎えること
会う時間が短く
お前が寝ぼけ眼で朦朧としていることが恨めしい
息子よ、会ったのは夢であろうと言うまいな
楊家の子であるお前に告げる
父子の情の重さを思い
私の靈魂を仏寺にて憂えさせるな”

楊七郎 我ら父子は行きます。兄上夢と思っはなりませんぞ。(共に退場)

楊景 (目醒めるしぐさをする) 父上、弟よこちらへ来て下さい。一体どうして消えてしまったのだろう。なんと夢であったか。父上、弟よ、悲しくてたまりません。今しがた父上と弟が夢で話していたことは、まことに悲しいことであった。信じないとしてもどうしてこのようにはっきりとした夢があるだろうか。信じるとしてもまだ真偽がわからない。まずは夜が明けたら諸将と相談することにしよう。(詩をうたう)

“父上から詳しく事情を話され

夢の中で両目から涙が次々と流れる

このような事情があると聞いたからには
精銳を率いて必ずや恨みを晴らそう”
父上、弟よ、まことに悲しいことだ。(退場)

[注]

- 昊天塔…遼の道宗朝において、僧の志智によって燕京（北京市）に昊天寺が建造され、そこには六層八角形で高さ二百尺の宝塔が建立されていた。古松崇志「考古・石刻資料よりみた契丹（遼）の仏教」（『日本史研究』第五二二号、二〇〇六年）参照。
- 雄鎮三關幾度秋～…「謝金吾」第二折における楊六郎の登場詩でも、一句目が「雄鎮三關二十秋」となっている以外は同じ詩が使われている。
- 白溝…雄州（河北省雄縣）の北を東西に流れて黄河に流れ込む、宋と遼の国境の河。巨馬河ともいう。
- 梁州遂城關・霸州益津關・雄州瓦橋關…「謝金吾」第二折の楊六郎の白にも同様の記述がある。ただしこの内、「梁州遂城關」は正しくは「易州遂城關」とするべきであろう。残る二箇所に関しては、『資治通鑑』卷二九四、顯徳六年（九五九）五月己酉に「以瓦橋關爲雄州、割容城・歸義二縣隸之。以益津關爲霸州、割文安・大城二縣隸之（瓦橋関を雄州とし、容城と歸義の二県を割讓してこれに属させる。益津関を霸州とし、文安と大城の二県を割讓してこれに属させる）」とある。それぞれ河北省徐水県、河北省霸州市、河北省雄県に当たる。
- 指揮使…将校。
- 陰司…あの世、冥府、冥土。『西遊記』第十二回に「卻説鬼使同劉全夫妻二人出了陰司（さて冥土の使者は劉全夫妻を伴って冥土を出た）」とある。
- 枉死城…横死した者の魂が冥府で落ち着く場所を指す。無名氏【罵玉郎過感皇恩採茶歌】の【感皇恩】に「把一座介丘縣生紐做枉死城、却翻做鬼門關（この介丘県はむぎむぎと枉死城に変えられ、地獄の入り口と化した）」とある。
- 傀儡棚中～…唐の玄宗「傀儡吟」に「刻木牽絲作老翁、雞皮鶴髮與真同。須與弄罷寂無事、還似人生一夢中（木を彫り糸で繋いで翁を作り、鶏の皮や鶴の羽を用いて本物のよう。しばし遊んだ後はひっそりと何もなく、まことに人生は夢の中にいるかのよう）」とあるのに基づくか。
- 漢主臺…麒麟閣のこと。漢の宣帝が十一名の功臣の肖像画を描かせてそこに掲げ、顯彰

したという。

- 祁連…『漢書』卷五十五「霍去病傳」において、霍去病が祁連山で多くの匈奴を斬り、捕虜としたことが見える。この部分は、自分も霍去病のように異民族を討ちたいと思っていたが果たせなかった、という意味か。
- 南山老大蟲…南山の虎。強いものの象徴。『蒙求』「周處三害」に、晉の周處が南山の白額虎を射殺したことが見える。「黒旋風」(元曲選本) 第一折【一煞】「拳打的南山猛虎難藏隱、脚踢的北海蛟龍怎住停(拳は打てば南山の猛虎も隠れていられず、足は蹴れば北海の蛟龍もじっとしてられない)」。
- 雕弓…象眼を施した弓のこと。「哭存孝」(内府本) 第一折、李克用の登場詩に「鳳翎箭手中施展、寶雕弓臂上斜彎(鳳の羽の矢を手にし、象眼を施した弓を腕で斜めに引く)」とある。
- 一夫拚命、萬夫難敵…一人が命を捨ててかかれば、一万人も相手になり難い。「一夫拚命、萬夫難當」(「單刀會」(元刊本) 第三折)、「一夫捨命、萬夫難當」(「博望燒屯」(内府本) 第三折) にも作る。
- 斷送…だめにする。ひどい場合には命を失うことを意味する。宋方壺【一枝花】套「妓女」【一枝花】「斷送了雨雲期(楽しい逢瀬もだめにする)」。
- 銀臺上畫燭…銀の燭台に差した美しい蠟燭。「貶夜郎」(元刊本) 第二折【倘秀才】「直喫的明月長銀臺畫燭(銀の燭台や美しい蠟燭に月光が長く伸びるまで飲み続けよう)」。
- 勾當…こと。事情。「岳陽樓」(古名家本) 第一折【醉中天】「你這般曲脊駝腰、來我眼前有甚勾當(お前はそんなに背を曲げ腰を丸め、私に何用か)」、また「介子推」(元刊本) 第四折【金蕉葉】の入れぜりふに「小人雖是個莊家漢、也省的些個小勾當(私は田舎者ではありますが、少しは物をわきまえています)」とある。
- 怕做甚麼…何のいけないことがあるか。何の差し支えもない。「單刀會」(脈望館本) 第二折、魯肅の白に「先生是客、怕做甚麼(先生はお客ですので、心配することはないでしょう)」とある。
- 齋累七…人の死後四十九日まで七日ごとに行う法要。「累七齋」「七修齋」「齋七」「累七」「做七」などともいう。「小孫屠」第十四出【南曲刷子序】「便累七追享、不免請幾個僧人(七日ごとの法要をするならば、何人かの僧に頼まなければならない)」。
- 一星星…一つ一つ、全て。「三奪槩」(元刊本) 第三折【鴛鴦煞】「調泛得君王一星星都隨順(君主をそそのかして一つ一つ全て言う通りにさせた)」。

- 打鳳撈龍…強敵を罾に掛けることをいう。「單刀會」(元刊本) 第三折【鬪鶴鶉】「安排下打鳳撈龍、準備着天羅地網(鳳を打ち龍を捕らえる罾を仕掛け、天地に張り巡らせた網を準備する)」。
- 天蓬…本来は道教の水神、北極天蓬都元帥真君を指す。凶暴な者を喩える。『董解元西廂記諸宮調』卷二【麻婆子】「便做天蓬黑煞般盡刁厥(たとえ天蓬や黒煞のように凶暴であろうとも)」。
- 覓跡尋踪…後を追うこと。「張生煮海」(元曲選本) 第二折、張生の白に「因此尋踪覓跡、前來尋他、却不知何處去了(後を追いかけて、あの人を訪ねて来たが、どこへ行ってしまったのであろう)」とある。「尋踪覓影」ともいい、「活拿蕭天佑」(脈望館本) 第三折【金蕉葉】に「使不着你叫吶吶尋踪覓影(お前達がわめきつつ我らに向かって来られなくする)」とある。
- 嘉山太僕…「嘉山」は「謝金吾」第二折に「加山孟良」というのと関わりがあるか。また本劇の第三折【煞尾】には「嘉州孟太僕」と見える。嘉州は四川省樂山市。「太僕」は盜賊、特に緑林の英雄を指している言葉。「李逵負荊」(元曲選本) 第一折で、梁山泊の頭領になりすます宋剛に対して王林が「太僕請滿飲此盃(盜賊様、一杯どうぞ)」と言う。
- 宣花巨斧…宣花斧と同じものを指すであろう。半月状の刃に長い柄の付いた斧。「活拿蕭天佑」(脈望館本) 第二折、孟良の登場詩に「手持月様宣花斧、敢戰番兵號孟良(手には月のような宣花斧を持ち、勇敢に蕃兵と戦うのはこの孟良)」とある。「宣花」は「宣化」にも作る。
- 望郷臺…冥界にあり、死者がここに登って現世に残した家族の様子を望み見る高台。「寶娥冤」(古名家本) 第四折【新水令】「我每日哭啼啼守定望郷臺(私は毎日泣き叫び望郷台を離れぬ)」。
- 梵王宮…本来は色界初禪天の主である梵王の住む宮殿のことであるが、転じて仏寺のことをいう。宋方壺【醉花陰】套「走蘇卿」【出隊子】「猛然見梵王宮得悟的老禪僧(不意に現れたのは寺で悟りを得た老禪僧)」。

第二折

〔訳〕

岳勝(外が岳勝に扮して登場、詩をうたう)

“軍鼓と銅鑼を一、二度敲き
轅門の内外に豪傑が並ぶ
三軍は平安を祈って「はっ」と唱え
軍旗を強く巻いて決して揺らさない”

私は花面獸の岳勝でございます。帥府排軍の職を授かり、六郎兄者の配下にて補佐をしておる。兄者はこの度はどんな辺境の軍務のために、夜が明けると、早くも軍議を召集したのであろうか。私は先に行ってご機嫌をうかがおう。

楊景（兵士を連れて登場、詩をうたう）

“昨夜は父上と確かにお会いした
夢の中のことは真実でないと言うな
私は今すぐ恨みを晴らさなければ
一世の英雄であろうと虚しいこと”

岳勝（まみえるしぐさをする）兄者、この度は何のために、このように早く軍議を開くのでしょうか。

楊景 弟よお前は知るまいが、私は夜中に夢を見て、父上が弟の七郎と共に灯りの下に現れ、涙をぬぐいながら、自ら私に話されたのだ。父上は蕃兵によって両狼山の虎口交牙峪に閉じこめられ、内に糧秣なく、外に援軍なく、自ら李陵碑に頭を打ちつけて死んだ。その時我が弟の七郎は、敵陣を突破して救援を求めたが、奸臣の潘仁美により、はりつけ柱に縛られ、多くの矢を集中させて射殺された。今韓延壽は父上の遺骨を幽州にある昊天寺の塔の先に掛け、毎日百人の兵に、それぞれ三本ずつ矢を射させ、百箭会と名付けておる。靈魂は痛みに堪えられず、私に自ら孟良を連れてすぐに救うようにと言い付けられた。思うに父上がこのような苦しみを受けておられるとは、信じないとしても、どうしてこのようにはっきりとした夢があるだろうか。信じるとしても、まだ真偽がわからない。だから早々に軍議を開き、兄弟達と相談して、行動を決めようとしたのだ。

岳勝 わかりました。私が袖の中で卦を立てますに、その夢は嘘ではありません。本日の正午に、故郷から必ず手紙をよこしに来る者があり、詳しいことがわかるでしょう。

楊景 それならば一体どうしたものか。これお前、門の前で、誰かやって来る者がおるか見ておれ。

下級兵（丑が下級兵に扮して登場、詩をうたう）

“肉を半斤食い

酒を半升飲む

戦いに行くと言え

驚いて全身汗まみれ”

私は楊家の屋敷の兵士でございます。余太君様の命を奉じ、瓦橋関の六郎元帥に一通の手紙を届けに行くのだ。早くも門の前に着いたわい。これお前、太君様が兵士を遣わして手紙を届けに来たとお知らせしてくれ。

兵士 ここにおられよ、知らせ参る。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします。太君様から手紙を送るように遣わされた兵が、門前に来ております。

楊景 通してやれ。

兵士 お入り下さい。

下級兵 (まみえるしぐさをする) 元帥、太君様の命により私は元帥様に一通の手紙を届けて参りました。

楊景 (手紙を受け取ってひざまずき開封して読むしぐさをする) ああ、なんと母上のお手紙にも父上と弟が夢に現れたとあり、一句一句全て私の見た夢と同じだ。このような不思議なことがあるとは。これお前、酒十瓶と羊肉二十斤をとらせるゆえ、私のために轅門を見張れ。二十四人の指揮使達でやって来る者があれば皆通してよいが、孟良だけは遮って、通してはならないぞ。

下級兵 元帥もしあの者を通さなければ、あの者は私を殴るのではありませんか。

楊景 お前もあいつを殴れ。

下級兵 私を罵ったならばどうしましょう。

楊景 お前もあいつを罵れ。

下級兵 私に咬みついたならばどうしましょう。

楊景 馬鹿を言うな。

岳勝 兄者、孟良を通さないのは、一体どのようなお考えでしょうか。

楊景 弟よお前にはわかるまい。思うに孟良は強情な性格だから、行かせようとすれば行こうとしないが、行かせなければ、行こうとするのだ。あいつがやって来た時に、私がわざと一言二言話してあいつを怒らせてやれば、必ずやあいつは私と共に父上を救いに行くだろう。

兵士 私は轅門を見張っていると、誰かやって来るのが見えるぞ。

孟良 (正末が孟良に扮して登場) 私は孟良でございます。兄者の命を奉じ、辺境の見回り

に行っていた。平穩無事であったので、兄者に報告しに一つ行かなければ。(唱う)

【中呂・粉蝶兒】

“近頃は征伐することがなく

私は界河の辺りを見回って来て

全員生け捕りにしてやった

彪のような巨体を躍らせ、猿のような腕を伸ばし、肝っ玉が太い

私がどんな武芸を使うか言うまでもなく

振り返って私が鎧兜を着るのを見ておれ”

【醉春風】

“彫刻を施した鞍を柵に置き、飼葉桶の前に軍馬を繋ぐ

宣花の斧を手に持てば、敵軍を相手にするのも遊びのよう

万騎が互いに駆け、両軍が相まみえても、我が腕前は少しも後れを取らぬ”

(下級兵と会うしぐさをする) こやつここで何をしておる。

下級兵 何をしているかだつて。ここで虱を取っているのさ。元帥の軍命を奉じて、私は
轅門を見張っており、誰も通しはしないのだ。

孟良 私は通るぞ。

下級兵 (さえぎるしぐさをする) だめだ、だめだ。

孟良 (怒るしぐさをする) お前には私に通るなど三回言う勇気があるか。

下級兵 三回はおろか、百二十回でもだめだと言ってやろう。

(孟良が殴るしぐさをする)

下級兵 だんな、だんな殴っちゃいけねえ、お通ししますから。

孟良 (まみえるしぐさをする) 兄者の軍令により、私は界河を見回りに行きました。平穩
無事であったので、ご報告に参りました。

楊景 何事もなければ、ひとまず下がっておれ。

孟良 おいお前、元帥が下がれと仰せだ。

楊景 お前が下がれ。

孟良 誰を下がらせるのですか。

楊景 お前が下がるのだ。

孟良 私に下がれと。下がりませぬ下がりませぬ、ここで殺されようとも下がりませぬ。

楊景 岳の弟よ、こいつを見ろ、こいつには私の心中のことなどわかるまい。

孟良（唱う）

【紅繡鞋】

“普段は私と話をするのを好まないことがないのに
本日は私と会ってもうなだれて何も言わずに嘆息なさっている
何か秘密があるならこの孟良も知るべきではないのか”

楊景（岳勝に耳うちをするしぐさをする） あいつにどうしてわかるものか。

孟良（唱う）

“一人はこちらを見、もう一人は馬鹿にし
まことに私をたちまちひどく悩ませる”

楊景 孟良よ、私の考えていることを、当ててみよ。

孟良 当ててみましょう。

楊景 当たったらお前を用いるが、当たらなければ用いないから、ひとまず下がれ。

孟良（唱う）

【石榴花】

“大遼の軍馬が蹂躪に来たのでは
私はあなたのために急ぎ出陣しましょう”

楊景 違う。

孟良（唱う）

“王枢密が宋の天子を愚弄したのでは
私はあなたのために馬の支度をし
都へ行きましょう”

楊景 それも違う。

孟良（唱う）

“余太君様が誰かに侮辱されたのでは”

楊景 私の母上を誰が侮辱しようとするだろうか。

孟良 誰かがするかもしれませんぞ。（唱う）

“趙玄壇の力があってこそ
ようやく虎の頭を撫でて
ひげを弄ぶことができる
あなたのためにその賊を捕らえましょう”

【鬪鶴鶉】

“ああ、その賊は霧を立ちこめた蚩尤ではなく、空を飛ぶ夜叉でもあるまい”

楊景 そやつがお前の腕前が優れているのを見たら、逃げ隠れするであろう。

孟良（唱う）

“そやつがたとえ雲の中に隠れても、地面の下に隠れても

私は天地をひっくり返してそやつを見つけよう

そやつが姿を変えることができたとしても

私が一喝すればごろごろと海は沸き山は崩れ

一にらみすればがらがらと天は落ち地は崩れる”

楊景 孟良よ、お前はずっと当てようとしているが、外してばかりではないか。下がれ。

孟良 当たらなかったのだから、私はひとまず下がります。（門を出て下級兵に会う）そこのお前、ここへ何をしに来た。すぐに本当のことを言え。もし言わなければ、お前のぼんくら頭を斬るなんぞ、私が斧を一振りするだけでできるぞ。

下級兵 元帥が私に酒十瓶と羊肉二十斤を下さったばかりなのに、あんたに首を斬られたら、どうやって食うというのか。

孟良 早く言え。言わないと、斧で斬るぞ。

下級兵 だんな乱暴はいけません、斧で斬るなんて。言います言います。私は楊家の屋敷の兵で、余太君様の命を奉じ、一通の手紙を元帥にお届けしました。それによると夢に令公様が現れて言うには、蕃兵と戦い、凶らずも蕃兵によって両狼山の虎口交牙峪に閉じ込められ、内に糧秣なく、外に援軍なしとなりました。七郎様は敵陣を突破して救援を求めましたが、凶らずも潘仁美によってはりつけ柱に縛られて、多くの矢を集中させて射殺されました。令公様は逃れることができず、李陵碑に頭を打ちつけて死にました。今韓延壽は令公様の遺体を焼き、遺骨を幽州にある昊天寺の塔の先に掛け、行き来する者全てに、矢がある者には三本の矢を射させ、矢がない者には三つのレンガを投げさせ、百薬煎と名付けているとのこと。

孟良 ひょっとして百箭会ではないか。

下級兵 その通りです。

孟良 明らかに兄者は諸将を召して、お父上の遺骨を取りに行くことを相談している。これは緊急のことなのに、わざと私に隠していたのだ。ああ、兄者、我ら二十四人の指揮使は、皆同じ兄弟だというのに、どうしてえこひいきをしてあいつらだけに相談して、

私一人だけを下がらせるのだ。もう一度行って、兄者の秘密を暴いてやろう。(楊景にまみえるしぐさをする) 兄者、わかりましたぞ。

楊景 何がわかったのだ。

孟良 兄者、あなたはお父上を救おうと、遺骨を奪い返しに行くのではありませんか。

楊景 誰が母上のことを話したのだ。弟よ、お前の知っての通り、あやつらは今父上の遺骨を幽州にある昊天寺の塔の先に掛けているので、私は父上のために遺骨を盗み取りに行くつもりなのだ。あれこれと考えたものの、良い策はなく、どうしたものか。

孟良 兄者、他の者は誰も行くことができなくとも、私だけは行くことができます。

楊景 弟よ、そなたが行くならば私の大恩人だ。

孟良 私は下がります。

楊景 そのセリフを、私に言い返しおったな。弟よ、お前ならばどのように行くのか、一つ話してみよ。

孟良 (唱う)

【上小樓】

“私のこの天をも焼くたいまつにかかれば
経文も仏法もお構いなし
大股で僧房に踏み込み、和尚を捕らえ、袈裟をつかむ
私は癩癩を起こし
怒りを発す
禅榻から引き離して
頭をごろりと大殿の階の下に投げ捨てよう”

【幺篇】

“胸を足で踏みつけ、顔を手でつかむ
私の焼きを入れた巨大な斧で、ぐちゃぐちゃとあやつの顔を斬ってやろう
凶悪な菩薩や
残忍な那吒や
金剛であろうと話にならぬ
釈迦仏でもどうしようもない”

岳勝 弟よ向こうへ行ったら気を付けろよ。

楊景 弟よ行くのならば、お前は一体どのような武器を持ち、どのような鎧を着るのだ。

孟良（唱う）

【耍孩兒】

“私は急いでいるので取り立てて鎧は必要なく
軽々とした衣服を身に付ける
見れば相手は大軍といっても病んだガマガエルのようなもの
荒々しい拳法を存分に披露しよう
私はしっかりと葫蘆を背負い、石の上でシュッシュと斧の刃を研ぐ
出会ったならばただでは済まさず
そやつを殺すのはまるで蒲や葦を刈り、瓢箪や瓜を割るかのようにしてくれる”
排軍、私はお前に二つのことを言い付けよう。

岳勝 弟よ、二つのこととは一体何だったのだ。

孟良（唱う）

【三煞】

“魂を迎える一本の旗と、霊を安らかにする数本の花を用意し
兵士達は皆麻の衣を掛けよ
亡き父を担ぐ馬をきつく繋ぎ
兄者、お父上の骨壺をしっかりと背負いなされ
孝行の名声が天下に伝われば
孟宗が筍に泣いたことや、袁孝がもっこを引いたことなど話にならない”

楊景 弟よ、我らが幽州の昊天寺へ行っても、寺の中には五百人以上の僧がいて、それぞれ皆が槍や棒を使うことができ、山門は鉄の桶のように堅く閉じられている。どうして開けることができようか。

孟良 兄者、私がいれば、開かないはずはありません。（唱う）

【二煞】

“門環を手で揺らし、門の敷居を足で踏むのは
老令公様の遺骨が仏塔に掛けられているから
石で築いた柱を泥ごと引き抜き、銅で鑄造した旗竿を地面から抜く
四天王が山門を守ろうとも恐れることはなく
私は石碑を支える腕前と、鼎を持ち上げる勇猛さを見せてやろう”

楊景 弟よ、父上の遺骨は幽州の昊天塔の先にあるのに、どうして下ろすことができよう

か。

孟良 兄者、ご安心を。(唱う)

【煞尾】

“火輪を左手で持ち

管心を右手でひねる

私が少し揺り動かせばぐらぐらと琉璃瓦が揺れ動き

それ、あなたのためにあの精巧な舍利塔を倒そう” (退場)

楊景 孟良は行ってしまったわい。弟よ、そなたは三関を鎮守せよ。今から孟良と協力して我が父上の遺骨を取りに一つ行くとしよう。(詩をうたう)

“岳排軍は陣を堅く守り

孟火星は誰もさえぎる者はいない

頭領達は管轄地を離れてはならぬ

楊六郎は密かに三関を離れる” (共に退場)

〔注〕

○帥鼓銅鑼一兩敲〜…この詩は「小尉遲」(元曲選本)第一折にも見え、また「單鞭奪槊」(元曲選本)第四折に見える詩も、二句目の「英豪」を「兵刀」に作る以外は同様。「平安喏」は軍吏が出陣する時に平安を祈って唱えられる挨拶の言葉。

○花面獸…「花」は入れ墨か。唐末や宋代において、兵士の逃亡を防ぐために顔に入れ墨をしたことを反映したものかもしれない。なお『楊家府世代忠勇通俗演義志伝』では、岳勝は手柄を立てるために楊六郎の軍に加わりたと思っていたが、王欽の策略により六郎の指揮下には病人や老人ばかりが送られていたので、顔に姜黄の汁を塗って黄色くして軍に入り込んだということになっている。また綽名は「花刀」となっており、大刀を使うことからとされている。他の雑劇での綽名は、「謝金吾」が「雙刀」とし、「昊天塔」と「破天陣」が「花面獸」としている。

○排軍…元は盾と矛を持った側仕えの兵卒や衛兵を指す。後に広く武官や将校をいうようになった。

○陞帳…陣中に将兵を招集して軍議を開くこと。「隔江鬪智」(元曲選本)第二折、劉封の白に「今日俺軍師陞帳、有事計較(この度軍師が軍議を開き、相談があるとのこと)」とある。

- 袖傳一課…「袖占一課」と同じであろう。袖の中で卦を立てる。「博望燒屯」(内府本) 第四折、諸葛亮の白に「我才袖占一課、今日當卓午、必有說客至此(私が袖の中で占ってみたところ、本日の午の刻に、必ずや論客がこちらへやって来ます)」とある。
- 當住…防ぎ止める。立ち塞がる。「博望燒屯」(内府本) 第二折【隔尾】「用土布袋把長江緊當住、水淹殺的軍兵死無數(土囊で長江をしっかりと堰き止め、水死する敵兵は数知れず)」。
- 界河…河北省望都県を源とする河。ただしここでは、国境の河という意味合いか。
- 彪軀…巨体のことをいう。「氣英布」(元刊本) 第四折【四門子】「動彪軀、掄巨毒(巨体を動かし、武器を振るう)」。「襄陽會」(内府本) 第二折【聖藥王】「欠彪軀整頓了錦征袍(巨体を折り曲げて錦の陣羽織を整える)」。
- 猿臂…猿のように長い腕。弓を射るのに都合がよいとされる。「趙氏孤兒」(元刊本) 第四折【耍孩兒】「稱動馬熊腰將猿臂輕舒(ヒグマのごとき腰を動かし猿のごとき腕を軽々と伸ばす)」。
- 半合兒…たちまち。しばらく。「破天陣」(内府本) 第一折【後庭花】「我可敢半合兒着那廝刮土平(私はきっと瞬く間にあやつらを真っ平らにしてやろう)」。「氣英布」(元刊本) 第三折【剔銀燈】「這的半合兒敢慢罵諸侯(しばらく諸侯を口汚く罵る)」。
- 則除是…～せぬ限り。～の場合に限って。關漢卿【一枝花】套「不伏老」【尾】「則除是閻王親自喚、神鬼自來勾、三魂歸地府、七魄喪冥幽(閻魔様が直々に呼び、冥土の使者に引き出され、三魂があのだに送られ、七魄が黄泉路に消えることでもない限り)」。
- 趙玄壇…道教の神である趙公元帥、趙公明のこと。『封神演義』、『北遊記』などにも登場する。
- 布霧的蚩尤…『宋史』卷一四九「輿服志一・指南車」「黃帝與蚩尤戰於涿鹿之野、蚩尤作大霧、軍士不知所向、帝遂作指南車(黃帝と蚩尤が涿鹿の野で戦った時、蚩尤が濃い霧を起こし、兵士達は方向がわからなくなったので、帝は指南車を作った)」。
- 骨碌碌…ここではごろごろという音を表す。「柳毅傳書」(元曲選本) 第二折【鬪鶴鶻】「起幾箇骨碌碌的轟雷、更一陣撲簌簌的怪風(何度かごろごろと轟く雷が起き、更にひゅうひゅうと一陣の怪しい風が吹く)」。
- 赤力力…山などがガラガラと崩れる音。また、旗などが風になびく様を表す場合にも用いられる。「黒旋風」(脈望館本) 第一折【哨篇】「我喝一聲骨都都江海沸、撼一撼赤力力山嶽崩(私が一喝すればごうごうと河や海が沸き、身を震わせればがらがらと山が崩れ

る)」。

- 躁暴…猛々しいこと。「三奪槩」(元刊本) 第二折【鬪蝦蟆】「但征敵處躁暴、相持處惟撤槩(敵を討つ時には猛々しく、相對する時には荒々しく)」。
- 百藥箭…「百藥煎」とかけた言葉遊びであろう。「百藥煎」は『本草綱目』卷三十九「蟲部一・五倍子・百藥煎」に見え、痰、熱、下痢などに効果があるという。
- 妙策…巧妙な策略。「單刀會」(脈望館本) 第一折、魯肅の白に「老相公不必轉轉議論。小官自有妙策神機(ご老公があれこれ議論なさる必要はない。私に良い策がある)」とあるように、「妙策神機」という形になることもある。
- 重生父母…大きな恩のある人。命の恩人。「酷寒亭」(古名家本) 楔子、宋彬の白に「多虧了哥哥指引救拔得生、你是我重生父母(兄さんのおかげで命拾いし、あなたは私の命の恩人です)」とある。
- 滴溜撲…転がり落ちる様。「黒旋風」(脈望館本) 第一折、李逵の白に「滴溜撲摔箇一字交(ずでんと投げ飛ばして一文字にのしてやる)」とある。
- 蘸金巨斧…焼きを入れた鉄製の斧。「蘸」は熱した金属を水に漬けて硬度を増すこと。「氣英布」(元刊本) 第四折【収尾】「生拏損那明柄黃烘烘簸箕來大金蘸斧(むざむざと巨大な金の斧をだめにしてしまった)」。
- 乞抽挖叉…がちゃがちゃ、ぐちゃぐちゃという擬音語であろう。他に用例は見当たらないが、『劉知遠諸宮調』卷二【快活年】後の【尾】に「斧舉處誑殺劉郎、救不迭挖插地一聲響(斧を掲げれば劉郎はひどく驚き、救う間もなくぱっさりと音が響く)」とある「挖插地」に通じるものか。
- 莽撞…荒っぽい、がさつな。「莽戇」にも作る。「博望燒屯」(元刊本) 第二折【隨煞尾】「我交你莽撞的殘生做不得主(私はがさつ者のお前の命を救うことができない)」。
- 葫蘆…「謝金吾」第二折の孟良の登場詩に「則我身背火葫蘆、肩擔蘸金斧(火付けの瓢箪を背負い、焼きを入れた斧を肩に担ぐ)」とあり、ここの「葫蘆」も同様に「火葫蘆(瓢箪の形をし、中に火薬を詰めた武器)」と見るべきであろう。
- 搥搥…刃物を研ぐ音。「黒旋風」(脈望館本) 第一折【端正好】「將我這夾鋼斧綽清泉、觸石上搥搥的新磨掙(私のこの鋼の斧はきれいな水にサッとつけ、砥石でシュッシュと研いだけばかり)」。
- 孟宗哭笋…孟宗は二十四孝の一人。筍を好む母のために冬の竹林に入って泣き悲しんだところ、筍が生えてきたという話。『録鬼簿』曹棟亭本の屈子敬の項に「孟宗哭竹」とあ

る。

- 袁孝拖筥…「袁孝」とは恐らく、名を「原穀」「元覺」「元穀」「元角」「袁覺」「円穀」などにも作られる、『孝行録』など一部の二十四孝に含まれる人物のことであろう。『孝行録』に収められる話は、元覺の父の悟が年老いた父親をもっこに乗せて山に捨てたところ、従っていた元覺がもっこを持ち帰ろうとするのでとがめると、父が老いた時にまたこれを使うと言われ、改心して老父を連れ帰ったというもの。我が国の姥捨山伝説に当たるもので、老父を山に捨てた男が親を運んだもっこで子から諭されるという物語である。高橋文治「原穀・元覺考」（『追手門学院大学東洋文化学科年報』第十号、一九九五年）参照。『太和正音譜』には無名氏の雑劇として「袁覺拖筥」とある。
- 擧鼎…優れた武勇の形容。『史記』卷七「項羽本紀」に見えるエピソードに基づくもので、「拔山」と対になって用いられることが多い。「三奪槩」（元刊本）第一折【醉扶歸】「若有擧鼎拔山の霸王、哎漢高呵你怎敢正眼兒把韓侯望（もし鼎を持ち上げ山を抜く霸王の項羽がいたならば、ああ漢の高祖よお前は韓信の顔をまともに見られまい）」。
- 火輪・管心…火輪は塔の屋根に当たる部分。管心は塔の頂に立てた柱状のもの。

第三折

〔訳〕

和尚（丑が和尚に扮して登場、詩をうたう）

“私は汚れのない和尚でありながら
これまで経文を唱えたことはない
誑経を聞けばたちまち頭痛がして
いつも山のふもとで犬肉を食らう”

拙僧は幽州の昊天寺のしがない和尚でございます。楊令公の遺骨が塔の先に掛けられ、毎日百人の兵に、それぞれ三本ずつ矢を射させ、百箭会と名付けておる。晩になると下ろして来て、この中に鍵を掛けて収め、誰にも盗まれないようにしている。日も暮れたので、この山門を閉じるとしよう。

（正末が孟良に扮し楊景と共に登場）

楊景　すごい火だ。弟よ、もっと急げ、もっと急げ。

孟良　兄者、私はあなたと一緒にいきます、いきます、いきますとも。（唱う）

【正宮・端正好】

“一筋の火の光が飛べば、早くも四方を煙が覆い
それは全て我が背中の瓢箪から出たもの
火龍は一万の列になって空を舞い
あかあかとあの幽州への道を照らすだろう”

【滾繡毬】

“焼かれて居場所がなく
城内の全ての者が慟哭するのは
老令公様の灰と化した遺骨と共にあるかのよう
「法は炉の火のように厳しい」などと言うな
風を祭る臺は必要なく、狼煙を上げる必要もなく
まるで六丁神が怒っているかのよう
見れば天道の半分が真っ赤になり
漢の張良が連雲棧を焼き払い、李老君が丹薬を煉る炉をひっくり返したかのよう
この火はこれまでにないもの”

楊景 弟よ、早くも寺の門前に着いたぞ。私が呼びかけてみよう。和尚よ門を開けて下され。

和尚 開けはせぬ、開けはせぬ。

楊景 どうして開けて下さらないのか。

和尚 お布施があるなら門を開けるが、お布施がなければ開けはせぬ。

孟良（唱う）

【尙秀才】

“まことににぎやかな寺院で
僧侶や檀家も大したものだが
この世の四大の中で火が最も激しいと言うではないか
私は仏に帰依しており、欲深くもないので
あなたのために千本の蠟燭をお布施としよう”

楊景 和尚様、私はあなたのために千本の蠟燭をお布施とします。

和尚 しばし待たれよ。千本の蠟燭なら、一分銀で一對だから、かなりの額になるはずだ。

ちょっと門を開けて、あいつを入れてやろう。（門を開けるしぐさをする）

孟良（門に入って和尚を捕らえるしぐさをする）和尚よ、楊令公様の遺骨はどこだ。

和尚 私は知りません。

孟良 知らないはずがあるか。言うのか言わないのか。斧でお前のその首を斬ってやろうか。

和尚（瓢箪を見るしぐさをする）ああ、あなたは何かというと首を斬ろうとするのでしょ
うね、背中にどこかの和尚の首が掛けてあるのが見えますから。

孟良 早く言え。少しでもぐずぐずすれば斬るからな。

和尚 斬らないで下さい、話しますから。楊令公様の遺骨は昼間は塔の先に掛けられ、百人の兵にそれぞれ三本ずつ矢を射させます。夜になったら下ろして来て小さな箱に入れて、方丈の中に収め、賊が盗み去って牌やサイコロにして遊ばないようにしています。ほらあの方丈の机の上にある小さな箱が、楊令公様の遺骨でしょう。

楊景 偽物ではあるまいな。

和尚 あなたが偽物と言うならば、これは犬の骨ですか。この遺骨は全てそろっており、それぞれに遼の君主が朱筆で目印に付けた文字がありますので、一つも偽物ではありません。

楊景（泣くしぐさをする）父上、なんと悲しいことでしょう。

孟良 遺骨はあったが、全てそろっているかどうか、もう一度あいつに尋ねてみよう。和尚よ、この遺骨は全てそろっているのか。

和尚 始めに遺骨は全てそろっていると言いましたのに、一つずつ数えますから聞きなされ。（唱う）

【滾繡毬】

“あなたは どうして 怒鳴りつけるのか

楊令公様の 遺骨は 全て そろっている

私が 頭から 言うのを 聞きなされ

これぞ 頭蓋骨で 頭の 八かけら

これぞ 胸骨で 胃腸は なく

これぞ 肩胛骨で 皮膚も あり

これぞ 膝蓋骨で 足も 全て あり

これぞ 背骨で あばらと 繋がる

私のはっきり 全て 数え、あなた方が 一つ一つ 受け取れば

受領書を下さっても無駄ではない”

孟良 こやつめ、我が斧を食らえ。

和尚 ああ。(詩をうたう)

“あなたが先に門を叩いても開けず
蠟燭を下さると聞いて中に入れた
遺骨は全て差し上げたのに
首を斬るなんてあんまりだ” (退場)

孟良 兄者、この遺骨をしまってください。もう一度火を放ち、この寺を焼きましょう。兄者、さあ、さあ、さあ行きましょう。(唱う)

【尙秀才】

“ようやく天地の門をこじ開け
龍虎の住みかより飛び出した”

兄者お気を付けて。

楊景 弟よ、さっさと行けば良いのに、どうしてそのように言うのか。

孟良 (唱う)

“この孟火星が今度は火事を起こそう
素早く、馬を走らせ
道を急ぎなされ”

【滾繡毬】

“人の走るは室火猪のよう
馬の駆けるは尾火虎のよう
兄者、突然振り返り目をこらしてこっそり見れば
我ら二人はまさしく凌煙閣に描かれるべき人物
和尚が残るか鉢が残るか、あちらが苦しもうがこちらが苦しもうが構わない
ここで思い切ってやれば
さながら諸葛亮や周瑜のよう
まさにメラメラと博望坡で砦を焼くの計か、パカパカと赤壁で激戦するの計
私が腕前を振るったのも無駄ではなかった”

兄者、あなたはお父上の遺骨を持って先に三関へ行くことにして、私は後から行きます。

もしも追手が来た時は、私が食い止めましょう。

楊景（悲しむしぐさをする）弟よ、思えば我が父上は一世の猛将であったのに、この遺骨はなおもこのような苦しみを受けるとは、どうして悲しまずにいられようか。ああ父上。

孟良 兄者、さっさと行けば良いのに、どうしてそのように言うのですか。

楊景 弟よ、私のセリフを私に言い返しおって。

孟良（唱う）

【煞尾】

“あなたは一箱の遺骨をしっかりと背負い急いで帰られよ
千里の関や山を巡りながら声を上げて泣いてはならぬ”

楊景 ああ、後ろで関の声したが、恐らく追手の兵が来たのであろう。

孟良 兄者、お先に行かれよ。私があやつらを食い止めます。（唱う）

“突然城の辺りで関の声が起こり

早くも一陣の黒い土煙が巻き上がる

恐らく韓延壽めが急いで追って来たのであり

この嘉州の孟様を怒らせる

きつく歯を食いしばり、敵を防ぎ止める

たとえ周囲に兵が密かに待ち伏せようと

まずはあやつと九千回戦って勝負を決しよう

私の人を殺す心は激しく

きっと人は死に馬は倒れて皆血まみれ

もしもあやつらの一人でも逃げ帰らせたならば

ああ、なんと我が宣花の金の斧も埋もれてしまうことよ”（退場）

楊景 弟の孟良は追手の兵を防ぎ止めに行ってしまった。私は父上の遺骨を背負い、真っ直ぐ三関へ行こう。（詩をうたう）

“父上は国のために功を立てたが

夷の軍中で命を落とすことになるとは誰が知ろう

この度遺骨を取り戻したからには

急いで三関を離れて母上にお知らせしよう”（退場）

〔注〕

○好大火也…文字通りに取ると、ここは恐らく孟良が瓢箪から火を放っている場面と思わ

れるが、敵地を探りに行くのにこうした派手な行動を取るかは疑問が残る。「火」は「伙」に通じることから、或いは何か呼びかけの言葉か。

- 官法如爐…人の心が鉄のように固くても、熱い炉のような厳しい法には耐えられない。国家の法律は侵すことができないということ。「神奴兒」(元曲選本) 第三折【耍孩兒】「一任俺冤讎似海、怎當的官法如爐 (たとえ私の恨みが海のように深くとも、鉄を溶かす炉のような厳しい法にはかなわない)」。
- 祭風臺…『三國志演義』第四十九回において、諸葛亮が赤壁の戦いの前に東南の風が吹くように祈祷したところ。
- 六丁神…道教においては天帝に使役される神だが、雑劇などでは天蓬黒煞と同じく凶神のイメージを持つ。『董解元西廂記諸宮調』卷三【雪裏梅】「莫道是亂軍、便是六丁黒殺、待子甚麼 (反乱軍は言うまでもなく、六丁黒煞であろうとも、どうにもできない)」。
- 張良燒斷連雲棧…『漢書』卷四十「張良傳」などに見える、劉邦が漢中へ向かう際、張良が棧道を焼き払わせ、戻る意志がないように見せかけて項羽を油断させた話。
- 李老君推翻煉藥爐…李老君とは太上老君、老子のこと。『西遊記』での太上老君は、兜率宮において炉で仙丹を練る仕事を監理している。
- 四大…仏教で地・水・風・火の四元素をいう。『經律異相』卷四十六「雜鬼神・鬼神皆依所止爲名」に「有四大天神一者地、二者水、三者風、四者火 (四大天神の一が地、二が水、三が風、四が火である)」とある。
- 動不動…ややもすると。いつも。何かというと。「遇上皇」(元刊本) 第一折【賺煞】「動不動驚四鄰告社長 (何かというと四つ隣を驚かせ村長に告げようとする)」。
- 狗骨頭…罵り言葉。この野郎、ろくでなし。『金瓶梅詞話』第十六回、應伯爵の白に「賊狗骨頭兒、你過來實説 (この野郎、こっちへ来て本当のことを話せ)」とある。この場面では、犬の骨との言葉遊びで用いているのであろう。
- 郎主…少数民族などの王や君主に対する称号。「狼主」とも。「救孝子」(元曲選本) 第一折、王脩然の白に「自出身以來、跟隨郎主、累建奇功 (出仕して以来、君主に従い、何度も功を立てた)」とある。
- 腿脰…足。「西蜀夢」(元刊本) 第一折【天下樂】「墜的雙滴溜腿脰無氣力 (帯にぶら下げる紐のようにだらりと力の抜けた足)」。
- 天關地戸…天の入り口と大地の扉。すなわち天地を指す。「貨郎旦」(脈望館本) 第四折【貨郎兒】「恰便似火焰山天降到長安、燒地戸、燎天關 (まるで火焰山を天から長安へ降

- ろして来たかのように、地の扉を焼き、天の入り口を焦がす)、「鎖魔鏡」(古名家本) 第一折【混江龍】「撼一撼赤力力地戸天關動(一度揺すればガラガラと天地が動く)」。
- 龍潭虎窟…龍の住む深淵と虎の住む洞窟で、極めて危険な場所の例え。「西廂記」(弘治本) 卷二第二折【滾繡球】「大踏步直殺出虎窟龍潭(大股で龍虎の住みかへ乗り込む)」。「氣英布」(元刊本) 第一折【鵲踏枝】「誰交你自創入龍潭虎窟、飛不出地網天羅(誰が龍虎の住みかに突っ込み、天地に張り巡らせた網から飛び出ることもできなくさせたのか)」。
- 室火猪・尾火虎…共に二十八宿の一つ。
- 凌煙閣…唐の太宗が功臣を称えるために建てた楼閣。内部に二十四名の肖像を掲げた。
- 和尚在鉢盂在…和尚が残るか鉢が残るかかわからない、すなわちどちらが生き残ってどちらが死ぬかわからないという意味。また、和尚がいれば鉢がある、と二つのものが対になることを表す場合もある。「村樂堂」(内府本) 楔子【新水令】、「兒女團圓」(息機子本) 第二折【賀新郎】、「牆頭馬上」(古名家本) 第二折【二煞】にも見える。
- 博望燒屯…『三國志演義』第三十九回に見える、諸葛亮が夏侯惇の陣を焼き討ちして破った話。また無名氏による「諸葛亮博望燒屯」雑劇がある。
- 鏖兵赤壁…三国志物語におけるクライマックスの一つである赤壁の戦いのこと。「鏖兵」は激しく戦うという意味。
- 不枉了…むだではなかった。また、「三戰呂布」(脈望館本) 第一折、曹操の白に「不枉了好將軍也(さすがは一流の將軍)」とあるように、～に恥じない、さすがは、という意味もある。
- 足律律…風の吹く音を表す。「竇娥冤」(古名家本) 第四折【新水令】「足律律旋風中來(ひゅうひゅうとつむじ風の吹く中をやって来た)」。
- 十面軍兵暗埋伏…「十面埋伏」は一面に兵を伏せて敵軍を包圍殲滅する戦術。韓信が楚との決戦において十面埋伏の計を用いたとされる。「抱粧盒」(元曲選本) 第二折【黃鍾尾】「從今後跳出了九重圍子連環寨、脱離了十面埋伏大會垓(今から九重に取り囲んで連なる砦から跳び出て、一面に伏兵を置く戰場から抜け出る)」。
- 管教…きっと～させる。「伊尹耕莘」(内府本) 第三折、費昌の退場詩に「來朝兩陣相交處、管教賊子喪黃沙(翌日両軍が戦う時には、きっと賊どもを沙漠に葬ってくれよう)」とある。
- 血糊突…多くの血が流れること。血がべっとりとついている様。「血糊塗」「血湖洞」に

も作る。「三奪槊」(元刊本) 第一折【賺煞】「那鞭上常有半紙血糊塗的人腦漿(あの鞭にはいつも血や脳漿がべっとりとついている)」。

○屈沈…才能などが埋もれていること。「三戰呂布」(脈望館本) 第一折【點絳脣】「兀的不屈沈殺俺英雄漢(なんと我ら英雄も落ちぶれたものだ)」。

第四折

〔訳〕

住職(外が住職に扮して登場、詩をうたう)

“大海に魚を養って決して釣り上げず
深山に鹿を放って長生きするように願う
地面を掃くにも蟻の命を損なうことを恐れ
蛾が薄物を被せた灯に飛び込むことを惜しむ”

拙僧は五臺山にある興國寺の住職でございます。我が寺には五百人の僧がおり、その内の一人に楊という姓の和尚がいる。この者は武芸十八般の中で、やらないものはなく、会得していないものもなく、毎日裏山で虎を打って遊んでおる。今は何事もなく、日も暮れようとしているので、山門を閉めるとしよう。

楊景 私は楊景、幽州へやって来て、父上の遺骨を盗んだ。弟の孟良は後に留まって追手の兵を防ぎ止めに行った。私はただ一騎で、五臺山へやって来た。日は既に暮れ、進むことは難しいので、寺に一夜の宿を求めるしかない。山門の前に着いたので、馬を降りよう。山門を開けてと、そこの和尚よ、きれいな僧房があったら一部屋を片付けて私を一晚泊めてくれ。夜が明けたらすぐに出て行くから。

住職 お客人、この僧房はきれいでしょ。

楊景 この遺骨を置くとしよう。

住職 お客人はどちらから来られましたか。

楊景 私が来たところから来た。

住職 これからどちらへ行かれますか。

楊景 私が行くところへ行く。

住職 故郷はどちらで。

楊景 故郷はない。

住職 お名前は何と。

楊景 名前はない。

住職 この客人ときたら、どうしてそう頭が固いのだろう。私は構いませんが、私には一人の弟子がおり、もしその者が来たならば、あなたを放ってはおきませんぞ。

楊景 そやつが来ても私をどうにかできるものか。そなたはもう下がれ。父上、なんと悲しいことでしょう。

楊和尚（正末が楊和尚に扮して登場） わしは酔ってしまったわい。（唱う）

【雙調・新水令】

“帰って来たが酔いはまだ醒めず

この禿おやじに触れるとただではすまぬ”

（聞くしぐさをする） おや、誰かが泣いているようだ。（唱う）

“泣いているのは山中にいる老木の怪物や、淵の底にいる毒龍の精ではあるまいな

姿を現わし靈験を示そうとしているのか

徳のある鬼神が敬うだけだ”

楊景（泣くしぐさをする） 父上、なんと悲しいことでしょう。

楊和尚 なんとあそこで泣いているではないか。（唱う）

【駐馬聽】

“あんなところでむせび泣いて

この何事もなく窓辺にいた僧の心を乱す”

楊景 父上、とても悲しいです。

楊和尚（唱う）

“ますます寂しそうに泣いているが

まさか槍や矢を受けた敗残兵ではなかるうな

私は山門に近寄り壁にもたれて聞き

両肩をすくめて頬杖をつく

このように騒がしければ

どうして「緑陰地に満ち禅房静か」と言えよう”

（住職にまみえるしぐさをする）

住職 弟子よ、来たか。先程夕方に、客人があり、ただ一人でやって来て、我が寺に宿を求めた。私が尋ねても、本当のことを言おうとしない。その者は今この部屋の中にいるから、そなたが聞きに行ってくれ。

楊和尚 師父、あなたは方丈へ戻ってお休み下さい。私が尋ねに行きますから。

住職 これぞまさしく「門を閉じて窓の外に構わず、梅の花が咲き匂うのに任せる」というもの。(退場)

楊和尚 (まみえるしぐさをする) お客人こんばんは。

楊景 なんとという荒法師だ。

楊和尚 お客人、先程思い悩んでおられたのはあなたですか。

楊景 そうだ。

楊和尚 あなたはどうしてそのようにお悩みで。

楊景 和尚よ、私の心中に訳があるのだ。

楊和尚 私が試しにあなたの悩みを当ててみましょうか。

楊景 和尚よ私の悩みを当ててみよ。

楊和尚 (唱う)

【歩歩嬌】

“濡れ衣を着せられているとしても名前を名乗るべきだが
はるばる両親の病を見舞いに來たのでは”

楊景 違う。

楊和尚 (唱う)

“重い罪を犯したのでは”

楊景 私にどんな罪があるというのだ。

楊和尚 (唱う)

“荷物を担ぎ車を押していて賊兵に出くわしたのでは”

楊景 賊兵がいたところで、何ほどでもない。

楊和尚 (唱う)

“私が続けて二度三度と尋ねているのに
どうして一言も答えようとしないのか”

この客人ときたら、私が尋ねているのに、本当のことを話そうとしない。私のすごさを知らぬか。

楊景 お前がすごいとはどういうことだ。

楊和尚 (唱う)

【雁兒落】

“私が人を罵っても言い返そうとする者はいない”

楊景 人を殴れるか。

楊和尚（唱う）

“私が人を殴っても殴り返そうとする者はいない”

楊景 強盜ができるか。

楊和尚（唱う）

“私が強盜をしても罪にはならない”

楊景 人を殺せるか。

楊和尚（唱う）

“私が人を殺しても命を償わなくてもよい”

楊景 お前がそのように言っても、私は信じないぞ。

楊和尚 信じないならばにおいをかいでみろ。

【水仙子】（唱う）

“今まさに人肉を焼いているにおいが生臭く鼻につく”

楊景 ああ、なんて和尚だ、「飛んで灯に入る蛾を憐れめ」というではないか。

楊和尚（唱う）

“私はこれまで飛んで灯に入る蛾を憐れんだことはない”

（合掌するしぐさをする）阿弥陀仏。この世の万物には、死もなければ生もないのだ。（唱う）

“もし殺生をしなければどうして輪廻を証明できよう

これこそ我らが唱えて済度を行う経である”

楊景 思うにお前は幼い時に出家をした者ではあるまい。

楊和尚（唱う）

“客人に子細をはっきりと話してやろう

私は蕃兵を殺したことはあるが、これまで信士となるよう招きを受けたことはなく
中年になってから剃髪して僧となった”

楊景 これ和尚よ、私もお前を騙しはしまい。私は大宋国の者だ。

楊和尚 お客人、お前が大宋国の者なら、あの家の人々を知っているか。

楊景 誰の家だ。

楊和尚 その家には金刀を使う者がいた。（唱う）

【雁兒落】

“彼は楊令公と呼ばれて腕前も優れていた”

楊景（驚くしぐさをする）この者はどうして父上のことを知っているのだろうか。これ和尚よ、その楊令公には息子が何人いたか。

楊和尚（唱う）

“彼には七人の息子がおり全て豪胆”

楊景 彼らの母親は誰か。

楊和尚（唱う）

“彼らの母は佘太君であり、敕旨により清風無佞楼を賜わった”

楊景 彼ら兄弟達は全て健在か。

楊和尚（唱う）

【得勝令】

“ああ彼ら兄弟達の死んだ者は多く生きている者は少ない”

楊景 お前はもしやその家の者か。

楊和尚（唱う）

“私だけがこの五臺にて僧となった”

楊景 ああ、あなたはなんと楊五郎様でしたか。あなたの兄弟でまだ生きている者はいますか。

楊和尚（唱う）

“楊六使が三関におる”

楊景 あなたはその者をご存じですか。

楊和尚 その者は私の弟なのに、どうして知らないことがあろうか。（唱う）

“私と同じ両親から生まれた実の兄弟”

楊景 兄上、この度はどうして私が楊景だとわからなかったのですか。

楊和尚（気付くしぐさをする）（唱う）

“驚くまいことか

この再会はまことに僥倖”

弟よ、お前は瓦橋関を守っていると聞いたが、どうしてここへやって来たのだ。

楊景 兄上、私は幽州の昊天寺へ行って父上の遺骨を取って来たのです。

楊和尚（悲しむしぐさをする）（唱う）

“悲しいことよ

むざむざとこの靈魂が敵城にて陥れられたとは”

韓延壽（浄が韓延壽に扮して登場、詩をうたう）

“私は將軍としてよく敵と戦い

乾し飯を食わずに肉を食らう

お前は勇敢に官軍と戦う兵士と言うが

私が刀を恐れ矢を避ける韓延壽だとは知るまい”

私は韓延壽でございます。楊六めが無礼にも、令公の骨を盗み去ってしまったことは許せぬ。私は蕃兵を率いて徹夜で追った。なんと楊六めは骨を持って先に行き、孟良を残して後方で防ぎ止めさせた。私は今別の大軍に孟良と戦わせておき、自らは五千の精兵を選んで押し寄せて来た。楊六めが五臺山にやって来たのがはっきりと見えていたが、どうして姿が見えなくなったのだろうか。きっとこの寺に隠れているはず。皆の者この寺を包囲せよ。これ寺の和尚達よ、早く楊六めを差し出せ。差し出さなければ、寺中の和尚は一人たりとも生かしてはおかぬぞ。（鬨の声をあげて門を叩くしぐさをする）

楊景 兄上、蕃兵が来たのではありませんか。

楊和尚 弟よ慌てるな、私が出て行ってあやつと話をする。山門を開けるぞ。（まみえるしぐさをする）

韓延壽 これ和尚よ、この寺に楊六めがいるだろう。差し出すならばよいが、差し出さないというならば、お前達寺中の和尚の首を西瓜のように斬り落とし、一人も生かしてはおかぬ。

楊和尚 將軍、確かに楊六めはおり、私が先に捕らえて、寺の中で縛ってあります。我ら出家の者は慈悲を旨とし、方便を手段としております。このように多くの槍や刀で我らの師父を驚かささないで下さい。あなた方が武器を収め、馬から下りられたら、私が楊六郎をあなたに引き渡して恩賞に与りますので、なんと好都合ではありませんか。

韓延壽 お前の言う通りに刀と槍を収め、鎧を脱ぎ、馬から下りるとしよう。和尚よ、楊六めはどこにおる。早く差し出せ。

楊和尚 將軍は何をお急ぎですか。ひとまず私と一緒にこの山門をお入り下さい。この門を閉めましょう。

韓延壽 どうして門を閉めるのだ。

楊和尚 私は用心深いもので、楊六めを逃がすことを心配しているのです。

韓延壽 楊六めは逃げ出せないし、私も逃げ出せないな。閉めるがよい、閉めるがよい。

楊和尚（韓延壽を打つしぐさをする） こやつめどこにも逃げられないぞ。

韓延壽 ああ、この和尚は乱暴な。門を閉めてへぼ碁をいじめたらいいのに、どうして私を殴るのか。

楊和尚（唱う）

【川撥棹】

“こやつはまだわけがわかっておらず

私の怒りの炎はふつふつと燃えている

衆生を損ない

蠅を打ち殺す

誰が修行して仏祖になろうとするだろうか

さあさあさあ、私はお前を殴って勝敗をはっきりさせよう”

韓延壽 この和尚は手強い。山門も閉められてしまい、私はどこにも逃げられぬ。

楊和尚（唱う）

【七弟兄】

“こやつの帯を

がっしり掴む

まずはお前を転ばせて目から火花を出させてやり

私が出家の身でありながらこのように慈悲がないと責めるな

カッカと怒りつつ憎しみがはらわたから生じ

そら、お前に父上令公の命を償わせよう”

（殴るしぐさをする） こやつを殴り殺してこそ、ようやく私の恨みが晴れる。（唱う）

【梅花酒】

“ああ、殴られてこやつは地に倒れ

よくも天将を怒らせたものだ

神の如き兵を用いるまでもなく

お前の頭を砕いてやろう

殴られて恨めしい眼をしても

二つの拳は殴るのを止めず

びゅうびゅうと拳の雨を降らし

心が痛むほどひたすら殴る
これは私が修行をしていないからではなく
仇に会えば憎さ百倍というもの
お前らを殴り殺さなければ
この恨みはいつ晴れるというのか”

韓延壽 よくも殴ったな、よくも殴ったな。まずは名を名乗れ、このような無礼をしおつて。

楊和尚（唱う）

“ああ韓延壽よさっさと黙れ
まだ名前を尋ねるとは”

（韓延壽を捕らえるしぐさをする）（唱う）

【喜江南】

“ああ、私は人を殺す和尚にして寺を捨てた僧
鉄の金剛でも諫めることができないほど容赦ない
我が弟こそまさしく辺境を鎮守する六郎楊景”

韓延壽よ、（唱う）

“お前が武器を首に突きつけられるだけでなく
五千の兵の一人でも陣に帰れると思うな”

弟よ、蕃将の韓延壽を殴り殺したぞ。

楊景 兄上、韓延壽の首をさらし、心臓と胆をえぐり出して、父上の遺骨の前に供えましょう。この五臺山の寺の中で七昼夜の法要を行い、父上と弟を済度して早く天界へ昇らせるのです。

寇萊公（外が寇萊公に扮して突然登場）私は萊國公の寇準でございます。帝の命と八大王の令旨を奉じ、瓦橋関へと亡き護国大將軍の楊繼業と楊延嗣の遺骨を迎えに行き、戻ったら代々の墓に葬るのだ。孟良は蕃兵を退け、楊景がまだ五臺山の興國寺におり、七昼夜の法要を行って亡霊を済度すると知らせて来た。私は孟良を連れて徹夜でやって来たところ、早くも五臺山に着いたわい。（まみえるしぐさをする）これ楊景よ、私は帝の命を奉じ、こちらへやって来たが、そなたが取り戻した楊令公と七郎の遺骨はどこにあるのか。

楊景 閣下、父上と七郎の遺骨は全て揃っており、今こちらで追善供養をしております。

寇萊公 それならば、楊景は楊朗と共に皇居に向かってひざまずき、帝の命を聞くがよい。

(詞をうたう)

“大宋朝は帝業を受け継ぎ
良将を選び辺境を鎮守させた
楊令公の功労は最も大きく
父子は帝を守り忠勤に励んだ
潘仁美は奸計を弄する賊臣にして
忠臣を陥れて故郷に戻らせなかった
李陵碑にそなたの父は頭を打ちつけて死に
七郎も共に命を落とした
百箭会の時に靈魂が夢枕に立ち
遺骨を盗む際に多く孟良のおかげを蒙った
楊延景は忠孝を尽くし
命も顧みず戦場で激しく戦っている
敕使をはるばる送って迎えさせ
黄金を下賜して墓堂を築かせよう
更に廟を建てて千秋に渡って祭らせ
山河を守らせ万世に渡って盛えさせよう”

(大勢が恩徳に感謝するしぐさをする) (共に退場)

題目 瓦橋関にて令公が神を顕し

正名 昊天塔にて孟良が骨を盗む

[注]

○積水養魚～…和尚や行者の登場詩。「冤家債主」(脈望館本) 楔子、「度柳翠」(息機子本) 楔子、「東坡夢」(元曲選本) 第一折などにも見える。

○五臺山興國寺…『山西通志』卷一七一「寺觀四・代州・五臺縣」「太平興國寺在樓觀谷、宋沙門睿見棲此、持律精嚴。太平興國五年四月、遣使臣蔡廷玉、勅河東路建寺。七年八月、落成賜額、以睿見主之。即楊延朗之師也。中有五郎寺(太平興國寺は樓觀谷にあり、宋の僧侶の睿見がここに住み、厳しく戒律を守っていた。太平興國五年〔九八〇〕四月、

- 蔡廷玉を遣わし、河東路に寺を建てるとの勅令が下された。太平興国七年〔九八二〕八月、完成して額を賜り、睿見を住職とした。彼が楊延朗の師である。中に五郎寺がある)」。○灑家…山西人の特徴とされる一人称。「洒家」にも作る。「虎頭牌」(元曲選本) 第三折や「薦福碑」(古名家本) 第二折にも見える他、『水滸傳』では魯智深と楊志がこの一人称を用いる。
- 顯聖…神聖なものが姿を現わして力を示すこと。靈驗。「魔合羅」(元刊本) 第四折、正末の白に「既交人拔火添香、何似通靈顯聖(人に火を起こして焼香をさせておきながら、どうして靈驗を顕さないのか)」とある。
- 噎噎哽哽…「哽噎」「哽咽」「噎喉」と同じく、むせび泣くこと。「拜月亭」(元刊本) 第二折【烏夜啼】「一時哽噎、兩處淒涼(しばしむせび泣き、二人は憐れ)」、「范張雞黍」(元刊本) 第三折【逍遙樂】「猛聽得哭聲噎喉(たちまちにむせび泣く声が聞こえる)」。
- 無是無非…何事もなく。何の悶着もなく。「介子推」(元刊本) 第三折【普天樂】「兒呵子不如無是無非且做莊家(息子よ何事も無い百姓の方がましだ)」。
- 孤孤另另…一人ぼっちの様。「金線池」(古名家本) 第三折【上小樓】「閃的我孤孤另另(捨てられた私は一人ぼっち)」。
- 手抵着牙兒…「手抵牙兒」は頬杖をつくこと。「兩世姻縁」(古名家本) 第三折【調笑令】「手抵着牙兒是記咱(頬杖をつきながら思い出そうとする)」
- 綠陰滿地禪房靜…成語のようであるが基づくところは未詳。
- 閉門不管窗前月、一任梅花自主張…門を閉じて窓の外に構わず、梅の花が咲き匂うのに任せる。ここでは楊和尚の好きなようにさせるということであろう。「盆兒鬼」(元曲選本) 第一折にも見える。また「鴛鴦被」(元曲選本) 第二折では二句目を「分付梅花自主張」に作る。
- 問訊…僧が合掌して礼をすること。『水滸傳』(容與堂本) 第四回に「趙員外和魯達向前施禮、眞長老打了問訊(趙員外と魯達が進み出て挨拶をすると、智眞長老は合掌の礼をした)」とある。
- 阿弥陀仏…問投詞。
- 楊六使…「謝金吾」第二折において、楊景は「邊關裏外點檢使・界河兩岸巡綽使・關西五路廉訪使・淮浙兩場催運使・函汾二州防禦使・河北三十六處救應使」という六つの職を授かっていることから楊六使と呼ばれる、とある。

- 乾糧…水分を減らし、携帯に便利にした食料。「破天陣」(内府本) 第一折、蕭虎の白に「俺二人正在打圍場喫乾糧奶子、有元帥呼喚(我ら二人が狩獵地で乾し飯と乳を飲み食いしていたところ、元帥に呼ばれた)」とある。
- 沙塞子…砂漠地帯に生まれ育った兵士。「破天陣」(内府本) 第一折、韓延壽の退場詩に「衆兒郎人人敢勇、沙塞子個個猙獰(兵士は誰もが勇敢で、砂漠の異民族はそれぞれが猙獰)」とある。
- 殺屎棋…よくわからないが、「下屎棋(へぼ将棋を指す)」と「殺棋(殺す)」とをかけたものか。『鏡花縁』第三回到「殺屎棋以作樂(へぼ碁いじめて得意顔)」とある。
- 無明火…怒りのこと。「氣英布」(元刊本) 第一折【寄生草】「我心頭怎按無明火(我が心中の怒りをどうして抑えられようか)」。
- 不鄧鄧…感情を抑えきれない様。「不騰騰」「不登登」などにも作る。ここでは激しく怒る様。「單刀會」(元刊本) 第二折【叨叨令】「他惡暗暗揎起征袍袖、不鄧鄧惱犯難收救(あの者は荒々しく陣羽織の袖をまくり、カッカと怒ってどうしようもなくなる)」。
- 灌頂…密教で行う、頭頂に水や醍醐を灌ぎ、正統な継承者とするための儀式。「貶夜郎」(元刊本) 第二折【四煞】「那酒更壓着救旱恩澤、洗心甘露、止渴青梅、灌頂醍醐(あの酒は日照りを救う雨、心を洗う甘露、喉の渴きを止める青梅、頭に注ぐ醍醐にも勝る)」。
- 滿天星…目から火が出ることを例える。『水滸傳』(容與堂本) 第二十一回到「义開五指、去閻婆臉上只一掌、打個滿天星(五本の指を広げ、閻婆の顔を平手打ちし、目から火を出させた)」とある。
- 惡向膽邊生…憎しみがはらわたから生じるという定型表現。「氣英布」(元刊本) 第二折【牧羊關】「怒從心上起、惡向膽邊生(怒りが心からこみ上げ、憎しみがはらわたから生じる)」。
- 跌打…殴ること。「伍員吹簫」(元曲選本) 第三折、無路子の白に「跌打相爭可也不怕死(殴り合い争い合っても死を恐れぬ)」とある。
- 挺…倒れる。寝転ぶ。「燕青博魚」(内府本) 第二折【金盞兒】「拳着處撲的塵埃中挺(拳で殴ればほこりを立てて倒れる)」。
- 誰着你…誰がお前に～させたのか、ということから、どうして～したのか、よくも～したものだ、という意味に用いられる。「西廂記」(弘治本) 卷四第二折【金蕉葉】「誰着你拖逗的胡行亂走(よくもそそのかしてふらちなまねをさせたもの)」
- 磕擦…物を切ったり割ったりする音。「黒旋風」(元曲選本) 第四折、李逵の白に「早磕

擦的一板斧一個、劈下頭來（早くもグチャッと斧の一振り、首を斬られた）」とある。

○見讎人分外明…「分外」は過分、「明」は目がよく利くこと。仇同士はことのほか目がさとい。仇は見ればわかる。同種の表現として、「還牢末」（古名家本）第二折、「神奴兒」（元曲選本）第四折、『水滸傳』（容與堂本）第三回などに「讎人相見、分外眼明」とある。

○潑殘生…益体も無い命。「潑」はさげすむ気持ちを表す。「硃砂擔」（元曲選本）第一折【青歌兒】「只一拳險送了這潑殘生（たった一殴りで危うくこの命を落とすところであった）」。

○沙場…戦場のこと。『董解元西廂記諸宮調』卷二【文如錦】「俺咱情願、苦戰沙場（我らは願わくば、戦場で激しく戦いたい）」。

焦光賛活拿蕭天佑

第一折

〔訳〕

韓延壽（沖末が韓延壽に扮し蕃兵を連れて登場）

“勇敢な蕃将は虎や彪にも勝り
黄金の鎧と錦の皮衣をまとう
黒鷲を描いた旗を並べて陣を布き
各隊の行軍は水が流れるかのよう”

私は蕃将の韓延壽でございます。北方の辺境で生活し、長らく蕃国に住み、駱駝が群れを成し、牛や羊が野に広がる。我が配下の兵は百万、蕃将は千人おり、各々鎧をまとして対峙し、それぞれ兵を並べて陣を布く。今の大宋国には、名将が極めて多いが、特に六郎楊景は、勇猛で対抗し難く、英雄たる好漢で、瓦橋三関を鎮守しており、あやつの配下の軍も強く盛んである。我が方の、賀驢兒という者が、王欽若と名を変えて、中原に入り込んで密偵をしている。官を得て出世したならば、内外で呼応し、中原を征服するつもりだ。あの者が大宋にて、果たして出世をし、枢密の職に任じられるとは思わなかったが、中華の富貴に惑わされ、契丹の恩を忘れ去っていたならば、ただでは済まさぬぞ。私は今から密偵に書状を持たせて、都まで、王樞密に会いに行かせ、あやつの考えを窺おう。私がその後遣いの者に挑戦状を持って行かせて、名将を出陣させるように仕向ければ、きっと楊景は兵を率いて、私と戦うだろう。楊景を三関に誘い込み、百万の蕃兵で、戦場のただ中に包囲すれば、きっと楊景を捕らえることができ、そうすれば私の願いもかなうというもの。

“蕃兵は百万で勇士揃いにして
兵士は武勇を奮い策略を競う
この度の戦いで楊景を捕らえ
大宋の領土を一举に収めよう”（退場）

八大王（外が八大王に扮し兵士を連れて登場）

“両肩に日月を捧げ持ち
両腕で天地を調和する

世間を全て私が仕切るわけではなく

半分は帝の手柄で半分は臣下の手柄”

私は八大王でございます。今の大宋の領土は、帝が治め、文武の忠臣が、心から国に報いている。この度北方の辺境にいる韓延壽が、大宋国の名将を出陣させるように仕向ける、挑戦状をよこした。私は帝の命を奉じ、将兵を選抜することになり、今からこの役所内で、諸官の者達を呼んで相談しよう。これお前寇萊公を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。寇萊公様はどちらにおられる。

寇萊公（外が寇萊公に扮して登場）

“粗末な書齋で十年間の受験勉強に励んで
烏紗や象簡や紫羅袍を着るまでになった
身は栄達して官位に封じられ
心から国に報いて帝を支える”

私は姓を寇、名を準、字を平仲と申します。幼い頃より儒学を学び、詩書をよく読み、一度で状元にて科挙に及第し、長年朝廷にお仕えし、頗る政治の名声がある。帝はありがたくも、私を萊國公の職に封じられた。八大王様がお呼びであると知らせがあり、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、寇萊公がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、大王様にお知らせします、寇萊公様が来られました。

八大王 お通しせよ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

（まみえるしぐさをする）

寇萊公 大王様が私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

八大王 寇萊公よ、そなたに相談したいことがあるのだ。これお前王樞密を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。王樞密様はどちらにおられる。

王樞密（浄が王樞密に扮して登場）

“私はうまくやって樞密となり
六韜と三略の策に通じている
普段からへつらって狡猾な
我こそは良心に背く王欽若”

私は王欽若でございます。樞密の職に任じられておる。ここに誰もいないので言うのだ

が、私は元々北蕃の韓延壽配下の者であり、私が幼少の頃より書物をよく読み、口が達者なことから、都に入り込んで密偵をしている。出発する時に、私が官を得て出世したならば、内外で呼応し、きっと都を奪う、と誓いを立てた。因らずも楊六郎めは好漢で、英雄であり、兵も馬も強く、瓦橋三関を鎮守している。この度韓延壽様が、名将を出陣させるように仕向ける挑戦状をよこし、また密偵を遣わして私をとがめたが、いかんせん策の施しようがない。八大王の使者が呼びに来たので、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、王樞密がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、大王様にお知らせします、王樞密様が来られました。

八大王 お通しせよ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

王樞密 大王様が私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

八大王 王樞密よ、そなたに軍事について相談したいことがあるのだ。これお前太尉の黨彦進を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。黨彦進様はどちらにおられる。

黨彦進 (正末が黨彦進に扮して登場) 私は黨彦進でございます。太尉の職に任じられておる。練兵場にて、兵士の鍛錬をしていたところ、八大王様に呼ばれ、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。思えば我らが宋朝の聖祖は、錦のような山河を樹立し、並外れたお方であった。(唱う)

【仙呂・點絳脣】

“思えば我らが聖祖の即位は
軍を率いて力を尽くし
陳橋驛に到着すると
兵士が心変わりを起こし
その時一斉に仁徳に帰順したのである”

【混江龍】

“賢臣達は天地を安らかにするのを補佐し
堅い心で力を尽くし志は金石のよう
帝が仁愛あるお方であれば、我ら文武の官は忠実である
皆が上表をして出仕しへりくだって礼を行えば

帝はよく民を治めることができる

ただ今天下の民は歎んでいるが

八方が無事であり

更には万国が帰順することを願う”

早くも着いたわい。これお前、黨彦進がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、大王様にお知らせします、黨彦進様が来られました。

八大王 お通しせよ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

黨彦進 大王様がこの度私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

八大王 黨彦進よ、そなたを呼んだのは他にもない、この度北蕃の韓延壽が、宋朝の名将を出陣させるよう、挑戦状をよこして来た。今からそなた達諸将と相談し、軍勢を整え、賊軍を征伐しに、一つ行こうではないか。

黨彦進 大王様、「軍が来れば将が迎え、水が来れば土が止める」と申します。出兵して賊軍を征伐しましょう。

寇萊公 黨彦進の言う通りです。あの蕃族めは、まことに無礼である。

黨彦進 (唱う)

【油葫蘆】

“ただ今賊軍は辺境で対峙しており

我らは自ら敵と戦うべきである

あやつらは天を欺き策略を用いる”

八大王 あの蕃兵どもは意気盛んで、まことに勇猛である。

黨彦進 (唱う)

“ちっぽけな賊など何程のものか

我らのような帝に仕える英雄には及ばない”

八大王 北蕃の軍は意気盛んで、英雄でも対抗し難いのではないか。

黨彦進 (唱う)

“あやつらの将校が多く元帥が強くとも

我らの兵は勇敢で将は虎のようで智恵も優れ

賊軍が国境を侵す恐れなどない”

王樞密 大王様がおられるので、私は多言は致しません。しかし出兵することを論じて何になりましょうか。出兵すれば兵も将も損なわれますから、講和の方がよろしいでしょう。私はご忠告申し上げているのであり、私の言うことが間違っていたならば、私は頭がおかしくなっても構いません。

寇萊公 王樞密よ、それは違うぞ。賊軍は国境を侵しているのであるから、あやつらと戦い、我らは臣下として、力の限り忠義を尽くすべきであるのに、どうして何もせず放っていられようか。

黨彦進（唱う）

【天下樂】

“我らがどうして尻込みして災いを避けようとしようか
高禄を食んでいるからには
我らは力を尽くすべきである”

王樞密 私は忠告を申し上げただけであり、どうして悪心など持ちましょうか。

黨彦進（顔を背けるしぐさをする）（唱う）

“お前は良心に背き法を破るごろつきであろう”

王樞密 私は文武の才で、宋朝をお助けしており、私ほどの者はおるまいぞ。

黨彦進（唱う）

“お前の文は宋朝を支えられず
武は国家を安らかにできないのに
どうして天地を補佐する道理を知っていようか”

八大王 寇萊公よ、一体どの將軍を遣わして、韓延壽と戦わせるべきであろうか。

寇萊公 大王様、この度の戦いは、楊景をおいて、韓延壽に対抗できる者はおらず、必ずや勝利を収めることでしょう。

八大王 楊景はどこにいるのだ。

寇萊公 楊景は瓦橋三関を鎮守しております。

八大王 すぐに遣いを三関へ向かわせ、楊景を召し出し、賊軍を征伐させよ。

王樞密 大王様、それはいけません。韓延壽はまことに勇敢で、兵も将も多く、思うにあの楊景が、どうしてかないまいしょうか。兵や將を損ない、いたずらに北蕃の韓延壽の笑いものとなるだけです。そなた達よこしまな者は物事を駄目にしようとしており、どうして忠臣であろうか。

黨彦進 王樞密よ、お前の言うことは間違っているぞ。

王樞密 私がどうして間違ったことを言おうか。

黨彦進（唱う）

【那吒令】

“この黨彦進が国家を安らかにし
寇萊公が心から礼を尽くす”

王樞密 思うにあの楊景が、どうして韓延壽に勝てようか。

黨彦進（唱う）

“楊郡馬が見る間に妖気を清めてくれよう”

王樞密 私はそなたのような老いぼれを騙そうとして出鱈目を言うのではないが、私の忠心に、誰もかなう者はおるまい。

黨彦進（唱う）

“へつらう者とは王樞密のことと知らぬ者はなく
お前は善をねじ曲げて悪にしようとしている”

王樞密 ああ、私が善をねじ曲げて悪にしているならば、私の家では良い驢馬も良い馬も飼っていることになるぞ。

黨彦進（唱う）

【鵲踏枝】

“お前は元々誠実でなく
良心に背く賊である”

王樞密 私を裏切り者と罵るが、桂英が王魁に背かれたのも、私のせいだと言うのか。

黨彦進（唱う）

“お前はそのように天地を欺き、へつらってずる賢い”

八大王 私は今から帝に上奏し、寇萊公を瓦橋三関へ遣わし、楊景を朝廷へ呼び戻し、兵を率いて野蛮な賊を捕らえさせることとする。

寇萊公 私は馬を駆けさせ、自ら瓦橋三関へ、一つ行くとしよう。

黨彦進（唱う）

“そなたが今から三関へ行って詔を伝えれば
忠義を尽くして政治を整えるのも無駄にはならない”

王樞密 「忠言は耳に逆らう」というが、そなたがしくじっても、私がそなたを諫めなか

ったと言うでないぞ。

八大王 寇萊公よ、私は今から帝に上奏するので、そなたはすぐに三関へ向かい、楊景に賊軍を征伐させよ、遅れるでないぞ。

寇萊公 かしこまりました。

黨彦進（唱う）

【寄生草】

“そなたはこの度詔を伝えるのにぐずぐずしてはならず
まことに忠義の心を持って仁義を施し
更には堅い節操を持って私欲がない
まことに心から分を守って山河を支え
そなたは政治を整える朝廷の臣であり、危機を救い国家を安らかにする”

八大王 そなた達宰相は、今から私に従い、帝にまみえに一つ行くとしようぞ。

黨彦進 我ら諸将は大王様に従い、一つ行くとしましょう。

王樞密 大王様は楊景を召し出す必要などなく、いたずらに自ら兵や将を損なうよりも、和議を結ぶ方が良く、争いを引き起こさずに済むものを。

八大王 ちっ、王樞密は下がり、黙っておれ。

王樞密 誰も口を開いておりませんぞ。

寇萊公 大王様が帝に奏上なさり、私がすぐに瓦橋三関へ向かえば、楊景を召し出して配下の兵を率いさせ、賊軍を征伐させるのも、遅くはないでしょう。

黨彦進（唱う）

【尾聲】

“そなたはこの度自ら瓦橋関へ向かうが、決して遅れてはならず
昼夜を問わず山を越え川を渡るべし”

寇萊公 楊景配下の将兵は、至るところで勝利を収め、賊軍を一举に下すことでしょう。

黨彦進（唱う）

“あの楊郡馬は随一の英雄であり
まことに天下に及ぶ者はいない
この度は帝の福が天に斉しいおかげで
楊景の名声は天下に知れ渡ろう
馬が至るところ賊軍は息絶え

死んでも葬る地がない

鞭で鐙を叩いて早くも凱旋することであろう”（退場）

八大王 寇萊公よ、そなたは馬を駆けさせて、長旅をし、瓦橋三関へ行き、楊景を召し出し、印を授けて元帥とせよ。蕃兵を破ったならば、きっと官に封じ恩賞を贈ろう。

寇萊公 かしこまりました。ただ今大王様にお暇乞いをし、長旅に出発しましょう。私はこの門を出て、長居をせず、すぐに瓦橋三関へ向かい、楊景を召し出しに一つ行くでしょう。

“遠い山に脇目もふらず

はるばると寒風の中へ

夜を徹して旅路を進み

自ら瓦橋関へ向かおう”（退場）

八大王 寇萊公は行ってしまったわい。そなた達諸官は私に従い、帝にお話ししに一つ行くでしょう。

“蕃族が国境を侵し兵を率いており

兵や将を遣わして都を出発させる

元帥として印を授け蕃将を捕らえさせるのに

楊景以外に蕃族を破ることができる者はない”（共に退場）

〔注〕

○皂雕旗…黒鷲を描いた軍旗。「哭存孝」（内府本）第四折、李克用の登場詩に「縷金畫面鼓、雲月皂雕旗（金糸で飾った太鼓、雲と月と黒鷲を描いた旗）」とある。

○細作…間者、スパイ。『水滸傳』（容與堂本）第四十七回、宋江の白に「這是做細作的勾當、用你不着（これは忍びの仕事だから、お前では役に立たない）」とある。

○垓心…戦場の中心のこと。一説に項羽と劉邦の決戦の地である垓下に関係するという。曾瑞【哨遍】套「羊訴冤」【二】「圍我在垓心内、便休想一刀兩段、必然是萬副凌遲（戦場の中心に包囲されては、一刀両断どころか、一寸刻みに違いない）」。

○貔貅…貔、貅はそれぞれ伝説中の猛獣の名。かつて黄帝が六獣（熊・罴・貔・貅・貔・虎）を飼いならして戦争に用いたという。転じて勇猛な軍隊の例え。「氣英布」（元刊本）第三折【滾繡毬】「托頼着帝王親舊、統領着百萬貔貅（帝の古なじみであるのを頼みとし、百万の勇士を率いるまでになった）」。

- 一鼓…太鼓を一度打つ間ということから転じて、一挙に、一戦での意。「楚昭王」(元刊本) 第二折【聖藥王】「咱見陣休、一鼓收(見れば我が軍は破れ、一挙に鎮圧された)」。
- 兩朶肩花…「朶」は花を数える量詞であるが、「肩花」とあることから用いられているのであろう。ただし「肩花」は未詳。上着の肩の部分に花柄の刺繍が入っているというとか。全体としては両肩を指していると見ておく。なお「遇上皇」(于小穀本) 第三折、趙光普の登場詩に「兩朶肩花擎日月、一雙袍袖理乾坤。休言天下王都管、半由天子半由臣」とあり、こことほぼ同じものである。
- 世間誰是王都管、半由天子半由臣…前述の通り「遇上皇」(于小穀本) 第三折、趙光普の登場詩に「休言天下王都管、半由天子半由臣(天下は王が全てを仕切るなどと言うな、手柄は帝と臣下の半分ずつ)」とあり、また「半由天子半由臣」は「三奪槩」(元刊本) 第三折にも見える。
- 寒窗十載…科挙の受験勉強には十年かかるということから、その苦勞を形容するものとして元曲中にしばしば見られる表現。高安道【哨遍】套「皮匠説謊」【哨遍】に「十載寒窗誠意、書生皆想登科記(十年間粗末な書齋で受験勉強に打ち込んだ、書生は皆及第を願う)」とある。
- 烏紗象簡…「烏紗」は黒い薄絹で作った官帽。「象簡」は象牙の笏のこと。「擧案齊眉」(脈望館本) 第四折【慶宣和】「元來這象簡烏紗出聖朝、若是沒福的也難消(元々この笏と官帽は朝廷からのもので、福を失おうともなくすことはできない)」。
- 紫羅袍…紫の薄絹で作った上着。文官が着る。「陳搏高臥」(元刊本) 第二折【哭皇天】「穿着這紫羅袍似酒布袋、執着這白象笏似睡餛飩(紫の薄絹の上着を着れば酒の袋のよう、白い象牙の笏を持てばくたびれたワンタンのよう)」。
- 隨朝…朝廷に出仕すること。「趙氏孤兒」(元刊本) 第一折【梁州第七】「害百姓的隨朝請俸(民を害する者が朝廷に仕えて俸禄を受けている)」。
- 政聲…官吏の政治に対する名声。「謝天香」(古名家本) 第一折、錢大尹の白に「自中甲第以來、累蒙擢用、頗有政聲(科挙に及第して以来、度々抜擢を受け、頗る名声がある)」とある。
- 瞞心昧己…良心に背いて悪事を行うこと。「替殺妻」(元刊本) 第一折【勝葫蘆】「你待爲非作歹、瞞心昧己(お前は悪事を行い、良心に背く)」。
- 非同小可…人や物事が並外れていること。「霍光鬼諫」(元刊本) 第一折、霍光の白に「暗想高祖創立起惹大漢朝天下、也非同小可呵(密かに思うに高祖は漢朝の天下を創立し、

並外れていた)」とある。

- 陳橋驛…開封の東北の地。この部分はいわゆる陳橋の変について述べている。後周の世宗の死後、帝位に就いた柴宗訓(恭帝)が幼少であることに不安を抱いた軍人達により、顯徳七年(九六〇)、陳橋で趙匡胤が擁立された。趙匡胤は開封に戻ると恭帝より禅譲を受け、北宋の太祖となった。
- 稱尊道寡…帝王になること。「稱尊」は「稱君」「稱孤」となることもある。皇帝は「寡人」や「孤」と自称したことから。「三奪槩」(元刊本)第三折【新水令】「如今面南稱尊、便撇在三限里不攸問(今や南面して天子となり、私のことは片隅に放り出してお構いなし)」、「追韓信」(元刊本)第四折【収尾】「道寡稱君事不成(帝王となることはできず)」、「趙氏孤兒」(元刊本)第四折【粉蝶兒】「待交我父稱孤道寡(我が父を帝王と称す身にしよう)」など。
- 垂衣…帝が衣を垂れて手をこまねくこと。徳を以て民を治める、天下太平の意。「襄陽會」(内府本)【點絳脣】「端拱垂衣、則他那肱股能經濟(徳によって天下が治まるのは、股肱の臣下が有能なため)」。
- 來儀…本来は鳳凰などがやって来て威儀を正していることを言う。『三國志演義』第九十八回、張昭の白に「近聞武昌東山、鳳凰來儀、大江之中、黃龍屢現(近頃聞くところでは武昌の東の山に、鳳凰がやって来て、大江の中に、黃龍が現れたそう)」とある。
- 軍來將敵、水來土堰…軍がやって来れば将が迎え撃ち、水がやって来れば土がせき止める。「兵來將敵、水來土堰」(「澗池會」(内府本)楔子)や「兵來將擋、水來土掩」(『金瓶梅詞話』第四十八回)の形にも作る。
- 欺天罔上…天を欺くこと。『西遊記』第七回の詩に「欺天罔上思高位、凌聖偷丹亂大倫(天を欺き高官を狙い、天帝を侮り金丹を盗んで大倫を乱す)」とある。
- 鼠竊狗盜…鼠や犬のようにこそこそした盗人。「鼠竊狗偷」にも作る。『水滸傳』(容與堂本)第七十五回、童貫の白に「鼠竊狗盜之徒、何足慮哉(こそ泥など、恐るるに足りぬ)」とある。
- 攀鱗附翼…皇帝に従って武功を立てること。権勢のある者に付き従って出世するという意味もある。「攀龍附鳳」にも作る。『三國志演義』第七十三回、諸葛亮の白に「四海才德之士、捨死亡生而事其上者、皆欲攀龍附鳳、建立功名也(天下の才徳ある者達が、命懸けでその主に仕えるのは、全て帝に従い、功を立てようと願うからです)」とある。
- 喫蜜蜂兒屎…「合同文字」(息機子本)第三折、楊氏の白においても「我拏了他文書、我

喫蜜蜂兒的尿」と見える。時代は下るが『紅樓夢』第五十四回、尤氏の白に「聽見放炮仗、就像喫了蜜蜂兒尿的、今兒又輕狂了（爆竹を鳴らすと聞いたら、蜂蜜を食べたみたいに、はしゃぎだしちゃって）」とあり、「輕狂（落ち着きがない、不真面目、素頓狂など）」を導く歇後語的用法のようである。本劇でもその方向で訳しておく。

○坐觀成敗…他人の成功や失敗を傍觀する。日和見をする。「周公攝政」（元刊本）第四折【新水令】「當初被流言千里地定了江淮、更怕爲臣的坐觀成敗（以前に流言が江淮に広まったが、更に恐れるのは私を見殺しにすること）」。

○堂也波食…「也波」は意味のない襯字。「堂食」は「堂餐」「堂饌」とも言い、高官に提供される食事のこと。劉致【端正好】套「上高監司」其二【塞鴻秋】「喫筵席喚做賽堂食、受用盡人間福（やつらの宴席は賽堂食（堂食にも勝る）と呼ばれ、この世の幸福を享受し尽くす）」。

○陋面賊…ごろつき。無頼の徒。「竇娥冤」（古名家本）第三折【尾聲】「我做了箇銜冤負屈沒頭鬼、不走了你箇好色荒淫漏面賊（私が恨みを呑んだ首なしの幽鬼となっても、お前のような色好みの悪党を許しはしない）」。また「漏面賊」にも作る。「謝金吾」（元曲選本）第三折【調笑令】「是我罵你這改姓更名漏面賊（私はお前を姓を改め名を変えたごろつきと罵ろう）」。

○安邦定國…国を安定させること。「介子推」（元刊本）第三折、介子推の白に「孩兒、你說的言語、有擎王保駕之意、安邦定國之心（せがれよ、お前の言葉には、王をお守りし、国を安定させようという心がある）」とある。

○老子…老いぼれ。「范張雞黍」（元刊本）第一折【天下樂】「赤緊的翰林院老子每錢上緊（まことに翰林院の老いぼれ達は金に汚い）」。

○驢嘴…「驢」は「驢肚」「驢眼」などのように罵詞によく用いられるが、「驢嘴」はあるいは「驢唇馬嘴」に同じく、つじつまが合わない、出鱈目を言うの意か。

○桂英・王魁…元曲中にしばしば引かれる恋物語の登場人物。書生の王魁は妓女の殷桂英と恋仲になり、裏切らないとの誓いを海神廟で立てるが、状元になると崔氏と結婚する。裏切られた桂英は自殺し、霊となって王魁を呪い殺す。『録鬼簿』（曹棟亭本）「尚仲賢」の項に「海神廟王魁負桂英」と見える他、南戯にも「王魁負桂英」があった（共に佚）。

○燮理鹽梅…「燮理陰陽」と同じく、調和した政治を行うこと。「伊尹耕莘」（内府本）第二折、仲虺の登場詩に「調和鼎鼐遵仁德、燮理鹽梅式大綱（朝廷を調和するには仁徳に従い、政治を整えるには大綱にもとづく）」とある。

- 忠肝義膽…忠義一徹の心のこと。「射柳捶丸」(内府本) 楔子、范仲淹の登場詩に「忠肝義膽扶王業、立國安邦作柱石(忠義の心で帝の政治を助け、国家を支える柱石となる)」とある。また「義膽」で正義の心、義侠心をいう。「單鞭奪槊」(脈望館本) 第二折【滾繡毬】「據着他忠肝義膽眞良將、則爲俺定計鋪謀出介休(彼は義侠心あふれる良将なので、私のために計略を定めて介休城から出陣するだろう)」。
- 邦器…『周禮』「夏官司馬・小子」に「鬯邦器及軍器(邦器と軍器に血を塗る)」、鄭注に「邦器謂禮樂之器及祭器之屬(邦器とは礼樂の道具及び祭器の類である)」とある。ここでは国家の象徴として用いられているのであろう。
- 刀兵…武器、ひいては戦争のこと。「追韓信」(元刊本) 第四折【端正好】「再休誇桀紂起刀兵、謔說吳越相吞併(桀紂が戦争を起こしたと大げさに言わず、吳越が互いに奪い合ったと出鱈目を言う)」。
- 鞭敲金鐙…「西蜀夢」(元刊本) 第三折【三煞】に「竝無喜況敲金鐙、有甚心情和凱歌(金の鐙を叩く喜びもなく、凱歌を歌う気持ちもない)」、「博望燒屯」(元刊本) 第一折【金盞兒】に「穩情取鞭敲金鐙響、人和凱歌回(必ずや鞭で金の鐙を叩き、皆で凱歌を歌って戻りましょう)」とあるように、喜んで凱旋する様子。
- 長行…通常は長旅に出る、旅立つことであるが、武劇では長征の意で用いられることもある。「伊尹耕莘」(内府本) 第二折、陶去南の白に「着你起九夷之師、來合兵一處、與他拒敵、則今日便索長行(そなたは九夷の軍を動かし、兵を一つにまとめ、共に敵を防ぐよう、今から出陣せよ)」とあり、「澗池會」(内府本) 楔子、範當災の白に「則今日領兵便索長行也(今から兵を率いて出陣しよう)」とある。
- 取次…みだりに、気ままに、やすやすと。「後庭花」(古名家本) 第三折【風入松】「這劍冷颼颼取次不離匣(この寒々と冴える劍をみだりに抜きはしない)」。
- 迢迢…「迢」は遠いの意で、「迢迢」「迢遞」で道が遠いという形容。「霍光鬼諫」(元刊本) 第二折【粉蝶兒】「羸馬長鞭、路迢遞豈辭勞倦(瘦せ馬に鞭打ち、遠い道程も疲れをいとわぬ)」。
- 醜虜…みにくい蕃族。敵国の者を卑しんで言う。「射柳捶丸」(内府本) 第三折、李信の白に「俺這一場征伐醜虜(我らはこの度敵を討とう)」とある。

第二折

〔訳〕

楊景（外が楊景に扮し兵士を連れて登場）

“三関を勇敢に鎮守して志を顕らかにし
遼兵は白溝を越えようとはしない
父や兄が忠孝を行ったので
帝より清風無佞楼を賜った”

私は姓を楊、名を景、字を彦朗と申します。父は金刀教首の楊令公。平、定、光、輝、昭、朗、嗣という、我ら七人の兄弟を生んだ。父子八人、兄弟七人で、国のために忠義を尽くし、心から国に報いてきた。我が父は自ら韓延壽を征伐したが、蕃兵によって両狼山の虎口交牙峪に誘い込まれ、脱出することができずに、李陵碑に頭を打ちつけて亡くなられた。私は数万の勇敢な兵を率い、瓦橋三関を鎮守し、見るも無惨に蕃兵を殺している。我が配下には二十四人の指揮使がおり、辺境の関を武威によって鎮守している。聞くとところによると韓延壽が、大宋国の名将を出陣させるよう、挑戦状をよこしたとのこと。私は兵を率いて征伐したいが、帝の命を受けていないので、一存では動けない。私は排軍の岳勝を辺境の見回りに行かせたが、まだ戻って来ない。お前は門の前で見張りをし、軍事情況に何かあれば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

寇萊公（登場）私は寇萊公でございます。都を出発し、早くも瓦橋三関に着いたわい。これお前、寇萊公が、帝の命を奉じてやって来たこと知らせてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、寇萊公様が命を奉じて来られました。

楊景 これお前香の準備をせよ、私は閣下をお迎えしよう。

（まみえるしぐさをする）

楊景 閣下どうぞ、どうぞこちらへ。

寇萊公 楊景よ皇居に向かってひざまずき、帝の命を聞くがよい。

（楊景がひざまずくしぐさをする）

寇萊公 楊景よ、この度北方の辺境にいる韓延壽が、大宋国の名将を出陣させるよう、挑戦状をよこして来たが、官人達がそなたに兵を率いて征伐させるよう推挙したため、印を授けて元帥とする。蕃兵を破ったならば、きっと官に封じ恩賞を贈ろう。皇居に向かい帝の御恩に感謝せよ。

楊景 帝の御恩に感謝致します。そちらで羊を屠って宴席の用意をさせましょう。閣下、私の配下には数々の名将がおり、私と共に賊軍を征伐させようと思いますが、閣下のお考えはいかがでしょう。

寇萊公 よし、よし。將軍達に会わせてもらえるか。

楊景 かしこまりました。これお前李瑜を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。李將軍はどちらにおられる。

李瑜（外が李瑜に扮して登場）

“兵法を用いて気概も新たに
陣羽織は虎のような身を覆う
国を支える忠義の将にして
天下を安らかにする大將軍”

私は李瑜でございます。六郎楊景配下の將軍となっている。寇萊公閣下がやって来られたと、遣いの者が知らせて来た。この度は六郎兄者がお呼びであるので、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、李瑜がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、李瑜どのがやって来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

李瑜（まみえるしぐさをする）兄者、私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょうか。

楊景 ひとまずそこにおれ。これお前張蓋を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。張蓋どのはどちらにおられる。

張蓋（外が張蓋に扮して登場）

“長らく辺境の関を鎮守して力は雄々しく
各々勇気があり威風をほしいままにする
出陣して勇敢さを顕らかにし
対峙して戦って大功を立てる”

私は張蓋でございます。この瓦橋三関にて指揮使をしており、今は楊六郎兄者の配下で將軍となってお助けしている。練兵場にいたところ、六郎兄者がお呼びであると、遣いの者が知らせて来たので、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、張蓋がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。元帥にお知らせします、張蓋どのがやって来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

張蓋（まみえるしぐさをする）兄者が私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

楊景 ひとまずそこにおれ。これお前孟良を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。孟良どのはどちらにおられる。

孟良（外が孟良に扮して登場）

“大胆さではこの世に並ぶ者はおらず
旗を広げて出陣するのを引き受ける
手には月のような宣花斧を持ち
勇敢に蕃兵と戦うのはこの孟良”

私は孟良でございます。幼少の頃より武芸に習熟し、一振りの宣花斧を使い、万夫不当の勇がある。練兵場にて兵士を鍛えていたところ、六郎兄者がお呼びであり、命を奉じた使者がやって来られた、と遣いの者が知らせて来たので、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、孟良がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、孟良どのがやって来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

孟良（まみえるしぐさをする）兄者、私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょうか。

楊景 孟良よ、軍事のことでそなたを呼んだのだが、ひとまずそこにおれ。これお前焦贊を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。焦贊將軍はどちらにおられる。

焦贊（正末が焦贊に扮して登場）

私は魚眼司公の焦贊でございます。ちょうど辺境の見回りから戻ったところ、楊景兄者からお呼びがあり、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。思うに我ら兄弟が、ここで兵士の鍛錬をし、辺境の関を鎮守しているのは、並大抵のことではない。（唱う）

【正宮・端正好】

“毎日兵士を鍛え将校を指揮し
思えば我らは義兄弟の契りを結んだ英傑

我らはまことに対峙して戦うことに優れ
各々の武芸は生まれつき素晴らしい”

【滾繡毬】

“我らは今瓦橋の三関を鎮守し
功を立てて宋朝を支える
少しも背こうとする者はおらず
我らはまことに昼夜を問わず刀剣の腕を磨く
盛んに放つ気は雄々しく武芸に優れ
まさしく辺境を平定して至らぬところはなく
私のこの剛強さは何も相手にしない
私は殺人放火はお手の物にして、象や犀を引くほど力が強く
まことにまねることのできないほど勇敢である”

早くも着いたわい。これお前、焦贇がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、焦贇どのがやって来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

焦贇(まみえるしぐさをする) 兄者、私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょうか。

寇萊公 楊郡馬よ、見たところこの焦贇は優れた將軍であるようだな。

焦贇 兄者はどちらへ征伐に向かうのですか。私が一つ行きましょう。

楊景 焦贇よ、近う寄れ、今北蕃の韓延壽が、大軍を率いて、大宋国の名將を出陣させるように挑戦して来ている。この度寇萊公閣下は、帝の命を奉じ、我ら諸將に、韓延壽を征伐させようとしておられるので、お前達諸將を呼んで相談したいのだ。

焦贇 あやつら賊軍はまことに無礼である。(唱う)

【尙秀才】

“あやつらはずる賢くひたすら戦いを挑むが
我が武芸で賊兵を根絶やしにするのをご覧あれ
私は蕃族を決して許さぬほど勇気があり
私があやつらに相まみえたならば見逃しはせず
猛々しさを存分に披露してやろう”

楊景 弟達よ、我らが兵を率いてあやつらと戦うならば、お前達は行ってくれるか。

焦贊 兄者、何をおっしゃる。我ら諸将にかかれば、あの賊軍など何程のものでしょうか。

(唱う)

【呆骨朶】

“私のこの剛強にして争いを引き起こす心はひどく荒々しく

まことに戦うのが得意

あやつらを生け捕りにすれば、あやつらは若死にする運命

我が大桿刀で首をはね、更に夾鋼斧を体にくらわせ

益体もない奴らを見る間に殺し、あつという間に亡き者にしてやる”

孟良 兄者ご安心を、我ら兄弟が各々軍を率い、兄者に従って韓延壽を捕らえに行くのは、容易いことです。

楊景 明日全軍を動かし、共に蕃族を捕らえに行けば、何ら問題はない。

寇萊公 將軍達よ、あの北方の辺境にいる韓延壽は、勇猛な兵が百万、戦い慣れた将が千人おり、あの者はまことに勇敢であるぞ。

焦贊 閣下、我らが楊景兄者の智謀と、諸将の勇敢さにかかれば、賊軍など何程のものでしょうか。(唱う)

【脱布衫】

“我が軍の旗がひらめき軍馬がいななけば

韓延壽は肝を冷やし魂が消し飛ぶ

智謀を用いて天下を威圧し

英雄の力で邪悪な災いを滅ぼす”

【小梁州】

“私があつ蕃族の賊軍と相對すれば

たちまち荒野で命を失わせてやろう”

楊景 焦贊よ、蕃族どもが国境を侵したら、どうしてただで済ますことができよう。

焦贊 (唱う)

“怒りで我が心中は熱した油を注いだかのようで

あのずるい賊を憎む

私が虎狼のような腰を伸ばして一暴れするのをご覧あれ”

張蓋 我ら諸将が兄者に従い、賊将と戦えば、必ずや勝利を収めるでしょう。

焦贊 (唱う)

【幷篇】

“あやつらが無頼で卑しいことは言うまでもなく
我ら宋朝の将は老い兵は統制が効かぬと侮っている
この焦贄の力を誇るわけでもなく、蕃兵が弱いと言うわけでもないが
我らが軍を五隊に分けたならば、あやつらを一戦で亡き者にしてやろう”

楊景 焦贄よ、そなたはぐずぐずせずに、精兵に命じ、私に従って韓延壽を征伐しに、一つ行くことにして、力を尽くして功を立てよ。

焦贄 兄者ご安心下さい。(唱う)

【尾聲】

“この英雄たる焦贄は生まれつき強く、私が盜賊どもを見れば許しはしない
我が殺気は立ち昇って空を暗くし
曇り無き銅鑼が鳴り響いて打ち終わることがない
英雄の肝っ玉の太さをご覧あれ
私はあの醜い蕃族をひどく苦しめ
土下座して投降して来ても戦い続けるぞ” (退場)

寇萊公 楊將軍よ、私はこちらに長居はせず、戻って帝に報告することにしよう。

楊景 閣下には宴席においで下さいませ。

寇萊公 將軍よ、宴席は無用であるから、別れの杯をもらおう。これお前馬を引け、私は長居せずに、今から都へ戻り、八大王様と共に帝にまみえに、一つ行くとしよう。

“速やかに三関を出発して
駿馬を急がせ都を目指す
楊景は兵を率いて賊を捕らえ
私は命を果たして帰路に就く” (退場)

楊景 閣下は行ってしまわれたわい。李瑜よ、そなたは配下の兵を率い、左翼となって進軍するよう、心して行くのだ。

李瑜 承知しました。今から配下の兵に命じ、賊軍を捕らえに、一つ行くとしよう。

“速やかに命を下して砂塵の中を進み
兵馬に鶴翼の陣を布かせる
蕃將の韓延壽を捕らえ
ご安心を、賊軍を殺すまでは誓って戻りません” (退場)

楊景 張蓋よ、そなたは配下の兵を率い、右翼となって進軍するよう、心して行くのだ。

張蓋 承知しました。長居はせずに、配下の兵を率い、右翼となって進軍し、韓延壽と戦いに、一つ行くとしよう。

“前方に将校と勇敢な兵を布陣させ
劍、戟、槍、刀を幾重にも並べる
智勇によって兵法を存分に振るい
馬で賊軍を踏んで土のように平らにする”（退場）

楊景 孟良よ、そなたは配下の兵を率いて先鋒となり、蕃将を捕らえ、勝利を収めて戻るように、心して行くのだ。

孟良 承知しました。兄者の軍令を受け、兵を率い、先鋒となって、賊軍を捕らえに、一つ行くとしよう。

“お言葉を聞いて意気揚々となり
この孟良は今から力強さを顕らかにしよう
威張るでないぞ大将の韓延壽よ
お前には囲みを切り抜けた項羽の力はない”（退場）

楊景 諸将は行ってしまったわい。私は大軍を率い、今から陣営を出発し、韓延壽を捕らえに一つ行くとしよう。

“兵士を布陣させて戦場に連ね
蕃兵を一人残らず殺し尽くす
勇敢な将を率いて賊軍を捕らえ
心から国に報い辺境を鎮守する”（退場）

〔注〕

○顯志酬…「鎖魔鏡」（古名家本）第三折【古竹馬】に「顯志酬這場征鬪、殺妖魔千死千休（志を顕らかにしてこの度の戦いでは、妖魔を殺し尽くそう）」という表現が見られる。

○裝香…香炉に香を入れて焚くこと。「氣英布」（元刊本）第一折、英布の白に「小校裝香來（これお前香を焚け）」とあり、「薛仁貴」（元曲選本）第四折、薛仁貴の白に「快裝香來、等我親自接待去（すぐに香を焚き、私が自ら迎えに行こう）」とある。

○臥番羊…羊を屠る。「番」は「翻」に同じく、屠るの意。めでたい宴席の場面において、しばしば「嘗下酒（酒を仕込む）」と共に用いられる。「救孝子」（元曲選本）第四折、王

恹然の白に「嘗下酒、臥番羊、做一個人天慶賞的筵席（酒を用意し、羊を屠り、人と天が共に祝う宴をしよう）」とあり、「黒旋風」（元曲選本）第四折、宋江の白に「一面就忠義堂上、嘗下酒、臥番羊（忠義堂では、酒を用意し、羊を屠る）」とある。

○李瑜…「破天陣」（内府本）にも二十四指揮使の一人として登場するが、「黄眉翁」（内府本）において二十四人の指揮使の姓名が列挙される中にはその名が見えない。

○虎略龍韜…兵書、また兵を用いる策のこと。なお実際には『三略』は「上略」「中略」「下略」に分かれ、『六韜』に「龍韜」「虎韜」の巻がある。「飛刀對箭」（内府本）第一折【尾聲】「我胸中虎略龍韜、看殺氣陣雲高（我が胸中には兵法を秘め、見る間に殺気が起こり戦場の雲が立ち昇る）」。

○籠罩…覆うこと。「氣英布」（元刊本）第四折【水仙子】「道吉丁丁火槍和斧籠罩着身軀（カチッと槍と斧が打ち合っって体を覆うかのようです）」。

○心粗膽大…肝っ玉が太い、大胆なこと。「汗衫記」（元刊本）第二折【紫花兒序】「您暢好是心粗膽大（お前達はまことに大胆）」。

○魚眼司公…「魚眼」は恐らく焦贊の眼が丸いということであろう。「司公」は下級官吏の尊称。

○半星…「星」は秤の目盛りのこと。目盛りの半分ということで、わずかの意。「氣英布」（元曲選本）第二折【牧羊關】「分明見劉沛公濯雙足、觀當陽君沒半星（劉沛公が両足を洗うのをしかと見たが、全く明君には見えぬ）」。

○邊塵…辺境における戦事をいう。「哭存孝」（内府本）第二折【感皇恩】「到如今無了征戰、絕了土馬、罷了邊塵（今や戦いもなく、兵馬は絶え、辺境は平定された）」。

○不採…相手にしない、目もくれない。「不采」「不睬」にも作る。「金鳳釵」（于小穀本）第二折【石榴花】「勸着的不睬半分毫（諫めても全く取り合わない）」、『三國志演義』第四十九回「時雲長在側、孔明全然不採（この時雲長は傍に控えていたのに、孔明は見向きもしなかった）」。

○耽饒…許すこと。「五侯宴」（内府本）第三折、葛從周の白に「俺梁元帥怎比黃巢、斬大將豈肯耽饒（我らが梁元帥は黄巢の比ではなく、大将を斬って見逃そうとはしないであろう）」とある。

○大桿刀…なぎなたのような武器。あるいは「大滾刀」と同じものかともいう（高島俊男「水滸傳語彙辞典稿Dの部（上）」）。「滾刀」は「朴刀」に同じく、それならば長くて幅の広い刃に柄を付けた武器、その大型のものということになる。ただし「朴刀」に定ま

った規格はなく、柄が短い刀状のものもあれば、柄が長く長刀に近い形状のものもある。

『水滸傳』(容與堂本)第七十七回に「鄴美提着大桿刀、飛馬殺下山來、衝開條路(鄴美は大桿刀を手に、馬を飛ばして山を駆け下り、血路を開いた)」とある。

○夾鋼斧…刃先に鋼を用いた斧ということか。「黒旋風」(脈望館本)第一折【端正好】「將我這夾鋼斧綽清泉、觸石上拙拙的新磨淨(私の鋼の斧は清水につけ、砥石でシュッシュッと磨いたばかり)」。

○戰將…戦いに長けた將軍。『三國志演義』第四十一回、曹洪の白に「軍中戰將可留姓名(そこな大將よ名を名乗れ)」とある。

○登時間…たちまち。姚守中【粉蝶兒】套「牛訴冤」【耍孩兒】「登時間滿地血模糊、碎分張骨肉皮膚(たちまち一面血の海になり、骨・肉・皮を細かに分ける)」。

○似熱油澆…熱した油を注ぐということであるが、怒り、悲しみ、つらさ、驚きといった多様な感情と結び付く。「趙氏孤兒」(元刊本)第三折【收江南】に「雙眸中不敢把珠淚拋、背背地搵了、滿腹内有似熱油澆(両目から珠の涙を流さず、密かにぬぐうも、心中は熱した油を注いだかのよう)」、また「羅李郎」(古名家本)第二折【四塊玉】に「諛的我半晌家如同熱油澆(熱い油を注いだかのようにしばらく私を驚かす)」とある。

○虎狼腰…虎や狼のような腰。猛將の特徴とされる。「三奪槩」(元刊本)第二折【牧羊關】「展不開猿猱臂、稱不起虎狼腰(猿のような腕を伸ばすこともできず、虎や狼のような腰を動かすこともできない)」。

○無端疥犬…「無端」は無頼の意。「疥犬」は通常は「泥猪疥狗」の形で、卑賤で粗野なことを喩える。『祖堂集』卷十一「保福和尚」の条に「闍梨又與摩泥猪疥狗作甚摩(師父はこのように泥まみれの豚やかさぶただらけの犬のような境遇に身を置いて何をなさるのです)」とあるなど、仏典に幾つか用例が見え、また度脱劇である「任風子」(元曲選本)第二折【煞尾】にも「再誰想泥猪疥狗生涯苦(誰がこの卑しい暮らしの苦しみを思ってくれようか)」とある。

○將老兵驕…將は年老いて兵は統制が効かない。「單刀會」(元刊本)第一折【混江龍】「撫治的民安國泰、却又早將老兵驕(穏やかな政治の下で民も国も安らかながら、早くも將は老いて兵は統制が効かぬとは)」。

○哨…軍隊の編成単位。一隊。『西遊記』第四十九回に「妖邪出得門來、隨後有百十個小妖、一個個掄槍舞劍、擺開兩哨(門から現れた妖怪は、背後に百匹ほどの子分を従え、それぞれ槍や劍を振るい、二隊に分かれている)」とある。

- 秋水…劍の刃の光や、鏡を喩える。『三國志演義』第五回到「龍駒跳踏起天風、畫戟熒煌射秋水（龍の如き馬が跳ねれば天風が起こり、画戟がきらめいて光を放つ）」とある。ここでは銅鑼が輝いていることをいうのであろう。
- 腥羶…侵入して来た外敵、特に北方の遊牧民族を指す。本来は獣の臭いや肉の生臭さというが、生肉を食する者という意味を込めて蕃族を罵る言葉。「腥膻」にも作る。『大宋宣和遺事』貞集、徽宗上皇の白に「吾祖宗二百年基業、一旦罹外國之腥膻（我らが始祖よりの二百年の礎は、一日にして異国の蕃族の手に落ちてしまった）」とある。
- 驂騑…周の穆王が天下を周遊した時に乗った八頭の駿馬の一頭。転じて名馬のこと。「范張雞黍」（元刊本）第三折【集賢賓】「走乏我這坐下驂騑（歩き疲れた私は名馬に乗る）」。
- 神京…都、京城のこと。『大宋宣和遺事』貞集、宗澤の白に「神京者、太祖太宗一統之本根、願以二百基業爲念（神京は、太祖・太宗一統の根源であり、願わくは二百年の礎を思われますよう）」とあり、この「神京」は東京（汴京）を指している。
- 踐塵埃…砂塵を踏みしめて進むこと。「東窗事犯」（元刊本）第四折【後庭花】「馳驛馬踐塵埃、度過長江一派（馬を飛ばして砂塵を踏みしめ、長江の流れを越えて来た）」。
- 雁翅排…雁が翼を広げたような形に並ぶこと。「遇上皇」（于小穀本）第三折【迎仙客】に「狼虎股排着従人、雁翅般列着公吏（狼や虎のように従者を並べ、雁の翼のように役人を連ねる）」、また「單刀會」（脈望館本）第三折、關平の白に「一刀刀、兩刃劍、齊排雁翅（片刃の劍、諸刃の劍を、雁の翼のように整列させる）」とある。
- 氣昂昂…意気揚々たる様。「單刀會」（元刊本）第三折【快活三】「霸陵橋上氣昂昂、側坐在雕鞍上（霸陵橋にて意気揚々、ゆったりと鞍に座る）」。
- 垓前楚霸王…「楚霸王」とは項羽のこと。秦を滅ぼした後に「西楚霸王」を名乗り権勢を振るうが、劉邦との争いに敗れて垓下で包囲され、最後は烏江にて自らの首を刎ねた。「垓」は戯曲類においてはしばしば戦場、激戦の地の意で用いられ、やはり一説に垓下に関係するという。『董解元西廂記諸宮調』卷二【喬捉蛇】に「威風大、垓前馬上一箇將軍坐（威風堂々と、戦場で馬上にある一人の將軍）」とあり、またそれに続く【尾】に「勇如九里山混垓西楚王（武勇は九里山で混戦する西楚の霸王のよう）」とある。

第三折

〔訳〕

韓延壽（蕃兵を連れて登場）

私は大将の韓延壽でございます。大宋の名将を出陣させるよう、挑戦状を送ったところ、果たして楊景が兵を率いてやって来た。あやつなど何程のものか。これお前耶律灰を呼んで参れ。

蕃兵 かしこまりました。耶律灰どのはどちらにおられる。

耶律灰（浄が耶律灰に扮して登場）

“私は將軍で戦いには詳しいが
馬に乗るのが嫌いで駆け足する
一年四季を通じてしくじったことがなく
六月でも皮衣を脱いだことがない”

私は蕃将の耶律灰でございます。今は韓延壽配下の將軍となっておる。私が陣営の中で骨をかじっていると、元帥がお呼びであると、遣いの者が知らせて来たので、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、耶律灰がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、耶律灰どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

（まみえるしぐさをする）

耶律灰 元帥が私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょうか。

韓延壽 ひとまずそこにおれ。これお前、耶律馬を呼んで参れ。

蕃兵 かしこまりました。耶律馬どのはどちらにおられる。

耶律馬（浄が耶律馬に扮して登場）

“我こそは大将の耶律馬
殺しなんぞ遊びも同じ
大宋が私を捕らえようとしても
蹴るのでなければ殴ってやろう”

私は韓延壽配下の大将の耶律馬でございます。陣営の裏で足を蹴り上げていると、元帥がお呼びであると、遣いの者が知らせて来たので、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、耶律馬がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、耶律馬どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

耶律馬 長官が私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

韓延壽 そなたはひとまずそこにおれ。これお前蕭天佑を呼んで参れ。

蕃兵 かしこまりました。蕭天佑どのはどちらにおられる。

蕭天佑 (外が蕭天佑に扮して登場)

“猛将は雄々しく戦場に列を成し

手には雕弓、短箭、刀に槍

元帥は中軍より軍令を伝え

陣営の兵士はそれぞれ強い”

私は蕃国の大将の蕭天佑でございます。十八般の武芸で、やらないものはなく、会得していないものはない。暴れ馬に跨り、強弓を引く。私が山の麓で兵士を鍛え、狩りをしていると、元帥がお呼びであると、遣いの者が知らせて来たので、一つ行かなければ。

早くも着いたわい。これお前、蕭天佑がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、蕭天佑どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

蕭天佑 元帥が私をお呼びになられたのは、いかなるご命令でしょうか。

韓延壽 お前達諸将を呼んだのは他でもない、私は使いの者を出して、大宋の名将を出陣させるよう挑戦状を送った。この度楊六めが兵を率いてやって来て、我らと戦おうとしているが、あやつなど何程のものか。蕭天佑よ、お前に三万の兵を与えるので、お前は先鋒となり、耶律灰と耶律馬は左右両翼となり、それぞれ一万の兵を率いよ。この度の出陣は勝利を収めて戻るように、心して行け。楊六めを捕らえたならば、厚く恩賞を与え官に封じよう。お前達諸将はぐずぐずせず、今すぐ出陣せよ。

蕭天佑 承知しました。元帥の軍令を受け、三万の兵を率いて、楊六めと戦いに一つ行くとしよう。皆の者、我が軍令を聞け。三度太鼓を鳴らしたら、全軍で出陣し、命令に背く者は、全て斬首とする。

“諸々の兵士はそれぞれ強く

鋼の刺又、斧、鉞、刀、槍を使う

蕃兵の勇敢さは熊や虎のようで

三関の楊六郎を生け捕りにしよう”（退場）

韓延壽 耶律灰よ、すぐに兵を率いて出陣し、心して行くようにな。

耶律灰 承知しました。今から蕃兵を率い、楊六めを捕らえに一つ行くでしょう。

“立派な策略は必要なく

弓矢を並べるだけで十分

楊六めが迫って来たならば

私に従い出陣せよ”（退場）

韓延壽 耶律馬よ、長居はせずに、兵を率いて出陣せよ。楊六めを捕らえたならば、きつと厚く恩賞を与え官に封じよう。

耶律馬 承知しました。今から蕃兵を率い、楊六めを捕らえに一つ行くでしょう。

“私の用兵や布陣について論じるならば

あやつと面と向かって決着を付けよう

両軍の間に優劣があったならば

楊六めが私の代わりに命を失うだろう”（退場）

韓延壽 諸将は行ってしまったわい。我らが蕃兵の強大な勢いにかかれば、必ずや楊六めを捕らえることができ、そうなれば私の平生の願いもかなうというものだ。

“荒々しい数々の蕃将達は

それぞれが英雄の肝っ玉

楊六郎の運命もすぐに尽きようとしており

捕らえたならば決して逃がしはせぬ”（退場）

（正末が焦贊に扮し楊景・孟良と共に兵士を連れ馬に跨り登場）

楊景 皆の者、陣を布け。

焦贊 我らの全軍を見るに、まことに英雄揃いであるな。（唱う）

【越調・鬪鶴鶉】

“我が軍の将は勇敢で兵は強く

まことに山を越えて進み

各々剣を携え鞭を持ち、皆辺境を平定しようとしている

この軍旗ははためき

私はこの矛を再び構える
我が軍の将兵は勇ましく
武芸に優れ
キラキラと鎧が千層に連なり
ピカピカと輝きが冷たく萬頃に広がる”

楊景 ほれ沸々と殺気が立ち昇り、もうもうと戦場の雲が立ちこめ、我ら諸将はまことに英雄である。

焦贊（唱う）

【紫花兒序】

“もうもうと空一面を覆う殺気、びゅうびゅうと見渡す限り寒風が吹き
がやがやと将兵は荒々しい
我が力は奮い立ち、肝っ玉は太く
更に武芸に精通している
ほれ虎のように勇ましい兵士が前後に従い
私は韓延壽をなす術なく立ち尽くさせよう
我が軍の虎のような将は威風堂々とし
肝っ玉がますます大きくなる”

孟良 皆の者、陣を布け、あの遠くからやって来るのは蕃兵ではないか。

楊景 全軍しっかりと陣を布け。

（蕭天佑が耶律灰・耶律馬と共に兵士を連れ馬に跨り登場）

蕭天佑 皆の者、陣を布け、あれは宋の軍勢ではないか。

楊景 そこな賊め、どうして名乗らないのか。

蕭天佑 我こそは北蕃の大將の蕭天佑である。これら二人は耶律灰と耶律馬だ。お前達三人こそ何者だ。

楊景 我こそは大宋の名將の楊景である。これら二人の將軍は、孟良と焦贊である。

耶律灰 ああ、どうしてあやつら三人がやって来たのだ。私はびっくりしてしまった。

蕭天佑 この楊景め、お前など何程のものか。どうして我らと戦おうとするのか。

孟良 この野郎は何と無礼な。

焦贊 この蕃族はまことに無礼である。（唱う）

【金蕉葉】

“見ればあやつらは意気揚がり威風堂々とし
荒々しく気を發揮している
お前達がわめきつつ我らに向かって来られなくし
私が両軍の間で臨機応変に戦うのを見せてやろう”

耶律馬 お前は私と戦うつもりか。

楊景 全軍しっかりと陣を布け。

焦贇 これお前太鼓を打て。

蕭天佑 お前など何程のものか。(混戦のしぐさをする)

焦贇 (唱う)

【調笑令】

“陣太鼓は乱打されて音が絶えず
我が軍は馬を走らせ槍を振るって力強い
我が手から逃れることはできず
あっという間に魂は消し飛ぶ
あの蕃族が戦いを挑んだところで
命は風前の灯火のよう”

楊景 この野郎め我が槍を喰らえ。(槍で耶律灰を刺すしぐさをする)

耶律灰 やられた。(退場)

蕭天佑 楊景の槍で、耶律灰が刺し殺されてしまったが、一体どうしたものか。

耶律馬 見る間に私に向かって来るわい。

楊景 賊軍を逃がすな。

孟良 御意。全軍で取り囲め。

焦贇 (唱う)

【秃廝兒】

“威風堂々たる力を發揮し
刀を振るえば一片の氷のように敵を寒からしめる
あの逆賊のごろつきを見るに水上の浮き草のようで
蕭天佑の命運は傾き
命をなくすのだ”

(蕭天佑を生け捕るしぐさをする) これお前縛り付けておけ。

(縛るしぐさをする)

蕭天佑 どうしよう。

耶律馬 残りは私一人では、見る間に死ぬ運命だ。

焦贊 (唱う)

【聖薬王】

“こやつの兵法は拙く

力もない

こちらが刀を振るい刃を輝かせて照らせば

あやつは魂が消し飛び、生きる道はない

見ればあやつは武器も鎧も捨てて逃げるが命は保ち難く

羽もないのにどうして飛び去ることができようか”

耶律馬 残りは私だけだから、逃げた方が良いな。(退場するそぶりをする)

(李瑜・張蓋が兵士を連れ馬に跨り突然登場)

李瑜 全軍で取り囲み、あやつを逃がすな。

耶律馬 見る間にやられてしまった。

張蓋 こやつを捕らえたぞ。

楊景 皆の者、この蕃族を縛り付け、三関に着いたら朝廷への書状を書き、功を献上しよう。

李瑜 承知しました。こやつを縛り付けておきましょう。

孟良 この度賊軍を征伐しましたのは、全て兄者の武威と、諸将の力のおかげです。

楊景 弟達の働きのおかげである。すぐに銅鑼を鳴らし、兵を収めて戦いを止め、三関へ戻るとしよう。

焦贊 (唱う)

【尾聲】

“我ら英雄の武威によって悪い奴を除き

蕃族を滅ぼし太平にする

捕らえられた蕃族は罪の免れ難いことを、その時になって気付くのだ” (共に退場)

〔注〕

○我做將軍曉戰討～…「破天陣」(内府本) 第一折、蕭天佐の登場詩に「我做番將委實好、

不騎抹鄰則是跑。爲甚常川不害眼、夏天不曾脫皮襖（私は蕃將としてまことに素晴らしく、馬に乗らずに駆け足をする。どうしてずっとしくじったことがないかという、夏でも陣羽織を脱いだことがないから）」とある。

○不害眼…「害眼」は眼病を患うこと。「凍蘇秦」（元曲選本）第三折、張儀の白に「小後生家臘月裏吃了冷酒、開春來不害眼。（若者が師走に冷や酒を飲むと、春に眼を悪くしない）」とあり、「合同文字」（息機子本）第四折、楊氏の白に「並不曾見什麼文書。若見來我就害眼疼（証文など見たことがない。もし見たことがあったならば眼が痛くなっても構わない）」とある。ただしここでの含意は不明。仮に「眼」を要点、かなめの意と取り、「不害眼」で要点を損なわない、失敗しないという方向か。

○踢飛脚…武術の動作の一つ。両足を頭の高さまで蹴り上げる。「西遊記」第七十五回に「原來這大聖吃不多酒、接了他七八鍾吃了、在肚裡撒起酒風來。不住的支架子、跌四平、踢飛脚～（元々悟空は上戸ではないのを、七、八杯も飲んだので、大魔王の腹の中でひどく酔っぱらってしまった。しきりに武術の構えをしたり、あちこち転がったり、足を蹴り上げたり～）」とある。

○那顔…蒙古語 **noyan** の音写。漢訳は「官人」。官吏、王侯、長官を意味する。「那延」「諾延」「諾顔」にも作る。「岳飛精忠」（内府本）第一折、鐵罕の退場詩に「那顔癩着腿、小番耳又聾（長官は足が不自由で、小者は耳が聞こえない）」とある。

○雕弓短箭…「雕弓」は象眼を施した弓のこと。「哭存孝」（内府本）第一折、李克用の登場詩に「鳳翎箭手中施展、寶雕弓臂上斜彎（鳳の羽の矢を手にし、象眼を施した弓を腕で斜めに引く）」とある。「輕弓短箭」ならば輕装を意味する定型表現であるが、ここでは馬上で用いるのであるから、短い矢の方が扱いやすいのであろう。

○弩門…蒙古語 **numu(n)** の音写。漢訳は「弓」。「弩木」「奴木」にも作る。

○速門…蒙古語 **sumu(n)** の音写。漢訳は「箭」。「速木」にも作る。「哭存孝」（内府本）第一折、李存信の登場詩に「弩門並速門、弓箭怎的射（弓矢なんて、引けるわけない）」とある。

○雄赳赳…荒々しい様。「存孝打虎」（于小穀本）第三折【金蕉葉】「見一人雄糾糾被袍擐甲、嗔忿忿橫槍躍馬（一人で荒々しく上着を着て鎧をまとい、プンプンと槍を横にして構えて馬を走らせる）」。

○膽量…度胸、肝っ玉。『三國志演義』第六十回の張松を讚えた詩に「膽量魁西蜀、文章貫太虛（度胸は西蜀で一番、文章は大空を貫く）」とある。

- 逡巡…迅速、たちまちの意。『董解元西廂記諸宮調』卷五【御街行】の白に「當日一場好事、頃刻不成、後來萬里前程、逡巡有失（その日めでたいことは、あつという間に台無しとなり、後の洋々たる将来も、たちまち失われようとしていた）」とある。
- 爬山越嶺…山を越えること。『三國志演義』百十四回「嚇得鄧艾棄甲丟盔、撇了坐下馬雜在步之中、爬山越嶺而逃（鄧艾は驚いて鎧兜を捨て、馬を乗り捨てて歩兵の中に混じり、山を越えて逃げた）」。
- 明晃晃…きらきらと輝く様。「趙氏孤兒」（元刊本）第三折【新水令】「齊臻臻擺着士卒、明晃晃列着鎗刀（ずらりと兵士を並べ、きらきらと刀や槍を連ねる）」。
- 萬頃…地面や水面などの非常に広いこと。『大宋宣和遺事』亨集に「時過一大門樓、但冷光萬頃、清寒襲人（大きな門樓を過ぎると、冷たい光が一面に満ち、冴える寒気が人を襲った）」とある。
- 冷颼颼…寒気の形容。「單刀會」（元刊本）第四折【離亭宴帶歇指煞】「見昏慘慘晚霞收、冷颼颼江風起、急颼颼雲帆扯（見ればほの暗い夕焼けは消え、冷たい川の風が吹き始め、びゅうびゅうと白い帆をはらませる）」。
- 鬧垓垓…がやがやとにぎやかな様。「三奪槩」（元刊本）第三折【鴛鴦煞】「來日鬧垓垓列着軍卒陣、就着哭啼啼接送齊王殯（明日はにぎやかに兵を布陣させ、すぐにめそめそと齊王の棺を送り出すことになる）」。
- 抖擻…奮い立つこと。「紫雲亭」（元刊本）第三折【三煞】「再怎施展那個打鴛鴦抖擻的精神兒大（鴛鴦を打つほどの奮い立った力を發揮することもできない）」。
- 癡掙…呆気にとられるという意。「黑旋風」（脈望館本）第一折【滾繡毬】「諛他一箇癡掙、諛的他驚急力的膽戰心驚（あいつは呆気にとられ、慌てふためき震えておる）」。
- 叫吶吶…大声でわめき立てること。「村樂堂」（脈望館本）第二折【烏夜啼】「不似那昨來個爪驢爪賊爪馬、叫吶吶的眼睛荒（昨日とは打って変わった間抜けぶり、大声でわめきながら目はおどおど）」。
- 生情見景…「七里灘」（元刊本）第四折【掛玉鉤】に「不由我見景生情、睹物傷懷（図らずも私は景色を見れば情を生じて心を動かされ、物を見れば持ち主を思い出して心を痛める）」とあるように、目にする情景に心を動かされること、その場の気分という意。また転じて臨機応変に対処することを喩える。
- 征鼙…陣太鼓。「鼙」は騎兵が馬上で鳴らすつづみのこと。「三奪槩」（元刊本）第一折【幺篇】「赤力力征鼙振動上蒼（ドンドンと鳴り響く陣太鼓は天を震わす）」。

- 一片寒冰…「一片冰」は文字通りにはひとひらの氷のことであるが、唐の王昌齡「芙蓉樓送辛漸」に「洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺（洛陽にいる親友が私のことを尋ねたならば、一片の氷が玉の壺の中にあるような清らかな心でいると伝えてほしい）」とあるように、清らかな心の形容として用いられることもある。或いは唐の胡曾による『詠史詩』「滹沱河」に「須知後漢功臣力、不及滹沱一片冰（後漢の功臣の力は、滹沱河が一面凍り付いたのに及ばぬことを知るべし）」とあるのを踏まえるか。「七里灘」（元刊本）第三折【滾繡毬】にも「都説你須知後漢功臣力、不及滹沱一片冰」と引かれる。この故事は、後漢の光武帝・劉秀が王郎から逃れようと滹沱河に来ると、既に氷が溶けて渡れなくなっていたが、王霸が氷は硬く渡るに充分であると報告したところ、再び河に氷が張り、全軍が渡り終えるとたちまちに溶けたというもの。『蒙求』にも「王霸冰合」がある。いずれにせよここではどのような意味合いで用いられているかわかりにくい。凍り付いたように敵を立ちすくませる、心胆寒からしめるという方向か。
- 無徒…ごろつき。『董解元西廂記諸宮調』卷八【第七】「把恩不顧、信無徒漢子他方説（恩を顧みず、ごろつきの出鱈目を真に受けた）」。
- 水上萍…「小孫屠」第十出【梧葉兒】に「飄然去悄如水上萍（ふわふわとした水上の浮き草のよう）」とあるように、抛りところがなくはかないことを喩える。
- 倒戈卸甲…武器を捨てて鎧を脱ぐ。逃げたり降伏したりする様子。『三國志演義』第三十回に「遂開營門命二人入、二人倒戈卸甲、拜伏於地（陣の門を開けて二人（張郃と高覽）を入ると、二人は武器を捨て鎧を脱ぎ、地面に平伏した）」とある。
- 無那活的人…今にも死んでしまうという意。「救風塵」（古名家本）第二折、宋引章の白に「我寫一封書稍將去、着俺母親和趙家姐姐來救我。若來遲了、我無那活的人也（手紙を書いて言付け、母さんと趙の姐さんに助けに来てもらおう。もし来るのが遅れたら、生きてはいられまい）」とある。
- 恁時節…その時には。「魯齋郎」（古名家本）第一折【天下樂】「或是流二千、遮莫徒一年、恁時節則落的幾度喘（二千里の流罪となるか、一年の徒刑となるかわからぬが、そうなればひたすら喘ぐが関の山）」。

第四折

〔訳〕

岳勝（外が岳勝に扮し兵士を連れて登場）

“兵書を実地に学んで文武両道
三関を長らく鎮守して功を立てる
全ての蕃兵が聞いて恐れる我こそ
綽名は花面の岳排軍”

私は花面の岳勝でございます。今は楊景配下の将となり、長らく瓦橋三関を鎮守し、蕃兵を殺して国境を侵させないようにしている。許し難いことに韓延壽は無礼にも、大宋国の名将を出陣させるよう、挑戦状をよこして来た。帝の命を奉じ、我らが楊景兄者が、印を授かって元帥となり、数万の兵を率いて、蕃兵を征伐に行った。急ぎの知らせによると、諸将は勝利を収めて凱旋するという。これお前遠くをよく見張り、六郎兄者がやって来たら、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

（正末の焦贊が楊景・孟良・李瑜・張蓋と共に蕭天佑・耶律馬を引っ立てて登場）

楊景 我ら諸将はこの度勝利を収めて凱旋し、こやつら蕃族を三関へ引っ立てて来たぞ。

焦贊 全軍急げ。兄者、思うに我ら諸将のこの度の戦いぶりは、並外れておりました。（唱う）

【雙調・新水令】

“この度賊兵と戦い勝利して故郷へ戻り
にぎやかに凱歌を斉唱する
蕃兵は皆ひれ伏して、賊軍は尽く降伏した
隠れようもないほどあやつらを殺せば
あやつらは皆命を落とし魂を失う”

楊景 早くも着いたわい。これお前、私と將軍達が勝利を収めて凱旋したと知らせよ。

兵士 かしこまりました。はっ、將軍にお知らせします、元帥が諸将と共に勝利を収めて凱旋しました。

岳勝 ややや、元帥が戻られたか、お通しせよ。

兵士 かしこまりました。元帥お通り下さい。

（焦贊が諸将と共にまみえるしぐさをする）

岳勝 兄者、將軍達よ、道中ご苦勞でありました。

楊景 そなたも関の守備ご苦勞である。

岳勝 あ蕃族はまことに無礼であり、訳もなく兵を起こし、我が大宋の国境を侵し、我が国を侮辱するとは、その罪は許し難いものです。

焦贊 あんな生臭い蕃族など、何程のものであろう。(唱う)

【駐馬聽】

“我が軍の将兵は忠臣であり
武威を示して紀綱を立てる
見ればあのずる賢い蕃族は
あたかも湯を雪に注ぐように瞬く間に滅びた”

李瑜 我らは出陣して勝利を収めました、これは全て帝の天に斉しい大いなる福のおかげです。

焦贊 (唱う)

“我らが帝の寛大さが堯や湯にも勝るお陰で
あの妖気も一戦しただけで消し飛んだ
天下にあまねく名を称えられ
戦争が永久になくなり皆が楽しむことを願う”

岳勝 兄者、あの兄者に捕らえられた野蛮な賊はどこにいるのですか。

楊景 これお前あの二人の賊を引っ立てて参れ。

兵士 かしこまりました。(二人の蕃賊を引っ立てて登場)

(まみえてひざまずくしぐさをする)

楊景 この蕃族め、お前達はどうして叛逆心を起こし、宋朝に反乱を起こしたのだ。今私に捕らえられて、何か言うことはあるか。

蕭天佑 この度のことは韓延壽が策を用いて妄りに侵攻したのであり、私の罪ではない。

耶律馬 私にはそのつもりはないのに、全て韓延壽と蕭天佑が私を巻き添えにしたのだ。

どうにかしてこの度私を許してくれたならば、私はそなたに駱駝を贈って遊ばせてやるぞ。

焦贊 こやつら蕃族は帝の命に従わず、決して許すことはできぬ。

耶律馬 私を逃がしてくれたならば、狐の皮を贈ってそなたの肩に掛けてやるぞ。

焦贊 (唱う)

【川撥棹】

“お前達はこの度国境を侵し

賊軍を率いて戦いを起こした
矛や刀や槍や
勇敢な兵を並べた
醜い蕃族の気概は改め難く
発する妖気の何と強いことよ”

岳勝 お前達諸将にかかればこやつら蕃族など大したことはないな。

焦贛（唱う）

【七弟兄】

“我らの勢いに当たることができぬとは
あやつらには全く思いがけぬこと
パカパカと馬を走らせて戦場に突進し
優れた武威を頼みとして勇敢であるのは当たり前
蕃族めがどうしてこの心を欺くことができよう”

【梅花酒】

“私はこの両軍において
旗印をひるがえさせ
太鼓が天を震わせ
雄々しさを顕らかにする
まことに人は槍に当たり
たちまち馬は傷付く
あやつらがどうして力及ぼうか
宋朝はその強さを顕らかにし、北蕃は手痛い天罰を受けた”

【収江南】

“ああ、全て今上の帝が優れた者を重んじたことにより
この度害を除いて国家を平定し
民衆は「泰盡榮昌（落ち着いて尽く栄える）」と言い
皆で享受し
全ての国が永久に帰順することを願う”

楊景 これお前遠くをよく見張り、誰かがやって来るのが見えたならば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

寇萊公（登場） 私は寇萊公でございます。楊六郎は蕃兵を討ち、蕭天佑などの將軍達を捕らえ、勝利を収めて凱旋した。そこで私は帝の命を奉じ、瓦橋三関へ、官を封じ恩賞を贈りに一つ行くとしよう。早くも着いたわい。これお前、寇萊公が、官を封じ恩賞を贈りにやって来たと知らせよ。

兵士 かしこまりました。はっ、元帥にお知らせします、寇萊公様が官を封じ恩賞を贈りに来られました。

楊景 香を焚き、お通しして、我ら諸將は閣下をお迎えしよう。（まみえるしぐさをする）

寇萊公 楊景よ、お前達諸將は皇居に向かってひざまずき、帝の命を聞くがよい。

（大勢がひざまずくしぐさをする）

寇萊公

“韓延壽は不届きにも奸心を抱き
凶暴に中原を侵略した
楊六郎は勇敢さを發揮し
勇猛な兵を率いて真っ先に戦った
耶律灰は長槍で突き殺され
蕭天佑は我が軍の前に生け捕られている
耶律馬は刑を受け
縄目を受けているがその罪は計り知れない
二人の賊を三関において斬首し
各々あの世へ送ることにせよ
お前達諸將は功を立て力を尽くしたので
皆重職へと昇進させよう
配下の軍にも論功行賞を行い
金帛を贈りねぎらいの宴を開こう
この度は官を封じ恩賞を贈り
皇朝が千万年も続くよう願う”（共に退場）

題目 楊六郎、槍もて耶律灰を刺し

正名 焦光贊、蕭天佑を活け取る

〔注〕

- 生性…命のこと。「氣英布」(元刊本) 第二折【哭皇天】「你殺了他生性、你失了他信行(お前は命を奪い、信用を失わせた)」。
- 欺凌…侮辱すること。「趙氏孤兒」(元刊本) 第一折【混江龍】「縱得交欺凌天子、恐嚇諸侯(ほしいままに帝を侮辱し、諸侯を脅かす)」。
- 上國…中国の自称。『大宋宣和遺事』貞集、趙妃の白に「汝本北方小胡奴、侵上國、南滅炎宋、北威契(お前は元々北方の野蛮人でありながら、上国を侵し、南は宋を滅ぼし、北は契丹を倒した)」とある。
- 耀武揚威…武威を誇示すること。「謝金吾」(元曲選本) 第三折【寨兒令】「他也曾斬將擐旗、耀武揚威(彼もかつては敵將を斬り旗を奪い取り、武威を示した)」、『三國志演義』第一百五回「姜維在南鄭城上、見魏延馬岱耀武揚威、蜂擁而來(姜維は南鄭城の上で、魏延と馬岱が武威を誇示しながら、押し寄せて来るのを見た)」など。
- 恰便似湯澆瑞雪…熱湯を雪に注いで溶かすように、物事が極めて容易にできることの比喩。「如湯澆雪」「如湯潑雪」「如湯灌雪」ともいう。『五燈會元』卷二十「侍郎張九成居士」に「我今爲汝掃狐疑、如湯沃雪火銷冰(私が今そなたの疑念を払ってやるのは、湯を雪に注ぎ火で氷を溶かすようなもの)」とある。
- 魂飄蕩…「遇上皇」(元刊本) 第一折【柳葉兒】「幽幽地諛的、諛的魂飄蕩、何處呈詞狀(ゆらゆらと、驚いて魂もさすらうが、どこへ訴状を出すべきか)」、「范張雞黍」(元刊本) 第四折【石榴花】「聽得道接皇宣、諛得我魂飄蕩(詔であると言うの聞き、驚いて我が魂はさすらう)」などのように、驚いて気が遠くなる様をいう用例が多いが、ここでは妖気を擬人化してその魂がさすらう、すなわち妖気が消えるという方向か。
- 兵戈…武器、また転じて戦乱のこと。「周公攝政」(元刊本) 第三折【紫花兒序】「偃兵戈四海無敵(武器を横たえ構えれば天下無双)」。
- 侵擾…侵略して騷擾を引き起こすこと。「哭存孝」(内府本) 第二折、李存孝の白に「鎮朱全忠、不敢侵擾其境(朱全忠を鎮圧し、国境を侵犯させない)」とある。
- 帶累…巻き添えにすること。「魔合羅」(元刊本) 第四折【鮑老兒】「須是你藥殺他男兒帶累他妻(お前が彼を毒殺してその妻を巻き添えにしたのに相違無い)」。
- 不提防…突然、思いがけず。「不提防」「不提防」にも作る。「介子推」(元刊本) 第二折【感皇恩】「呀諛的我魂魄悠悠、不提防有人隨後(ああ驚いて魂も飛び去る、何と跡を付けて来た者がいたとは)」。

- 撲刺刺…馬が勢い良く駆ける様。「不刺刺」にも作る。「謝金吾」(元曲選本) 第二折、楊六郎の白に「廡琅琅弓上箭、撲刺刺馬攢蹄 (びゅんびゅんと弓から矢を放ち、パカパカと馬のひづめを響かせ)」とある。
- 實丕丕…本当に。「氣英布」(元刊本) 第二折【梁州】「不由我實丕丕興劉滅楚、却這般笑吟吟背暗投明 (やむを得ず本当に劉邦を助け楚を滅ぼそうと、このように喜び勇んで暗君を捨て明君へと身を投じた)」。
- 兇頑…凶暴、凶悪な様。「凶頑」にも作る。「救風塵」(古名家本) 第四折【得勝令】「淫亂心情歹、兇頑膽氣粗、無徒 (淫乱で腹黒く、凶悪で大胆な、不逞無頼の者)」、「三奪槩」(元刊本) 第四折【鮑老兒】「那凶頑狼劣、奸滑狡幸、則待篡位奪權 (あの凶暴な悪辣さ、よこしまな賢さで、帝位を奪おうとする)」。
- 身遭刑憲…刑を受けること。「蝴蝶夢」(古名家本) 第三折【上小樓】「不爭教大哥哥二哥哥身遭刑憲、教人道桑新婦不分良善 (長男と二男に刑を受けさせたならば、あのあばずれには善良さがないと言われるだろう)」。
- 犒勞…労をねぎらうこと。「哭存孝」(内府本) 第一折、李克用の白に「聖人的命、犒勞某手下義兒家將 (帝の命では、我が配下の「義兒家將」達をねぎらわれておられる)」とある。

謝金吾詐拆清風府

楔子

〔訳〕

(沖末が殿頭官に扮し武官を連れて登場)

殿頭官 (詩をうたう)

“主君の起きるのが早けりゃ、臣下の起きるのも早い
朝廷の門に来たが天はまだ明けておらぬ
長安ではどれだけの富豪の家が
明星を知ることなく一生を終えることができるのか”

私は殿頭官でございます。この度王樞密が帝に上奏するに、大通りが狭く、車駕の往来が不便であるとのことなので、帝の命を奉じ、王樞密に目印の竿を立てさせ、楊家の清風無佞楼の手前まで壊したら止めることにし、拒否する者がいたならば、法律により罪に問う。これお前、一通り取り壊したら、知らせに来て、帝に申し上げるようにと、王樞密に伝えよ。

武官 かしこまりました。

殿頭官 (詩をうたう)

“命を奉じ宣旨を伝えに玉の階を下り
東庁樞密使よしっかりと承知せよ
大通りを広げるにはまず目印の竿を立て
事が終われば戻って帝に申し上げよ” (退場)

王樞密 (浄が王樞密に扮し胥吏を連れて登場) 私は姓を王、名を欽若、字を昭吉という。この度大宋の眞宗皇帝が即位し、景德元年と改元なされ、私は今は東庁樞密使となっている。ここには誰もおらぬ。私は元々蕃国の蕭太后の腹心であり、元の名を賀驢兒という。私は様々な言葉に通じ、多くの書に明るいことから、南朝へやって来て密偵をしている。出発の時に蕭太后様は私が南朝の富貴に心引かれ、北蕃の恩を忘れてしまうことを恐れて、私の左足の裏に丹砂で「賀驢兒」の三つの大文字を刺青なされ、下にはまた、「寧ろ南朝に反すも、北蕃に背かず」という二行の小文字がある。私が中原に入った時は、ちょうど眞宗皇帝が東宮で、文学の士を選んでいたので、私はそれにより

任用されることができたのだ。今や帝は即位し、私を寵用して、枢密の職に昇進させ、文武の重要な任を司り、どんな言葉や計画でも聞き入れられており、なんと権勢があることか。しかしただ一つだけ意にかなわぬことがある。今、楊令公の子で、姓を楊、名を景、字を彦明という一人の名将がおり、しかもその配下には二十四人の指揮使がおり、それぞれ勇猛で、優れた才を持ち、天下の軍人や民は皆彼のことを楊六郎と呼んでいる。彼ら父子がそれぞれ忠義を尽くして国に報いたことにより、先帝は彼ら一家のために門楼を造り、清風無佞楼と名付けた。今でも楼には三代の帝が自ら書いた敕書があり、朝廷の官僚は位に関わらず、通る者は誰もが馬を下りなければならないし、帝は春と秋に香を下賜している。楊六郎の母親は佘太君に封じられており、先帝の誓書鉄券を持ち、国と喜びを同じくし、彼らに九回の死罪を免れさせている。その楊景が瓦橋三関を鎮守しているので、北蕃はわずかな土地すら奪えずにいる。最近蕭太后様は使いの者をよこし、私が以前の言葉を忘れていと書状で私の罪を示されたが、私は今は施すべき計略がない。思うに蕭太后様が何年も勝利を得ることができずにいるのは、楊景を恐れて、出兵しようとなされないことによる。もし楊景一人を殺すことができれば、二十四人の指揮使がいたところで、いわゆる「蛇は頭がなければ進まぬ」で、彼らを恐れることはない。その時には我が蕭太后様が河北の地を全て奪うことなど、手のひらを返すように容易く、どうして私の平生の願いにかなわないことがあろうか。先頃帝は、大通りが狭く、車駕の往来に不便であると言った。私はこの機会に乗り、楊景を謀殺しよう。これお前、婿の謝金吾を呼んで参れ。

胥吏　かしこまりました。謝金吾様はどちらですか。

謝金吾（丑が謝金吾に扮して登場）

“私は衙内なれどもしっかり者
白銀には黒い目を向けている
町中の人民は我が名を聞けば恐れる
我こそは権勢を笠に着る謝金吾なり”

私は謝金吾でございます。衙内の官を授けられておる。私が誰の権勢を笠に着ているとお思いか。私の舅こそ王樞密であり、誰も私を侮ろうとはしない。私が入り込んでおられる必要はない。今お舅様が呼んでおられるので、一つ行かなければ。早くも門前に着いたわい。これお前、謝金吾がやって来たとお知らせしてくれ。

胥吏 閣下にお知らせします、謝金吾様が来られました。

王樞密 通してやれ。

胥吏 お通り下さい。

謝金吾 (まみえるしぐさをする) 父上が私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょう。

王樞密 お前を呼んだのは他でもない、先頃帝は、都の大通りが狭く、車駕の往来に不便であると言われた。私は今朝上奏し、この京城の内外で、一丈二尺の目印の竿を立てて、目印の竿に触れるものは、軍人の建物も庶民の家も問わず、全て取り壊し、楊家の清風無佞楼の手前まで壊したら止めにする事になった。お前は知るまいが、あの楊家は私の仇だ。私は今この「到」の字に人偏を加え、「倒」の字にして、「清風無佞楼を取り壊したら止めにする」とした。お前を大通りの幅と高さの測量に遣わし、一律に取り壊すことにする。金吾よ、くれぐれも心して、清風無佞楼を取り壊してから止めにしななければならないぞ。一刻も早く私に報告するように。

謝金吾 私が行きますれば、銅の垣根や鉄の壁であろうとも、取り壊せないことはありません。

王樞密 (唱う)

【仙呂・賞花時】

“私がなぜ清風無佞楼を取り壊そうとするのか

ただ私と楊家の気が合わないから”

思うに楊景めはあやつの家門楼が取り壊されたと知れば、必ず急いで家へ戻って来て、そのことについて私を問い詰める上奏をするであろう。その時には、私は予め人を遣わしてあやつを捕らえ、天子に上奏して、管轄の地をみだりに離れ、勝手に三関を離れた罪に問うことにしよう。(唱う)

“だまして雄州を離れさせれば

あやつを斬首にすることができる”

このことは私とお前しか知らぬから、決して漏らしてはならぬぞ。

謝金吾 私は承知しておりますから、仰るまでもございませぬ。

王樞密 (唱う)

“これこそ「六つの耳が揃えば計略は巧く行かぬ (二人だけの計略)」というもの”(共に退場)

〔注〕

- 金吾…宮中警護の武官。
- 校尉…六品以下の武散官。
- 昭吉…『宋史』卷二八三の伝によれば、王欽若の本来の字は「定國」である。
- 景德…一〇〇四～一〇〇七年。
- 言聽計從…どのような意見を言っても採用されること。「漢宮秋」（古名家本）楔子、毛延壽の白に「哄的皇帝老頭兒十分歡喜、言聽計從（帝を騙して十分に喜ばせ、何を言っても聞き入れられる）」とある。
- 誓書鐵券…帝が功臣に与えた文書。鉄の札に朱や金の字で履歴や特権などが書かれている。『水滸傳』（容與堂本）第九回において、周世宗の子孫とされる柴進について、「有徳太祖武徳皇帝勅賜與他誓書鐵券在家中（徳のある太祖武徳皇帝から鉄札の誓文を家に下賜された）」との説明がある。
- 與國同休…国と喜びを共にする。「連環計」（元曲選本）第四折、楊彪の白に「是用報卿左丞相、與國同休永無替（そなたを左丞相に任じて報い、永遠に国と喜びを共にしよう）」とある。「休」は喜びの意。『三國志』卷四十一「費詩傳」「且王與君侯、譬猶一體、同休等戚、禍福共之（しかも王と君侯とは、一つの体のようなもので、喜びも悲しみも共にし、災いも幸いも共にします）」。
- 蛇無頭而不行…物事を行うには指導者がいなければだめだということ。『水滸傳』（容與堂本）第三十五回、燕順の白に「自古道、蛇無頭而不行。若無仁兄去時、他那里如何肯收留我們（昔から、蛇は頭がなければ進まぬという。もし兄貴が行かなければ、あちらがどうして我々を受け入れるものか）」とある。また、『金史』卷一一四「合周傳」では「雀無翅兒不飛、蛇無頭兒不行（雀は羽がなければ飛べぬ、蛇は頭がなければ進まぬ）」という形で見える。
- 易如反掌…手のひらを返すように、物事が容易にできることをいう。「襄陽會」（内府本）第三折や「五侯宴」（内府本）第三折のように「易如翻掌」の形もある。
- 衙内…元来は唐末から宋初にかけての藩鎮の親衛。多く自らの子弟を任じたことから、転じて高官の子弟そのものを指すようになった。
- 我打死人又不要償命、到兵馬司裏坐牢…「燕青博魚」（内府本）第一折、楊衙内の白に「我打死人不償命、常則在兵馬司裏坐牢（私は人を打ち殺しても命を償わず、ただ兵馬司の牢に入るだけでよい）」とある。兵馬司は国都の警察職。

- 白銀偏對眼珠烏…金品から目を離さないということと思われる。「灰闌記」(元曲選本) 第一折、馬均卿の正妻の白には「人的黒眼珠子、見這白銀子沒個不要的(黒い目で、この白銀を見れば誰もが欲しがる)」とある。
- 銅牆鐵壁…金城鉄壁。防備が堅固で攻め落とせない城。物事が非常に堅固なことを喩える。「鐵壁銀山」「銅山鐵壁」などの形になることもある。「單鞭奪槩」(脈望館本) 第一折【天下樂】「你便有鐵壁銀山也撞開(そなたはたとえ鉄の壁や銀の山があろうとも切り開く)」。
- 話不投…「話不投機」と同じであろう。話が合わない、気が合わない。「薛仁貴」(元刊本) 第三折【滿庭芳】「子怕言不諳典、話不投機(ただ恐れるのは言うことに根拠がなく、話が合わないこと)」。
- 六耳不通謀…計略は当事者の二人だけに留め、第三者の耳に入れてはいけないということ。「蝴蝶夢」(古名家本) 第二折【賀新郎】「豈不聞三人誤大事、六耳不通謀(三人が聞けば大事を誤り、六つの耳があれば計略はならぬ)」。『五燈會元』卷三には「六耳不同謀」と見える。

第一折

謝金吾(人夫を連れて登場) 私は謝金吾でございます。天子の命を奉じ、この大通りが狭く、車馬の往来に不便なので、いかなる身分の官吏の家であろうと、大通りにはみ出しているものは、全て取り壊すとのことである。門楼の前にやって来たぞ。この楼はまさしく大通りにはみ出しておる。お前達よ、進み出て取り壊せ。

執事(登場) 私は楊令公の家の執事。門の前で騒いでいるのは誰だ。見に行ってみよう。(謝金吾を見るしぐさをする) 皆様方、お待ちを、どうして我が屋敷の清風無佞楼を取り壊すのです。

謝金吾 この老いぼれが、私が聖旨を奉じて大通りを広げていることを知らぬか。今お前達の楼はまさに大通りにはみ出しているのです、取り壊さねばならぬ。

執事 それならば、私は奥様に願ひしてあなたと話をしてもらいましょう。奥様お出でになって下さい。

(正旦が余太君に扮し七娘子と八娘子を連れて登場)

余太君 私は余太君でございます。奥座敷でのんびり座っていると、ふと門で騒いでいる

のが聞こえてきたが、何事であろうか。

七娘子 お前、どうしてそんなに慌ててやって来たのです。

執事 奥様にお知らせします、謝金吾が多くの人夫を連れて、家を取り壊しながら、我らの無佞楼の前に来ました。奥様はあやつと話して下さい。

余太君 誰がそのようなことを言うのですか。

執事 今まさにあちらで取り壊そうとしております。

余太君 上に先帝の御書があるというのに、その者はどうして取り壊そうとするのか。なんと大胆な。

【仙呂・點絳脣】

“我が百尺の楼閣は
祖先が残したもの
功績は大きく
更に郡馬の名声もあるというのに
あやつはどうしてむやみに取り壊そうとするのか”

【混江龍】

“この楼が初めて建てられた時
蔵の財をどれ程使ったかを知らず
上には御書の書簡と
自ら賜った金牌がある
言うまでもなく朝廷の官吏の誰もが馬を下り、春と秋には天子も香を下賜なされる”

執事 すぐにも取りかかることでしょうか、奥様お急ぎ下さい。

余太君

“がやがや騒ぎを聞きつけて
急ぐほど私の息はハアハアとあがる
足をばたばた上げても
歩みはぐずぐず
しばらく行っても屋敷の門の外に出られない
私はここで人夫を止めることもできず、ほこりからも逃れられない”

謝金吾 奥様、何の用ですか。

余太君 我が清風無佞楼は聖旨を奉じて建てられたものなのに、お前は どうして我が楼を

取り壊そうとするのか。

謝全吾 奥様、それは違います。元々帝があなたのために屋敷を建てるよう命じられましたので、この度私も聖旨を奉じてあなたのために屋敷を取り壊すのです。通りを行くのを妨げているので、取り壊します。お前達、まずはあの門楼の瓦を叩き落とせ。

余太君 こやつはまことに無礼。(唱う)

【油葫蘆】

“こやつは見る間に瓦を落としよる”

謝金吾 お前達、この垂木を全て壊したら、私は屋敷に持って行って薪にするから、構うことはない。

余太君 (唱う)

“こ、こ、こやつは垂木を壊して薪にしよる”

謝金吾 急いで壊すのだ。

余太君 (唱う)

“こ、こ、こやつは一刻もゆるがせにせずせき立て

町中の人々は誰もがいぶかしむ

我が家だけがこのように損なわれるとは”

謝金吾 奥様、帝の命には、自分勝手は許されないのです。私は朝廷の門の外からずっと取り壊し始め、多くの王侯宰相の屋敷でも取り壊しを行い、ひたすらあなたの屋敷まで取り壊しました。

余太君 (唱う)

“私の方では問い詰めるのに、あやつの方ではかたくなに拒む

進み出て腰帯をしっかりと掴んでくれよう”

謝金吾 ご夫人、あんたもわからない人だな。私は帝の命を奉じているのに、あんたは私を捕まえてどうするつもりだ。

余太君 (唱う)

“まさか聖旨も無く勝手に指図しているのではあるまい”

謝金吾 ご夫人、誰も嘘などついておらず、現に聖旨があるのです。

余太君 聖旨はどこにあるのです。私はお前と共に帝にお目通りに行きます。(唱う)

【天下樂】

“我ら二人は互いに掴み合いながら帝の御前へ上奏しに行く”

謝金吾 私があんたと共に行くのは構わぬが、お前達よ、この者に構わず、どんどん壊せ。

余太君（唱う）

“このろくでなしが

まことによこしまである

我らは朝廷に十数年仕える武官であるのに”

謝金吾 お前の楼が大通りにはみ出しているから、取り壊すのだ。

余太君（唱う）

“この門楼を誰もが通り過ぎ、この門楼に誰もがやって来た

道の狭さを嫌がっているのはただお前謝金吾だけ”

謝金吾 ご夫人、あんたがむやみにわめいてばかりいても、聖旨にははっきりと「清風無
佞楼を取り壊したら止めにする」と書いてあり、私が勝手に作ったものではない。あん
たが見たいならば、見せてやるが、今ほとにかく取り壊さねばならぬ。

余太君 聖旨ではあるまい。

謝金吾 まさか私があんたをだまして言うのか。偽の聖旨があるものか。あんたは
ひたすらあれこれと言って、口から出任せに誰も彼も罵っている。それはいかんぞ。

余太君（唱う）

【那吒令】

“これは全て王樞密、王樞密の策略にして

わざと謝金吾、謝金吾に取り壊させ

強引に宋の眞宗、宋の眞宗の名を借りている

上はあるべき道理を恐れず

下は情理の驚くを恐れず

お前がどんな上奏をしたかわかったものではない”

【鵲踏枝】

“私のような老いた婦人を捨て去り

お前のようなごろつきを用いている

恨みを訴えに、宮城へ行っても、金の階に頭を打ちつけて死ぬことになるう

こやつがことさらに壊すのを見て

思わず私は嘆き悲しむ”

謝金吾よ、我が家はお前と今まで恨みごとはなく、昔から仇ではなかったであろうが。（唱

う)

【寄生草】

“我らとお前とは何も恨みはないのに、どうしてこのような酷い仕打ちをするのか
乱暴者やろくでなしや無頼の輩を引き連れ
赤い楼や絵を描いた壁が誰の屋敷のものであっても構わず
たちまち彫刻を施した欄干と玉の階は皆どこへやら
お前のような不忠不信で人を害する賊が
仁義ある朝廷の臣下であるはずがない”

謝金吾 聖旨の話はさておき、この私謝衙内は現に朝廷の大臣であるから、お前は私に盾
突くべきではないぞ。

余太君（唱う）

【村里逐鼓】

“あやつは朝廷の大臣と言うが
我ら楊家も民間の一族ではない”

謝金吾 お前はまだ私がわからぬか。私は王樞密の婿で、お前のような白髪頭など眼中に
ないわ。

余太君（唱う）

“なんとお前は舅の権勢を笠に着て
私のような年寄りを虐げるつもりなのだ”

謝金吾 この老いぼれは本当に身の程を知らぬ。私が少し話をさせてやったら、ひたすら
年寄り風を吹かせ、くどくどと話すのを止めようとせぬ。お前がたとえひげを生やして
も、私はお前など相手にせぬ。失せろ。(余太君を突き飛ばすしぐさをする)

余太君（唱う）

“思いがけずこやつに転ばされ
腰をくじき、膝を擦りむき
もう少しで頭を割るところであった
ああ、お前は白髪頭のこの婆さんをいたわるべし”

謝金吾 お前達よ、金の釘を打った赤い戸や、虬を彫った格子戸など、取り外せないもの
は全て打ち壊せ。

余太君（唱う）

【元和令】

“こ、こ、こやつは金の釘を打った赤い戸を無理にこじ開け
虬を彫った格子戸を全て壊す”

謝金吾 あの柱を切り倒せ。

余太君（唱う）

“沈香の柱もまるで胡麻殻を砕くかのよう
大通りの大半を土で平らにした”

お前が門楼を壊したのはともかく、どうしてこの御書の額まで打ち砕いたのか。（唱う）

“どうしてこの額を打ち砕いたのか”

謝金吾 私がこの額を砕こうと、大したことはない。訴えたければ、私を訴えるがよい。

余太君（唱う）

“まさか役所に訴えても意味がないと言うまいな”

謝金吾 私は帝の命を奉じてここにいるのに、お前が私を罵れば、聖旨を罵ったのと同じ
ことだ。お前が聖旨を罵ることはどのような罪になるのであろうな。

余太君（唱う）

【青哥兒】

“こやつは我ら、我らの屋敷を取り壊し
それどころか、あ、ありもしないことを言って言いくるめ
たとえ私の全身に口があったとしてもどのように対処しようか
ああ、私がこのように年老いてから
災いに遭い
こやつに大通りで突き飛ばされ
転んで体を損なうとは誰が思うであろうか
ただちに辺遠の地から息子らを密かに呼び戻そう
こやつはひどく人を虐げた”

謝金吾 お前達よ、今日は壊しきれなかった。明日また来て壊すことにしよう。（退場）

余太君 ああ、これは謝金吾がすすんでこちらへ騒ぎ立てに来たのではなく、明らかに王
樞密が我らの敵となり、わざとあやつを来させたのだ。我が息子の六郎は気立てが良い
ので、もしこのことを知れば、恐らく駆け戻って来て、ますますあやつの計略にかかっ
てしまう。執事よ、こちらへ。今から私は手紙を一通書くので、お前は真っ直ぐ瓦橋三

関へ行き、息子の六郎に、もしはっきりとした聖旨があれば、関を離れても良いが、もしはっきりとした聖旨がなければ、関を離れてはならないと言うのです。気を付けて行きなさい。(唱う)

【賺煞】

“もしあの良心に背く賊を除かずに
元通り我らの門楼を建てるならば
我ら楊家の姓を改めるしかない
あやつは我が息子を罪に陥れようとしており
今朝執事のそなたを自ら遣わす
この手紙にははっきりと書いてある
むやみに邪推してはなるまいぞ
内情は大きな利害と関わっておる
あやつに罵られたとはいうものの
我が息子には辛抱せよと言いつけ
軍機を誤って関所を勝手に離れてはならぬ”(退場)

〔注〕

- 院公…下男、使用人、執事などに対する尊称。
- 捱…そろそろと近付くこと。「傷梅香」(息機子本)第一折【幺篇】「一程程捱入相思境(一步一步入り込む相思の境地)」。
- 催迸…催促する。せき立てる。「催併」にも作る。『水滸傳』(容與堂本)第五十一回に「又怎奈白玉喬那廝催併、叠成文案、要知縣斷教雷横償命(またあいにく白玉喬らが、裁判の結審を催促し、知事に雷横を死刑にさせようとしていた)」とある。
- 上命差遣、蓋不由己…上からの命令なので、自分の勝手にはできないということ。『水滸傳』(容與堂本)第十九回にも見える他、「秋胡戲妻」(元曲選本)第一折では「上命官差、事不由己」となっている。
- 廝…互いに～しあう。「三奪槩」(元刊本)第三折【沈醉東風】「刀廝劈咬着牙根(歯を食いしばって刀で斬り合う)」。
- 喬也波才…「也波」は意味のない襯字。「喬才」はずる賢い、ろくでなし、悪人という意味。「蝴蝶夢」(古名家本)第一折【混江龍】「若是俺軟弱男兒有些死活、索共那倚勢的喬

才打會官司（もし私の軟弱な夫にもしものことがあれば、あの権勢を笠に着る悪人と裁判をしよう）」。

○言三語四…あれこれとあげつらう。あれこれと批判する。「玉壺春」（息機子本）第三折、李斌の白に「欲待要去呵、又惹的人言三語四、使人惶恐（行こうとすれば、人にあれこれと言われるのが、恐ろしい）」とある。

○霎時間…少しの間。たちまち。劉致【端正好】套「上高監司」其二【六】「少甚命不快遭逢賊寇、霎時間送了身軀（命運拙く賊に遭い、たちまち身を滅ぼすこともある）」。

○宗派…一族の血筋。「看錢奴」（第二折）第二折【收尾煞】「爲錢呵族中失了宗派（金銭のために一族の者を失った）」。

○倚老賣老…年寄り顔して厚かましく構える。年寄り風を吹かせる。時代は下るが『紅樓夢』第五十七回の紫鵲の白に「姨太太真個倚老賣老的起來（奥様は本当に年寄り風を吹かせになる）」とある。

○嘮嘮叨叨…くどくど言う。ぶつぶつ言う。「看錢奴」（元曲選本）第三折、興兒の白に「你這老弟子孩兒、口裏嘮嘮叨叨的、還說甚麼哩（この老いぼれめ、ぶつぶつと、何をしゃべっておる）」とある。

○亮桶…格子戸。「東坡夢」（元曲選本）第三折【叫聲】「俺這裏排亮桶揭簾櫳（私はこちらで格子戸を開け簾を掲げる）」

○有官防無世界…「官防」は役所のこと。「世界」はここでは社会の秩序ということか。役所に訴えても意味がないということであろう。「盆兒鬼」（元曲選本）第四折【朝天子】「則他這瓦窰村更狠如蓼兒洼、你便是有官防難彈壓（この瓦窰村は蓼兒洼よりも恐ろしく、役所に訴えても抑えられない）」とある「有官防難彈壓」も、同種の表現と思われる。

○鬼門關…冥土の門。「灰闌記」（元曲選本）第二折【雙鴈兒】「我向那鬼門關尋覓到有兩三遭（私は冥土の入り口に二度三度と踏み込もうとしている）」。また、辺遠の地を喩えることもあり、ここでは楊六郎がいる瓦橋三関を指すと思われる。

○一發…ますます。「氣英布」（元刊本）第二折、英布の白に「我也不歸漢、也不歸楚、一發驪山内落草爲賊（私は漢にも降らぬし、楚にも降らぬし、いっそこのまま驪山で山賊になろう）」とある。

○着他道兒了…「着道兒」は計略にかかるという意味。「後庭花」（元曲選本）第二折、王慶の白に「我如今不先下手、倒着他道兒（今から先に手を下さねば、逆にあやつの罠にかかるだろう）」とある。

○都管…使用人の頭、執事のこと。

○明開…はっきりと述べること。「薛仁貴」(元曲選本) 第一折【混江龍】「我待要叩金階款款的明開去(私は御前の階を踏み鳴らしてははっきりと申し上げよう)」。

○寧奈…堪え忍ぶ。辛抱する。「寧耐」にも作る。「焚兒救母」(元刊本) 第三折【上小樓】「這個小嬰孩、我送來、你全家寧奈(この子は、私が送るから、そなたら一家は辛抱せよ)」。

第二折

(沖末が楊六郎に扮し兵士を連れて登場)

楊六郎(詩をうたう)

“三関を鎮守すること二十年
蕃兵は白溝を侵そうとはしない
父と兄は国のために忠孝を行い
帝より清風無佞楼を賜った”

私は姓を楊、名を延景、字を彦明といい、本籍は河東の者でございます。父親は金刀教手無敵大総管の楊令公、母親は佘太君。私には七人の兄弟がおり、平、定、光、昭、朗、景、嗣といい、私は六番目である。三関を守備しているが、三関とは何か。梁州の遂城関、霸州の益津関、雄州の瓦橋関、これがすなわち三関である。私は六使の職を受けているが、六使とは何か。辺関裏外点検使、界河兩岸巡綽使、関西五路廉訪使、淮浙両場催運使、幽汾二州防御使、河北三十六処救応使、これがすなわち六使の職である。北蕃の韓延壽の無礼は許せぬが、私と戦って以来、ほとんど功績を挙げることもできずにいる。私の配下には義兄弟の契りを結んだ者達がおり、岳勝や孟良以下、総勢二十四名の印綬を与えられた指揮使である。彼らを褒めるのではないが、本当に皆それぞれ武芸に通じ、用兵の機微をよく知っており、冠には金の獬豸の簪をし、錦〔豸+唐〕猊の鎧を身に着け、びゅんびゅんと弓から矢を放ち、パカパカと馬のひづめを響かせ、生死を顧みず国を守る將軍にして、太い肝っ玉で勇敢に戦う連中だ。私は今から元帥府で軍議を開くので、これお前、門の外から緊急の軍事情況を知らせる者があれば、私に知らせよ。

執事(登場) 私は楊令公の家の執事でございます。謝金吾が清風無佞楼を取り壊して、奥様を階段から突き落とし、転ばせて頭にけがをさせたので、奥様のお言葉により、手紙

を持って真っ直ぐ三関へ向かい、六郎様に会いに行くのだ。話している間に、早くも着いたわい。門番よ、門前に執事が来ていると、元帥にお知らせしてくれ。

楊六郎 通してやれ。

兵士 お入り下さい。

執事（まみえるしぐさをする）私は緊急の用事があって参りました。

楊六郎 執事よ、どんな緊急の用事があって来たのだ。

執事 元帥、奥様のお手紙がこちらにありますので、ご覧になって下さい。

楊六郎（手紙を開きひざまずいて読む）手紙を見せよ。「母の太君より息子の六郎へ。この度王樞密は婿の謝金吾に命じ、清風無佞楼を取り壊させ、また私を階段から突き落とし、転ばせて私の頭にけがをさせ、非常に思い悩み、そなたに知らせる。このようではあるが、辺境の要所の地にいるからには、はっきりとした聖旨がなければ、私のことを思う余り、勝手に関を離れ、却って王樞密の奸計にかかることのないように。しっかりと覚えておきなさい。」（怒るしぐさをする）執事よ、食事をしたら先に戻って太君様に、しっかり養生するようにと伝えてくれ。私には考えがある。

執事 私は長居をせずに、奥様にお知らせしに戻ります。（詩をうたう）

“手紙を伝えたらすぐに戻る
道は遠いが苦勞はいとわぬ
願わくは順風が吹くのを借りて
一日で屋敷に戻り太君様にまみえたい”（退場）

楊六郎 私は今から三関を離れ、母上に会いに行きたいが、どうして管轄地を勝手に離れることができようか。この恨みは骨髓に徹し、報いずにはおれない。じっくり策を考えるとしよう。これお前、帳の出入り口をきつく閉めよ。

焦贇（外が焦贇に扮して登場、詩をうたう）

“三関を鎮守するのは好漢
蕃兵を殺して逃がしはせぬ
軍の前陣の後と先駆けする
我こそは虎頭魚眼の焦光贇”

私は焦贇でございます。たった今辺境の見回りから戻って来て、兄者に会いに行くところである。これお前、焦贇が到着したと、お知らせしてくれ。

兵士（知らせるしぐさをする）はっ、元帥にお知らせします、焦贇どのが来られました。

楊六郎 通してやれ。

兵士 お入り下さい。

焦贇（まみえるしぐさをする）兄者、辺境の見回りにて何事もなかったことを、申し上げに参りました。

楊六郎 弟よ、何ごともなければ、戻るがよい。

焦贇（門を出るしぐさをする）私にはわかっておるぞ。普段は私に会うと大いに喜んでおられるのに、この度私に会うとひどく思い悩んでおられたので、私は出て行かずに、ここにいてあの方が何を言われるのかを聞くでしょう。

楊六郎 焦贇は行ってしまった。もう一度この手紙を読もう。「母太君より六郎へ。この度王樞密は婿の謝金吾に命じ、清風無佞楼を取り壊させ、また私を階段から突き落とし、転ばせて私の頭にけがをさせたので、そなたに知らせる。」

焦贇 なんと兄者はこのような悩みを抱いておられたのか。王樞密の無礼にも、清風無佞楼を取り壊し、また太君様を転ばせて頭にけがをさせるとは許せぬ。兄者が戻られる前に、私は先に都へ行き、あやつの一家全員を皆殺しにして、兄者の恨みに報るために一つ行くことにすれば、まことに良い考えではないか。（詩をうたう）

“西蕃と国境を接しているけれども
要害の地には自ずから見回りをして遮る者がいる
岳排軍が砦を固く守っている
私は六郎兄者に内緒で先に三関を離れよう”（退場）

楊六郎 ああ、この恨みは、いつになったら報いることができるのか。私は密かに三関を離れたいが、諸将を指揮する者がいなければならない。この事は漏らすわけにはいかないし、もし焦贇に知られたらどうしたものか。このようにするしかないな。これお前、岳勝と孟良を呼んで参れ。

兵士 岳勝どのと孟良どののはどちらにおられる。

岳勝（外が岳勝に扮して登場、詩をうたう）

“全身全霊のまごころで皇朝を助け
日夜国境を見回る苦労も厭わない
お前達蕃兵が三百万いようとも
誰も我が岳家の刀には敵わない”

私は双刀の岳勝でございます。楊景配下の將軍となってお助けしておる。演武場で兵の

訓練をしていたところ、兄者がお呼びになられ、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。

これお前、岳勝がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士（知らせるしぐさをする）元帥にお知らせします、岳勝どのが来られました。

楊六郎 通してやれ。

兵士 お入り下さい。

岳勝（まみえるしぐさをする）兄者、私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょうか。

楊六郎 ひとまずそこにおれ。

孟良（外が孟良に扮して登場、詩をうたう）

“両軍は向かい合って立ちふさがり
戦いを促す太鼓を三度打ち鳴らす
私は火付けの瓢箪を背負い
焼きを入れた斧を肩に担ぐ”

私は加山の孟良でございます。楊六郎配下の指揮使の職に就いておる。今しがた兄者がお呼びになられ、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。これお前、孟良がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士（知らせるしぐさをする）元帥にお知らせします、孟良どのが来られました。

楊六郎 通してやれ。

兵士 お入り下さい。

孟良（まみえるしぐさをする）兄者、私をお呼びになられたのはいかなるご用でしょうか。

楊六郎 お前達二人を呼んだのは他にもない、この度王樞密が婿の謝金吾に命じ、我ら楊家の清風無佞楼を壊させ、母上を階段から突き落とし、頭にけがをさせたのだ。私は密かに三関を離れ、母上を訪ねて行こうと思う。岳勝よ、お前は諸将を率いて、砦を堅く守り、蕃兵を防ぐのだ。私は病にかかり、しばらく出撃することはできないということにせよ。諸将は誰も付いて来てはならず、私は夜の内に一人だけで、密かに三関を離れて母上に会いに行くとしよう。（詩をうたう）

“馬を走らせて夜の内に戻る
将校達は砦を離れてはならぬ
もし太君が転んでけがをなされたのでなければ
私楊景はどうして密かに三関を離れようとするだろうか”（退場）

岳勝 兄者は行ってしまわれた。孟の兄弟よ、私は兄者の軍令を受けて、砦を堅く守るこ

とにするから、お前は軍馬を整えて、国境の各地を見回り、蕃族の敵を防いで、兄者が戻るのを待て。気を付けて、命令に背くことがないようにな。

孟良 兄者ご安心を、ちゃんとわかっていますとも。

岳勝（詩をうたう）

“元帥はすぐに帰って来るだろう
武器を整えてしばしも休まない”

孟良（詩をうたう）

“辺境の見回りに私を残してさえおけば
蕃兵は誰も南を向いて見ようとはしない”（共に退場）

焦贇（登場） 私は焦贇である。兄者は密かに関を離れて母君を訪ねようとしており、私はこの城門の外で見張りをし、やって来るのを待って、知らせよう。そろそろやって来る頃だろう。

楊六郎（登場） 私は楊景である。諸将に内緒で、三関を離れ、この城門の外でもうしばらく待ち、人目が少なくなったら城内へ入るとしよう。（焦贇と会うしぐさをする）

焦贇 兄者、どちらへお出かけで。

楊六郎 弟よ、お前こそどこへ行く。

焦贇 兄者、私はとっくにわかってるんですよ。私は兄者の用心棒になりますから、一緒に入城して母君を訪ねて行きましょう。

楊六郎 弟よ、もう知っているのならば、驚くなよ、我ら兄弟二人で母上を訪ねて行こう。弟よ、お前は普段からがさつな性格であるし、この件は首を斬られる罪に関わるから、少しも漏らしてはならないぞ。黄昏になってから入城するので、弟よ私に着いて来い。（共に退場）

（正旦が余太君に扮し七娘子と共に登場）

余太君 王樞密の無礼は許し難く、我が家の清風無佞楼を取り壊し、私は再三阻止したがかなわず、かえって階段から突き落とされ、転んでこの頭をけがしてしまい、もう少しで死ぬところであった。私は執事を遣わして、六郎に戻って来ないようにと知らせたが、執事が戻って来たら、うまくいったかわかるであろう。（唱う）

【南呂・一枝花】

“この数日怒りで私は悶悶としながら眠り、けがを負わされてぐったりと伏せていた
功臣をむざむざと捨て去り

悪人の思うがままに振舞わせ
天の道理はどうなっているのか
敵の回し者は全てにおいて欺き
帝の御前で寵用されている
今は中書省は国の政治を司り
枢密院が辺境の関の事を支配する”

【梁州第七】

“全てあの二股膏薬が手配した軍馬
何が一本の筆で天下を治めるだ
とても痛くてこの数日耐え忍び難い
夜店の騒ぎ、なわばり争いを聞くことはなく
行商人の、商売は多くない
日頃はこの清風楼の前後に集まっていたのに
今や閑散として見渡す限り何もない
瑞雲が青い瑠璃瓦や赤い甍を覆うのを見ず
暁の日が玉の簾や刺繍した帳に映るのを見ず
芳しい霧が美しい彩りや彫刻を施した矛を覆うのを見ず
あやつは大胆にも無茶なことをして
先帝の聖旨を少しも恐れぬ
いわれもなくこの災いをもたらし
私が寝込んでしまったのは仕方がないが
もし楼が壊されたならば生きていられない”

子供達よ、私は少し眠るから、早く門を閉じておくれ。

楊六郎（登場） 私は楊景でございます。城内に入ると、焦贊がいなくなってしまった。屋敷の門の前まで来たぞ。ひとまず軽く叩くでしょう。門を開けよ。

七娘子 門を叩くのはどなたです。

楊六郎 お前達の兄だ。

七娘子 門を開けてみましょう。なんと六郎兄様が屋敷に来られたのですでしたか。

楊六郎 妹よ、母上に、私が来たことをお知らせしてくれ。

七娘子 母上にお知らせして参ります。（まみえるしぐさをする。）

余太君 今時分に誰が門の前にいるんだい。

七娘子 母上、六郎兄様が来られたのです。

余太君 あの子を入れてやりなさい。

(六郎が余太君にまみえるしぐさをする)

余太君 息子や、お前がこの度やって来たのは聖旨を受けたものかね。

楊六郎 母上、私は手紙を読むや、家に飛んで帰って母上に会いたくならずにはいられませんでしたので、どうして聖旨を願ひ出る暇がありましょう。諸将に内緒で密かに戻って来たのです。

余太君 息子や、聖旨を受けていないのに、勝手に関を離れてやって来ては、だめであるうが。(唱う)

【牧羊關】

“私は急いで使いを送って引き止めさせたのに、お前は何を慌てて家に戻って来たのか
お前は天地の間に張り巡らされた網から飛び出すことはできないであろう
あやつはお前を騙して辺境の関を離れさせ、お前を罪に陥れようとしているのだ”

楊六郎 私はただ謝金吾が母上の頭にけがをさせたからやって来たのです。

余太君 (唱う)

“あ、あ、あやつは私の頭にけがをさせたことはなく
私と掴み合いになったこともない
門楼を壊されたのでいささか気が腐っていたが、この数日でやっと少しおさまった”

楊六郎 母上、私に見せて下さい。ああなんと腹立たしいことだろう。

余太君 六郎や、しっかりおし。(唱う)

【罵玉郎】

“階段の下で気絶したのを見て急ぎ助け起こして座らせ
慌てて抱きしめぴったりと引き寄せ
口の中にだらだらとよだれが湧くの聞く
私はお前の腕を揺り動かし、耳を引っぱり、大声で呼ぶ”

【感皇恩】

“ああ、楊景どのと一声叫んでも
全く彼を呼び覚ますことができない
私は人中のつぼを押し、七娘子は髪の毛を引っぱり、一家は大騒ぎ

もしもお前がこんこんと目を覚まさず、死にかけの婆さんを残すならば
私は一体どのように耐え、どのように釈明し、どのように始末を付ければ良いのか”
あの王樞密は、(唱う)

【采茶歌】

“恐らく急に戦いを起こし

真っ直ぐに馬嵬坡へ追い詰めるだろう”

もしものことがあったならば、(唱う)

“お前は誰に宋の山河を救わせるのか

これまでにないほど私を心配でたまらなくさせる

お前はおかしな気を起こしてはいけない”

楊六郎 (目を覚ますしぐさをする) この父母の仇には、いつになったら報いることができるのか。本当にひどく腹立たしいことだ。

余太君 息子や、我ら一家はお前だけが頼りなのだから、今すぐ三関へ戻り、ここにいて禍を招いてはいけません。

楊六郎 母上のご命令に、私は背くことはせず、今晚すぐに三関へ戻ります。もしまた何か緊急の事がありましたら、八娘子に手紙を言付けて、私に知らせて下さい。

余太君 息子や、お前に聞きたいことがあります。(唱う)

【哭皇天】

“軍事情況はおろそかにできるものではない

お前は人を連れて来たのかそれとも一人で来たのか”

楊六郎 母上、私は弟の焦贇と共に来ました。

余太君 焦贇はどこにいるんだい。あの子を家の中に入れなさい。

楊六郎 城内に入るといなくなってしまうました。

余太君 (唱う)

“お前は彼が城内に入るといなくなったと言うが

どうして彼を探さないのか

彼は元々いささかばかり乱暴者

彼がもし我らの楼閣が壊されたことを聞かされたならば

彼がもし私が転ばされて肩のくぼみにけがを負ったことを聞かされたならば

恐らくむらむらと人殺しの心、人殺しの心を烈火の如く起こし

どうして他人の利害や、自らの生死を顧みようか”

楊六郎 あの焦贛はよく人を殺し火を放つ性格ですから、いつか罪を犯すでしょうが、これもまた「悪人は自ずからそれより大きな悪人に苦しめられる」ということです。

余太君（唱う）

【鳥夜啼】

“ああ、何が「悪人は自ずからそれより大きな悪人に苦しめられる」なものか

これは全てお前が自ら引き起こした騒ぎ

あの賊めは大いなる権勢を握っているのに

もし思いがけないことが起きたら

誰がうまくとりなしてくれようか”

息子や、お前は彼に構わず、すぐに三関へ戻り、奸臣の手に落ちないようにしなさい。

楊六郎 母上、私はすぐに行きます。（別れるしぐさをする）

余太君 息子や、ひとまず座りなさい。時を告げる役所の太鼓が聞こえたが、今は何更だ

い。

余太君（唱う）

“時刻を聞くにしんしんと二更を過ぎたばかり

心は落ち着かず明日という日もまだ見えず

お前はひとまず休み

しばらく座りなさい

一つは馬に乗ってくたびれたであろうから、二つは喉が渴いたであろうから”

もう鶏が鳴きました。息子や、長居はせずに、すぐに城を出て、三関へ戻りなさい。気を付けて行くように。

楊六郎 母上しっかり養生なさって下さい。私は母上にお別れを告げ、すぐに出発しましょう。

余太君（唱う）

【尾聲】

“鶏が鳴いたらすぐに出発してぐずぐずしてはならない

息子や、お前がもし城門から飛び出ることができればお前の命も逃れられる

私は帝の御前へ行って自ら言わずにはおれない

王樞密の冷酷さが

あれこれとお前楊六郎を痛めつけることをただ恐れると

息子や、お前はただ先を急げば良いのに何を私に構っているのか”（退場）

楊六郎 母上にお別れを告げたので、三関へ出発しなければ。（詩をうたう）

“深夜の内に屋敷へと戻り

夜も明けぬ内にまた出発する

忠を尽くせば孝を尽くすことはできず

不肖の息子はひどく痛み悲しむ”（退場するそぶりをする。）

巡邏兵（登場）何者だ。なんと楊景ではないか、早く捕らえよ。しっかりと縛り、樞密閣下にご報告しよう。

楊六郎 隣近所の方々よ私の母に、王樞密が楊六郎を捕らえてお白砂へ行ったと知らせて下さい。母上、あなたを思うととても辛いです。（退場）

〔注〕

○教手…ここでは武術の技を教える者。指南役。『水滸傳』の好漢の徐寧は、東京において金鎗班の教師をしていたことから綽名を「金鎗手」というが、「争報恩」（元曲選本）第一折の徐寧の白では「某宋江哥哥手下第十二個頭領、金槍教手徐寧是也（私は宋江兄者配下の第十二位の頭領、金槍教手の徐寧でございます）」となっている。

○點檢使…侍衛の官。

○廉訪使…元代以降の按察使の別称。地方の政治を監察する官。

○豳汾二州…豳州は陝西省彬縣。汾州は山西省汾陽県。

○救應使…救援や、呼応して動く軍を率いる。

○獬豸…想像上の神獣。一本の角を持ち、物事の正不正を見分けることができる。獬豸冠は裁判官がかぶる冠。「玉鏡臺」（古名家本）第一折【混江龍】「生前不懼獬豸冠、死後圖畫麒麟像（生前は獬豸冠にはばかりの行いをせず、死後は麒麟閣に肖像を描かれる）」。

○〔豸+唐〕猊…鎧の名前。「唐夷」「唐衣」にも作る。『董解元西廂記諸宮調』卷二【剔銀燈】「甲掛唐夷兩副、靴穿抹綠（唐夷の鎧二領を重ね着し、緑の靴を履いている）」。

○虎頭…虎のような形をした頭。「李逵負荊」（元曲選本）第二折【一煞】「這厮敢狗行狼心、虎頭蛇尾（こやつらは犬の行いに狼の心、虎の頭に蛇の尾）」。『桃花扇』第九出【粉蝶兒】「七尺昂藏、虎頭燕頰如畫（七尺の身は雄々しく、虎のような頭と燕のようなあごは絵

に描いたよう)」。

- 歡天喜地…大喜びな様や有頂天な様をいう。「西廂記」(弘治本) 卷二第三折【幺篇】「則見他歡天喜地、謹依來命(彼を見れば大喜びで、うやうやしく仰せに従う)」。
- 火葫蘆…瓢箪の形をしており、中に火薬を詰めた武器。「博望燒屯」(内府本) 第二折【賀新郎】「你向那博望城多準備着火葫蘆(そなたは博望城で多くの火付けの瓢箪を準備せよ)」。
- 護臂…用心棒。「黑旋風」(脈望館本) 第一折、孫榮の白に「怎生得一個護臂跟隨將我去方可(なんとかして用心棒を雇い一緒に行ってもらわねばならぬ)」とある。
- 鼎鼐調和…「鼎鼐」は王位の象徴であり、「鼎鼐調和」「調和鼎鼐」で国をしっかりと治めることをいう。「周公攝政」(元刊本) 第四折【川撥棹】「您怎生變理陰陽、調和鼎鼐(あなた方はどのように陰陽を治め、政治を行うのか)」のように、しばしば「變理陰陽」と対になって用いられる。
- 兩頼子…日和見や二股膏薬をいう。「氣英布」(元刊本) 第一折「是你个兩頼子、隋何來說我(二股膏薬の隋何が私を説得しに来たのだ)」。
- 祥雲…瑞雲。また伝説上で神仙が乗る雲。『董解元西廂記諸宮調』卷一【醉落魄】の【尾】に「祥雲籠經閣(めでたき雲は経を収める高殿に立ちこめる)」とある。
- 地網天羅…天地の間に張り巡らされた網。警戒が厳重なことや、容易に逃げられないことを形容する。「氣英布」(元刊本) 第一折【鵲踏枝】「誰交你自創入龍潭虎窩、飛不出地網天羅(誰が龍虎の住みかに突っ込み、天地に張り巡らせた網から飛び出ることもできなくさせたのか)」。
- 羅織…人を無実の罪に陥れようと画策すること。『劉知遠諸宮調』卷二【解紅】「兩箇男女、鳴着嘴兒廝羅織(二人の男女は、口をとがらせ策略を巡らす)」。
- 腌臢…汚い、ひどいなどの意味。「淹潛」にも作る。『董解元西廂記諸宮調』卷五【刮地風】「自家這一場腌臢病、病得來蹺蹊(私のこのひどい病は、怪しげな症状)」、「三奪槩」(元刊本) 第二折【牧羊關】「這些淹潛病、都是俺業上遭(このひどい病は、全て私の業によるもの)」。
- 喝嘍嘍…痰やよだれなどが湧き出る音。「哈嚕嚕」「黑婁婁」「駒嘍嘍」にも作る。「鐵拐李」(元刊本) 第二折【煞尾】「哈嚕嚕潮上延、脚難移手怎拳(だらだらとよだれが湧き、足は動かし難く手を握ることもできない)」。
- 人中…鼻と上唇との間にあるみぞ。人体のつぼの一つ。鍾嗣成【一枝花】套「自序醜齋」

- 【梁州】「人中短髭鬢稀稀（人中のひげは短く鬢の毛はまばら）」。
- 馬嵬坡…安史の乱で楊貴妃が玄宗から死を賜った場所。
 - 風魔…気が狂うこと。『董解元西廂記諸宮調』卷三【三煞】「可憎姐姐、引得眼花心亂、俏似風魔(憎いお嬢さんのおかげで、目はくらみ心は乱れ、まるで気が狂ったかのよう)」。
 - 輕可…何でもない。容易い。問題にならない。『朱子語類』卷一〇六「儂智高反、亦是輕可底事、何故恁地費力（儂智高の反乱も、大したことではないのに、どうしてあんなに苦勞したのだろう）」。「氣英布」（元刊本）第一折【點絳脣】「漢軍微末特輕可（漢軍は弱く大したことはない）」。
 - 不騰騰…「不登登」に同じ。感情を抑えきれない様。「殺狗勸夫」（元曲選本）第三折【罵玉郎】「動不動和人爭、不登登按不住殺人性（ややもすれば人と争い、むらむらと殺人の性を抑えられない）」。
 - 惡人自有惡人磨…悪い者には自然にまたそれよりも大きな悪人があってその者を苦しめるものであるということ。自業自得。「張協狀元」第九出にも見え、また『水滸傳』（容與堂本）第三十回は「惡人自有惡人磨」に作る。
 - 兜羅…うまくまとめる。とりなす。「對玉梳」（古名家本）第二折【滾繡毬】「甜句兒將我緊兜羅、口如蜜鉢（甘い言葉で私をなだめる、口は蜜の鉢のよう）」。
 - 來日個…明日。語尾の「個」は時間や数量を表す語に付く接尾辞。「村樂堂」（内府本）第三折【後庭花】「來日個坐早衙、大人行把狀插（明日は朝のお白州で、お上に訴状を差し出そう）」。
 - 夤夜…深夜。「西廂記」（弘治本）卷四第四折、卒子の白に「你是誰家女子、夤夜渡河（お前はどこの女だ、深夜に川を渡るとは）」とある。
 - 登程…出発すること。「介子推」（元刊本）楔子【賞花時】「(帶云) 家中萬事無牽掛。(唱) 則今日便登程（家中には何も気掛かりはない。今日こそ出発しよう）」。
 - 生忿子…不肖の子。不孝であること。「老生兒」（元刊本）第一折【混江龍】「但得個生忿子帶孝引魂駕舉車、煞強如孝順女羅裙包土築墳臺（もし生まれたのが不肖の息子でも孝を持って葬送の車を引いてくれば、孝行娘が薄絹の裾に土を包んで塚を作ったのにも勝る）」。
 - 巡軍…見回りや捕り手を務める兵卒。

(謝金吾が梅香と共に登場)

謝金吾 私は謝金吾でございます。清風無佞楼を壊して帰って来てから、ここ数日ずっとまぶたがぴくぴくする。「眼がぴくぴくすると、不運がやって来る」というが、まさか何やら不運が我が家にやって来るのではあるまいな。これお前、まずは酒を用意せよ。何杯か飲むとしよう。

焦贊 (登場) 私は焦贊である。六郎兄者と共に密かに三関を離れ、日が暮れたので、城内に入った。「君子は仇に報いるに、まず三年待つ」とはいうものの、私はこの通りせっかちだから、三年といわず、一晩だって待つことはできぬ。王樞密と謝金吾の無礼は許し難く、私はこの屋敷がまさしく謝金吾の屋敷だと聞いたので、まず謝金吾の一家全員を殺し、その後に王樞密を殺しに行こう。時を告げる役所の太鼓を聞くに、三更頃だ。この塀を跳び越えよう。裏庭にやってきたぞ。耳を澄ましてみよう。

梅香 この時分でも衙内様はあちらで酒を飲んでいらっしゃるが、そろそろお休みになるだろう。身の回りのお世話をしに行こう。(猫を呼ぶしぐさをする) 猫や、猫や。

焦贊 (梅香を殺すしぐさをする) このあま逃げるな、我が刀を食らえ。

(梅香が死ぬしぐさをして、退場)

焦贊 これこそ謝金吾の寝室、蹴り開けてくれよう。

(謝金吾を殺すしぐさをする)

焦贊 謝金吾と家族十七人を殺したぞ。これで去っては、好漢ではない。私は名を明らかにして、逃げも隠れもせず、着物を裂いて、血だまりに漬け、四句の詩をあの白壁に書くとしよう。(書くしぐさをする) (詩をうたう)

“どれほどの関西の男が

殺人放火はお手の物なのか

誰が殺した十七人

六郎配下の焦光贊”

ほれこの詩は、まるで朱筆で書いたかのようで、なんとよく書けているではないか。毒を食らわば皿まで、謝金吾を殺したからには、王樞密も殺しに行くぞ。あの塀を跳び越えよう。

巡邏兵 (登場) 何者だ。捕らえよ。焦贊ではないか。しっかりと縛り、樞密閣下にご報告しよう。(退場)

(浄が韓延壽に扮し蕃兵を連れて登場)

韓延壽 (詩をうたう)

“速やかに勝利を収め至るところを平定し
軍に臨み対陣して勝敗を決する
蕃兵を掌握する総大将で
塞北の英雄の頂点に立つ”

私は蕃将の韓延壽でございます。都総管大将の職に就いている。私の配下には勇ましい兵が百万、戦いに長けた將軍が千人おり、長らく大宋と相争っているが、勝利を得ることができない。一体なぜか。南朝に一人の大將がいるからであり、まさしくそやつが楊六郎なのだ。あやつは本当に勇ましく、長らく河北の地を守り、我ら蕃兵に境界を侵させない。この度太后様の命を受けた。我が方に、賀驢兒という者がおり、この者は六蕃の言葉に深く通じているので、彼を南朝に行かせて密かに間者とし、王欽若と改名させた。もし彼が中原で志を遂げたならば、我らと内応させて攻めるのだ。しかし彼が中原の富貴に心を奪われ、我が契丹の恩を忘れはしないかと思い、彼の左足の裏に、丹砂で「賀驢兒」の三文字を刺青しておいた。思った通り彼は南朝に行き、そのまま枢密の職にまでなり、馬に乗っては軍を統べ、馬を下りては民を治め、すこぶる権勢を振るっておる。義に背き恩を忘れるとは、ただでは済まさぬ。私はしばしば間者を南朝へ行かせ、賀驢兒に会わせているが、今になっても返事がない。私は今から再び一人の腕利きの者に、書状を一通持たせて彼に会いに行かせよう。手紙は既に書き上がっている。そこのお前、今から間者となって、真っ直ぐ都へ行って王樞密に会うのだ。関所では気を付けて、官軍に用心し、楊六郎に知られることのないようにな。今すぐ出発せよ。(詩をうたう)

“風霜や行く手の寒さをものともせず
斥候のふりをして辺境の関に入る
王樞密に書状を届けられたら
返書を得ずには帰って来るな”(退場)

蕃兵 (登場) 私は韓延壽配下の下役でございます。我が元帥の軍令を受け、南朝へ行って王樞密に会いに遣わされた。私はこの山の中腹に来たところで、道に迷ってしまい、どちらへ行けばよいのだろうか。向こうから官軍がやって来たから、ひとまずこちらに隠れよう。

孟良（登場）私は孟良でございます。向こうに一人の蕃兵がいる。これお前捕らえよ。この蕃兵め、どこへ行くつもりだったのか。正直に話すのだ。話さないのならば、これお前、私の斧を持って来い、こやつをぼんくら首を叩き斬ってやる。

蕃兵 だんな斬らないで下さい。私が死んだら誰が書状を届けるのでしょうか。

孟良 書状を見せよ。こやつはまさしく間者だ。今すぐ岳勝の兄貴に知らせ、こやつを縛ったら、真っ直ぐ都へ行って帝にまみえに行こう。（退場）

王樞密（登場）「小さきを恨むは君子に非ず、毒なきは丈夫ならず」とやら。楊景の無礼は許し難く、勝手に三関を離れ、管轄の地をみだりに離れ、深夜に謝金吾主従十七人を皆殺しにした。私は既に楊景と焦贊の二人を捕らえさせてあり、まさしく飛んで火に入る夏の虫、きつとあやつらは私の手の内で死ぬであろう。ただあの楊景は郡主の婿であるから、このように一存で、あやつらを一刀のもとに殺すわけにはいかない。もしも郡主が参内して無実の罪だと申し立てたならば、私はあの者に訴えられてしまうではないか。今は帝には曖昧に上奏をしておき、あやつら二人を刑場に護送して殺し、後の憂いを絶つとしよう。私は自ら監斬官となり、こちらの大通りにやって来た。誰かおらぬか、首切り役人を呼びあの二人の賊を縛って連れて参れ。

（首切り役人が楊景と焦贊を捕らえて登場）

首切り役人 速く歩け、時間になったぞ。

楊六郎 弟よ、お前のせいだぞ。

王樞密 これ楊景に焦贊よ、お前達は管轄の地をみだりに離れ、勝手に三関を離れ、わけもなく謝金吾一家十七人の主従を殺したな。罪を認めるか。

楊六郎 誰が私を救ってくれるだろうか。

王樞密 首切り役人よ、処刑の時刻になったら、すぐに執行せよ。

首切り役人 かしこまりました。

（正旦が皇姑に扮し下僕を連れて登場）

長國姑（詩をうたう）

“朝には黄金の御殿に登り
夕には宰相の屋敷にいる身分
餓えれば宮中の厨の飯を食べ
渴けば翰林の茶を飲む”

私は長國姑でございます。この度我が婿の楊六郎は、あるまじきことに管轄の地をみだ

りに離れ、帝から任せられた関を勝手に離れ、焦贄を連れて上京し、謝金吾の十七人の家族を殺した。王樞密は帝の御前で曖昧に上奏し、お白州を開き、自ら監斬官となったので、どう見てもあの二人には生きる術はない。私は配下の数名の従者を連れ、お白州へ一つ行かなければならない。(唱う)

【越調・鬪鶴鶉】

“私は死刑に処せられるあの息子、我が婿を救おうとする

この度郡主の婿が処刑されようとしているのは、まことに帝のなされることなのか
臣下達は生かしておくように諫めることをせず、処刑の時刻になれば
手を下せという声が聞こえ

「一将は求め難く、千軍は得易し」というではないか”

【紫花兒序】

“驚いて私の焦るさまは心臓を刀でかき乱されるかのよう

悲しみ苦しいさまは腹をきりでえぐられるかのよう
はらはらと涙が流れる”

王樞密 首切り役人よしばし待て、どなたか皇族が来られたぞ。あの者をやり過ごしてから、始末するでしょう。

(長國姑が挨拶をする)

王樞密 誰かと思えば、なんと楊六郎の姑の長國姑だ。私がもし彼女に敬意を払えば、きっと私にあやつらを生かしておくよう求め、再び帝に上奏すれば、楊六郎は許されてしまいうに違いない。私が法の厳しさを彼女に説けば、恐れることは何もない。私は東庁樞密使なのだから、あちらも私に逆らおうとはしないだろう。(拝礼をするしぐさをする)

国姑様がこちらにいらっしゃいましたのはいかなるご用でしょう。

長國姑 用事がなければ来るものですか。(唱う)

“処刑前の食事を送って我が娘婿をこれ以上思い悩ませず

処刑前の酒を送って我が娘婿とこれより別れる”

王樞密 これは聖旨によるものなのです。

長國姑 (唱う)

“誰が聖旨に軽々しく背こうか”

王樞密 国姑様、「良吏は妓楼には関わらず、貴人は危険な場所に行かないもの」とやら、このようなところに、来られなくともよいでしょう。

長國姑（唱う）

“刑場のようなところに親族でなければどうして来ようか”

王樞密 そう、そう、そうです、刑場ですので、国姑様にはひとまずお帰り願います。

長國姑（唱う）

“あやつは何度も私を言いくるめようとするが

お前は どうして口から出任せに言い、面罵して我が顔をつぶすのか”

王樞密 ああ、私王樞密は罵ってなどおりません。ただ刑場は国姑の来られる場所ではないと、ご忠告しただけです。思うにあの楊家の父子に何の功績があるというのでしょうか。

長國姑 お前は彼らに功績がなく、それどころかお前に功績があると思っているのか。（唱う）

【金蕉葉】

“この都中の民衆達は誰もが知っておる

お前は我が大宋朝のために何の力も出していない

彼ら父子について言い出せばまことに悲しい

代々家のため国のためにと尽くしてきた”

王樞密 楊景はよいとして、思うに彼の父親の楊業は力量がなく、陣中で死にましたのに、それでも功績があるのでしょうか。

長國姑（唱う）

【寨兒令】

“彼、彼、彼も我が趙家の社稷のために

自ら進んで李陵碑に頭を打ちつけて倒れ

たとえ死んでも彼の名節を損ねはせぬ

彼もかつては敵将を斬り旗を奪い取り

武威を示し

天下に彼が楊無敵だと知らぬ者はいなかった”

王樞密 思うに彼の兄の楊五郎は剃髪して僧となりましたが、このように死を恐れても、功績があるのでしょうか。

長國姑（唱う）

【幺篇】

“お前は楊和尚が天陣を破る時にしくじったと言い

銅臺を救ったのはそもそも誰のおかげかを言わぬ

彼ら兄弟は戦場で懸命に戦い、鋭い刀で功績を得た

ど、ど、どうして彼を刑場のこの結構な宴席に行かせるのか”

王樞密 事ここに至っては、あやつを恐れることはない。私は東庁樞密使なのだから、あやつも私に逆らおうとはしまい。国姑様、楊景が犯した罪は、「一人の謀反で、九族皆殺し」というものです。国姑様、あなたがあの罪人を救おうとなさるとは、よもや法をご存知ないわけではありますまい。

長國姑 私の二人の息子達は、かつて功があり、今罪があるのですから、功で罪を差し引くべきです。王樞密よ、国姑である私の顔に免じて、二人の息子達を許してくれぬか。

王樞密 この国姑ときたらなんと偉そうな。私が人を殺そうとしているのに、国姑の顔を立てるなら、私の顔なんか犬に食わせてやるわい。

長國姑 お前は誰を罵っている。許すなら許す、許さないならそれまでなのに、お前はどうして私を罵るのです。

王樞密 私はこれでも東庁樞密使ですぞ。

長國姑 お前が東庁樞密使ならば、思うにお前がかつて志を遂げずにいた時、墨壺を掲げながら詩を売って上訴書を書いていた、あの時も東庁樞密使だったのですか。

王樞密 この国姑ときたら、大目に見ていればますますつけあがり、私が志を遂げずにいた時に墨壺を掲げながら詩を売って上訴書を書いていたと言うが、あなたの先祖はかつて志を遂げずにいた時、関西五路をさまよい、首を延ばして傘を売る車を引いていたでしょう。

長國姑 こやつめなんと無礼な。(唱う)

【鬼三臺】

“民衆達よ聞きなさい

王樞密というこの奸賊は

私と言い争い

あのように上下も、尊卑もなくさせた

私は今からお前に問う

お前が皇族を罵った罪はどのようなものか”

王樞密 私が婆さん一人を罵ったところで、何の罪にもなりません。

長國姑 (唱う)

“お前は朝廷の法を司りながら知らないのか

「他人を責めれば、先に自分が負ける」というではないか”

王樞密 私は東庁樞密使なのに、あなたこそ大臣を罵るべきではないでしょう。

長國姑 罵ろうぞ、罵ろうぞ。(唱う)

【調笑令】

“お前が言うには

樞密を罵ってはならないとのことだが

私はお前を姓を改め名を変えたごろつきと罵ろう

蕭太后はお前を間者として

何年間帝を堂々とだましていたのか”

私がお前のことを知らないと思うのか。(唱う)

“あの賀驢兒という幼名であったのがお前であろう”

王樞密 どこに賀驢兒などいます。私は王欽若だ。

長國姑 黙れ。あちらでは賀を姓とし、こちらでは王を姓としておろう。(唱う)

“山河を変えるのは容易くても

本当の姓は変え難いというではないか”

この悪党め我が家が聖旨を奉じていることを知らぬか。ちらりとでも見れば眼をえぐり、

少しでも指させば手首を切ってくれよう。(唱う)

【雪裏梅】

“眼をえぐって咎め立て

手足を切ってこらしめる”

我が屋敷の従者はどこにいる。(唱う)

“そなたは長い首枷をねじ開け、六郎を助け起こすのだ

急ぎ傍仕えの者を呼べ”

(楊景と焦贊を放ち、王樞密が捕らえようとするが、長國姑が打つしぐさをする)

楊六郎 母上そやつを殴ってはいけません。恐らくまずいことになるでしょう。

長國姑 (唱う)

【禿廝兒】

“このようにしなければどうしてそなたを救えよう

打ち殺さなければ忠義実直であるとはいえない

私がこの度手を下したのは遅かったぐらいだ

私はこやつを引っ張って

宮中へ入り帝にまみえに行こう”

王樞密 私は東庁樞密使で、国家の大臣だというのに、お前は私をどうしようというのか。

長國姑（唱う）

【聖藥王】

“たとえお前に権勢があり

地位があっても

所詮は我が朝廷に仕える召し使いではないか

私は決してお前を恐れはしない

恐れはしないぞ

私が皇族の子孫であることは疑いない

さあさあさあ、お前と戦ってやろう”

王樞密 私はお前のような国姑は知らぬ。お前のところの先帝は目の目を見ずにいた時、番傘を売って関西五路を転々としていたのだから、それほど多くの親戚はいないだろうに、今やこちらも親戚、あちらも親戚だ。お前の姓は柴で、帝の姓は趙なのに、出鱈目おばさんか偽物おばさんか、一体どんな親戚だ。

長國姑 こやつめ、よく聞け、私は太祖皇帝の妹、太宗皇帝の姉、眞宗皇帝の伯母、柴駙馬の妻、杜太后の娘、柴世宗皇帝の嫁である。お前はこれでも私を知らぬか。（唱う）

【麻郎兒】

“我が柴家は遺児を託して帝位を譲り

我が趙家は禅譲を受けて即位した

これらは全て一門の親戚であり

縁遠い義理の関係とは違うのだ”

【幺篇】

“我が長兄は天地を開いて頂点に立ち

我が次兄は帝位を継ぎ天下太平とし

今上帝は我が同祖の甥

先帝は我が肉親の兄弟”

【慶元貞】

“私は元は深い宮中の内苑の帝の姫であり

今は壮麗な屋敷で重臣の妻となり

屋敷では輝く丹書鉄券を持っている

お前のような賊は知るまいが

誰もが知っておる

どうして私を出鱈目おばさんや偽物おばさんというのか”

王樞密 お前は楊六郎のために私を罵ってばかりいる。楊景は勝手に三関を離れ、焦贇はみだりに謝金吾一家十七人を殺したのだから、誅殺するべきなのに、お前はどのようにして刑場を荒らすのだ。私はお前を引っ立てて帝にまみえに行こう。

長國姑 さあ都の民衆達よ聞きなさい。こやつが刑場で私を罵ったのは良いとしても、ただ朝廷へ行ってこやつの靴を脱がせ、足の裏を見た時に「賀驢兒、寧ろ南朝に反すも、北番に背かず」という二行の丹砂の文字が刺青してあったならば、それでも私がこやつに濡れ衣を着せているとでも言うのでしょうか。(唱う)

【收尾】

“あやつの賀驢兒という幼名をどうして長らく隠しておくことができよう

現に足の裏には二行の丹砂の文字がある

明日になれば私は全て帝に上奏し、軽々しくお前を逃がすことはしない”(退場)

王樞密 ああ、楊六郎と焦贇の二人を殺して、根絶やしにしようとしたのに、国姑によって刑場を荒らされ、二人を逃がされてしまうとは思わなかった。こうなってはどうしたものか。先に帝へ上奏しに行き、国姑も我が手で葬り去る他あるまい。(詩をうたう)

“どうしたものかあばずれ婆

はばかりに刑場を荒らす

私はこれより帝にまみえて

先に手を下すのが良かろう”(退場)

〔注〕

○眼跳…まぶたがびくびくする。直後で「眼睛跳、晦氣到（まぶたがびくびくすると、不幸がやって来る）」が諺として用いられているように、しばしば凶事の予兆とされる。「陳州糶米」（元曲選本）第三折、小衙内の登場詩に「兩眼梭梭跳、必定晦氣到（両目のまぶたがびくびく動く、きっと凶事がやって来る）」とある。ただし、「合汗衫」（元曲選本）

第四折、陳虎の白に「怎麼那眼皮兒連不連的只是跳、也不知是跳財、是跳災（何やらまぶたがしきりにびくびくするが、金儲けの印か、それとも災難の印か）」、また「神奴兒」（元曲選本）第四折、王臘梅の白に「正在家中閒坐、這一會兒有些眼跳、不知有甚麼人來（家の中で静かに座っていると、少しまぶたがびくびくするが、誰かやって来るのであろうか）」とあるように、必ずしも凶事に限るわけではない。

- 君子報冤、且歇三年…成語のようであるが、基づくところは未詳。現在の「君子報仇、十年不晚（事を為すには忍耐が必要）」と同じか。
- 立不更名、坐不改姓…人を欺かない硬骨漢であると自分から言う場合、また逃げも隠れもしないと啖呵を切る時の言葉。「燕青博魚」（内府本）第四折や「硃砂擔」（内府本）第一折では「行不更名、坐不改姓」、「燕青博魚」（元曲選本）第二折では「三更不改名、四更不改姓」となっている。
- 一不做、二不休…やらぬならそれまで、やるなら徹底的にやるということ。毒を食らわば皿まで。「救風塵」（古名家本）第二折【雙鴈兒】にも見える。また「薛仁貴」（元刊本）第二折【後庭花】「割捨了一不做二不該、孩兒你也忒千自由百自在（毒を食らわば皿までととことんやってきた、息子よお前はまことに自分勝手）」の「一不做二不該」も同種の表現であろう。
- 馬到旗開…迅速に勝利を収めたり、効果を上げたりすること。「馬到成功」「旗開得勝」とも。「黄眉翁」（内府本）第四折、岳勝の登場詩に「安邦定國扶王業、馬到旗開顯姓名（国を安定させて帝の事業をお助けし、迅速に勝利を得て名を明らかにする）」とあり、「薛仁貴」（元曲選本）楔子、薛仁貴の白に「若在兩陣之間、怕不馬到成功（両軍の間にいたならば、速やかに功を上げずにおれようか）」とある。
- 領袖…ある人や物の中で突出していること。將軍。親分。「單刀會」（元刊本）第二折【滾繡毬】「黄漢昇勇似彪、趙子龍膽如斗、馬孟起是殺人的領袖（黄漢昇は彪のように勇ましく、趙子龍は升ほど大きい肝っ玉、馬孟起は殺しの親分）」。
- 上馬管軍、下馬管民…一人で文武両方の官を兼ねる。『水滸傳』第十二回にも見える。
- 驢頭…「驢」は罵語にしばしば用いられる。『董解元西廂記諸宮調』卷四【繡帶兒】「不良的賤婢好難容、要砍了項上驢頭（けしからぬ下女め許せぬ、ぼんくら頭を斬ってやる)」。
- 恨小非君子、無毒不丈夫…細かいことを恨むのは君子ではない、悪どいところがなければ真の男とはいえない。「趙氏孤兒」（元刊本）第四折【二煞】や『水滸傳』第百回などにも見える。

- 監斬官…死刑の執行を監視する官。
- 午時三刻…処刑を行う時刻。「替殺妻」(元刊本) 第四折【折桂林】「半霎兒午時三刻、弟兄子母別離 (たちまち処刑の時刻となり、親子兄弟は離ればなれ)」。
- 雑當…端役。下僕役。
- 赴法…伏法とも。法に伏して刑を受ける。死刑に処せられる。「竇娥冤」(古名家本) 第三折【叨叨令】「你道我當刑赴法場何親眷 (処刑される私に何の親族もあるものか)」。
- 撲簌簌…涙が多く流れるさま。「西蜀夢」(元刊本) 第一折【混江龍】「撲簌簌痛淚常淹袞龍衣 (はらはらと悲しみの涙はいつも龍の模様の衣服を濡らす)」。
- 扒推…涙が途切れずに流れるさま。「杷推」「爬推」にも作る。「謝天香」(古名家本) 第三折【醉太平】「不由我淚雨似扒推 (図らずも涙が次々と流れる)」。
- 長休飯・永別酒…死刑執行の前に与える食事と酒。「金鳳釵」(于小穀本) 第四折【川撥棹】「腦背後立着劊子、長休飯抄了幾匙、永別酒飲了一卮 (背後に首斬り役人が立ち、長休飯を数さじすくい、永別酒を一杯飲む)」。
- 削髮爲僧…楊業の五男で楊景の兄である楊五郎が出家しているという設定は、雑劇「昊天塔」や小説などでも見られる。
- 楊和尚破天陣喫了些虧…『楊家府』第五卷第四則において、楊五郎が遼の天門陣の一つである迷魂陣を攻めるが、一度目は妖術にかかって失敗する。
- 救銅臺…『楊家府』第四卷第三則「六郎興兵救駕」において、楊六郎は魏府(河北省大名県)の銅臺で遼軍に包囲されていた眞宗を救い出す。また、雑劇「破天陣」では、国境の銅臺城で遼軍に包囲された寇準を楊六郎が救いに行き、顔洞賓が布いた天陣を破る。ただし楊五郎はどちらにも参加していない。
- 雲陽…陝西省淳化県。秦の李斯が韓非を雲陽で殺させ、始皇帝の死後に趙高に陥れられて咸陽(陝西省咸陽市)で腰斬されたことから、刑場のことを雲陽と呼ぶ。「三奪槩」(元完本) 第一折【油葫蘆】「今日太平也都指望請官賞、劃地胡羅惹斬在雲陽 (今や太平となって誰もが恩賞を望むところへ、突然刑場で斬られるはめになるとは)」。
- 一人造反、九族遭誅…一人が謀反すると九族まで罪が及び処刑される。『水滸傳』(容與堂本) 第六十二回では「一人造反、九族全誅」の形で見える。「趙氏孤兒」(元刊本) 第四折【幺篇】に「既那廝背着一人、便合交滅了九族 (あの者一人が背いたからには、九族を滅ぼしてやろう)」とあるのも同種の表現か。
- 賣詩寫狀…『楊家府』第二卷第一則において、楊令公の戦死後、密かに汴京に戻った楊

六郎が憤りからふと詩を歌うと、遼から来たばかりの王欽が詩で応え、楊六郎から事情を聞いて潘仁美らを訴える上訴書を書いてやるという場面がある。

○遊關西五路…雑劇「趙匡義智娶符金錠」（息機子本）楔子の趙匡義の白に「有俺哥哥領衆弟兄每去關西五路操練去了（我が兄は兄弟衆を引き連れて關西五路へ武者修行をしに行った）」とあり、また雑劇「宋太祖龍虎風雲會」（古名家本）第一折の趙匡胤の白に「遊歷關陝、結識天下知名之士（関西と陝西を渡り歩き、天下の名だたる士を知り合った）」とある。

○拽傘車兒…『舊五代史』卷一一九「周書十・世宗本紀六」に『五代史補』を引いて、「世宗在民間、嘗與鄴中大商頡跂氏、忘其名、往江陵販賣茶貨（世宗が民間にいた頃、鄴の大商人である頡跂氏〔名は忘れた〕と共に、江陵へ茶貨を売りに行ったことがあった）」とある。また『飛龍全傳』においては、柴榮は傘売りの車を引いて登場する。

○山河易改、本姓難移…「山河易改、本性難移（山河は改められても、生まれつきの性格は改め難い。三つ子の魂百まで）」とかけている。「焚兒救母」（元刊本）第三折【鬪鶴鶻】に「貪財的本性難移、作惡的山河易改（財を貪る性格は改め難い、悪事を行う者はよく居場所を変える）」とあるのもそれを踏まえたものか。

○天潢支派…「天潢」とは天の河のことであり、皇族の子孫を天の河が分かれることになぞらえる。『桃花扇』第十六出【本序】「貌似神宗、嫡派天潢（お顔は神宗に似て、嫡流の皇族）」。

○駙馬…皇帝の娘婿。魏晉以後、公主（皇帝の娘）の夫を駙馬都尉の官に任じたことからいう。

○杜太后…定州安喜（河北省定州市）の人（九〇二～九六一）。杜爽の娘。趙弘殷に嫁ぎ、趙匡胤や趙匡義らを産む。後周の顯徳年間（九五四～九六〇）に南陽郡夫人に封ぜられ、太祖が即位すると皇太后となる。

○柴世宗…後周の世宗、柴榮（九二一～九五九）のこと。邢州龍岡（河北省邢台県）の人。柴守礼の子。太祖郭威に才を認められて養子となる。顯徳元年（九五四）、太祖の遺言により即位。積極的に外征を行った他、殿前軍の整備、租税の軽減、仏教弾圧などを行う。死後、子の柴宗訓が幼かったことから趙匡胤が帝位を継ぐ。

○重山…幾重にも重なる山々。「望江亭」（息機子本）第一折【賺煞尾】「試看那碧雲梯兩岸、端的他比輕舟已過萬重山（見れば青雲は兩岸にかかり、それにひきかえ小さい舟はもう幾つもの山々を通り過ぎた)」。ここでは遠いことの喩え。

- 瓊樓…月中の宮殿。豪華な邸宅を例える。「伊尹耕莘」(内府本) 楔子、東華仙の登場詩に「玉闕光輝滿太玄、瓊樓霞彩自幽然(宮城は光り輝いて道を満たし、邸宅は朝焼けに彩られて静かである)」とある。
- 合該…定められている。当然～するべき。「隔江鬪智」(元曲選本) 第四折【碧玉簫】「這也是天數合該(これもまた天命の定め)」。
- 結紐…引っ立てる。「結扭」にも作る。『水滸傳』(容與堂本) 第二十一回、唐牛兒の白に「老賊蟲你做甚麼結紐住押司(婆あどうして押司さんを引っ立てるんだ)」とあり、「灰闌記」(元曲選本) 第一折、馬員外の妻の白に「則今日我封鎖了房門、結扭了海棠告狀去走一遭(今から家の入り口を閉じ、海棠を引っ立てて訴えに一つ行こう)」とある。
- 粧誣…讒言によって人を陥れること。濡れ衣を着せる。「臧誣」にも作る。「神奴兒」(元曲選本) 第三折【十二月】「這公事憑誰做主、都是他二嫂粧誣(この裁判は誰が訴えたのか、全てあの嫁が濡れ衣を着せたもの)」。

第四折

殿頭官(武官を連れて登場) 私は殿頭官でございます。この度は楊景と焦贊が、勝手に三関を離れ、みだりに謝金吾を殺したので、帝は王樞密に二人の処刑を監視するよう命じられたが、一体どうして返事がないのであろうか。これお前、門の外で見張りをし、もし来たなら私に知らせよ。

王樞密(登場) 私は王樞密でございます。帝の命を奉じ、自ら監斬官となり、刑場を設け、あの楊景と焦贊の二人を殺そうとした。しかし凶らずも長國姑に刑場を荒らされた。私は今やもう隠すことはせず、帝にまみえに行ってこの事を上奏しよう。早くも門の中に着いたわい。(まみえるしぐさをする) 閣下どうかお情けを、長國姑がひどく私を虐げました。彼女はまた刑場を荒らし、聖旨を破りましたので、閣下どうか私のために上奏をお取り次ぎ下さい。

殿頭官 それならば、私はすぐにそなたのために取り次いで帝のお耳に入れるとしよう。心配はいらぬ。

長國姑(楊景・焦贊と共に登場) こやつはまことに無礼である。(唱う)

【雙調・新水令】

“我こそは眞宗皇帝の年老いた伯母

この賊は誰の前でうろちょろとしておる
皇族を中傷して、大将を陥れたのか
私はお前と共に朝廷を直接尋ね
何でも言いたいことを言ってやろう”

(楊景・焦贊と共にまみえるしぐさをする)

殿頭官 長國姑様、どうして王樞密を殴られたのです。無礼ではありませんか。

長國姑 閣下、私の話をお聞き下さい。

殿頭官 お話しになるなら聞きましょう。

長國姑 (唱う)

【甜水令】

“見ればあの息子達はわいわい、がやがやとした、刑場で取り囲まれていた”

殿頭官 刑場へなどあなたが行くべきではないではありませんか。

長國姑 私は彼らの義母であるのに、どうして一碗の長休飯、一杯の永別酒も与えてはならないのですか。(唱う)

“私は切っても切れない親密な親族であるので

胸いっぱい悲しみの心に耐え

少しでも悲しみの涙を流すのを忍び、一言哀願の言葉を添えて

たいそうへりくだる”

殿頭官 長國姑様、あなたは婿のために、このように平身低頭なさっていますが、王樞密はどうだったのですか。

長國姑 (唱う)

【折桂令】

“あの王樞密は意気揚々と胸を張り

いばりくさって官職を笠に着ている

あやつが言うには我ら両家は連座し

一人の謀反で、九族皆殺しとのこと”

閣下、あの王樞密は私を罵ったのです。

殿頭官 あなたは長國姑ですのに、彼はどのように罵ったのですか。

長國姑 あやつは我が先帝がかつて関西五路をさまよい、首を延ばして傘を売る車を引いていたと罵りました。(唱う)

“不届きにもあやつは我が先帝と先祖が
かつて馬を引き車を押していたと罵った
あやつが親疏を区別せず
賢愚をわきまえず
全ての忠臣を殺したのは、帝を非難したにも等しいこと”

殿頭官 楊景が管轄の地をみだりに離れ、勝手に三関を離れ、焦贇が謝金吾一家十七人を
殺したのは、全て彼らが自ら罪を犯したのであり、王樞密が彼らを陥れたのではありません。

長國姑（唱う）

【喬牌兒】

“不届きにも辺境の関を離れて帝都に来たとはいえ
不届きにも謝家の十七人をたちまち殺したとはいえ
我が帝はどうして功勞簿をご覧にならないのか
天も許さぬ大罪があろうとも償えるはずである”

殿頭官 長國姑様、功で罪を差し引くのはもっともですが、惜しいことに来られるのが遅
かった。王樞密は先に帝に上奏し、あなたが刑場を荒らし、詔書を破り、大臣を殴って
辱めたと言ったため、帝は大いにお怒りです。

長國姑（唱う）

【水仙子】

“ああ、あやつは私が刑場を荒らして勝手に囚人を逃がしたと言
また私が皇族であることを頼みにして詔書を破ったと言
また私が大臣を殴ったと言って帝を怒らせた”

殿頭官 長國姑様、無駄骨でございました。楊景と焦贇はやはり死罪を免れないでしょう。

長國姑（唱う）

“冤罪を訴えようにもどこへすればいいのやら
無実の者を酷い目に遭わせているではないか
息子の命が許されないからには、私も何の面目あつて国姑と名乗ろうか
この白髪頭をお贈りしよう”

（頭を打ちつけるしぐさをする）

殿頭官 待て待て待て、私があなたのためにもう一度帝に上奏をしますから、このような

命に関わることはお止め下さい。

孟良（蕃兵を捕らえて登場）私は孟良である。早くも門の外に着いたわい。これお前、緊急の軍事情況があり、孟良がやって来たと、お知らせしてくれ。

武官（知らせるしぐさをする）はっ、閣下にお知らせします、孟良どのが門の外に来られました。

殿頭官 通してやれ。

武官 お入り下さい。

孟良（まみえるしぐさをする）閣下にお知らせします。この孟良が一人の蕃兵を捕らえまして、こやつは韓延壽の間者で、一通の手紙をことづかり王樞密に送ろうとしていたと申しますので、私はこやつを護送して帝にまみえ、朝廷で取り調べをして頂きたいと思っております。どうか閣下にはすぐにお取り次ぎ下さいますよう。

殿頭官 そやつを連れて参れ。

蕃兵（まみえてひざまずくしぐさをする）私は韓延壽に遣わされた者で、王樞密に会いに来ました。

殿頭官 それならば王樞密に反逆の心があるのは明らかである。これお前、王樞密を捕らえよ。

武官（王樞密を捕らえて調べるしぐさをし、知らせる）左足の裏には確かに「賀驢兒」の三文字があります。

長國姑 閣下、あなたは先程言われませんでしたか。

殿頭官 私が何と言いましたか。

長國姑（唱う）

【側磚兒】

“あなたは私が訳もなく人を、人を辱めたと言われたが
この事件はたちまち真偽が明らかになったではないか
瓦を投げれば必ず落ちる場所があるもの
私皇姑がみだりに人を陥れたわけではない”

【竹枝歌】

“あなたはあやつが長い間朝廷にいて一度も背いたことはないと言い
あなたは私がむやみにあやつを証拠もなしに蕃臣と指摘したと言ったが
一体どうしてその文書を探し出さなかったのか

反逆したのは王樞密、間者であったのは謝金吾

これら二人の悪党は

今から天の罰を受けるべき”

殿頭官 帝の命を受けたので、長國姑以下全ての者は皇居に向ってひざまずき、私の裁きを聞かれよ。(詞をうたう)

“この一件は長らく晴らされることのなかった冤罪だが

今日になってようやく明らかにすることができた

謝金吾は帝の言葉を偽って伝え

密かに元勳をねたんだ

清風楼は三代の帝の勅命で建てられたものなのに

取り壊して一面の灰塵とした

更に訳もなく凶行を働いてほしいままにし

余太君を転ばせて傷つけた

東序樞密を頼みとしていたが

あやつは元々国に背く奸臣

謀反の書状はたちまち露顕し

十年間金印紫綬を帯びて出世したのも無駄になった

木驢に乗せて一寸刻みの刑に処し

法が公正であることを明らかにしよう

楊六郎の一門は忠孝を尽くし

焦光贄の俠気は群を抜くもの

いずれも我が朝廷の名将であり

官位を加えて良馬を贈ろう

長國姑は邪悪な害を除き

忠臣と要所の関を守った

こちらも論功を行い食邑を加増し

皇室と共に永遠に栄えさせよう”

(大勢が恩徳に感謝するしぐさをする)

長國姑 (唱う)

【清江引】

“ありがたくも今の優れた帝のおかげで
奸臣の害を受けずに済んだ
清風楼を再建させ、楊六郎に元通り三関を鎮守させ
宋の山河を永遠に助けさせよう”（共に退場）

題目 楊六郎、私かに瓦橋関より下り

正名 謝金吾、詐りて清風府を拆く

〔注〕

- 青蒲…「麗春堂」（古名家本）第三折【紫花兒序】「遶一灘紅蓼、過兩岸青蒲（早瀬の赤いタデを巡り、兩岸の青いガマを通り過ぎる）」のように、本来は青いガマのことであるが、それをを用いて作った天子用の敷物、転じて天子の内庭のことをいう。
- 簇捧…取り囲む。集まる。「單刀會」（元刊本）第一折【金盞兒】「五百个爪關西簇捧定个活神道（關西の荒くれ者五百人が生き神様を取り囲む）」。
- 伏低做小…平身低頭する、卑下する、へりくだるの意。「三奪槩」（元刊本）第二折【鬪蝦蟆】「怎肯伏低做小、倚強壓弱（どうしてへりくだったり、強きを頼んで弱きを挫いたりしましょうか）」。
- 納膀…見栄を張る。いばる。「李逵負荊」（元曲選本）第三折【逍遙樂】「當不的他納膀擲腰（あの者がいばるのには我慢できぬ）」。
- 彌天罪…極悪非道の大罪。天日ともに許さざる大罪。「西廂記」（弘治本）卷二楔子【賞花時】「他彌天罪有百千般（あやつの天にもみなざる数々の大罪）」。
- 撇起個瓦兒在半空裏怎住…瓦を投げれば空中に留まることはできずに、必ずどこかに落ちる。物事には必ず帰着するところがある。「魔合羅」（元刊本）第四折【鮑老兒】「你暢好會使拖刀計、漾個瓦兒在空虛裡怎住的（お前がまさしく罌を仕掛けたことは、瓦を投げたら必ず落ちるように決まり切ったこと）」。
- 背地裏…密かに、こっそりと。「背地」ともいう。『朱子語類』卷一〇六に「今爲人父母在不異財、卻背地去典賣、後來卻昏頼人（今のたたるものは父母の生きている内に財産分けをしないことになっているのに、密かに質入れしたり売ったりして、後で人をだまそうとする）」とある。
- 金紫…金印紫綬。黄金の印と紫色の紐。高貴な身分を指す。『大宋宣和遺事』利集に「其

門下左右列金紫貴人、或緑或褐、或傘或笠、或騎或車、約有數百人、皆稱萬歳（その門の左右には金紫の貴人が、緑衣の者や褐衣の者、差し傘の者やかぶり笠の者、馬上の者や車上の者など、数百人が並び、皆で万歳を唱えた）」とある。

○木驢…罪人を死刑にする前に引き回す時に乗せる、驢馬の形に作った車輪付きの木製の道具。「趙氏孤兒」（元刊本）第四折【十二月】「着那廝騎着木驢、副那廝身軀（あやつを木驢に乗せ、その身を切り刻む）」。

○服色…官員の階級に応じた官服の様式。劉致【端正好】套「上高監司」其二【八】「服色例休題取（服色規定のことなど気にしない）」。

○麒麟…麒麟は一日に千里を駆けることから良馬のことをいう。杜甫の「驄馬行」に「近聞下詔喧都邑、肯使麒麟地上行（近頃聞くところでは詔が下されて都も村も騒がしいが、麒麟のような良馬に地上を歩かせるというのか）」とある。

黄眉翁賜福上延年

頭折（第一折）

〔訳〕

楊景（沖末が楊景に扮し兵士を連れて登場）

“力の限り忠義を尽くして宋朝を守り
名声は世に広まり辺境の遼を鎮める
出陣して激しく戦うこと三千回
勞せずして三関を守り旺盛な気が高まる”

私は姓を楊、名を景、字を彦朗と申します。本籍は河東の者で、祖父は火山令公の楊滾。父親は金刀の楊繼業。母親は余太君で、我ら七人の兄弟を生み、平、定、光、輝、昭、朗、嗣という。大宋をお助けしてよりこのかた、汗馬の勞を重ねている。今では帝はありがたいかも、私を六使招討太原侯天下兵馬大元帥の職に封じて下さっている。私は太公望の機知に深く通じ、黄石公の兵法をよく理解しており、国を安んじ世を救う功と、天地を補う手腕を持っている。陣の前には二十四人の将軍が居並び、岳勝、焦贊、孟良、張蓋、楊清、奈欽、關津、關伯、劉朝、解用、姜廉、孟得（徳）、封廣、封海、黨千、黨萬、岳弘、焦順、陳林、柴敢、郎千、郎萬、金龍、金虎という。誰もがよく戦い、それぞれ武勇を奮う。帝の命により、私は瓦橋関などの三関を鎮守し、辺境の一帶を守っている。東京では母上が屋敷にいるが、ここ数年会っていない。母上の誕生日が近付いているので、私は今から東京へ行き、母上のお祝いに、一つ行きたいと思うのだが、どうして勝手に任地を離れることが出来よう。皆がやって来たら、相談するでしょう。お前達は轅門の前で見張りをし、もし諸将がやって来たならば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

（岳勝・焦贊・張蓋・關津が登場）

岳勝

“鉄の鎧は輝き陣羽織は新しく
兜の飾りは火のように赤く煙と塵を起こす
乗馬は北海の凶暴な獣のようで
槍は南山の大蛇が一呑みするよう”

私は岳勝でございます。これら三名の將軍は焦贊、張蓋、關津で、我らは楊元帥配下の二十四指揮使である。我らは勇ましくて無敵なので、これまで出陣し、何度も遼の兵と交戦したが、矢羽を当てられたことすらない。この度は元帥が軍議を開くので、陣の中へ一つ行かなければ。

焦贊 岳勝よ、思うに我ら諸將が、三関において、度々戦い、勝利を収めなかったことがないのは、全て元帥のお力だ。この度は元帥が軍議を開くので、陣の中へ一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、岳勝ら四人がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、岳勝どのら四名が来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(四將がまみえるしぐさをする)

楊景 岳勝よ、お前達四人が来たか。ひとまずそこにおれ。

(關伯・劉朝・解用・楊清が登場)

關伯

“敵と対峙しては武芸の強さを頼みとし
出陣しては馬に跨り勇敢に先陣を切る
遼兵を殺して名を聞くだけで恐れさせ
長らく辺境の関を守り名を称えられる”

私は關伯でございます。これら三名の將軍は、劉朝、解用、楊清で、我らは楊元帥配下の二十四指揮使である。元帥の配下でお助けし、汗馬の労を重ね、三関にて功を重ねた。この度は元帥が軍議を開くので、元帥にお会いしに一つ行かなければ。

劉朝 關伯よ、我ら二十四指揮使は、皆英傑の士であり、元帥は兵法が神の如く優れているので、遼兵に何ができようか。早くも轅門の前に着いたわい。これお前、關伯、劉朝、解用、楊清がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、關伯どのら四名が来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(四將がまみえるしぐさをする)

楊景 關伯よ、お前達四人が来たか。ひとまずそこにおれ。

(孟徳・封海・姜廉・岳弘が登場)

孟徳

“鎧は九秋の霜のような薄絹を掛け

上着は十種の錦を飾り立てる

弓は北海から出たばかりの月のように曲がり

矢は遙かな天にある幾つかの星を貫く”

私は孟徳でございます。これら三名の將軍は、封海、姜廉、岳弘。我ら諸將は、長らく三関を鎮守し、遼兵を討ち取り、度々功を挙げてきた。この度は元帥が軍議を開くので、一つ行かなければ。

封海 孟徳よ、思えば我らは、遼兵を殺し、皆大功を挙げ、今やご恩を蒙って、指揮使の職となっている。話をしている間に、早くも着いたわい。これお前、孟徳ら四人がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、孟徳どのら四名が来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(四將がまみえるしぐさをする)

楊景 孟徳よ、お前達四人が来たか。ひとまずそこにおれ。

(黨萬・黨千・焦順・奈欽が登場)

黨萬

“策略を巡らして勝利を決することに心を費やし

戦いにおいては軍略を頼みとする

勇猛な敵將を生け捕ることは子供の遊びのよう

たちまち蕃兵を斬り勝利を収めて帰る”

私は黨萬でございます。これら三名の將軍は、黨千、焦順、奈欽。今や楊元帥は我ら諸將を率い、辺境を鎮守し、功績を挙げられることは、数えきれぬ。この度は元帥が軍議を開くとのことで、きっと何か相談事があるに違いない。我らは元帥に会いに向かうぞ。

早くも着いたわい。これお前、黨萬ら四人がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、黨萬ど

のら四名が来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(四将がまみえるしぐさをする)

楊景 黨萬よ、お前達四人が来たか。ひとまずそこにおれ。

(陳林・柴敢・郎千・郎萬が登場)

陳林

“長らく辺境を鎮守して功を立て
遼將を討ち取って官位を授かる
対峙して敵軍に向かって戦い
武勇を明らかにし国の恩に報いよう”

私は陳林でございます。これら三名の將軍は柴敢、郎千、郎萬。思えば我ら諸將は、多くの功を立ててきた。この度は元帥が軍議を開くので、陣の中へ一つ行かなければ。

柴敢 陳林よ、我ら諸將は三品の職を授けられたからには、どのようにして朝廷に報いようか。この度は元帥が軍議を開くので、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、陳林ら四人がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、陳林どのら四名が来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(四将がまみえるしぐさをする)

楊景 陳林よ、お前達四人が来たか。ひとまずそこにおれ。

(正末が孟良に扮し金龍・金虎・封廣と共に登場)

孟良 私は孟良でございます。これら三名の將軍は金龍、金虎、封廣。楊元帥の配下で將軍となってお助けして以来、度々大功を挙げ、遼兵を殺して国境を侵させない。この度は元帥が軍議を開くので、陣の中へ元帥にお会いしに、一つ行かなければ。

金龍 孟將軍よ、我ら諸將はこの三関で、多くの元帥のご恩を蒙ったが、どのようにして報いればよいのだろうか。

孟良 金龍よ、思うに元帥は仁義の人であるのに、どうして我らが報いることを望むだろうか。(唱う)

【仙呂・點絳脣】

“我らが元帥は仁義ある英傑にして
胸中では朝廷のことを思っておられる
将を用いることについて論じれば
智略にとても優れ
その中には奥深いものがある”

【混江龍】

“五陵の若者達を頼みとし
一堂に会し英雄の幕下に兵を並べる
我らはそれぞれ身は猛虎のようで、馬は奔放に駆け回るみずちのよう
出陣して兵を率いれば見事に対峙し、戦い慣れて勇猛さを誇示し
武器の扱いは実に素晴らしい
ご恩と広いお心を受けたからには
力を尽くして戦おう”

早くも着いたわい。これお前、孟良ら四人がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、孟良どのら四名が来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(正末が三将と共にまみえるしぐさをする)

楊景 孟良よ、お前達全員やって来たな。私は今から一つ、お前達に相談したいことがある。

孟良 元帥何事でしょうか。

楊景 孟良よ、お前は知るまいが、私はこの三関に来て以来、今や数年が過ぎたのに、まだ帰ったことがない。もうすぐ母上の誕生日なので、私は帝に上奏し、東京へ、母上のお祝いに、一つ行きたいと思うのだ。お前達諸将の意見はどうだ。

孟良 元帥、もし母上様の誕生日に、東京へ行って母上様にお会いするのでしたら、まず使者を出して帝へ上奏させ、それから元帥が三関を離れるべきです。そうしなければ、勝手に任地を離れることになりましょう。(唱う)

【油葫蘆】

“今屋敷におられる母上様はご高齢

将軍あなたは年長者を敬うべき”

楊景 将軍達よ、思うに私は人の子として、孝を以て父母を敬うべきなのに、いかんせん
遼兵は度々国境を侵し、何度戦っても収まらない。

孟良（唱う）

“この三関を鎮守して功を示しているために”

楊景 弟よ、私は今や忠は尽くせても孝は尽くせないのか。

孟良（唱う）

“あなたは家や国のために忠孝を行っているが

悲しくも父母の恩には報い難いことを忘れてしまった”

楊景 孟良よ、私は今や昼も夜も母上のことを思っているのに、まだ会うことができずに
いる。母上の誕生日が近付いているが、帝に上奏すれば、家に帰ることができるのでは
ないか。

孟良（唱う）

“将軍あなたは昼も夜も、朝な夕な思っておられるが

この軍事情況が厳しいことによってかなえ難い”

楊景 私は将軍として、辺境を鎮守し、勝手に任地を離れはしない。一体どうすれば家に
帰って母上に会うことができるのだろうか。

孟良（唱う）

“あなたは帝に申し上げるべき”

楊景 将軍達よ、私はこれから帝に上奏するが、許されるか許されないかわからないし、
もし規則に反していたら、どうしたものか。

孟良（唱う）

【天下樂】

“あなたはどのようにどうすれば良いかあれこれ考えているが

ここでお考えになれば、我らも検討しましょう”

楊景 私が一通の上奏文を書き、使者に汴京へ行かせ、帝に上奏させよう。もし許された
ならば、家に帰って母上を訪ねるとしよう。

孟良（唱う）

“もし帝の恩があって許されたならば

母上様の恩に報い、きっとこの忠孝が明らかになる

辺境で戦いが起こらないようにしたいものだ”

岳勝 お、お、お待ちを、元帥のこの一件は、よく相談しなければならないこと。あなたが東京へ行けば、いかんせん王樞密は元帥と仲が悪く、嫉妬深い性格なので、元帥を陥れるのではないのでしょうか。

孟良 岳勝、お前さんの言う通りだ。「君子は悪人に用心する」というもの。王樞密は腹黒いやつ、妬まれたらどうしたものか。(唱う)

【那吒令】

“どうか將軍には心中で考え、よく検討なされますよう

どうか將軍にはしばし待たれ、英雄を遣いに出されますよう

王樞密は腹黒く、將軍を陥れるはず”

楊景 弟よ、いかんせん我が宋朝は王樞密を宰相にしている。私が今から母上のお祝いに行けば、奸賊が我ら忠良を損なうのではないだろうか。

孟良 (唱う)

“あの奸賊は嫉妬深いので忠良を損なうでしょう”

楊景 私は度量が大きいといっても、あやつほどの悪智恵はない。

孟良 (唱う)

“あなたは人付き合いは良いのですが”

焦贊 元帥がこの度、母上様のお祝いに行くことについては、よく相談しなければなりません。

孟良 (唱う)

【鵲踏枝】

“どうか將軍にはお焦りにならぬよう

よく検討しなければ

母上様のために手厚くするとはいえ、孝行を行うのは苦勞するもの”

楊景 弟よ、「孝行には力を尽くせ」と言うではないか。よく敬って孝行に違ふことの無いようにしよう。

孟良 (唱う)

“人の根本は忠誠を尽くして親に仕えること

謀略を恐れ疑う必要はない”

楊景 お前達の言う通りだ。今の朝廷内では、八大王様が私の主君となっている。王樞密は悪賢いとはいえ、八大王様の威を恐れるはず。決して私に危害を加えないだろう。

孟良 元帥、王樞密が八大王様のお名前を聞けば、あやつの魂は、驚いてどこかへ飛んで行ってしまおうでしょう。

楊景 弟よ、もし我が宋朝に、金簡を持ってよこしまな心を打ち砕き、忠義を持って帝をお助けする八大王様がいなかったならば、我ら楊家やお前達は、全く頼れる方がいないところであった。

孟良 (唱う)

【寄生草】

“我が大王様は威厳に満ち、力を尽くして忠臣を守る
あの黄金の簡に抗うことはできず
奸臣は見れば慌て
打たれた瞬間に首が飛ぶ
我が元帥は力を尽くして孝を行い朝廷に報いるが
禍に遭った時にはあの方を頼るのだ”

楊景 待て待て待て、孟將軍よ、この一件は全てお前の身にかかっている。お前は今から私に代わり東京へ行き、寇萊公様にお会いしたら、私が母上を思っているということ、帝に取り次いで頂くのだ。東京へ行ったら、また三関へ戻って来い。この件はお前が戻って来てから、私が東京へ行くということにしよう。

孟良 元帥よりこの孟良が東京へ行くよう命ぜられましたので、金龍、金虎、封廣と共に行きたいと思います。

楊景 金龍、金虎、封廣よ、お前達三名は孟良と共に、東京へ行くのだ。

金龍 孟將軍、元帥の命により、我ら三名はあなたと共に東京へ行きます。

孟良 (唱う)

【尾聲】

“荷物を整え東京へ行くのに、兵を連れて行く必要はない
出陣して戦うわけではないが
大将となって帝にまみえよう”

楊景 四人とも、お前達が行けば、すぐに母上の誕生日になるだろう。私は子として、苦労をかけた親の礼に報いたいのだ。

孟良（唱う）

“太君様がお年を召しているので
お祝いして親の恩を明らかにしたい
萊公様をお願いして帝へ上奏して頂き
元帥が瓦橋関を離れることを保証してもらおう”

楊景 お前が東京へ着いたならば、まず寇準様にお会いし、私の孝行をしたいという思いを、一通り訴えよ。

孟良（唱う）

“謹んで上書をささげ
母上様のご尊顔を拝見しよう
あなたがこの数年離れていた道は遥か遠い”（三将と共に退場）

岳勝 元帥、孟良、金龍、金虎、封廣が東京へ出発しました。

楊景 それでは、諸将は何事もないのであれば、ひとまず本陣へ戻れ。孟良が戻って来てから、また相談するでしょう。

焦贊 それでは、我らはひとまず陣へ戻ります。

“三関の將軍は長らく辺境に留まり
忠孝を尽くして国に報いることこの上ない
楊元帥は真心を持って宋をお助けし
母上様のために朝廷へ上奏する”（大勢が退場）

楊景 諸将はそれぞれの陣へ戻った。私も今は何事もないので、ひとまず陣の中へ戻るとしよう。

“母上の誕生日とご高齢を思い
朝廷に上奏する手配をした
命が下れば出発し
屋敷へ行ってご恩に報いよう”（退場）

〔注〕

○黄眉翁…伝説上の仙人。『太平廣記』卷六「東方朔」に、「朔以元封中、遊鴻濛之澤、忽遇母採桑於日海之濱。俄而有黄眉翁、指母以語朔曰、昔爲我妻、託形爲太白之精、今汝亦此星之精也。吾却食吞氣、已九十餘年。目中童子、皆有青光、能見幽隱之物。三千年

一返骨洗髓、二千年一剥皮伐毛。吾生來已三洗髓五伐毛矣（東方朔は元封中（前一〇～前一〇五）に、鴻濛澤に遊び、たまたま日海の濱で桑を採っている老女に出会った。すると眉毛の白い翁が突然現れ、老女を指さして東方朔に言った。『あれは昔の我が妻で、太白の精が形を変えたものであり、お前もその星の精なのだ。私は食事を取らずに気を呑むようにして、既に九十年以上になる。眼の中の瞳には、青い光があり、隠れている物を見ることができる。三千年に一度骨を裏返して髓を洗い、二千年に一度皮を剥いで毛を切っている。私は生まれてから既に三度髓を洗い五度毛を切った』と）」とあり、非常に長命な人物とされていたようである。

- 坐享…勞せずして厚遇や成果を受けること。「梧桐葉」（古名家本）第一折、梅香の白に「雖是坐享富貴、則夫婦分離、不知音耗（坐して富貴を享けてはいるが、夫婦は離ればなれとなり、消息が知れない）」とある。
- 上壽…（贈り物をして）誕生日を祝うこと。「村樂堂」（内府本）第一折、薊州防禦の白に「今日是同知相公生辰貴降之日、與他上壽、走一遭去（本日は知事の誕生日なので、お祝いをしに、一つ行くとしよう）」とある。
- 納襖…刺繍のある上着。「納襖」にも作る。『水滸傳』（容與堂本）第四十三回に「當時便取一領細青布納襖、就與李逵換了身上的血汚衣裳（そこですぐに青い上等の刺繍の上着を一枚取り出し、李逵の着ている血みどろの衣服と換えてやった）」とある。
- 彎犇…凶暴、勇猛な様。「彎奔」「頑奔」にも作る。「老君堂」（内府本）第三折、李靖の白に「六員將頓劍搖環、六匹馬踢跳彎奔（六人の將軍は劍を振り回し、六頭の馬は勇猛に飛び跳ねる）」とある。また、無名氏【罵玉郎過感皇恩採茶歌】の【採茶歌】に「得勝將馬頑奔（勝利を収めた將軍は雄々しく馬を走らせる）」とある。
- 運籌決勝…『史記』卷八「高祖本紀」にある劉邦が語った言葉、「夫運籌策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房（そもそも計略を陣中で巡らし、勝利を千里の外に決する点では、私は子房（張良）に及ばない）」に基づく。「運籌」は謀略を巡らせること。「襄陽會」（内府本）第三折【醉春風】「張子房運籌帷幄看兵書、將沛公扶立起、起（張子房は兵書を学んで陣中にて謀略を巡らせ、沛公が立ち上がるのを助けた）」。
- 廊廟…政務を執るところ。朝廷。『董解元西廂記諸宮調』卷四【鶻打兔】「俺父親、居廊廟、宰天下、存忠孝（我が父は、朝廷において、天下を治め、忠孝を行っていた）」。
- 五陵年少…五陵は長安郊外の地名であり、そこに住む豪侠な若者をいう。「追韓信」（元刊本）第三折【醉春風】「三省吾身、五陵年少、端的 一言難盡（何度も我が身を省みるに、

五陵の若者であり、経緯は一言では言い尽くせない)。

- 兵刀…兵士のこと。「單鞭奪槊」(元曲選本) 第四折、徐茂公の登場詩に「帥鼓銅鑼一兩敲、轅門裏外列兵刀(軍鼓と銅鑼を一二度敲き、轅門の内外に兵士を並べる)」とある。
- 君子防不仁…このままの用例は未見だが、『事林廣記』前集卷九「人事類下・警世格言・結交警語」に「莫信直中直、須防人不仁(馬鹿正直な人であっても信用してはならない、人は良からぬものと思って用心すべし)」とあり、「澗池會」(内府本) 第一折では「莫使直中直、提防人不仁」、『水滸傳』(容與堂本) 第四十五回では「莫信直中直、須防仁不仁」との形で見える。これらを踏まえるならば、君子は悪人に用心する、といった意味であろう。
- 孝當竭力…孝は當に力を竭くすべし。『千字文』の言葉。「貶夜郎」(元刊本) 第三折【玄篇】「他一身兒孝當竭力(あの者は全身これ『孝は當に力を竭くすべし』とやら)」。
- 克敬無違…『尚書』「商書・太甲下」に「惟天無親、克敬惟親(天は誰かこのみ親しむものではなく、慎み深い者に親しむものである)」とあるのに由来するか。
- 僂僂…「僂僂」が韻の関係で入れ替わったものであろう。疑わしく思う。おかしい。「黃鶴樓」(内府本) 第一折、劉封の白に「想周瑜請俺父親飲酒、你左攔右當、必有僂僂(思うに周瑜は父上を酒宴に招いているのに、そなたがあれこれ止めるのは、おかしいのではないか)」とある。
- 三魂七魄…道家における魂魄の総称。胎光・爽靈・幽精の三魂と、尸狗・伏矢・雀陰・吞賊・非毒・除穢・臭肺の七魄があるとす。「介子推」(元刊本) 第四折【紫花兒序】「煙驚了七魄、火唬了三魂(煙は七魄を恐れさせ、火は三魂を驚かせる)」。關漢卿【一枝花】套「不伏老」【尾】「三魂歸地府、七魄喪冥幽(三魂はあの世へ戻り、七魄は冥土へと消える)」。
- 料…敵対する。対抗する。『三国志平話』卷下、賈詡の白に「馬騰可料諸葛、馬超可料關公、馬岱可敵張飛(馬騰は諸葛亮に、馬超は關羽に、馬岱は張飛に匹敵します)」とある。
- 央浼…願ひする。「兩世姻緣」(古名家本) 第一折、韓玉簫の白に「倘若再三央浼呵(もし再三求められたならば)」とあり、「百花亭」(脈望館本) 第二折、賀憐憐の白に「王煥想是不知我在於何處、央浼小二哥通箇信與王郎(王煥どのは私がどこにいるかご存じないでしょうから、小二さんをお願いして知らせてもらいましょう)」とある。
- 劬勞…苦勞を重ねること。また特に親の恩を指す。「西蜀夢」(元刊本) 第四折【端正好】「枉劬勞、空生受(無駄に苦勞を重ね、難儀をした)」。「霍光鬼諫」(元刊本) 第三折【端

正好】「於家謾劬勞（家のために苦勞したのも無駄なこと）」。

第二折

〔訳〕

（外が寇萊公に扮し浄の扮する胥吏を連れて登場）

寇萊公

“ご恩と寵愛を受けて朝廷に列し
三公に任じられ姓を明らかに刻む
妻は封じられ子は陰徳を受けて栄え
胸中の国家の要を明らかにしよう”

私は姓を寇、名を準、字を平仲と申します。幼い頃より儒学を学び、古今の物事について広く知り、八歳で華山の詩を吟じ、後に一度で科挙に状円で及第した。策を決めて澶淵の盟を成した功を受けて、大名府の地を、長らく鎮守しているが何の憂いもない。私は北門の要地を司っている。私の行いは、外では奢侈であるが家では儉約に努め、寢床には青い帳が一つあるだけで、もう二十年過ごしてきた。私が奸臣に陥れられ、雷州（広東省雷州市）に流された時、偶々立ち寄った廟で、竹を一枝折り、廟の前に差し、神に向かって、もしこの寇準が朝廷に背いたのでなければ、この枯れた竹を生き返らせよ、と願った。後に果たしてその言葉通り、そこは竹林となっていた。帝はありがたくも、私を再び朝廷に登用し、萊国公の職に封じられた。今は楊郡馬という者が、帝の命を受け、三関の国境を鎮守している。王樞密と仲が悪いが、八大王様に目をかけて頂き、この方を主とあおいでいるので、王樞密は陥れることができずにいる。三関一帯を、もし楊郡馬が鎮守していなければ、東京の地は、遼の兵にひどく侵略されていただろう。私は朝廷から戻り、何事もなくのんびりと座っておる。これお前門の前で見張りをし、誰かやって来る者がいるか見てみよ。

胥吏 閣下、承知しました。眺めてみると、何者かがやって来るのが見えるぞ。

（正末の孟良が金龍・金虎・封廣と共に登場）

孟良 將軍達よ、我らは三関を出発し、東京城へ着いたが、通りの民衆を見るに、まことに豊かであるな。

金龍 孟將軍、民衆がこのように豊かなのは、全て帝の感化のおかげで、蚕や麦が収穫で

きるのです。

孟良 金龍よ、まさしく言う通りだ。(唱う)

【南呂・一枝花】

“空は晴れ雲も無く、夜明けの太陽の輝きが揺れるを見よ
家々では米や麦を積み、あちこちで余った穀物を蓄えている
景色は甚だ優れ
世の盛りに人々は楽しみ
やわらいだ政治のもとで仕事に励む
我が帝の徳は寛大で慈悲に富み、天地を覆う程の瑞祥を賜れるのを感じる”

【梁州】

“穀物は長年に渡り豊作で、稲田が多く実り国も民も安らか
賢い大臣と忠義ある将軍がおり
宰相となり、陰陽を調べ
忠義を行い清らかな政治をし、朝廷をお助けする
中庸を極めていたので全国から朝貢し
全国の国境を定め治める
今や醴泉から甘い水が湧き、麒麟が現れ仁獣が更に広く現れ
鳳凰が姿を現わしめでたい印をもたらす
夏の禹王や殷の湯王のような天子は
辺境に我ら英雄たる将軍をお置きになる
幾万年にも渡り国家の基礎は旺盛であり
天下の人民は天に祈り
堯帝の時代の光を斉しく喜ぶ”

東京城へ着いたわい。これが寇萊公様のお屋敷か。(胥吏にまみえるしぐさをする) 兄さん、こちらが寇萊公様のお屋敷かね。

胥吏 確かに寇閣下のお屋敷だ。お前はあの方に何か用でもあるのか。

孟良 我らは三関の楊六郎様の使いである。閣下にお会いしてお話したいことがあるので、お取り次ぎ願いたい。

胥吏 あんたは好漢の楊六どのの使いかね。知らせて来るので待っておれ。(知らせるしぐさをする) 閣下に申し上げます。門の前に三関の楊郡馬様の使いという四名の好漢がや

って来ており、閣下にお会いして、お話したいことがあるそうです。

寇萊公 楊郡馬の使いならば、通すがよい。

胥吏 かしこまりました。お通り下され。

(孟良が三将と共にまみえるしぐさをする)

孟良 閣下はどうかお座りになって、この孟良が四度拝礼するのをお受け下さい。

(諸将が拝礼するしぐさをする)

寇萊公 いやいや、將軍達よ礼は無用。道中ご苦勞であったのに、どうしてまた礼などするの。四名の將軍達の名は何という。この度はいかなる用件で来られたのか。

胥吏 (礼をするしぐさをする) 將軍達よ、私にならって拱手しておれ。

孟良 私は孟良で、これら三名の將軍達は金龍、金虎、封廣と申します。我ら四名は元帥の命を奉じており、余太君様の誕生日祝いのために、我ら四名に、閣下にお会いし、失礼ながらお願いするように命ぜられたのです。(唱う)

【隔尾】

“私は遠く辺境の砦から都へやって来て

じかに萊公様のご芳名を拝見した

我が郡馬は將軍を遣わし

母上様のために健康をお祝いしたいと

閣下に対し申し上げます”

寇萊公 他に何か用はないのか。

孟良 (唱う)

“ただこのお祝いをして懇ろに恩に報いたい”

胥吏 あの、楊郡馬どのの母親は誕生日ですが、私に言わせれば、閣下に彼の母親へハンカチを送らせようというのではありません。彼はまさしくお尻のそばの腿肉を切るというやつで、孝行なことあります。

寇萊公 孟將軍、楊郡馬がそなたをよこしたのは、私に帝へ、母君の誕生日祝いをすることを知らせてもらいたいのではないか。

孟良 閣下、我が元帥が我ら四名を来させたのは、閣下にお願ひがあるからなのです。どのように帝に上奏すれば、自ら三関を離れ、母上様の誕生日祝いをし、子としての心を尽くすことができるものか、閣下のお考えはいかがでしょう。(唱う)

【牧羊關】

“母の恩を思うこと深く、三関にて朝も夜も思い悩むのは
老萊子のように高堂で親を楽しませてやれないこと”

寇萊公 楊郡馬は三関にいるが、どうしておる。

孟良（唱う）

“毎日雪や霜の中で眠り
常に出陣して敵と戦う”

寇萊公 楊郡馬の名は、朝廷でも知れ渡っておる。

孟良（唱う）

“忠節を立てて歴史に名を刻み、朝廷で名声を上げる
帝の大恩を蒙ったのは、遠方で勇猛な軍を率いているため”

胥吏 あの、孟將軍は、楊郡馬が好漢であるというが、太行山を引き倒したことがあるのならば、好漢であるといえよう。

寇萊公 孟將軍よ、なんと楊郡馬は三関を離れ、母君の誕生日祝いをしたいので、私に帝へ上奏させ、孝子の情を尽くそうとしており、また王樞密が彼を陥れることを警戒している。このように、楊郡馬はまことに忠孝双方を備えておる。

孟良 我が元帥について申し上げますならば、家と国のために尽くし、本当に忠孝の両方を備えております。（唱う）

【罵玉郎】

“家と国のために尽くす忠良の將にして
まことに忠と孝の両方を備えている
家は三千丈の豪気を伝える
あの方が遠方を鎮守していることについて申すならば
砦や国境を安らかにし
まことに人望がある”

【感皇恩】

“ああ、あの方は朝も夜も思い悩んでおられる”

寇萊公 楊郡馬は一体どう思い悩んでいるのか。

孟良（唱う）

“あの方の年老いた母上様のために
朝夕の挨拶をしたり、体を気遣ったり、食事の世話をしたりできない

あの方が閣下をお願いすることは
あなた様に帝へ取り次いで頂き
しばらくの間辺境を離れ
汴京の王都へ入らせて頂きますよう”

寇萊公 そなたは戻ったら、楊郡馬に、私が明日になれば帝に上奏し、彼に三関を離れて、
母君の誕生日祝いをさせてやると伝えよ。

孟良（唱う）

【採茶歌】

“閣下には朝廷へ行き
帝にお目通りして
自ら心からのお言葉を上奏して頂きますよう
この思いは天を仰ぐのと同じく
ご恩は老いても忘れません”

寇萊公 孟將軍よ、そなた達四名はこれ以上ここに留まる必要はない。夜を徹して三関へ
向かい、楊郡馬に、私が帝に上奏し、すぐに三関から離れさせてやると伝えよ。何かあ
れば私が請け合おう。

孟良 それならば、金龍、金虎、封廣よ、我らは閣下とお別れをし、すぐに三関へ向かい、
元帥に知らせに戻るとしよう。（唱う）

【尾聲】

“心中の思いを始めから
三関の楊六郎のために訴える
都を訪れて母親に会わせてほしいと
忠良の志が盛んであることを明らかにし
まごころを公にする
これこそ古来の英雄達が奨めてきたこと”（共に退場）

寇萊公 私は明日になれば帝に上奏し、郡馬に自ら三関を離れて、母君の誕生日祝いをさ
せて、彼が忠孝の両方を備えていることを明らかにするのだ。

“楊郡馬は長らく辺境を鎮守し
彼の老母は高堂にいる
私に入朝して上奏するよう願っているので

きっと彼に誕生日祝いをさせて故郷に錦を飾らせてやろう”（共に退場）

〔注〕

- 丹墀…宮殿正面の朱塗りの階。「介子推」（元刊本）第一折【混江龍】「我與你出班部上瑤階赴丹墀直望着君王拜（私は朝臣の列を離れて玉の階を上り宮殿の正面で君主に拝礼しよう）」。
- 吟華山之詩…元の胡炳文『純正蒙求』巻中「平仲吟山」に「寇萊公準、字平仲、八歳吟華山詩、只有天在上、更無山與齊。其師與準父曰、賢郎、怎不作宰相（寇萊公の準、字は平仲は、八歳の時に華山の詩を吟じて、『ただ空が上にあるだけで、山と高さを同じくするものはない』と言った。その師は寇準の父に、『賢い子です、どうして宰相にならないことがありますでしょうか』と言った）」とある。
- 鎖鑰…錠と鍵。ひいては辺境防衛の要地を喩える。「劉行首」（古名家本）第二折【滾繡毬】「俺那裏洞門無鎖鑰、白雲籠罩着（我が洞の入り口には鍵がないが、白い雲に覆われている）」。また『桃花扇』第三十五出、史可法の白に「守住這座揚州城、便是北門鎖鑰了（この揚州をしっかりと守れば、北方の要は堅い）」とある。
- 外奢内儉…『宋名臣言行録』前集巻四「寇準」に「公外奢内儉、無聲色之娛、寢處一青幃、二十餘年（公は外では奢侈であったが家の中では儉約家であり、音楽や女性を楽しむことをせず、寢所でも一つの青い帳を、二十年以上使い続けた）」とある。
- 折竹一枝…『宋史』巻二八一「寇準傳」に「在雷州踰年。既卒、衡州之命乃至、遂歸葬西京。道出荊南公安、縣人皆設祭哭於路、折竹植地、挂紙錢。逾月視之、枯竹盡生筍。衆因爲立廟、歲時享之（雷州で年を越し、没後、衡州へ移る命が至り、そこで西京へ戻って葬ることとなった。道中の荊南の公安（湖北省公安県）で、県の者は皆路上で祭祀を行って泣き叫び、竹を折って地に植え、紙錢を掛けた。翌月にそれを見ると、枯れた竹の全てに筍が生えていた。人々はそこで廟を建て、折々にそれを祀った）」とある。
- 寬仁…寬大で慈悲深いこと。「襄陽會」（内府本）第一折【混江龍】「端的是這寬仁厚德談劉備（まことに仁徳に厚い者といえば劉備）」。
- 嘉禾…穀物の立派な穂。瑞祥の一つ。「周公攝政」（元刊本）第四折に「唐叔獻嘉禾（唐叔が嘉禾を献上する）」というト書きがある。
- 變理陰陽…陰陽をやわらげ整える。また国を治める、国政を切り盛りすることをいう。「周公攝政」（元刊本）第四折【川撥棹】「您怎生變理陰陽、調和鼎鼐（あなた方はどの

ように陰陽を治め、政治を行うのか)」。

- 中和…中庸を得ているということ。「來生債」(元曲選本) 第一折、曾信實の登場詩に「中和正直領天臺、此日親蒙聖敕差(中庸を保ち公正に尚書省を治め、本日は勅令を受けて遣わされた)」とある。
- 封疆…国境のこと。「七里灘」(元刊本) 第一折【六幺序】「奪了劉家朝典、奪了漢室封疆(劉家の典章を奪い、漢室の国境を侵す)」。
- 仁獸…いつくしみの心のある獣。一説に麒麟をいう。『説文解字』卷十上に「麒、仁獸也。麋身、牛尾、一角(麒、仁獸なり。なれじかの体、牛の尾に、角が一本)」とある。
- 黔黎…人民のこと。秦代に「黔首」、周代に「黎民」と呼んだことに基づく。「周公攝政」(元刊本) 第三折【紫花兒序】「上不愧三廟威靈、下不欺九曲黔黎(上は三代のご威光に恥じることなく、下は黄河の民を欺くことなし)」。
- 屁放…つまらないもの、軽微なものを指す。
- 四拜…続く「衆將做拜科」というト書きからすると、この部分は四将が拝礼するとも解釈できる。
- 學生支揖…「揖」は拱手の礼をすること。この部分はよくわからないが、自分のまねをして拱手せよということか。
- 干瀆…失礼なことをする。失礼ながらお願いする。「西廂記」(弘治本) 卷二楔子、張君瑞が杜確に宛てた書面に「造次干瀆、不勝慚愧(倉卒の間にぶしつけなお願いをし、慚愧に堪えません)」とある。
- 穀道…肛門のこと。
- 割股…二十四孝にも含まれる、王武子の妻が姑のために自分の股の肉を切って食べさせたという故事。
- 在那裡…動作・行為の進行や持続を表す。『水滸傳』(容與堂本) 第四回到「智深猛聞得一陣肉香、走出空地上看時、只見牆邊沙鍋裡煮着一隻狗在那里(魯智深が一陣の肉の香りを嗅ぎつけ、庭に出て見ると、塀の傍の土鍋の中に犬が一匹煮てあった)」とある。
- 戲綵…楚の人である老萊子は、七十歳になっても鮮やかな服を着て子供のように振る舞い、親を喜ばせた。二十四孝の一人。
- 太行山…河北と山西の間に連なる大山脈。しばしば盗賊の巢窟とされてきた。
- 豪氣三千丈…前漢において長安郊外の五陵の地に移された勢力家が任侠を競ったことに基づく。「貶夜郎」(元刊本) 第一折【寄生草】「抵多少五陵豪氣三千丈(五陵の豪氣三千

丈の威風など何ほどでもない)」。

○衣錦還郷…立身出世して生まれ故郷へ帰ること。故郷に錦を飾る。元の張國賓に「薛仁貴衣錦還郷」雑劇がある。

楔子

[訳]

(楊景が諸将と共に兵士を連れて登場)

楊景

“昼も夜も母上のことを思い
先に四将を東京へ行かせた
寇準様に私が孝を行おうとしていることを知らせ
上表文を書いて私の思いを帝に上奏してもらおう”

私は楊景でございます。この度は母上の誕生日のために、私は孟良を東京へ行かせ、寇萊公様にお願ひし、帝へ取り次いでもらうつもりだ。私は東京へ行き、母上のお祝いをしたいので、先に孟良を行かせたのだが、まだ帰って来ない。この一件はどうなったのだろう。これお前門の前で見張りをし、もし帰って来たら私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

(正末の孟良が金龍・金虎・封廣と共に登場)

孟良 私は孟良でございます。元帥の命を奉じ、東京へ行って戻って来た。元帥にお会いしに、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、孟良らが戻ったとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、元帥にお知らせします、孟良どのら四名が戻って来られました。

楊景 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(孟良が三将と共にまみえるしぐさをする)

孟良 元帥、孟良が戻りましてございます。

楊景 孟良よ、あの件はいかがであった。

孟良 この孟良は、元帥の軍令により、寇萊公様にまみえ、このことを話しました。寇萊

公様はすぐさま、帝に上奏し、元帥に三関を離れ、太君様の誕生日祝いをさせるようにするとのことでした。

楊景 寇萊公様が帝に上奏し、私に母上へのお祝いをさせて下さるのであれば、孟良よ、お前達諸将は三関をしっかりと守れ。私は今から張蓋、陳林、柴敢、楊清と共に東京へ行き、母上の誕生日祝いに、一つ行くことにしよう。

“母上の限りなく深い恩を思うに

幼い頃から人格を教え養って頂いた

今や軍事を司り腰に金印を帯び紫の服を着るほど出世しており

東京へ行って母上にまみえるところ”（共に退場）

孟良 元帥は行ってしまったわい。我ら諸将は堅く三関を守って疎かにはすまいぞ。

岳勝 孟將軍、今は郡馬様が三軍にいないから、我ら諸将がしっかりとしなければ。

孟良 まさしくその通り。（唱う）

【仙呂・賞花時】

“我らは三関のある辺境を堅く守り

郡馬兄者が都から戻るまで待つ

我らは昼も夜も無く賊兵に備え

この絶対なる軍令に背きはしない”

焦贊 郡馬様は、太君様の誕生日をお祝いするために、帝に上奏なされた。

孟良（唱う）

“この度の忠孝は、きっと朝廷を動かすだろう”（大勢が共に退場）

〔注〕

○凝滯…とどこおる。停滞する。馬致遠【哨遍】套「張玉崑草書」【五煞】「盡一軸、十數尺、從頭一掃無凝滯（一軸の、十數尺あるものを、卷頭から一挙に掃いてとどこおることがない）」。

○罔極…窮まりない、限りないの意。特に父母の恩が限りないことをいう。『詩經』「小雅・蓼莪」に基づくものであり、「西廂記」（弘治本）卷一第二折ではそれを踏まえて、張君瑞が「哀哀父母、生我劬勞。欲報深恩、昊天罔極（哀しいことに父母は、私を産んで苦勞した。その深い恩に報いようとしても、天のように広大で限りない）」という。

○腰金衣紫…出世して腰に金牌を下げ紫の衣を身にまとう身分になることをいう。紫の衣

は三品以上の位の者が着る朝服。『三國志平話』卷上、段珪の白に「你好獻三十萬貫金珠與俺、便交你建節封侯、腰金衣紫（三十万貫の金品を私に献上すれば、すぐに諸侯に封じられ、腰に金印を帯び紫の衣を着る身分となろう）」とある。

第三折

〔訳〕

（余太君が八嫂と九妹を連れて登場）

余太君

“思えばその昔老令公様は
命懸けで忠を尽くされた
今や黄泉のもとにおられるが
ご芳名は永久に清風を発する”

私は余太君でございます。夫は金刀教手の楊令公で、私との間に七男二女をもうけた。その七人の息子とは、平、定、光、輝、昭、朗、嗣という。七人の息子の内、残っているのは五郎と六郎だけで、あとの五人の息子は父と共に皆戦死してしまった。今や五郎は、五臺山で剃髪して僧となり、六郎は、帝の命を奉じ、瓦橋関などの三関を鎮守し、嫁も皆安楽にしており、毎日食事の世話をしてくれる。この度は私の誕生日であり、聞くところによると楊景が、東京へ、私を祝いに自らやって来るそうだが、きっと帝のお許しがあったのだろう。私は今からまず執事に酒や肴の手配をさせ、六郎を待つことにしよう。唐禹やどこにいるんだい。

唐禹（浄が執事に扮して登場）

“家の切り盛りなんかやってられん
あらゆることを聞いてきて
不足があれば責任負わされ
この苦勞を誰がわかってくれよう”

私は執事の唐禹でございます。普段好んでは、金のピンはね。賊ではないが、強盗よりはまし。まさしく屋敷の中での盗み食い。奥方様が呼んでいるので、一つ行かなければ。早くも着いたわい。（まみえるしぐさをする）奥方様が私をお呼びになられたのは、いかなるご用でしょうか。

余太君 唐禹や、お前を呼んだのは他でもない。この度は私の誕生日なのだが、聞くところによると楊景が、東京へ、私の誕生日祝いに自らやって来るそうなのだ。お前はこれから羊をつぶしたり宴席の手配をしたりして息子をもてなす準備をしておくれ。

唐禹（顔を背けて言う）また一つ儲け話が来たぞ。奥方様、今やお上の売るものは果物、牛、羊、鶏、鶯鳥、魚、野菜など、どれも皆高いので、十分に買えませんよ。

余太君 これお前、少し多めにお金を使っても構わないからね。

唐禹 そういうことでしたら、併せて一万五千と、百五十五両五錢五分五厘五毛の銀で足りります。

余太君 お前ったら、どうしてそんなにこまごまとしているんだい。

唐禹 奥方様、これまでも申しました通り、小銭が無けりゃ勘定じゃないとやら。私はネコババしたりしませんから。

余太君 お前が買うのに任せるから、早く手はずを整えておくれ。

唐禹 心配いりません。全て私にお任せを。宴席の手はずが整えば、郡馬様も帰って来られるでしょう。

余太君 これお前、門の前で見張りをし、もし息子が帰って来たならば、私に知らせておくれ。

唐禹 かしこまりました。

（楊景が張蓋・陳林・柴敢・楊清と共に登場）

楊景

“母上のための孝行心から国境を離れ
はるばる東京へ行くことも辞さない”

私は楊景でございます。四将を連れて、三関を離れ、この東京へやって来た。皆の者私と共に屋敷へ行くぞ。早くも着いたわい。あれはうちの執事ではないか。

唐禹（まみえるしぐさをする）閣下、いらっしゃいませ。お待ちしております。

楊景 これお前、楊景が母上のために誕生日祝いに来たと、知らせて参れ。

唐禹 奥方様に知らせて参ります。（知らせるしぐさをする）奥方様に申し上げます、ただ今郡馬様が、奥方様のお祝いに来られました。

余太君 息子が本当にやって来たとは。通してやりなさい。

唐禹 かしこまりました。お通り下さい。

（楊景が四将と共にまみえるしぐさをする）

楊景 この度は母上の誕生日でありますので、私めは四将を連れて自ら三関を離れ、お祝いに参りました。母上に拝礼し、この楊景の孝行心を表しましょう。(一同拝礼するしぐさをする)

余太君 息子や、私の誕生日のことは構わないが、そなたは三関を鎮守しているのに、みだりに任地を離れてはなりません。

楊景 この度は母上の誕生日ですが、勝手に三関を出発したではありません。孟良に命じて寇萊公様にお願ひし、帝へ取り次いで頂き、ようやく私は東京へ入り、母上にお目に掛かることができたのです。

余太君 それならばよろしい。これお前宴席の用意をしなさい。

唐禹 かしこまりました。(机を並べるしぐさをする) 宴席の手はずが整いました。

楊景 これお前酒をもて。私から母上に一杯差し上げよう。

唐禹 酒はこちらに。

楊景 (酒をついで四将と共にひざまずくしぐさをする) 母上この杯をお飲み下さい。

余太君 楊景は当然ながら、お前達四名の將軍達も、まことにご苦勞であった。

柴敢 太君様は、郡馬様の母上でありますから、我ら四名の母親も同然です。このようにするのは当然で、お気になされる必要はありません。

余太君 (酒を飲むしぐさをする) 六郎や、四名の將軍達にも一杯飲ませてやりなさい。

楊景 かしこまりました。

唐禹 奥方様ときたら、どうして四人の將軍達に一杯飲ませてやるのか。思うに執事とは氣を使って働くもので、買い出しをして手はずを整えたのは全て私だ。私も一杯飲んでやろう。(酒をついで飲むしぐさをする) 祝い酒を飲み干したぞ。

楊景 我らはゆっくりと飲むゆえ、これ、お前は門の前で見張りをし、誰かやって来る者がいるか見ておれ。

唐禹 郡馬様ときたらなんて良いお人なんだろう。私を外に出して、おっかさん達はのんびり酒を飲んでいる。馬鹿馬鹿しい。私は門の前で見張りをしよう。

黄眉翁 (正末が黄眉翁に扮して登場) 私は黄眉翁でございます。この度地上では余太君の誕生日であり、その息子の楊景は忠孝の両方を備え、三関を離れ、母親のために誕生日祝いをした。私は天宮を離れ、余太君の福を増やし寿命を延ばすために、一つ行くとしよう。臣下たる者は、忠孝を行えば、必ず神のご加護があるのだ。(唱う)

【中呂・粉蝶兒】

“私は閨風苑と瑤池を離れて
あつという間に俗世に降りる
臣下たる者は忠孝を備え
忠心を尽くして命を顧みず、力を尽くして孝行しなければならない
天の道理は欠けることがなく
栄華を楽しみ子孫は富貴となる”

【醉春風】

“孝を行う者は歴史に芳名を刻み、忠義を尽くす者は麒麟閣に図像が飾られる
このような君主への忠や父母への孝の常理を、誰が賛美しないことがあろうか
忠は天地を貫き、孝は天下に伝わり
功は永久に残る”

楊景の家の門前に着いたわい。(まみえるしぐさをする) こんにちは。

唐禹 じいさん、何の用かね。

黄眉翁 私は放浪の仙人です。太君様のお誕生日と聞き、お祝いに参りました。

唐禹 仙人さんよ、あんたが太君様の誕生日祝いに来るなんて、信じられん。何か祝いの贈り物でも持っているのか。

黄眉翁 お前さんは知らせに行きなされ。私には祝いの贈り物がある。

唐禹 知らせに行くから、絶対に逃げるなよ。(知らせるしぐさをする) 奥方様に申し上げ
ます、門前に放浪の道士が、奥方様の誕生日祝いに来ました。

余太君 仙人が私の誕生日祝いに来たのなら、お通ししなさい。

唐禹 かしこまりました。お入り下され。

黄眉翁 (まみえるしぐさをする) こんにちは。

楊景 仙人様は何というお名前で、お住まいはどちらでしょうか。どうしてこちらに来られたのですか。

黄眉翁 閣下が苦勞も辞さず、自ら三閨を離れ、母上様へお祝いを申し上げたために、私はこのことを聞き知りました。閣下は忠孝の両方を備え、わざわざ母上様の誕生日祝いに来られたのですな。

楊景 見ればこの仙人様の頭は霜や雪のように真っ白だが、顔は子供のよう。きっと何か会得している道があるのだ。尋ねてみるとしよう。仙人様、あなたはどのような秘訣があって、そのように身軽で健やかな体を保っておられるのですか。

黄眉翁（唱う）

【紅繡鞋】

“自然から受けた真の気を養い

私はこれまで数十年苦行を修め続けてきた”

楊景 仙人様は王子喬や赤松子のような容貌を保っておられ、世俗とは異なっておられます。

黄眉翁（唱う）

“顔は童子のようだが若さは及ばぬ”

楊景 仙人様、あなたのお住まいはどこにあるのですか。

黄眉翁（唱う）

“私はちょうど蓬萊境を離れ、一人で瑤池を出発し

わざわざ百歳の長寿を祝いに来た”

唐禹 奥方様、この仙人は普通の人間でなければ、土地神が化けたものではないでしょうか。

余太君 そこな仙人様、あなたのお名前は。今年でお幾つになられます。

黄眉翁 私は黄眉翁でございます。歳は九千歳ほどになります。

唐禹 彭祖は八百歳まで生きたが、お前はなんと九千歳だと。勝手に出鱈目を言っている。調べられるわけがない。

余太君 仙人様、あなたがどのようにしてその長寿を得たか、話してみてください。

黄眉翁（唱う）

【満庭芳】

“私がなぜ一万年も寿命を延ばしたのか

必ず神仙の秘訣があるものだが、どうして仙人の秘密を漏らそうか”

楊景 仙人様、あなたの寿命を延ばす秘術を、私にお話し下さい。

黄眉翁（唱う）

“通常であれば他人には教えないが

事細かに話してやるとしよう”

楊景 仙人様、あなたに秘訣がなければ、どうしてそのように長寿でいられますでしょうか。

黄眉翁（唱う）

“私は月光を集め朝焼けを飲み日光を煉り

それによって天にも齊しい長寿を得た

その内なる意味

奥深い道理を悟ることができなければ

どうして愚かな凡人を救うことができようか”

唐禹 仙人様、あんたは奥方様の誕生日を祝いに来たが、何か長寿を祝う、贈り物を持っているのかね。

黄眉翁（袖の中から小道具を取り出すしぐさをする）奥方様、私には何も特別な物はありませんが、この仙酒と仙桃を、奥方様の長寿のお祝いとします。

余太君（受け取るしぐさをする）仙人様にこのような、私の長寿を祝う仙物を頂き感謝致します。

黄眉翁（唱う）

【上小樓】

“我ら仙家の道では珍しい物ではないが”

楊景 仙人様、この仙酒と仙桃は、何が珍しいのですか。

黄眉翁（唱う）

“この仙酒と仙桃を口にすれば、寿命が延び、見た目も老いない”

余太君 仙人様、このような仙物は俗世には滅多にありません。

黄眉翁（唱う）

“仙物は珍しく

俗世にはまれ

まことに甘くて美味”

唐禹 仙人様よ、こんな桃は銅錢一枚で七、八個は買えるから、それを手に入れて、色々しゃべっているんだらう。

黄眉翁（唱う）

“仙桃が普通とは異なるのを見てみよ”

余太君 六郎や、酒を持って来なさい。私が仙人様に一杯差し上げます。

楊景 かしこまりました。

余太君（酒をつぐしぐさをする）仙人様お飲み下さい。

黄眉翁 奥方様が先に飲まれよ。（唱う）

【十二月】

“奥方が背を曲げ腰をかがめて丁寧にし、高くささげるこの金杯
あなた方の長寿を祝う酒に、私は酔っぱらって帰ろうと思うが
飲むように勧められると断らない
母子からありがたく頂戴して行きつ戻りつ”

(酒を飲むしぐさをする) 酒をもて。奥方も酒を一杯飲まれよ。

余太君 (酒を受け取るしぐさをする) 仙人様にはわざわざこちらにご降臨頂きまして。

黄眉翁 (唱う)

【堯民歌】

“ああ、あなた方一家の息子が忠孝を備え陰徳を積んでいるので
感動した神仙が酒席にやって来たのだ”

楊景 仙人様はお見通しでいらっしゃる。思うに私が忠心を持って帝に報い、孝敬を持って母上を慕うのは、全て母上の厳格な教えがあったからで、孟母の行いにも勝りましょう。

黄眉翁 (唱う)

“息子は公正に甚だ真っ直ぐな忠義を行い
母は勤勉儉約に家を治めて切り盛りしている”

楊景 仙人様、思うに私の祖先は将として、忠義を尽くして国に報い、朝廷のために力を尽くしたので、天下に名を挙げたのです。

黄眉翁 (唱う)

“息子が代々富貴を継いでいるのは
全て彼らの思いが天の意志に沿っているがため”

楊景 仙人様もう一杯お飲み下さい。

黄眉翁 宴もお開きじゃ。私は帰るとしよう。(唱う)

【尾聲】

“瑞雲に乗って仙界に入り、天風に乗じて袖を払って帰る
果てしない弱水を見ても探すことはできず
あっという間に三千二百里を通り過ぎる”(退場)

楊景 仙人様は行ってしまわれた。宴も終わりましたゆえ、私も長居は致しません。母上に暇乞いをし、三関へ戻らなければなりません。

余太君 六郎や、ここで別れたら、再び会えるのはいつになるのだろう。

楊景 母上、私がここでお別れしたら、再び会えるのはいつになることでしょう。

“子と母の別れはひどく悲しく

辺境の関にて故郷を思わぬ日はない

君主への忠と父への孝は人臣としての根本だが

母への孝を全うすることができずにいる”（共に退場）

余太君 六郎は行ってしまった。他に何事もないので、奥の部屋の中へ入るとしよう。

“息子が馬に乗って駆けるのを思い

母子が東西南北に離れているのを思う

三関を鎮守して心から宋をお助けし

清名が広まり万古の後まで永久に刻まれる”（浄の唐禹と共に退場）

〔注〕

- 甘旨…孝子が父母に差し上げる食べ物のこと。ひいては子が親に仕えることをいう。「襄陽會」（内府本）楔子【賞花時】「我則待奉甘旨侍萱親（私は教えに従い母上にお仕えする気でいました）」。
- 落鈔…金をピンはねすること。「老生兒」（酌江集本）楔子、劉引孫の白に「他從來有些招尖落鈔、我數一數（あの人はかねてからピンはねをする人、数えてみよう）」とある。
- 我又不落你的…この部分の「落」も「落鈔」に同じであろう。
- 迢遞…はるか遠いさま。「霍光鬼諫」（元刊本）第二折【粉蝶兒】「羸馬長鞭、路迢遞豈辭勞倦（痩せ馬に鞭打ち、遠い道程も疲れをいとわぬ）」。
- 紫府…道教で神仙の住むところをいう。仙宮。天宮。「岳陽樓」（元曲選本）第四折【收尾】「指引你雙歸紫府（そなたら二人を引き連れて仙宮へ帰ろう）」。
- 閩苑瑤池…閩風苑と瑤池。共に崑崙山にあり、仙人のいるところという。「任風子」（元刊本）第三折【紅繡鞋】「又不曾遊閩苑、又不曾赴瑤池（閩風苑に遊んだこともなく、瑤池へ行ったこともない）」。
- 貴降…人の誕生日をいう。「遇上皇」（元刊本）第一折【那吒令】「今日是酒劉洪貴降（今日は酒飲みの劉洪の誕生日）」。
- 可難消也…「消」は「消受」、すなわち耐える、受けるの意。「傷梅香」（息機子本）第二折【雁過南樓】「他撲騰騰怒怎消（あの方のカッカとした怒りにどうして耐えられよう）」。
- 仙郷…人里離れた田舎。相手の郷里を尊称して言う。『朱子語類』卷一一四に「仙郷莫有

人講學（君の故郷には学問をする者はいないのか）」とある。

- 元陽…道教の言葉。「元氣」に同じく、生命の火といった意味。姚守中【粉蝶児】「牛訴冤」套【尾】「我元陽壽未終、死得真個屈苦（我が寿命はまだ尽きないのに、まことに不当な殺され方）」。「劉行首」（古名家本）第四折【駐馬聽】「靈臺拂去是和非、丹田養就元陽氣（心に是と非を払い去り、下腹部に元陽の気を養う）」。
- 喬松…王子喬と赤松子のこと。共に不老不死の仙人。
- 弄虚頭…嘘を付くこと。また、うわべだけのずるい手を使うこと。「盆兒鬼」（脈望館本）第四折、張千の白に「這老子弄虚頭。爺爺、我不聽的（この老いぼれは嘘を付いています。閣下、私には聞こえません）」とある。
- 砌末…雑劇における小道具のこと。
- 仙酒仙桃…仙酒は仙人が作った酒。仙桃は伝説中の西王母の桃。共に長寿の効があるとされる。
- 感蒙…ありがたくお受けするということ。「西廂記」（弘治本）卷五第一折、琴童の白に「感蒙賞賜。我每就此喫飯、夫人寫書（ありがたく頂戴致します。私はここで食事をしますので、奥様は手紙をお書き下さい）」とある。
- 徘徊…行ったり来たりすること『董解元西廂記諸宮調』卷二【解紅】「心下徘徊自籌度（心の中で行きつ戻りつ考える）」。
- 陰鷲…陰徳のこと。「裴度還帶」（脈望館本）楔子、趙野鶴の白に「長老不知、這秀才必有活三四個人性命的陰鷲（長老はご存じないでしょうが、この秀才にはきっと三四人の命を救った陰徳があるはず）」とある。
- 孟母之能…孟子の母が、息子の教育のために三度住居を変えたこと（「孟母三遷」）や、学問を途中で止めた息子を戒めるために織りかけの織物を断ち切ったこと（「孟母斷機」）などを指す。
- 操持…処理する。対応する。「灑池會」（内府本）第二折【普天樂】「見如今賞罰權在公子操持（今は賞罰の権利は公子がお持ちである）」。
- 洞天…仙人の住むところ。仙界。「西廂記」（弘治本）卷一第一折【後庭花】「似神仙歸洞天、空餘楊柳煙、只聞得鳥雀喧（神仙が住みかへ帰るように、柳にたなびくもやが虚しく残り、ただ小鳥のさえずりが聞こえるのみ）」。
- 弱水…元来は西方の辺境にある川のことであるが、広く仙境の川をいう。「金錢記」（古名家本）第二折【滾繡毬】「轉過這粉牆東哎喲可早則波玉人兒不見、恰便似隔蓬萊弱水三

千（あの白壁を東へ曲がれば早くもあの人は見えなくなり、まるで蓬萊山と弱水が三千里隔たっているかのよう）」。

第四折

〔訳〕

（岳勝が諸将を連れて兵士と共に登場）

岳勝

“幼少より兵書を学んで戦略に通じ
孫子、呉子、六韜、三略を広く修めた
国を安定させて帝の事業をお助けし
迅速に勝利を得て名を明らかにする”

私は岳勝でございます。この度郡馬様は三関を離れ、自ら東京へ、余太君様のお誕生日祝いに行かれたが、まだ戻って来ない。閣下の軍令により、我ら諸将は三関を堅く守り、遼兵の侵入を防いでいる。今孟良が辺境の見回りに入っている。もうすぐ戻って来るだろう。

孟良（正末が孟良に扮して登場）私は孟良でございます。辺境を見回ったが何事もなく戻って来た。陣中へ一つ行かなければ。（唱う）

【雙調・新水令】

“この頃の英雄達は、鎧兜を肌身離さず
遼兵が国境を侵さないようにしている
対峙して勝敗を決する備えをし、討ち殺して功績を立てる
毎日三軍の訓練を行い
遼の賊を脅かし契丹を鎮圧しよう”

早くも着いたわい。諸将に会いに行かなければ。（まみえるしぐさをする）ただ今孟良が辺境の見回りをし、何事もなく戻ったぞ。

岳勝 この度郡馬様は、東京へ余太君様のお誕生日祝いに行かれたが、まだ戻って来ない。

王樞密に陥れられたのではあるまいか。

孟良 岳將軍、そんなことはなかろう。寇萊公様が帝に上奏し、郡馬様に、太君様のお祝いをさせたのだ。王樞密めが、どうして陥れることができようか。（唱う）

【喬牌兒】

“私は優れた帝にお知らせしなければならぬ

あやつがどうして忠臣を陥れ、英雄に害をなすことができようか

寇萊公様がどうして忠信をお持ちでないことがあろうか”

焦贊 思うに郡馬様が、どうしてあやつの手落ちることがあろうか。

孟良 (唱う)

“我らが將軍の計略は破り難い”

焦贊 それならば、これお前は門の前で見張りをし、郡馬様が戻って来たら、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

楊景 (四将を連れて登場)

“孝が天の心を動かして大仙人を降臨させ

母上にまみえて誕生日祝いの宴を行った

昨日暇乞いをして帰路に就き

今朝夜を徹して辺境の関に着いた”

私は楊景でございます。母上の誕生日祝いを終えたので、三関へ戻らなければ。早くも着いたわい。これお前、私が戻って来たと諸将に知らせよ。

兵士 かしこまりました。(知らせるしぐさをする) はっ、將軍方にお知らせします、郡馬様が戻って来られました。

岳勝 我ら諸将は閣下をお迎えに行こう。

(大勢が迎えるしぐさをする)

岳勝 元帥には道中ご苦勞様でございました。

楊景 お前達も国境を守るのは大変であったろう。

孟良 元帥は太君様の誕生日祝いへ行かれましたが、どうしてお戻りが遅かったのですか。

楊景 孟良よお前は知るまいが、私が母上をお祝いするために、宴席を手配し、誕生日祝いをしていたところ、ある仙人様に出くわしたのだ。これぞ黄眉翁で、年は九千歳。仙酒と仙桃で、母上のお祝いをして下さった。まことに良きお方であった。

孟良 閣下がまごころを持って母上様に孝行をしたので、感動した仙人がお祝いに来たのでしょう。(唱う)

【鴈兒落】

“帝に忠義を尽くし

母に孝行をする

感動した仙人が祝いに来られたのは、これぞ確かに天の道理は公正無私というもの”

楊景 臣たる者はその忠を尽くし、子たる者はその孝を尽くさなければならないのだ。

孟良（唱う）

【得勝令】

“ああ、忠を尽くすとは国に報いて功を立て

孝を尽くすとは朝晩お仕えすること

今上の帝は忠孝を理解しており、天が富貴を下さるので

あなた方の子孫は代々恨みを生ずることもない

一族は栄え

あなた方が忠臣である証を明らかにする”

楊景 これお前は門の前で見張りをし、何かしら軍事状況に動きがあれば、すぐに私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

（寇萊公が浄の扮する胥吏を連れ馬に跨って登場）

寇萊公 私は寇萊公でございます。この度は楊景が自ら三関を離れ、母親のために誕生日祝いをした。私はこのことを帝にお知らせしたところ、帝は大変お喜びになり、私に三関へ行き、楊景に官位と恩賞を贈るように命じられたので、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前馬を繫げ。

胥吏 しっかりと鐙を垂らしました。

寇萊公 これお前、朝廷からの使者が来たと言えよ。

兵士 かしこまりました。元帥に申し上げます、ただ今朝廷からの使者が来られました。

楊景 皆の者私と共に陣を出て、使者の方をお迎えするのだ。

（大勢が迎えるしぐさをする）

楊景 ややや、私に何の徳があって、閣下にこちらまでご足労頂いたのでしょうか。閣下こちらへどうぞ。

寇萊公 楊景よ私は私用で参ったのではない。帝の命を奉じ、お前達に官位と恩賞を贈るために来たのだ。

楊景 閣下、私に何の徳があって、帝は官位と恩賞を下さるのでしょうか。

寇萊公 楊郡馬よ、そなたは知るまいが、昨日私は帝に、そなたが苦勞を辞さず、遠く三
関から、母親の誕生日祝いに来たことを申し上げたのだ。帝はとてもお喜びになり、そ
なたが忠孝の両方を備え、長らく辺境の関を鎮守し、遼の賊を威圧していることを知り、
私を遣わして、お前達三関の諸將に官位と恩賞を贈られるのだ。

孟良 閣下には遠く関や山を越えて故郷を思わせてしまいました。(唱う)

【沽美酒】

“臣たる者はご恩に報いるべきであり
誰が苦勞を厭いましょうや
閣下には遠く関や山を越えてご苦勞様でございました
我らは戦場にて敵陣にまみえ
命を懸けて、勲功を立てよう”

【太平令】

“総大将の言行が偽りないために”

寇萊公 この三関は、楊景のみならず、そなた達諸將の働きにより保たれているのだな。

孟良 (唱う)

“我ら英雄たる諸將は、苦勞を厭わない
数十年に渡って遼兵を広く鎮圧し
敵兵を討つために険しい山も避けない”

焦贊 孟良よ、もし郡馬様の策略がなければ、我ら諸將はどうして功を立てることができ
ようか。

孟良 (唱う)

“あの方が兵を率いて勝利を得ることは神のよう
我らの馬が至るところは全ての州郡を平安にする”

寇萊公 楊景は香を焚き、お前達諸將は皇居に向かってひざまずけ。帝が官位を封じ恩賞
を賜るの聞くがよい。

“三関に留まり長らく辺境を鎮守し
英雄を頼みとし遼兵を武力で威圧する
兵を大切にすることは赤子に対するよう
民を慈しむことは親の気持ちのよう
正義の心を持って国家を支え

忠心を尽くし朝廷を補佐する
老母の誕生日を祝うために
孟良を使者として高官に願い出た
私はこのことを帝に上奏し
三関を離れて孝行を尽くすことができるようにした
帝はそれを知って大いにお喜びになり
私に千里の道に行くように命ぜられた
楊景よそなたを鎮三関元帥とし
配下の諸将を皆昇進させる
全ての者を両京節度に封じ
恩陰により妻子の屋敷を改装させる
また十万の金と絹を贈り届け
部下に与えて兵士をねぎらう
この度は官位を封じられ恩賞を頂き
帝のご恩に感謝し各々忠誠を明らかにする”

題目 楊郡馬、赤心もて忠孝を行い

正名 黄眉翁、福を賜いて延年を上う

〔注〕

- 幼習兵書戰策通～…「破天陣」(内府本) 第一折、呼延必顯の登場詩も、第二句が「安營下寨貫奇通(陣を張り営舎を設けることにもよく通じる)」となっている以外は同じものである。
- 墜鐙…馬の乗り降りをする時に鐙を垂らすこと。「黒旋風」(脈望館本) 第一折【耍孩兒】「上馬處與哥哥擊鞭墜鐙(馬に乗る時は兄貴のために鞭を執り鐙を垂らしましょう)」。
- 勞夢魂…「夢魂」には夢の中にある魂、ひいては自分自身という意味がある。『董解元西廂記諸宮調』卷四【雙聲疊韻】「強合眼、睡一覺、怎禁夢魂顛倒夜難熬(強いて目を閉じ、一眠りしようとしても、夢の中で魂が乱れる夜の辛さに耐えられない)」。この部分は遠い旅路の中で故郷を夢に思うことを意味するのであろう。
- 嶮峻…「險峻」とも。山が高く険しいこと。また高く険しい山嶺を指す。『水滸傳』(容

與堂本) 第五回に「來到後山打一望時、都是嶮峻之處 (裏山まで来て眺めてみると、いずれも険しい場所)」とある。

○解…犯人や金品を護送すること。劉致【端正好】套「上高監司」其二【滾繡毬】「赴解時弊更多、作下人就做夫 (ぼろ札を輸送する時には悪事が更に多くなり、下僕が人夫に早変わり)」。

楊六郎調兵破天陣

楔子

〔訳〕

寇萊公（沖末が寇萊公に扮し兵士を連れて登場）

“若者は錦の帯に呉鉤の劍を掛け
武装した馬が西風に吹かれ辺境に草が満ちる秋
箱の中の三尺の劍を頼みとし
座りしまま諸侯に封じられよう”

私は姓を寇、名を準、字を平仲と申します。幼い頃より儒学を学び、詩書を読んできました。科挙に第一等で及第して以来、度々抜擢を受け、長年朝廷にお仕えしている。帝はありがたくも、私を萊国公の職に封じられた。この度北蕃の韓延壽が兵を率いて国境を侵しているために、帝の命を奉じ、私は兵を率いて銅臺へやって来て、蕃兵と戦っている。凶らずも韓延壽は毎晩銅臺城を包囲し、内に糧秣無く、外に援軍無しとなってしまった。帝はある晩に夢を見られたが、その夢の中で蕃兵と戦い、行軍していた際、前方に一筋の河が流れ、その中に一隻の船があり、船首には頭に花を載せた、一人の美しい女が立っており、その女は「我が主よ、ここに帝をお守りする将軍がおります」と言った。帝が「どこにいるのだ」と言い、船室の中を見ると、一頭の大きな羊が飛び出て来て、その羊は身を躍らせて岸へ飛び上がると、蕃兵を追い払ってしまった。驚いて目を覚ますと、何と南柯の夢であった。帝は私に陰陽臺官の苗士安を呼び、この夢を占うよう命じられた。これお前陰陽臺官の苗士安を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。苗士安どのほどちらにおられる。

苗士安（正末が苗士安に扮して登場）私は陰陽臺官の苗士安でございます。韓延壽が国境を侵しているために、我が寇萊公様は兵を率い、銅臺へやって来た。しかし凶らずも蕃兵がこれを知り、毎晩銅臺を包囲している。この度寇萊公様がお呼びなのは、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、苗士安がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、閣下にお知らせします、苗士安どのが来られました。

寇萊公 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

苗士安 閣下が私をお呼びになられたのは、何事でしょうか。

寇萊公 苗士安よ、お前を呼んだのは他でもない、この度帝が、夜中に夢を見られたのだが、その夢の中で蕃兵と戦っておられた。行軍していた際、前方に一筋の河が流れ、その中に一隻の船があり、船首には頭に花を載せた、一人の美しい女が立っており、その女は「我が主よ、ここに帝をお守りする将軍がおります」と言った。帝が「どこにいるのだ」と言い、船室の中を見ると、一頭の大きな羊が飛び出て来て、その羊は身を躍らせて岸へ飛び上がると、蕃兵を追い払ってしまい、驚いて目覚めると、何と南柯の夢であった。この度帝の命を奉じ、お前にこの夢を占わせるが、いかなる吉凶の前兆か。

苗士安 閣下、この夢は不吉な前兆ではなく、まことにめでたい前兆です。

寇萊公 どうして不吉な前兆ではなく、まことにめでたい前兆なのだ。

苗士安 閣下、この夢はまことにめでたい前兆でして、夢に見た将軍が、銅臺の包囲を救うというものです。

寇萊公 その夢に見た将軍はどこにいるのだ。

苗士安 閣下、この一筋の河とは、「水」の字を含んでおりませんか。この女とは、このさんずいを「女」の字に付けると、「汝」という字になりませんか。この船(舟 zhou)とは、「州」のことです。閣下、この夢に見た将軍は、姓名もはっきりしています。この船の中から一頭の大きな羊(yang)が飛び出て来たというのは、この者の姓が「楊」であるということで、あの女が頭に花(英 ying)を載せていたというのは、「景」ということです。この夢に見た将軍とは、楊景のことであり、汝州(河南省臨汝県)にいるのです。

寇萊公 待て待て待て、その楊景は勝手に三関を離れたために、汝州へ流され、死んだとか、首を斬られたとか言われているのに、どうやって楊景を召し出すのだ。

苗士安 閣下、楊景は名将でありますのに、どうして死ぬことがありましょう。私が夜に天の動きを観察しておりましたところ、楊景の将星は、雙魚宮にぴったりと接していましたから、この者はまだ生きております。

寇萊公 それならば、どうやって楊景を召し出すのだ。

苗士安 今から有能な者を遣わして、陣から打って出て、夜を徹し速やかに汝州へ行かせるのです。もし楊景がいれば、あの北蕃の韓延壽を捕らえることなど、掌を返すように

容易いでしょう。

寇萊公 苗士安よ、もし楊景がいて、この夢占い通りならば、そなたの見立ては素晴らしいものである。

苗士安（唱う）

【仙呂・賞花時】

“この度蕃將が城に迫り陣を布いているので、私は夢に見た將軍の姓名を解き明かした
今から急いで使者を遣わし、素早く手配し
英雄を得たらすぐに戻って来るべし”

行って楊景を召し出したならば、（唱う）

“必ずや野蛮な賊を平らげ

きっと銅臺を救うだろう”（退場）

寇萊公 苗士安は行ってしまったが、私は今から一体誰に行かせるべきであろうか。殿前太尉の呼延贊の子である呼延必顯、彼ならば楊景を召し出してくれよう。これお前呼延必顯を呼んで参れ。

兵士 かしこまりました。呼延必顯どのはどちらにおられる。

呼延必顯（登場）

“幼少より兵書を学んで戦略に通じ
陣を張り営舎を設けることにもよく通じる
国を安定させて帝の事業をお助けし
迅速に勝利を得て名を明らかにする”

私は殿前太尉の呼延贊の子である呼延必顯でございます。この度韓延壽が国境を侵しているために、寇萊公様は兵を率いて銅臺へやって来たが、凶らずも蕃兵により每晚銅臺を包囲されている。ただ今寇萊公様がお呼びなのは、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、呼延必顯がやって来たとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、閣下にお知らせします、呼延必顯どのが来られました。

寇萊公 通してやれ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

（まみえるしぐさをする）

呼延必顯 閣下がこの呼延必顯をお呼びになられたのは、何事でしょうか。

寇萊公 呼延必顯よ、そなたを呼んだのは他でもない、陰陽官の苗士安が、帝の夢を占っ

たところ、夢に見た將軍とは、楊景のことで、現に汝州にいるとのことであつた。そなたは今から陣より打って出て、汝州へ楊景を召し出しに行くのだ。

呼延必顯 閣下、そのことですが、楊景は汝州で死んだというのに、どうして再び召し出すことができますでしょうか。

寇萊公 呼延必顯よそなたは知るまいが、陰陽官の苗士安が言うには、楊景の将星は、はっきりと現れているそうだ。そなたはこの度汝州に着いたら、胡祥太守に尋ね、楊景が生きていたならば、彼が勝手に三関を離れた罪を、全て許してやるとしよう。彼が蕃兵を退けたならば、その時は更に官位を加え恩賞を贈ろう。そなたはしっかりと気を付けて、急いで行って早く戻るように。

呼延必顯 かしこまりました。それでは今から陣より打って出て、汝州へ、楊景を召し出しに、一つ行くことにしましょう。

“將軍は英雄で馬は走り
槍や刀を次々繰り出し大軍にも勝る
密かに隊を前後に分け
必ずや本日勝利を得て戻ろう” (退場)

寇萊公 呼延必顯は行ってしまった。楊景を召し出したならば、蕃兵を破ることができないと悩むことなどない。韓延壽を退けたならば、私が帝にお知らせし、官位を加え恩賞を贈ろう。

“急いで呼延必顯を六郎を召し出しに遣わすと
敵軍と戦い優れた武芸を振るう
汝州で楊景を見つけたならば
銅臺の城下で一戦交えるであろう” (退場)

[注]

○呉鉤…「鉤」は鉤刀、すなわち刃が三日月型に湾曲した刀のこと。呉王闔廬が莫邪劍の他に鋭利な劍を求めた故事から、鋭利な劍の意味で用いられる。李賀「南園十三首」其五「男兒何不帶呉鉤、收取關山五十州（男兒たるものどうして呉鉤を帯びて、辺境の五十州を攻め取らずにおくものか）」のように、唐詩にもしばしば現れる名称。

○鐵馬…武装した馬。「西蜀夢」（元刊本）第三折【粉蝶兒】「憶當年鐵馬金戈（思い出すのは当時武装した馬に乗り金の矛を手に戦った日々）」、また陸游「次韻李長見示」（『劍南

詩稿』卷九)に「空懷鐵馬橫戈意、未試冰河墮指寒(武装した馬の上で矛を携えることに虚しく思いを馳せ、指が凍傷で落ちるほどの北方の寒さをまだ体験せずにいる)」とある。

○塞草…辺境の地に生える草。高適「燕歌行」に「大漠窮秋塞草腓、孤城落日門兵稀(広大な砂漠は晩秋となり辺境の草は枯れ、孤立した城は夕陽を受け兵士の姿も見えない)」とある。

○三尺劍…劍の長さとしては三尺が定型となっていたようであり、「黒旋風」(脈望館本)第二折【尾聲】「我去呵也不用一條槍、也不用三尺鐵(私が行けば槍もいらぬし、三尺の劍もいらぬ)」のように、「三尺鐵」で劍を表す場合もある。

○覓封侯…杜甫「復愁」十二首之六に「閭閻聽小子、談笑覓封侯(村の子供達の言うのを聞くと、功を立てて領主になりたいと話している)」とある。なお、この寇萊公の登場詩は、「三戰呂布」(内府本)第一折の曹操の登場詩と同じものである。

○甲第…科挙に第一等で及第すること。「甲科」ともいう。「謝天香」(古名家本)第一折、錢大尹の白に「自中甲第以來、累蒙擢用、頗有政聲(科挙に第一等で及第して以来、度々抜擢を受け、頗る名声がある)」とある。

○船艙…船室。「馮玉蘭」(元曲選本)第二折、馮太守の白に「則怕是老夫相識的人、可開那船艙門、一面看茶(私の知り合いの者かもしれないので、船室の戸を開け、茶を出すのだ)」とある。

○撒然驚覺…驚いて目を覚ますこと。「撒然」は驚く様。『董解元西廂記諸宮調』卷五【繡帶兒】「撒然驚覺、衾枕俱空(驚いて目を覚ませば、布団も枕も共に空っぽ)」。

○陰陽臺官・陰陽官…日を選び星を占い吉凶を判ずることを司る。『西遊記』第九十四回に「正在驚喜之間、忽有正臺陰陽官奏道(しばしばんやりとしているところ、正臺の陰陽官が奏上した)」とある。『元史』や『元典章』には、陰陽人という占星や祈祷などを生業とした人々について記載がある。

○圓此一夢…「圓夢」は夢判断をすること。『水滸傳』(楊定見本)第百十七回に「宋江急請軍師圓夢、説知其事(宋江は急いで軍師を呼んで夢占いを頼み、夢の次第を話した)」とある。また「員夢」にも作り、「張協狀元」第二出、淨の白に「見説府衙前有個員夢先生、只是請它過來、問它仔細(役所の前に夢占いの先生がいるとのことだから、その者に来てもらい、子細を尋ねよう)」とある。

○主…表す。前兆を示すこと。『三国志平話』卷上、齊王の白に「銅鐵鳴、主何吉凶(銅製

や鉄製の物が鳴り響くというのは、吉凶いずれを表しているのか」とある。

- 観乾象…天体を観察して占うこと。「乾象」は天体の現象、日月星辰の起こす現象。「西蜀夢」(元刊本)第二折【一枝花】「早晨間占易經、夜後觀乾象(朝には易經で占い、夜には天の動きを観察する)」。
- 穩情取…きっと、必ず。非常に確実な未来を表す。後出の「穩取」も同義。「三奪槩」(元刊本)第二折【煞尾】「則若是輕輕的虎眼鞭抹着、穩情取你那天靈蓋半截不見了(もし虎眼鞭が軽くかすただけでも、きっとあなたの頭の半分がそぎ落とされるだろう)」。
- 殿前太尉…禁軍に属する武官であろう。「太尉」はここでは武官に対する尊称。
- 呼延必顯…『宋史』卷二七九「呼延贊傳」によると、呼延贊には必興、必改、必求、必顯の四子があり、贊の死後に必顯が軍副都軍頭に取り立てられたという。
- 安營下寨…軍隊がテントを張り営舎を設けること。「安營扎寨」とも。「隔江鬪智」(元曲選本)第二折、張飛の白に「據我老三料這周瑜匹夫、累累興兵來索取俺荊州地面、如今在柴桑渡口安營扎寨(思えば周瑜のやつは、度々兵を率いて荊州を奪いに來たし、今も柴桑の渡し場で陣を構えている)」とある。
- 兵山…ややわかりにくい語であるが、仮に文字通り山のような大軍という方向で訳しておく。「智勇定齊」(脈望館本)楔子、孫操の退場詩に「壓地兵山塵土暗、沖天殺氣密雲生(地を圧する程の大軍に砂塵は周囲を暗くし、天を衝く程の殺気に厚い雲が生じる)」とある。

第一折

[訳]

韓延壽(蕃兵を連れて登場)

“バタバタと、地は悪く人は走る

名馬に乗り、彫刻を施した鞍に座る

鷹を飛ばし犬を走らせ、野を流れる川や荒れた山を行く

喉が渴けば羊の乳で作った酒を飲み、腹が空けば鹿の干し肉を食う

鳳の羽が付いた矢を手中に持ち、彫刻を施した弓を背中に斜めに掛ける

宴席で酒を飲んで胡旋の踊りをし、それが絵に描かれている”

私は六邦教首の韓延壽でございます。私は天文を知り、地理に明るく、気を観察して、

風雲を見分ける。黄石公の三略の兵法を知り、呂望の六韜の書を学んだ。我が配下には百万の蕃兵と、千人の将軍がいる。蕭天佐、蕭天佑、土金宿、耶律灰、都骨林、忽里歹がおり、また軍師の顔洞賓もいる。私は常に東京を取る意志と、汴梁を奪う心を持っているが、いかんせん大宋には楊六めがおり、瓦橋関などの三関を守っている。しかし私が人を遣わして聞いたところ、楊六めが死んだという。私はこれから我が将を集め、十万の蕃兵を率い、まず銅臺を取り、それから汴梁を取って、私の平素からの願いを叶えよう。これお前将軍達を呼んで参れ。

蕃兵 かしこまりました。将軍がたはどちらにおられる。

(二人の浄が都骨林と耶律灰に扮して登場)

都骨林

“私は元帥としてまことに聡明だが
対峙し戦うことはまるで苦手
砦から出れば中軍でたわむれ
常に天子の軍に陣営を脅かされる”

私は韓延壽配下の蕃将の都骨林でございます。こちらは私の甥の耶律灰。私は陣中で酒を飲んで遊んでいたところ、元帥に呼ばれ、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、都骨林と耶律灰がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、都骨林どのと耶律灰どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

都骨林 (まみえるしぐさをする) これは元帥、我ら二人をお呼びになったのは、いかなるご用でしょうか。

韓延壽 ひとまずそこにおれ。

(二人の浄が忽里歹と土金宿に扮して登場)

忽里歹

“私は蕃将としてまことに有能
陣中では雄々しさを発揮する
敵陣の前でも恐れはしないが
馬に乗ると魂が抜けてしまう”

私は韓延壽配下の蕃將の忽里歹でございます。こちらは土金宿。我らが裏山の狩獵地で酒や肉を食らってふざけていたところ、元帥に呼ばれ、何事かは知らぬが、元帥に会いに行こう。

土金宿 元帥がお呼びなのは、他でもない、本日は晴れていて暖かいので、我らと狩りをしようということに、違いあるまい。我ら蕃將は、歩くのが好きでなく、馬に乗る。何事もなければ、山に行つてぶらぶらする。つまずいて落ちて、頭を割る。そうしてふざけていたところ、元帥に呼ばれたので、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、忽里歹と土金宿がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、忽里歹どのと土金宿どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

忽里歹（まみえるしぐさをする）これは元帥、我ら二人をお呼びになり、どこへ遊びに行くのでしょうか。

韓延壽 ひとまずそこにおれ。

（二人の浄が蕭天佐と蕭天佑に扮して登場）

蕭天佐

“私は蕃將としてまことに素晴らしく
馬に乗らずに駆け足をする
どうしてずっとしくじったことがないかという
夏でも陣羽織を脱いだことがないから”

私は蕭天佐でございます。こちらは私の弟の蕭天佑で、共に韓延壽配下の將軍である。我ら北蕃の地は、はますげの草がまだらに生えることもなく、平らな沙漠が広がっている。私が陣營の中で肉を食い、その後山の中でとんぼ返りをしてふざけていたところ、元帥に呼ばれ、何事かは知らぬが、会いに行かなければ。

蕭天佑 兄貴、他でもない、きっと俺達に酒を飲ませて歌わせて遊ぶんだらうから、一つ行くとしよう。早くも着いたわい。これお前、蕭天佐と蕭天佑がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、蕭天佐どのと蕭天佑どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

蕭天佐（まみえるしぐさをする）これは元帥、我ら二人をお呼びになったのは、いかなるご用でしょうか。

韓延壽 お前達はひとまずそこにおれ。

（二人の浄が蕭虎と蕭彪に扮して登場）

蕭虎

“私は蕃将の蕭虎という者
戦いは慣れぬが太鼓を打つことはできる
もし南朝に捕らえられたならば
頭を振り回して一生苦しむ”

私は韓延壽配下の蕃将の蕭虎でございます。こちらは弟の蕭彪。我ら二人が狩猟地で乾し飯と乳を飲み食いしていたところ、元帥に呼ばれたが、きっと目論見があるのだろう。

蕭彪 兄貴、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、蕭虎と蕭彪の二人のおじさんがやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、蕭虎どのと蕭彪どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

蕭虎（まみえるしぐさをする）これは元帥、我ら二人をお呼びになったのは、いかなるご用でしょうか。

韓延壽 將軍達は全員揃ったな、お前達を呼んだのは他にもない、皆の者大いに喜んでくれ。私が遣わした者が南朝で聞いたところによると、楊六めが死んだという。私はこの度百万の蕃兵を率い、まず銅臺を取り、それから汴梁を取ろうと思うが、お前達諸将の考えはどうだ。

蕃将達 全て元帥のご指示に従います。

韓延壽 こうして心を一つにして合意を得たからには、これお前軍師の顔洞賓を呼んで参れ。

蕃兵 かしこまりました。軍師どのほどちらにおられる。

顔洞賓（浄が顔洞賓に扮して登場）

“髪は二筋に垂らし犬の皮衣をまとい

足に履いている靴はとてもきれい
昨日氷を砕いて馬に飲ませると
凶らずも水は流れてしまった”

私は姓を顔、名を雙梅、道号を洞賓と申します。韓延壽配下において手助けをし、軍師の職に就いている。私は塵を見れば敵の数を知り、土を嗅げば軍機を見分ける。道を奉じて静かに座り、仙人を尋ねて遊行する。松柏を食べ、山水に遊ぶ。黄色い冠をかぶり鶴の羽で織った衣をまとい、気を休め精神を養う。仙丹を飲み、風を飲み露をすすする。朝に参内し暮れに儀礼を行い、漁鼓簡板を打つ。髪を結び、彩絹の袋を掛ける。黄庭経を暗誦し、老子を尊ぶ。道の徳を語り、真の言を唱える。

“符を書き水にまじないをかけるが実は鬼を恐れ
鳳に跨り鸞に乗るがつまずいて頭を砕く
全く栄辱も束縛されることも無い
我こそ勞役に当たることを恐れる愚か者”

私は顔洞賓でございます。この度は元帥に呼ばれ、何事かは知らぬが、一つ行かなければ。早くも着いたわい。これお前、軍師の顔洞賓がやって来たとお知らせしてくれ。

蕃兵 かしこまりました。元帥にお知らせします、軍師の顔洞賓どのが来られました。

韓延壽 通してやれ。

蕃兵 かしこまりました。お通り下さい。

顔洞賓（まみえるしぐさをする）これは元帥、私をお呼びになったのはいかなるご相談でしょうか。

韓延壽 軍師よ、そなたを呼んだのは他でもない、南朝の楊六めが死んだそうだ。今日こそ吉日であるので、私は十万の蕃兵と、蕃将達を率いて、まず銅臺を取り、それから汴梁東京を取ろうと思う。ただ南朝に文武に優れた者がいるかもしれぬし、或いは楊六めがまだ生きているかもしれぬが、いかがであろう。

顔洞賓 元帥、かつて私がいなかった時には、楊六めを恐れたでしょうが、今や私がいるからには、一人の楊六めどころか、十人の楊六めがいても、恐れることはありません。

韓延壽 軍師よ、そなたに何か良い策があり、蕃将を率い、蕃兵を指揮し、南朝と対峙して戦おうというのか。

顔洞賓 私があやつらと戦い、対峙して敵を迎え撃つものではありませんが、明日私が一つの陣を布きますから、あやつらがもし私の陣を知っていたならば、我らはあやつらに降

伏するしかありませんが、私の陣を知らなければ、雲・應などの十六州や東京の町を我らに差し出させ、我らの馬を休ませることとなりましょう。元帥、一つの陣で、どうやってあやつらに町を差し出させるのかと言いたいのでしょうか。私のこの陣は、黄石公の三略の法になく、呂望の六韜の書にもなく、兵書の中にもなく、三巻の天書の中にあるものから、一つの天陣を取ったのです。この天陣の中には一つの天陣だけでなく、東西南北になぞらえ、前に朱雀、後ろに玄武、左に青龍、右に白虎があります。この四つの陣の外に、乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌の八卦陣を布きます。この八卦陣は、休・生・傷・度・景・死・驚・開の八門陣になぞらえます。この八門陣の外に、また二十八の陣があり、角・亢・氐・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・畢・奎・婁・胃・昴・壁・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・軫の二十八宿になぞらえます。この角・亢・房の中には參辰陣があり、どうしても救うことはできません。また十二の陣があり、寶瓶宮・人馬宮・磨羯宮・天蝸宮・天秤宮・雙女宮・獅子宮・巨蟹宮・金牛宮・白羊宮・雙魚宮・陰陽宮の十二宮辰になぞらえます。この十二の陣は、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二時になぞらえます。十二時は十八陣になぞらえ、十八陣は三十六陣になぞらえ、元帥は中軍に座し、中央になぞらえます。周辺にも陣があり、一羅睺・二土星・三金星・四水星・五太陽・六火星・七計都・八太陰・九木星の九曜になぞらえます。この九つの陣の外に四斗陣があり、東斗には十三将がいて、東斗十三星になぞらえます。西斗十四将は、西斗十四星になぞらえます。南斗六将は、南斗六星になぞらえます。北斗七将は、北斗七星になぞらえます。この四斗陣の前に、また五つの陣があり、金・木・水・火・土になぞらえます。外には天河陣があり、黄河九曲陣と互いに連なります。内には、羅睺と計都の二暗陣があり、左右から補佐します。この銅臺は亀のような城ですから、元帥は北方を北斗玄武七星陣になぞらえ、天関地軸陣を置き、東の陣には高々と紅の旗とのぼりを立て、それが太陽朝闕陣となります。西の陣は太陰元鐵陣です。正名を周天二十八宿陣といい、集まれば一つになり、散開すればその数は、全部で百四十二陣となります。

“我らの陣の前に朱雀を置いて五方を助け

後ろに玄武があり北斗七星が並び

また八卦乾坤陣があり

二十八宿は陰陽をなぞらえる

四斗九曜が陣に接し

更に黄河が九曲りする長さ
あやつらの軍馬が何千隊いようとも
この陣と戦えば皆殺し”

韓延壽 軍師にそのような素晴らしい策があり、陣を布くことができるのならば、この度
私が自ら多くの番兵を率い、楊六めを捕らえに行こう。

顔洞賓 元帥の仰る通りです。それならば、私は諸将を指揮して、それぞれ陣を布かせ、
必ずや楊六めを捕らえましょう。

韓延壽 軍師よ、そなたが陣を布いて楊六めを捕らえたならば、そなたを高い官職に封じ
よう。

顔洞賓 元帥はまだ私のことをわかっておられないようですね、私は凡人ではなく、あな
たがこのように旨い酒と肉で私をもてなして下さらなければ、私はどうしてあなたに替
わって楊六めを捕らえようとするのでしょうか。若くして祥雲に乗り水牛に乗って天に昇
ってから、長い時が経ちました。元帥はどうぞごゆっくり、私は先に陣へ戻るとしまし
よう。

“話を終えて天に昇ろうと
私は青雲に乗って帰る
そなたは私の仙郷がどこか尋ねるが
話せば驚いて魂も飛び去る
花を植えるのはわずかの間
韓湘子と私は親戚関係
王祖師は私の叔父
馬丹陽は私のお隣さん
張四郎は釣った魚を私に食わせ
張果老は私の祖父
私は藍采和の体につくノミ
漢鍾離の足に止まるヌカガ” (退場)

韓延壽 軍師は行ってしまったわい。皆の者、これから私と共に多くの番兵を率いて、南
朝と戦いに、一つ行くとしようぞ。

“将校を率いてぐずぐずせず
砦を出発してすぐに道程に就く

黒鷲の旗は色とりどりの旗にも勝り
北の辺境の軍はヒグマのように勇猛
兵士は誰もが勇敢で
砂漠の異民族はそれぞれが獍猛
馬が至るところ太鼓と旗が見え
陣を接すれば勝敗を決する”（退場）

胡祥（胥吏を連れて登場）

“経史をひたすら朝晩に修め
状元となり栄達を享受する
かつて書齋で勉学に励まなければ
どうして名を天下に残せたであろう”

私は胡祥でございます。幼い頃より儒学を学び、経書をよく読み、主席で及第して以来、度々抜擢を受けた。ありがたくも帝により、汝州太守の職に任じられた。着任以来、よく民の心を得ている。この度楊景は勝手に三関を離れ、謝金吾を殺したことにより、汝州へ流罪になった。奸臣の王欽若は、偽って詔を伝え、将校を派遣して楊景の首級を取ろうとした。私が楊景を評価するに、国家で一番の勇将であり、後にきっと重用される日が来るであろうから、私は牢の中の重罪人で、楊景と顔がよく似た者を、身代わりに死なせた。楊景を裏の庭園に潜ませ、トビの棚の裏、太湖石の辺りで、穴蔵を掘り、彼に名を隠し身を潜めさせ、夜になって木の蓋を打ち鳴らすと、彼が出て来て、私と酒を飲んで語り合うのだ。この度聞くところによると憎き契丹が、ひどく暴れ回っており、国境を侵し、銅臺を包囲して、緊迫した事態であるが、私が思うに、もし楊景が出陣したならば、夷の群れを掃討し、万里を太平にしてくれよう。あの時もし王欽若の奸計通りにさせていたならば、天の道に背くことになっていたであろう。今はすることもないので、奥座敷にて文書の整理をしよう。これお前門の見張りをし、軍事情況に何かあれば、私に知らせよ。

胥吏 かしこまりました。

呼延必顯（登場）

“自ら詔を受けて都を離れ
国を安らげ戦乱を収める者を求める”

私は呼延必顯でございます。私は敵陣を突破し、夜を徹して汝州に着いたが、ここが胡

祥太守の役所だ。これお前、使者が参ったと伝えよ。

胥吏 かしこまりました。太守様にお知らせします、使者の方が来られました。

胡祥（慌てるしぐさをする）使者が来たならば、私が自ら出迎えよう。（まみえるしぐさを
する）使者様には、お出迎えもせず失礼を致しました。

呼延必顯 胡太守よ聞かれよ、帝の命により、楊六郎が勝手に三関を離れ、謝金吾一家を
皆殺しにした罪は、全て許された。この度は人材を用いるべき時であり、楊景を差し出
し、彼を旧職に復帰させ、蕃兵を討ち滅ぼしに行かせたならば、朝廷より官位と恩賞が
下される。彼を出て来させるよう、命令に従え。

胡祥 使者様、楊景はどうに殺してしまいましたか。

呼延必顯 今楊景の将星を見るに、雙魚宮にぴったり接しており、この者が生きてると
いうことであるから、そなたは早く彼を差し出すのだ。

胡祥 使者様、私は決して隠し立ては致しませぬ。

呼延必顯 本当にいないのか。私は帰るぞ。

胡祥 使者様には宴席でもいかがでしょうか。

呼延必顯 宴席など無用。太守よ、隣の家は何か。

胡祥 古い寺です。

呼延必顯 私はひとまずあの寺で一泊して、明日早く出発しよう。（退場）

胡祥 使者は行ってしまったわい。この一件は、まだ真偽がわからぬ。夜になってから、
楊將軍に知らせ、相談して決めよう。私はひとまず奥座敷へ行くとしよう。（退場）

呼延必顯（登場）私は呼延必顯でございます。帝の勅命を奉じ、汝州へやって来て、楊景
を召し出して、銅臺の帝を救おうとした。しかし太守の胡祥は、楊景は既に死んだと言
う。言葉はきっぱりとしていたが、顔は慌てており、きっと後ろめたいことがあるので
あろう。寺の僧に尋ねたところ、この寺の裏の垣根は、胡太守の庭園と繋がっていると
のこと、今夜は良い天気で、月が明るく風が爽やかなので、この垣根を跳び越えて、庭
園に潜み、真偽のほどを探れば、詳しいことがわかるであろう。（垣根を跳び越えるしぐ
さをする）サッと、垣根を跳び越えたぞ。見事な庭園だ。月は水のように明るく、笛の
音もせず静かなので、私はこの太湖石の背後に行き、しばらく足音を忍ばせ、聞き耳を
立ててみよう。

楊景（正末が楊景に扮して登場）私は楊景でございます。私が素晴らしい功績を重ねたの
で、ありがたくも帝は、私を鎮守三関経略使に任じられた。勝手に三関を離れ、謝金吾

一家十七人を殺したことにより、本来は死罪となるはずであったが、帝は私の功を惜しまれ、私を汝州の酒醋都管とされたので、ここへやって来た。凶らずも奸臣の王欽若が、詔を偽って伝え、役人を派遣して私の首級を取りに来た。胡祥太守のお陰により、牢の中の死刑囚で、私に顔が良く似た者を、私の身替わりとし、私を死から救って頂くというご恩を受けた。そこでこの太守の庭園で、穴蔵を掘り、名を隠し身を潜めている。それはなぜか。思うに我ら父子八人は皆戦死し、この楊景一人だけが残されたが、私は国家のために重ねて戦功を立て、蕃族を討ち滅ぼしたいと思っているのだ。(唱う)

【仙呂・點絳脣】

“思えばかつては辺境を長らく鎮守し
あの佞臣を除いたこともあった
我らは戦乱を平定し、兵士を鍛錬し
私は官位を贈られ、君主の命に与っていた”

【混江龍】

“私はかつて旗が振り下ろされるや否や勝利を収め、敵将を捕らえるのにも慣れていて
七擒七縱をまねるのではないが、いつも千回戦えば千回勝利した
捕虜を捕らえ破れ太鼓のような砦を火で焼いたこともあれば、匈奴を破り樺の皮のよ
うな城を砲で打ち砕いたこともある
怒りを頭わに敵に臨み勇敢に戦い、意気揚々と陣営を構える
私が勇敢な兵を率いればすぐに勝敗は決し、妖気が払われ万里にこの名が知れ渡る”
かつて私は蕃兵と戦い、(唱う)

“あの韓延壽は北へ逃げて行き、南へ来ようとはしなかった”

思えばこの楊景は東西を掃討し、南北へ征討し、眠くなれば馬上で眠り、喉が渴けば刀に付いた血を飲み、世を覆う程の功を立てた。凶らずも今は名を隠し身を潜めているが、いつになれば私が輝かしく顕彰される時が来るのであろうか。(唱う)

【油葫蘆】

“私はこの世で功を立てて永久に名を残し
山河を守り国家を盛んにしよう
やがて官僚と共に高官の列に並び
子孫が封じられることを望む
麒麟閣に凶像を飾られることはできなくとも”

この楊景は大言を吐くわけではないが、(唱う)

“私は班超が西戎を平定して玉関を鎮守したようにし、馬援が南蛮にて銅の柱で国境を決めたことをまねる

このように忠義を尽くし国に報いる者は天命に従っているのであり

青史に名を残すことを得る”

(呼延必顯が聞くしぐさをする)

楊景 (唱う)

【天下樂】

“我ら子や臣下たる者は志が誠実であるべきで

私はよくよく、心から詳しく話したのだ

私は今は名を隠し身を潜めて名利から離れている

思えばかつては遠く万国へ行き、辺境を鎮撫して四海を清め

帝のおかげで太平に治めた”

呼延必顯 (顔を背けるしぐさをする) 天の助けか、宋朝にとって幸い、天下の民にとって幸い、何と楊景が生きていたぞ。(見るしぐさをする) 彼が穴蔵の中で話しているが、入り口がどこにあるのかわからないので、もう少し聞いてみよう。

楊景 楊景よ、いつになれば輝かしく顕彰される時が来るのであろうか。私は昼間は灯火を点し、兵法の書を読んでおり、夜になって誰かがこの木の蓋を三回叩けば、私は出て来て太守と酒を飲んで語り合う。そろそろ太守が私を訪ねて来るであろう。

呼延必顯 楊景が穴蔵の中で言うことによれば、誰かがこの木の蓋を三回叩けば、彼は出て来て太守と話をするらしい。試しにこの木の蓋を叩いてみよう。(叩くしぐさをする) 一、二、三。

楊景 日も暮れたので、きっと太守が木の蓋を叩いているのであろう。このかんぬきを開けて、木の蓋をお開けしましょう。

呼延必顯 (楊景を見て捕まえるしぐさをする) ややや、楊將軍、何とこちらにいたとは、亡くなられたのではなかったのですかな。

楊景 (慌てるしぐさをする) 一体どうしたことだ。

呼延必顯 出て来られよ、話をしよう。楊將軍、そなたの罪は軽くはないぞ。私は私用で来たのではなく、帝の命を受けており、この度北蕃の韓延壽が、銅臺を包囲しているので、私は夜を徹してそなたを召し出しに来たのだ。胡太守はそなたが死んだと言ってい

たが、何とこの穴蔵の中に隠れていたとは。

楊景 将軍、この楊景が多くの罪を犯したからです。

呼延必顯 楊将軍よ、皇居に向かいひざまずけ。帝はそなたが勝手に三関を離れた罪を、
全てお許しになられた。この度北蕃の韓延壽が、蕃兵を率いて銅臺を包囲しており、そ
なたが蕃兵を撃退すれば、旧職に復帰させ、官位と恩賞が下される。帝のご恩に感謝せ
よ。

楊景 帝のご恩に感謝致します、将軍も道中ご苦労様でした。

呼延必顯 国家の危機を救うのに、どうして奔走せずにおれようか。

楊景 将軍、この楊景がいれば、あの賊軍など、何程もありません。あやつらはまことに
無礼である。

呼延必顯 将軍、この度蕃族は暴れ回って、銅臺を包囲しており、軍師の顔洞賓は、兵を
率い陣を布くのに巧みであるが、そなたはどのように相手をするのか。

楊景 (唱う)

【後庭花】

“聞けばぎょろりと目を怒らせ、むらむらと殺気が生じる
顔洞賓は陣を布くのが巧みではなく、韓延壽は百万の兵を死なせる運命
我が働きをご覧あれ
私に二言はありません”

将軍ご安心を。

“私はきっと瞬く間にあやつらを真っ平らにしてやろう”

呼延必顯 将軍、韓延壽が蕃兵を率いて銅臺を包囲しているので、帝は私にそなたを召し
出させて韓延壽を破らせようとしておられる。将軍、そなたはどのように計略を定めて、
あの蕃兵を破るのか。

楊景 将軍ご安心を。(唱う)

【金盞兒】

“私は巧みに兵を並べて雄々しく戦い
優れた計略を存分に發揮する
私が賊を捕らえて斬り辺境の城を平定するのをご覧あれ”

呼延必顯 将軍が出陣すれば一体どうなるのか。

楊景 私が出陣すれば、(唱う)

“城の堀には鮮血が流れ、あちこちに死体が横たわる”

呼延必顯 將軍、この度韓延壽は蕃兵を率いて国境を侵しているのだ。

楊景 (唱う)

“韓延壽は国境を侵すどころか、わざわざ命を捨てに来たのだ”

呼延必顯 將軍、少し話すのを止めよう、誰かが来たようだ。

胡祥 (登場) 私は胡祥でございます。本日早くに、朝廷から使者が遣わされて楊景を召し出しに来たが、まだ真偽がわからぬ。私は楊景は死んだと堅く言い張った。あの使者は役所に泊まろうとせず、この州の役所に近い寺へ泊まりに行った。日も暮れたので、楊將軍に話して、よく警戒させよう。早くも庭園に着いたわい。(見るしぐさをする) おや、一体どうして穴蔵の木の蓋が開いているのか。近付いて見てみよう。

(まみえるしぐさをする)

呼延必顯 ややや、胡太守がおいでとは、楊將軍は亡くなったと言われませんでしたかな。

胡祥 (ひざまずくしぐさをする) 使者様、この胡祥めは、偽りではないかと恐れ、不届きにも楊景を隠し、罪は天にも達しますが、どうかお怒りをお鎮め下さいますよう。

呼延必顯 太守よお立ちなされ。今の世は乱れており、安否も保証されてはおらず、これらの行為は、太守が君主を愛し国を憂いた忠義の行いと見るべきであり、気にすることはない。この度は楊景が生きていたのであるから、そなたの罪も全て許そう。

胡祥 これ皆の者宴席の用意をせよ、お二方の將軍へのはなむけとするのだ。

楊景 太守には大変お世話になり、このご恩には後日きっと報いましょう。

呼延必顯 夜も明けたので、旅立つとしよう。

楊景 私一人の力では太刀打ちし難いので、私はこれから將軍と共にまず鄭州 (河南省鄭州市) へ行き、焦贇を召し出し、焦贇に私の手紙を持たせて、太行山へ行かせて、私の二十四人の指揮使を招安することにすれば、私の弟達は私の手紙を見て、必ずやって来るでしょう。私と將軍が瓦橋関などの三関に駐屯し、弟達が兵を率いて全員そろいのを待ってから、韓延壽を捕らえるのも、遅くはないでしょう。(唱う)

【尾聲】

“私はこの度速やかに銅臺を救いに、夜を徹して辺境へ出陣する

まずは太行山へ行き英雄や指揮官達をまとめよう”

呼延必顯 楊將軍よ、韓延壽は無能だが、あやつの配下に、顔洞賓という軍師がいる。あの者は天文を知り、地理に明るく、兵を率い陣を布くのに巧みで、とても手強いぞ。

楊景 將軍、それは違います。(唱う)

“陣を布く軍師の顔洞賓など誉めるべきでなく、英雄という根拠はない

両陣が相い対すれば、殺気が沸々と湧き上がる

私はあの十万の賊兵を、皆殺しにしてやろう”

韓延壽と顔洞賓を捕らえたならば、(唱う)

“その時はパカパカと馬をゆっくり歩ませよう”

私が勝利を収めたならば、(唱う)

“カンカンと鞭で金の鐙を叩こう”

私の乗る馬と、手中の槍には、万夫不当の勇があり、この楊景は大言を吐くのではないが、(唱う)

“我らが楽しげに声をそろえて凱歌を唱うのをご覧あれ”(共に退場)

[注]

- 番番番～…「哭存孝」(内府本) 第一折の李克用や、「存孝打虎」(于小穀本) 第一折の李克用もここと同じ趣向の登場詩をうたう。
- 胡旋舞…西域のソグト族の舞踊団が長安に来て伝えたという舞踊の名。猛烈な速度で体を回転させて踊る。唐の玄宗時代に朝廷の内外で流行し、楊貴妃と安禄山はその踊りの名手であったとされる。『楊太真外傳』下・卷四「禄山晚年益肥、垂肚過膝、自秤得三百五十斤、於上前胡旋舞、疾如風焉(安禄山は晩年には段々と太り、腹の肉が膝の下まで垂れており、自ら体重を量ってみると三百五十斤もあったが、帝の御前で胡旋舞をする時には、風のように速く動いた)」。
- 六邦教首…「六邦」は「六蕃」に同じか。六つの蕃族、すなわち多くの蕃族ということ。「教首」は武芸の師範。
- 燒酒…蒸留酒。「白酒」ともいう。「竹葉舟」(元曲選本) 第一折、行童の白に「我自去方丈裏吃燒酒狗肉去也(私は方丈へ酒と犬の肉を食らいに行こう)」とある。
- 羊酥酒…羊の乳から造った酒であろう。
- 阿的…「兀的」に同じく軽い助詞であるが、より古い表記。物を指し示す言葉としての用法もあり、「阿堵」の転化であるという。貫雲石『孝経直解』聖治章第九に「把自家父母落後了、敬重別人呵、阿的不甚別了孝道的勾當那甚麼(自分の父母を粗末にし、他人を大事にするなら、これこそ孝道に背くではないか)」とある。

- 打圍場…周りを囲って皇族や貴族用とした狩猟地。「五侯宴」(内府本) 第二折、李嗣源の白に「圍場中驚起一個雪練也似白兔兒來(狩猟場の中で白い練り絹のようなウサギが驚いて飛び出て来た)」とある。
- 答刺孫…蒙古語 **darasu(n)** の音写。漢訳は「酒」。「打刺孫」「答刺蘇」「答刺速」「大辣酥」にも作る。「哭存孝」(内府本) 第一折、李存信の登場詩に「撒因答刺孫、見了搶著吃(良い酒を見れば奪って飲む)」とある。
- 米罕…蒙古語 **miqa(n)** の音写。漢訳は「肉」。「米合」「米哈」「蜜匣」にも作る。「哭存孝」(内府本) 第一折、李存信の登場詩に「米罕整斤吞、抹鄰不會騎(肉を一斤丸呑みすれば、馬に乗れない)」とある。
- 頂門…頭の上。頭蓋。「貶夜郎」(元刊本) 第三折【醉春風】「半醒時猶透頂門香(半分酔いが醒めてもなお脳天からしみ出す酒の香)」。
- 常川…間断なく。引き続いて。「老君堂」(内府本) 楔子、高熊の登場詩に「常川吊下馬來、至今跌破腦袋(しょっちゅう馬から落ち、今では頭が破れてしまった)」とある。
- 倒刺…蒙古語 **dagula** の音写。漢訳は「唱」。「倒喇」にも作る。『還魂記』第四十七齣に「[老旦作看丑介] 倒刺倒刺。[丑笑介] 怎説。[貼] 要娘娘唱箇曲兒([蕃将が楊氏を見るしぐさをする] 倒刺倒刺。[楊氏が笑うしぐさをする] 何と言っているの。[通訳] 女王様に歌を唱ってもらいたいのです)」とある。
- 撒髑…『元曲釋詞』『戲曲詞語匯釋』などは、蒙古語で「頭」のことで「撒婁」にも作るとする。「岳飛精忠」(内府本) 第三折、粘罕の退場詩に「大家又去弄虚頭、丢了撒婁休後悔(皆が手練手管を弄しているが、頭を失ってから後悔するな)」とある。通常、蒙古語で「頭」は **teri'ü(n)** («帖里兀」「帖理溫」「忒婁溫」)。
- 兀刺…蒙古語 **ula** の音写。漢訳は「革履」。靴以外に足の裏や靴の裏の意にもなる。「烏拉」にも作る。高安道【哨遍】套「皮匠説謊」【尾】「新靴子投至能夠完備、舊兀刺先磨了半截底(新しい靴ができあがる前に、おんぼろ靴の底が半分すり減った)」。
- 不防…突然、思わず。「不隄防」「不望」に同じ。『董解元西廂記諸宮調』卷五【糖多令】「不防憂損天和(図らずも憂いにより体調を損なった)」。
- 鶴氅…鶴の羽で織った衣。道士の着物。『三國志演義』第二十九回に「策起身凭欄觀之、見一道人、身披鶴氅、手攜藜杖、立於當道(孫策が立ち上がり欄干にもたれて見てみると、一人の道士が、身に鶴の羽で織った衣をまとい、手にアカザの杖を持ち、道に立っていた)」とある。

- 漁鼓簡板…「漁鼓」は竹筒に魚や蛇の皮を張ったもので、「愚鼓」ともいう。「簡板」は竹製の二本の拍子木で、「簡子」ともいう。右手に漁鼓、左手に簡板を持ち、語りや歌唱の伴奏打楽器とする。「岳陽樓」(古名家本) 第四折【水仙子】「愛打的簡子愚鼓(私は簡子と愚鼓を打つのが好き)」。
- 倒大來…大いに、甚だ。『劉知遠諸宮調』卷二【牧羊關】「洪義心腸、倒大來乖劣(李洪義の氣性は、非常に意地悪)」。
- 參辰…二十八宿に属する星の名。辰星は房星の別名で東に位置し、參星は西に位置する。互いに正反対に位置することから、敵対することを喩える場合もある。「氣英布」(元刊本) 第三折【倘秀才】「既共俺參辰卯酉、誰吃恁這閑茶浪酒(我らと敵同士になったからには、誰がこのつまらぬ茶や酒を飲もうか)」。
- 長川…「常川」に同じ。永遠に、ずっと。『西遊記』第四十四回、僧の白に「那仙長奏准君王、把我們畫了影身圖、四下裏長川張掛(あの仙人達は国王の許しを得て、我らの人相書きを作り、あちこちにずっと掛けています)」とある。
- 磨羯宮…『全元戯曲』は「磨蝸宮」に作るが、鈔本が「磨羯宮」に作るの正しい。
- 羅睺…九曜に属する星の名。日月の運行に逆行し蝕を起こす。また阿修羅の一つで、手で日月を隠して諸天を苦しめるといふ。「羅睺羅」ともいう。『劉知遠諸宮調』卷十一【蘇幕遮】後の【尾】に「知遠善如玉帝昇金殿、惡似羅睺撞月宮(劉知遠は穏やかな時は玉帝が金殿におられるかのようだが、怒った時には羅睺が月を侵すかのよう)」とある。
- 計都…九曜に属する星の名。日月の運行に逆行し蝕を起こす。また凶星の一つ。『金瓶梅詞話』第四十六回、婆子の白に「你老人家、今年計都星照命、主有血光之災(あなたは、今年計都星が照らしており、血を流す災いがございます)」とある。
- 龜城…四川の成都について、城作りが難航していた際、大亀が揚子江から浮かび上がり東子城(曲輪)まで来て死んだので、占いにより亀の上に土を築くようにすると城が完成し、「亀化城」と呼ばれたという話が『搜神記』卷十三にある。銅臺とどのように関わるかについては不明。
- 撒因…蒙古語 sayi(n)の音写。漢訳は「好」。良いということ。「撒亦」「撒羸」「賽因」「塞因」にも作る。「哭存孝」(内府本) 第一折、李存信の登場詩に「撒因答刺孫、見了搶着吃(良い酒を見れば奪って飲む)」とある。
- 王祖師…全真教の開祖である王重陽(一一一二～一一七〇)のこと。陝西省咸陽の人。十二世紀半ば、金朝治下の華北地方にて全真教を起こす。当初は長安で布教活動をする

も失敗し、大定七年（一一六七）四月、庵を焼き払って山東地方へ旅立つ。丹陽子らを出家させ、彼らを引き連れて故郷へ帰還する途中、開封で没する。

○馬丹陽…元の名は馬從義（一一二三～一一八三）。寧海（山東省牟平縣）の有力者であったが、布教の旅をしていた王重陽と出会い、大定八年（一一六八）二月に出家。法名を鈺、号を丹陽子とつけられる。全真教の七真や重陽門下の四哲に数えられ、王重陽の死後は全真教の事実上の第二代教主となる。

○張四郎…張仙とも呼ばれる民間伝説の神仙。「鐵拐李」（元曲選本）などでは八仙の一人とされている。弾き弓を手にしており、それで災難を撃退して人々を救う。また子を授ける靈驗があるともされる。張元霄（張遠霄）や後蜀の後主・孟昶などがモデルとなっている。

○雜彩…ここでは「雜彩繡旗」「雜綵旗」のことであろう。「博望燒屯」（内府本）第三折、夏侯惇の白に「花腔邊鼓播、雜彩繡旗搖（飾り胴の太鼓が響き、色とりどりの縫い取りの旗が揺れる）」とある。

○鰲頭…科挙に第一等で及第すること。状元。朝廷の階に大亀が刻まれており、その頭の位置に主席で及第した進士を立たせたことから。「金錢記」（元曲選本）第二折【叨叨令】「則被你稱了心也麼哥、則被你稱了心也麼哥、煞強似占鰲頭瀛穩步洲選（思いがかなうならば、思いがかなうならば、科挙に主席で及第し朝臣となるよりも嬉しいこと）」。

○崢嶸…出世の様をいう。曾瑞【哨遍】套「羊訴冤」【耍孩兒】「想道是物離鄉貴有些崢嶸、撞著個主人翁少東沒西（物は本場を離れば値打ちが出るとやらで出世ができると思ったが、巡り逢った主人は無一文）」。

○芸窗…書齋のこと。「羅李郎」（元曲選本）第一折【後庭花】「教你向芸窗下把書埋首、却元來糟屋中酒浸頭、直恁般好風流（そなたを書齋にて書物に没頭させたが、なんと酒屋で酒浸りとなり、ひたすらこのように風流を好むとは）」。

○隱姓埋名…姓名を隠すこと。「陳搏高臥」（元刊本）第一折【醉中天】「休則管理名隱姓。卻交誰救那苦慳慳天下生靈（ひたすらに名を隠すのを止められよ。誰に苦しんでいる天下の民を救わせれば良いのか）」。

○猖獗…たけり狂う。激しく暴れる。「黃梁夢」（元曲選本）楔子、高太尉の白に「近日蔡州反了吳元濟、好生猖獗（先日蔡州にて吳元濟が謀反を起こし、猛威を振るっている）」とある。

○暗昧…いわく因縁。後ろめたいこと、人に言えないことがある。「村樂堂」（内府本）第

- 三折【集賢賓】「這廝每其中必暗昧、就裏決爭差（こやつらにはきつといわくがあり、真相には誤りがあるに違いない）」。
- 阿可綽…ドサリ、ドタリという擬音語。「阿磕綽」「阿各綽」にも作る。「四春園」（脈望館本）第二折、裴炎の白に「阿可綽、我跳過這牆來、一所好花園也（ドサッと、この垣根を跳び越えると、見事な花園であった）」。
- 潛踪躡足…足音を忍ばせる。また姿を隠すこと。「潛踪躡脚」にも作る。「東坡夢」（元曲選本）第三折【滾繡毬】「俺只索悄冥冥躡足潛踪、上塔基、近窗孔（私はこっそりと足音を忍ばせ、階段に登り、窓に近付く）」。
- 經略使…辺境守備を司る武官。
- 七擒七縱…巧みな兵法で敵を思うままに翻弄すること。諸葛亮が南蛮の孟獲を七度捕らえて七度釈放し、遂に心服させたという故事に基づく。「小尉遲」（内府本）第一折【村裏迓鼓】「據着你一衝一撞、登時間將你七擒七縱（そなたが一突きして来ようとも、たちまちそなたを捕らえてみせよう）」。
- 常則是…ずっと。いつも。「常只是」にも作る。「硃砂擔」（元曲選本）第一折【四季花】「這些時閃了脚腕常只是怕誤了途程（先程足首の筋を違えてしまい旅が遅れることをずっと心配している）」。
- 擗鼓寨…勇敢に戦う様を「擗鼓奪旗（太鼓を破り旗を奪う）」というが、「擗鼓寨」は破れ太鼓のような砦ということか。
- 樺皮城…樺の皮のようにつまらぬ城ということか。樺の木の皮は、蠟燭を巻いたり刀の柄に巻いたりするのに用い、また厚顔な様を「樺皮臉」というように、厚いというイメージもある。
- 埋名隱跡…姓名を隠すこと。「裴度還帶」（脈望館本）第二折、李公子の白に「或有山間林下、懷才抱德、隱跡埋名、屈於下流（ある者は山林にて、才や徳を抱きながら、名を隠し、下流に屈している）」とある。
- 簪纓…貴人の冠を留めるこうがいと、冠のひも。転じて高位高官の者を指す。「張協狀元」第十五出【白】「除非嫁個讀書人、不問簪纓不問貧（讀書人に嫁ぐのでなければ、お役人であろうが貧乏人であろうが構わない）」。
- 麒麟閣…漢の宣帝が十一名の功臣の像を掲げさせたことから、巧臣として顕彰されることを表す。
- 班超平西戎鎮玉關…「玉關」は甘肅省敦煌縣の西にある、西域との境に設けた関門。班

超は後漢の名将で、西域において匈奴を始めとする異民族と戦い続けること三十年余り、上疏して「臣敢えて酒泉郡に到ることを望まず、但だ願わくは生きて玉門関に入らんことを」と言った（『後漢書』卷四十七「班超傳」）。

○馬援定南蠻銅柱境…後漢の伏波將軍・馬援が交阯郡（ベトナムの北部）を討った際、銅の柱を立てて境界としたこと。『後漢書』卷二十四「馬援傳」の注に「廣州記曰、援到交阯、立銅柱、爲漢之極界也（『廣州記』に言うには、馬援は交阯に着くと、銅の柱を立て、漢の領土の境界とした）」とあり、『蒙求』にも「伏波標柱」とある。

○梯航…はしごを掛けて山に登り、船に乗って海を渡る。海や山を越えて遠方へ行くこと。『舊唐書』卷一八二「高駢傳」に「塞北、日南、悉來朝貢。黠戛、善闡、並至梯航（塞北や日南の地も尽く朝貢し、黠戛や善闡の異民族もやって来る）」とある。

○骨碌碌…ここではぎょろりと目をむく様。「古魯魯」にも作る。「單鞭奪槊」（脈望館本）第四折【刮地風】「見忽地將虎鞭忙搨、骨碌碌怪眼爭圓（たちまち鞭を振り回し、ぎょろりと眼を怒らせる）」。

○單註…運命によって定められていること。「單注」「單主」にも作る。「漁樵記」（息機子本）第二折【滾繡毬】「也則是單注着俺這窮漢每月值年災（我ら貧乏人はいつも災難に遭う運命というもの）」。

○一言爲定…一度断言したことは改めない。二言は無い。「麗春堂」（元曲選本）第二折、李圭の白に「一言爲定、元說道輸了的搽墨臉（二言は無し、負けた者は顔に墨を塗ると言いました）」とある。

○鋪謀定計…策を巡らすこと。「四春園」（脈望館本）第二折【梁州】「本待要鋪謀定計不教透、送的我有家難奔、有事難收（抜かりなく策を立てたつもりが、家に逃れることも、事を収めることもできなくなった）」。

○公館…官僚や富豪の邸宅。「馮玉蘭」（元曲選本）第一折、馮太守の白に「張千、你跟我往公館中歇息（張千よ、お前は私に従い屋敷へ行って休むがよい）」とある。

○跫躑躑…馬の蹄が地を踏む音。「圪登登」にも作る。『董解元西廂記諸宮調』卷六【醉奚婆】後の【尾】に「騎斬瘦馬兒圪登登的又上長安道（痩せ馬に乗りパカパカと長安への道に行く）」とある。

○響璫璫…よく音が響く様。「東坡夢」（元曲選本）第三折【煞尾】「聽着這疎刺刺枕畔風、響璫璫樓上鐘（さらさらという枕元の風、カンカンと響く樓上の鐘を聞く）」。

第二折

〔訳〕

岳勝（手下を連れて登場）

“武芸に熟練して智恵にも優れ
かつて呂望の六韜の文を学んだ
長らく三関を鎮守して蕃兵を脅かす
我こそは勇敢に敵を迎え撃つ岳排軍”

私は花面獣の岳勝でございます。今や我らは北蕃を防ぎ、多くの功を立てたので、指揮使の官に任ぜられている。私一人だけではなく、孟良、焦贊、李瑜、張蓋ら二十四人がおり、我らは楊景兄者配下の將軍として、長らくこの瓦橋関などの三関を鎮守している。兄者と焦贊が勝手に三関を離れ、謝金吾一家十七人を殺したために、楊景兄者は汝州へ流罪となり、焦贊は平民に落とされ鄭州へ流された。凶らずも兄者は汝州にて、既に亡くなられてしまった。思えば我ら二十四人の指揮使は、六郎楊景兄者のおかげを蒙った。今や兄者は亡くなられ、焦贊は鄭州にて気が狂ってしまった。我ら諸将は三関を捨て、軍を率いてこの太行山へ来て、落草して盜賊となった。我らは毎日ここで酒を飲んで楽しんでる。ただ今弟の孟良が山寨の見回りをしている。酒と肴の用意をしておけば、そろそろ弟がやって来るだろう。

焦贊（登場）

“三関を鎮守するのは好漢で
蕃兵を殺して散り散りにする
軍の前や陣の後に先駆けする
我こそは魚眼司公の焦光贊”

私は焦光贊でございます。勝手に三関を離れ、謝金吾一家十七人を殺したために、私は鄭州にて平民に落とされた。楊景兄貴が亡くなったと聞いて、私は鄭州にて気が狂ったふりをした。しかし何と楊景兄貴は死んでおらず、自ら鄭州へやって来て、私に会われ、帝の命を言われるには、北蕃の韓延壽が銅臺を包囲しているので、この度呼延必顯を遣わして、我ら四人の罪を、全て許し、我らに韓延壽を捕らえさせ、蕃兵を撃退したならば、我らを旧職に復帰させるとのこと。凶らずも岳勝ら諸将は、三関を離れ、皆太行山で落草して盜賊になっている。私は今から楊景兄貴の手紙を持って、太行山へ行き、岳

勝兄貴を招安しに、一つ行くとしよう。早くも着いたわい。おい下っばよ、焦贄がわざわざ謁見に参ったと知らせてくれ。

手下 かしこまりました。はっ、兄者にお知らせします、焦贄という者が謁見に来ました。

岳勝 焦贄は鄭州で気が狂ってしまったのに、どうしてここに来たのだ。通してやれ。

手下 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

岳勝 焦贄よ、お前は鄭州で気が狂ってしまったのに、一体どうして正気に戻ったのだ。

焦贄 兄貴、私は気が狂ったのではなく、楊景兄貴が死んだと聞いて、気が狂ったふりをしていたのです。何と楊景兄貴は死んでおらず、自ら鄭州へやって来て、私に会われ、北蕃の韓延壽が、蕃兵を率いて銅臺を包囲しているので、この度呼延必顯を遣わして、我らの罪を全て許し、我らに韓延壽を捕らえさせ、蕃兵を撃退したならば、我らを旧職に復帰させると言われました。兄貴が書いた手紙がここにありますので、読んでみて下さい。

岳勝 手紙を見せてみろ。(読むしぐさをする) まことに兄者の字だ。我ら諸将は今から銅臺へ向かうぞ。

焦贄 どうして孟良の姿が見えないんですか。

岳勝 孟良は山寨の見回りに行っているが、そろそろ戻って来るであろう。

孟良 (登場)

“胸に韜略を抱いて黄石公に学び
将兵を率いて英雄ぶりを明らかにする
官軍や捕り手も我が名を聞けば恐れる
我こそは智謀に優れる孟火星”

私は孟良でございます。楊景兄貴と、瓦橋関などの三関でお別れしてから、兄貴は勝手に三関を離れたために、汝州へ流罪になった。凶らずも楊景兄貴は亡くなってしまわれ、我ら兄弟は、兄貴が死んだと聞いて、三関を捨て、皆でこの太行山にて、已むを得ず落草して盗賊になった。我ら兄弟は、岳勝兄貴を頭領としている。私は今山寨を見回って戻って来たが、一人も侵入した者はいなかった。私は兄貴に会いに、一つ行くとしよう。これお前、孟良がやって来たと言わせてくれ。

手下 かしこまりました。兄者にお知らせします、孟良どのが来られました。

岳勝 焦贄よ、お前はひとまずそこに隠れ、孟良が来てから、会うがよかろう。通してや

れ。

手下 かしこまりました。お通り下さい。

(まみえるしぐさをする)

岳勝 弟よ喜べ、我らが楊景兄者は死んでおらず、今現在も生きているぞ。

孟良 兄貴、誰が言っていたんですか。

岳勝 弟よ、現に手紙がここに届いているし、こやつを見よ。

孟良 (焦贊とまみえるしぐさをする) こりゃあ焦贊兄貴じゃないか。鄭州で気が狂ったという話だったのに、一体どうして正気に戻ったんですか。

焦贊 弟は知るまいが、楊景兄貴が死んだと聞いて、私は鄭州で気が狂ったふりをしてきたのだ。今も楊景兄貴は生きていて、三関でお待ちであるから、我ら諸将は三関へ行って楊景兄貴にお会いし、共に韓延壽を破るとしよう。

孟良 それならば、我らは今から山寨を引き払い、兵を率いて兄貴に会いに行きましょう。

岳勝 では今から將校達の点呼をし、韓延壽を破りに一つ行くとしよう。

“英雄たる將は志気が高く

軍馬を走らせ故郷へ戻る

生死を顧みず蕃兵を破り

この岳排軍が領土を広げるのをご覧あれ”(共に退場)

寇萊公 (兵士を連れて登場)

私は寇萊公でございます。この度韓延壽が銅臺を包囲しているので、帝が苗士安に夢占いをさせたところ、楊景が汝州にいるという。私は呼延必顯を遣わして、敵陣を突破し、汝州へ行き、胡祥太守に、勤王保駕將軍を差し出させることにした。出発してから長い間経つが、まだ戻って来ない。これお前城の上から見張りをし、援軍が来たならば、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

(正末が楊景に扮し岳勝・焦贊・孟良・李瑜・張蓋・楊宗保・呼延必顯・兵士を連れて登場)

楊景 弟達よ、我らは今銅臺に着いたが、蕃兵が見えるではないか。

岳勝 兄者ご安心を、我ら英雄たる諸將にかかれば、必ずや韓延壽を捕らえてやりましょう。

楊景 弟達よ、忠心を持って力を尽くせ。我ら兄弟の威厳と勇気にかかれば、野蛮な賊な

ど、何程のことがあろうか。(唱う)

【中呂・粉蝶兒】

“この度將軍や兵士を率い

私が北蕃の兵をあっという間に捕らえるの見よ

我が八門陣遁甲の書にかかれば”

岳勝 兄者、我ら諸將の優れた武芸で、必ずや韓延壽を捕らえてやりましょう。全軍しっ
かりと陣を布け。

楊景 (唱う)

“あやつが旗を並べ砦を構えても”

おい、弟よ。(唱う)

“あやつが四方を堅固にし

何万の兵士を率いても

私はこの度優れた才を頼みに計略を巡らせ指揮を執る”

岳勝 兄者、あなたの弟であるこの岳勝、焦贊、孟良、李瑜、張蓋ら諸將にかかれば、必
ずや成功するでしょう。

楊景 弟よ、お前の言う通りだ。まことに英雄たる将である。(唱う)

【醉春風】

“我が方の焦光贊は志が堂々と勇ましく、孟火星は肝っ玉が大きい”

岳勝 あなたの弟達はこのように勇敢でありますから、我らが必ずや韓延壽を捕らえてや
りましょう。

楊景 (唱う)

“我が軍の英雄にして勇敢に戦う岳將軍よ、弟よ、私は確かに約束しよう

私は心に忠義を持ち、胸に兵法を抱き、法により軍律を行う”

都骨林 (浄が都骨林に扮し兵士を連れて登場) 私は蕃將の都骨林でございます。蕃兵達よ、
この度は銅臺を包圍しているが、あの土煙が上がっているところは、きっと敵軍がやっ
て来たのであろう。

楊景 弟達よ、蕃兵がやって来たのではないか。

岳勝 兄者、私があやつと戦いましょう。

楊景 そこな蕃將、やって来たのは何者か。

都骨林 我こそは韓延壽配下の大将の都骨林である。やって来たのは何者か。

楊景 お前は私のことを知っているか。

都骨林 お前は誰だ。

楊景 我こそは楊六郎である。

都骨林 楊六郎は死んだという話だったのに、どうしてまた楊六郎がやって来たのだ。この名を騙る野郎め、戦うつもりか。

楊景 この名も無き蕃将め、私と刃を交えるつもりか。

都骨林 お前など何程のものか。太鼓を鳴らせ。(戦うしぐさをする)

楊景 (唱う)

【迎仙客】

“四方にぐるりと兵馬が並ぶ”

岳勝よ、気を付けろ。

“四方に兵士を配置する”

將軍達よ私に続け。

“高い岡で一発一発合図の砲が撃たれるのを聞く

呉鉤槍は火の光のように飛び交い、乗っている馬は稲妻のように出撃する

あやつの陣は乱れて賊は敗れ

我らが賊軍を破った威風を明らかにする”

都骨林 蕃兵達よ、あやつに近付くことすらできぬ、逃げろや逃げろ。(退場)

楊景 弟達よ、我らが蕃兵を蹴散らしたので、この城に入ることができるぞ。これお前、楊景が將軍達と共にやって来たこと知らせてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、閣下にお知らせします、楊景という者が將軍達と共に来られました。

寇萊公 お通り願え。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

楊景 弟達よ、私は閣下にお会いしに行く。(まみえるしぐさをする)

寇萊公 楊將軍よ、そなたは死んだのではなかったのかな。

楊景 閣下、楊景が將軍達と共に参りました。

寇萊公 楊將軍よ、この度は韓延壽が銅臺を包囲しているので、呼延必顯にそなたを召し出させ、そなたに銅臺の包囲を救ってもらおうとしたのだ。韓延壽は大したことはないが、あやつの配下に、顔洞賓という軍師がいる。この者は天文を知り、地理に明るく、

陣を布くのに巧みで、兵を率いるのに長けている。そなたには、あやつ陣を破る何か良い策があるか。

楊景 閣下ご安心を、この楊景と將軍達にかかれば、必ず蕃兵を退けてみせましょう。

寇萊公 それでは、そなたが蕃兵を退けたならば、帝は官位と恩賞を下さるであろう。

(韓延壽が淨の扮する顔洞賓・都骨林・忽里歹・耶律灰・蕭虎・蕭彪・蕭天佐・蕭天佑・土金宿と共に蕃兵を連れて登場)

韓延壽 軍師は銅臺を包圍しておれ。私はあやつと話がある。城の上のお前、お前のところの名將を出せ。弱い奴に私と話をさせるなよ。

兵士 承知した。はっ、閣下にお知らせします、蕃兵が城下にやって来て、名將と話をしたいそうです。

寇萊公 楊將軍よ、そなた達將軍が蕃兵と話をせよ。

楊景 閣下ご安心を、私があやつと話しましょう。(まみえるしぐさをする) そこな名も無き蕃將よ、お前は私を知っているか。

韓延壽 お前は誰だ。

楊景 我こそは楊景である。

韓延壽 お前があつ楊景か、我らは今大勢の蕃兵で銅臺を包圍しているから、早く投降しろ。我らには大勢の蕃兵と、軍師の顔洞賓がおり、お前と直接戦わないが、軍師が陣を布くから、お前がこの陣を破ることができたならば、雲・應などの十六州をくれてやろう。破ることができなければ、お前は東京汴梁を、さっさと私に差し出せ。

楊景 お前は今は私と戦わず、陣を布くつもりか。お前の軍師に、私と話をさせろ。

韓延壽 軍師よ、楊六郎がそなたと話をしたいと求めている。

顔洞賓 元帥にはこちらにおいで頂き、私があやつと話しましょう。楊六郎よ、聞け。

私が顔洞賓である。我らはこの度お前達の城を包圍し、お前と戦おうとしているが、お前にはどれだけの軍勢がいるというのだ。我らは今から陣を布くから、お前が私の陣を知っていたならば、私はお前に降伏しよう。知らなければ、お前達の東京汴梁を私に差し出すというのは、いかがかな。

楊景 この蕃將め、陣を布いて見せてみろ。

顔洞賓 蕃兵達よ、陣を布け。お前は我らのこの陣が、何という陣かわかるか。

寇萊公 楊將軍よ、あやつ陣は、一体何という陣なのだ。

楊景 あやつ陣は、黄石公の三略の法にはなく、呂望の六韜の書にもなく、天書から選

び出したものです。蕃将よ、この陣は周天八卦陣ではないのか。

顔洞賓 あやつはどうしてこの陣を知っているのだ。知っているのならば、我が陣を攻めてみよ。

楊景 蕃将よ、本日は我らは一休みして、明日になったらその陣を攻めてやる。

顔洞賓 一日どころか、三日かかっても、お前に我が陣を破ることができるものか。元帥、それでは、我らの軍勢を、ひとまず矢の届かない場所まで退かせましょう。

韓延壽 蕃兵達よ、矢の届かない場所まで退き、明日になったら陣を布き、必ずや楊六めを捕らえるのだ。我らはひとまず陣営へ戻ろう。(共に退場)

寇萊公 楊將軍よ、どのようにしてあの陣を攻めるのか。

楊景 閣下、あの陣は、周天八卦陣です。私は今から軍勢を指揮し、將軍達を近くに呼び、私の手配を聞かせ、命令に従い行動させます。今から軍勢を指揮し、明日あの陣を攻めるから、お前達諸将は心を一つにして力を奮うのだ。

岳勝 我らはお近くでご命令を聞かせて頂きます。

楊景 (唱う)

【上小樓】

“岳排軍よ命令を聞け

孟火星よ指揮に従え

梨の花のように槍を舞わせ、獅子のように馬を走らせよ

鍔鋸の剣を抜き

まず左の青龍陣と右の白虎陣を攻め、更に黄河九曲陣を攻めよ

それから朱雀陣を攻め、更に玄武陣を攻めよ”

岳勝よ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、あの青龍陣を攻めに行き、勝利したら戻って参れ。

岳勝 承知しました。私は三千の軍勢を率い、青龍陣を攻めに、一つ行くとしよう。

“私は青龍陣へ戦乱を収めに行き

明日は対峙して千回戦おう

少しばかり英雄の手腕を發揮すれば

蕃兵は一人も助からない”(退場)

楊景 孟良よこちらへ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、白虎陣を攻めに、心して行け。

孟良 承知しました。元帥の命を受け、三千の軍勢を率い、白虎陣を攻めに、一つ行くと

しよう。

“手には山をも斬り開く金の斧を持ち
敵軍の中で実力を明らかにしよう
名も無き野蛮な賊は我が名を聞けば恐れる
英雄の孟火星のことを覚えさせてやろう”（退場）

楊景 李瑜よ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、あの朱雀陣を攻めに行き、勝利したら戻って参れ。

李瑜 承知しました。元帥の命を受け、三千の軍勢を率いて、朱雀陣を攻めに、一つ行くでしょう。

“命を受け兵を率いて城より出で
朱雀陣にて英雄ぶりを発揮する
兵略によって天下を安らかにし
必ずや戦乱を除いて万里を平定しよう”（退場）

楊景 焦贊よこちらへ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、あの玄武陣を攻めに、心して行くのだ。

焦贊 承知しました。三千の軍勢を率いて、玄武陣を攻めに、一つ行くでしょう。

“勇敢な兵を率いて玄武陣を攻め
将校達は弓を引き弩を踏む
必ずや一戦にて勝利を収め
醜い北蕃どもを掃蕩しよう”（退場）

楊景 張蓋よこちらへ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、日精月華陣を攻めに、心して行くのだ。

張蓋 承知しました。元帥の命を受け、三千の軍勢を率いて、日精月華陣を攻めに、一つ行くでしょう。

“軍令を受けて自ら勇敢な兵を率い
陣を攻めて実力を発揮する
匈奴を殺して肝をつぶさせ
国家を守り一万年の安寧をもたらす”（退場）

楊景 呼延必顯よこちらへ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、あの黄河九曲陣を攻めに行き、勝利したら戻って参れ。

呼延必顯 承知しました。三千の軍勢を率いて、黄河九曲陣を攻めに、一つ行くとしよう。

“矛や鎧を重ねて兵士が並び
將軍は若くして優れた才を明らかにする
九曲黄河陣は言うまでもなく
鉄の壁や銀の山でも突き進む”（退場）

楊景 閣下、これら青龍白虎陣、朱雀玄武陣、日精月華陣、二十八宿陣、黄河九曲陣は、心配いりません。

寇萊公 楊將軍よ、そなたはこの度軍勢を手配し終えたならば、明日陣を攻めよ。將軍達は、楊將軍の指示に従い、命令に従って行動せよ。

楊景 將軍達よ、誰かあの天門陣を攻めようという者はいるか。

楊宗保 父上、私が天門陣を攻めましょう。

楊景 楊宗保よ、お前はどのような武芸があつて、天門陣を攻めるつもりなのか。

楊宗保 父上、我が体つきはりりしく、意気揚々としておりますから、蕃兵の陣を攻めて戦いましょう。

楊景（唱う）

【上小樓】

“彼は意気揚々と武威を誇示し
りりしく軍装を整える”

楊宗保 私に父上の素晴らしい計略を授けて頂ければ、私は千戦千勝です。

楊景（唱う）

“そなたを百戦百勝、千戦千勝させる、素晴らしい計略”

楊宗保 父上、我が手中の定淮刀で、蕃兵と戦いましょう。

楊景（唱う）

“そなたの定淮刀が、軍馬とぶつかれば、賊軍を防ぎ
敗残軍は無数に逃げ惑う”

楊宗保よ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、心して行き、勝利したら戻って参れ。

楊宗保 承知しました。父上の命を受け、三千の軍勢を率いて、天門陣を攻めに、一つ行くとしよう。

“勇敢な兵を率いて銅臺を出陣すると
凶暴な匈奴は国境を侵している

刀を振るい武勇を奮わせて威武を示し

山一面にあやつらの死体を積み上げよう”（退場）

寇萊公 楊將軍よ、將軍達への指示はいかがかな。

楊景 閣下、將軍達を手配し終えました。

寇萊公 將軍には出陣し、將軍達を全て手配してもらい、まことに煩わせてしまった。

楊景 閣下、まだ二十八宿陣がごぞいます。

寇萊公 將軍よ、その二十八宿陣には、一体誰を遣わすのか。

楊景 私が三千の軍勢を率い、自ら陣を攻めましょう。

寇萊公 將軍が胸中の計略を用い、勇敢に先頭に立って戦えば、蕃族など何程のことがあろうか。

楊景 この楊景の力ではなく、全て帝の大いなる福のおかげでございます。（唱う）

【耍孩兒】

“聖明万寿なる我が帝の福のおかげで
我ら大將軍は武威を誇示する”

寇萊公 楊將軍よ、そなたはどのような威武によって、蕃族どもを除くのか。

楊景（唱う）

“私は計略を巡らせて勝利を決して英雄ぶりを明らかにし、この度天陣を破り匈奴を捕らえるのをご覧あれ
我らの馬は北海の金精獸のようで、各々の者は南山の白額虎のよう
私は功勞簿をいっぱい書き尽くそう
この度の戦いが、あの十面埋伏にも劣らないのをご覧あれ”

寇萊公 楊將軍よ、そなたと將軍達が北蕃と戦ってくれば、私は凱歌と戦勝の知らせを聞き、勝利を収めて都へ戻るだけである。

【二煞】

“軍旗がはためくのを見、ドンドンと陣太鼓が鳴らされるのを聞く
一喝すれば陣營の門は開き、長槍を持って敵軍の中へ突入する
顔洞賓が明日天陣を布こうとも、韓延壽は明朝あの世へ向かう運命
私は四方で要路を遮り
私が戦えば高い岡はごろごろと首級が転がり、低い窪地はどっと鮮血の海”

寇萊公 楊將軍よ、ただ今の帝は賢人や武人を招き、心が広く度量が大きくあられ、そな

たを股肱の臣とするのであるから、そなたも心して力を尽くすように。

楊景（唱う）

【尾聲】

“朝綱を整えるにはあなた方の文治を用い、辺境を平定するには武力を用いるべき

私大將軍が英雄などとはとんでもない

天にも齊しい福をお持ちの帝のおかげ”（退場）

寇萊公 楊將軍が將軍達に指示したので、この度の出陣できっとあの陣を破り、勝利を取
めて戻って来るであろう。

“我が軍の人は英雄で馬は速く

堅い心で力を尽くして国土を広げる

楊家の父子は忠義ある将にして

蕃兵を殺さずには戻らぬと誓う”（退場）

〔注〕

○傀儡…手下。「傀儡」「嘍囉」にも作る。

○落草…山林に入って盗賊となること。『董解元西廂記諸宮調』卷二【繡帶兒】の白に「落
草英雄、反作破賊之勇（賊に身を落とした英雄は、却って賊を破る勇者となる）」とあり、
「氣英布」（元曲選本）第二折、英布の白に「率領四十萬大兵、依舊往鄱陽湖中落草去也
（四十万の大軍を率い、以前のように鄱陽湖へ行って盗賊となろう）」とある。

○假推…偽って口実にすること。白話での用例としては、時代は下るが『鏡花縁』第六十
回に「少時天明、閩臣假推有病、不能動身、在店住了一日（やがて夜が明けたが、唐閩
臣は病で動けぬことを口実にし、宿に一日中いた）」とある。

○八門陣…諸葛亮が考案したとされる八つの陣形のこと。『三國志演義』第八十五回では「八
陣圖」と名付けられており、休・生・傷・杜・景・死・驚・開の八門があり、窮まりな
く変化し、十万の精兵にも匹敵するという。本劇第一折の天門陣にも組み込まれている
が、そこでは「杜」が「度」になっている。

○遁甲…身を隠す術。また陰陽五行の理に基づいて吉凶を占う術数の一つ。『大宋宣和遺事』
利集「先是有卒名郭京者、自言能用遁甲法、可以生擒粘罕、幹離不等（これより先に兵
士の郭京という者が、遁甲の法を用い、粘罕や幹離不らを生け捕ることができると言っ
た）」。

- 乗…持つ。心にしっかりと守る。「博望燒屯」(内府本) 第四折、管通の白に「這間房内、這個將軍神威狀貌、氣秉忠良(この部屋にいる、この將軍は神のような容貌で、忠義に厚い)」とある。
- 假名託姓…名を偽ること。「李逵負荊」(元曲選本) 第一折、宋剛の白に「俺兩個則是假名託姓、我便認做宋江、兄弟便認做魯智深(我ら二人は名を偽り、私は宋江、弟は魯智深になりすましている)」とある。
- 信砲…信号や合図として放つ大砲。「信砲」にも作る。「千里獨行」(脈望館本) 楔子、張遼の白に「等張飛來入的營中、俺這裏一聲信砲響、四下裏伏兵、盡舉圍上采、那其間方可拿得張飛(張飛が陣中に入って来たら、合図の砲を鳴らし、四方の伏兵に、包囲させれば、張飛を捕らえることができます)」とある。
- 追電…稲妻を追うように足が速いということであろう。「三奪槩」(元刊本) 第四折【滾繡毬】「我坐下割騎着追風馬、腕上只彪着打將鞭(私は鞍も付けずに駿馬に乗り、腕は敵将を打つ鞭を振り回す)」のように、駿馬の形容としては「追風」という表現もある。
- 聞早…早い内に、早めに。「九宮八卦陣」(内府本) 第一折【油葫蘆】「既然你難主張、不如俺聞早還(あなたが意見を言いにくいのであれば、我らは早い内に帰った方が良い)」。また、『劉知遠諸宮調』卷十一【瑤臺月】の前の白(この前の葉が欠落している)に「但對奴家聞早說(早く私に話して下さい)」とある。
- 一射之地…矢の射程距離ほど隔てた場所。「氣英布」(元刊本) 第二折、英布の白に「這裏離成阜關則是一射之地(ここは成阜関から矢の射程距離ほどしか離れていない)」とある。
- 狼煙…ここでは戦乱の象徴。「陳搏高臥」(元刊本) 第二折【紅芍藥】「一統乾坤、滅狼煙掃戰塵、恩澤及萬姓黎民(天地は統一され、狼煙は消えて戦乱は除かれ、恩沢は全ての民に及ぶ)」。
- 亡魂喪膽…恐れおののく様。肝を潰す。「村樂堂」(内府本) 第三折【柳葉兒】「浪包摟項帶沈枷、說着教他喪膽亡魂怕(このあばずれの首に重い枷をはめ、真相を言い当てて肝を潰させてやろう)」。
- 定淮刀…未詳。淮河の流れを鎮める刀、というほどの名か。
- 北海金精獸…「金精」には仙薬の名、太白星、月など多数の意味があるが、「南山虎(南山猛虎、南山的猛虎、南山白額虎)」と対になるものとして、「北海蛟(北海蛟龍、北海的毒蛟、北海赤須龍)」がしばしば挙げられることから、「金精獸」で蛟や龍に類するも

のを指すか。「三戦呂布」(脈望館本)第三折、高順の退場詩には「人似南山白額虎、馬如北海赤須龍(人はさながら南山の白い額の虎、馬はあたかも北海の赤いひげの龍)」とある。

- 南山・白額虎…晋の周處は、郷里の者が自分のことを南山の白額虎、長橋の蛟と併せて三害と呼んでいることを知り、改心して虎を射殺し蛟を打ち殺した(『蒙求』『周處三害』)。なお『新唐書』卷二〇九「吉温傳」には、吉温が語った言葉として「若遇知己、南山白額虎不足縛(知己を得られるならば、南山にいる白い額の虎でも縛ってみせる)」とある。
- 報捷…勝利を知らせること。「老君堂」(内府本)第四折【新水令】「領將到神京、報捷連聲(將を率いて都に戻れば、何度も戦勝の報告をする)」。
- 邀截…遮る。阻止する。『三國志演義』第一百十二回「正欲退兵、忽報西蜀姜維引兵來取長城、邀截糧草(引き上げようとするところへ、西蜀の姜維が兵を率いて長城を奪い、兵糧を絶とうとしているとの急な知らせ)」。
- 咽喉路…交通の要路。のどくび。『三國志演義』第六十二回、黄權の白に「可連夜遣兵屯雒城、塞住咽喉之路、劉備雖有精兵猛將、不能過也(至急兵を雒城に遣わし、要路を固めれば、劉備に精兵猛將があろうとも、通ることはできません)」とある。
- 骨碌碌…ここではごろごろと転がる様。「氣英布」(元曲選本)第三折、樊噲の白に「當日鴻門宴上、我老樊只除下兜鍪、把守轅門的軍校一時打倒、諛得項王在坐上骨碌碌滾將下來(かつて鴻門の宴では、私は兜も着けず、轅門を守る兵士をたちまち打ち倒したので、驚いた項王は座席から転げ落ちてしまった)」とある。
- 骨突突…勢いよく流れる様。「骨都都」とも。「黒旋風」(脈望館本)第一折【哨篇】「我喝一聲骨都都江海沸(私が一喝すればどっと河や海が沸き立つ)」。
- 豁達大度…心が広く度量が大きいこと。「千里獨行」(脈望館本)第二折【梁州】「他端的忠直慷慨、壯志難酬、豁達大度、納諫如流(彼はまことに気概に満ちた忠義の者、勇ましい志はこの上なく、心が広く度量が大きく、諫言も進んで受け入れる)」。

第三折

[訳]

(韓延壽が淨の扮する顔洞賓・都骨林・忽里歹・耶律灰・土金宿・蕭天佐・蕭天佑・蕭虎・蕭彪と共に馬に跨り蕃兵を連れて登場)

韓延壽

“全て軍師のおかげで陣を布き
必ず南朝の楊六郎を捕らえよう”

私は韓延壽でございます。大勢の蕃兵を率いて、銅臺を包囲している。軍師よ、この度は楊六めが陣を攻めようとしているので、そなたは諸将に、各々の持ち場を守り、心して陣を布くように下知をせよ。

顔洞賓 元帥ご安心を、私の布く陣を元帥にお見せしましょう。蕃将達よ、各々陣を布け。都骨林よ、そなたは青龍陣で、土金宿よ、そなたは白虎陣だ。蕭天佐よ、そなたは朱雀陣だ。蕭天佑よ、そなたは玄武陣で、忽里歹よ、そなたは天門陣だ。耶律灰よ、そなたは九曲黄河陣だ。蕭虎、蕭彪よ、そなた達二人は日精月華陣だ。お前達は布陣を心得、各々用心して、必ずや楊六郎を捕らえよ。

韓延壽 皆の者、陣を展開し、必ずや楊六めを捕らえるのだ。あそこで土煙が昇っているが、楊六めがやって来たに違いない。

(正末が楊景に扮し岳勝・焦贊・孟良・張蓋・李瑜・楊宗保・呼延必顯と共に馬に跨り兵士を連れて登場)

楊景 將軍達は各々用心し、全軍、しっかりと隊列を組め。

【雙調・新水令】

“沸々と殺気が青空を暗くしており
私は土煙を起こして五つの隊を進軍させる
天を震わす銅鑼や陣太鼓の響きを聞けば、霧が巻き起こり刺繍をした旗が揺れる
きらきりと劍・戟・槍・刀が輝き
私は堂々と隊列を組む将校達を見る”

そこな蕃将め、私が今からお前の陣を攻めてやろう。

顔洞賓 忽里歹よ、しっかりと陣を布き、あやつに我が陣を攻めてみさせるのだ。

忽里歹 承知しました。(陣を布くしぐさをする)

楊景 (唱う)

【快活三】

“猛々しく門の旗の前で話をし
がやがやと陣中で鬨の声を上げる
ドンドンと天に響き耳にやかましい戦いの銅鑼が響き

ガラガラと殺気をかき立てて出撃の合図の砲を撃つ”

楊宗保よあの天門陣を攻めよ。

楊宗保 承知しました。(陣を攻めるしぐさをする) 天門陣を破ったぞ。

韓延壽 軍師よ、天門陣が破られてしまったぞ。

顔洞賓 大丈夫、まだ二十八宿陣がありますから。青龍白虎陣を布け。

都骨林・土金宿 承知しました。(陣を布くしぐさをする)

楊景 (唱う)

【鮑老兒】

“一声叫び戦場の中に突入して両軍が戦い

左右の軍もすぐさまやって来る”

岳勝、孟良よ、そなた達は青龍白虎陣を攻めよ。

岳勝・孟良 承知しました。(陣を攻めるしぐさをする)

孟良 青龍白虎陣を破ったぞ。

韓延壽 軍師よ、青龍白虎陣も破られてしまったぞ。

顔洞賓 大丈夫、まだ二十八宿陣がありますから。朱雀玄武陣を布け。

蕭天佐・蕭天佑 承知しました。(陣を布くしぐさをする)

楊景 (唱う)

“山頂にて旗を翻させるように命じ

東西の隊を援軍とする

英雄たる勇猛な將軍は、弓や弩を引き、鎧や陣羽織を身に着ける

馬軍や歩軍を見れば、銅鑼や太鼓を打ち鳴らし、刀劍を振り回す”

李瑜、焦贊よ、朱雀玄武陣を攻めよ。

李瑜・焦贊 承知しました。(陣を攻めるしぐさをする)

焦贊 朱雀玄武陣を破ったぞ。

韓延壽 軍師よ、朱雀玄武陣も破られてしまったぞ。

顔洞賓 大丈夫、まだ二十八宿陣がありますから。黄河九曲陣、日精月華陣を布け。

耶律灰・蕭虎・蕭彪 承知しました。(陣を布くしぐさをする)

楊景 (唱う)

【柳青娘】

“各隊が陣へ突進し

人は速く走り馬はたけり吠える
それぞれの英雄達は荒々しく
武器を持って勇壮さを発揮し
これまでにない程激しく戦う”

張蓋、呼延必顯よ、そなた達二人は、黄河九曲陣、日精月華陣を攻めよ。

張蓋・呼延必顯 承知しました。(陣を攻めるしぐさをする)

張蓋 黄河九曲陣、日精月華陣を破ったぞ。

楊景 見事な將軍達だ。(唱う)

“四方を幾重にも包囲したので
賊兵は逃げるできないであろう
馬は槍で突かれ人は矢に当たり、矢に当たった者は泣き叫ぶ”

韓延壽 軍師よ、黄河九曲陣、日精月華陣も破られてしまったぞ。

顔洞賓 大丈夫、まだ二十八宿陣がありますから。

楊景 將軍達よ、私と共に二十八宿陣を攻めよ。(將軍達が入り乱れて戦うしぐさをする)

(唱う)

【道合】

“殺気が天を突き
ヒュウヒュウと矢の音は風や雹のよう
瞬く間に
盗賊を捕らえて功労を明らかにする
雄々しさと謀略を使い、埋伏の計を施して將軍を配置する
あちこちで聞こえるのは
太鼓を破り旗を奪う叫び声
またあちこちで聞こえるのは
陣太鼓が天まで響く音
軽々と猿のような腕を伸ばし
勝負の行方を押し量る
見ればあの矢が、胸元を、矢羽まで貫いた”

顔洞賓 凶らずもあやつに我が陣を破られてしまった。だめだ、逃げよう、退け退け退け。

(韓延壽らと共に慌てて敗走して退場)

楊景 我らがこの度あやつの陣を破ったので、大敗して逃げておるわ。これでは済まさぬ、
岳勝、焦贊、孟良、楊宗保の四名は、必ずや蕃兵を追撃し、顔洞賓を捕らえて、丞相府
へ功を献上するのだ。

岳勝 承知しました。我らは蕃兵を追撃しよう。

楊景 今日のような日があるとは思わなかった。(唱う)

【尾聲】

“顔洞賓を生け捕りにし

韓延壽の首を斬る

凱旋して勝利の喜びを得、全軍は勇み立ち

その時官に封じられ恩賞を贈られ功勞をねぎらわれる” (諸將と共に退場)

〔注〕

- 金鼓…戦場で用いる銅鑼や陣太鼓。「西蜀夢」(第二折)【牧羊關】「我直交金鼓震醒人膽、
土雨瀟の日無光 (私は銅鑼や太鼓を鳴らして人々を震え上がらせ、土の雨を注いで日の
光を無くさせよう)」。
- 門旗…陣營の前に対にして立てる旗。「千里獨行」(脈望館本) 第四折【掛玉鉤】「他恰才
萬馬千軍擺下戰場、則見他忙把門旗放 (彼は今しがた千軍万馬を戰場に並べ、門旗をサ
ッと開け放つ)」。
- 喧天聒耳…天に響き、耳にやかましい。「喧天」と「聒耳」を組み合わせて用いている例
としては、「水滸傳」(容與堂本) 第七十二回に「正打從樊樓前過、聽得樓上笙簧聒耳、
鼓樂喧天 (樊樓の前を通ると、楼の上から聞こえて来るのは耳にやかましい笙と笛、天
に響く太鼓の音)」とある。
- 忽刺刺…「古刺刺」「骨刺刺」などにも作る。「三奪槊」(元刊本) 第一折【幺】「呀則見
那骨刺刺征旗遮了太陽、赤力力征鼙振動上蒼 (や、見ればひらひらとなびく戦旗は太陽
を覆い、ドンドンと鳴り響く陣太鼓は天を震わす)」のように、物がひらひらする様。ま
た、「漁樵記」(息機子本) 第三折、張徹古の白に「無一時則見那西門骨刺刺的開了 (す
ぐにガラガラと西門が開いた)」とあるように、物が揺れたり崩れたりする様。ここでは
後者。
- 左右肋…左右の部隊ということか。『宋史』卷三六六「吳璘傳」に「布陣之法、則以步軍
爲陣心左右翼、以馬軍爲左右肋 (布陣の法は、歩軍を軍の中心と右左両翼にし、馬軍を

左右の肋骨とする)」とある。

- 追風道…「追風」は通常は駿馬の形容。「三奪槩」(元刊本) 第四折【滾繡毬】「我坐下劃騎着追風馬、腕上只彪着打將鞭(私は鞍も付けずに駿馬に乗り、腕は敵将を打つ鞭を振り回す)」。ここでは素早くという方向か。「道」は至るの意ととった。
- 劣蹶…『董解元西廂記諸宮調』卷一【哨遍纏令】「秀才家那箇不風魔、大抵這箇酸丁忒劣角(秀才に頭のおかしくない者はいないが、この貧乏書生はあまりに粗野)」にある「劣角」に同じか。また「蹶」には駆けるという意味もある。
- 鏗鏘…金属のぶつかり合う音。「鏗鏘」にも作る。「張生煮海」(元曲選本) 第一折【鵲踏枝】「又不是拖環珮韻玎〔王+冬〕、又不是戰鐵馬響鏗鏘(佩玉のカチカチ鳴る音でもなく、軍馬のジャラジャラという響きでもない)」。
- 猿猱…通常は手長猿のことであるが、ここでは「猿臂」と同義で、猿のように手を伸ばすということであろう。「單刀會」(元刊本) 第三折【幺】「一隻手摺住寶帶、臂展猿猱、劍扯秋霜(片手で相手の帯をしっかりと掴み、猿のような腕を伸ばし、秋霜の劍を抜く)」。
- 紫金鉞…赤銅の鏃の矢。「三奪槩」(元刊本) 第一折【幺篇】「味味紫金鉞連發、火火都閃在兩邊廂(ヒュンヒュンと矢を連射するが、ひらひらと両側に払い落とす)」。
- 三思臺…胸、または頭を指す。「後庭花」(古名家本) 第二折【尾煞】「我見他手搭着巨毒、把我這三思臺摺住(見ればあやつは手に武器を持ち、俺の胸ぐらを掴まえる)」。
- 丞相府…宰相が政務を執る場所。

第四折

〔訳〕

寇萊公(兵士を連れて登場)

“智勇を用いて天下を安らかにし
忠心を以て優れた帝を補佐する”

私は寇萊公でございます。楊景が諸将を率いて蕃兵を討ちに行ったが、勝利を収めて陣營に帰還したと、戦勝の知らせがあった。帝に申し上げたところ、私に、帥府にて宴席の用意をし、諸将を称え、全軍をねぎらうように命じられた。これお前は門の前で見張りをし、楊景と諸将がやって来たら、私に知らせよ。

兵士 かしこまりました。

(正末が楊景に扮し岳勝・焦贊・孟良・張蓋・李瑜・呼延必顯・楊宗保と共に登場)

楊景 弟達よ、元帥府へ功を献上しに行くぞ。一人前の男は出世する時が来るといふが、今日のような日があるとは思わなかった。(唱う)

【正宮・端正好】

“我らは勝利を収めて皆で凱歌を歌い、心から喜び金の鐙を叩きながら陣営に戻る

韓延壽はいつも災難に遭う運命であり

あの凶悪な輩はこの度敗れた

顔洞賓よ、お前の名声も地に落ちた”

この度の戦いは、(唱う)

【滾繡毬】

“韓信が九里山で勇敢な兵を率いた、あの大決戦にも劣らぬ

班超のような、辺境の関を鎮守した策にも勝る”

弟達よ、我ら將軍達の力ではないぞ。

“帝に諸々の神靈の助けや、天にも齊しい福があるおかげで

我ら大將軍が智謀を發揮し、勇壯な才を振るうことができた”

岳勝 兄者、我らがこのように忠を尽くし力を尽くしたのは、何のためですか。

楊景 弟よ、我らがこのように忠を尽くし力を尽くしたのは、(唱う)

“清風を起こして永久に称揚され、名誉を青史に留める

我らはただ国家の安寧を願ひ

山河を安らかに保つ

その時には帝より画戟を門に並べるよう詔を受け

我らは忠心を持って力を尽くし帝のご恩に報いる

思えば古人は我らのような貧しい家より將軍や宰相が出ると言い

私はこの度金階の上を歩くことになった”

岳勝 早くも着いたわい。兄者、閣下にお会いしに行きましょう。

楊景 これお前、楊景と將軍達が、勝利を収めて陣営に帰還したとお知らせしてくれ。

兵士 かしこまりました。はっ、閣下にお知らせします、楊景どのと將軍達が、勝利を収めて陣営に帰還しました。

寇萊公 お通ししろ。

兵士 かしこまりました。お通り下さい。

(楊景が諸将と共にまみえるしぐさをする)

寇萊公 楊將軍は匈奴を征討し、蕃族を掃討し、馬に乗って駆け巡ってくれた。

楊景 閣下には帥府でのお役目ご苦労様でございました。

寇萊公 楊將軍よ、そなた達が蕃族を破って捕らえ、民を守ったので私は帝の命を受け、
この帥府にて、宴席を設け、論功行賞を行う。これお前支度をせよ。

兵士 かしこまりました。(果卓を持って来るしぐさをする)

寇萊公 (杯を持つしぐさをする) 酒をつげ、楊將軍よこの杯を飲み干されよ。

楊景 閣下がお先にお飲み下さい。

寇萊公 將軍が飲まれよ。

(楊景が飲むしぐさをする)

寇萊公 將軍はまことに英雄たる将であり、凶らずも蕃兵に国境を侵されたのを、將軍が
将校を率いて、蕃兵を撃退したが、両陣の間で、どのような智謀が繰り広げられたのか、
一通り話して、私にお聞かせ願いたい。

楊景 蕃族どもは天門陣を布き、巧みな策を用いて銅臺を攻めました。真の帝には神靈の
お助けがあるので、我ら大將軍は勇猛な才を発揮することができたのです。(唱う)

【尙秀才】

“韓延壽を殺し、顔洞賓は魂が消え失せ、十万の賊も災難に遭う運命

あやつらはかつて天門陣を布いたが

我らは勝利を収めて飾り胴の太鼓を打った

色とりどりの縫い取りの旗をひらめかせ

我ら英雄の気概をますます明らかにする”

寇萊公 楊景よ、そなた達諸将は皇居に向かってひざまずき、帝の命を聞くがよい。將軍
達よ、それぞれ論功行賞を行い、官位に封じる。岳勝は、武威と勇猛さを持って賊を破
り、向かうところ敵なしであったため、そなたを鎮守瓦橋等三関節度使に任ずる。焦贊
は、雄々しい武威を持って戦い、勇敢にも先鋒となったため、そなたを鎮守代州(山西
省代県)節度使に任ずる。孟良は、勇氣は人並み外れ、辺境を平定して勝る者なしであ
ったため、そなたを鎮守忻州(山西省忻州市)節度使に任ずる。張蓋は、謀略をよく知
り、広く策を巡らせたため、そなたを鎮守汾州(山西省汾陽県)節度使に任ずる。李瑜
は、主君を諫めて忠義を尽くし、辺境の関より人々を出したため、そなたを鎮守嵐州(山
西省嵐嵐県)節度使に任ずる。呼延必顯は、出陣して功を立て、我が身を顧みず奮戦し

たため、そなたを鎮守銅臺節度使に任ずる。楊宗保は、敵陣を打ち破り、兵法に精通しているため、楊景と共に総鎮辺関提督軍将都招討に任ずる。將軍達は全て官位に封じ終えたので、そなた達帝のご恩に感謝せよ。

楊景と諸将 帝のご恩に感謝致します。

寇萊公 楊將軍よ、かの北蕃の賊どもが、どのように陣を布き兵を並べ、そなたが一体どのように將軍達に命じて陣を破ったのか、一つ話してみよ。

楊景（唱う）

【脱布衫】

“あの顔洞賓は天陣を布き
蕃將を率いて銅臺を包圍した
私が神算妙計を發揮すると、驚いてあやつの魂は大空の雲の外まで飛び去った”

寇萊公 楊將軍よ、この度蕃族を平らげて辺境を安定させたのは、一つには帝の福と威嚴のおかげであり、二つには將軍の勇敢さと智恵のおかげである。

楊景（唱う）

【小梁州】

“帝が將軍や宰相の人材を用いることがおできになるおかげで
この度胸の内が明らかなものとなった
あの運の悪い蕃族が一斉にやって来たが
私はあやつの腰帶を掴み
馬の鞍に挟んで生け捕りにした”

【幺篇】

“韓延壽は馬を走らせて陣營の外へ逃げ
私は急いで銅の鎧の胴体を引っ張ろうとした
「逃げるな」と一喝すれば、あやつは振り返り慌てて立ちふさがった
私が弓を引いて矢を放つと、ガチンと胸元に命中した”

寇萊公 この度は論功行賞を終え、宴ももうお開きとなった。そなた達聞くがよい。

“韓延壽は道に背いて国境を侵したが
楊六郎が戦乱を平定した
顔洞賓は策を弄して兵を並べたが
岳勝らが武勇を奮い真っ先に戦った

この度は論功行賞をして
帥府にて盛大な宴を設けたが
帝の威光のおかげで蕃族を破って平定したのであり
一斉に帝に感謝するべきである”（共に退場）

題目 韓延壽、戦を求めて三籌を賭け

正名 楊六郎、兵を調べて天陣を破る

〔注〕

- 大丈夫奮發有時…「三戰呂布」（脈望館本）第一折、關羽の白にも「大丈夫生於天地之間、必有崢嶸之日也（一人前の男としてこの世に生まれたからには、きっと陽の目を見ることもあろう）」とある。「奮發」は出世すること。『劉知遠諸宮調』卷一【快活年】の白に「劉郎異日奮發榮貴、和你改換門風（劉知遠はいつの日か立派に出世し、そなたも任官して身分が変わるであろう）」とある。また「謝天香」（古名家本）第四折や「漁樵記」（息機子本）第四折などに「崢嶸有日、奮發有時」という表現が見え、立派に出世することを指す。
- 月值年災…毎月毎年のように災難に遭うこと。「月厄年災」ともいう。「漁樵記」（息機子本）第二折【滾繡毬】に「也則是單注着俺這窮漢毎月值年災（我ら貧乏人はいつも災難に遭う運命というもの）」とある。
- 韓元帥・九里山…「韓元帥」は韓信のこと。漢と楚が争った時、韓信は九里山に布陣して項羽を破った。
- 百靈…諸々の神靈のこと。或いはここでは、帝自身に神靈の如き力があるということかもしれない。「薛仁貴」（元刊本）第一折【鵲踏枝】「托頼着聖明天子、百靈咸助、殺的敗殘軍前追後逐、趕的來一個皆無（帝に、神靈の助けがあったおかげで、敗殘軍を前後から駆逐し、全て追い払った）」。
- 白屋寒門咬出這將相才…「秋胡戲妻」（元曲選本）第一折【油葫蘆】に「想着那古來的將相出寒門（思えば古来の將軍や宰相は貧しい家の出身）」とある。
- 花腔邊鼓…胴の部分に模様が描かれた太鼓。
- 雜彩繡旗…色とりどりの縫い取りを施した旗。「博望燒屯」（内府本）第三折、夏侯惇の白に「花腔邊鼓播、雜彩繡旗搖（飾り胴の太鼓が響き、色とりどりの縫い取りの旗が揺

れる)」と見え、また「水滸傳」(容與堂本)第五十四回では前半が「花腔鼉鼓播(飾り胴のワニ皮の太鼓が響き)」となっている。

- 福謝…運悪く。運が衰える。「陳州糶米」(元曲選本)第四折【駐馬聽】「今遭杻械、也是你五行福謝做了半生災(この度処刑されるのは、お前の運が尽きて災いとなったのである)」。
- 扯銅胎…抄本は「扯通胎」に作る。「扯」は引っ張るという動詞。
- 遮蓋…「酷寒亭」(古名家本)第四折【喬牌兒】に「孩兒每衣服破怎遮蓋、凍的他兩隻手似冬凌塊(子供達の衣服は破れて身を隠すこともできず、凍えた両手は氷のよう)」とあるように、隠す、遮ることであるが、ここでは防ぐという意味かと思われる。
- 吉玎璫…カチカチとぶつかる音。「吉玎璫」にも作る。「單鞭奪槊」(脈望館本)第三折【聖藥王】「吉玎璫鞭槊緊相從、好下手的也尉遲恭(ガチガチと鞭と矛がぶつかり合うが、腕が上なのは尉遲恭)」。
- 悖逆…道に背くこと。『禮記』「祭義」に「到義、則上下不悖逆矣(道義を隆興させれば、上下の衝突が生じることはない)」とある。
- 賭三籌…「賭」は争う、競うの意。「三」は概数であろう。題目の意味は、韓延壽が戦いを挑んで策を巡らしたということ。